太宰府市の文化財　第37集

大宰府条坊跡X

—— 推定大宰府朱雀大路周辺の調査 ——

1998

太宰府市教育委員会

大宰府条坊跡X

（太宰府市の文化財第37集）

正　誤　表

ページ	行	誤	正
例言	5	IV章	VI章
例言	13	酒井美佐子	酒井三保子
33	Fig.18	5	6
33	Fig.18	6	5
37	Fig.20	43SK035	43SK025
171	11	豊前型	豊後型
222	Fig.174		右図下に2を加筆
335	Fig.248	005・表土	005・010・表土
335	Fig.248	94SK004で報告される25の黒色土器は、本来94SK002出土である。	

ここに謹んで訂正いたします

太宰府市の文化財　第37集

大宰府条坊跡X

—— 推定大宰府朱雀大路周辺の調査（2）——

－第43次調査－
－第59次調査－
－第64次調査－
－第68次調査－
－第73次調査－
－第76次調査－
－第91次調査－
－第93次調査－
－第94次調査－
－第117次調査－
－第121次調査－
－第142次調査－
－礎石の発見－

1998

太宰府市教育委員会

序

本書は昭和58年度から平成５年度にかけて太宰府市が発掘調査を手掛けました大宰府条坊跡のうち、大宰府政庁跡から南に延びるとされます朱雀大路とその周辺に関係する調査を集成したものであります。

調査の成果として幅約35.8ｍと推定できる南北大路が検出され、その広大さに当時の大宰府がいかに重要な役割を果たしていたかが忍ばれます。

「天下の一都会」と大宰府自らが称した都市遺跡は未だ大半が地下に眠ったままですが、微力ながら着実に発掘調査を実施し、その具体像の解明に近づいて行きたいと考えております。

本書が大宰府都市の解明、さらには日本の古代都市の在り方を究明する一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが資料の提供やご指導いただきました各機関、先生方、さらには発掘調査及び整理作業にご協力いただきました作業員の皆様に感謝申し上げる次第であります。

平成10年３月

太宰府市教育委員会

教育長　長　野　治　己

例　　言

1、本書は太宰府市教育委員会が昭和58年度から平成５年度にかけて調査を実施した大宰府条坊跡の発掘調査報告書である。掲載した調査は推定条坊域の中心部分で、朱雀大路及び左右郭一坊の範囲にあたるものを集成した。

なお大宰府における朱雀大路の名称は過去の文献には登場しないが、中枢官衙の正面から南へ直線で延びる広大な道路であるため、朱雀大路の用語を用いることにした（IV章参照）。

2、遺構の実測には、国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記される遺構の角度及び距離等もこれを基準としたものである。ただし遺構を検討するにあたって政庁中軸線やその他の基準線を利用したものはその旨を記載している。

3、遺構の実測及び写真撮影は各調査担当者が行い、調査区全景の空中写真は（有）空中写真稲富・（有）空中写真企画が行った。また遺構全体図のうち第93次調査上層遺構については、写真測量による素図作成をアジア航測株式会社に委託した。

4、遺物の実測及び拓影は、森田レイ子、山本麻里子、境一美、鶴味加代子、酒井美佐子、相川寿美子、松隈里恵子、福井円、山本信夫、井上信正、狭川真一が行い、陶磁器の選別は田中克子、森田レイ子、山本麻里子、石材の鑑定は山村信榮が行った。また遺物の写真撮影はフォトハウスおか（代表岡紀久夫）に委託した。写真のデジタル化にあたっては遺構写真を（株）堀内カラー大阪現像所、遺物写真を（有）システム・レコが行い、本報告書に添付したCD-ROMは（株）堀内カラーのHCLインデックスフォトを使用し、同社が作成した。なおテキストデータの作成と点検は相川、狭川が行った。また同時に収録した各種一覧表の作成は、酒井、相川、福井、瀬戸口みな子、藤野由貴子が行った。

5、図版の浄書は酒井、相川、福井、森田、山本麻、井上由紀子、中島恒次郎、宮崎亮一、山村、狭川が行った。

6、第64次調査64SE220井戸ほか出土の獣骨については、奈良国立文化財研究所に分析を依頼し、松井章氏、沖田絵麻氏から玉稿を賜った。

7、出土した金属製品の保存処理は、下川可容子が行った。

8、本書の執筆は、自然科学分析の項を松井章氏、沖田絵麻氏、第43次調査出土の縄文時代遺物を山村、第68次調査小結の「豊後型甕の出土」を中島が行った他は、狭川が行った。

9、本書の編集は狭川が担当した。

目　　次

Ⅰ．大宰府条坊跡調査研究履歴 …… 1

Ⅱ．調 査 組 織 …… 11

Ⅲ．調査・整理及び報告の方法 …… 15

Ⅳ．歴史科学分析

(1)　第43次調査 …… 19
(2)　第59次調査 …… 65
(3)　第64次調査 …… 79
(4)　第68次調査 …… 158
(5)　第73次調査 …… 211
(6)　第76次調査 …… 218
(7)　第91次調査 …… 219
(8)　第93次調査 …… 224
(9)　第94次調査 …… 333
(10)　第117次調査 …… 339
(11)　第121次調査 …… 343
(12)　第142次調査 …… 347
(13)　礎石の発見 …… 356

Ⅴ．自然科学分析

大宰府条坊跡第64次調査出土の動物遺存体 …… 358

Ⅵ．総　　括 …… 365

Ⅰ．大宰府条坊跡調査研究履歴

大宰府条坊跡は現在の太宰府市のほぼ中央に位置する遺跡で、推定される面積は５㎢以上を有し、推定範囲の南側1/4ほどは隣接する筑紫野市にまで及んでいる。北には大野城跡がある大城山（標高410ｍ）、北東には霊峰宝満山（標高829.6ｍ）が横たわる。条坊推定域の中央北辺には大宰府跡があり、その東側に隣接して学校院跡、観世音寺がある。さらに推定域の西北には水城跡、筑前国分寺跡、同国分尼寺跡などがあり、南西隅をかすめるように古代官道が通過し、周囲の丘陵上には奈良時代から平安時代にかけての官人達の墳墓が展開する。その景観は都をイメージさせることから西都大宰府などと呼ばれることもある（Fig.1）。

さて、大宰府条坊跡とされる遺跡は地下遺構が未発見の状態で推定され今日に至っているが、大宰府という歴史的位置付けも手伝って多くの研究が成されてきた。あわせて発掘調査も平成９年度現在で197次を数え、報告書も遅ればせながら今回で10冊目（計66地点収録）になる。そこで本書ではこの大宰府条坊跡の調査と研究の歴史を振り返りながら、課題や問題点を探り今後の調査、研究に役立てたいと考える。

(1) 調査と研究―その黎明期

大宰府に条坊が存在するという仮説を打ち立てたのは故鏡山猛九州大学教授である(1)。その発表年次はきわめて古く昭和12（1937）年にまで遡る。当時の太宰府市内の風景は一面が水田や畑で、所々に集落が展開する程度の長閑なものであったろうと想像されるが、この田園風景のなかに古代の都市が埋没しているということを想定するには、地道な研究の積み上げがあったからにほかならない。いま我々は発掘調査という科学的な手法を用いてそれを追認しようとしているが、当時は組織的な発掘調査はまったく実施されておらず（平城宮跡でさえ昭和30年代に入ってからである）、地表に残され観察が可能な痕跡といえば水田の畦畔と一部の礎石ぐらいである。また地図作成能力も現代と比べれば精度の低いものであったろうことは十分考えられるところであり、その中での立論には敬服に値するものがある。

さて、ここで鏡山の説を概観しておこう（Fig.2上）。まず条坊復原の第一番目の手がかりとして大宰府政庁域が方四町、観世音寺域が方三町と推定した結果に基づき、しかも両者の南辺が同一の東西線上に位置すること、さらに政庁の東辺と観世音寺の西辺との距離が二町になるということから、一町を単位とする企画性を見出したことにある。そしてこの方眼を政庁の四周に広げてみたところ、道路や畦畔と一致するものが多いことに気付いた。

それに加えて『観世音寺文書』の中に土地争論に関わる文書が多数残存し、そこに条坊呼称の存在することが注意された。そしてそれらの地点を自身の推定範囲内にドットし、最終的には東西各十二坊（計二十四坊）、南北二十二条のやや横長の条坊域を想定するに至った。この範囲は東西約2.6km、南北約2.4kmに及び、北東隅は太宰府天満宮に迫り、北西隅は筑前国分寺の南方に、また南辺は筑紫野市二日市までを含み込む広大なものである。

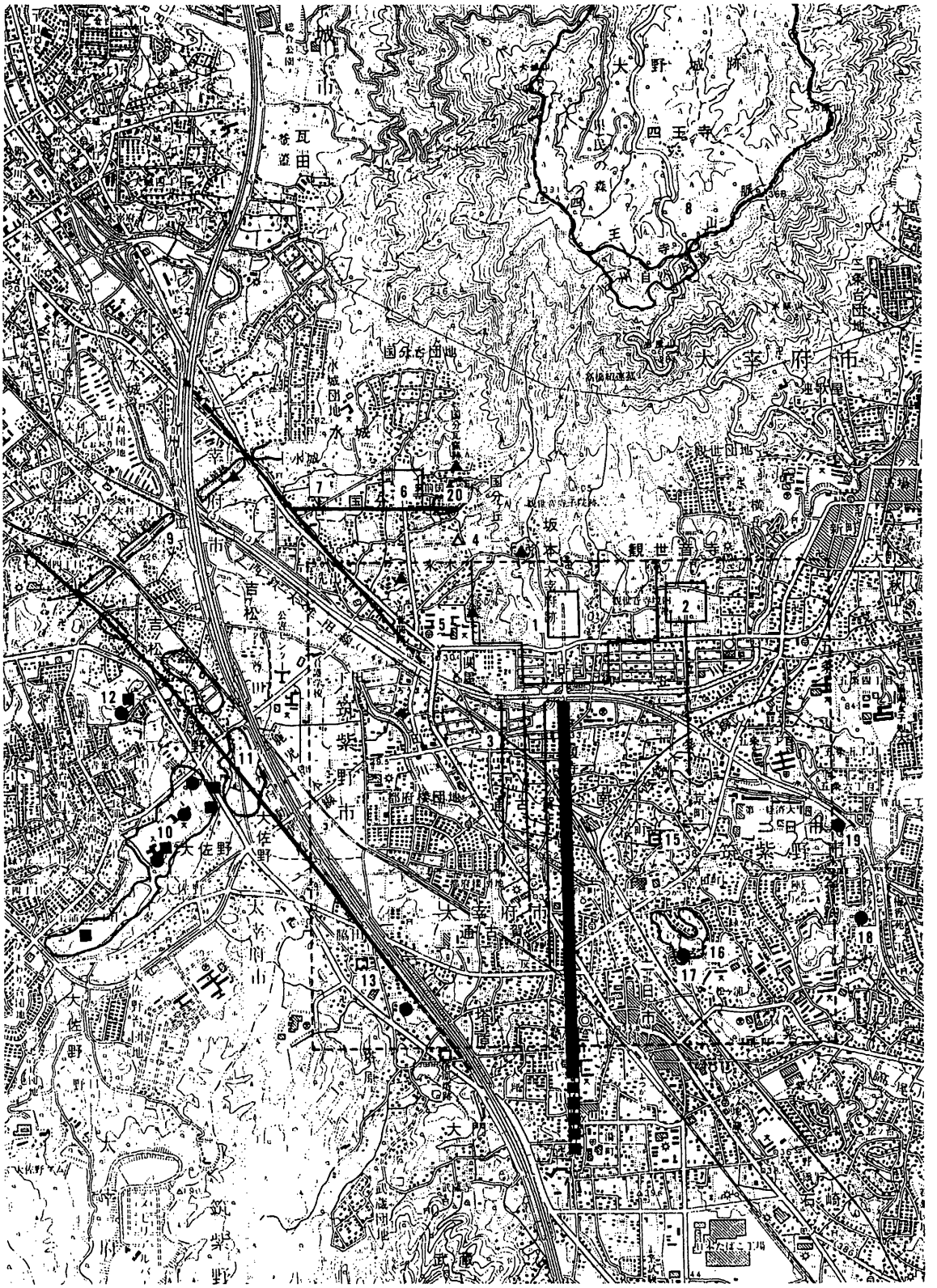


Fig. 1　太宰府市周辺遺跡分布図(1/25000)

ただ現在の目から見れば問題点は山積みされた状況である。一部を列記すれば、成立年代の問題、条坊への条里地割りの採用、道幅、丘陵部への施行の有無など多々存在する。これらはやはり発掘調査によるデータの集積ではじめて解決される問題が多く、いくつかはすでに新しい状況を見出せている。以下に調査・研究史を追いながら検討してみることとする。

(2) 調査と研究—昭和期

鏡山による条坊推定範囲内での発掘調査が最初に実施されたのは、太宰府市向佐野で実施された学校建築に先立つもので大宰府史跡第12・13次調査（昭和46年度）ではないかと思われる。推定右郭西限に該当するところに南北溝が検出されたが、途中で西に折れ曲がり、遺物が中世に下ることから西限ラインとは認められていない。続いて蔵司前面で調査された第14次調査(昭和46年度）では南北の大溝（のちSD320として報告）が検出され、推定ラインに近いことからその可能性が指摘された[2]。

その後、昭和48年度に実施された御笠川南条坊遺跡[3]で検出された南北に走る小溝群に挟まれた幅約2.6mの部分を道と想定し、これを観世音寺中軸線から東へ一町の位置に該当するとしている。遺構の年代は上限を平安時代後期とみる。さらにここから東へ二町のところで行われた大宰府史跡第33次調査で検出された南北溝も中世に埋没したものであるが、政庁からの距離を計算し条坊関連遺構である可能性を示唆している[4]。

これらを元にして藤井功、亀井明徳は鏡山条坊案を期待感を込めて肯定的な立場で捉えている[5]。それは年代的に新しいことから発見された溝自体は別の目的で穿たれたものとみるが、それらは当初の条坊痕跡を踏襲していたのではないかという立場を示している。当時の状況から致し方ない所見である。ちなみに最近の調査成果では第33次の溝(SD605)は北側約45mで東に大きく曲がり、中世居館に伴う環濠の可能性が高い[6]。また御笠川南条坊跡検出の道路は平安時代に施行された条坊の一部である可能性が考えられる。

その後推定条坊域内では昭和52年度に調査された大宰府史跡第46次調査[7]がある。ここでは11世紀後半に埋没した南北溝SD1330・1331に挟まれた約3mの空間を道路と見なしているが、中軸線からの距離を計測するに留まっている。

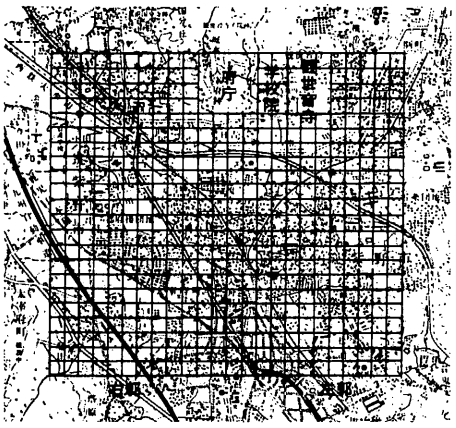
(Fig.1の遺跡一覧表)

1. 大宰府跡
2. 観世音寺
3. 大宰府条坊跡（破線は推定域）
4. 御笠軍団推定地
5. 遠賀軍団推定地
6. 筑前国分寺跡
7. 筑前国分尼寺跡
8. 大野城跡
9. 水城跡
10. 宮ノ本遺跡
11. 前田遺跡
12. 篠振遺跡
13. 杉塚廃寺
14. 塔原廃寺
15. 般若寺跡
16. 峯畑遺跡
17. 峯火葬墓
18. 米嚙火葬墓
19. 結ケ浦火葬墓
20. 辻遺跡

●墳墓

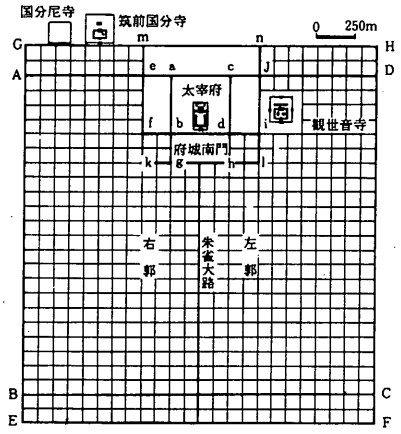
■須恵器窯

▲瓦窯



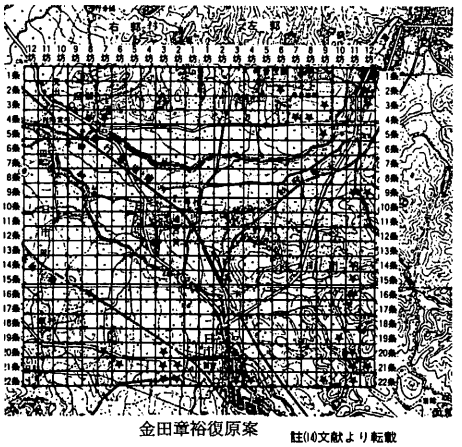
鏡山猛復原案

「日本の美術」216より転載



ABCD	abdc	鏡山猛説
	efbghdij	石松好雄説
AEFD	eklj	沢村仁説
GBCH	mkln	阿部義平説

註(1)文献より転載



金田章裕復原案

註(4)文献より転載

Fig. 2　大宰府条坊復原案の数々

大宰府条坊跡の発掘調査は昭和54年に至って太宰府市教育委員会が手掛けるようになり、本格的解明に前進するわけであるが、当初は諸事情から小規模なトレンチ調査が中心で、広い面積の調査はしばらく経ってからである。

このような中、研究方面では鏡山案をベースにして修正ないしは補足案が提示される。いずれも九州歴史資料館開館10周年を記念した書物に掲載されているためその掲載順に記載する。

まず石松好雄は政庁前面域の発掘調査成果を踏まえて、政庁の範囲が大きく広がることを指摘した(8)。主に官衙跡と推定される遺構の広がりから東は学校院を含み観世音寺西限まで、西は東限ラインを中軸線で折り返した位置にある南北小路付近とし蔵司を完全に包括する。さらに南限については政庁南門前面と御笠川との間の調査で、朱雀大路が検出されず広場的な状況を呈していたことや、日吉・不丁地区に官衙が密集していることを勘案し、その不丁地区の西を限るのがSD320とされる南北大溝であるとしたうえで、それを中軸線で折り返し東西幅約370m、南北長約170mの範囲で南へ張り出す形状を推定している(Fig.2中)。これは発掘調査の成果を反映させて、一部とは言え鏡山条坊案にメスを入れた最初の論考である。

岸俊男は各地の都城の検討から大宰府に条坊が存在することには否定的な考えを披露している(9)。それは、推定条坊域の西や南の地域には条里制遺構が残存するにも関わらず肝心の郭内にはそれに適合するような地割がほとんど現存しないことを指摘した上で、大宰府が泗沘や熊津といった百済の都城の影響を強く受けているとすれば、そこには中国の都城にみられる条坊制の方格街区が設定された形跡がみられないことから、大宰府設置の当初から条坊制の存在した可能性は極めて少なく、条里制に基づく郭

の設置は少なくとも奈良時代以降であろうとした。

沢村仁は京の在り方について整理し、大宰府の都市としての遺跡の在り方は何を問題として論ずる必要があるかを説いた[10]。ここではその個々について記載しないが、『律』の衛禁律を検討するなかで、大宰府の垣の在り方が坊ごとの築地塀の存在がないか小規模なものであった可能性を指摘し、大宰府の都市を京とは比較せず国府型の都市の巨大なものではないかと推定している。そして鏡山条坊案の南辺を二条拡大し、24町四方の郭域を推定した上で方八町の国府域を9単位集合したものと考えた（Fig.2中）。

こうした中、阿部義平は自著のなかで大宰府条坊について過去の研究成果を整理し、石松案を踏まえて政庁域を方八町とし、さらに観世音寺周辺の寺田呼称から鏡山説より北に2条拡大する案を提示している[11]（Fig.2中）。

ここまでの意見の多くは鏡山の意見を踏襲するものであるが、研究の題材は多義にわたっており大宰府条坊研究において欠かせぬものであることは言うまでもない。しかし条坊復原案に鏡山の案が踏襲されている背景には、発掘調査及びその整理報告の遅れが指摘されるところであり、現在の状況とは大きく異なった資料的制約があったことは周知しておく必要があるだろう。

この間、大宰府条坊域では積極的に発掘調査が実施され、右郭一坊ライン付近で奈良時代から平安時代にかけての複数の南北溝が検出され、話題を呼んだ。大宰府条坊跡第34次調査（昭和57年度調査／未報告）である。この後もいくつかの道路を思わせる遺構が確認されていたが、年代が11世紀後半頃のものが主体を占めていたこと、調査件数の割には道路遺構に遭遇しなかったこと、これらの遺構を鏡山案とどのような整合性があるかを検討することに留まっていたことなどから新案を提示するまでには至っていない。

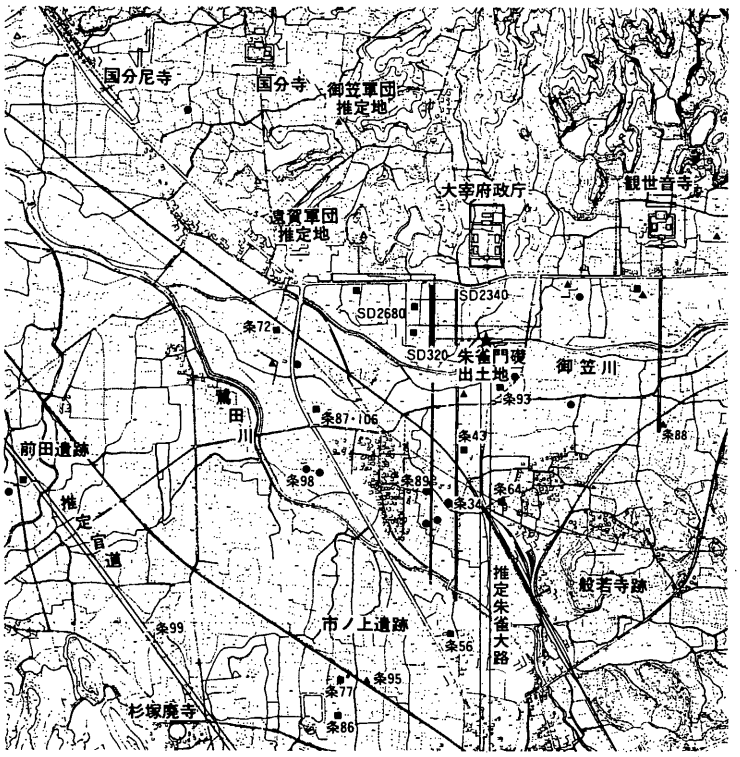
その後、昭和62年度には大宰府ではじめて朱雀大路の東側溝と考えられる遺構を確認するに至った（第64次調査／本書に報告）[12]。この段階では計算上で道路幅が提示し得たにすぎないが、筑紫野市教育委員会が実施した第107次調査において西側溝とみられる遺構を確認し、2箇所ではあるが実際の遺構から路面幅を抽出することができるようになった。その後も本市及び筑紫野市の調査で朱雀大路の側溝とみられる遺構が複数箇所で確認されるようになり、その存在はほぼ確実になったと言える[13]。

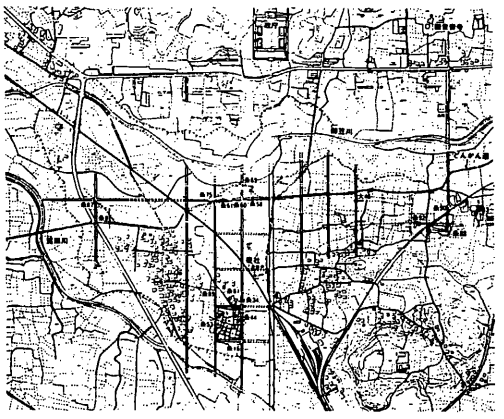
(3) 調査と研究—平成期

平成元（1989）年に金田章裕が鏡山以来とも言える新案を提示した[14]。条坊の範囲については鏡山のものを踏襲するものの、『観世音寺文書』を詳細に検討し大宰府の条坊は10世紀中頃に成立したとし、しかも当時の一区画は面積が8反を基準として形成されていたことを説いた。さらに、この段階で調査されていた条坊関連遺構ともほぼ合致していた。そして8反を基本とすることにより、区画の一辺は約100mになると推定し鏡山よりもやや小さな条坊案が提示されることとなった（Fig.2下）。

また、具体的な成立年代について文献史料を再評価して提示したことに加え、金田自身の持つ歴史地理学的手法を駆使して提示したこの案は、その内容において未だ凌ぐものはないといって過言ではなかろう。そして都市的な空間は存在するが本質的には別のものであると考え、「坪」の表記や水田表示を最大の目的にしているなどの点から大宰府の条坊プランは、本質的には他地域の条里プランと同様な機能を果たしていたとした。さらに条坊呼称の背景には平安時代の大宰府官人達が、自分達の大宰府に都城を構想したものではないかと推定した。

これを受けて倉住靖彦は、安楽寺における行事が宮廷行事を再現する格好の場であったことから、当時の官人達の京洛に遊ぶ観念に注目し、土地表示法が条里呼称では農村的であるのに対して条坊呼称は都市的である点から条坊呼称が受け入れられたものと考えた(15)。





上：政庁第II期
下：政庁第III期

Fig. 3　筆者による大宰府条坊復原案

その後、筆者は大宰府条坊跡検出の条坊関連遺構をまとめる機会を得た(16)。従来（報告書を除く）地図上で論議されていた各遺構間の距離をすべて国土座標に基づいて計算によって求め、一つのモデルとなる区画を抽出した。その区画の内法は南北113.19m、東西83.95m（区画の北端／南端は78.66m）という略長方形を呈するもののそれの示す面積は9202.91㎡となり8反を示すこと、区画溝の埋没年代がすべて11世紀後半から12世紀前半頃の範囲であることなどから、先の金田の論を受ける形で復原案を提示した。またこの時期の

道路側溝の在り方から、南北路は左右ほぼ対称に計画された可能性を指摘できたが、東西方向では直線では通らない部分が存在することからややいびつな条坊復原案となっている。また提示したモデル地区が『観世音寺文書』に呼称されていた何条何坊に該当するかは提示しておらず、遺構が検出された範囲でのみ区画を復原するきわめて限界のあるものである。しかしながら、考古学的手法において復原し得る限界でもあり、これ以上の範囲復原は今後の資料増加及び別の手法に依る必要があろう。

ところでここで提示した案は奈良時代と平安時代の2時期がある(Fig.3)。上記した所見は主として平安時代のものであるが、これと重複して奈良時代の南北溝が検出されることが多かった。この事実から奈良時代にはすでに何らかの設計に基づいた街路の設定がなされていたことは確実であるが、この段階では東西方向の道路痕跡が未確認であったことから、奈良時代に条坊が確実に存在していたかどうかは今後の課題として残ることとなった。

これによって部分的ながらはじめて遺構から大宰府条坊が語れたわけであり、現在も大筋では当時の復原の範囲内で不整合な遺構の検出はない。しかしその範囲外ではこれまでの復原を単純に延長しただけでは語れない状況を示すものもあり、少なくとも平安時代に属する条坊は全体に近い範囲を調査しないと結論が得られない可能性が強い。

1992年には鬼塚久美子が奈良時代の区画に絞って検討を加え、特に設計尺度の問題から政庁、観世音寺付近は小尺100尺、政庁前面域は小尺300尺（大尺250尺）を基本として設計されたとした[17]。大宰府条坊研究も数値での解釈が可能となってきたことを物語っている。

ところで、筆者が条坊案を発表したころは調査次数も90番台を数えていたが、諸般の事情で正式な報告書はほとんど刊行されておらず、内部資料及び九州歴史資料館が主宰する大宰府史跡調査研究指導委員会の資料などに状況を報告する程度であり、正式な報告書の刊行を期待する声が高まってきた。そのような中、本市ではある程度のまとまりのある範囲を括って報告し、条坊域の各部分がある程度検討できる格好で随時報告する方針を定め、ようやく遅速ではあるが刊行を開始した。

その中で注目されることは、先に指摘した奈良時代の区画と平安時代後期の条坊との間に未知の区画が存在する可能性が高まってきたことである[18]。その時期は概ね10世紀に考えられるもので、一部では過去の遺構と重複しているもののまったく新規に建築された可能性を物語る部分もあり、新たな課題が提示されたと言えよう。また大宰府条坊の北西隅近くの一角では奈良時代でありながら従来の真南北に近い振れを持たない新たな区画の存在が浮かび上がりつつある。これは大宰府条坊が一つの大きな面としての遺跡ではなく、複数のブロックに分かれ、それぞれのブロックの中で独自の区画が存在する可能性を示唆するものである。大宰府条坊内を「郭」と呼称する由縁もこうしたことによるものかも知れない。

こうした状況は金田が、国府の周囲にある都市の形態を分析し導き出した[19]ことと符合し、都城ではない地方都市の在り方を考える点できわめて重要なことと考えられる。ただ大宰府に

おけるこの可能性はさらなる追求が必要であり、現状では単一の「面」ではなかった可能性もあるということを踏まえる程度に留めておきたい。

大宰府条坊の研究は、そのプラン復原はもとより呼称の由縁や計画尺についても検討できるような段階に入ってきたことはこの研究史で明らかであるが、区画内の状況を語るにはさらに数年の調査成果の蓄積が必要であった。

(4) 調査と研究—最近の事例と今後の課題—

平成7年度に至って推定左郭一坊の一部を東西に長く調査する機会を得た。道路拡幅事業に伴うものだが、朱雀大路の東側溝付近から東へ約200mという長大な調査区であり、新たな所見を得ることができた。ここでは南北の街区はもちろんのこと、区画内における宅地割りの様相の一端が明らかになった。調査を担当した井上信正の分析[20]によると、奈良時代では一坊の東西を3つに分割している痕跡を確認し、朱雀大路の幅分を含めると計画段階では4分割を目安にしていたと指摘した。また平安期（政庁第III期並行）にも近似した土地活用がなされていることも指摘し、そこでは奈良時代が軸線間を等分割するのとは異なって面積を基準に区画分割した可能性を示唆した（Fig.4）。

大宰府条坊の研究もようやく宅地割の様相を考察さる段階にさしかかったと言える。

なお、この調査地の南側には西日本鉄道の車庫跡が数万㎡にわたって現在空き地となっている。この場所の調査は大宰府条坊の解明に不可欠であり、ここの調査結果によって大きくその解明は進むものと思われる。

また平成8年度に太宰府市教育委員会が調査した大宰府条坊跡第178次調査では、はじめて奈

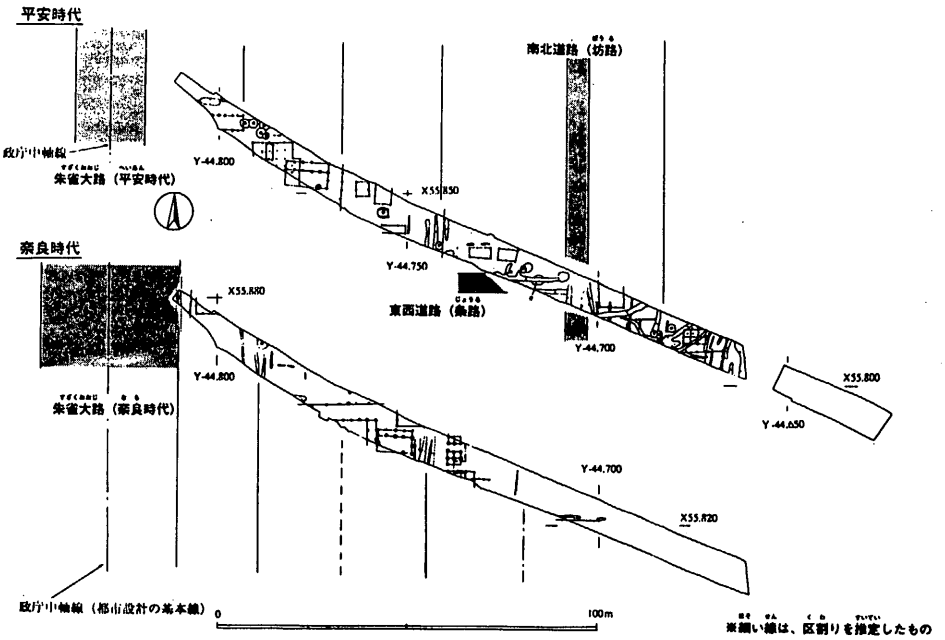


Fig. 4　井上信正による条坊内の宅地割案

良時代の東西路と推定される遺構が検出された(21)。続く平成9年度にも第191次調査でその可能性を窺わせる遺構が検出された。奈良時代の区画もやはり条坊風になっていた可能性が強くなりつつある。

また鏡山案による条坊北西隅近くの丘陵部を調査した第190次調査では、丘陵頂部を平坦に造成したうえで一定の方向性を持った掘立柱建物群が建てられている事実を確認した(22)。丘陵上からは水城、大野城、基肄城が一望され、しかも大宰府の平野のほとんどが眼下に広がるという立地である。この状況は条坊郭内の宅地というよりも何らかの官的施設であると考えるべきであり、折しも近辺からは「御笠団印」「遠賀団印」が出土していることもあり、軍団施設との関係が窺われる遺跡である。

このように推定条坊郭内には思わぬ遺構の発見があり、今後の調査の進展に大いに期待するものがある。こうした成果に立脚して、今後も条坊区画の確認、その中における宅地の分割方法の確認といった課題は続いて行われなければならない課題である。さらに10世紀前後に現れる未知の区画の解明や、郭と呼ばれてきた由縁、各ブロックにおける出土遺物の様相とそれから導き出される居住者の階層など未だ未解明の問題は多い。また大宰府は律令体制時のみ繁栄した街ではなく、続く中世においても手工業者を中心とした町並みが存在していたことが明らかになりつつある。加えて古代の寺院が中世をむかえて変質してゆく過程がこの大宰府の地では明らかに出来るものと考えられる。これらは奈良・平安時代という基盤があってこそ出現してきた事象であり連綿と続く遺跡は、発掘調査を行うということでは複雑で困難な仕事を要求されるが、そこから得られる様々な情報は他では得られないものであり、大宰府の調査は今後も注目され続けるであろう。

多くの紙数を費やしたが、大宰府条坊の調査・研究は鏡山氏の発表以来60年という長い歳月が流れ、まもなく発掘調査は200次を迎えようとしている。この間、大宰府条坊の生みの親たる鏡山猛氏、大宰府跡を史跡に指定し積極的に保存にあたられ条坊復原にも強い関心を示されていた藤井功氏、大宰府の遺構の年代決定を左右する土器・陶磁器の基礎的な研究を行い今も不動の編年観を打ち立てられた森田勉氏ら大宰府研究にとって重要な人物はすでに鬼籍に入られてしまった。先達の学恩を無駄にすることなく新たな方向性を模索しながら、大宰府条坊の解明を果たすことが我々に課せられた課題であり、このことを肝に銘じて調査にあたってゆきたい。

(註)

(1) 鏡山猛「大宰府の遺跡と条坊（一）（二）」『史淵』16･17 1937年　のち『大宰府都城の研究』1968年　風間書房　に掲載

(2) 九州歴史資料館『大宰府史跡』昭和46年度発掘調査略報　1972年　九州歴史資料館

(3) 前川威洋、新原正典『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第2集　1975年　福岡県教育委員会

(4) 九州歴史資料館『大宰府史跡』昭和49年度発掘調査概報　1975年　九州歴史資料館
(5) 藤井功、亀井明徳「古代都市大宰府」『西都大宰府』（NHK ブックス277）1977年　日本放送出版協会
(6) 河田聡、狭川真一『大宰府条坊跡IV』（太宰府市の文化財第23集）1994年　太宰府市教育委員会
(7) 九州歴史資料館『大宰府史跡』昭和52年度発掘調査概報　1978年　九州歴史資料館
(8) 石松好雄「大宰府庁域考」『大宰府古文化論叢』上巻　1983年　吉川弘文館
(9) 岸俊男「大宰府と都城制」『大宰府古文化論叢』上巻　1983年　吉川弘文館
(10) 沢村仁「諸京と大宰府」『大宰府古文化論叢』上巻　1983年　吉川弘文館
(11) 阿部義平『官衙』（考古学ライブラリー50）1989年　ニュー・サイエンス社
(12) 狭川真一「大宰府条坊跡の調査（1）」『都府楼』5号　1988年　（財）古都大宰府を守る会
(13) 狭川真一「大宰府の朱雀大路」『文化財学論集』1994年　文化財学論集刊行会
(14) 金田章裕「大宰府条坊プランについて」『人文地理』41-5　1989年
(15) 倉住靖彦「都市大宰府をめぐる若干の考察」『研究論集』第15号　1990年　九州歴史資料館
(16) 狭川真一「大宰府条坊の復原ー発掘調査成果からの試案ー」『条里制研究』6号　1990年　条里制研究会　本稿は1989年度に実施された第6回条里制研究会で発表したものを活字化したものである。なお数値に若干の変動が生じていたため『大宰府条坊跡VII』報告書中で訂正した。本稿の掲載数値は変更後のものである。
(17) 鬼塚久美子「8世紀大宰府の計画地割について」『人文地理』第44巻2号　1992年
(18) 中島恒次郎ほか『大宰府条坊跡IX』（太宰府市の文化財第30集）1996年　太宰府市教育委員会
(19) 金田章裕「国府の形態と構造について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第63集　1995年　国立歴史民俗博物館
(20) 井上信正「大宰府条坊の区割りについて」『条里制研究』第14号　1998年　条里制研究会
(21) 宮崎亮一「奈良時代の道路と掘立柱建物群」『遺跡だより』第35号　1996年　太宰府市教育委員会
(22) 宮崎亮一「御笠軍団発見か」『遺跡だより』第38号　1997年　太宰府市教育委員会

II. 調査組織

調査を実施した各年度の調査体制を下記に列記する。なお、調査を行った各地点の位置図はFig.5に掲載したので参照されたい。

(昭和58／1983年度) ……第43次調査

総括	教育長	陶山直次郎
庶務	社会教育課長	西山　義則
	文化財係長	黒板　力
	主事	岡部　大治
調査	技師	山本　信夫　狭川　真一

(昭和61／1986年度) ……第59次調査

総括	教育長	藤　寿人
庶務	社会教育課長	花田　勝彦
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主事	岡部　大治
調査	技師	山本　信夫　狭川　真一　緒方　俊輔

(昭和62／1987年度) ……第64・68次調査

総括	教育長	藤　寿人
庶務	社会教育課長	花田　勝彦
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主事	岡部　大治　白水　伸司
調査	技師	山本　信夫　狭川　真一　緒方　俊輔
	技師（嘱託）	山村　信榮（9月1日～）

(昭和63／1988年度) ……第73次調査

総括	教育長	藤　寿人
庶務	教育部長	西山　義則（12月1日～）
	社会教育課長	花田　勝彦（～11月30日）　関岡　勉（12月1日～）
	文化財係長	鬼木冨士夫
	主事	川原　和典（～11月30日）　岡部　大治（12月1日～）
		白水　伸司
調査	技師	山本　信夫　狭川　真一　緒方　俊輔
	技師（嘱託）	山村　信榮

(平成元／1989年度) ……第91次調査

総括	教育長	藤　壽人（～6月30日）　長野治己（8月8日～）

庶務　教育部長　西山　義則
社会教育課長　関岡　勉
文化財係長　鬼木冨士夫
主事　岡部　大治　白水　伸司
調査　技師　山本　信夫　狭川　真一　城戸　康利　緒方　俊輔
山村　信榮
技師（嘱託）　中島恒次郎　狭川　麻子（2年1月5日～）

（平成2／1990年度）……第93・94次調査
総括　教育長　長野　治己
庶務　教育部長　西山　義則
社会教育課長　関岡　勉
文化財係長　鬼木冨士夫
主任主事　岡部　大治
主事　白水　伸司
調査　主任技師　山本　信夫　狭川　真一　城戸　康利（7月1日～）
技師　城戸　康利（～6月30日）　緒方　俊輔　山村　信榮
技師（嘱託）　中島恒次郎　狭川　麻子

（平成3／1991年度）……第117・121次調査
総括　教育長　長野　治己
庶務　教育部長　中川シゲ子
文化課長　佐藤　恭宏
埋蔵文化財係長　富田　譲
文化振興係長　大田　重信
主任主事　岡部　大治　川谷　豊
調査　主任技師　山本　信夫　狭川　真一　城戸　康利　緒方　俊輔
技師　山村　信榮　中島恒次郎　塩地　潤一
技師（嘱託）　田中　克子（10月1日～）

（平成5／1993年度）……第142次調査
総括　教育長　長野　治己
庶務　教育部長　中川シゲ子
文化課長　佐藤　恭宏
埋蔵文化財係長　高田　克二
文化振興係長　大田　重信
主任主事　岡部　大治　川谷　豊

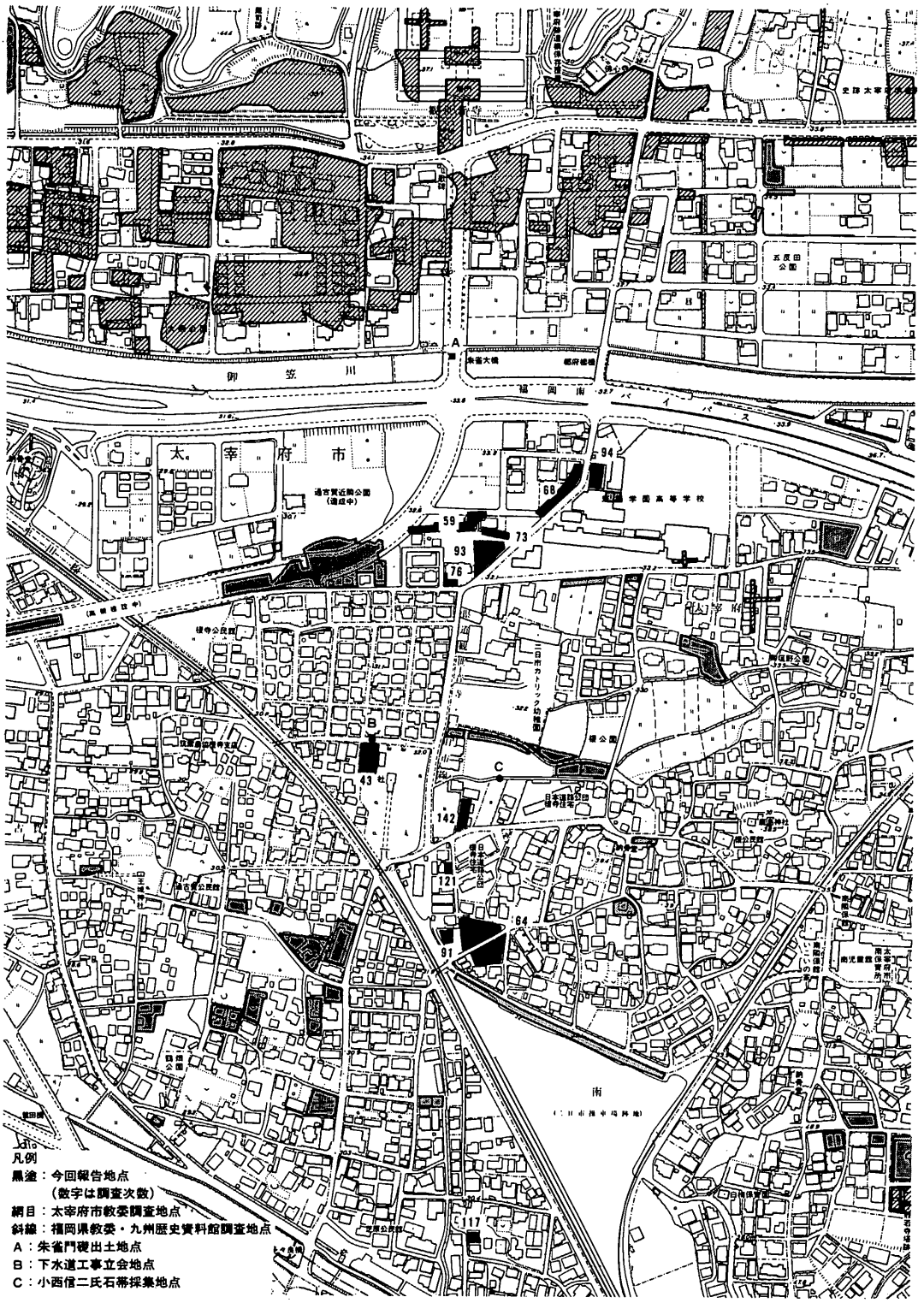


Fig. 5　今回報告する調査地点及びその周辺の調査地点(1/6000)

調査　技術主査　山本　信夫（10月1日～）
主任技師　山本　信夫（～9月30日）　狭川　真一　城戸　康利
緒方　俊輔　山村　信榮　中島恒次郎
技師　塩地　潤一
技師（嘱託）　田中　克子　重松麻里子（6月1日～）　井上　信正（7月1日～）

（平成9／1997年度）……報告書作成

総括　教育長　長野　治己
庶務　教育部長　小田　勝弥
文化財課長　津田　秀司
文化財保護係長　和田　敏信
文化財調査係長　山本　信夫
主任主事　藤井　泰人
主事　今村江利子
調査　技術主査　狭川　真一（10月1日～）
主任技師　狭川　真一（～9月30日）　城戸　康利　山村　信榮
中島恒次郎　井上　信正
技師　高橋　学　宮崎　亮一
技師（嘱託）　下川可容子　森田レイ子

発掘調査・遺物整理及び報告書作成にあたっては次の方々からご教示や資料の提供を受けた。記して感謝申し上げる次第である。

（順不同、敬称略、所属は各々ご指導をいただいた当時のもので記載している）

小田富士雄・武末純一（福岡大学）、宮小路賀宏・栗原和彦・中間研志・水ノ江和同（福岡県教育委員会）、石松好雄・横田賢次郎・森田勉・高橋章・赤司善彦（九州歴史資料館）、桑原滋郎・井上和人（文化庁）、山中敏史・松井章・花谷浩（奈良国立文化財研究所）、細見啓三（建造物保存技術協会）、進藤秋輝（多賀城跡調査研究所）、千葉孝弥（多賀城市埋蔵文化財センター）、瀬口慎司（滋賀県文化財保護協会）、辻純一・宮原健吾（京都市埋蔵文化財研究所）、山中章（向日市埋蔵文化財センター）、岡本広義（元興寺文化財研究所）、川瀬敏雄・奥村泰之（株式会社堀内カラー大阪現像所）、亀田修一（岡山理科大学）、大林達夫（防府市教育委員会）、小西信二（太宰府天満宮文化研究所）、坪根伸也（大分市教育委員会）、吉留秀敏（福岡市教育委員会）、渡邊和子・奥村俊久（筑紫野市教育委員会）、小林勇作・上村英士（筑後市教育委員会）

また大宰府史跡調査研究指導委員、太宰府市文化財専門委員、太宰府市史編纂委員の先生方には常々太宰府市の調査、整理に対してご指導いただいている。併せて感謝申し上げる次第である。

III. 調査・整理及び報告の方法

太宰府市教育委員会における発掘調査及び整理作業の方法は、すでに『佐野地区遺跡群 I』(1987年)において紹介している。今回の調査も基本的なところはすべて同じであり、ここでは同文を再録することは行わない。ただ、整理作業のうちデジタル化にむけて追加された業務があり、それに伴って報告書のスタイルも徐々に変貌しつつある。ひとつはすでに本市報告第18集（1992年）で試みられ、同第30集（1996年）においてほぼ形が定まった一次資料の提示がある。

発掘現場において作成される資料は整理作業において検討され、集約されたものが報告書に掲載されるのが常である。本市も基本的にはそのスタイルを採っているが、その影で未報告に終わる遺構がかなりの数にのぼる。これらは調査の際には一つ一つに仮番号が与えられ、略図や台帳に記録され、そこから出土した遺物はすべて遺構や層位ごとでカードに記録される。これは太宰府市で発掘調査を開始した初期の段階から行っていたことであるが、すべてを報告の対象とはしていなかった。しかし、検証が可能な報告書を提出するためにはこうした一次資料を何らかの形で提示する必要があるのではないかとの意見が出され、予算や期間の問題も踏まえながら技術職員全体で協議し、現在のようなスタイルになるに至った。提示できる資料の多くは表と略図、模式図であるが、これまで未報告に終わっていたピットや窪みなどの遺構及びその出土遺物というすべての情報を公開することが可能となった。しかしこれでも不足するものはあり(平面実測図における標高の記録や模式図、簡易なメモなど)、これらについても公開にむけて検討中である。なお、今回の報告書では報告対象現場数が多いため、関連する表だけで100ページ余を見込む必要がでてきた。そのため今回は一部の表を除いて、別添の CD-ROM に書き込んだ。

この作業を加えることによって整理作業に若干の期間を追加して見込む必要が生じたが、そのすべてを公開するという立場から詳細な整理を進めることによって、調査中における作業の問題点、考古学的問題点が浮き彫りにされ発掘調査における精粗の差が減少し、ある一定の基準で統一された情報が残せるようになってきた（ただし今回報告分では現場間に10年以上という歳月の隔たりがあることからその精粗の差を認めざるを得ない)。デジタル化に向けては一つの組織内でこうした一定の基準が必要であり、その点では良い方向に動いていると確信している。

いま一つはデジタル情報による報告書の作成である。数年前から原稿作成と編集作業は専用のソフトを利用してパソコン上で作成していたが、パソコンの普及が広がった今日、なんとか情報自体をデジタルで公開できる方法はないものかといろいろと模索していた。また、かねてから報告書に掲載される遺構写真情報の少なさには検討を要するものと考えていた。つまり現場で撮影される写真の数に比べて、掲載される写真があまりにも少ないのではないかというこ

とである。また印刷費用の関係から現場ではすべてがカラー情報で記録されているにも関わらず、提示できるのはモノクロ情報であるという点も検討課題と思っていた。そこで今回は写真情報についてのみデジタルで報告することに踏み切った。

提示した一枚のCDには、コダック社Photo-CDのBASEサイズ画像(512×768ピクセル／CD中ではJ-peg方式で圧縮している)で最大約2500枚のカラー写真を納めることができる。これを利用すれば現場、遺物の両方の情報をすべてカラー画像で提供することが可能となり、先に課題としていたことのいくつかはクリアできることになると考え、これに伴う報告書作成作業工程をTab.1に示してみた。

Tab.1に示すようにまず撮影段階でカラー情報を収集することが大きな違いとして掲げられる。したがって現像終了後、密着サイズのファイルへの整理は姿を消し、スライドマウントへの記録の記載に変化する。その後従来ならば写真をセレクトして焼き付けを行い、焼き上がってきた写真に被写体を特定するメモを書き込む必要があったがその作業は消え去った。逆にPhoto-CDでは画像に文字を直接記載できない欠点があるから、その画像に対応したテキスト情報の作成が必要となってくる。また、収納される写真は帯状になったネガフィルムではなく、マウントに入れられたポジフィルムのため並べ替えが簡単であり、Photo-CD発注前に報告書の遺物図面と対応するように並べ替えておけば、報告書の順に従って入力され、しかもフィルム自体も報告書の掲載に対応するような形で整理されたまま収納が可能となる。後々のことを考えれば、大きな時間削減に繋がっていることに気付く。またこのような形でPhoto-CDに入力しておけば、報告書に使用しようとする画像の抽出作業もきわめて簡単になり、パソコンの画面上で機械的に処理できるため100枚の写真が十数秒で抽出できる利点がある。またファイル番号さえ統一しておけば、テキスト情報との照合も簡単であり、従来の焼き付けから写真レイアウト作業、個別のキャプション記入など時間がかかっていた作業はすべて消滅してしまう。またテキスト情報の作成はそれがそのまま写真記録のデーターベースに転化できるため、報告書を作成しながら管理用のデーターベースを作成していることになる。したがって報告書完成後の写真に関する整理残務は皆無となる。これは確実な省力化と言える。今回は初めての作業も多く戸惑いもあったが、回数を重ねればより迅速な作業が現実のもの

Tab. 1　CD化に伴う作業の流れと従来の流れ

CD	従来
撮影（カラー）	撮影（モノクロ）
↓	↓
現像	現像
↓	↓
記録	記録
↓	↓
Photo-CD作成	焼き付け
↓	↓
画像抽出	レイアウト
↓	↓
テキスト情報作成	キャプション記入
↓	↓
本文との照合	本文との照合
↓	↓
発注	発注

となるだろう。

また費用の点でも大幅なコストダウンを実現した。撮影から現像までは仮に同じとしても焼き付けという作業がない。焼き付けた写真の報告書完成後の扱いは各地で様々であろうが、焼き付けられた写真はほとんどがカードとなり検索用の資料として活用されているほかはすべてが再利用されることは少ない。これに対して Photo-CD では、それを作成する費用は焼き付け代金よりは嵩むが、資料保存の立場で捉えるとフィルム原版を扱わない点で有効な方法の一つであるとともに、後々のデーターベース化に向けては必要不可欠な資料と言える。今後どのような方針で写真資料を保管、活用してゆくかにかかっているが、活用の幅が広いことを想定するとここで投入する費用は決して無駄な投資ではない。したがっていずれは作成する必要のあるものと判断できるため、この費用が余分にかかるという解釈にはならない。本書の場合、CD 作成に関わった費用(Photo-CD 作成費を含めて)は、同一枚数のカラー写真を印刷する費用(約2500枚の写真を 1 ページ平均 6 枚で掲載したとしても約416ページ)の 5 分の1以下 (Photo-CD 作成費を焼き付けと同等とみなしてこの費用に含めなければ約 8 分の1以下)となる。モノクロ印刷で比較するとその開きは小さくなるがそれでも 2 ～ 3 分の 1 程度に圧縮される。

このようにデジタル画像の活用は、提示できる資料がすべてカラー情報となるだけでなく費用の面でも有効であると判断した(写真枚数によってその有効性には差異がある)。こうした行為に対し時期尚早との声もあろうが、一つの試みとしてご了解願いたい。

ただ今回の場合、Macintosh、Windows の両 OS に対応するようにはしているものの、専用のソフトウェアを組み込めておらず指定されたソフトが事前に手元にあるということが前提となっている (ソフトを組み込むと費用面で大幅にアップするとともに 1 枚の CD に組み込める写真枚数は少なくなる)。したがって CD-ROM が付いているというだけでは稼働しない(写真データだけなら個別に他のソフトを利用して開くことはできる) という問題点が残っていることを付記しておく。

ところで、今回は写真図版に限ったが将来は全ページのデジタル化を実施し、印刷媒体として報告書を提示するのではなく、インターネット上に報告書を載せ、機関、個人を問わずどこからでも利用可能な状態にすべきではないかと考えている。それは報告書という性格上発行部数に限界があるのに対して、文化財専門職員の配置される機関が年毎に増加の一途を辿り、現状の部数では個人はもちろんのこと関係機関にも報告書を送付することが困難な状況になってきているのはいずこも同じであろう。また、報告書は一度刊行してしまうと、訂正や追加が発生しても同じ遺跡のものを二度作成することはほとんど不可能であるが、デジタル化しインターネットで公開してしまうと手元で訂正や追加を行い、バージョンアップ版としてネット上に提示することが可能となる。訂正や追加の量にもよるが、この作業には担当者の空いた時間を利用するなどすれば発刊に際してコスト面を心配する必要は全くない。さらに個人で必要な報告書は自分のディスクにダウンロードするだけでいいわけであるから、膨大な本の山に埋もれ

る心配からも開放されよう。

できればこうした情報を一本化して公開するホームページを埋蔵文化財の中心となる機関でも持っていただければ、その利用頻度は増大すると予想される。

なお、本書に付属するCD-ROMの使用方法は、外箱に記載したので参照されたい。また文化財資料のデジタル化に関する筆者なりの意見は、『歴史九州』1997年4月号から1998年3月号までの12回に分けて「最新発掘事情」として掲載したので機会があれば参照されたい。

IV. 歴史科学分析

(1) 第43次調査

調査地は太宰府市大字太宰府2578-1に所在し、申請時には空閑地であったが、それ以前は隣接する榎社の社務所が建っていたということである。この隣地は菅原道真の邸宅の跡に建てられたとされる榎社の境内地であることから、この地点には古代の住宅に関連する遺構の検出される可能性がきわめて高いことが予想された。このことから申請は無蓋駐車場ではあったが、当該物建設に先立って発掘調査を実施することとした。

現地での調査は昭和58（1983）年7月1日～9月26日まで実施し、調査面積は298m²である。調査は山本信夫、狭川真一が担当したが、測量及び遺構実測には岡部大治の協力を得た。また調査中、作業に関わって榎社社務所には多大なご協力を得た。感謝申し上げたい。

1．層位など

長く空閑地であったことから表土中には現代のゴミが多数廃棄されており、敷地の南西隅には大きな攪乱まで存在した。調査区内にも多数の攪乱が認められたが、予想以上に遺構は残存していた。

遺構を形成する面は場所によって異なりを見せるが、北半部では表土を除去すると黄灰色土の面が顔を出し、一部の遺構はこの面から切り込まれていた。また黄灰色土に切り込む淡茶色土が一部にみられ、ここにも若干の遺構が切り込んでいた。これらを除去すると茶色小斑を含む明茶色粘質土の地山が現れ、遺構の大半はこの面から切り込んでいた。また調査区の東半部分では暗茶褐色土の整地があり、その下位に茶褐色土（S-11）、暗茶色土（S-22）が、さらにその下には暗褐色土（S-5）が堆積していた。南寄りの地点では暗茶色土の下位に黄灰色土が認められた。遺構は茶褐色土、暗茶色土を除去した時点で検出されるものも多いが、黄灰色土を除去した段階で検出されるものも存在した。なお黄灰色土層は調査区の全面にあったわけではない。

さらに東南隅部分では黄灰色土を除去すると黄色土（黄茶色粘土）があり、43SX050とした堆積層はこれに切り込む形で検出された。そしてこれらを除去すると43SX065が検出された。

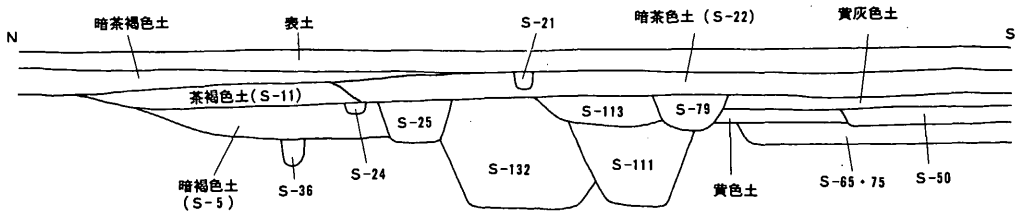


Fig. 6　第43次調査東壁付近堆積土層模式図

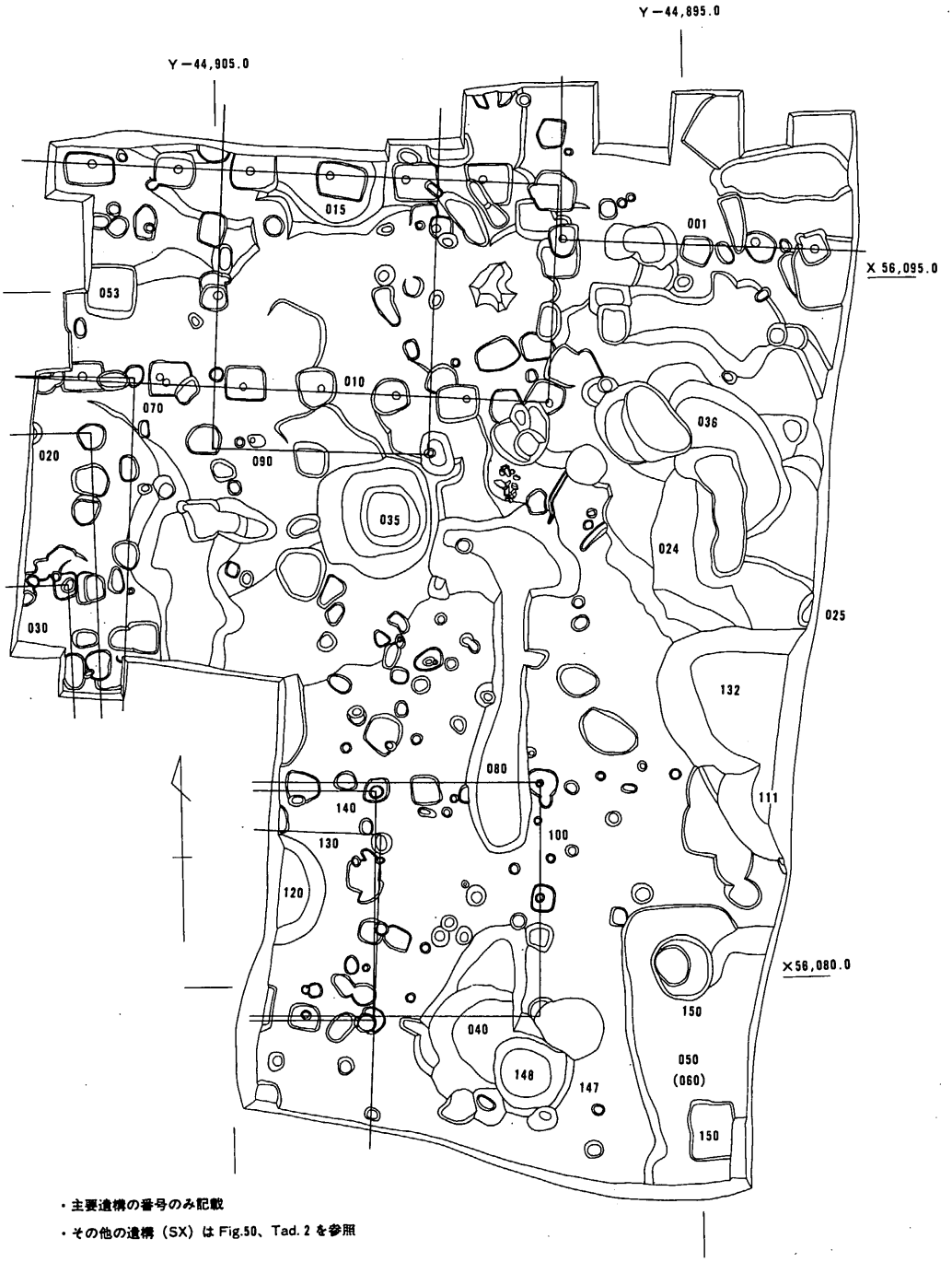


Fig. 7　第43次調査遺構配置図（1/150）

2．遺構

(1) 掘立柱建物

43SB001 (Fig.8･9、CD-043018～020)　調査区北東隅で検出されたもので南北１間 (2.28m) 以上、東西２間 (5.40ｍ) 以上の東西棟と推定され、建物の主軸は N-93°20′-E である。柱掘り方は略方形を呈し一辺0.6～0.7ｍで、深さは0.25～0.5ｍを測る。柱痕跡は a･c で確認され、直径0.2ｍ弱である。43SB010を切っている。

43SB010 (Fig.8･9、CD-043021～036)　調査区北端で検出されたもので、南北３間 (4.70ｍ)、東西6間 (10.22ｍ) 以上の東西棟で、建物の主軸は N-93°40′-E である。柱掘り方は一部を除いて略隅丸方形を呈し一辺0.7～1.1ｍで、深さは0.3～0.5ｍを測る。柱痕跡はほとんどの掘り方で確認され、直径0.15～0.2ｍ程度である。また掘り方 b･e では石の礎板が確認され、g では柱痕跡内に瓦や石が混入しており根固めが行われていた可能性を窺わせる。43SB001･43SB020に切られ、43SB090を切っている。

43SB020 (Fig.8･9、CD-043037･038)　調査区西端で検出されたもので、南北3間 (5.65ｍ) 以上、東西１間 (1.95ｍ) 以上の南北棟と推定され、主軸の振れは N-3°05′-E である。柱掘り方は略長円形で長さ0.5～0.6ｍ、幅0.4～0.6ｍ、深さは0.15～0.25ｍを測る。柱痕跡は確認できていない。43SB010よりも新しい。

43SB030 (Fig.8･9、CD-043039･040)　調査区西端で検出されたもので、南北１間 (2.0ｍ) 以上、東西は未確認である。南北方向の柱列から得られる主軸の振れは N-2°-W である。柱掘り方は略長円形で長さ0.5～0.8ｍ、幅0.5ｍ、深さ約0.2ｍを測る。柱痕跡は確認できていない。43SB070と近接しているが切り合いは確認できなかった。

43SB070 (Fig.8･9、CD-043041･042)　調査区西端で検出されたもので、南北3間 (5.0ｍ) 以上、東西１間 (1.25ｍ) 以上の南北棟と推定され、主軸の振れは N-1°30′-W である。柱掘り方は略長円形ないしは不整形で長さ0.6～0.7ｍ、幅0.6ｍ、深さは0.25～0.35ｍを測る。柱痕跡は c･d の掘り方で確認され、直径0.2～0.25ｍ程度である。43SB020･030と近接しているが切り合いは確認できなかった。

43SB090 (Fig.8･9、CD-043043～048)　調査区北半部で検出されたもので、南北4間 (6.6ｍ) 以上、東西２間 (4.65ｍ) の南北棟で、主軸の振れは N-2°15′-E である。柱掘り方は不整隅丸方形が主体であるが、不整円形を呈するものも含まれる。掘り方の規模は径0.4ｍ程度のものから一辺0.9～1.0ｍ近いものまで多様であり、深さも0.3～0.7ｍと揃っていない。他の遺構によって上面が大きく失われたことによる形状の不揃いと考えられる。柱痕跡は a･b･g･i で確認され、直径は0.2～0.25ｍを測る。43SB010に切られており、今次の調査で検出した建物では最も古期に属するものと考えられる。

43SB100 (Fig.10･11、CD-043049～053)　調査区南半部で検出されたもので、南北２間 (5.1ｍ)、東西２間 (5.0ｍ) 以上の南北棟と考えられ、主軸の振れは N-1°10′-E である。柱掘り方

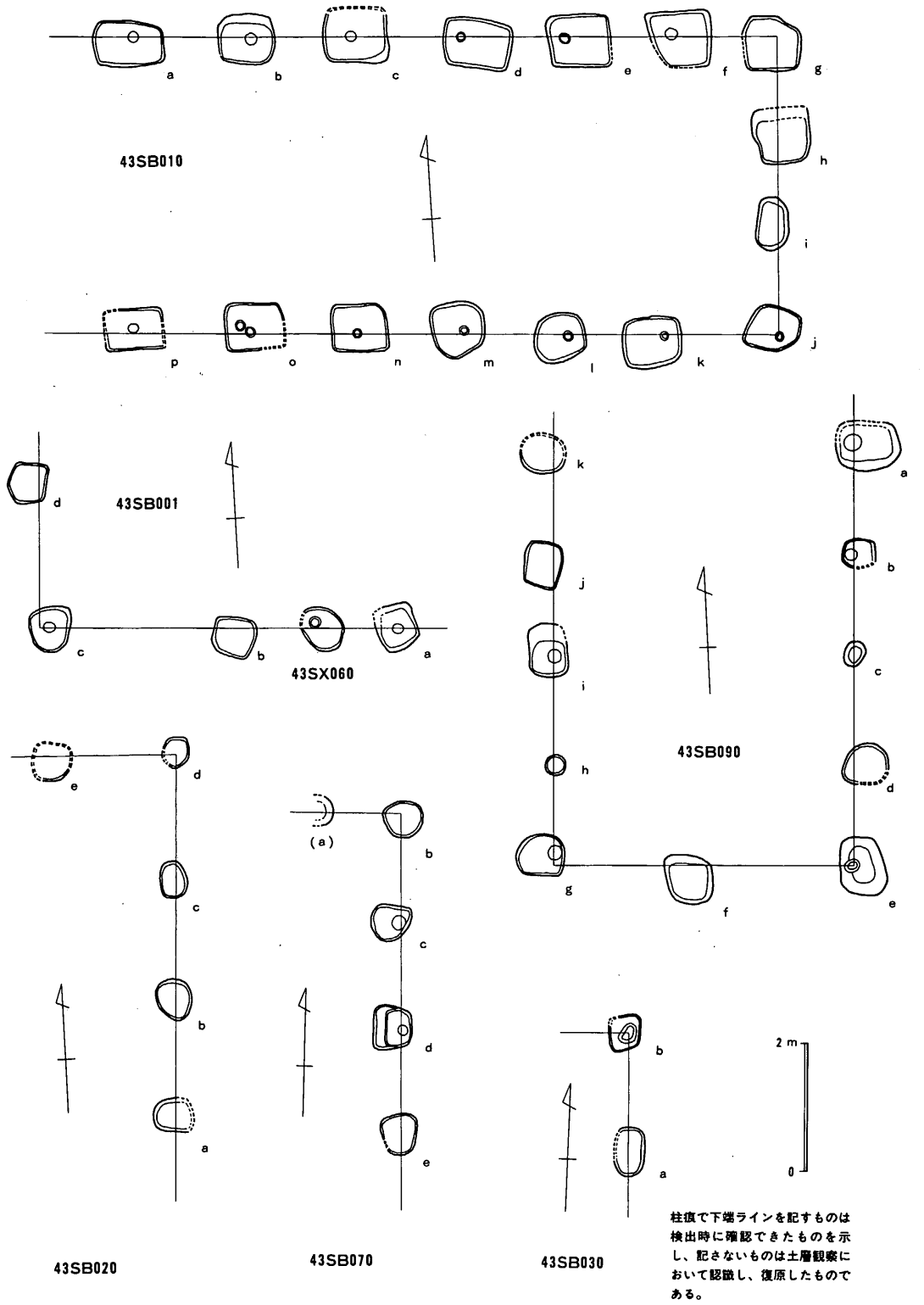


Fig. 8　43SB001・010・020・030・070・090実測図（1/100）

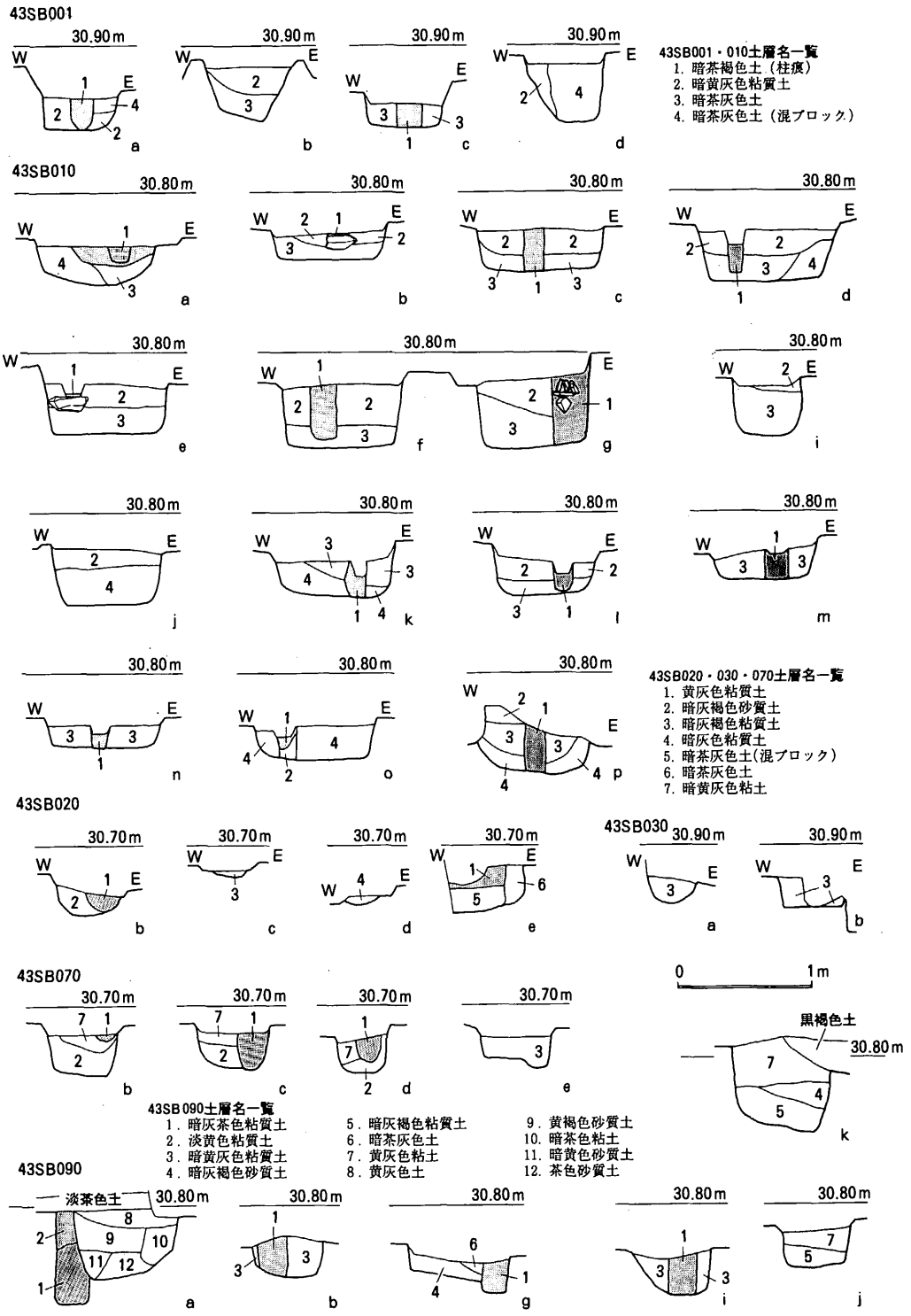


Fig. 9　43SB001・010・020・030・070・090柱掘り方土層観察図（1/50）

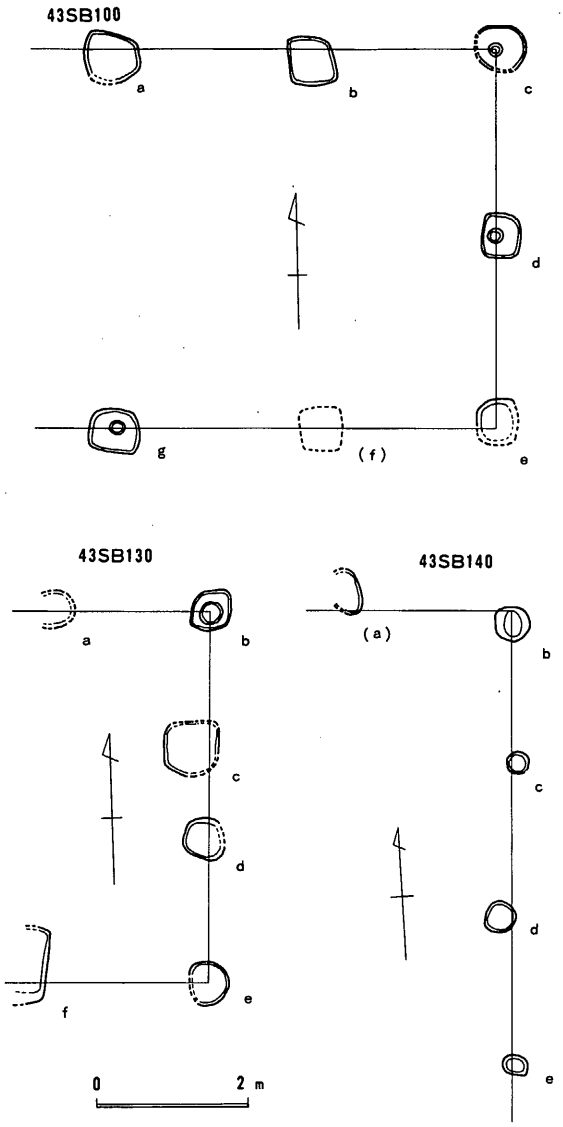


Fig.10　43SB100・130・140実測図（1/100）

は不整隅丸方形が主体であるが、不整円形や不整方形を呈するものも含まれる。掘り方の規模は一辺の長さが0.5～0.7mで、深さは0.2～0.3m程度を測る。柱痕跡はgの掘り方で確認され、径0.2mである。掘り方の一部または全部を43SK040・080に切られておりそれより先行するが、43SB130よりも新しいことが判明している。他に重複する掘立柱建物43SB140とは直接切り合っておらず、遺構上での前後関係は明らかではない。

43SB130（Fig.10、CD-043054）　南北3間（4.9m）、東西1間（2.05m）以上で南北棟の可能性がある。建物の振れはN-1°45′-Eである。柱掘り方は不整形なものが多く、長さ0.5～1.0m、深さ0.1～0.15m前後を測る。43SB100・140に先行する。

43SB140（Fig.10）　南北3間（6.0m）以上、東西方向は残念ながらその存在が確認できないが、43SE120の北にあるピット（実測図では柱掘り方aとしている）を仮に拾えば東西1間（2.2m）以上の南北棟と考えられる。建物の振れはN-3°25′-Eで他のものより振れている。柱掘り方は径0.3～0.5m、深さ0.17～0.3m

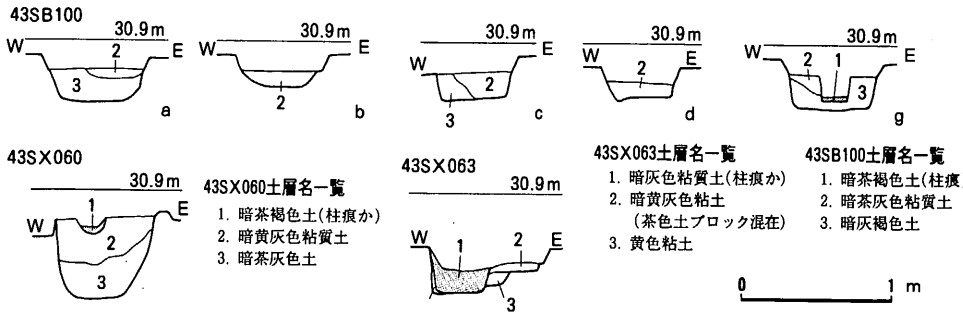


Fig.11　43SB100・43SX060・063柱掘り方土層観察図（1/50）

ですべて略円形を呈している。43SB130を切っている。

(2) 井戸

43SE035(CD-043055)　南北2.65m、東西2.43mで隅丸方形を呈する掘り方を有する。遺構面から約0.5m下がった地点で1.3×1.3mの不整形プランが検出され、これが枠の痕跡と考えられる。井戸枠自体は残存していなかったが、推定枠内の底部付近から曲物の破片が出土した。

43SE053　遺構の西半分は調査区外に延びている。南北1.2m、東西1.05m以上で方形を呈する掘り方で、深さは1.2m程度である。

43SE111　43SE132を切る井戸で、遺構の東半分は調査区外に延びている。掘り方の南北長は3.15m程度で、深さは1.55mを測る。中央に一辺0.8m程度で略方形のプランが検出され、枠の痕跡と考えられる。土層観察から枠底部の南北長は1.15m近くになるとみられる。

43SE120　遺構の西半分は調査区外に延びている。円形の掘り方を有し、南北長2.35m、深さ1.4mを測る。

43SE132　43SE111・43SK025に切られる井戸で、遺構の東半分は調査区外に延びている。掘り方の南北長は2.2m以上で、深さは1.80mを測る。土層観察の結果、底部南寄りに方形の枠が据えられていた可能性がある。

43SE148　略円形の掘り方で、径1.7m内外を測る。深さは約1.35mで、43SK040に切られ、43SK147を切っている。

43SE150　43SX050に切り込むほぼ円形の井戸で、上面での掘り方は径1.4mで深さ約1mのところで径0.75～0.9mと小さくなり、その部分の深さは0.8mを測る。

(3) 土坑

43SK015　調査区北辺で検出された土坑で、43SB010柱掘り方c・dに切られている。東西2.35m、南北1.45mで不整形なもので、深さは0.25～0.3mを測る。

43SK024　茶褐色土、暗茶色土を除去した段階で検出された土坑で、南北3.2m、東西2.5m程度を測る。形状は不整形で、深さは0.25mを測る。43SE132より新しい。

43SK025　切り合う遺構や土層が複雑で最終的な遺構図にみられる遺構は小規模であるが、検出段階及び土層の検討から南北1.5m、東西は0.5m以上を測るもので、深さは1.2mである。暗茶色土除去後に検出され、暗褐色土に切り込んでいる。また43SE132を切っている。

43SK036　暗褐色土を除去して検出された土坑で、長円形を呈し長さ3.5m、幅1.5m以上、深さ0.45m内外を測る。

43SK040　南北4.3m、東西2.1m、深さ0.35～0.6mを測る不整形な土坑である。埋土は黒褐色土で構成される。43SE148を切っている。

43SK056　長さ1.3mの土坑できわめて浅い。43SB010柱掘り方pはこの下層から検出された。

43SK079　43SE111・43SK113を切る土坑で、長さ1.45m、深さ0.6mを測る。

43SK080　遺構の北端を落ち込みで失っているが、南北に長い土坑と考えられる。長さ5.6

m、幅0.75～1.35m、深さ0.2～0.3mを測る。43SB100柱掘り方cを切っている。

43SK113　43SK079に切られ、43SE111を切る土坑で北側が徐々に浅くなる。遺構の大半は調査区外にあるが、検出長3.1m、深さ0.6mを測る。

43SK147　43SE148に切られる土坑で、深さ0.3m程度である。43SB100柱掘り方eと接しているが切り合いは不明確であった。

43SK152　調査区南東隅で検出された長方形土坑で、南北1.3m、東西1.0m、深さ0.1mを測る。43SX050に切り込む。

(4)　その他の遺構

43SX021　暗茶色土層上面から切り込むピット群である。

43SX050　竪穴遺構43SX065の上面に被るもので、黄灰色土層の下層で調査区東南隅に検出された。東西3m以上、南北6m以上の範囲を確認したが、それぞれ調査区外に延びており、堆積層の一部である可能性も考えられる。埋土は黄茶色粘土で構成される。

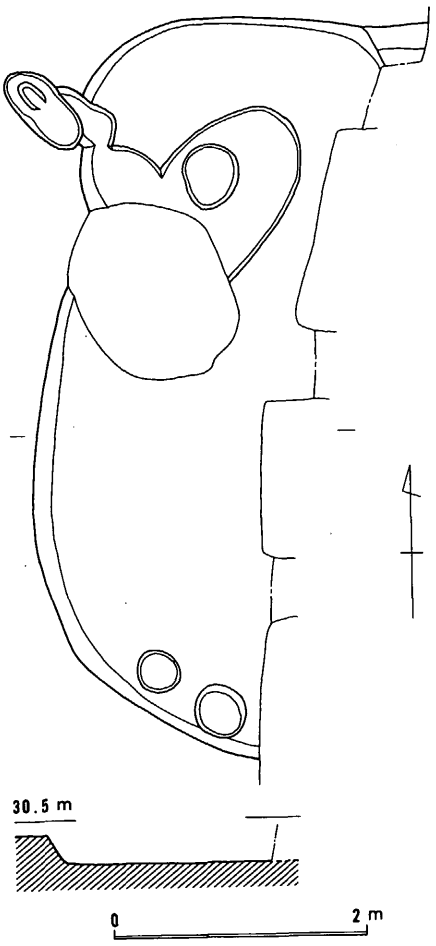


Fig.12　43SX065実測図（1/60）

43SX051　43SE035埋土上面で検出されたピットである。

43SX060 (Fig.11、CD-043056)　43SB001柱掘り方a･bの中間に存在する掘り方状遺構で、径0.7m程度の不整円形を呈している。深さは0.55mを測り、上面で柱痕跡状のものを確認しているが、底部には届いていない。

43SX063 (Fig.11)　43SB070柱掘り方b･cの中間に検出された掘り方状遺構で、やや横長で不整形な形状を呈している。深さは0.3mを測り、ピットの西に寄って存在する暗灰色粘土は柱痕跡の可能性がある。

43SX065 (Fig.12、CD-043057～061)　黄灰色土層･黄色土層及び43SX050を除去した地山面で検出された竪穴遺構である。遺構の東側は調査区外に延びているが、南北9.75m、東西4.0mで長楕円形を呈している。深さは0.25m～0.4mで、床面は一部を除いて平坦であるが中央北寄りに1個、南端に2個のピットが検出され、北寄りのピットの周囲はわずかに窪んでいる。また竪穴の北西に接するようにピットが1個確認されたが、この遺構との関連は不明である。

43SX077　43SE111・132の埋土上面に検出された不整形な窪み状遺構である。長さ3.6m、幅1.8m、深さ5cmを測る。

43SX158　径0.25m、深さ0.12mで円形を呈するピットである。

3．出土遺物

(1)　**土器・陶磁器**

43SB010出土土器（Fig.13、CD-043071～080）

土師器

坏d(1・2)　口径13.2・14.6cm、器高3.7cm、底径6.6cmを測る。外面体部下半は回転ヘラケズリののちミガキaを施す。内面は1ではヨコナデで終わるが、2はミガキaを施す。両者とも柱掘り方e出土。

大皿c(3)　口径25.0cm、器高2.5cm、高台径20.5cmを測る。内外面ともにミガキaを施すが風化が著しく不明瞭になっている。柱掘り方i出土。

須恵器

蓋a3 (4)　口径10.2cm、器高1.4cm。天井部はヘラ切りされ、簡易なナデが施される。柱掘り方i出土。

蓋c(5)　釦状で直径3.2cmの摘みが付く。天井部はヘラ切りの後ヨコナデである。柱掘り方c出土。

蓋4 (6)　口径12.4cm、現存器高0.7cmの扁平なもので、口縁部の折り曲げはなく、内面に沈線状の境を設けるにすぎない。天井部はヘラ切りののちナデである。柱掘り方o出土。

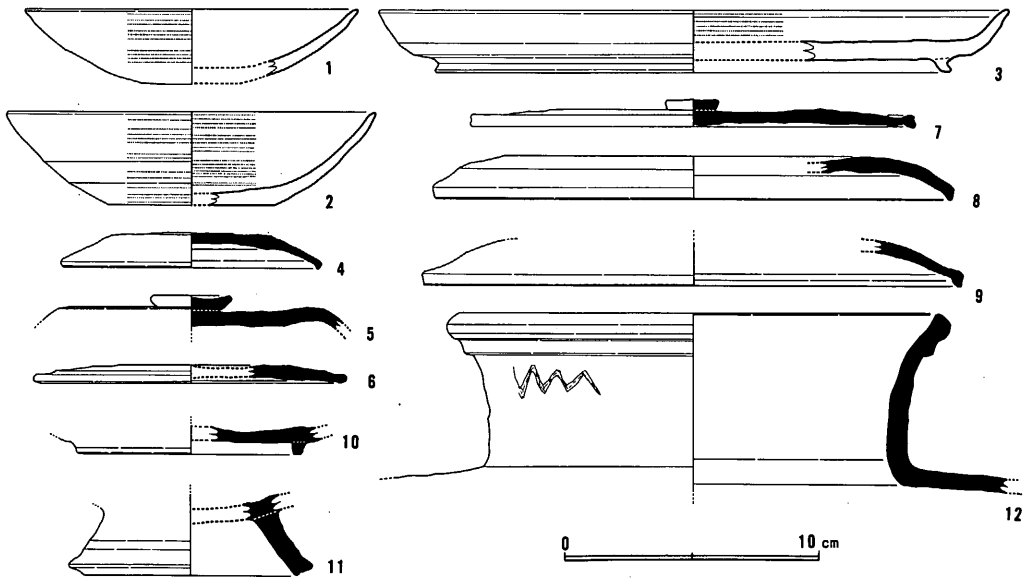


Fig.13　43SB010出土土器実測図（1/3）

蓋c3 (7)　口径17.6cm、器高1.1cmで、天井部はヘラ切りの後ナデ及び粗い指圧痕が観察される。摘みは小さな釦状を呈する。柱掘り方l出土。



Fig.14　43SB090出土土器実測図 (1/3)

蓋3 (8･9)　口径20.6･21.4cmに復原できるが小片である。両者とも柱掘り方c出土。

坏c (10)　方形を呈する高台は径9.0cm。底部はヘラ切りののちヨコナデである。

高坏 (11)　低脚の高坏あるいは台付皿とでも称する資料とみられる。柱掘り方i出土。

甕 (12)　口径19.4cm。口縁部外面に鋸歯状のヘラによる文様がある。柱掘り方i出土。

43SB090出土土器 (Fig.14、CD-043081･082)

土師器

椀 (1)　都城系の椀で底部はヘラケズリされる。外面には横方向のミガキが観察され、内面はヨコナデののち縦方向の暗文が施される。口縁端部内面にやや幅広で沈線状の窪みが巡る。

須恵器

蓋1 (2)　返りのある口縁端部で、調整はヨコナデである。接合する可能性が高い天井部片があり、それの天井部外面はヘラ切りの後粗いナデを施す。

両者とも柱掘り方i 出土。

43SE035出土土器 (Fig.15、CD-043083～111)

土師器

小皿a(1～16)　口径8.6～10.6cm、器高1.1～1.5cm、底径6.5～8.8cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

丸底坏a(17～21)　口径14.4～16.4cm、器高3.2～4.3cmを測る。底部はヘラ切りの後押し出される。内面の調整はミガキb、外面の底部と体部の境目付近には指圧痕が観察される。

鉢 (22)　口径34.1cm、器高9.5cmに復原される。平底で、口縁部に片口の一部が残存している。体部の調整は内外面ともにヨコナデである。

白磁

椀 (23～25)　23は高台径6.6cmでII類。24は高台径7.0cmで、見込みに沈線状の段が巡っている。Ⅳ-1-a類。25は口径17.2cmを測るV-1類である。

皿 (26)　口径10.1cm。見込みに小さな段が巡っている。II-1-a類。

越州窯系青磁

椀 (27)　内面は施釉され淡緑灰色に発色し、見込みに細長い目跡が残存している。外面の残存部の範囲は露胎で暗茶褐色を呈している。胎土は明茶褐色で暗褐色の小斑がみられる。II-2類。

緑釉陶器

椀 (28)　高台径6.4cm。輪高台の内側は面取りされる。釉は明黄緑色ないしは明緑白色に発

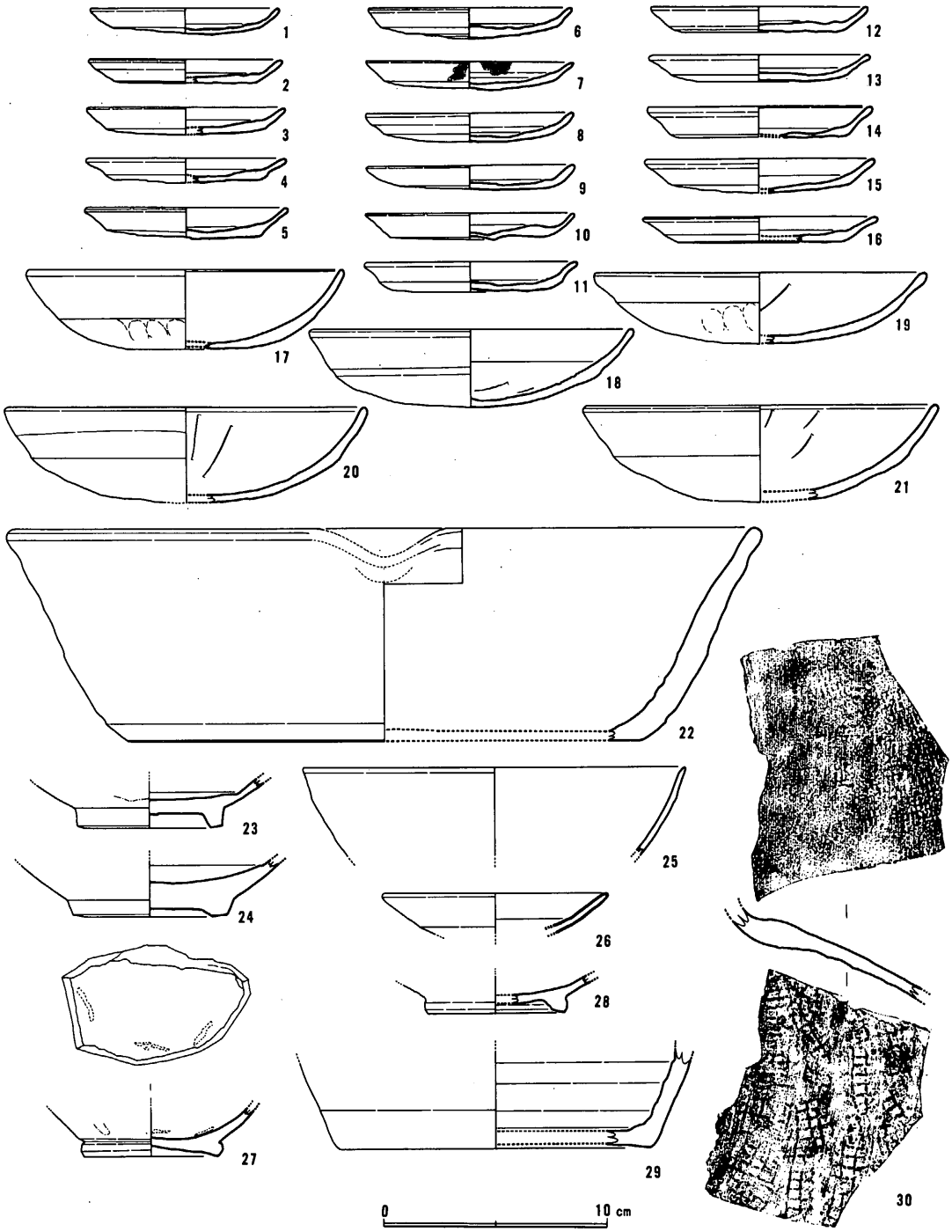


Fig.15　43SE035出土土器実測図（1/3）

色するがきわめて薄くかかる。底部外面から畳付けには施釉されない。胎土は精良で淡灰茶色を呈し、硬質に焼成される。東海産か。

朝鮮系無釉陶器

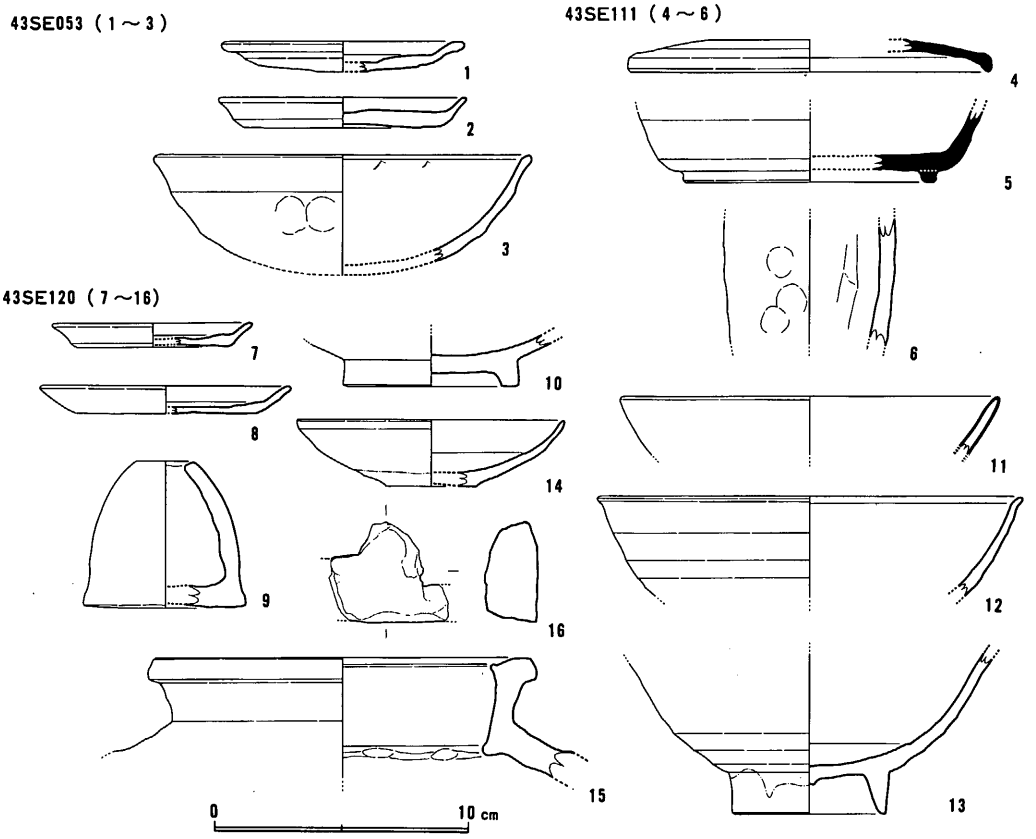


Fig.16　43SE053・111・120出土土器実測図（1/3）

壺（29・30）　29は、径14.0cmを測る平底の底部を有するが、特に調整されない。30は肩部の資料で、外面は細かな正格子の叩き痕が観察され、内面には大きめで不均一な正格子の当て具痕がみられる。いずれも最終調整のヨコナデで不明瞭になっている。なお両者とも表面は暗灰褐色を呈し、胎土は暗赤褐色できわめて硬質に焼成される。

1～5・17・19・20・21・30は埋土上位、6～10・12～14・16・18・23・25は中央部に確認された枠痕跡内、他は裏込め土と考えられる地点から出土した。

43SE053出土土器（Fig.16、CD-043112～118）

土師器

小皿a（1・2）　口径9.6・9.8cmで、底部はヘラ切りされる。

丸底坏a（3）　口径15.0cm。内面はミガキbを施す。

43SE111出土土器（Fig.16）

須恵器

蓋3（4）　口径14.4cm。天井部はヘラ切りの後粗いナデで終わる。

坏c（5）　台形で低い高台の径は10.0cmを測る。

製塩土器

壺（6）　外面は指圧痕、内面は細かな布目が観察される。

43SE120出土土器（Fig.16、CD-043119～130）

土師器

小皿ａ（7･8）　口径8.0･10.0cm。底部はヘラ切りされる。

無頸壺（9）　口径2.3cm、器高5.8cm、底径6.5cmを測る。表面は風化が進み調整不明。

白磁

椀（10～13）　10はⅡ類。高台径7.0cmとやや大振りなため鉢の可能性もある。11は口径15.0cmで、V-1類。12は口径16.8cmでV-2類。13は高台径6.1cm。高台外面上位にまで釉がかかるが他は露胎。Ⅴ類。

皿（14）　口径10.6cm、器高2.7cm、底径3.6cmを測る。明白黄色に発色する釉は内面及び体部外面に下半に施される。

陶器

壺（15）　口径15.4cm。肩部内面は淡茶色、他は暗茶褐色を呈する。硬質に焼成され、明灰色及び明茶黄色を呈する胎土は白色及び褐色の粒子を多量に含むものである。

土製品

16は砂粒を多量に含んだ胎土を有するもので、やや軟質に焼成される。生産関係資料か。

43SE132出土土器（Fig.17、CD-043131～143）

土師器

坏ａ（1）　口径12.6cm。底部はヘラ切りされ、体部の調整はヨコナデである。明赤褐色を呈している。

坏（2）　口径21.0cmに復原されるが、小片である。口縁端部を内側上方へごくわずかにつまみ出すが、ヨコナデにより甘くなっている。内面に斜め方向の暗文があるが、他の部位にヘラミガキはない。茶褐色を呈している。

皿（3）　口径16.0cm。底部はヘラ切りである。

椀（4）　口径15.8cmに復原されるが、小片である。内面に中央から放射状に広がる暗文があり、その先端に鋸歯状の暗文を施す。外面上位はヨコナデ、下位はヘラケズリを行い、その上からミガキを施す。また外面には暗赤褐色の顔料を塗布しているらしい。

短頸壺（5）　口径12.8cm。体部の調整はヨコナデである。

須恵器

蓋c3（6･7）　6は口径11.4cm。天井部はヘラ切りされるが、中央付近にヨコナデがみられ摘みがあったと考えられる。7は口径14.2cm、器高1.6cmで、扁平な釦状摘みが貼り付く。天井部の調整はヘラ切りの後粗いナデで終わる。

坏ｃ（8･9）　口径12.0･13.0cm、器高3.5･4.5cm、高台径8.0･8.6cmを測る。

皿ａ（10）　口径16.8cm、器高1.9cm、底径12.8cmを測る。底部はヘラ切りされる。

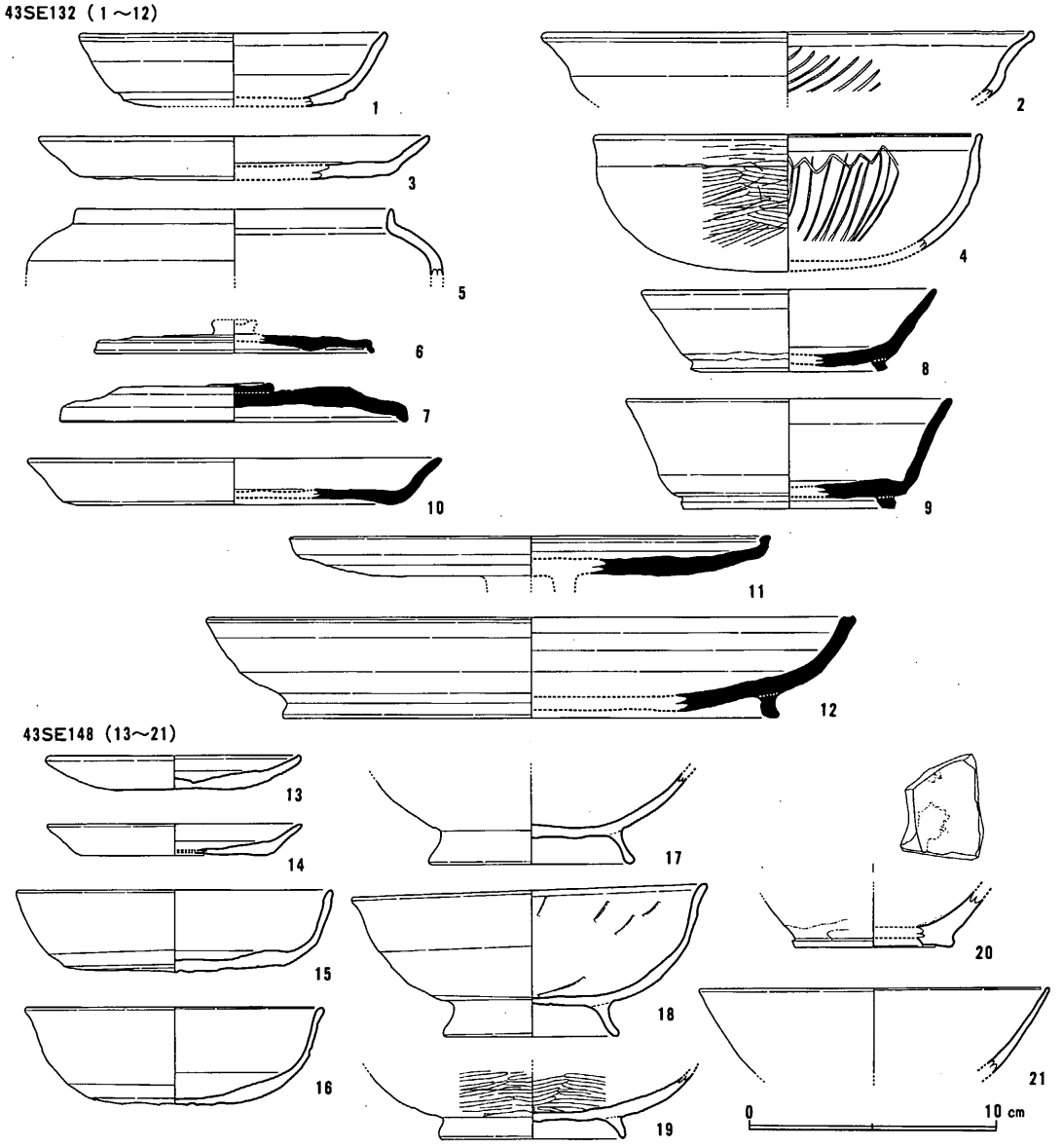


Fig.17　43SE132･148出土土器実測図（1/3）

高坏（11）　口径19.6cmに復原される。口縁部付近を除いた外面は回転ヘラケズリ調整される。

大皿ｃ（12）　口径26.4cm、器高4.1cm、底径20.2cmを測る。底部外面は回転ヘラケズリされる。

43SE148出土土器（Fig.17、CD-043144～151）

土師器

小皿ａ（13･14）　口径10.4cm、器高1.3cm、底径5.7･7.6cmを測る。底部はヘラ切りである。

坏ａ（15）　口径12.9cm、器高3.3cm、底径8.2cm。底部はヘラ切りされる。

椀ａ(16)　口径12.2cm、器高4.0cm、底径8.9cm。底部はヘラ切りされる。内面はミガキが施されたようである。

椀ｃ(17･18)　18は口径14.4cm、器高6.0cm、高台径7.2cm。内面にはミガキbが観察される。

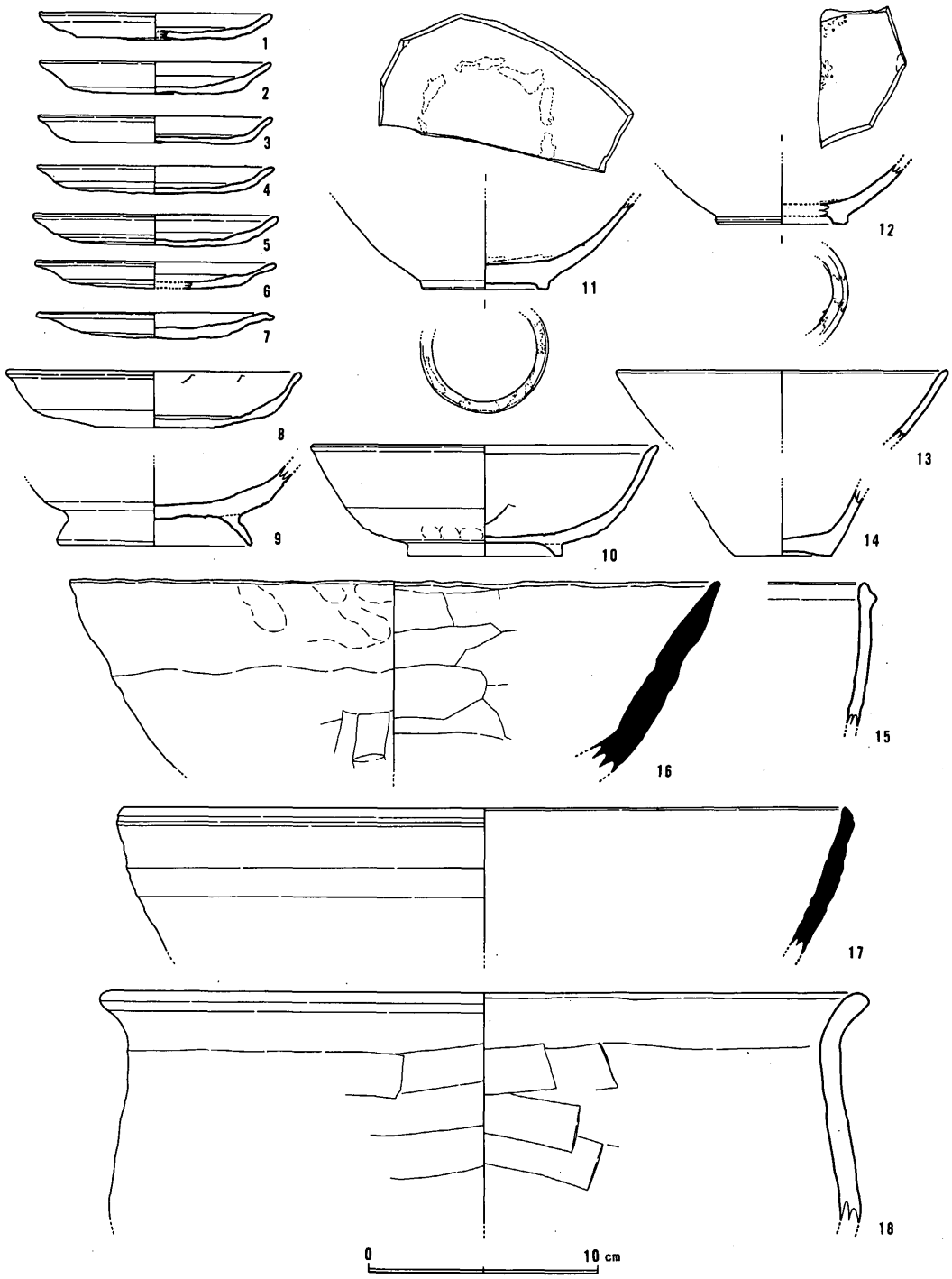


Fig.18　43SE150出土土器実測図（1/3）

黒色土器

椀ｃ(19)　B類で、高台径7.6cm。体部の内外面ともにミガキｃが施される。

越州窯系青磁

椀（20･21）　20は高台径6.6cm。釉は内面及び外面の上位に施され、淡緑灰色に発色する。見込みに目跡が観察される。II-1-b類もしくはII-2-a類。21は口径14.2cm。I-2類に分けられる。

壺（a）　肩部に小さな把手（耳）を有するもので、水注の可能性もある。釉は緑灰色に発色し光沢は鈍い。内面はヨコナデの痕跡が顕著で、胴部に差し掛かるあたりまで施釉される。

43SE150出土土器（Fig.18、CD-043152～170）

土師器

小皿ａ(1～6)　口径10.2～10.8cm、器高1.2～1.4cm、底径6.9～8.0cm。底部はヘラ切りされる。

小皿ａ2(7)　口縁端部を上方へわずかにつまみ上げるもので、口径10.5cm、器高1.1cm、底径6.5cmを測る。底部はヘラ切りされる。

丸底坏ａ(8)　口径13.0cm、器高2.5cm。底部はヘラ切りされ、内面にはミガキｂが観察される。

椀ｃ(9)　9の高台はまっすぐに外方へ踏ん張るもので、径8.6cm。10は口径15.2cm、器高4.9cm、高台径6.8cmを測る。底部はヘラ切りされる。

甕（18）　口径33.8cm。内外面とも条痕の残る強めのナデで仕上げられる。特に内面のものはハケ目を思わせる。外面の一部と内面全体に煤が付着している。

須恵器

鉢（16･17）　16は口径28.4cmに復原される。口縁端部は波打ち、外面は指圧の後粗いナデ、内面も強めのナデ仕上げとみられ、回転台の使用は認めがたい。暗灰褐色を呈している。17は東播系とみられ、口径31.7cmに復原したが資料は小片である。内外面ともにヨコナデで仕上げられる。

越州窯系青磁

椀（11～13）　11は高台径5.6cm。12は高台径5.8cm。両者とも畳付けと見込みに多数の目跡が観察される。I-2-ア類。13は口径14.6cmで、I-2類。

坏(14)　底径4.3cmで糸切りである。残存部の範囲内で外面には全く施釉されず、明茶褐色を呈している。内面にかかる釉は淡黄緑色に発色する。胎土中には黒褐色の小班が多数観察される。

鉢(15)　口縁端部を2段の玉縁状に作る。釉は全面に観察され、暗茶黄色に発色する。釉の厚く溜まる部分は黒茶色を呈している。胎土は灰褐色で白色の小混入物があるが精良である。長沙窯系の可能性も考えられる。

43SK015出土土器（Fig.19、CD-043171～185）

土師器

小皿ａ（1～7）　口径8.8～10.0cm、器高1.2～2.0cmを測る。３の底部は糸切り、他はヘラ切りである。

丸底坏ａ（8･9）　口径14.2･14.8cm、器高3.3cmを測る。底部はヘラ切りで内面にはミガキｂを施す。

黒色土器

椀ｃ（10）　Ｂ類で、高台径6.4cm。

白磁

椀（13～15）　13は口径16.0cm。見込みの段が観察されないため、Ⅳ-1-a類としておく。14は体部外面に縦方向で疎らな櫛目が入るＶ類である。15は口径14.7cmに復原されるもので、Ⅴ-2類。

皿（11･12）　11は外反する口縁部を有し、口径は12.4cmを測る。ⅡまたはⅢ類。12は口径13.0cmで、Ⅷ-1類。

朝鮮系無釉陶器

壺（16）　頸部の最小径は9.2cm。肩部と頸部の境目に小さな段がある。残存部の調整はヨコ

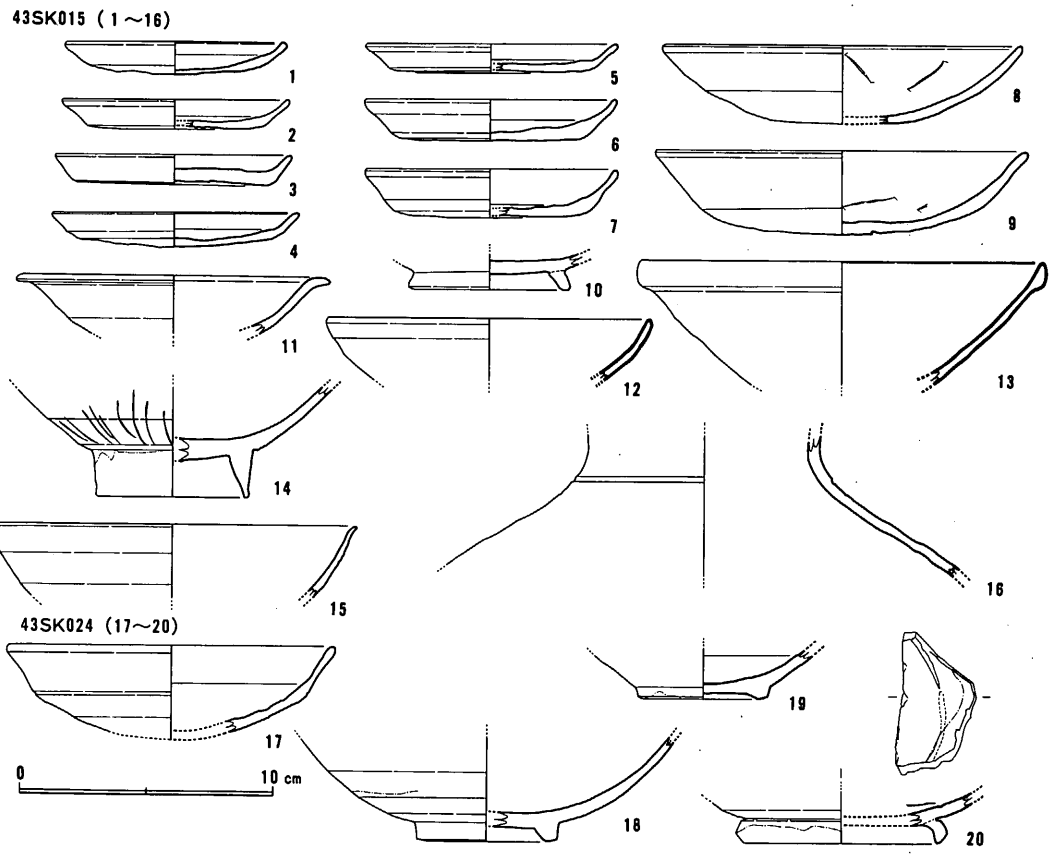


Fig.19　43SK015･024出土土器実測図（1/3）

ナデである。表面は暗灰色を呈し、胎土は暗赤褐色でわずかに白色の粒子が混じる。きわめて硬質に焼成される。

43SK024出土土器（Fig.19、CD-043186～190）

土師器

丸底坏ａ（17）　口径13.0cm。

白磁

椀（18）　高台径5.6cmで、II類である。

皿（19）　高台径5.2cm。II類。

灰釉陶器

椀（20）　三日月形高台の径は8.4cm。釉は明灰緑色に発色するが、高台部分にはかからない。見込みに重ね焼きの跡が残る。

43SK025出土土器（Fig.20、CD-043191～200）

土師器

小皿ａ（1）　口径10.0cm、器高1.8cm、底径7.9cm。底部はヘラ切りされる。

須恵器

鉢（2）　底径9.2cm。底部は糸切りされる。篠窯系。

黒色土器

椀ｃ（3）　A類で、高台径9.4cm。

白磁

椀（4～9）　4は高台径6.1cmで、見込みが大きく窪んでいる。体部内面に櫛描きの文様を施す。VII類。5は高台径7.0cmのIV-1-b類。6は高台径6.1cmのV類。7は高台径5.2cmで、内面に櫛による文様が施される。VI-1-b類。8は口径14.8cmで、IV類。9は口径16.3cm、器高5.5cm、高台径7.2cm。外面底部を除いて全面に施釉される。IV-1-a類。

鉢（10）　口縁端部を外側に強く折り曲げるもので、内面に鉄絵が描かれる。

皿（11･12）　11は口径12.0cmで、IIまたはIII類。12は底径3.4cmで、VI類。

壺（13）　底径8.3cmで、体部外面には押圧による縦の窪みが数カ所にみられ、瓜割形を呈した胴部であったことが窺える。釉は明白緑色で光沢があるが、体部外面にかかるのみで他は露胎である。

越州窯系青磁

椀（14）　高台径7.3cmで、畳付けの一部を除いて施釉される。I－2類。

43SK036出土土器（Fig.20、CD-043201･202）

白磁

椀（15）　高台径6.2cmのIV類である。

43SK040出土土器（Fig.20、CD-043203～219）

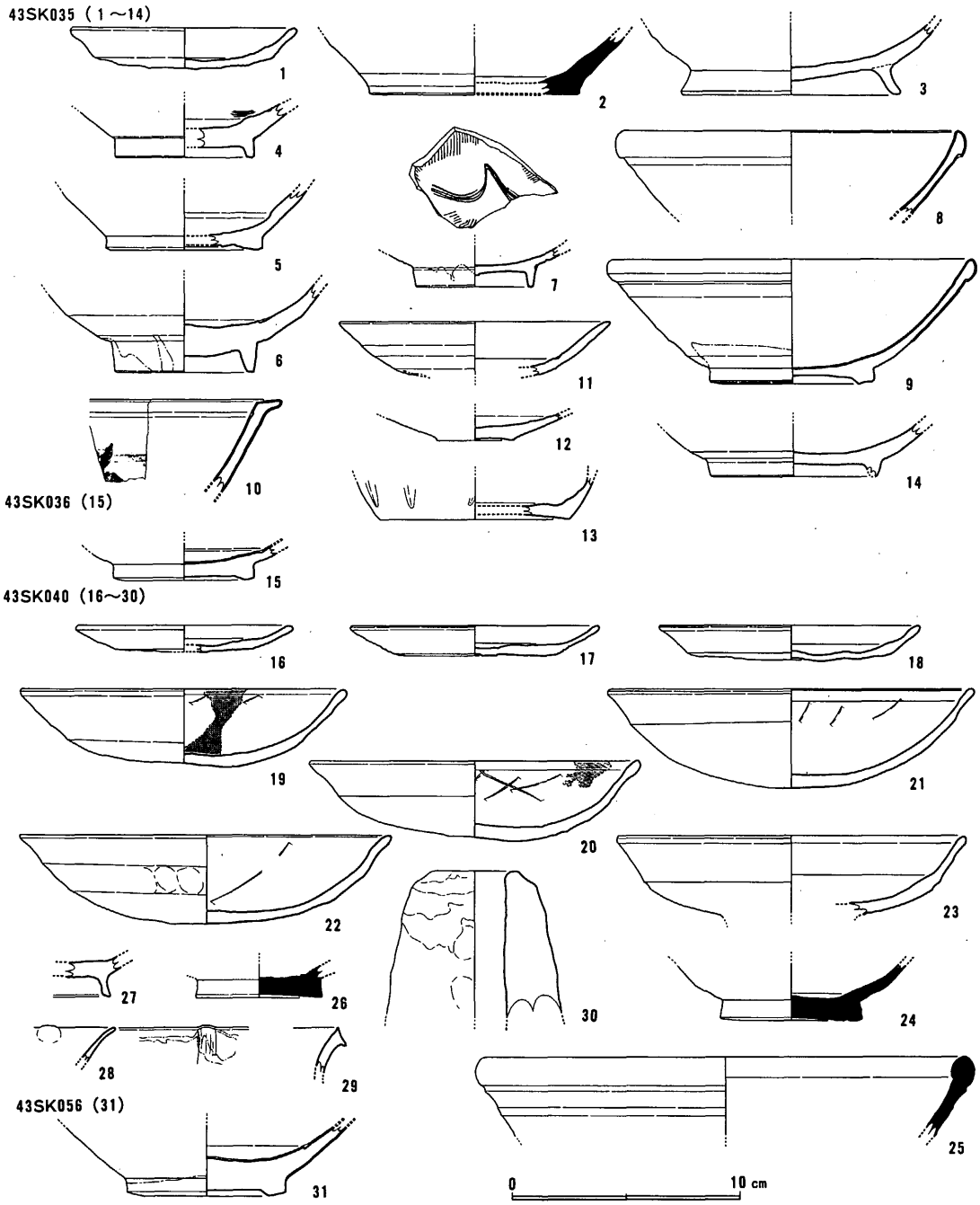


Fig.20　43SK025・036・040・056出土土器実測図（1/3）

土師器

小皿a（16～18）　口径9.6～11.6cm、器高1.2～1.5cm、底径6.0～9.0cm。底部はヘラ切りされる。

丸底坏a（19～22）　口径14.4～16.4cm、器高3.3～4.4cm。底部はヘラ切りされ、内面はミガキbが施される。

丸底坏ｃ（23）　口径15.4cm。底部には高台の存在を窺わせる部分がある。

須恵器

椀（24･26）　円盤状を呈する高台の径は6.3･5.6cmで、両者とも底部は糸切りされる。26の内面底部は螺旋状の小さな段がある。

鉢（25）　口径22.0cm。口縁端部を肥厚させ玉縁状に作る。篠窯系。

緑釉陶器

椀（27）　暗緑色に発色する釉は光沢があり、外面底部の一部を除いて全面に施釉される。硬質に焼成され、胎土は暗灰褐色を呈する。近江産か。

灰釉陶器

椀（28）　明灰色の釉が薄くかかる。口縁部に輪花を入れるが、外面にはそれに対応してヘラ状工具で縦方向にナデた形跡がある。

壺（29）　口縁部外面及び内面は明緑灰色の釉がかかる。

生産用具

鞴羽口（30）　先端部の資料で、口径3.8cm、内径2.8cm。先端部は暗灰色に変色し、白茶色の付着物が薄く付く。先端から約２cmの範囲は溶変している。

43SK056出土土器（Fig.20、CD-043220･221）

白磁

椀（31）　高台系7.0cm。Ⅳ-1-a類。

43SK080出土土器（Fig.21、CD-043222～233）

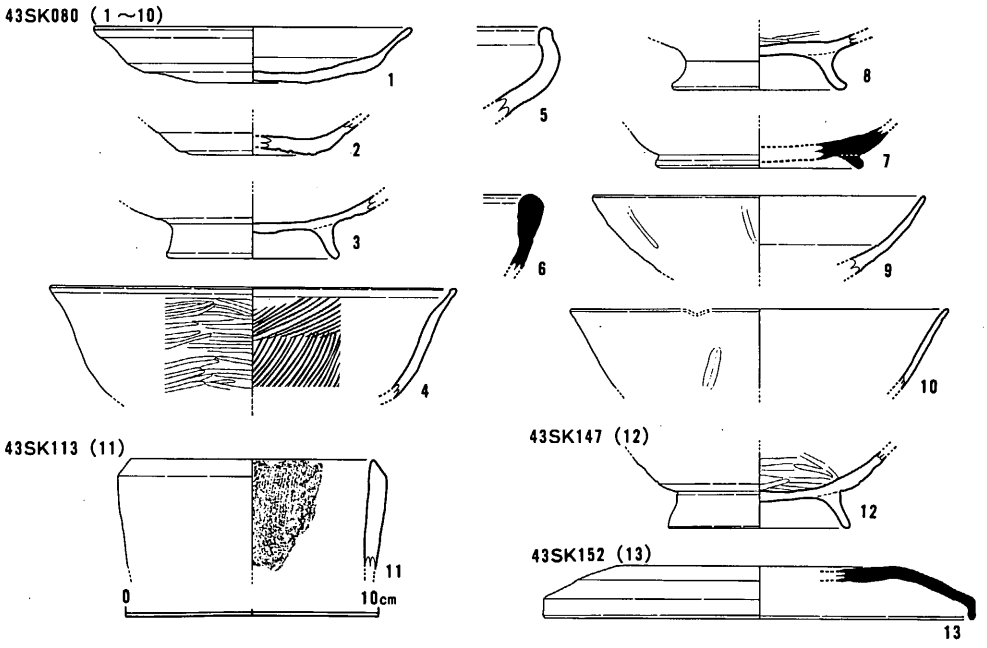


Fig.21　43SK080･113･147･152出土土器実測図（1/3）

土師器

丸底坏ａ（1）　口径12.6cm、器高2.2cmを測る。

坏（2）　底径5.0cmで、底部は糸切りされ、乳灰色を呈している。豊前産か。

椀ｃ（3）　高台径6.8cm。底部はヘラ切りされる。

椀（4）　口径16.2cmに復原されるが資料は小片である。内面に２段の暗文を施し、外面はヨコナデの後ヘラミガキを行う。

鉢（5）　内外面ともにヨコナデされる。胎土は小砂粒を若干含む。

須恵器

鉢（6）　口縁部を肥圧させるもので、篠窯系。

椀（7）　高台径8.2cm。焼成はあまく軟質である。

黒色土器

椀ｃ（8）　Ａ類で、高めの高台の径は6.9cm。内面にはミガキｃが観察される。

白磁

皿（9）　口径13.2cm。外面に縦方向の沈線が数カ所に入る。それに対応する位置の口縁部が欠損しており、輪花の存在の有無は不明である。釉は淡い緑色を帯びたような白色で、透明感があり光沢がある。Ⅺ-3類。

越州窯系青磁

椀（10）　口径15.0cmに復原される。体部中程から縦方向の沈線が押圧により付けられる。それとはわずかにずれるが、口縁端部に輪花が観察される。Ⅰ-2類。

43SK113出土土器（Fig.21、CD-043234・235）

製塩土器

壺（11）　口径9.6cm。外面は指圧痕、内面は細かな布目痕がみられる。

43SK147出土土器（Fig.21）

黒色土器

椀ｃ（12）　高台径7.2cm。Ａ類。

43SK152出土土器（Fig.21）

須恵器

蓋2（13）　口径17.0cm。端部を長めに折り返し、天井部は回転ヘラケズリを施す。

43SX021出土土器（Fig.22、CD-043236・237）

白磁

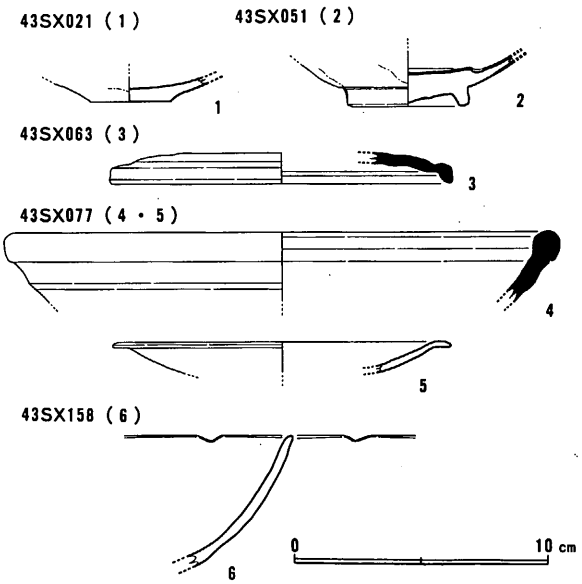


Fig.22　その他の遺構出土土器実測図（1/3）

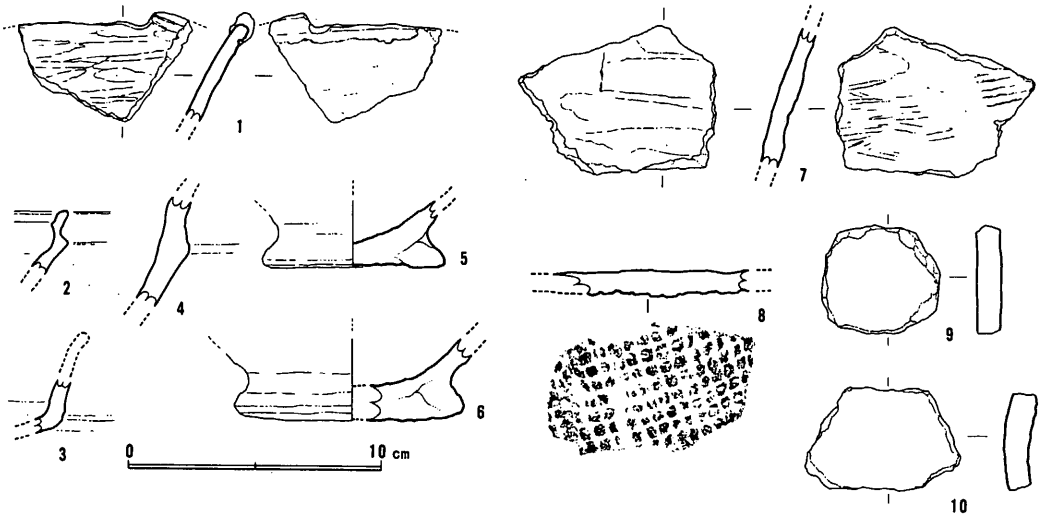


Fig.23　43SX050出土土器実測図（1/3）

皿（1）　底径3.2cmで、Ⅵ類。

43SX051出土土器（Fig.22、CD-043238･239）

白磁

皿（2）　高台径4.8cm。見込みに軽い段がある。釉は外面下半以外に施され、乳黄色に発色する。粗目の貫入が目立つ。

43SX063出土土器（Fig.22）

須恵器

蓋3（3）　口径13.6cm。天井部はヘラ切りの後粗いナデである。

43SX077出土土器（Fig.22、CD-043240～243）

須恵器

鉢（4）　口径21.0cm。口縁部を玉縁状に作る。篠窯系。

緑釉陶器

皿（5）　胎土は土師質で明緑黄色に発色する釉は薄く、剥落が著しい。

43SX158出土土器（Fig.22）

瓦器

椀（6）　表面の風化が著しく調整は明らかではない。口縁部に輪花がある。

43SX050出土土器（Fig.23、CD-043244～257）

縄文土器

鉢（1～7）　1～3は晩期後半の精製浅鉢で、1には口縁端部にリボン型の突起が付く。焼成は全体に褐色に上がっているが、1は明確に黒色化処理がなされている。4～7は粗製の深鉢で、全体に器面の残りが悪く調整は見難いが、7は内面がケズリ気味のナデが、外面にアナダラ類の貝の腹縁による条線に似たナデの痕跡を残す。土器の構成は突帯文出現期以前の組成と見なせる。

組織痕土器（8）　器形は鉢になると考えられるが、浅い網籠を型として作られた器である。内面はケズリ気味のナデが施される。図示した拓本上位左部分で編み目の変化する箇所があり、この部分で籠の側面が立ち上がっていたのかも知れない。

加工土器片（9･10）　縁辺を打ち欠いて成形している土器片で、俗にメンコと称している。

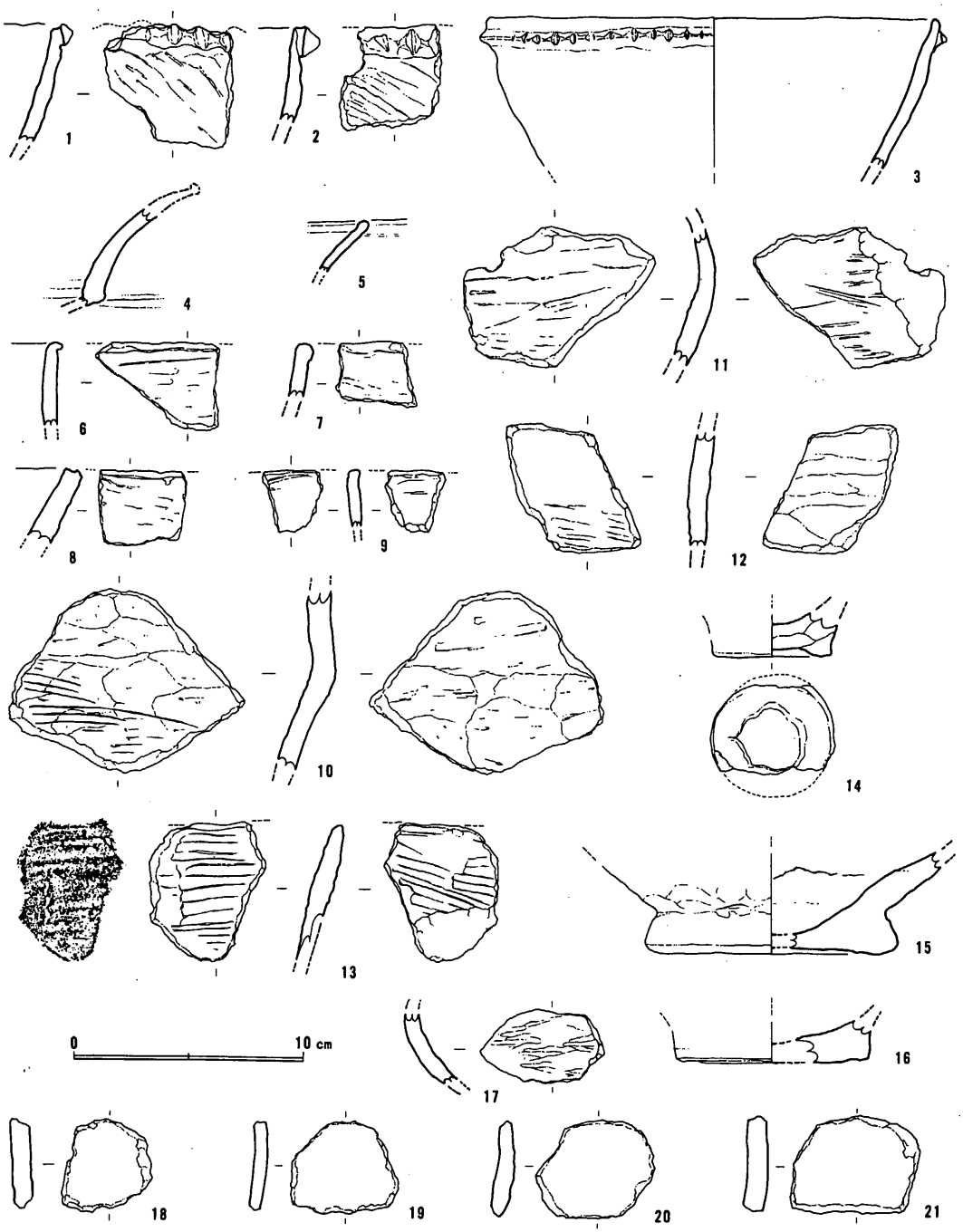


Fig.24　43SX065出土土器実測図（1/3）

9は円形を呈す。

43SX065出土土器（Fig.24、CD-043258～273）

縄文土器

鉢型土器（１～16）　1～3は刻目突帯を持つが、体部のプロポーションなどは夜臼系譜のものとは異なるもので、１と２は端部外面に粘土紐を貼り足した突帯に深めの刻みが施され、体部外面はケズリ気味にナデが入る。内面はナデにより平滑になる。３は口縁端部からやや下がった所に細目の突帯が付けられ深くて幅が狭い刻みが施され、器面の調整には内外面ともに平滑なナデが採用されている。この資料のみ胎土中に大きな砂粒を含んでいない。突帯や体部の形状から瀬戸内地域との関連が考えられる。４と５は朝顔型に口縁が開く精製の浅鉢、ほかは粗製の深鉢と考えられる。全体に白濁色の砂粒が多く配合された粗い土が用いられ、口縁端部は外に張り出す傾向が認められる。10～13も粗製深鉢と考えられ、体部にアナダラ風条痕が見られる。10は外面屈曲部上位が二次的被熱により褐色化している。12は外面に赤色顔料がうっすら残存している。14～16は粗製鉢の底部で14は粘土紐が輪高台状に残され、15は周縁が張り

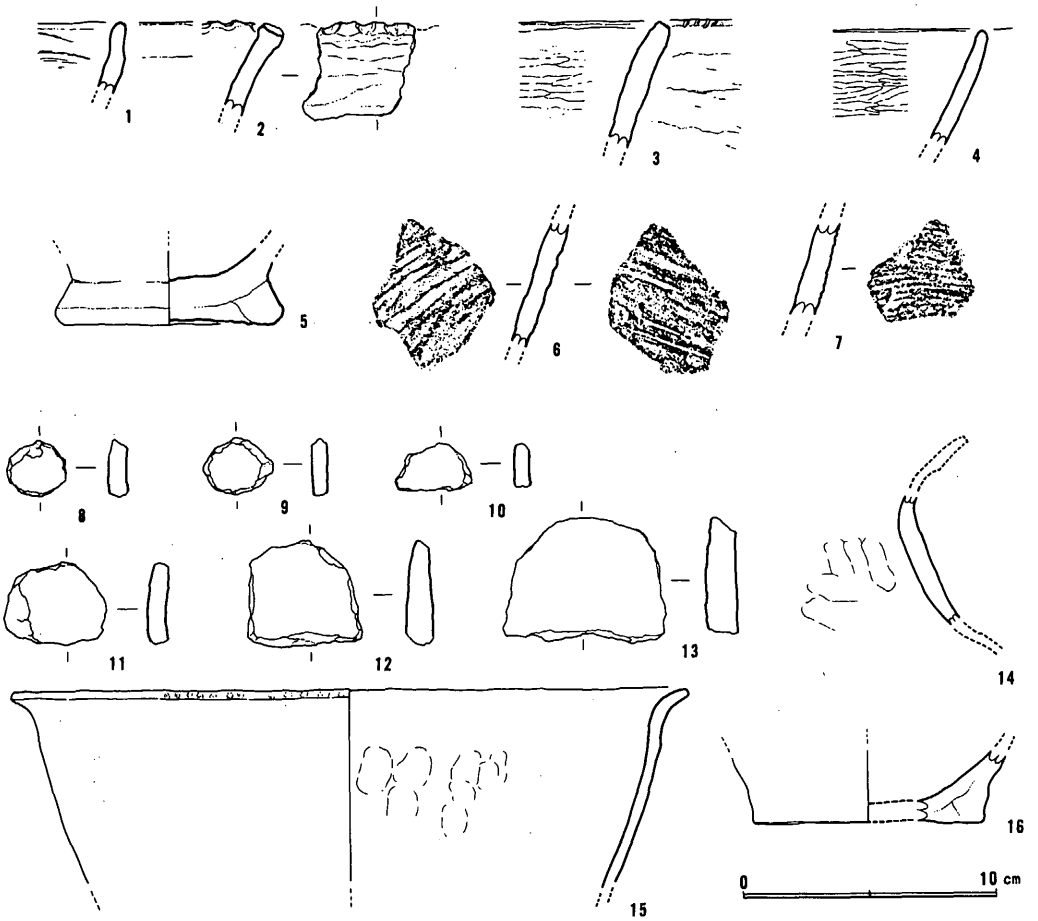


Fig.25　黄色土層出土土器実測図（1/3）

出している。焼成の状況は大半のものが外面が灰褐色、内面や胎土芯が黒色を呈す。

壺型土器（17）　内面はナデ、外面は横方向のミガキが施される。外面に赤色顔料が残存している。焼成は外面が灰褐色、内面や胎土芯が黒色を呈す。

加工土器片(18～21)　縁辺を打ち欠いて成形している土器片で、俗にメンコと称している。18･19は半円形を呈す。

黄色土層出土土器

(Fig.25、CD-043274～285)

縄文土器

鉢型土器（1～7）

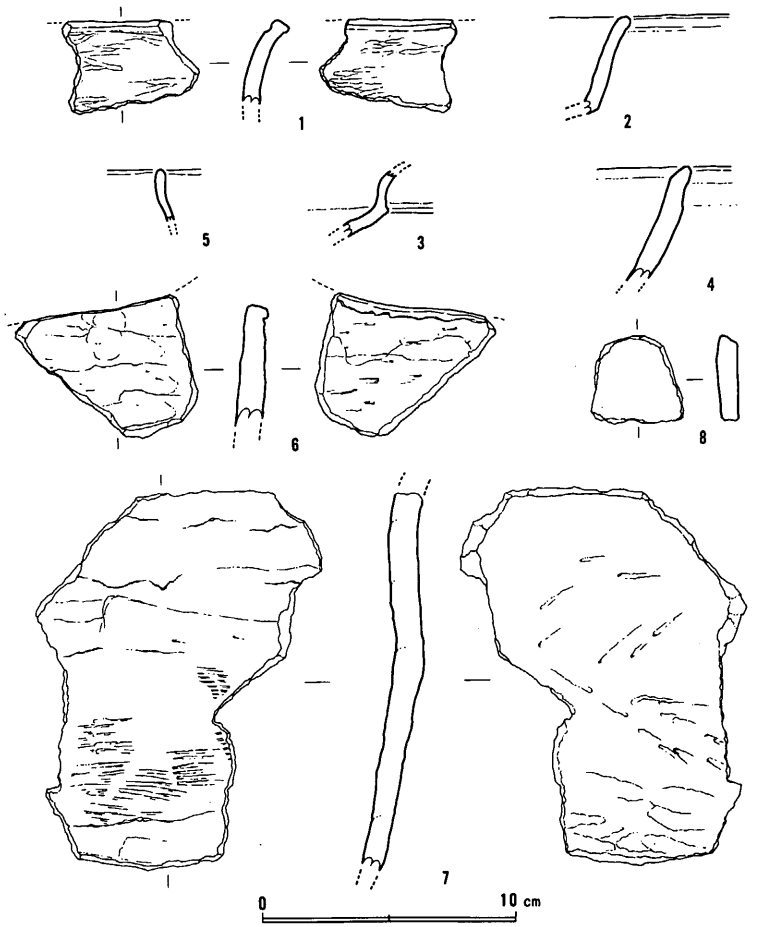


Fig.26　黄灰色土層出土土器実測図（1/3）

1・2・5・6・7は粗製深鉢、3は精製深鉢、4は精製浅鉢と考えられる。2は外反する口縁の上面に先の丸い棒状の工具で押したような刻みを持つ。3の上端部にも幅の狭い刻みが施される。調整は6と7の外面にアナダラ風条痕が見られる。3と4には内面横方向にミガキが施される。焼成は大半のものが外面が灰褐色、内面や胎土芯が黒色を呈す。7のみは外面が淡橘色を呈す。2は夜臼式の突帯文期に属すが、他はそれに若干遡る時期の所産と考えている。

加工土器片（8～13）　縁辺を打ち欠いて成形している土器片で、俗にメンコと称している。8・9は円形、他は半円形を呈す。

弥生土器

壺（14）　板付式壺の頸部と考えているが、焼成は内面が黒色化しているので夜臼式段階のものの可能性もある。

甕(15･16)　全体に器壁が薄く如意状に開く口縁の端部に刻目が入る板付式の甕。明るい肌色を呈し砂粒を多く含む胎土を持つ。16はその底部と見られ、外面が二次的な被熱により赤色化している。

黄灰色土層出土土器（Fig.26、CD-043286～289）

縄文土器

鉢型土器（１～７）　１～３は精製浅鉢で４の精粗は不明。１と３は焼成時に黒色化処理される。２は43SX050の３に類する。６と７は粗製の深鉢で同一個体の可能性があり、内外面に幅の広いケズリ気味のナデが見られるが、７の内面下位にアナダラ風条痕が見られる。

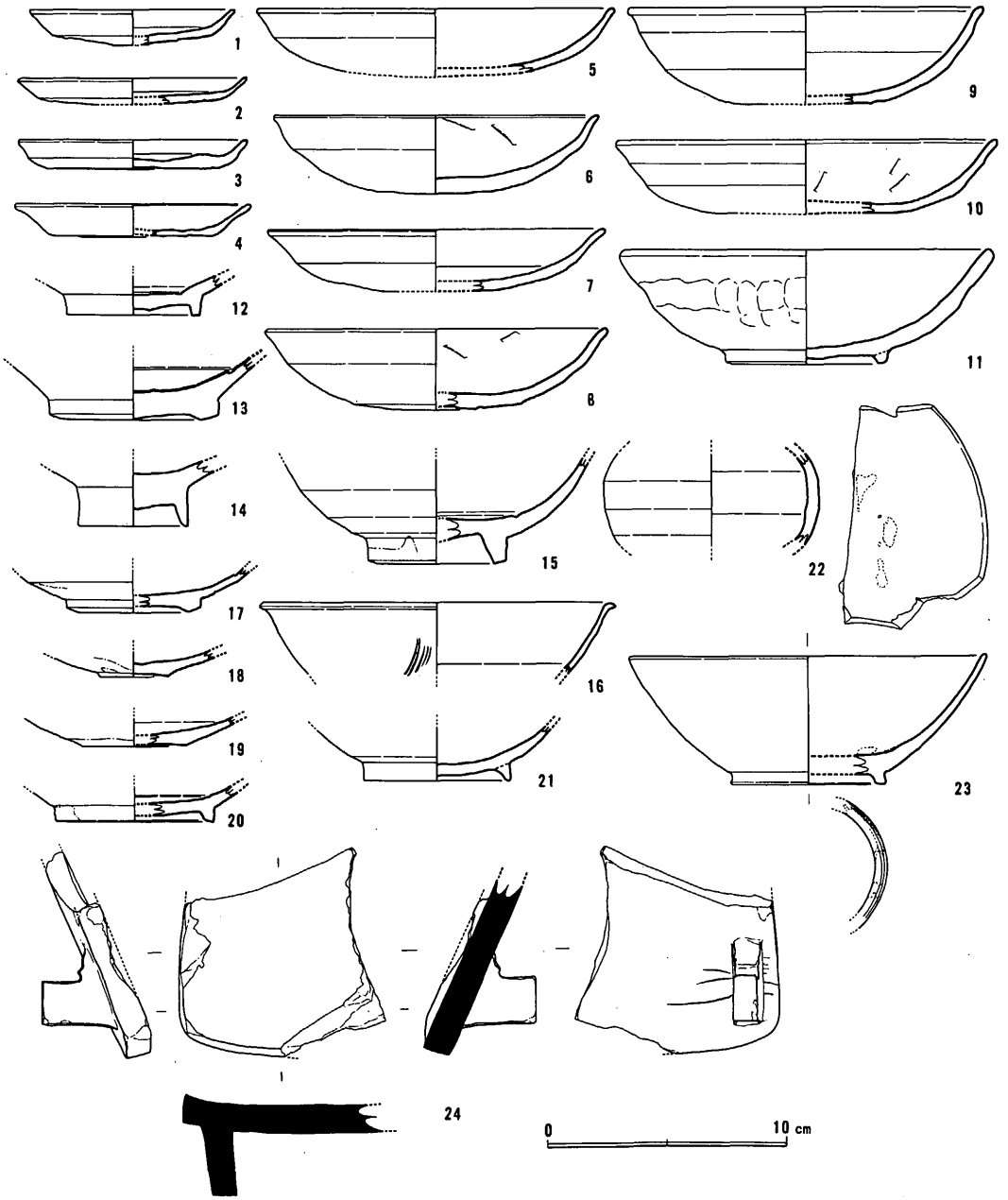


Fig.27　暗褐色土層出土土器実測図（1/3）

加工土器片（8）　縁辺を打ち欠いて成形している土器片で、半円形を呈す。

暗褐色土層出土土器（Fig.27、CD-043290～311）

土師器

小皿ａ（1～4）　口径8.6～10.0cm、器高1.1～1.5cm、底径6.5～8.0cmを測る。底部はすべてヘラ切りである。

丸底坏ａ（5～10）　口径13.0～16.0cm、器高2.6～4.0cm。底部はヘラ切りされ、6･8･10の内面にミガキｂの痕跡が認められる。

須恵器

風字硯（24）　末端隅部の破片である。表面は使用による磨耗が顕著である。明灰色、暗灰色を呈し、焼成は良好である。

瓦器

椀ｃ(11)　口径15.7cm、器高4.8cm、高台径6.8cmを測る。外面に指圧痕が明瞭に残るが、表面が風化しミガキの有無は確認できない。

白磁

椀（12～16）　12は高台径5.6cmで、Ⅶまたは Ⅷ類。見込みに大きめの段がある。13は高台径7.1cmでⅣ-1-a類。14･15は高台径4.6･5.8cmのⅤ類。16は外面に櫛による文様を施すV-3-b類。

皿（17～19）　17は高台径5.6cmでⅡ類。18は高台径2.9cmでⅣ類。19は高台径4.3cmでⅥ類。

香炉(a)　蓋とみられる資料の小片で、菱形もしくは水滴形の透かしがある。透かしはヘラ状の工具を使って一つづつ開けられているようである。釉は外面にかけられ（一部内面に回り込む部分あり）、乳白色で光沢がある。

越州窯系青磁

椀（23）　口径15.0cm、器高5.4cm、高台径6.5cmを測る。見込み及び畳付けに目跡が観察される。暗茶緑色に発色する釉は光沢があり、全面に施される。

緑釉陶器

椀（20･21）　20は高台径6.6cmで削りだし高台。釉は淡緑灰色で鈍い光沢がある。硬質に焼成され、淡茶灰色を呈している。21は高台径6.2cmで貼付高台である。釉は畳付けを除くほぼ全面に施され、暗灰緑色、明緑黄色を呈し、一部銀化する部分がある。焼成は軟質で土師質である。

灰釉陶器

壺（22）　胴部最大径9.0cmを測る。外面には明緑灰色の釉がかかる。

淡茶色土層出土土器（Fig.28、CD-043312～321）

土師器

小皿ａ（1）　口径10.2cm、器高1.2cm、底径7.2cm。底部はヘラ切りされる。

須恵器

鉢(2)　口縁部を肥厚させるもので、篠窯系。

白磁

椀（3～8）　3は口縁部を薄い玉縁状にするもので、釉は乳白色に発色する。XI-1類。4は高台径5.7cmで、II類。5は高台径6.5cmで、IV-1類。6は高台径7.0cmで、IV-1-a類。7は見込みに大きめの段を有するもので、IV-1-a類。8は高台径6.1cmで、V類。

越州窯系青磁

椀(9)　やや高めの高台の径は6.3cm。ほぼ全面に施釉され、釉は淡緑灰色に発色する。胎土は淡茶灰色で精良なものである。外面底部に目跡が観察される。III類。

灰釉陶器

椀（10）　高めの高台の径は8.4cm。内面の見込み以外の部分にわずかに釉が残り、明緑灰色に発色している。胎土は精良だが白色粒子が若干含まれる。なお見込み部分は研磨されたように平滑である。

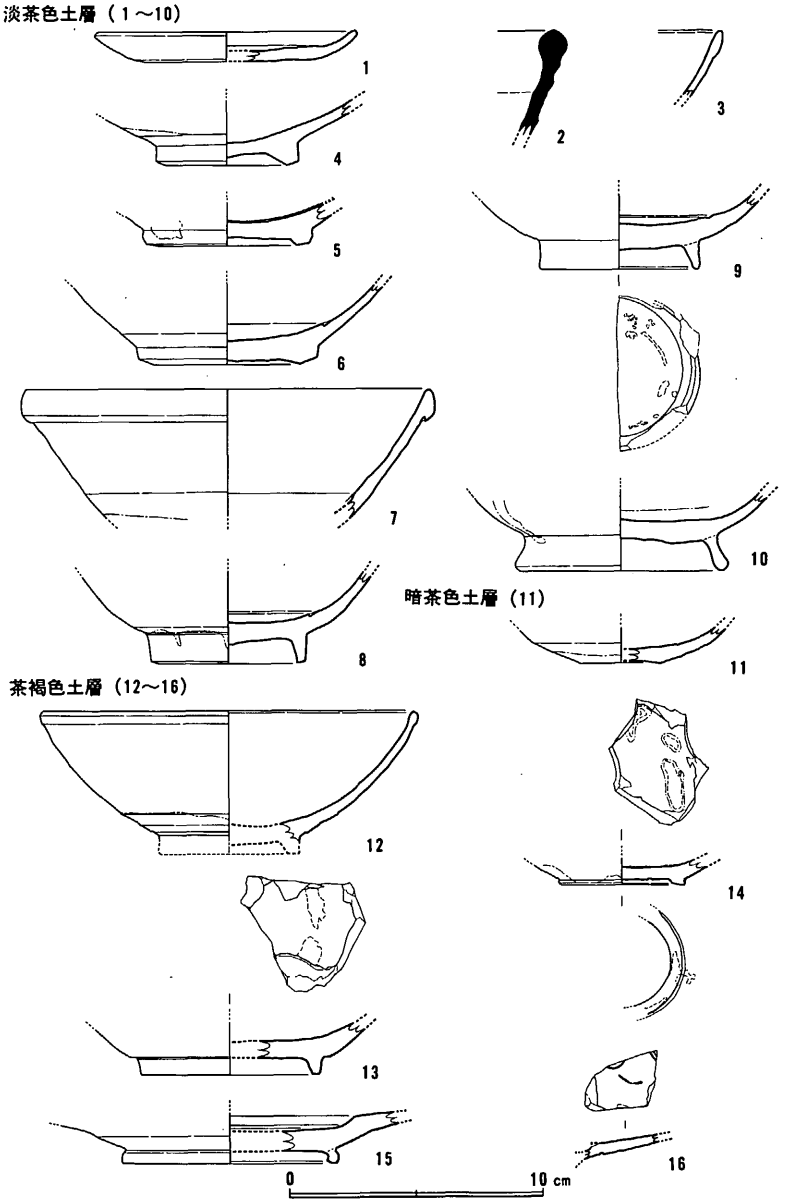


Fig.28　淡茶色土層・暗茶色土層・茶褐色土層出土土器実測図（1/3）

暗茶色土層出土土器（Fig.28、CD-043322・323）

白磁

皿（11）　底径3.2cmで、VI-1-a類。

茶褐色土層出土土器（Fig.28、CD-043324～333）

白磁

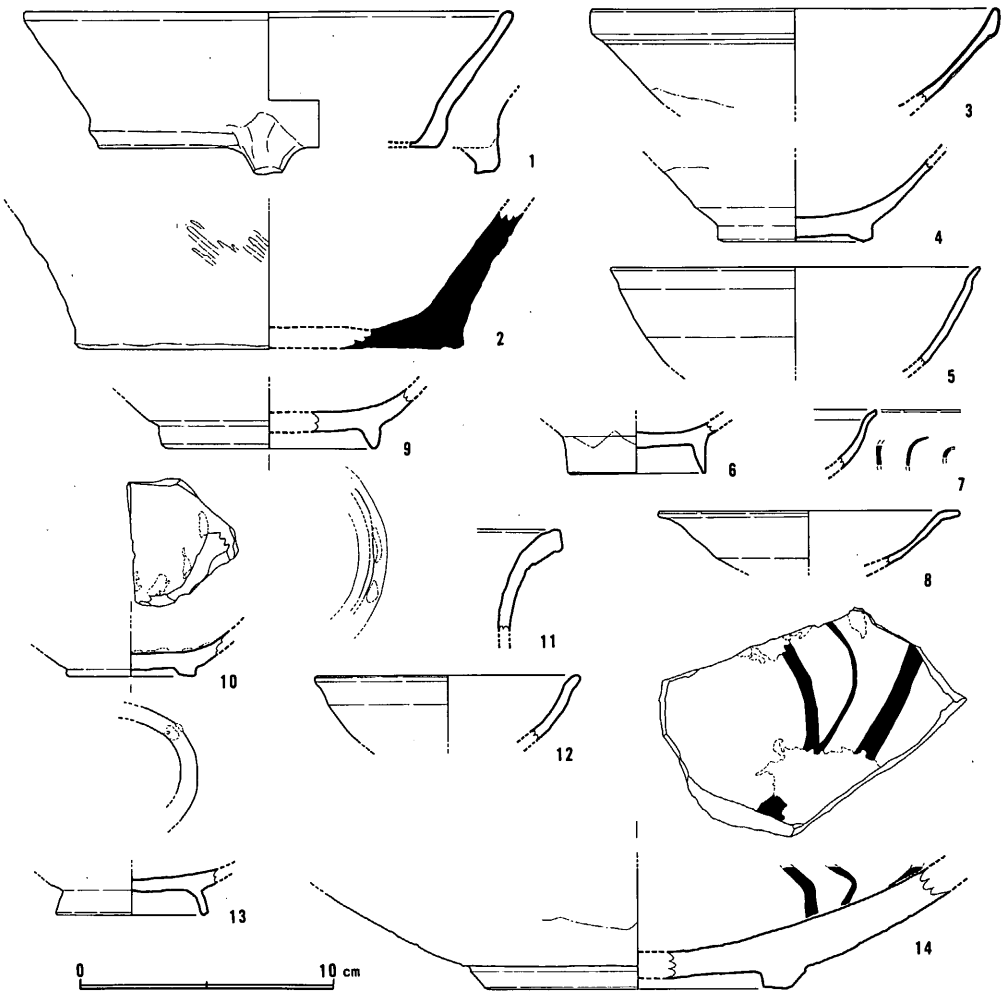


Fig.29　整地土層出土土器実測図（1/3）

椀（12）　口径15.0cmで、口縁部は小さな玉縁状に作る。体部下半には施釉されない。

越州窯系青磁

椀（13）　高台径7.2cm。畳付けに釉はなく、見込みには幅広で横長の目跡が残る。釉は明緑灰色に発色し、鈍い光沢がある。

小椀（14）　高台径5.0cm。見込み及び高台の外側に目跡が残る。

緑釉陶器

段皿（16）　内面に細いヘラ状工具による文様があり、外面には沈線が1条巡る。明黄緑色に発色する釉は光沢がある。

灰釉陶器

段皿（15）　小さな断面角形に近い高台を有するもので、外面には施釉されない。内面の釉は明緑灰色に発色する。高台径8.6cm。

整地土層出土土器（Fig.29、CD-043334～349）

土師器

脚付鉢（1）　口径19.4cm、器高6.5cm、底径13.4cmを測る。底部と体部の境目のおそらく3箇所に低い脚を貼り付ける。表面は風化し、調整不明。

須恵器

甕（2）　底径15.4cm。外面には平行叩き目が残る。底部外面は未調整、内面は強いナデである。

白磁

椀（3～7）　3は口径16.0cmで、Ⅳ類。4は底径6.2cmで、残存部の外面はほとんどが露胎である。内面の釉は暗乳白色に発色し、貫入が目立つ。Ⅳ-1類。5は口径14.7cmで、V-2類。6は高台径5.6cmで、V類。7は体部上位で屈曲させ外反する口縁を有する資料で、明乳灰色に発色する釉は光沢があり、透明感がある。外面にヘラによる文様が施される。Ⅻ-1-b類。

皿（8）　口径12.0cm。IIもしくはIII類。

越州窯系青磁

椀（9）　高台径8.6cm。畳付けは露胎で褐色に変色し、部分的に目跡が観察される。釉は淡緑灰色を呈する。I-2類。

小椀（10）　高台径5.2cm。見込み及び畳付けに目跡が残る。釉は全面に施釉されていたとみられ、明緑灰色に発色し、光沢はない。

高麗青磁

椀（12）　口径10.6cm。暗緑灰色に発色する釉は、残存部の全面に認められ鈍い光沢がある。胎土は淡灰色で明茶白色の小粒を若干含んでおりやや粗めである。III-2類。

朝鮮系無釉陶器

壺（11）　口縁部の資料で、調整は強めのヨコナデである。表面は暗灰色を呈するが、胎土は明茶褐色を呈する。

緑釉陶器

椀（13）　高台径6.1cm。土師質で表面（特に外面）の風化が著しい。釉は暗緑色に発色するが斑があり、銀化している部分もある。長門産とみられる。

陶器

盤（14）　高台径12.2cm。外面の大半は露胎で、暗茶灰色を呈している。内面は淡灰緑色に発色する釉がかかり、鉄絵風の文様がある。文様は見込みにある大

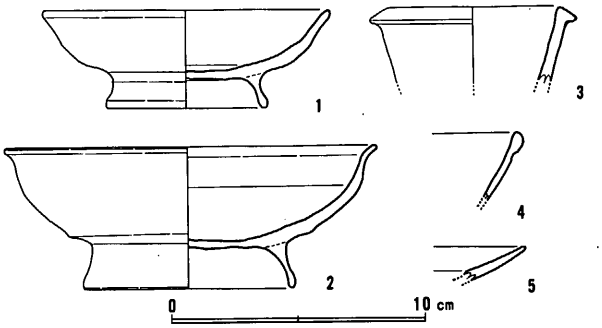


Fig.30　表土出土土器実測図（1/3）

きな目跡で隠され、不明瞭である。胎土中には小砂粒を多く含む。近世か。

表土層出土土器（Fig.30、CD-043350～353）

土師器

椀ｃ（1）　口径11.4cm、器高3.9cm、高台径6.4cmを測る。

大椀ｃ（2）　口径14.8cm、器高5.6cm、高台径8.4cmを測る。内面は強めのナデで仕上げる。

白磁

椀（4）　口縁部を折り曲げによってやや幅広の玉縁状に作るもので、釉は明乳白色に発色する。XI-1類。

越州窯系青磁

壺（3）　口径8.2cm。口縁端部を外側へ強くつまみ出し、三角形を呈する。釉は残存部の全面に観察され、暗緑白色に発色し小さな貫入がある。Ⅰもしくは Ⅲ類。

灰釉陶器

段皿（5）　釉は内面全体と外面は口縁部付近に施され、明緑灰色に発色する。

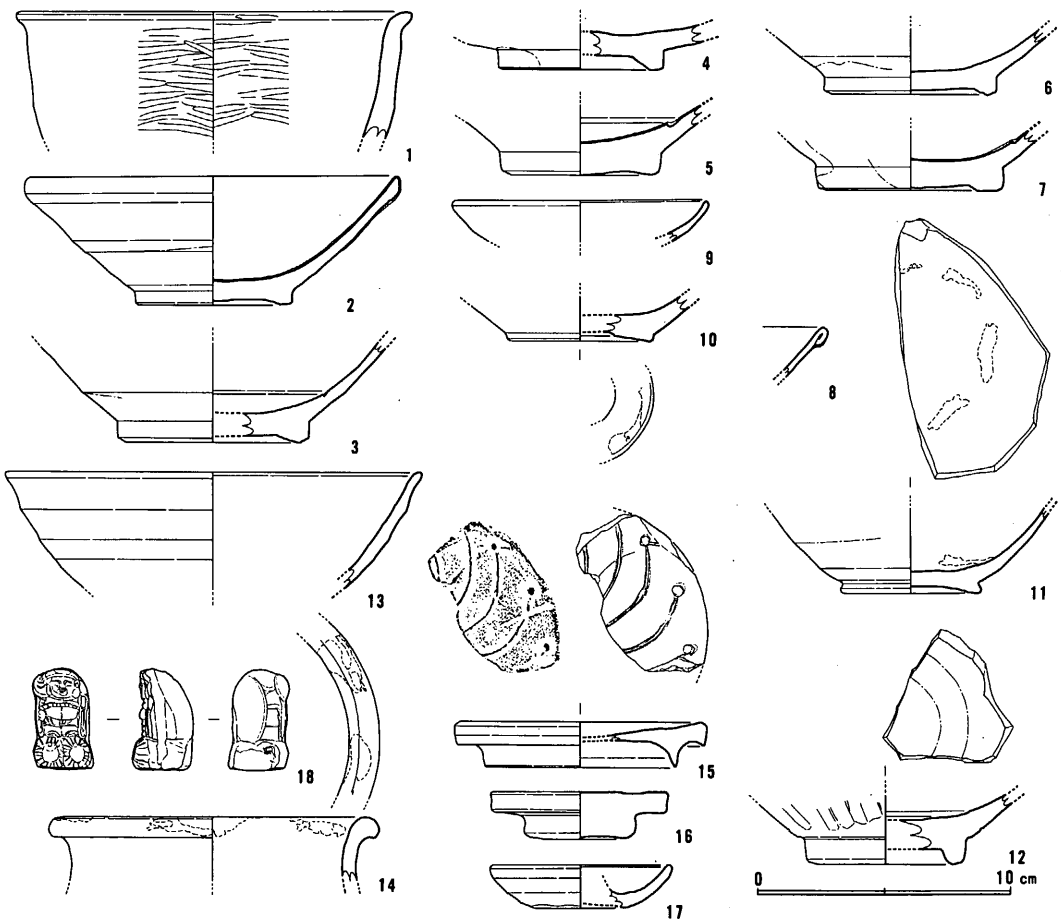


Fig.31　その他の出土土器実測図（1/3）

その他の出土土器（Fig.31、CD-043354～371）

黒色土器

鉢（1）　口径15.6cmに復原されるが、小片である。内外面ともにヘラミガキが施される。B類か。出土地点不詳。

白磁

椀（2～8）　2はⅣ-1類で、口径15.0cm、器高5.1cm、高台径6.2cmを測る。体部外面下半には施釉されない。撹乱出土。3・5・7は高台径7.5・6.2・7.3cm。見込みに沈線状の小さな段がある。Ⅳ-1-a類。3・7は拡張区、5は排土中採集。4は高台径6.6cmで、Ⅱ類。拡張区採集。6は高台径6.9cm。Ⅳ-1類。排土中採集。8は口縁部を折り曲げて玉縁状にするもので、Ⅺ類。撹乱出土。

皿（9）　口径10.2cmで、Ⅷ-1類。遺構面上出土。

越州窯系青磁

椀（10・11）　10は、高台径5.6cm。釉は淡緑灰色に発色するが、外面体部下半には施されない。見込みには横長の目跡が残り、底部にもそれらしきものが観察されるが不明確である。Ⅱ-2類。S-144出土。11は蛇の目高台で、径6.8cm。畳付けに目跡が見られる。井戸東側土坑から出土した記録があるが、残念ながらどの土坑かを特定できない。

同安窯系青磁

椀（12）　高台径6.3cm。外面にヘラによる縦方向の文様を施すが、下半には施釉されない。見込みは幅約1.1cmで円形に釉を掻き取っている。釉は淡黄灰色に発色する。出土地点不詳。

灰釉陶器

椀（13）　口径16.5cmに復原されるが小片である。残存部の全面に施釉され、明緑灰色で透明感のある釉がかかる。拡張区採集。

瓦質土器

蓋（15）　表面の文様はスタンプによるもので、表面は調整されていない。内面はヨコナデである。S-144出土

陶器

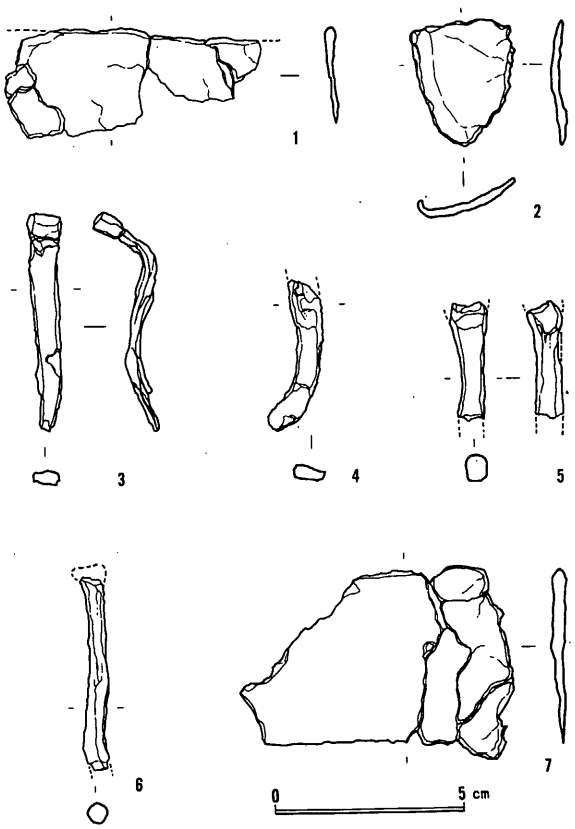


Fig.32　第43次調査出土鉄製品実測図（1/2）

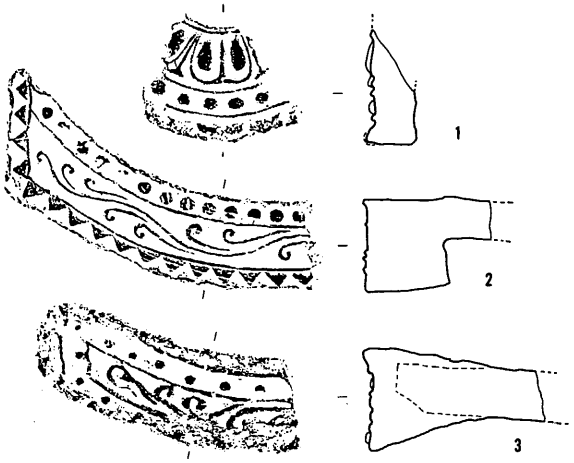


Fig.33　第43次調査出土軒瓦実測図・拓影（1/4）

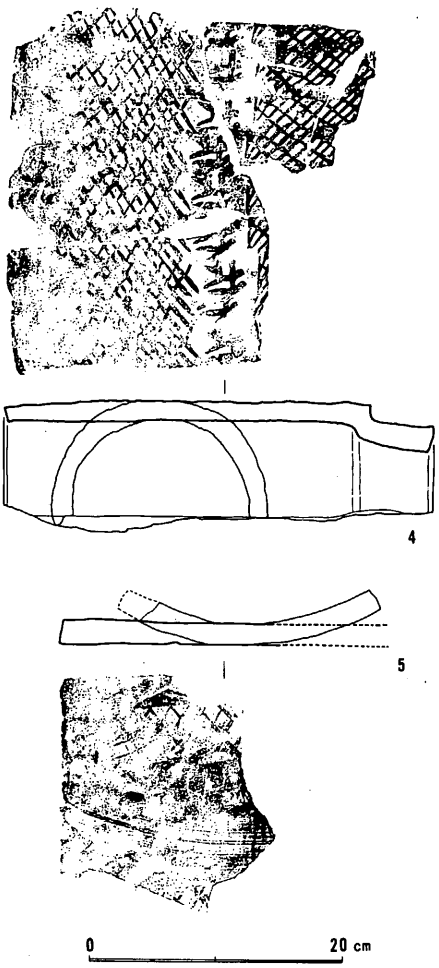


Fig.34　第43次調査出土
丸・平瓦実測図・拓影（1/6）

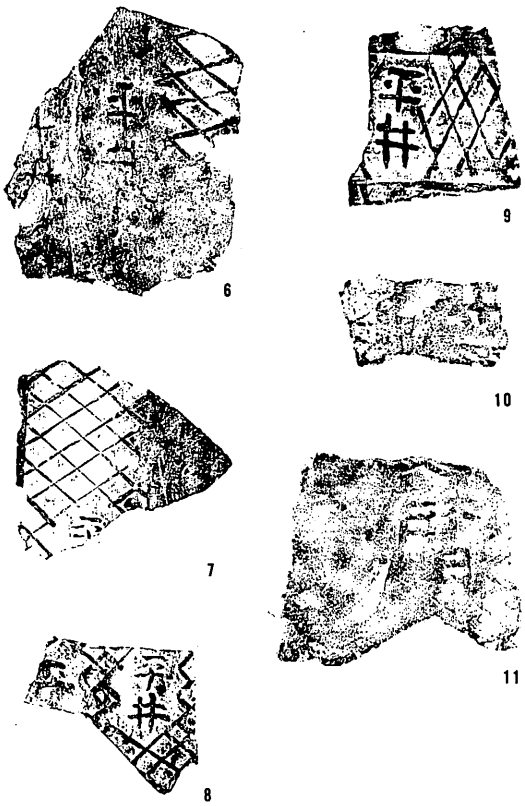


Fig.35　第43次調査出土文字瓦拓影（1/4）

壺（14）　口径13.2cm。口縁部上面付近に目跡が残っている。43SX050調査時の混入品。

皿（17）　灯明皿もしくは燭台のようなもので、中央部が大きく盛り上がっていたらしい。底部を除く全面に施釉され、緑灰色を呈している。拡張区採集。

土製品

栓（16）　多量の砂粒が混じった胎土で型作りらしい。受け部に多量の煤が付着している。現代のものか。

人形（18）　2個の大きな俵に乗る大国天像で、福耳で腹が出、左肩に大袋を担ぎ右手に小槌を持つ姿は、歌に現れる大国さんそのものである。像は前後二つの型から作られ、その合わ

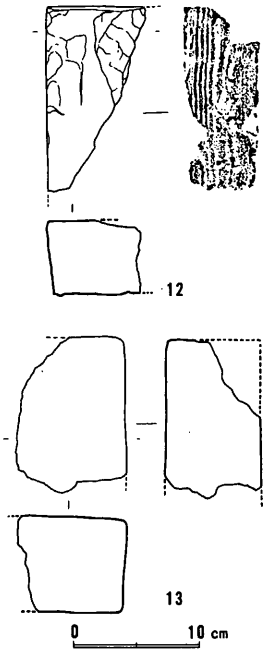


Fig.36　第43次調査
出土塼実測図・拓影（1/6）

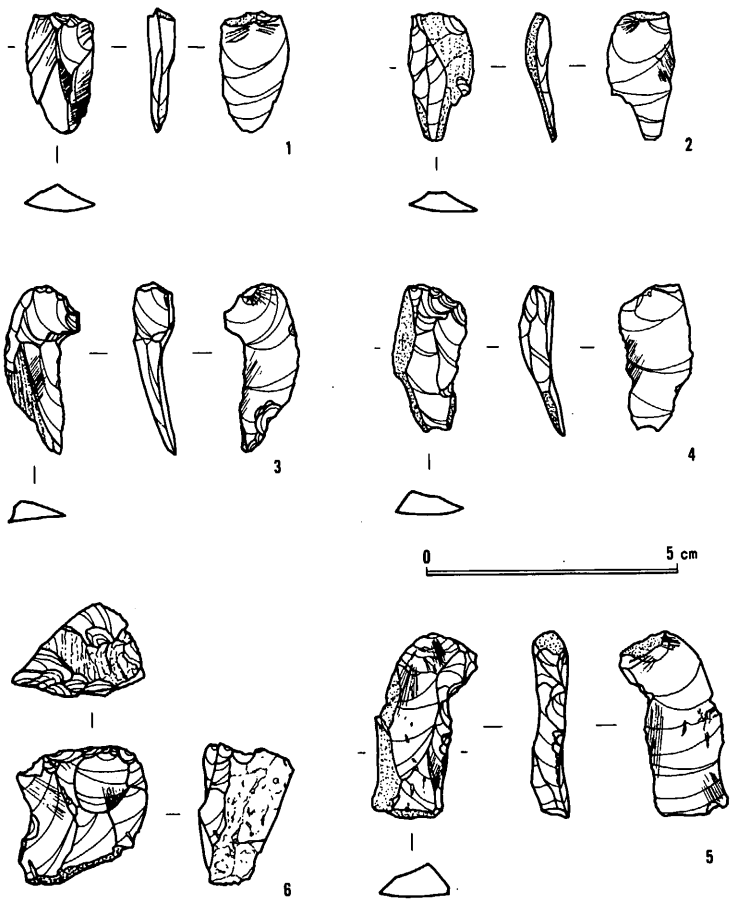


Fig.37　43SX050出土石器実測図１（2/3）

せ目に張り出したバリはヘラケズリで丁寧に調整されている。俵背面に文字が書かれていたようだが剝落していて判読できない。江戸時代以降に製作されたものであろう。撹乱出土。

(2)　金属製品（Fig.32、CD-043372～375）

鉄製品(1･3～7)　１は小刀の一部と思われるが腐食が著しく確定できない。43SB090柱掘り方ｉ出土。３～６は釘で、３～５は43SK040、６は43SK147出土。７は板状の製品であるがどの面も欠損しており、当初の形状は明らかではない。暗褐色土出土。

銅製品（2）　端部の一部が湾曲する。形状、用途ともに不明。43SE148出土。

(3)　瓦（Fig.33～36、CD-043376～388）

軒丸瓦（1）　老司Ⅰ式。43SK025出土。

軒平瓦（2･3）　２は老司Ⅱ式。両者とも43SE148出土。

丸瓦（4）　長さ33.8cmの玉縁式。外面には「佐」の左字を刻んだ叩き板で調整されている。43SE148出土。

平瓦（5）　外面の叩き板に「平井」の文字が見える。43SE148出土。

文字瓦（6～11）　６は「平井」でⅠ-7-a類。43SE148出土。７・８は「平井」でⅠ-7-b類。

7は43SK080、8は43SK040出土。9は「平井」でI-12類。43SK025出土。10は「平井」で43SE148出土。11は「木瓦」で43SE035枠内出土。

塼(12・13)　両者とも無文塼である。12の側面には糸切り痕が観察される。43SE111出土。13は43SE132出土。

(4) 石器・石製品

43SX050出土石器（Fig.37～39、CD-043389～394）

剥片（1～5・7）　いずれも気泡等の不純物の少ない黒曜石を素材とする2ないし3cm前後の縦長剥片で、1以外には表皮面を残しており、剥離の仕方は90度転位するものや転位しないものなど様々である。剥出された核が小さかった可能性がある。すべての側辺の一部に微細剥離が見られる。7は安山岩質の剥片で原石表皮を持ち、底辺に連続する微細な剥離を残す。

石核（6・8）　6は高さ2.8cmの黒曜石の石核で、上部を打面調整後に片面から剥離を複数回行った後に折損したため、放棄されたものと考えられる。剥出された剥片は長いもので2.5cm程度である。8は安山岩質の長方体を呈す核で、打面をすべて剥出する予定面の一部の核表皮を剥いだ段階で放棄されている。

晩期後半に位置づけられるこれら剥片と石核は、黒曜石を

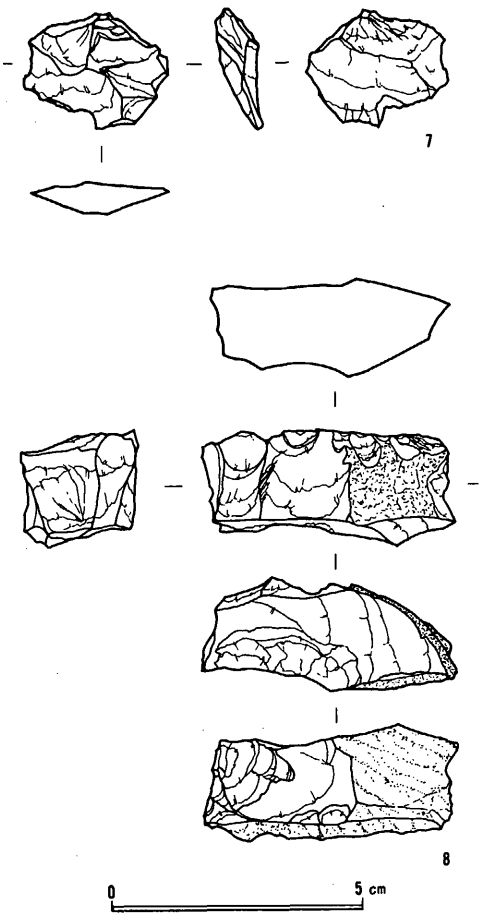


Fig.38　43SX050出土石器実測図2（2/3）

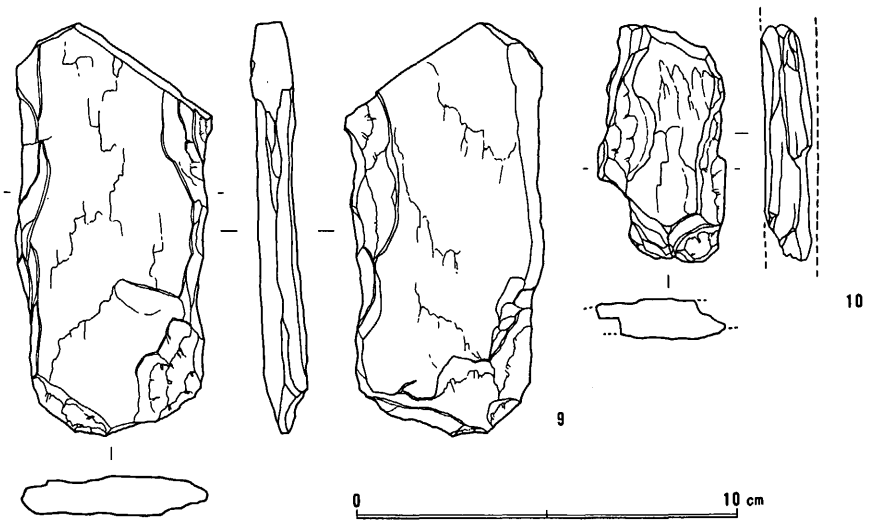


Fig.39　43SX050出土石器実測図3（1/2）

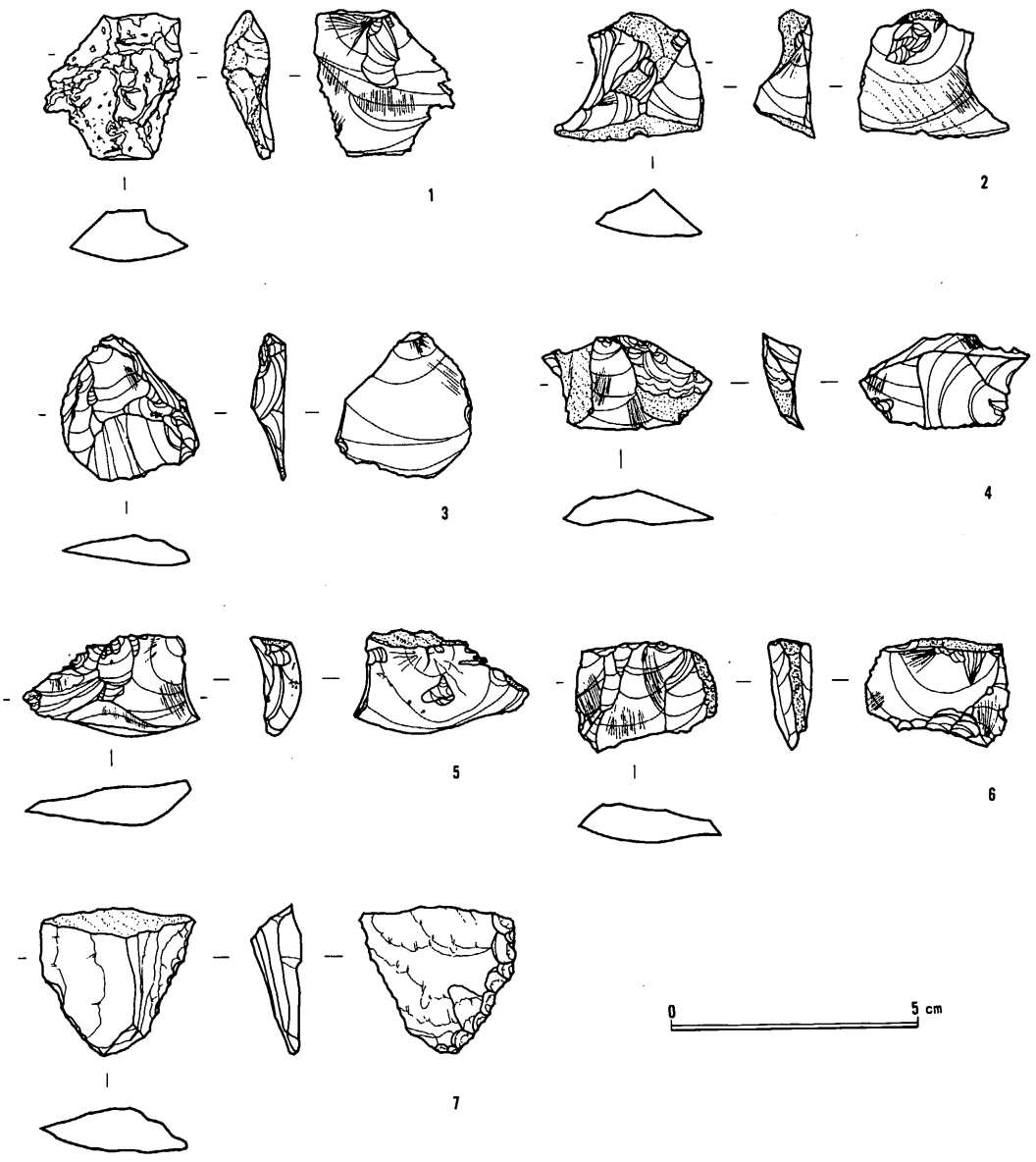


Fig.40　43SX065出土石器実測図１（2/3）

主、安山岩を従とする構成で石材は肥前方面からの持ち込みによると考えられる。黒曜石は剥片に原石表皮を残すものが多く、残存する剥片や石核の法量から６～７cm大の原石がこの集落（キャンプか）に持ち込まれ、ここで刃器として加工製作されたものと考えられる。安山岩はこれを補完する量が核で持ち込まれたが、こちらは一回り大きなものであったらしい。後代の夜臼、板付期に続く様相である。

石鏃（9･10）　緑色片岩製の短冊形を呈す石鏃。両側辺部から打ち欠いて成形している。刃部や表皮部分の明確な磨耗は観察されない。

43SX065出土石器（Fig.40～42、CD-043393～398）

剥片（1～10）　6まではいずれも黒曜石を素材とする2ないし3cm程度の剥片で、43SX050と同様に表皮面を残すものが多い。剥離の仕方は背面が斜め方向のものもあり一定しない。すべての側辺の一部に微細剥離が見られる。7は安山岩質の剥片で原石表皮を持ち、側辺に連続する微細な剥離を残す。8は安山岩質のやや大きめの剥片で、一辺に連続した剥離があり刃器として利用されたと考えられる。

石鏃（11）　緑色片岩製の短冊形を呈す石鏃で表層剥離したため本来の厚味は分からない。明確な表皮部分の磨耗も観察されない。

黄色土出土石器（Fig.43、CD-043399・400）

石鏃（1・2）　緑色片岩製の短冊形を呈す石鏃。両側辺部から打ち欠いて成形している。1は刃部や表皮部分に多少磨耗が観察される。基部はステップして折損している。

その他の石器・石製品（Fig.44～46、CD-043401～417）

石鍋加工品（1～3）　1は滑石製石鍋の胴部片を利用し、側縁をケズリ加工したものである。43SE148出土。2は滑石製石鍋の胴部片を利用したものとみられ、図の両側辺は割れ面、上下面はケズリによって調整されている。中央上位に貫通する穿孔がある。43SK025出土。3は滑石製石鍋の胴部片を利用したものと考えられ、図の上辺がケズリで他は割れ面である。片面に深さ0.4mmの穿孔がある。43SK040出土。

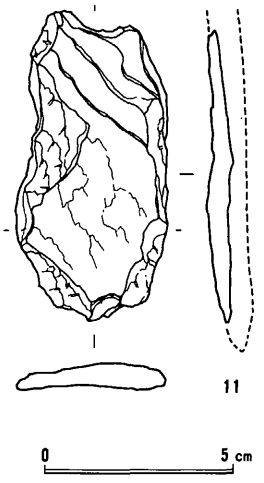


Fig.41　43SX065出土石器実測図2（1/2）

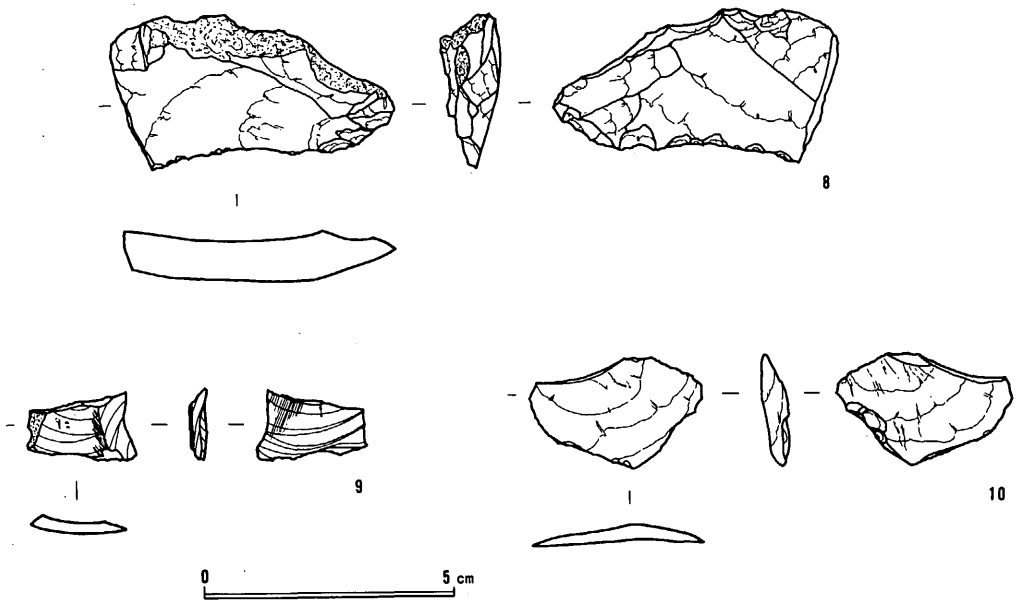


Fig.42　43SX065出土石器実測図3（2/3）

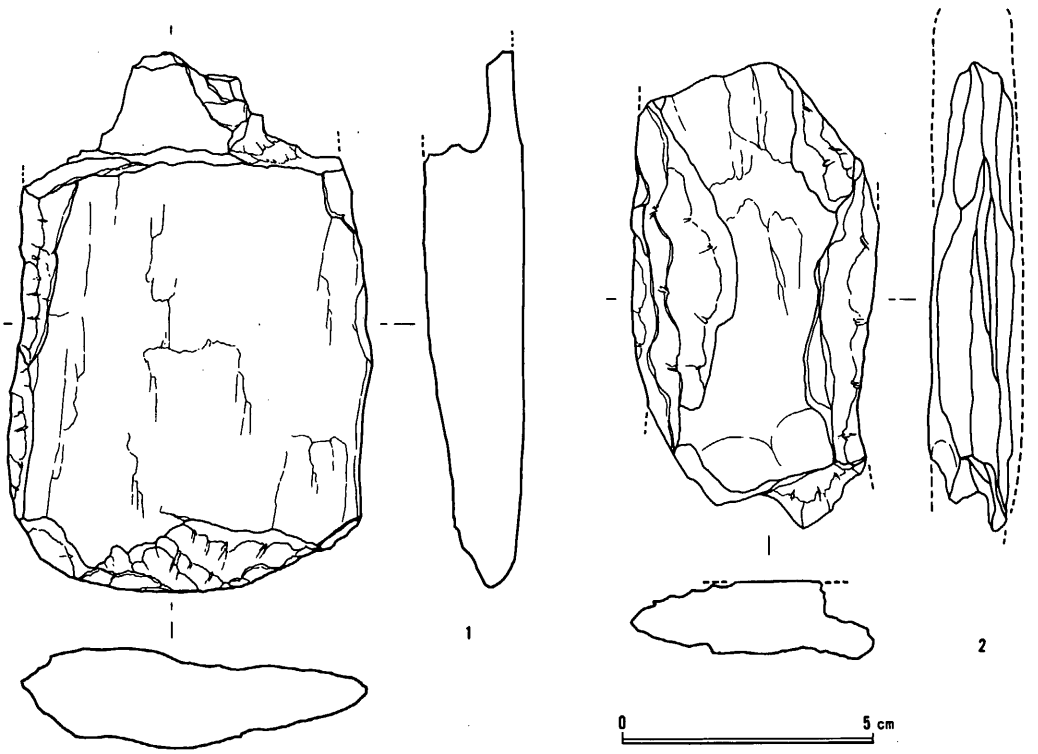


Fig.43　黄色土層出土石器実測図（2/3）

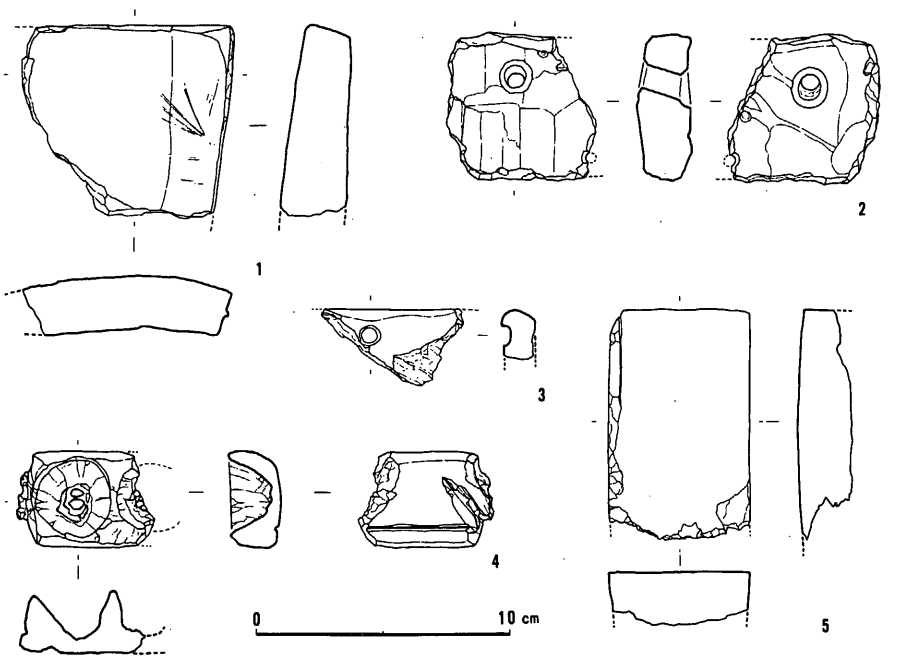


Fig.44　第43次調査出土石製品実測図（1/3）

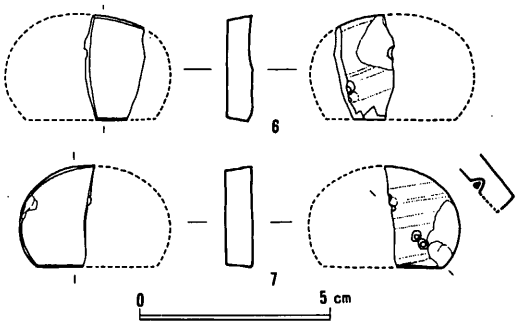


Fig.45　43SE148出土石帯実測図（1/2）

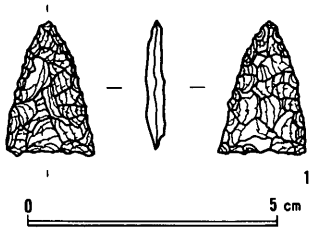


Fig.46　第43次調査出土石器実測図（2/3）

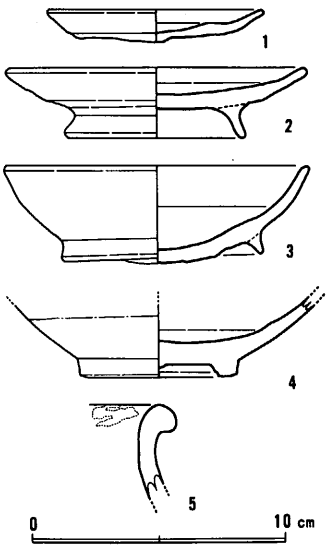


Fig.47　下水道工事採集土器実測図（1/3）

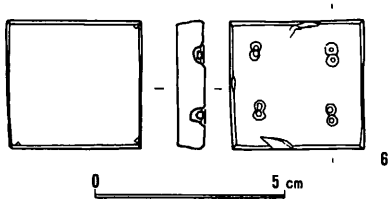


Fig.48　小西信二氏採集石帯実測図（1/2）

容器状製品（4）　滑石製品。長方形に加工された片面から直径3cm程度、深さ約2cmで円錐形の穿孔がある。当初は二つ以上の穿孔が存在したらしい。撹乱（S-19）出土。

硯（5）　暗灰色を呈する凝灰岩製の硯であるが、途中から切断され、二次加工が施されている。如何なる用途に用いたのかは明らかではない。整地層出土。

石帯（6･7）　両者とも43SE148出土の丸鞆で、厚さ0.7cm。表面は研磨され光沢がある。裏面には穿孔があるが研磨されていない。淡黒色を呈している。

打製石鏃（1）　長さ2.7cm、最大幅1.8cm、厚さ0.4cm。安山岩製の平基式の打製石鏃である。両面ともに大剥離面は残存せず、二次的剥離は割合ランダムである。

下水道工事採集品（Fig.47～49、CD-043418～426）

調査中、隣接地で下水道工事が行われたため急遽立会を行った。以下はその時の採集品である。なお石帯は太宰府天満宮の小西信二氏所蔵品で、榎社東横の小道工事中の採集品（昭和57年８月５日採集）である。関連資料として、今回ここに掲載させていただいた。掲載に快諾いただいた氏に対して感謝申し上げる次第である。なお、出土地点は立会がFig.5-B、小西氏資料がFig.5-Cである。

土師器

小皿ａ(1)　口径8.6cm、器高1.3cm、底径6.0cmを測る。底部はヘラ切りされる。

小皿ｃ(2)　口径12.0cm、器高2.8cm、高台径7.2cmを測る。底部はヘラ切りされる。

中椀ｃ(3)　口径12.1cm、器高3.8cm、高台径8.0cmを測る。底部はヘラ切りされる。

白磁

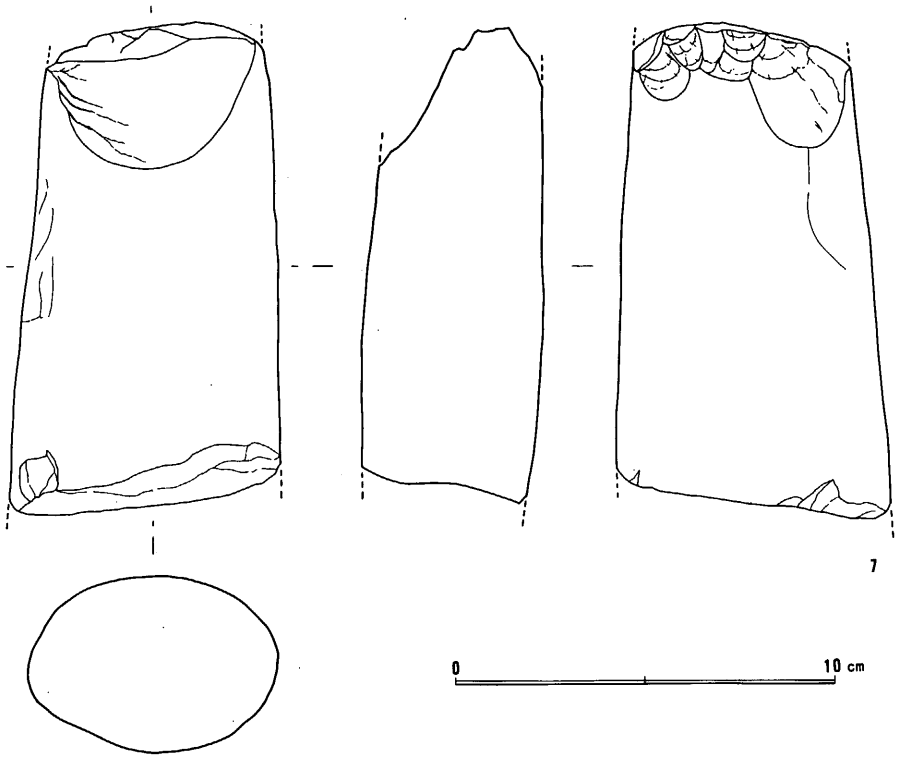


Fig.49　下水道工事採集石器実測図（1/2）

椀（4）　高台径6.3cmで、II-2・4・5類のいずれかであろう。釉は淡黄緑色に発色し、透明感がある。

陶器

壺（5）　口縁部内面に目跡が残っている。内面の釉は剥離が著しいが、外面では安定し、暗緑茶色に発色し光沢がある。

石製品

石帯（6）　淡白緑灰色の巡方で、長さ3.5cm、幅3.4cm、厚さ0.75cmを測る。表面及び側縁はすべてきれいに研磨され光沢がある。裏面には縦方向に穿たれた4箇所の紐通しがあるが面は研磨されていない。

石器

石斧（7）　現存長13.0cm、最大幅7.2cm、厚さ4.7cmを測る。玄武岩製で、末端部は打ち欠きで成形し、表面に敲打痕がみられる。

4．小　結

今次の調査区で最も古い遺構は43SX065竪穴で、縄文晩期のものである。大宰府条坊跡の調査区の範囲内でこの時期にまで遡る遺構の検出例はなく、貴重な存在である。

この次に遺構として現れるのは43SB090で、出土遺物から7世紀後半頃に考えられる。大宰府

条坊の範囲内で、大宰府政庁第Ⅰ期に並行する時期の建物遺構は政庁地区を除いて最初の検出例であり、この性格の捉え方が問題となってくる。今はまだこの遺構しか例がないため詳細な検討は行えないが、郭内で同時期の遺構には整地的なものが多く、建物として位置づけられる今回の検出は大宰府条坊の成立期を考える上でも重要である。

奈良時代に入ると掘立柱建物43SB010や井戸43SE111・132などがあり、宅地的様相を呈していることが理解できる。建物の振れも概ね南北方向に制約を受けているようであり、大宰府条坊とも関連性を検討する必要があろう。特にこの地点は推定右郭一坊に位置し、朱雀大路に面していたと考えられる地点だけに重要である。これらの遺構は概ね8世紀後半の範疇で捉えられ、このエリアの開発時期が窺われる。

次に顕著な遺構がみられるのは大宰府土器編年で言えばⅩ～Ⅺ期頃で、概ね11世紀前半に該当する。井戸43SE148・150、土坑43SK147がそれに該当しよう。掘立柱建物のうちいくつかはこれに併存するものがあると考えられるが、出土遺物が乏しく年代決定の要素に欠くため、どの建物が併存するかは特定できない。

ここでの遺構のピークは続くⅫ期の遺構群である。11世紀後半を中心とする時期に考えられ、井戸、土坑ともに多数が認識される。ただ建物に関しては、先述したように時期の特定が困難であり確定できないが、切り合い関係と掘り方の形状が円形で矮小化する43SB140が最も有力な候補である。しかし、これとて同時期と考えられる43SE120と重なる可能性が強く、この時期の範囲内でさらに小期を設定する必要があるのかも知れない。ただ残念ながら土器編年の限界を越えていることと、すべてに十分な資料があるわけではなくこれ以上の区分は不可能である。

なお43SE148から丸鞆2個が出土したほか、小道工事でも巡方1点が採集されていることは、この付近一帯を大宰府に勤務する官人の邸宅と考える資料として有効であろう。

このⅫ期の遺構を最後に以後は現代の攪乱まで顕著な遺構は出現しない。近代以降の資料もあるにはあるが、散見する程度で決して安定した状況ではない。12世紀代以降のこの付近の土地利用がいかなるものであったのか興味を覚えるが、表土から幾ばくもない深さで遺構が検出されたうえに、掘立柱建物の掘り方の深さをみると明らかに上面は大きく削平を受けており、中世から近世にかけてのこの付近の情報は消滅したと言わざるを得ない。残存率の高い地点で調査する機会を得たい。

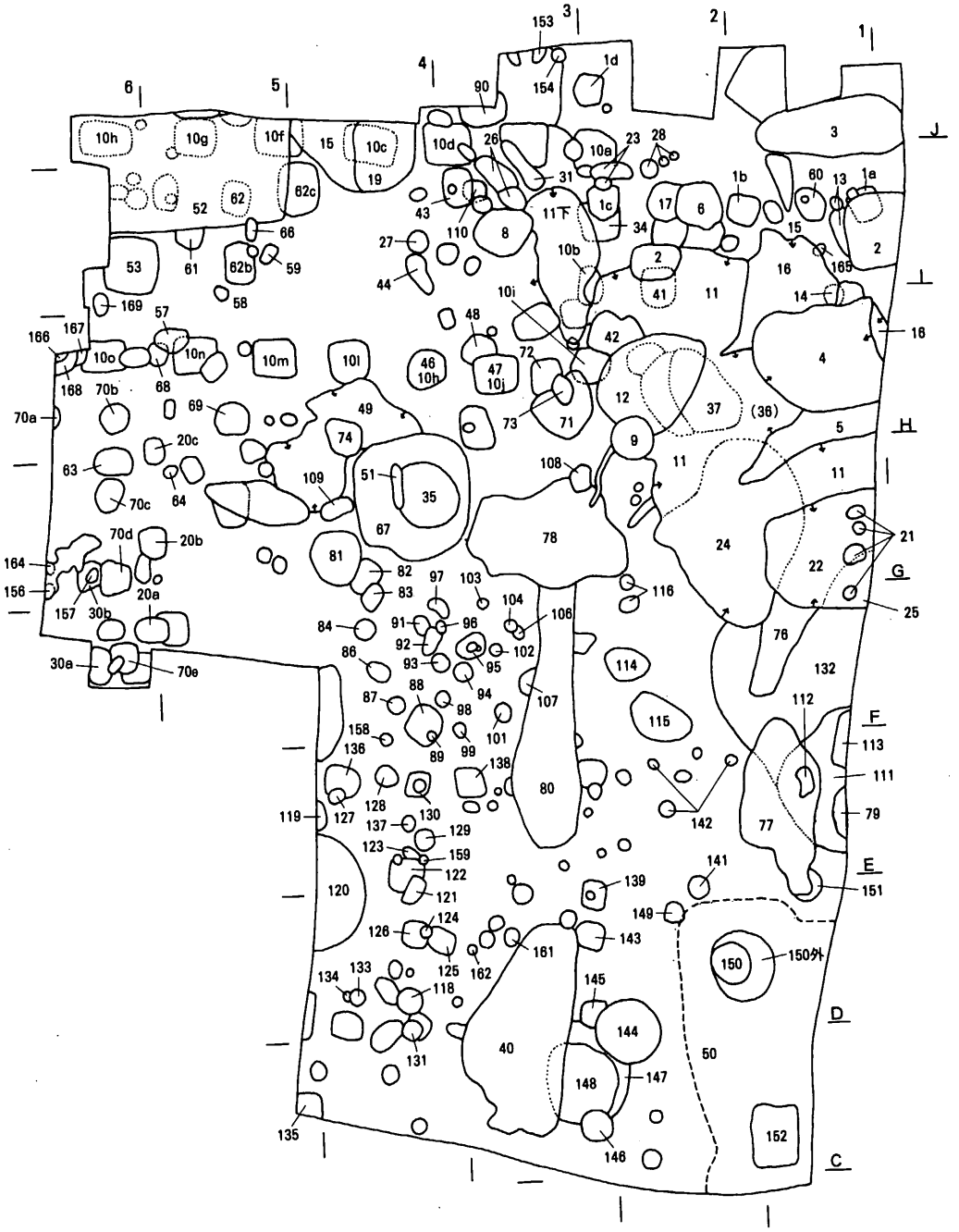


Fig.50　第43次調査遺構配置略測図

Tab. 2－1　第43次調査遺構番号一覧表１

S-番号	遺構番号	種　別	地区
1	43SB001	掘立柱建物	I1･2
2		撹乱	I1･2
3		撹乱	J1
4		撹乱	H1
5	暗褐色土	堆積層　5→11→4	G1
6		撹乱	I2
7		撹乱	
8		撹乱	I3
9		井戸　現代	H2
10	43SB010	掘立柱建物	IJ2～6
11	茶褐色土	堆積層　11→12→9	J2ほか
12		窪み	H2
13		ピット群	I1
14		ピット　14→16→4	H1
15	43SK015	土坑	IJ4
16		窪み	HI1
17		ピット	I2
18			
19		撹乱	I4
20	43SB020	掘立柱建物	6ライン
21	43SX021	ピット群　11→22→21	FG1
22	暗茶色土	堆積層	G1
23		ピット群　淡茶色土から切り込む	I2
24	43SK024	土坑　5→24→11	G1
25	43SK025	土坑　5→25→11	G1
26		ピット	I3
27		ピット	I4
28		ピット	I2
29		ピット	J3
30	43SB030	掘立柱建物	FG6
31		ピット　10c（43SB010f）→31→淡茶色土	J3
32		ピット　10d（43SB010e）→32→淡茶色土	J3
33		ピット　33→10a（43SB010g）	I3
34	（43SB010h）	柱掘り方　34→S-1c	I2
35	43SE035	井戸（枠内埋土）	G4
36	43SK036	土坑　36→5	H1･2
37		ピット　36→37	H1･2
38		ピット　10e（43SB010d）→38	J4
39		土坑　39→5/36	H1
40	43SK040	土坑	CD3
41		ピット　41→11	I2
42		ピット　42→12	H2
43		ピット	I3
44		ピット	I4

Tab. 2－2　第43次調査遺構番号一覧表 2

S-番号	遺構番号	種　別	地区
45	欠番		
46	(43SB010l)	柱掘り方	H4
47	(43SB010k)	柱掘り方　48→47	H3
48	(43SB090d)	柱掘り方	H3
49		ピット	H4
50	43SX050	竪穴遺構	CE1･2
51	43SX051	ピット　35→51	G4
52		撹乱	I5
53	43SE053	井戸　暗茶灰色土埋土（小礫混在）53b は下層	I6
54		ピット	I6
55	(43SB090k)	柱掘り方	J5
56	43SK056	土坑　淡茶色土から切り込む、埋土は同色粘質土	H6
57		ピット	H5
58		ピット	H5
59		ピット	I5
60	43SX060	柱掘り方	I1･2
61		ピット	I5
62	(43SB090j)	柱掘り方　62→52、62c は別遺構	I5
63	43SX063	柱掘り方	H6
64		ピット	G5
65	(43SX050)	(竪穴)　50･65･75は同一遺構	C1･2
66		ピット	I5
67	(43SE035)	井戸（裏込）	G4
68	(43SB020d)	柱掘り方	H5
69	(43SB090g)	柱掘り方	H5
70	43SB070	掘立柱建物	F～H6
71		ピット　10i →71	H3
72		ピット　72→71→73	H3
73		ピット	H3
74	(43SB090f)	柱掘り方	H4
75	(43SX050)	竪穴　65と同一	D1･2
76		落ち込み	F1
77	43SX077	落ち込み	E1
78		落ち込み　116→78→67	G3
79	43SK079	土坑	E1
80	43SK080	土坑　黒色埋土、80→78	F3
81		ピット	G4
82		ピット　82→81･83	G4
83		ピット	G4
84		ピット	F4
85	欠番		
86		ピット	F4
87		ピット	F4
88		ピット	F4

Tab. 2－3　第43次調査遺構番号一覧表３

S-番号	遺構番号	種　別	地区
89		ピット　88→89	F4
90	43SB090a	柱掘り方　S-48・55・62・69・74・110と組む　105→90	J3
91		ピット　91→92→93・96	F4
92		ピット	F4
93		ピット	F4
94		ピット	F3
95		ピット	F3
96		ピット	F4
97		ピット	F4
98		ピット	F4
99		ピット	F3
(100)	43SB100	掘立柱建物　S-136・138・139・145ほか	DF3・4
101		ピット	F3
102		ピット	F3
103		ピット	F3
104		ピット　106→104	F3
105		ピット　105→90	J3
106		ピット　106→104	F3
107		撹乱	F3
108		土坑？　108→78	G3
109		ピット	G4
110	(43SB090b)	柱掘り方	J3
111	43SE111	井戸	E1
112		ピット　茶褐色土に小礫混じりの埋土	E1
113	43SK113	土坑　暗茶色粘質土埋土	E1
114		土坑？	F2
115		土坑？	F2
116		ピット群　116→78	FG2
117		ピット群	G2
118		撹乱	D4
119	(43SB140a)	柱掘り方	E4
120	43SE120	井戸	DE4
121		ピット	E4
122	(43SB130c)	柱掘り方　123→122→121	E4
123		ピット	E4
124	(43SB140c)	柱掘り方　暗褐色土埋土	D4
125		ピット　粘土が硬く締まった埋土	D4
126	(43SB130d)	柱掘り方　125→126→124	D4
127		ピット	E4
128		ピット	E4
129	(43SB140b)	柱掘り方	E4
130	43SB130b	柱掘り方	E4
131	(43SB140d)	柱掘り方　茶褐色土埋土	D4
132	43SE132	井戸	F1

Tab. 2－4　第43次調査遺構番号一覧表 4

S-番号	遺構番号	種　別	地区
133		ピット	D4
134		ピット　134→133	D4
135		土坑？	C5
136	(43SB100a)	柱掘り方	E4
137		ピット	E4
138	(43SB100b)	柱掘り方	E3
139	(43SB100d)	柱掘り方	D3
(140)	43SB140	掘立柱建物　S-119·124·129·131	
141		ピット	D2
142		ピット	E2
143		ピット　143→40	D3
144		撹乱（新井戸）	C2
145	(43SB100e)	柱掘り方　145→147→144	D3
146		ピット　147→148→146	C3
147	43SK147	土坑　茶褐色土埋土	C3
148	43SE148	井戸　黒色埋土　148→40	C3
149		落ち込み	D2
150	43SE150	井戸　黒色埋土　50→150	D2
151		ピット	D1
152	43SK152	土坑　50→152	C1
153		ピット	J3
154		ピット	J3
155	欠番		
156		ピット	G6
157		ピット	G6
158	43SX158	ピット	F4
159		ピット　159→122	E4
160	欠番		
161		ピット	D3
162		ピット	D4
163		ピット　163→40	C4
164		ピット	G6
165		ピット　165→16	I1
166		ピット	H6
167		柱掘り方？　43SB020e は167·168のいずれでも採れる	H6
168	(43SB020e)	柱掘り方　169← S-10p →167→168→166	H6
169		ピット	H6

(2) 第59次調査

1．はじめに

調査地は、太宰府市大字通古賀45番地と大字太宰府2573番地-1にまたがる。昭和54年度から実施された観世音寺土地区画整理事業の一部として、当該地が宅地及び道路の一部として改変されることに先だって発掘調査を実施した。発掘調査以前の地目は水田である。

調査は昭和61（1986）年9月18日から10月28日まで実施し、調査面積は140㎡である。調査は緒方俊輔が主として担当し、山本信夫、狭川真一がこれを補佐した。

2．調査の概要

当該対象地の中央付近は大宰府政庁中軸線の南側延長部にあたり、朱雀大路が検出される可能性が考えられる地点であった。ただ周辺の地形と比べると南側の土地よりも一段低くなっており、御笠川にもきわめて近いところからその氾濫源の範囲内であることも予想された。そこで対象地の4箇所にトレンチを設定して調査を実施したが、予想通りすべてのトレンチで御笠川の氾濫と考えられる堆積層を確認したにとどまる。しかし、このうちの第1・第2トレンチでは若干の遺構を確認したほか、堆積層の一部を精査することができ、氾濫の年代の一端を窺う資料を採集できた。以下、この第1・2トレンチについて報告する。

(1) 第1トレンチ

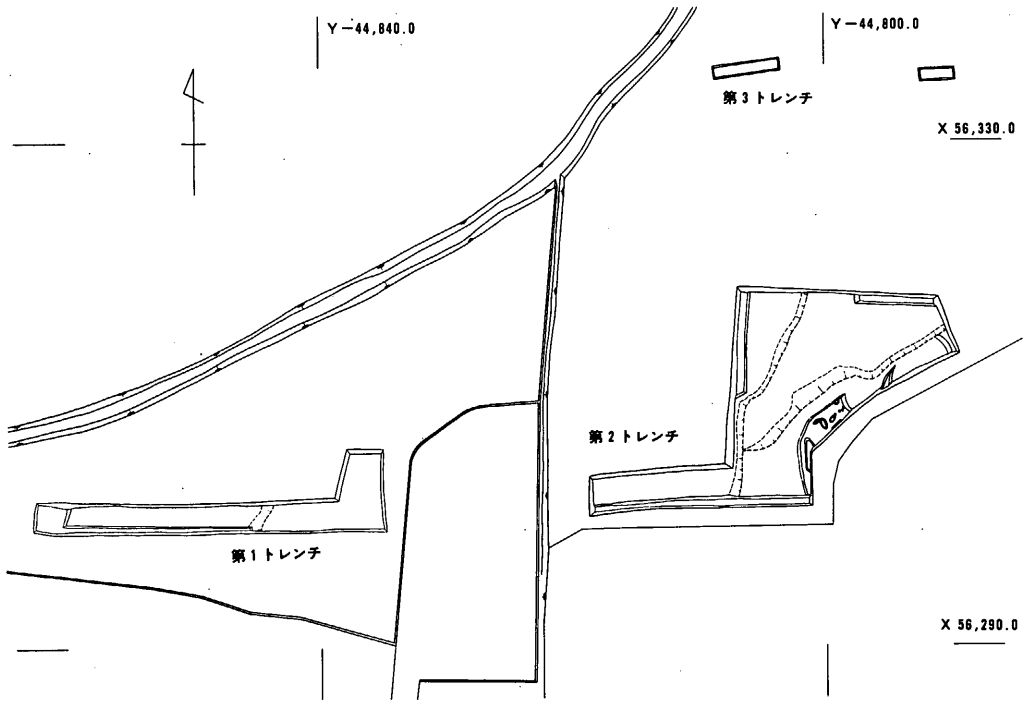


Fig.51　第59次調査トレンチ配置図（1/600）

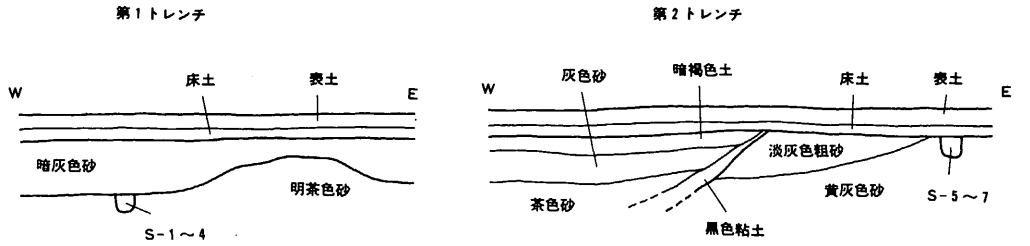


Fig.52　第59次調査堆積土層模式図

西側に設定したトレンチで、表土を除去すると暗灰色砂が広く堆積していた。一部溝状を呈する部分もあったが、基本的には東から西に深くなる堆積状況を示していた。これを除去すると明茶色砂（大型の粘土ブロックを含んでいる）を確認したが、かなり厚く堆積しており完全に掘り下げることは断念した。

なお遺構はTab.3に示すとおりS-1～4を確認したが、いずれも明茶色砂層の上面で検出したものである。きわめて浅く、確実に遺構と認定するのにやや躊躇する。

(2)　第2トレンチ

調査区の南東隅でわずかに地山（黄色粘質土）を確認し、そこに若干の遺構が残存していた。遺構はピット及び窪み状のものである。

地山が確認された以外の範囲は第1トレンチと同様に氾濫の堆積層であった。まず表土を除去するとすぐに暗褐色土があり、その下に灰色砂、茶色砂が堆積していた。茶色砂はきわめて厚く堆積しており、地山まで掘り下げることを断念した。地山が残存している東側に近づくと、茶色砂の下位に黒灰色粘土が堆積していた。この層の落ち際付近では遺物が多く採集された。さらに東側に進むと、この黒灰色粘土の下に淡灰色粗砂が堆積しておりその下層には黄灰色砂が堆積するが、この層から遺物は出土していない。

3．出土遺物

(1)　土器・陶磁器

第1トレンチ暗灰色砂層出土土器（Fig.53・54、CD-059007～027）

土師器

小皿a(1～3)　口径9.2～9.8cm、器高1.2～1.6cm、底径7.2～7.9cmを測る。底部はヘラ切りされる。

小皿a2（4）　口縁端部内面に沈線が巡るもので、口径11.2cm、器高1.5cm、底径8.2cmを測る。底部はヘラ切りされる。

坏d（5）　口径14.2cm、器高2.8cm、底径8.4cmを測る。内面にはミガキcが観察されるが、外面は風化が著しく調整は明らかではない。

丸底坏a(6・7)　口径15.6cm、器高3.1・3.3cmを測る。底部はヘラ切りされるが、体部の調整

は風化のため判別困難である。

須恵器

壺蓋（8）　口径15.0cm、器高2.6cmを測る。天井部はヘラ切りのままで、中央部に釦状の摘みが付く。

坏a（9）　口径13.0cm、器高3.6cm、底径8.2cmを測る。底部はヘラ切りのままで、体部はヨコナデ調整される。

鉢（10・11）　10は、口径26.8cmに復原される。体部の調整はヨコナデで、口縁端部をわずかに内側に折り曲げる。11は東播系とみられるもので、外面の底部は刷毛状の工具で調整されている。

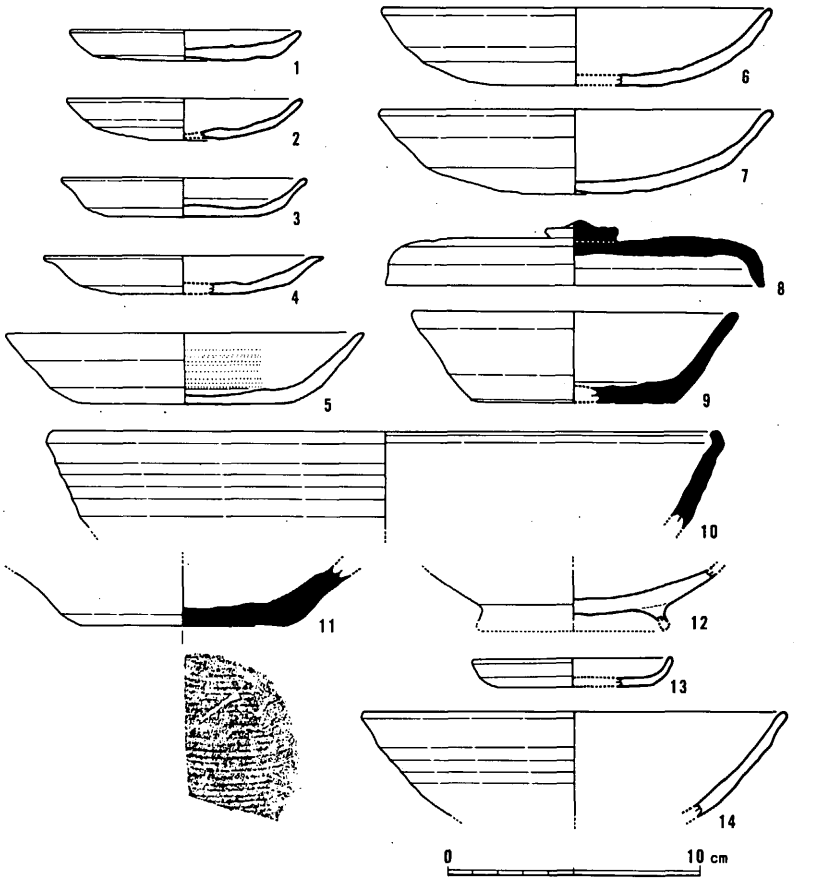


Fig.53　第1トレンチ暗灰色砂層出土土器実測図1（1/3）

黒色土器

椀c（12）　A類。

小皿a（13）　B類で、口径8.0cmに復原される。表面は風化が著しく調整は不明である。

瓦器

椀（14）　口径8.4cm。体部内面で部分的にミガキcが観察される。

白磁

椀（15～21）　15はII類、16はIV-1類、17・18は見込みに沈線状の段を有することからIV-1-a類、19はIV類で体部外面下半には施釉されない。20・21は見込みの釉を円形に拭き取っていることからVIII類と考えられる。

皿（22）　釉は淡白灰色に発色するが、底部外面は施釉されない。V類もしくはVI-1-b類。

壺（23）　高台径8.6cmで、畳付け及び外面底部には施釉されない。体部の釉は淡白灰色で鈍い光沢がある。水注の可能性もある。

越州窯系青磁

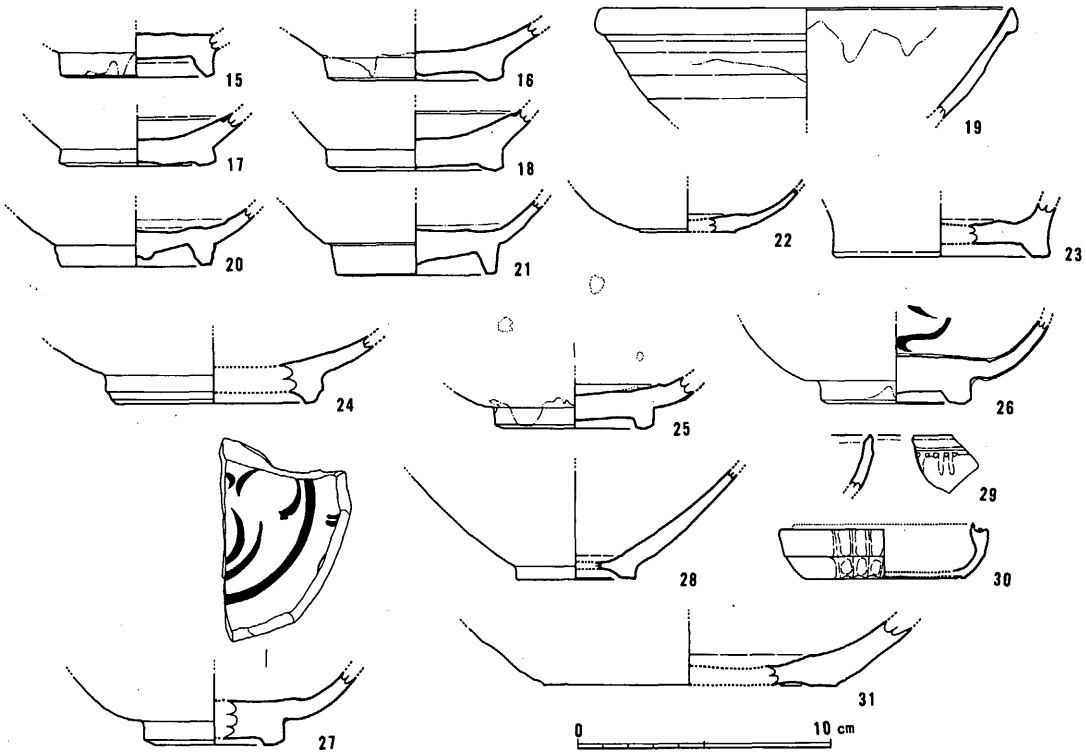


Fig.54　第１トレンチ暗灰色砂層出土土器実測図２（1/3）

椀（24）　高台径7.8cm。釉は畳付け以外に施され、淡緑灰色に発色し光沢がある。随所に貫入が認められる。畳付けには目跡が観察される。I-2類。

龍泉窯系青磁

椀（25～27）　25はI-1～４類で、見込みに砂粒を含まない白土を用いた目跡が残る。26は体部内面に文様がありI-4類とみられる。27はI-4-b類で、見込みに片切彫による文様がある。

高麗青磁

椀（28）　高台径4.8cm。見込みに段がある。全面に施釉され、暗緑灰色に発色する。胎土は暗灰色で白色の粒子を多数含み、粗めで細かな隙間がある。畳付けに目跡が残っている。I-2類。

青白磁

合子（29･30）　両者とも空色味を帯びた透明釉で光沢がある。29は口縁端部のみ釉を掻き取る。蓋の可能性もある。30は受部が施釉されない。

陶器

鉢（31）　底部径11.6cmに復原されるもので、胎土は表面に近い部分が赤茶褐色、内部では暗灰色を呈し、大粒の砂粒を多量に含む粗いものである。内面は平滑である。

第１トレンチ明茶色砂層出土土器（Fig.55、CD-059028～036）

土師器

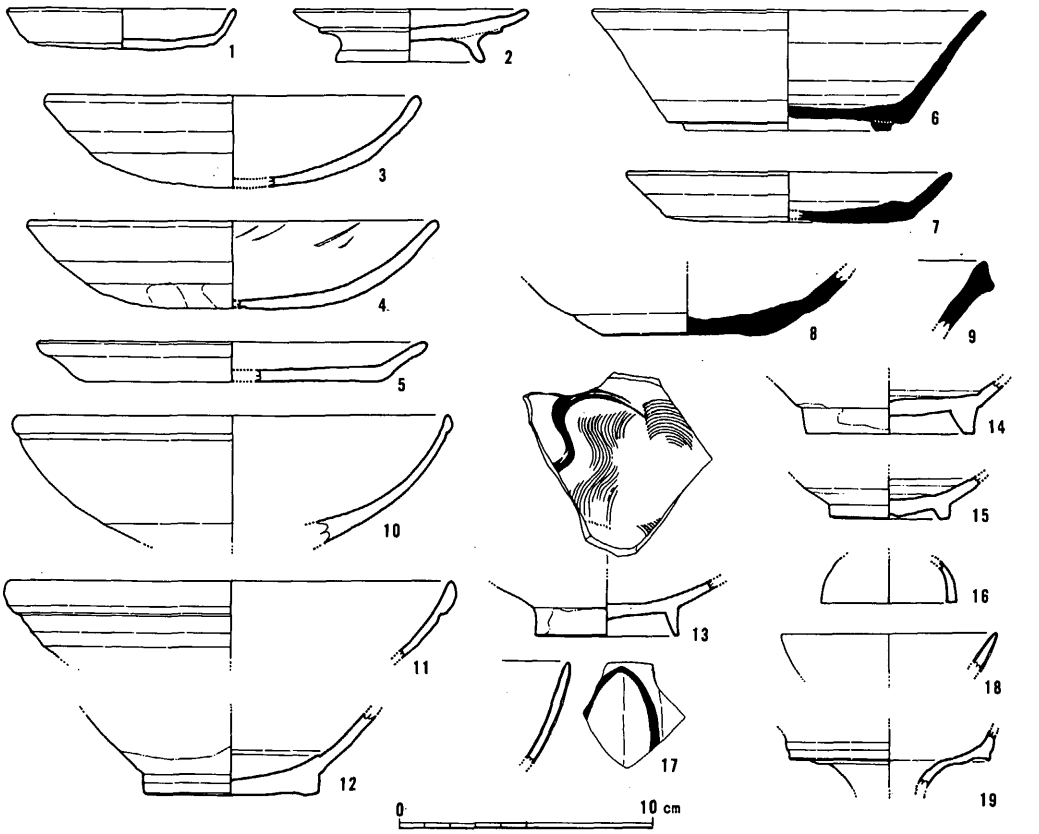


Fig.55　第１トレンチ明茶色砂層出土土器実測図（1/3）

小皿ａ（1）　口径9.0cm、器高1.6cm、底径7.4cmで、底部は糸切りされ板状圧痕が残る。

小皿ｃ（2）　口径9.2cm、器高2.0cm、高台径5.9cmで、底部はヘラ切りされる。

丸底坏ａ(3･4)　口径15.0･16.3cm、器高3.7･3.5cmで、底部はヘラ切りされる。4の内面にはミガキｂが観察される。

皿ａ(5)　口径15.6cm、器高1.6cm、底径11.8cmで、底部はヘラ切りされるが、のち平滑に調整されている。色調は茶褐色を呈している。

須恵器

坏ｃ（6）　口径15.6cm、器高4.8cm、高台径8.2cm。底部と体部の境目は明瞭である。

皿ａ（7）　口径13.0cm、器高2.0cm、底径9.8cmで、底部はヘラ切りされる。

鉢（8･9）　東播系の鉢で、8の内面は使用による磨耗で平滑である。

白磁

椀（10～14）　10は小さな玉縁を有するII-1類で、口径16.9cm。11はやや幅広の玉縁を有するII-5類。12は見込みに小さな段を有するIV-1-a類。13はV類で、見込みに櫛画文様がある。14は見込みの釉を輪状に欠き取るものでVIII類である。

皿（15）　見込みの釉を輪状に欠き取るものでIII-1類である。

合子（16）　II類系の蓋で、内面から口縁端部にかけて施釉されない。外面の釉は黄色味を

帯びる透明釉で、光沢があり貫入がみられる。

龍泉窯系青磁

椀（17）　外面に蓮弁文様があり、I-5-b類。

小椀（18）　淡青灰色に発色する釉は厚く掛けられる。III類とみられるが小片のため皿または小椀のI類の可能性も捨てきれない。

陶器

壺（19）　端部を失うが複合口縁の壺とみられる。表面の色調は暗灰色で、胎土は暗赤灰色を呈している。朝鮮系無釉陶器と考えられる。

第1トレンチ遺構出土土器（Fig.56）

土師器

小皿a（1･2）　いずれも小片で不明瞭ながら底部は糸切りと思われる。1はS-3、2はS-4出土。

坏（3）　口径11.6cm。S-1出土。

白磁

椀（4･5）　4は見込みに櫛画きによる文様を施すV類で、S-4出土。5は内面に櫛画きによる文様がある。V類またはVI類とみられ、S-1出土。

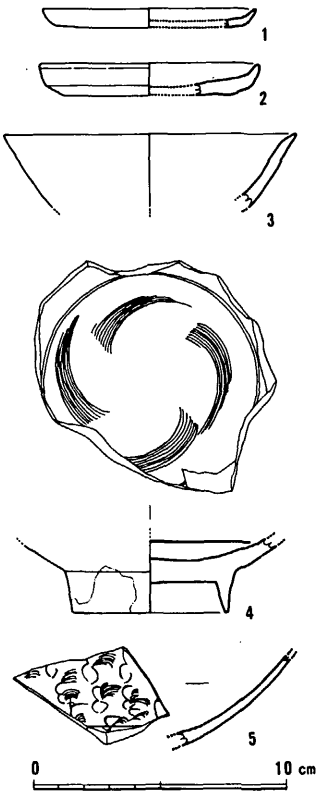


Fig.56　第1トレンチ遺構出土土器実測図（1/3）

第2トレンチ暗褐色土層出土土器（Fig.57、CD-059039～052）

土師器

小皿a（1～3）　口径8.4～9.2cm、器高1.1cm、底径7.1～7.9cmを測り、底部は糸切りされる。

坏a（4･5）　口径15.8･16.3cm、器高2.4･2.1cm、底径12.3･11.8cmを測り、底部は糸切りされる。

坏c（6）　内面に墨痕が付着しており、その部分が平滑になっていることから、硯に転用したものと考えられる。

瓦器

椀c（7）　高台径6.8cm。内面にはミガキcが観察される。

白磁

椀（8～10）　8はII類、9は見込みに小さな段があるV類、10は見込みの釉を輪状に掻き取るVIII類である。

皿（11）　口径10.2cmを測り、口縁部の釉は拭き取られている。IX類。

水注（12）　II類の系統に属するもので、頸部外面に取手の跡が残る。

越州窯系青磁

椀（15）　I-2類。

壺（13）　Ⅰ類で、口径9.2cm。釉は淡青緑色で光沢がある。水注の可能性もある。

小壺（14）　口径2.1cm。釉は外面のみに薄く掛けられ、淡緑灰色を呈しているがほとんど剝落している。

同安窯系青磁

椀（16）　高台径5.8cmを測るⅡ類で、体部外面下半は施釉されない。

皿（17）　口径10.2cm、器高2.4cm、底径5.3cmで、外面底部以外は施釉される。見込みに櫛画きと片切彫りの文様がある。Ⅰ-1-b類。

龍泉窯系青磁

椀（18･19）　いずれもⅠ類に分類されるが、18の見込みには白土による目跡が残り、19の体部内面には片切彫りの文様の一部分が観察される。

皿（20･21）　いずれもⅠ類の皿で、見込みに片切彫りと櫛（21にはない）による文様が施さ

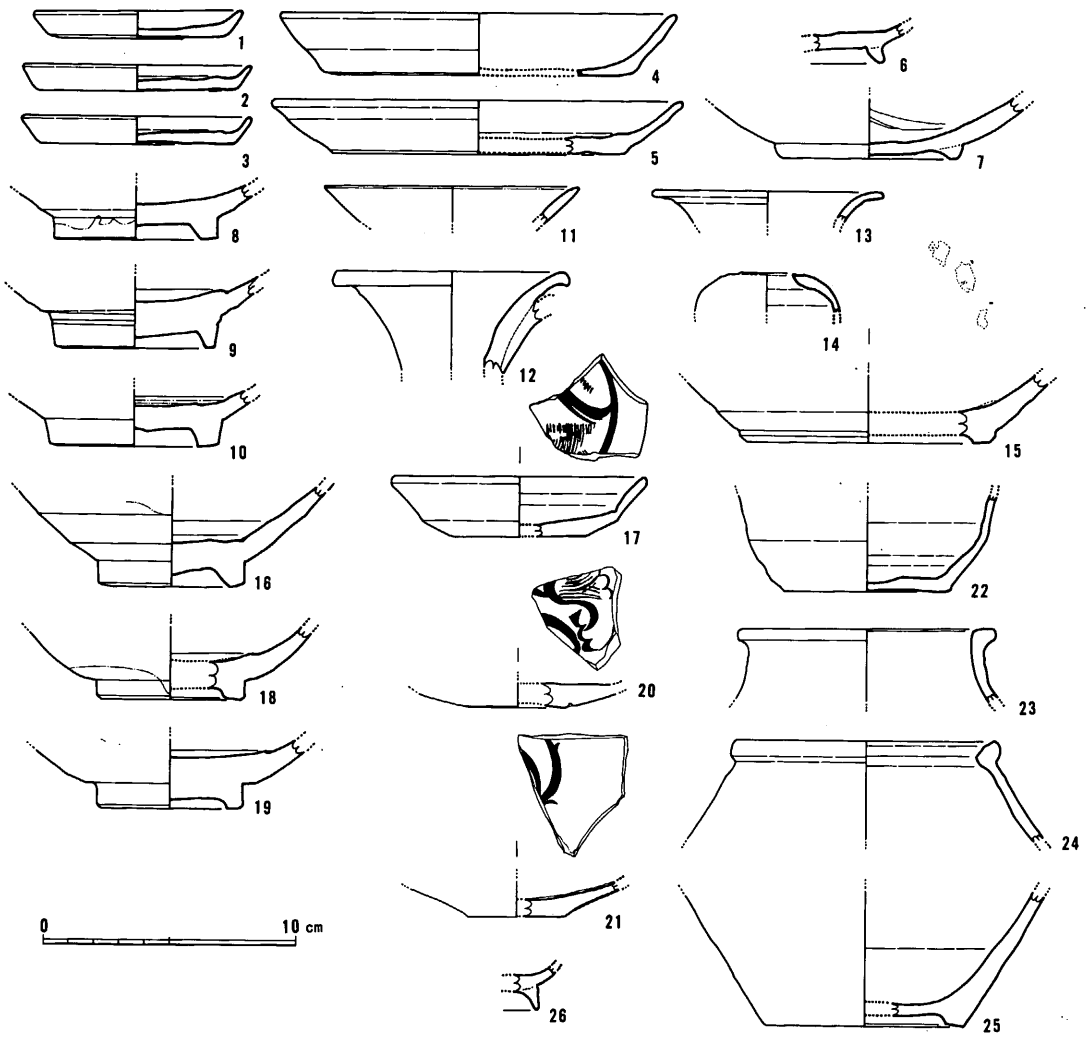


Fig.57　第2トレンチ暗褐色土層出土土器実測図（1/3）

れる。

陶器

壺（22～25）　22は底径6.6cmを測り、胎土は明灰色で白色粒子が多数含まれ、黒色の小粒も若干観察される。外面底部は調整されない。23は口径10.2cmで、暗褐色に発色する釉が薄くかかる。胎土は暗灰色で暗褐色粒が若干含まれている。24は口径10.7cmで、四耳壺Ⅵ類と考えられる。25は四耳壺または水注の底部資料で、高台径7.9cmに復原される。

灰釉陶器

椀（26）　東濃産。

第２トレンチ灰色砂層出土土器（Fig.58、CD-059053～056）

土師器

坏ａ（1）　口径15.2cm、器高2.7cm、底径9.6cmで、底部は糸切りされる。

須恵器

蓋3（2）　口径14.8cmで、天井部の調整は風化のため判別できない。

鉢（3）　東播系。

白磁

椀(4～7)　4は見込みに小さな段があり、Ⅳ-1-a類。5は内面に櫛画きの文様があるⅤ類。6は見込みの釉を輪状に欠き取るものでⅧ類。7は口径13.0cm

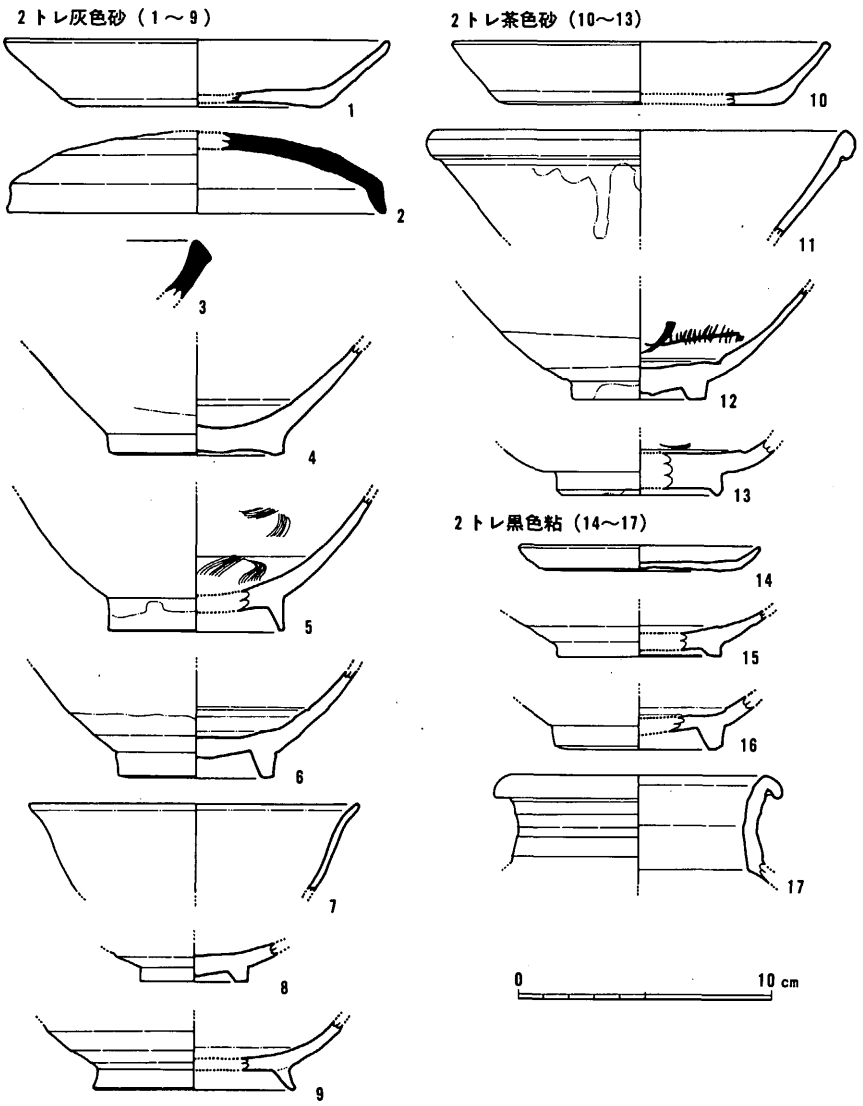


Fig.58　第２トレンチ灰色砂層・茶色砂層・黒色粘土層出土土器実測図（1/3）

で、口縁端部の釉を拭き取っている。Ⅸ類。

皿（8）　高台径4.2cm。Ⅲ-2類。

灰釉陶器

椀（9）　高台径8.3cmを測り、残存する範囲内では内面体部のみ施釉され、見込みや外面には観察されない。胎土は明灰色で、白色粒を多く含む。東濃産。

第2トレンチ茶色砂層出土土器（Fig.58、CD-059057･058）

土師器

坏a（10）　口径15.0cm、器高2.5cm、底径11.3cmで、底部は糸切りされる。

白磁

椀（11）　口径16.2cmのⅣ類。

同安窯系青磁

椀（12）　体部内面には片切彫りと櫛画きの文様があり施釉されている。体部外面下半には施釉されない。Ⅰ-1-a類。

龍泉窯系青磁

椀（13）　体部内面に片切彫りの文様がわずかにみられる。Ⅰ-2～4類。

第2トレンチ黒色粘土層出土土器（Fig.58、CD-059059･060）

土師器

小皿a（14）　口径9.6cm、器高1.0cm、底径8.0cmを測る。底部は糸切りされる。

白磁

椀（16）　見込みの釉を輪状に掻き取るものでⅧ類。

壺（17）　Ⅲ類系で、空色味を帯びた透明釉である。

緑釉陶器

皿（15）　高台径6.4cmで、見込みに圏線が巡る。釉は外面底部と畳付けにはないが、施釉される部分は暗緑灰色に発色する。胎土は暗灰色で白色粒子が含まれ、須恵質に焼成される。

排土出土土器（Fig.59、CD-059061～064）

土師器

1は太めの粘土紐を巻き上げて作ったもので、口径2.8cm、器高3.1cm、底径4.4cmを測る。内面の中央に径0.9cm、深さ0.8cmのピット状の孔を穿つ。表面は風化が進行し、調整は明らかではない。

越州窯系青磁

壺（2）　Ⅲ類。肩部の資料で外面には縦方向の2条の凸線があり、表面に全体にわたって毛彫りによる文様を配している。釉は残存部分全面に施され、暗緑灰色に発色する。水注の可能性もある。

表土出土土器（Fig.59、CD-059065～070）

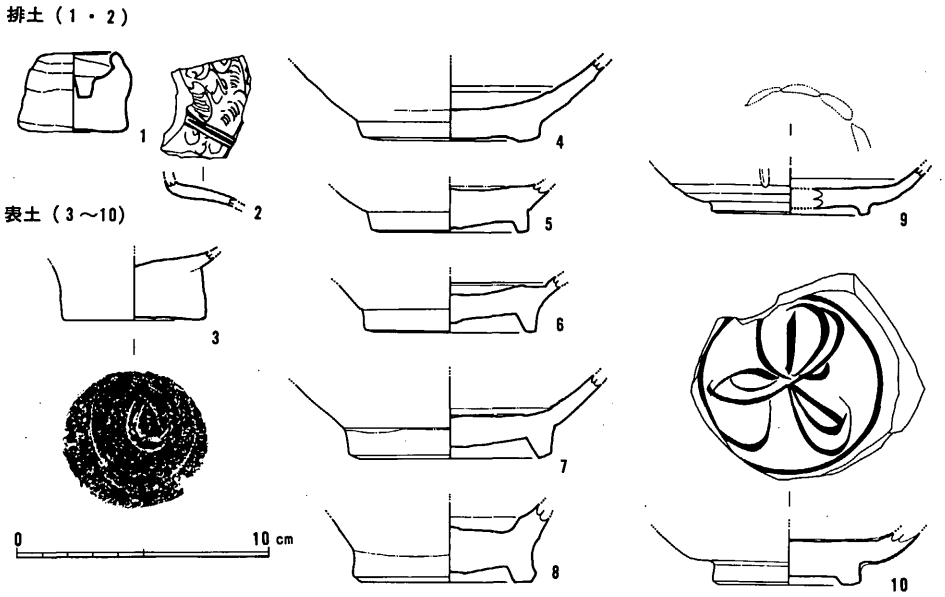


Fig.59　第59次調査排土・表土出土土器実測図（1/3）

土師器

椀（3）　高い円盤状の高台を有するもので、底部は糸切りされる。内面底部には調整時に付いたと思われる螺旋状の痕跡がある。高台径5.8cm。

白磁

椀（4～7）　4は見込みに沈線状の小さな段があり、Ⅳ-1-a類。5～7は見込みの釉を円形に拭き取っており、Ⅷ類。

壺（8）　高台から外面底部は施釉されない。畳付けには赤褐色に変色した部分が5箇所観察される。内面底部にも施釉され、やや黄色味を帯びた明灰白色に発色する。

越州窯系青磁

皿（9）　釉は畳付け以外は全面に施され、淡緑灰色を呈している。体部外面には縦方向の浅い沈線が確認され、見込みには目跡とみられる変色部分が円形に連続する。内面の底部と体部の境目付近に軽い段がある。I-2類。

龍泉窯系青磁

椀（10）　見込みに片切彫りの劃花文がある。I-2類。

(2)　瓦類（Fig.60～62、CD-059071～074）

軒平瓦（1･2）　1は上外区に珠文帯、脇区に線鋸歯文を配する。平瓦部の叩きは二重斜格子である。第2トレンチ暗褐色土層出土。2は上外

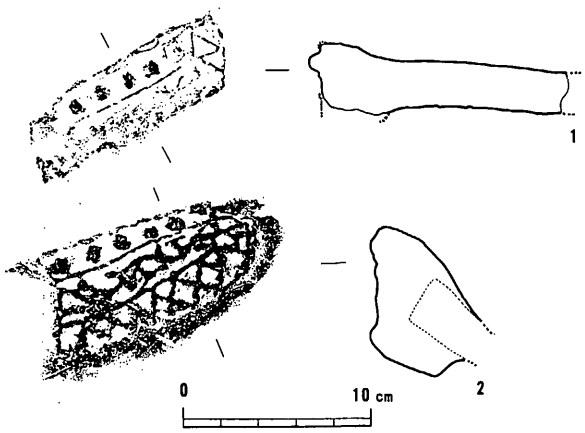


Fig.60　第59次調査出土軒平瓦実測図・拓影（1/4）

区に珠文帯、下外区、脇区に線鋸歯文を配する偏行唐草文とみられる。第1トレンチ明茶色砂層出土。

文字瓦（3・4）　3は「佐」でII-9類。第3トレンチ表土出土。4は「平井瓦」で陰刻で記銘する。I-2類。第2トレンチ暗褐色土層出土。

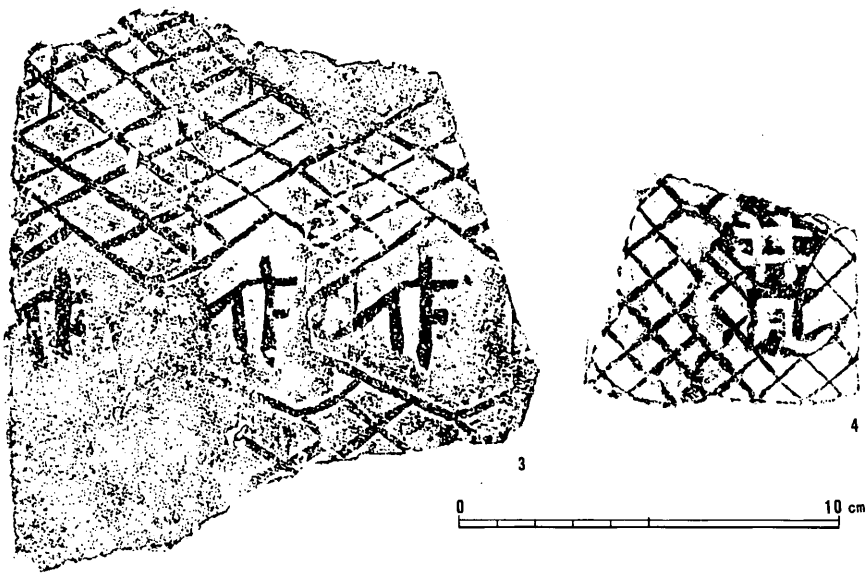


Fig.61　第59次調査出土文字瓦拓影（1/2）

瓦玉（5～10）　平または丸瓦の凹凸面はそのまま生かし、破断面を数カ所にわたって打ち欠き面調整を行っている。大きさは径2.1～3.5cmで略円形のものが多い。

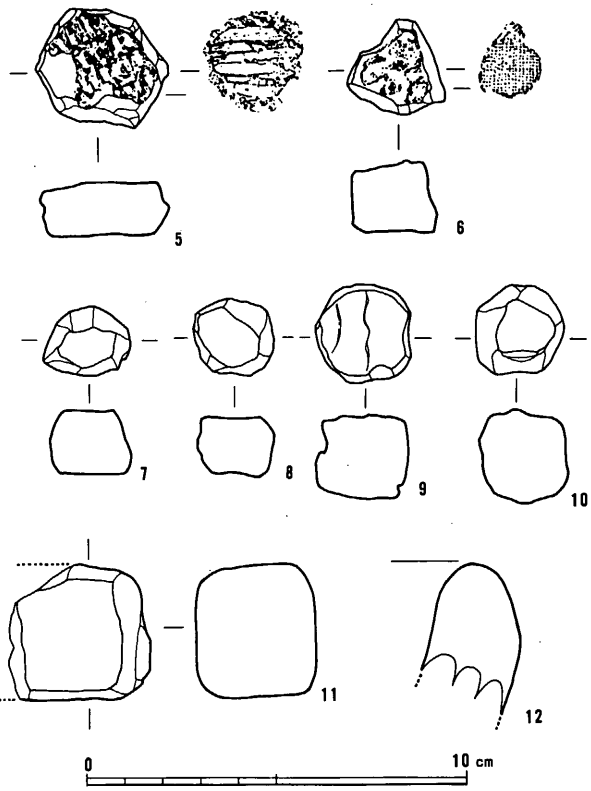


Fig.62　第59次調査出土瓦製品・土製品実測図（1/3）

(3)　土製品

生産関係遺物（Fig.62、CD-059075～078）

角柱状土製品（11）　断面形状は3.2×3.5cmの隅丸方形を呈するもので、長さは3.7cm以上を測る。胎土中には大粒の砂粒が多量に含まれている。第2トレンチ暗褐色土出土。

トリベ（12）　図には表現できていないが注ぎ口が残存しており、トリベと考えられる。胎土中には藁状のものが混入し、砂粒も多く含まれている。外面は明茶褐色、内面は明灰褐色を呈する。排土中採集。

(4)　石器・石製品

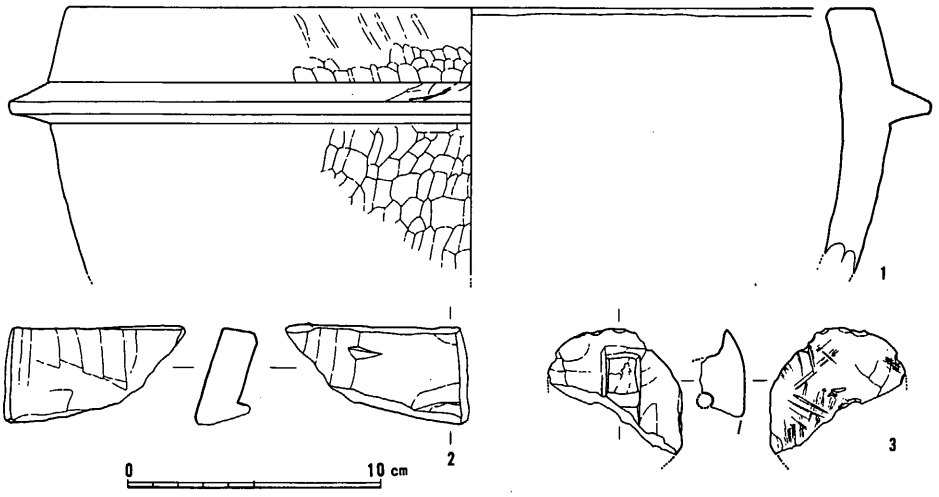


Fig.63　第59次調査出土滑石製品実測図（1/3）

滑石製品（Fig.63、CD-059079･080）

鍋（1）　口径30.2cmに復原される。表面には丁寧なヘラケズリの痕跡が確認される。第２トレンチ表土出土。

鍋加工品（2･3）　２は鍋の内面にあたる部分はほぼ当初の形状を留めているが、他の部分は切断による加工痕が目立つ。第１トレンチ明茶色砂層出土。３は鍋の耳部分を摘みに転用し、その中央部に穿孔を施している。裏面は凸レンズ状に加工しており、現状の周囲は薄く加工され鋭利である。表面には鍋使用時の変色がそのまま残り黒色を呈している。第２トレンチ暗褐色土層出土。

その他の石器･石製品（Fig.64･65、CD-059081～086）

石鏃（4）　縦長剝片を加工した石鏃で、安山岩製である。不整形な二等辺三角形を呈し、抉りはわずかである。最終剝離面が残り基部と側縁にごく簡単な二次加工痕がみられる。第１トレンチ暗灰色砂層出土。

石斧（5）　緑色片岩の磨製石斧の欠損品を再加工したものである。長さ5.0cm以上、幅6.5cm、厚さ1.3cmを測る。表土出土。

砥石（6･7）　６は長さ8.4cm、厚さ1.5cmで2面が研磨されている。緑色片岩とみられる。第

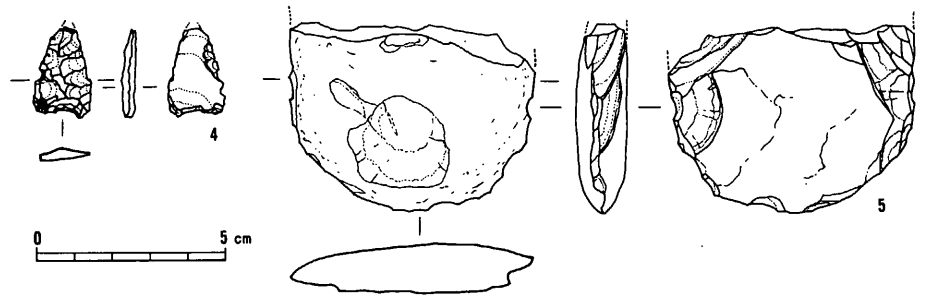


Fig.64　第59次調査出土石器実測図（1/2）

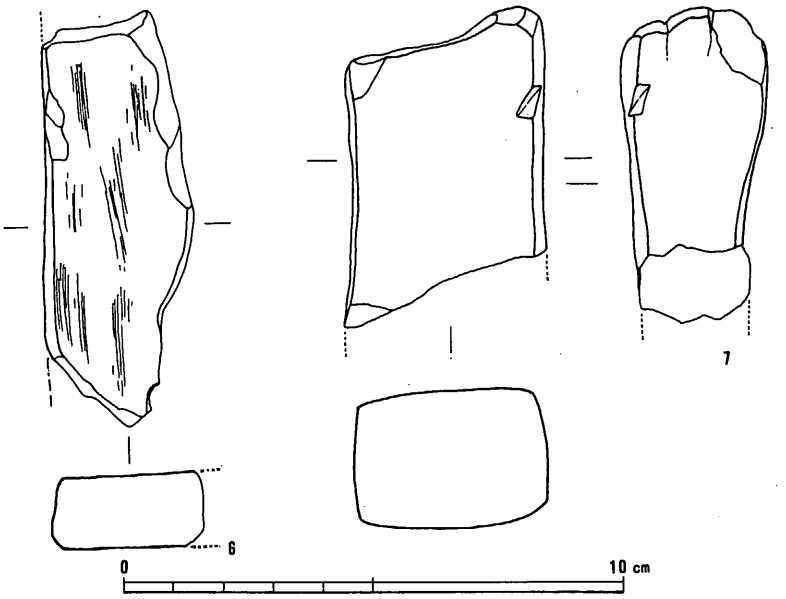


Fig.65　第59次調査出土石製品実測図（2/3）

2トレンチ暗褐色土層出土。7は砂岩製で、小口及び折損面以外は全面使用された形跡がある。第1トレンチ明茶色砂層出土。

4．小　結

検出された各層位は北側を流れる御笠川の氾濫によって形成されたものと考えられる。第2トレンチの状況をみると堆積の主体を成す暗褐色土層から茶色砂層は、11世紀後半以降の資料が多く含まれているが、龍泉窯系青磁や白磁椀・皿のⅨ類が含まれていることから、堆積層の形成は13世紀後半から14世紀前半頃に下るものであろう。その中で淡灰色粗砂層は図示した資料はないが、奈良時代のものを主体としており（白磁椀Ⅴ類の破片が1点含まれているが混入の可能性がある）、古い段階に形成された堆積である可能性が強い。

今次の調査では安定した遺構面を検出することはできず、朱雀大路の痕跡を発見することはできなかったが、それを破壊した川の氾濫の時期が概ね特定できたことは成果であった。

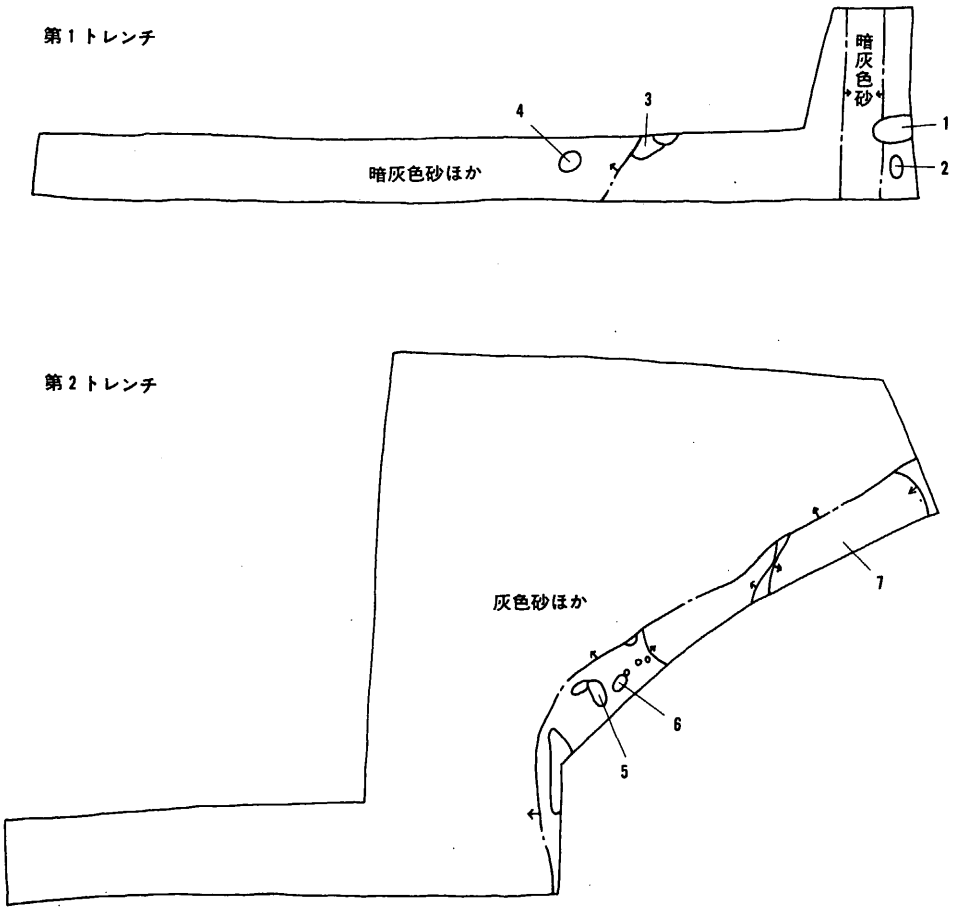


Fig.66　第59次調査遺構配置略測図

tab. 3　第59次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別	地区
1		ピット？　明茶色砂層に切り込む	1トレンチ
2		ピット？　明茶色砂層に切り込む	1トレンチ
3		ピット？　明茶色砂層に切り込む	1トレンチ
4		ピット？　明茶色砂層に切り込む	1トレンチ
5		ピット　地山に切り込む	2トレンチ
6		ピット　地山に切り込む	2トレンチ
7		流路　地山に切り込む	2トレンチ

・主要遺構の番号のみ記載

・その他の遺構（ＳＸ）は、Fig.119、Tab. 4 を参照

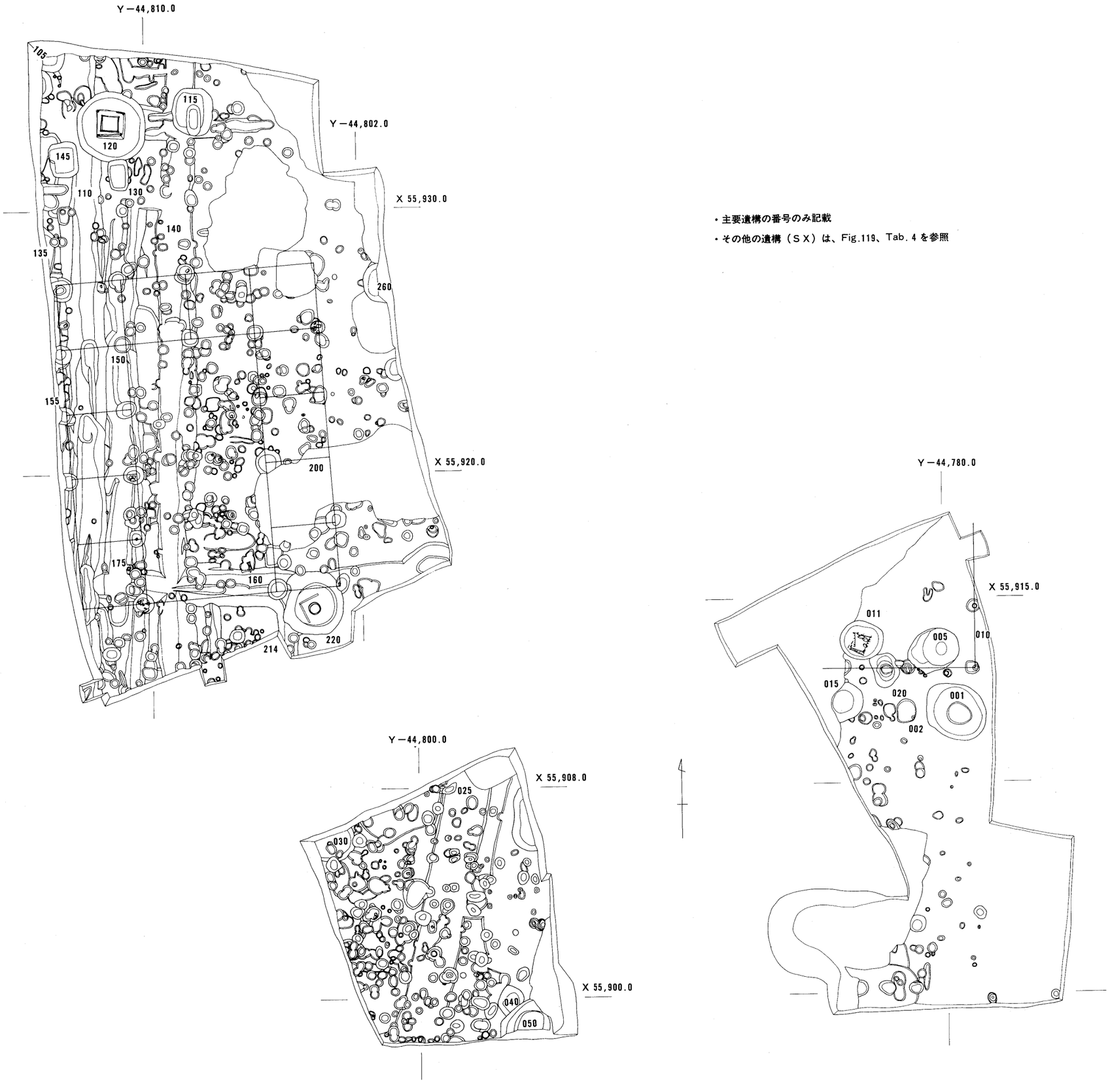


Fig.67　第64次調査遺構配置図（1/150）

(3) 第64次調査

1．はじめに

調査地は太宰府市大字南287番地ほかで、共同住宅建設に先立って発掘調査を実施した。調査区は道路を挟んで南北に分断されているが、一つの事業として実施したことから現場名称を第64次調査で統一し、遺構番号も一連のものとした。

現地での調査は昭和62（1987）年4月27日から6月18日まで実施し、開発対象面積は1265㎡であったが、試掘調査の結果北側調査区の東半分及び南側調査区の中央部に大きな撹乱が見つかり、遺構の残存はまったく期待できない状況であった。したがって調査範囲は北側調査区で敷地の西半分程度（以下北区と称する場合がある）、南側調査区では東西に分断された形（各々南西区・南東区と称する場合がある）で約半分の面積に縮小され、調査面積は3地点合算して476㎡である。調査は山本信夫、狭川真一が担当した。

2．層位など

調査前の土地利用状況は水田であり、その表土と床土を除去するとすぐに淡茶黄色粘質土ないしは黄色粘質土の地山が顔を出し、それが遺構面を形成していた。ただ、北側調査区の西端部分は地山がわずかに西側へ傾斜していることから、床土と遺構面との間に茶褐色土層（大きく上下に分層される）、淡茶色土層が堆積していた。前後関係は茶褐色土層が新しい。

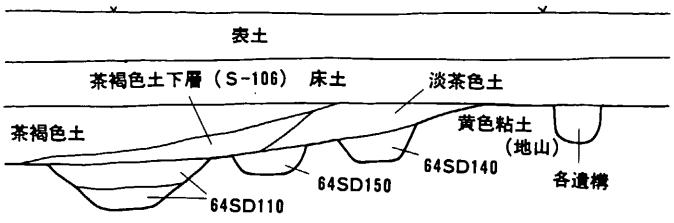


Fig.68　第64次調査堆積土層模式図

3．検出遺構

(1) **掘立柱建物**

64SB010（Fig.69、CD-064011～016）　南東区検出。東西2間、南北2間分を検出したが、北端になる柱掘り方cは染みのようなきわめて浅い小ピット状のものを確認したに留まり、実測段階までに消滅してしまった。

建物の軸は、梁間2間と想定した場合柱掘り方dと対になる掘り方が調査区の範囲内で検出されないことから、南北棟の可能性が考えられる。柱間はa-b間で2.33m、a-d間（dは板材の中心）で2.55mを測る。柱掘り方は径0.5m内外の不整円形で、柱は径0.15m程度の円形を呈し、土層観察から柱の周囲に灰色粘土を巻き付けていたものと考えられる。柱掘り方dについては底部からやや浮いた位置に長さ約0.2m、幅約0.13mの板材が横たわっていた。板の下面及

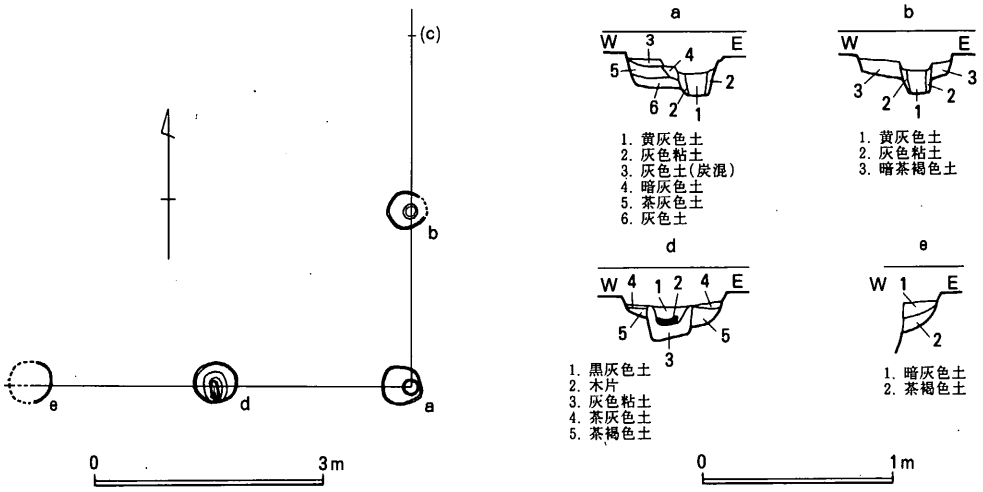


Fig.69　64SB100実測図及び柱掘り方土層観察図（1/100・1/40）

び周りには灰色粘土が残存していたが、板材の上部には黒灰色土が堆積し、他の柱痕跡とは異なっている。抜き取られた可能性も考えておきたい。柱筋の振れはちょうど座標北に合致するもので、この点でみれば政庁中軸線に対してはわずかに西に振れることになる。また柱掘り方dは64SK005と隣接するピットS-8を切っている。S-8は64SK020よりも新しく建物の上限の時期決定に参考となる。

64SB200（Fig.70、CD-064017～023）　北区調査範囲いっぱいに検出されたもので、その規模の大きさに調査当初建物とは気付かず柱掘り方の土層観察が一部を除いてできていない。建物は南北棟で南を除く3面に庇が付くものと考えられ、身舎部分の規模が南北4間、東西2間、庇を含めた外観は南北5間、東西4間となる。一見して掘り方x-yの間が広すぎることに気付くが残念ながら現地での検証ができていないので問題も残る。仮にそこに柱痕跡が存在するならば、柱掘り方t-uとx-yの間に各々想定して、身舎部分2×3間で四面に庇が付く建物を想定した方が良いかも知れない。また、さらに南に延びる案も捨てきれない。

柱間は掘り方の心心距離で約2.45mを測りほぼ等間と言え、柱掘り方は概ね略円形で、直径約0.58～0.95m、深さ約0.2～0.5mを測る（底部の標高は図の横に表示した）。柱痕跡を確実に認識できたのは掘り方iで、それによるとおよそ0.2m弱の直径がある。これ以外にも掘り方jでは底部に瓦を敷き、周囲に礫を配置していた。また掘り方qでは底部に薄い板材を敷いていた。

遺構の切り合い関係ではこれよりも新しい遺構として、64SD160があり下限の参考となる。また他の主要遺構との関係ではこの建物が新規になる形で検出されている。なお、64SE220と掘り方の2つが切り合っているように見えるが、検出段階では接していた程度で明確な切り合い関係を提示できているとは言いがたい。

(2)　井戸

64SE001（Fig.71）　東西2.25m、南北2.15mの掘り方で、検出面からの深さ約2.5mを測

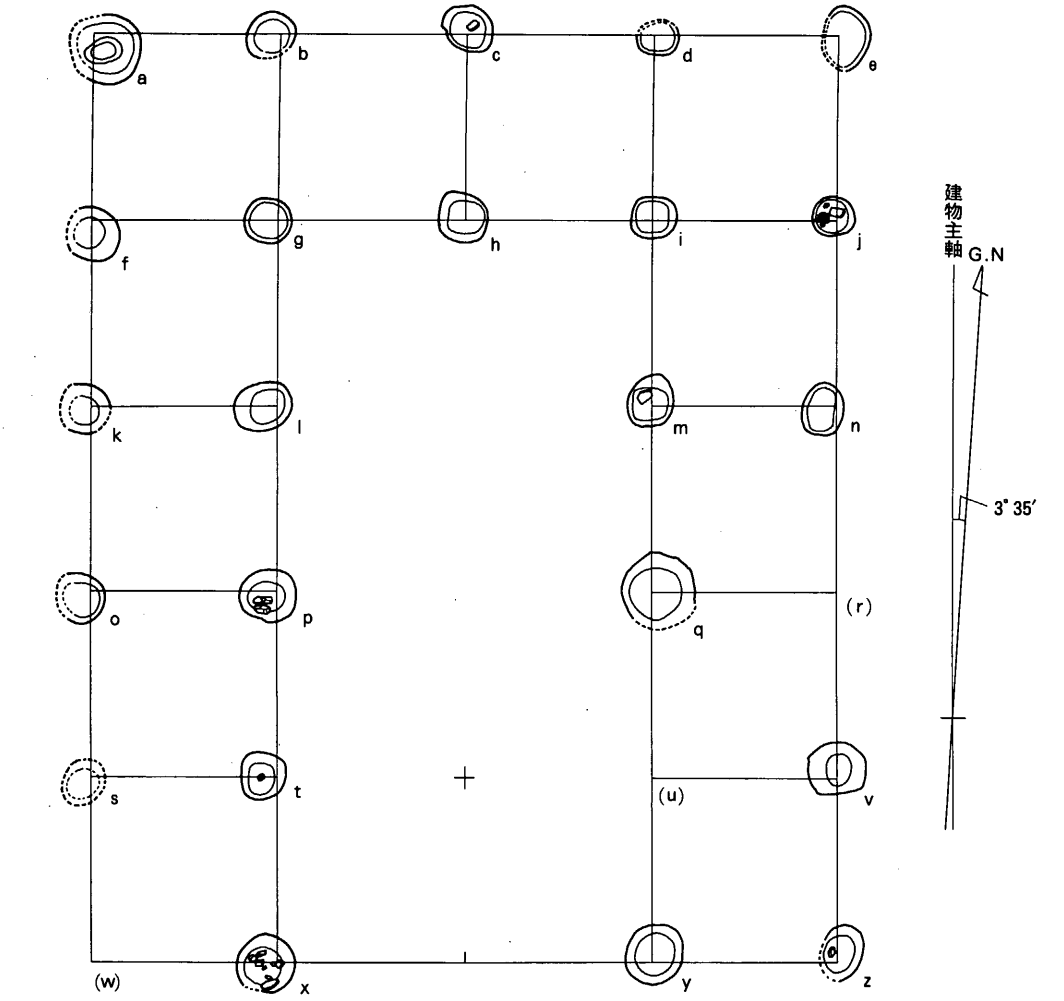


Fig.70 64SB200実測図及び柱掘り方土層観察図 (1/100・1/40)

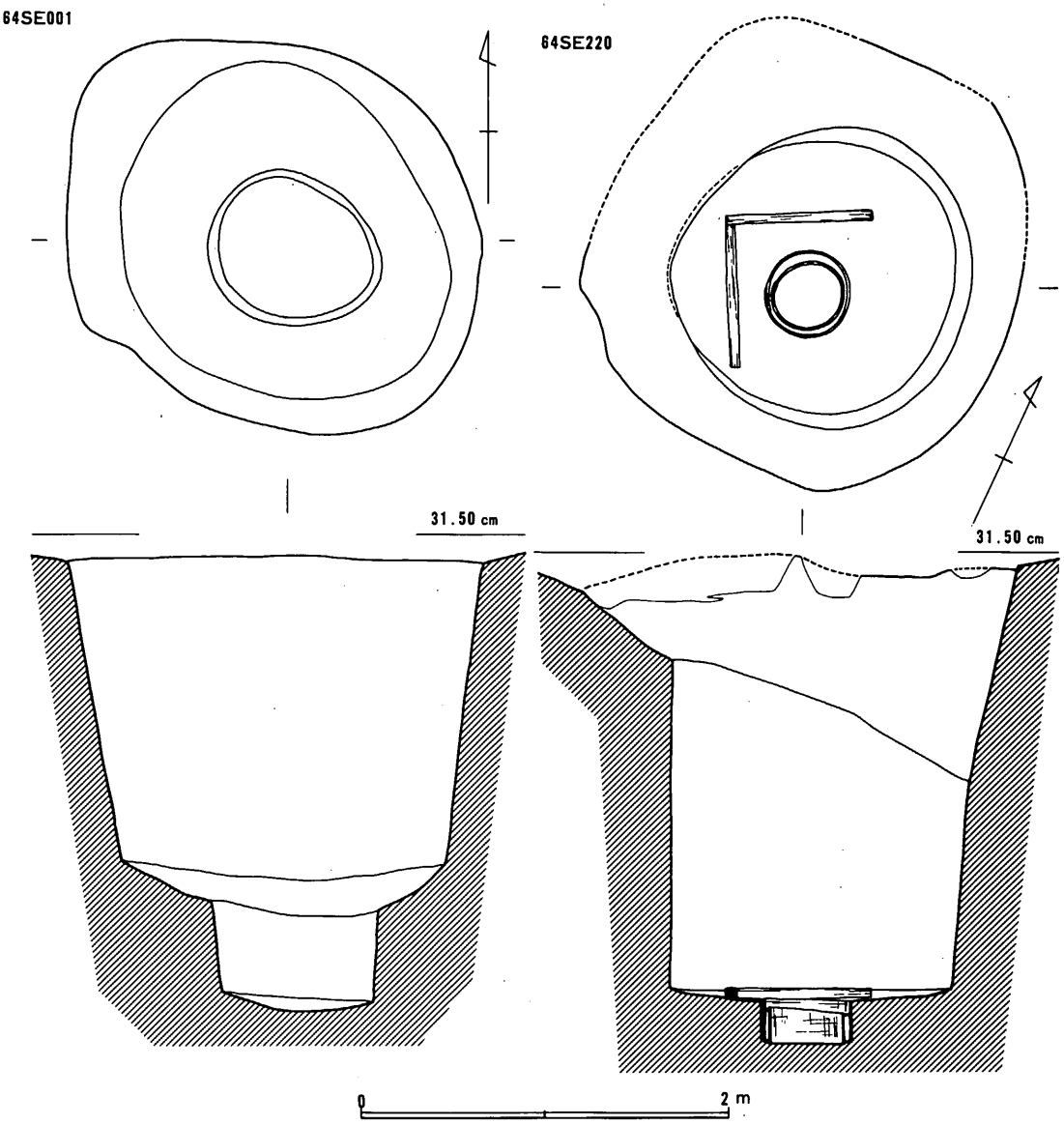


Fig.71　64SE001・220実測図（1/40）

る。上位から1.9m付近で0.85×0.95mで略円形のプランが見え、これが最下にある曲物の痕跡と考えた。枠の痕跡は不明瞭でその規模は確認できていない。遺物は取り上げに際して上位から上層、枠内（実際には枠は存在しない）、下層の順で取り上げた。動物骨は埋土（枠内表記）中程に集中して存在し、さらに曲物プラン検出面直上でも動物骨の検出があった。なお裏込土は検出段階で色調の異なった部分を指し、北側から西側にかけて残存していたものをそれと考えた（S-1b／Fig.119参照）。南東区。

64SE011（Fig72）　検出段階から方形枠の存在がわかる状況であった。掘り方は略円形で、1.65×1.45m、深さ1.75m以上(安全管理上、完掘していない)を測る。枠は長さ1.2m、幅0.4

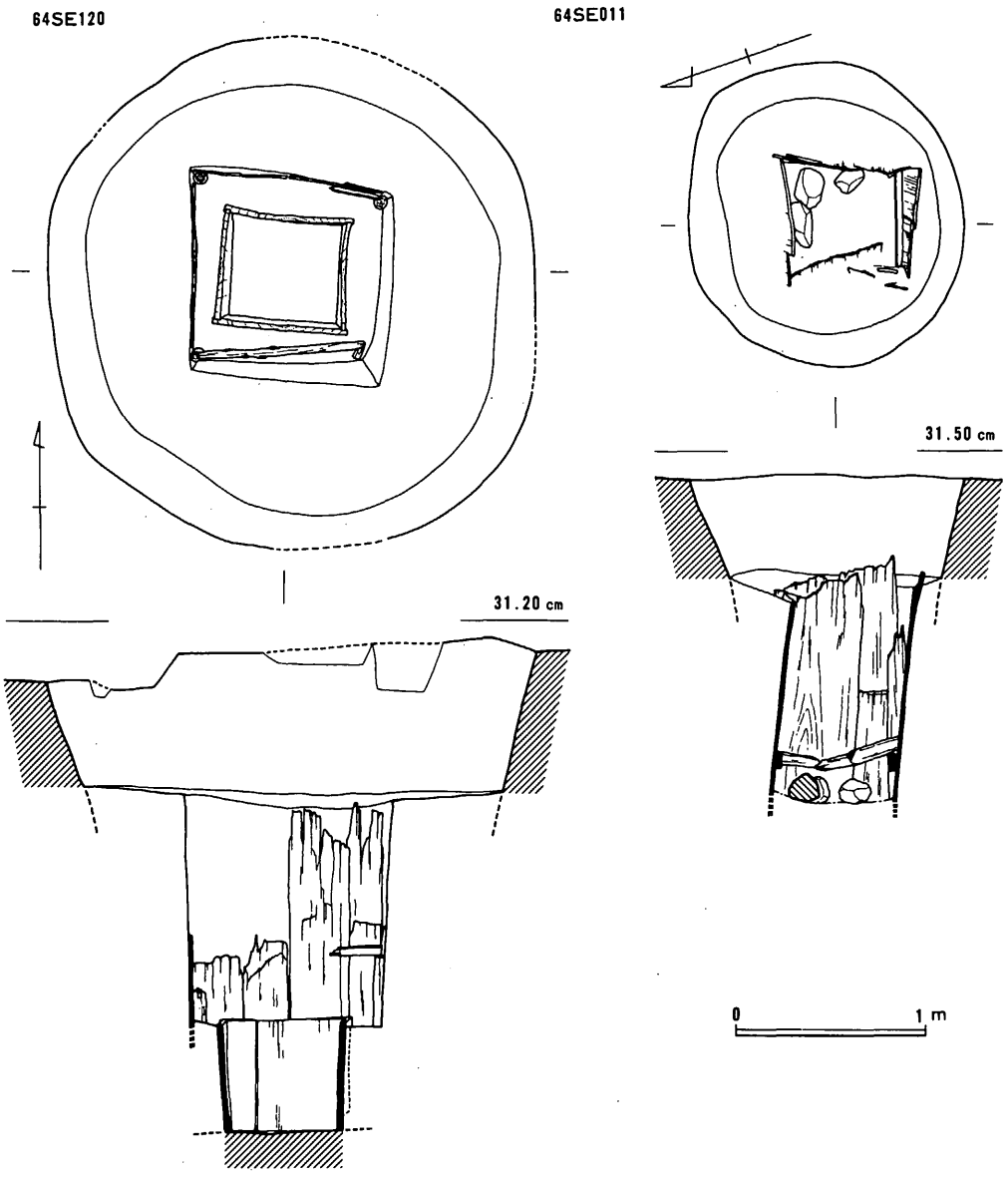


Fig.72　64SE011・120実測図（1/40）

m前後の板材を立てて組み合わせ、横桟（幅5cm前後、厚さ3cm内外）で固定され、その規模は一辺0.6～0.75mである。枠内の検出底部に15cm前後の石が数個みられたが転落であろう。南東区。

64SE015　撹乱で西半分を失う。略円形の掘り方は1.6×1.2m以上、深さ2.0mを測る。南東区。

64SE050　撹乱及び64SK040土坑に切られている。1.9m以上×1.5m以上で、掘り方は略円形を呈している。危険なため完掘していないが、堆積土は検出面から黒灰色土、黒色粘質土、黄灰色粘質土、暗灰色粘質土の順ですべて盆状に堆積する。黒色粘質土は薄く堆積し、炭化物の堆積の可能性がある。南西区。

64SE120 (Fig.72、CD-064028～039)　2.6×2.65ｍでほぼ円形に近いプランを有し、検出面から底部までの深さは2.4ｍを測る。枠は２段分検出されたが、下段のものは一枚板を立てて組み合わせるもので、一辺0.55～0.63ｍ、高さ0.55ｍ前後を測る。上段は下段より大きく四隅に円形の棒材を立て、その背後に幅0.25～0.33ｍで、長さ1.62ｍ程度(下段の背後に約0.5ｍ程度が埋まっており、見えているのは1.15ｍほど）の板材を並べ、幅４㎝程度の角材を四隅の棒材に差し込み固定するものである。板材の残りは悪いが、一辺３～４枚で構成されていたらしい。埋没土の堆積状況は、枠検出面（上から約0.8ｍ）までは上位に淡茶色土、下位に淡黄色土が堆積していたが、淡黄色土の上面から擂り鉢状に大きな窪みが切り込むように検出され、そこに黒色土が堆積していた。人為的なものかどうかは判断できなかった。64ST130に切られている。北区北端。

64SE220（Fig.71）　東西2.5ｍ、南北2.37ｍで円形に近い掘り方を有し、検出面から底部までの深さは約2.6ｍである。底部には曲物が２段になって埋め込まれており、その上位に方形枠存在の証拠となる横桟が残存していた。桟はいずれも長さ0.8ｍで臍により組み合わされるが、２片のみの残存であり、当初の規模は明確にはできなかった。なお土色の変化による痕跡は桟検出面よりも若干上位で確認した。埋没土の堆積状況はやや複雑で、検出面上位から順に黒灰色土、茶色砂、茶灰色土、明茶色砂、黒色粘質土となるが、すべて中央部が盆状に窪み、しかも茶色砂は茶灰色土に、明茶色砂は黒色粘質土に切り込んだような状態で確認されたが、いずれも堆積土の沈み込みによるものと判断している。遺物は各層から多量に出土し、編年研究の一助になりそうな資料である。なお、遺物報告に際して最上層と記載するものは上面で切り合う遺構から遺物の混入を最小限に食い止めるために、黒灰色土を便宜的に分割したものであり、本来は黒灰色土の範疇で考えるべき資料である。北区南端。

64SE260　東側は調査区外、南と北側は大きな撹乱で壊されているため当初の形状や規模は明らかではない。また上記のような事情から崩落が起こりそうな気配であったため完掘していない。確認できた規模は南北1.5ｍ、東西0.7ｍ程度である。深さは約0.7ｍほどのところで断念した。北区。

(3)　溝

64SD025　検出長10.6ｍ、幅1.65ｍ前後、深さ約0.1ｍで、南西区を略南北に縦断する形で検出された。撹乱を除いてこの地点で最も新しい時期に帰属する。

64SD110　検出長19.5ｍ、検出面での幅1.4～1.6ｍ、深さ0.15～0.3ｍ前後を測る。溝底の標高は北が高い。茶褐色土層及びその下層（S-106）を除去した段階で検出されたが埋土の色調はきわめて類似したものである。プランの不明瞭な部分があったため一段掘り下げて再確認しており、上下層の区別はこれによるものであり、きわめて人為的であることを付記しておく。64SD150を切っている。

64SD135　南北溝の一部と推定され、検出長1.9ｍ、幅0.35ｍ、深さ約0.2ｍを測る。検出位置

から見て後述する64SD155の北側延長部と考えられる。

64SD140（CD-064024・025・053）　南北溝で検出長23.3m、幅0.9～1.4m、深さ0.1～0.3mを測る。埋土は灰黄色粘質土の単一層である。溝底の標高は北が高い。溝の振れは調査区の範囲内で、およそN-0°40′-Eである。座標計算結果から大宰府朱雀大路東側溝と認識できる。なお本遺構は検出されたこれに切り合う遺構の中で最も古い状況を示している。

64SD150　64SD110に切られる南北溝で約11m、幅0.9～1.2m、深さ0.15～0.3mを測る。上面からの遺構の切り込みが激しく、本来の形状が大きく崩れている。なおS-170とした南北溝とは確実に連続するわけではないが、埋土や検出状況などからみて同一の遺構と判断して差し支えないだろう。溝底の標高は北側が高い。

64SD155　南北溝の一部と推定され、検出長5.8m、幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。64SD135と連続するとみれば、64SD110の西に接する形で検出された同類の溝の一部である可能性もある。

64SD160　北区南端を東西に横断する形で検出された溝で、周辺の遺構群中では最も新期に属する。64SD025と埋土の上で近似性がある。検出長14.5m、最大幅1.45m、深さは最も深いところで約0.2mを測る。64SD214とは確実に切り合うが、検出面で識別困難であった。

64SD165　検出長2.3m、最大幅0.5m、深さ約0.1mを測る。長土坑状を呈するが、条坊痕跡の場合こうした形状のものが区画溝の役割を果たしていることもあり、ここでは溝として報告書した。北区検出。

64SD175　長さ5.5m、幅0.9m、深さ0.1m前後を測る。64SD110・150と接しているが、上からの遺構に阻まれて切り合い関係は明確ではない。64SD165同様に長土坑状を呈するが、条坊痕跡の場合こうした形状のものが区画溝の役割を果たしていることもあり、ここでは溝として報告書した。北区検出。

64SD214　64SD160と南北方向に繋がる溝である。埋土は64SD160と同じで切り合いの識別はできなかった。深さが異なるだけで、同時併存の可能性が高い。北区。

(4)　土坑

64SK002　0.92×0.75m、深さ0.1m内外の浅い土坑である。南東区。

64SK005　長軸2.05m、短軸1.55mの不整形プランで検出されたが、東側に寄って円形を呈し深くなる部分がある。その部分は径約1.8m、深さ約0.9mである。掘立柱建物64SB010柱掘り方dに切られている。南東区。

64SK020（Fig.73、CD-064027・028）　長軸1.25m、短軸0.95m、深さ0.72m前後である。土坑内は3段になっている。底部に

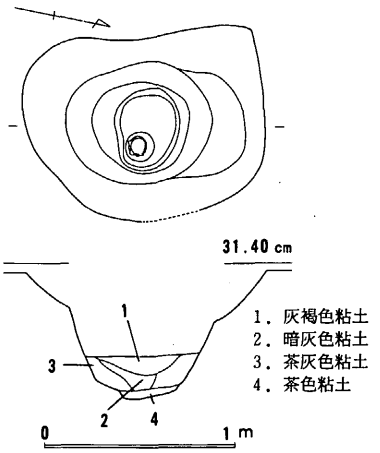


Fig.73　64SK020実測図（1/40）

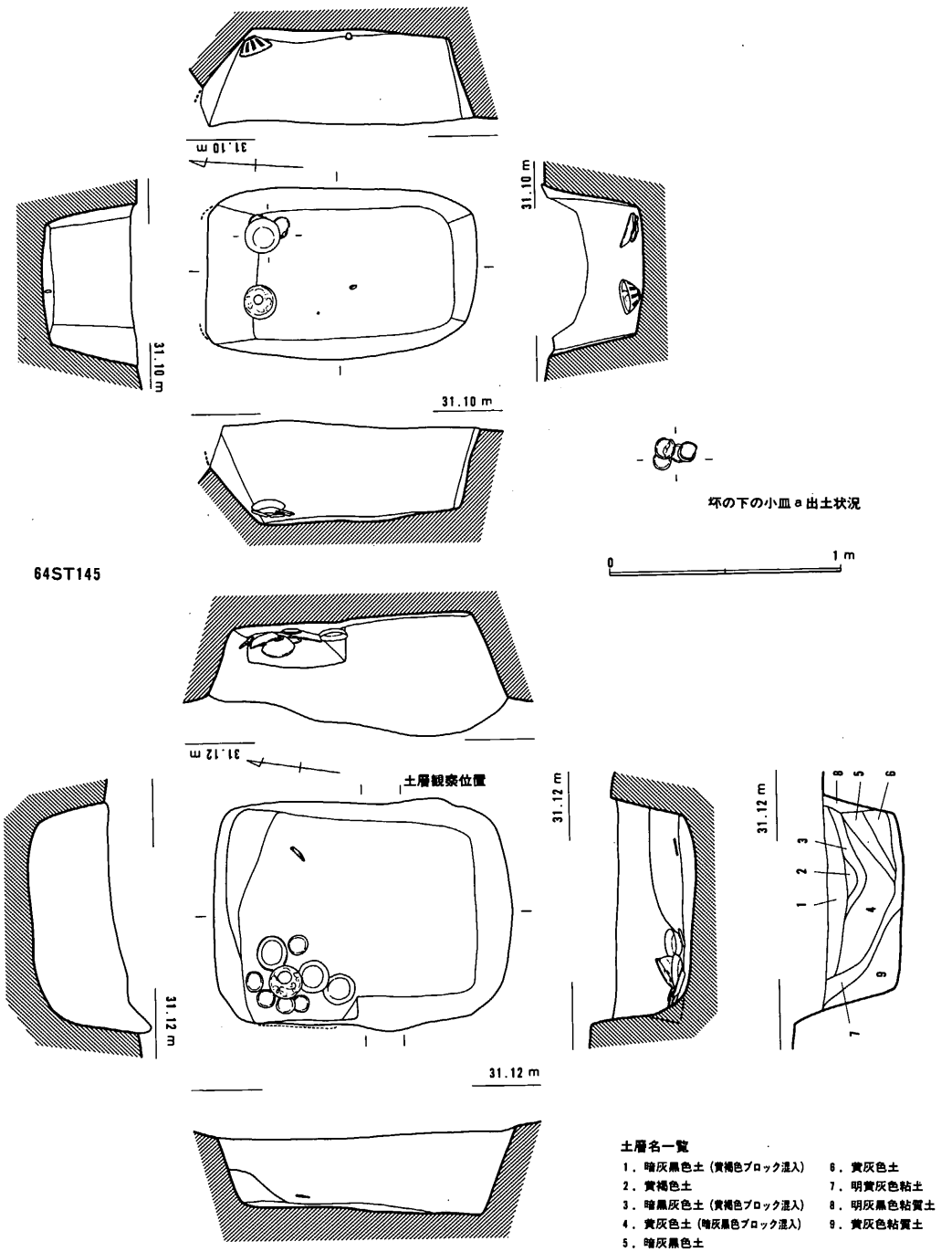


Fig.74　64ST130・145実測図（1/30）

須恵器壺が座った状態で出土した。ピットS-8及び64SE011に切られる。南東区。

64SK030　調査区隅で検出されたため全体の規模や形状は不明。検出長1.0×1.5m、深さ0.1～0.2mを測る。南西区。

64SK040　1.65×1.4m、深さ0.13m前後を測る。64SE050を切っている。南西区。

64SK105　調査区隅で検出されたため全体の規模や形状は不明。検出長0.9m×0.7m、深さ0.23m前後を測る。

64SK115　南北1.8m、東西1.58mで隅丸方形状を呈する土坑で、底の一部に長円形のピットが付帯する。深さ0.2～0.3mを測り、64SD140を切っている。北区。

64SK154　東西1.1m、南北0.6mの隅丸長方形を呈する。64SD140を切っている。北区。

(5)　土壙墓

64ST130（Fig.74、CD-064040～044）　隅丸長方形のプランで、南北1.17m、東西0.74m、深さ0.45m内外を測る。土坑底部付近の北側土坑壁近くに、供献土器群が床面より若干浮いた位置で検出された。土器は西側に青磁椀1点、東側に土師器坏1点とその下に土師器小皿5点が若干の傾きはあるものの正位置で検出された。両者の間が約15cmあり、当初の位置を動いていることはほとんど考えられないため、この間に頭部が置かれていた可能性を想定しておきたい。64SE120及び周辺のピットを切る形で検出された。釘の出土はなく、埋土の観察でも木棺の痕跡は確認されなかった。北区。

64ST145（Fig.74、CD-064045～052）　64ST130の西側に並ぶように検出されたもので、平面形状は隅丸長方形を呈し、南北1.30m、東西0.99m、深さ0.35m内外を測る。土坑北西隅の西壁を直に落としてその部分を拡張したのち、供献土器を配置している。土器のほとんどはほぼ床に密着するように検出され、正位置をほぼ保つことから当初から土坑内にあったものと考えられる。土器群は中央に青磁椀1点を置き、その周囲に青磁椀を取り囲むかのように土師器坏3点と同小皿5点が置かれていた。埋土中から鉄釘1点が出土しているが、土層の観察では木棺の痕跡は確認されなかった。土層の落ち込み状況から木蓋土壙墓の可能性を考えている。北区。

(6)　その他の遺構

64SX037　0.45×0.55m、深さ約0.2mのピットである。切り合い関係では周辺のピット中最も新しい。南西区。

64SX043　0.42×0.47mの略円形で、深さ0.2mを測るピットである。底部近くに拳大の石が検出された。南西区。

64SX053　径0.2m、深さ0.1mの小ピットである。南西区。

64SX077　径0.4m内外、深さ0.15mのピットである。南西区。

64SX079　径0.2～0.25m、深さ0.1mのピットで、64SX100の上から切り込んでいる。南西区。

64SX083　径0.4～0.45m、深さ約0.1mのピットで、64SX100の上から切り込んでいる。南西区。

64SX085　東西1.1m、南北1.5m、深さ0.1m内外の浅い窪み状遺構である。64SX100を切っているが、西側は64SD025に切られ消滅している。南西区。

64SX100　南西区の東側で検出された小さな段落ち状遺構で、検出長10.3m、最大幅2.7m、深さ約0.1mを測る。西側及び他の地区では検出されていないが、遺構として捉えるよりも整地

の可能性を考えた方がよいかも知れない。

64SX126　長さ0.8m、幅0.25m、深さ0.05m内外で不整形なピットである。北区。

64SX137　64SD110に切り込むピット群である。北区。

64SX172　0.9×0.4m、深さ0.05mのピットで64SK154に切られ、64SD140を切っている。北区。

64SX173　64SD110の埋土を除去した段階で確認したピット群であるが、埋土がすべて近似しており溝遺構の上から切り込まれていた可能性は捨てきれない。北区。

64SX184　径0.35×0.4m、深さ0.15mを測るピットで、64SD140を切っている。北区。

64SX185　検出長1.2m、幅0.2～0.25m、深さ0.05m以下の小溝状ピットである。北区。

64SX197　64SX185の東側に切り合うピット群である。北区。

64SX238　径0.43m内外、深さ0.5mのピットで、撹乱（S-206）に切られる。北区。

64SX246　径0.2m内外の小ピットである。北区。

64SX278　検出時のプランは隅丸略方形で、一辺約0.55m、深さ0.15m程度である。北区。

64SX298　64SD150（S-170）の埋土除去後に確認されたピット群である。埋土がすべて近似しており溝遺構の埋土上から切り込まれていた可能性は捨てきれない。北区。

64SX303　64SD110より新しいピットで、径約0.25mを測る。北区。

4．出土遺物

(1)　**土器・陶磁器**

64SB010出土土器（Fig.75、CD-064060～061）

須恵器

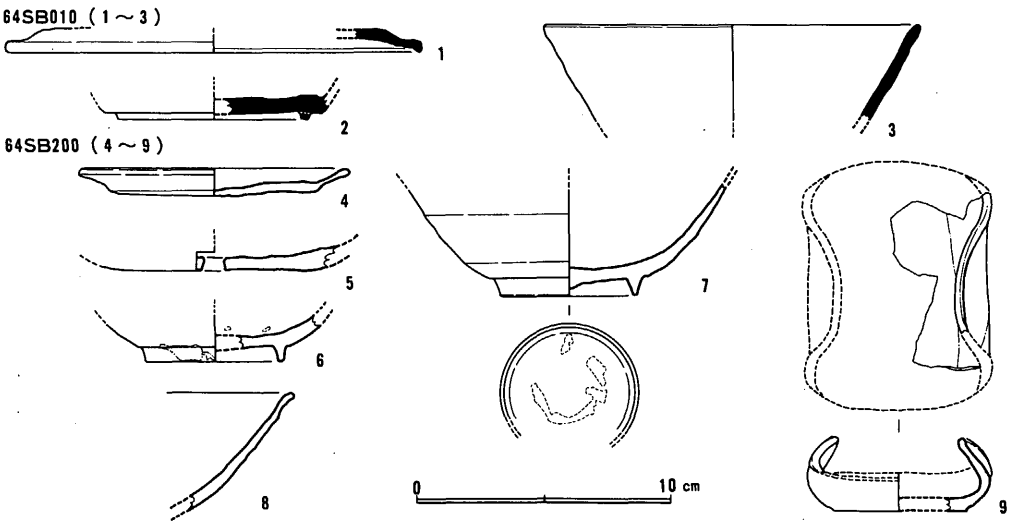


Fig.75　64SB010・200出土土器実測図（1/3）

蓋3 (1)　口径16.5cmに復原される。残存部分の調整はヨコナデである。柱掘り方b出土。

坏c(2)　底部のやや内側に小さな台形状の高台が付く。高台径7.7cm。底部はヘラ切りのままである。柱掘り方e出土。

坏 (3)　口径15.0cm。体部はヨコナデである。柱掘り方e出土。

64SB200出土土器 (Fig.75、CD-064062～067)

土師器

小皿a (4)　口径10.8cm、器高1.1cm、底径8.4cm。底部はヘラ切りされる。柱掘り方q出土。

坏a (5)　底径7.1cmで、底部はヘラ切りされる。中央部に径0.9cmで円形の穿孔がある。焼成前に穿たれたものである。柱掘り方v出土。

青磁

椀 (6･7)　6は高台径5.6cm。外面底部中央付近と高台外縁、見込みに目跡が残る。釉は淡緑茶色に発色し、残存部のほぼ全面に認められる。7は高台径5.4cm。外面底部中央付近に目跡が残る。釉は淡緑茶色に発色し、残存部のほぼ全面に認められる。両者とも胎土は明茶灰色を呈し、白色の粒子がごく微量混入している。形状、釉調等共通点が多く、同一個体ではないが同じタイプと思われる。産地は不詳であるが、高麗青磁の可能性もある。6は柱掘り方x出土、7は柱掘り方j出土。

緑釉陶器

椀 (8)　釉は残存部全面に薄くかかり、明緑黄色に発色し光沢がある。胎土は明茶白色で硬質に焼成される。柱掘り方q出土。

灰釉陶器

耳皿 (9)　糸切りされる底部は径5.2cm。釉は外面底部にはなく、内面底部と外面の折り曲げられた部分で明緑灰色に発色する。柱掘り方n出土。

64SE001上面出土土器 (Fig.76、CD-064068･069)

須恵器

鉢 (1)　底径10.0cm。底部は糸切りされる。篠窯系。

64SE001枠内出土土器 (Fig.76、CD-064070～081)

土師器

坏a (2)　口径11.0cm、器高1.5cm、底径8.1cmを測る。底部はヘラ切りされる。

脚付皿 (3)　口径13.6cm、器高1.3cm (皿部) を測る。底部はヘラ切りされる。体部外面に脚が貼り付けられる。

椀a (4)　口径13.6cm。平底の底部はヘラ切りされる。

椀c (6･7)　口径10.6･11.0cm、器高3.1･4.5cm、高台径5.3･6.8cmを測る。

大椀c (5)　口径15.5cm、器高5.1cm、底径7.4cmを測る。

器台 (8)　坏部内面に複数の墨書があるが、いずれも判読できない。一部に文字様のものを

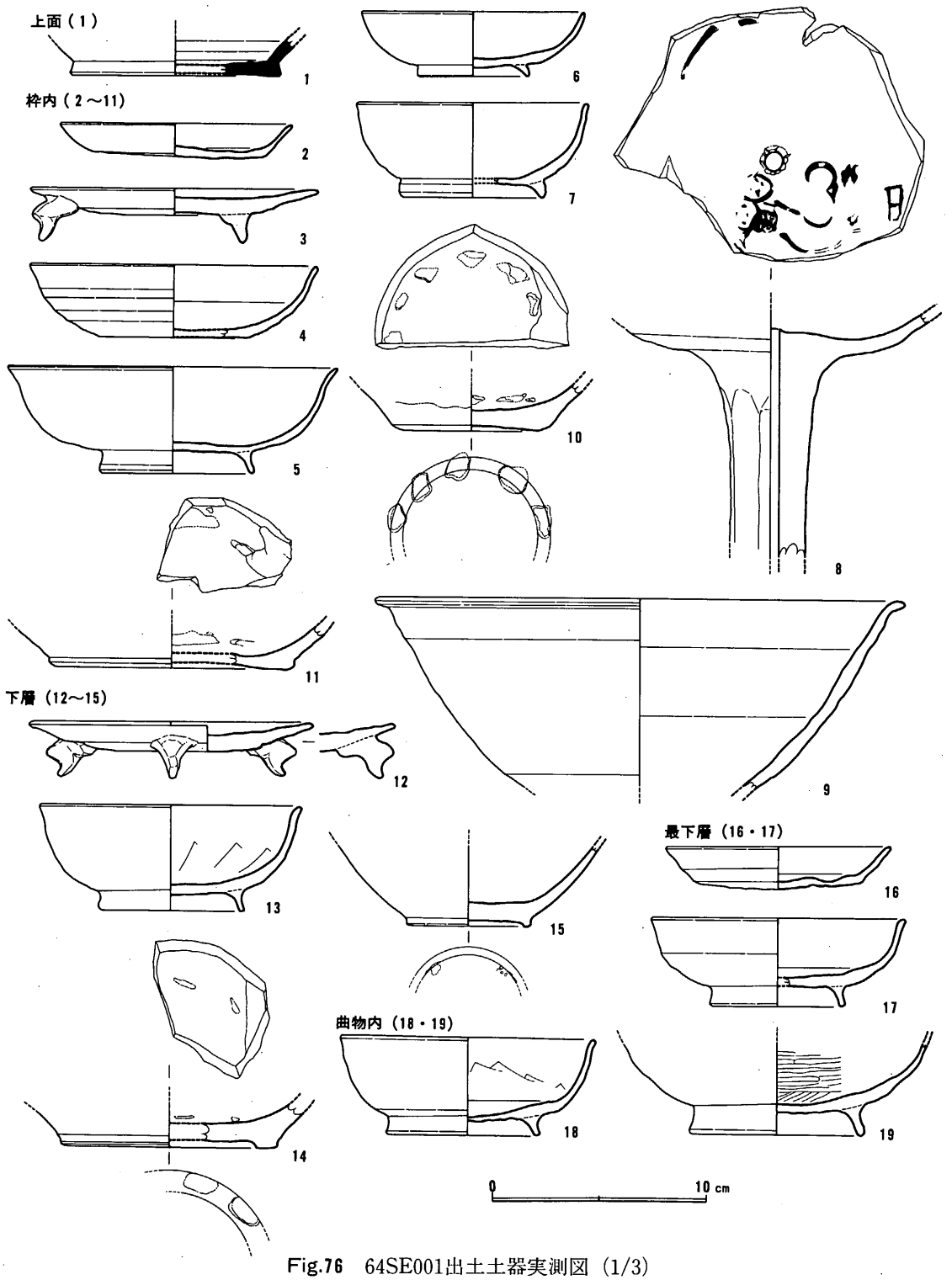


Fig.76　64SE001出土土器実測図（1/3）

認めるがほとんどが稚拙な絵画風である。

鉢 (9)　口径25.0cm。表面は著しく風化し、調整を確認しづらいが、体部外面下位にヘラ切りもしくは回転ヘラケズリとみられる痕跡を残す。

越州窯系青磁

椀 (10･11)　10は底径7.6cm。外面底部周囲と見込みに目跡が確認される。釉は淡緑灰色に発色し光沢はほとんどなく、体部外面下位には施釉されない。II-3-a 類。11は底径11.0cm。見込みに大きめの目跡が付着する。明緑白色に発色する釉は残存する範囲内で外面にはかからない。露胎部は茶褐色を呈する。II-2-b 類。

64SE001下層出土土器 (Fig.76、CD-064082～085)

土師器

脚付皿 (12)　口径13.5cm、皿部の器高1.4cm、脚を含めた高さ2.7cmを測り、底部はヘラ切りされる。底部と体部の境目の3箇所に脚が貼り付けられる。

椀ｃ(13)　口径12.4cm、器高5.0cm、高台径7.0cm。底部はヘラ切りされ、内面にはミガキｂが観察される。

越州窯系青磁

椀 (14･15)　14は高台径10.2cm、釉は淡緑灰色に発色し、畳付け以外に施釉される。見込みに目跡があり、畳付けには茶褐色の略半円形状に変色した部分が並ぶ。I-2-ウ類。15は高台径5.9cmで、釉は淡緑色に発色し鈍い光沢がある。高台内側に沿って目跡が観察される。I-2-ア類。

64SE001最下層出土土器 (Fig.76、CD-064086･087)

土師器

坏ａ(16)　口径10.6cm、器高2.1cm、底径8.0cm。底部はヘラ切りされる。

椀ｃ(17)　口径12.0cm、器高4.2cm、高台径6.4cm。内面の調整は風化により不明。

64SE001曲物内出土土器 (Fig.76、CD-064088･089)

土師器

椀ｃ(18)　口径12.1cm、器高4.6cm、高台径7.3cm。内面にはミガキｂが施される。

黒色土器

椀ｃ(19)　A 類。高台径8.4cm。内面にはミガキｃが観察される。

64SE011出土土器 (Fig.77、CD-064090～093)

土師器

小皿ｃ(1)　口径12.0cm、器高2.6cm、高台径7.6cmを測る。底部はヘラ切りされる。枠内埋土中出土。

椀ｃ(2)　口径12.5cm、器高4.6cm、高台径9.3cm。底部はヘラ切りされる。裏込土出土。

器台 (3)　口径20.4cm。底部はヘラ切りされたものとみられる。埋土中出土。

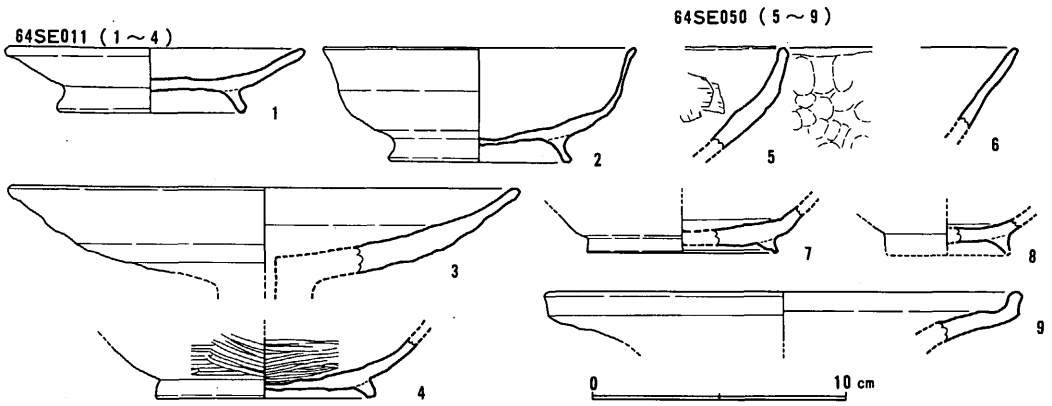


Fig.77　64SE011・050出土土器実測図（1/3）

黒色土器

椀c（4）　B類。高台径8.8cmで、内外面ともにミガキcが観察される。枠内埋土中出土。

64SE015出土土器（Fig.78～80、CD-064096～130）

土師器

坏c（1）　わずかに外方へ踏ん張る形状の高台は径12.9cm。外面体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリを施し、他の部位にはミガキaを施す。

鉢（2）　内湾する口縁部を有し、口縁部外面にはミガキaがわずかに観察される。口径18.4cmに復原されるが、小片である。

高坏（3）　脚端部径11.3cm。坏部の内外面にはミガキaが観察され、脚部はヨコナデで仕上げられる。

製塩土器

鉢（4）　口径12.4cmに復原できる。内外面ともに指圧痕が残る。

甕（5～9）　5は小形のもので、口径13.2cm、器高13.7cm、胴部最大径13.6cmを測る。調整は口縁部がヨコナデ、胴部外面が縦方向のハケ目、内面がヘラケズリで、頸部内面に指圧痕がみられる。6～8は頸部内面にヘラケズリによる明瞭な稜を作るもので、6・8では口縁部を大きく外方に開くが、7ではやや外反させる程度である。いずれも胴部の外面は縦方向のハケ目、内面はヘラケズリである。口縁部は基本的にヨコナデで終わるが、6の内面は横方向のハケ目である。口径26.4・27.4・27.6cm。9は口縁部を外湾させるもので、7に近いが口縁端部よりもやや内側に最上位がくる。外面はハケ目、内面はヘラケズリである。口径26.0cm。

須恵器

蓋a3（10・11）　口径11.7・13.9cm、器高1.7・1.1cmを測る。天井部はヘラ切りされる。

蓋3（12・13）　口径15.4・14.6cm。両者とも天井部はヘラケズリされる。

蓋c3（14～19）　口径12.6～15.8cm、器高1.5～3.0cmを測る。天井部は17・18が回転ヘラケズリ、他はヘラ切りされる。摘みの形状はいずれも釦状を呈し低めである。

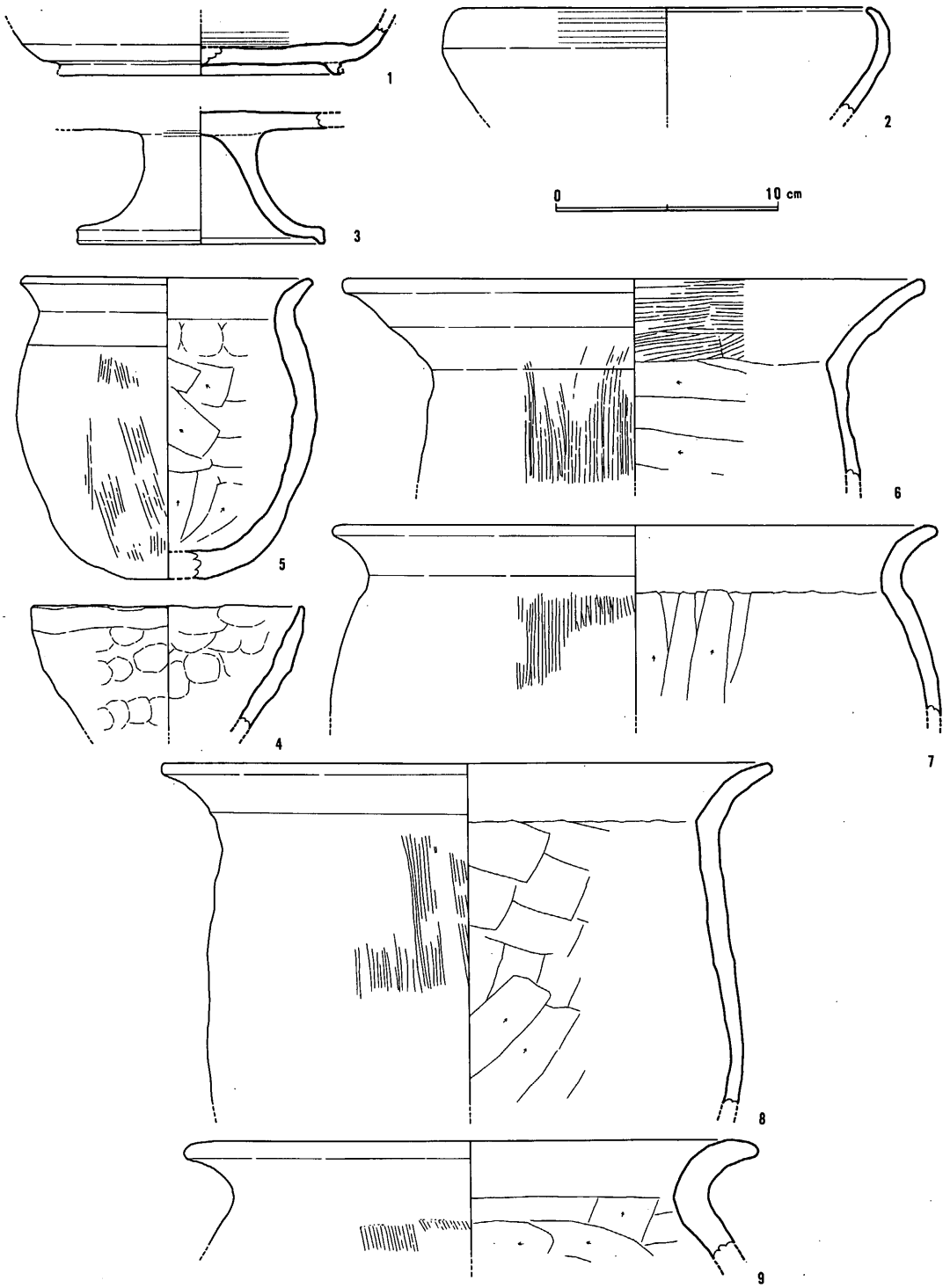


Fig.78 64SE015出土土器実測図１（1/3）

坏ａ（20）　口径15.0cm、器高3.6cm、底径12.1cm。底部はヘラ切りされる。

坏ｃ（21～23）　口径14.3～14.8cm、器高3.9～4.2cm、高台径10.0～10.2cm。底部はヘラ切り

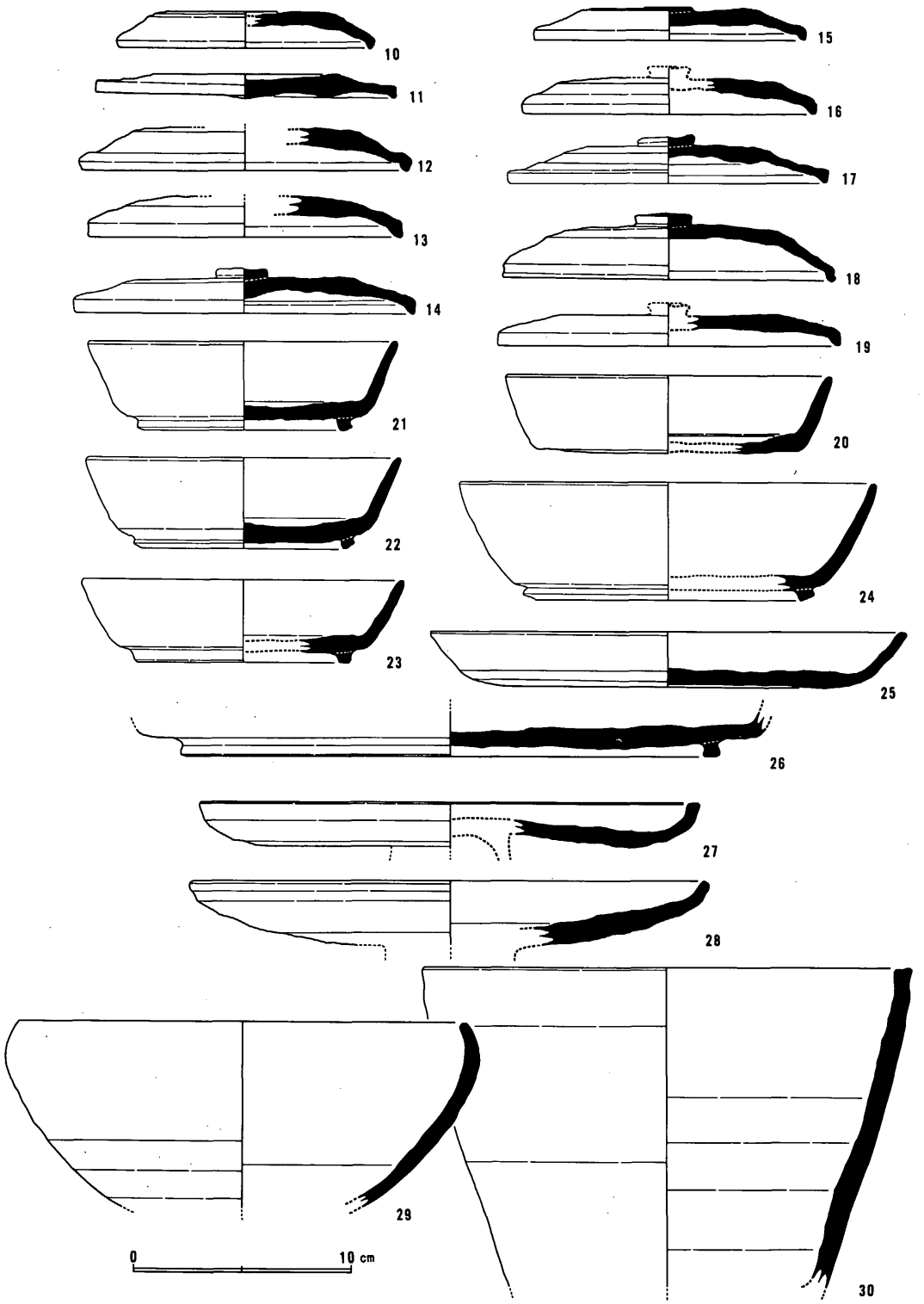


Fig.79　64SE015出土土器実測図２（1/3）

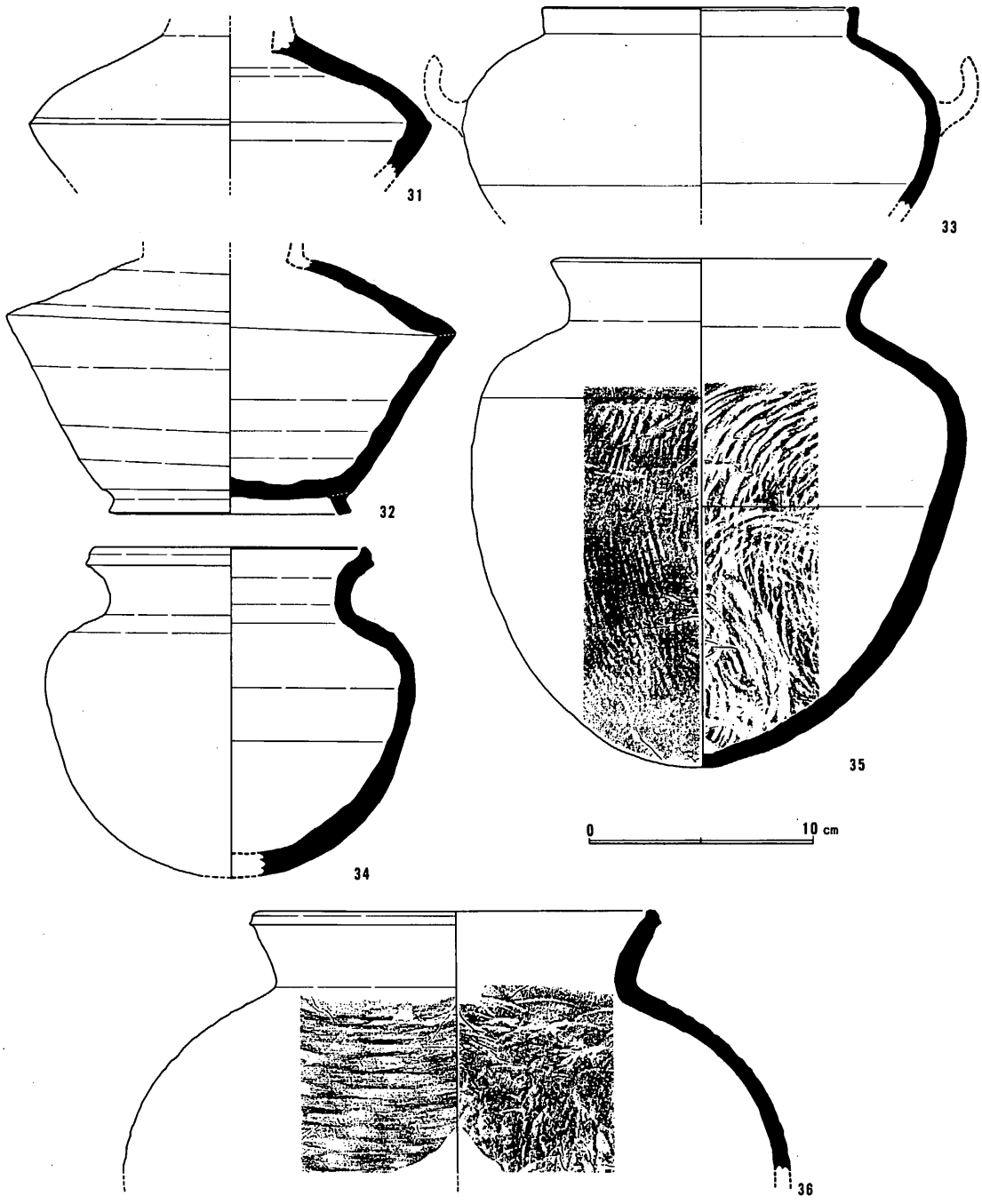


Fig.80 64SE015出土土器実測図３ (1/3)

される。

大坏ｃ (24)　口径19.2cm、器高5.5cm、高台径13.4cmを測る。

皿ａ (25)　口径22.0cm、器高2.6cm、底径15.0cmを測る。底部は回転ヘラケズリされる。

大皿ｃ (26)　高台径24.8cm。底部は回転ヘラケズリされる。

高坏 (27･28)　口径23.0･24.0cm。両者とも底部は回転ヘラケズリ調整を施す。

鉢（29・30）　29は口径20.7cmに復原されるが、小片である。口縁部を内湾させる鉄鉢形に復原できるものと考えられる。体部外面の下半は回転ヘラケズリ調整される。30は口径22.6cmを測り、体部は直線的に立ち上がる。体部の最終調整はヨコナデである。

長頸壺（31・32）　胴部最大径18.0・20.2cm、32の高台径10.8cmを測る。32は最大径付近以下が回転ヘラケズリされ、底部まで至る。31の外面は自然釉が厚くかかり調整不明。32は出土時点で内部に中央部を抉った棒材（Fig.113-3）があり、これとセットになると考えると井戸水を汲み上げるために転用されたことが窺われ、頸部以上は故意に打ち割られたことも考えておく必要がある。

短頸壺（33）　口径14.2cm、胴部最大径21.5cmを測る。最大径位置に把手が付けられていたものと思われる。体部外面下半は回転ヘラケズリ調整される。

甕（34～36）　34は口径12.0cm、器高14.8cm、胴部最大径16.5cmを測る。体部の調整は基本的にはヨコナデであるが、内面のものは条痕が強くのこるものである。35は口径15.0cm、器高23.8cm、胴部最大径22.1cmを測る。外面は平行叩き目（木目により疑似格子状になる）、内面は同心円の当て具痕が観察される。36は口径18.2cm。外面には大きめの平行叩き、内面は同心円当て具痕が観察される。

64SE050出土土器（Fig.77、CD-064094・095）

製塩土器

鉢（5）　外面は指圧痕が明瞭で、内面は強めのナデもしくはケズリである。明茶色で、硬質に焼成される。暗灰色粘質土層出土。

越州窯系青磁

椀（6）　淡緑灰色に発色し、貫入が目立つ。Ⅰ類。黒灰色土層出土。

緑釉陶器

椀（7・8）　7は内側に段差を設ける高台を有し、径は7.6cm。調整は概ねヨコナデで仕上げられ、底部は糸切りされる。釉は残存部の全面に認められ、明黄緑色に発色する。胎土は暗灰茶色で、硬質に焼成される。8は軟質に焼成され、胎土はわずかに茶色味を帯びた白色を呈する。釉は高台内側を除く全面に施され、濃緑色に発色する。両者とも黒灰色土層出土。

壺（9）　小片ながら口径19.0cmに復原される大型の長頸壺とみられる。軟質に焼成され、胎土はわずかに茶色味を帯びた白色を呈する。釉は残存部の全面に認められ、明黄緑色に発色し一部銀化している。黒灰色土層出土。

64SE120淡茶色土層出土土器（Fig.81、CD-064131～135）

土師器

小皿a（1）　口径10.2cm、器高1.3cmを測る。底部はヘラ切りされる。

丸底坏a（2・3）　口径15.6・15.9cmを測る。

越州窯系青磁

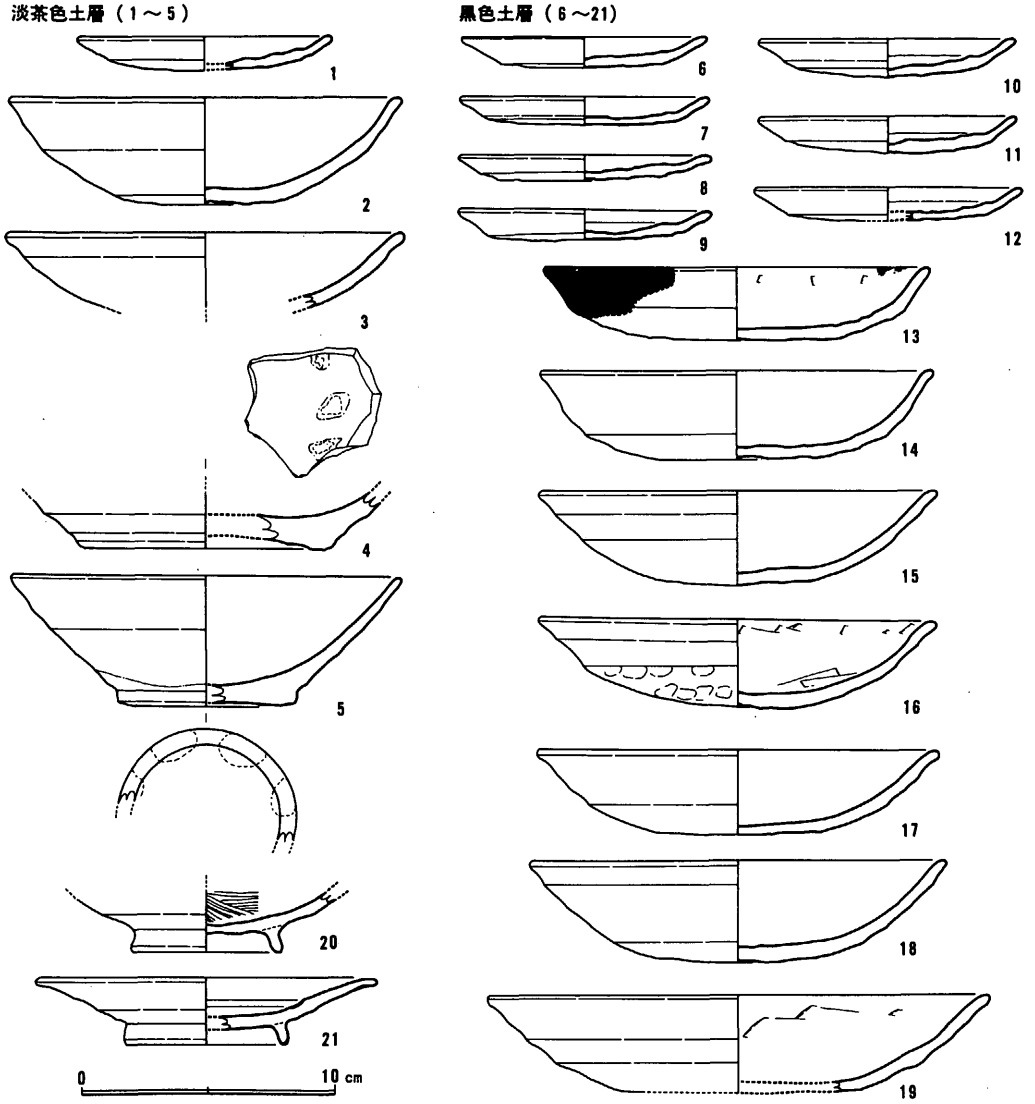


Fig.81　64SE120出土土器実測図1（1/3）

椀（4･5）　4は極めて低い高台を有し、径は10.0cmを測る。見込み及び高台側縁に目跡が観察される。I-2-ウ類。5は口径15.6cm、器高5.2cm、底径7.1cm。釉は暗緑灰色に発色し、光沢があるが、外面体部下位から底部にかけては施釉されない。底部に目跡が残る。II-3-a類。

64SE120黒色土層出土土器（Fig.81、CD-064136～150）

土師器

小皿a（6～12）　口径9.8～10.6cm、器高1.0～1.5cm、底径6.6～8.2cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。9の内面には油煙状のものが多数付着している。

丸底坏a（13～19）　13～18は口径15.3～16.6cm、器高2.9～4.0cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。19はやや大振りの資料で口径20.0cm、器高3.9cm以上を測る。底部は風化のため判別できない。すべて内面はミガキbを施す。

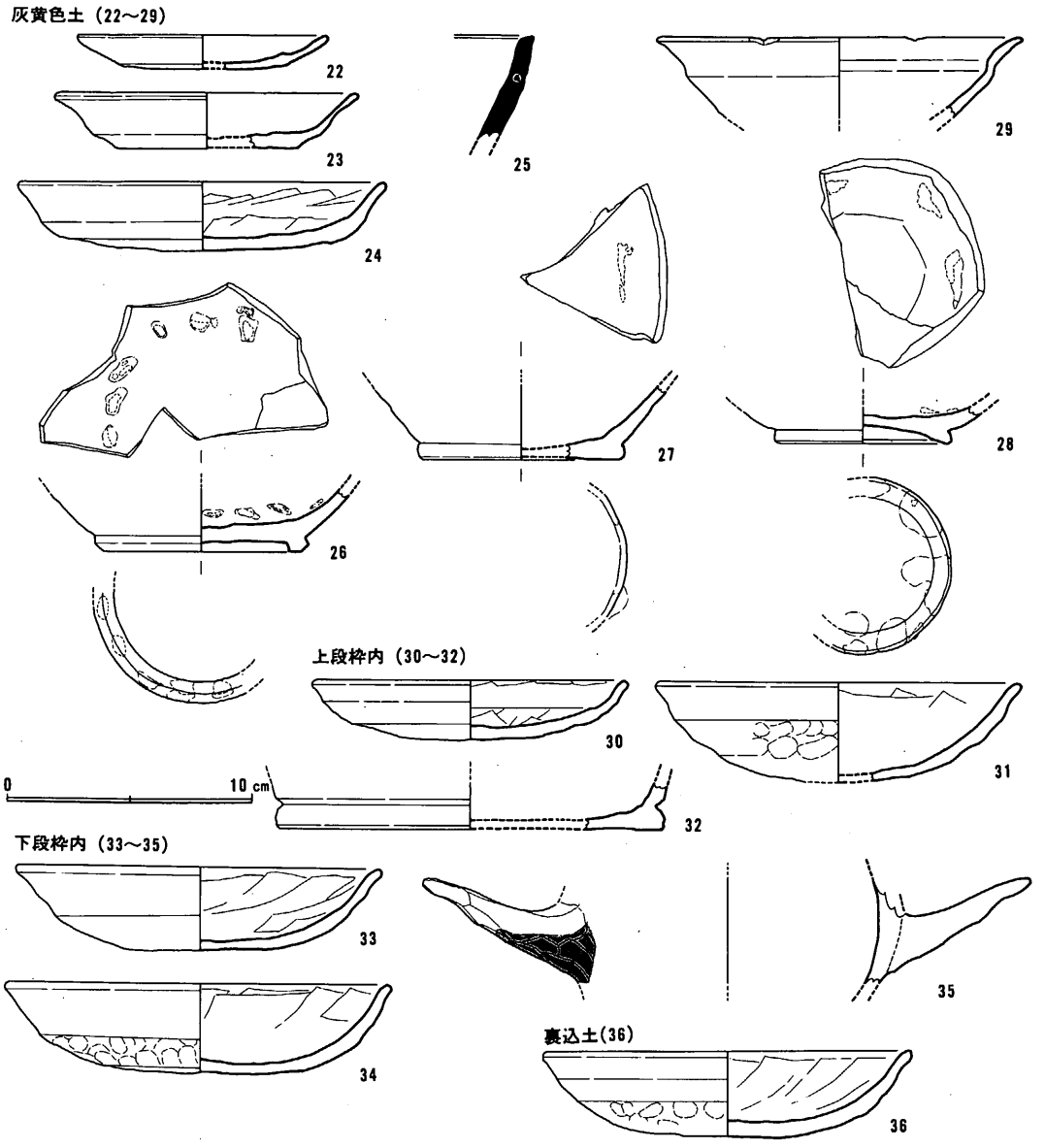


Fig.82　64SE120出土土器実測図２（1/3）

黒色土器

椀ｃ（20）　Ｂ類。高台径6.0cm。内面にはミガキｃが観察される。

灰釉陶器

段皿（21）　口径13.6cm、器高2.6cm、高台径6.4cmを測るが小片である。釉は透明感のある明灰緑色を呈し、高台内側から底部以外は施釉される。

64SE120灰黄色土層出土土器（Fig.82、CD-064151～155）

土師器

小皿ａ（22）　口径10.4cm、器高1.4cm、底径7.0cmを測る。

坏ａ（23･24）　口径12.6･15.2ｍ、器高2.4･2.9cm、底径7.5･11.3cmを測る。底部はヘラ切りされる。

須恵器

鉢（25）　淡灰色を呈し、焼成はややあまい。

越州窯系青磁

椀（26～28）　26は高台径8.9cm。見込み及び畳付けに目跡が観察される。釉は淡明緑灰色に発色し、畳付け以外は施釉される。Ⅰ-2-ウ類。27は高台径8.3cm。見込みに細く横長の目跡が残る。釉は明白茶色を呈し光沢がなく、外面体部下半以下には施釉されない。露胎部分は暗褐色を呈している。28は高台径7.2cm。見込みには大きめの目跡が観察され、畳付け付近には半円状に変色（淡灰色）する部分がある。釉は明緑灰色で光沢があり、外面体部下半以下にはかからない。露胎部分は暗褐色を呈している。Ⅱ-2-ｃまたはｄ類。

坏（29）　口径15.0cm。体部上位に屈曲があり、口縁部には輪花があるが小片のため数は不明。釉は淡緑灰色に発色する。Ⅱ類。

64SE120上段枠内埋土出土土器（Fig.82、CD-064156～159）

土師器

丸底坏ａ（30･31）　口径13.0･15.0cm、器高2.5･4.1cm。底部はヘラ切りされ、内面にはミガキｂがみられる。

長沙窯系青磁

壺（32）　外面体部に僅かながら釉が認められ、明灰緑色に発色する。他は露胎で、明茶白色を呈し、やや軟質に焼成される。

64SE120下段枠内埋土出土土器（Fig.82、CD-064160～163）

土師器

丸底坏ａ（33･34）　口径15.0･15.9cm、器高3.5･3.7cm。底部はヘラ切りされ、内面にはミガキｂがみられる。

鉢（35）　把手部分のみの資料であり全体の形状はわからない。復原される胴部内径は6.1cmになり、把手はナデによって仕上げられる。外面には煤が多量に付着しているが、内面は燻されたような黒色を呈している。

64SE120裏込土出土土器（Fig.82、CD-064164）

土師器

丸底坏a（36）　口径15.1cm、器高3.5cm。底部はヘラ切りされ、内面はミガキbが施される。

64SE220最上層出土土器（Fig.83、CD-064165～196）

土師器

小皿ａ（1～12）　口径4.0～9.8cm、器高1.1～1.8cm、底径6.5～7.8cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

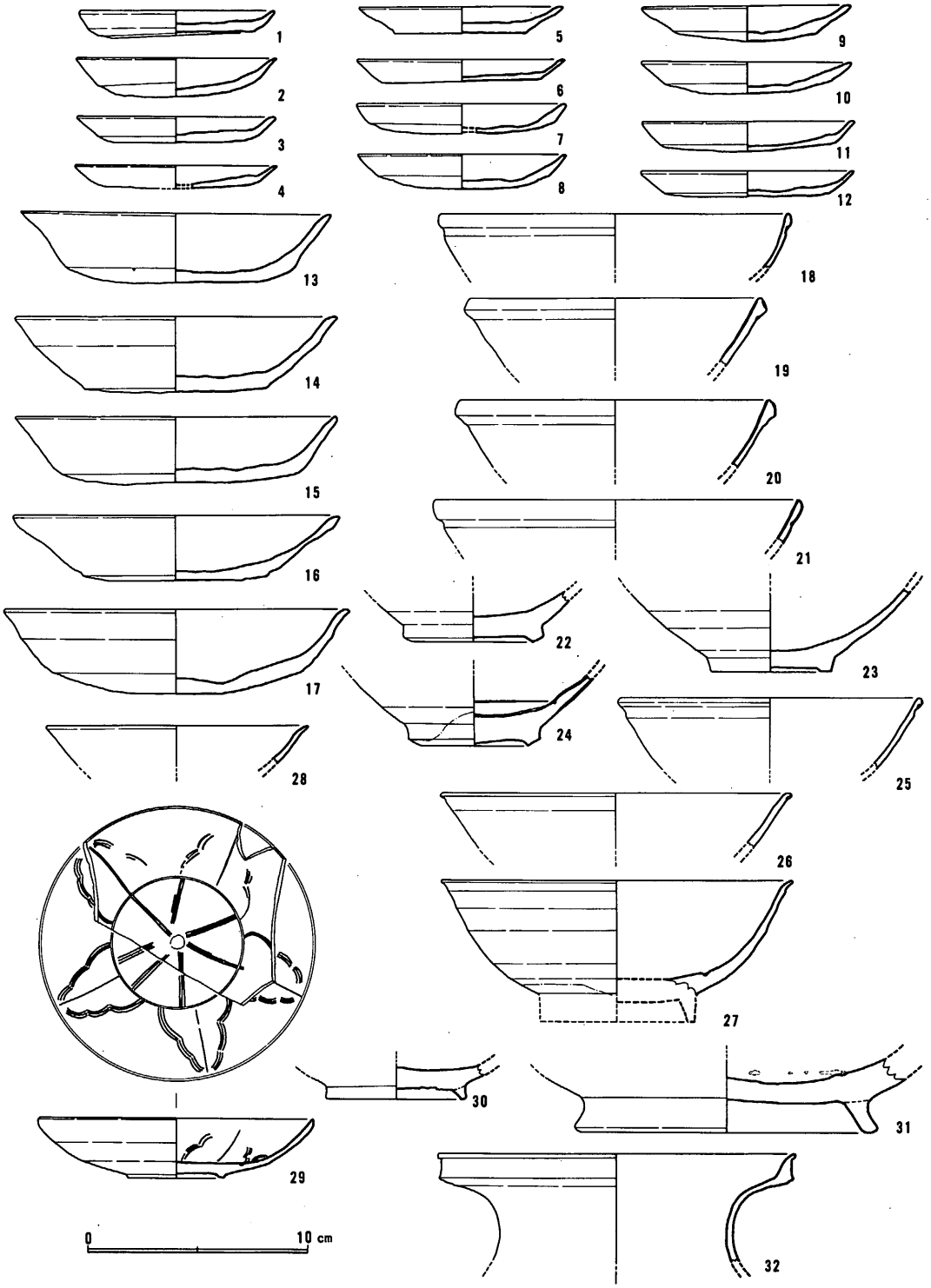


Fig.83　64SE220最上層出土土器実測図（1/3）

坏ａ（13～17）　口径14.2～15.8cm、器高3.0～3.9cm、底径8.4～11.2cmを測る。底部はすべてヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

白磁

椀（18～27）　18は口径16.0cmに復原されるがきわめて小片化している。口縁端部を小さな玉縁状につくるものでII-1類。釉は透明感のある淡白灰色で光沢がある。19～21は玉縁口縁を有するⅣ類で、口径13.2～16.6cm。いずれも釉は緑味を帯びた白灰色に発色する。22･23は見込みに段を持たないもので、Ⅳ-1類。22の釉はくすんだ白灰色に発色し、23では緑味を帯びた白灰色に発色する。高台径6.4･5.6cm。24は見込みを窪ませるもので、Ⅳ-1-b類。釉は透明感があり、緑味を帯びた白灰色に発色する。25は口径14.0cmで、V-3-a類。釉は透明感があり、緑味を帯びた暗白灰色に発色する。26･27は口径16.0cmでいずれもV-2類。釉は透明感があり、緑味を帯びた淡白灰色に発色する。

皿（28･29）　28は口径12.0cmに復原されるがきわめて小片化している。釉は透明感のある淡白色で小さな貫入があり、光沢がある。29は口径12.6cm、器高2.7cm、高台径4.2cmを測る。見込みに数条の細い櫛で略放射状に広がる文様を描き、体部には花弁状の文様を同様の櫛を用いて描くものである。線の深さに対して釉が厚く、文様が不鮮明になっている。釉は明白緑色に発色し光沢があり、貫入が目立つ。

灰釉系陶器

椀（30）　高台径6.4cm。外面底部中央に糸切り痕が残る。見込み部分は研磨され、赤色顔料が付着あるいは胎土中に浸透している。顔料を擦り潰す際に使用されたものであろう。

鉢（31）　高台径14.8cm。底部は回転ヘラケズリ調整され、見込みには重ね焼きの痕跡がある。大平鉢。

朝鮮系無釉陶器

壺（32）　口径16.3cm。頸部内面最狭部付近の調整は、縦方向で強いナデ状の痕跡がある。他はヨコナデである。表面は暗灰褐色、胎土は暗褐色で硬質に焼成される。

64SE220黒灰色土層出土土器（Fig.84、CD-064197～220）

土師器

小皿ａ（1～12）　口径8.7～9.4cm、器高1.0～1.7cm、底径6.6～7.7cmを測る。底部はすべてヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

坏ａ（13～16）　口径14.4～15.2cm、器高2.9～3.3cm、底径8.3～10.8cmを測る。底部はすべてヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

丸底坏ａ（17･18）　口径15.0･15.5cm、器高4.1･3.3cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

丸底坏ｃ（19）　高台径5.4cm。

黒色土器

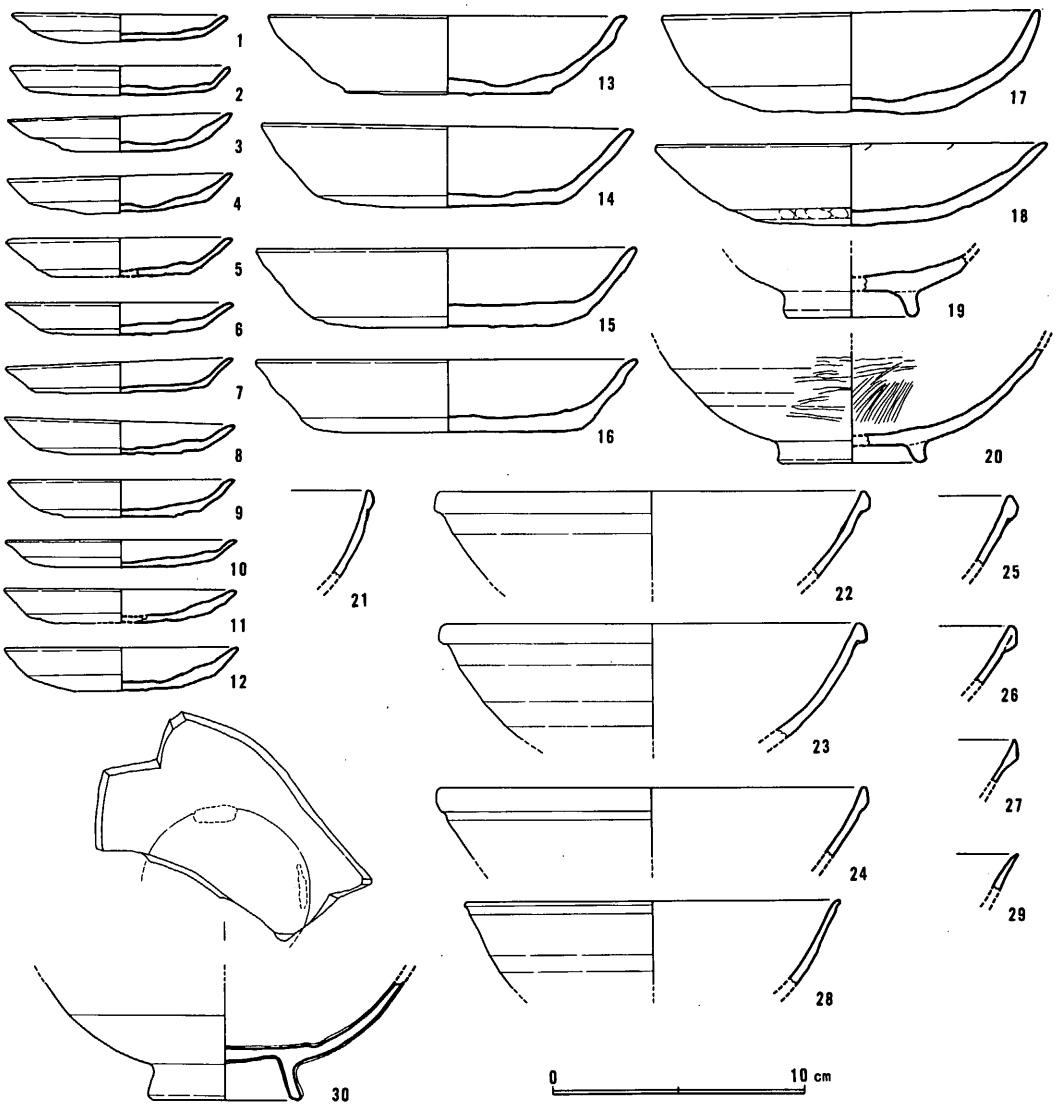


Fig.84　64SE220黒灰色土層出土土器実測図（1/3）

椀ｃ（20）　Ｂ類で、高台径5.9cm。内外面ともにミガキｃが観察される。

白磁

椀（21～29）　21は小さな玉縁状の口縁を有するII類で、釉は明濁白色に発色する。22～27はⅣ類。22～24の口径は16.3～17.0cmを測る。24の釉は明乳白色に発色し、他は淡い薄緑味を帯びた明白灰色に発色する。26では口縁を折り曲げて作ったことがわかる。28は口径14.8cmに復原できるV-2-a類。釉は明薄緑白色に発色する。29は小片でV-1類。釉は明薄緑白色に発色する。

高麗青磁

椀（30）　高台径6.2cmを測る。見込みに不整楕円形を呈する目跡が推定で4箇所あったものとみられる。畳付けには釉はなく、高台下端に釉が垂下して溜まっている。他の部位は施釉さ

れ、明濃緑灰色に発色し、光沢がある。貫入は観察されない。初期高麗青磁椀II-2類か。

64SE220茶色砂層出土土器（Fig.85、CD-064221～235）

土師器

小皿a（1～5）　口径9.2～10.4cm、器高1.3～1.7cm、底径6.3～8.4cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕を残すものも多い。

小皿c（6）　口径10.0cm、器高2.2cm、高台径6.1cmを測る。

坏a（7～10･12～14）　口径13.1～15.2cm、器高2.7～3.6cm、底径7.8～11.6cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕を残すものも多い。

丸底坏a（11）　口径15.2cm、器高3.3cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

白磁

皿（15）　口径10.3cm、器高2.5cm、底径3.7cmを測る。釉は外面底部にはなく、その状況から拭き取られたものとみられる。他は全面施釉され淡黄灰色に発色し光沢がある。底部はヘラケズリされる。

64SE220茶灰色土層出土土器（Fig.85、CD-064236～238）

土師器

小皿a（16）　口径10.0cm、器高1.0cm、底径8.0cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

鍋（17）　口縁端部をわずかに肥厚させる。残存部の調整はヨコナデで、かなり硬質に焼成される。

白磁

椀（18･19）　両者ともV-1類で貫入が多数みられ、釉は透明感があり、18ではやや緑味を帯びた白灰色、19ではやや黄色味を帯びた淡白色に発色する。

皿（20･21）　20はIII類で、釉は内面と外面体部中位以上にかかり、淡白灰色に発色する。21はVI-1-b類で、底径3.4cm。釉は透明感のある明黄白色に発色し、底部にはかからない。

64SE220明茶色砂層出土土器（Fig.85、CD-064239～246）

土師器

小皿a（22～25）　口径8.8～9.3cm、器高0.9～1.8cm、底径6.1～7.3cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

坏a（28～30）　口径14.6～15.4cm、器高3.1～3.7cm、底径9.2～11.0cmを測る。底部はヘラ切りされる。

丸底坏a（27）　口径14.4cm、器高3.8cm、底径11.2cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

黒色土器

小皿a（26）　B類。口径10.9cm、器高1.9cm、底径7.4cmを測る。底部はヘラ切りされる。内

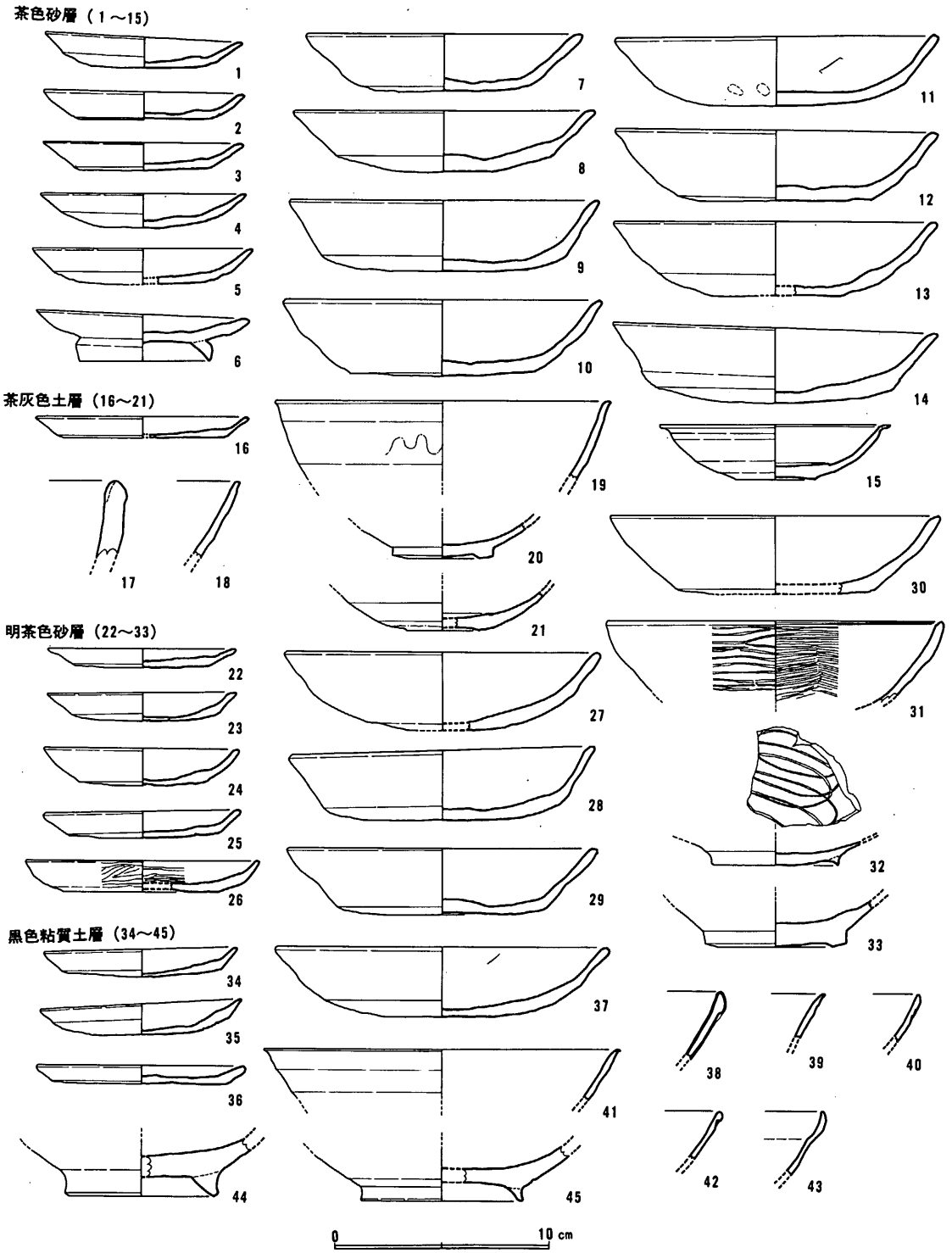


Fig.85　64SE220各層出土土器実測図（1/3）

外面ともにミガキｃが施される。

瓦器

椀（31･32）　31は口径15.8cm。口縁部内側に沈線が巡る。体部は内外面ともに細いミガキｃが施されるが、内面の緻密さに比べて外面はやや粗い。32は底径6.0cmを測る。高台は小さな三角形を呈する。見込みには細かなミガキｃの後、螺旋状の暗文が入る。両者とも畿内産。

白磁

椀（33）　高台径6.6cmで、Ⅳ-1-a類。

64SE220黒色粘質土層出土土器（Fig.85、CD-064247～254）

土師器

小皿ａ(34～36)　口径9.1～9.8cm、器高0.9～1.5cm、底径7.4～8.4cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

丸底坏ａ（37）　口径15.6cm、器高3.3cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

白磁

椀(38～43)　38はⅣ類。39･40はV-1類。41は口径16.6cmに復原できるV-2類で、釉は明白黄色に発色する。42は外面の口縁端部下位が強いナデにより沈線化し、端部が玉縁状を呈するものである。釉は緑味を帯びた白灰色に発色する。V-3-a類か。43は口縁部を湾曲させるもので、釉は透明感があり、淡緑灰色に発色し光沢がある。貫入はない。釉から透けて胎土中に茶色班のあるのがわかる。

灰釉系陶器

椀（44･45）　44は高台径7.0cm。見込みは研磨されたようであるが、わずかに釉がみられ明緑色に発色している。外面に釉はなく粗雑なナデで仕上げられる。焼成はやや軟質。45は高台径7.6cm。見込みは赤色顔料を擦り潰したらしく、研磨され顔料が胎土中に浸透したようになっている。内外面ともに釉はない。焼成はやや軟質。

64SE220枠内出土土器（Fig.86、CD-064255～265）

土師器

小皿ａ（1）　口径9.8cm、器高1.8cm、底径9.0cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

坏ｃ(2)　高台径6.2cm。内面にはミガキｃが観察され、焼成前に付けられた細線により記号状のものがある。高台内側にも同様な「×」記号がある。

丸底坏ａ(3)　口径15.4cm、器高3.2cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。内面はミガキｂとみられる。

須恵器

甕（15）　口径32.1cm。体部外面は平行叩き、内面は同心円文の当て具痕が残る。

黒色土器

椀ｃ（4）　Ｂ類で高台径7.1cm。内面にはミガキｃがみられる。

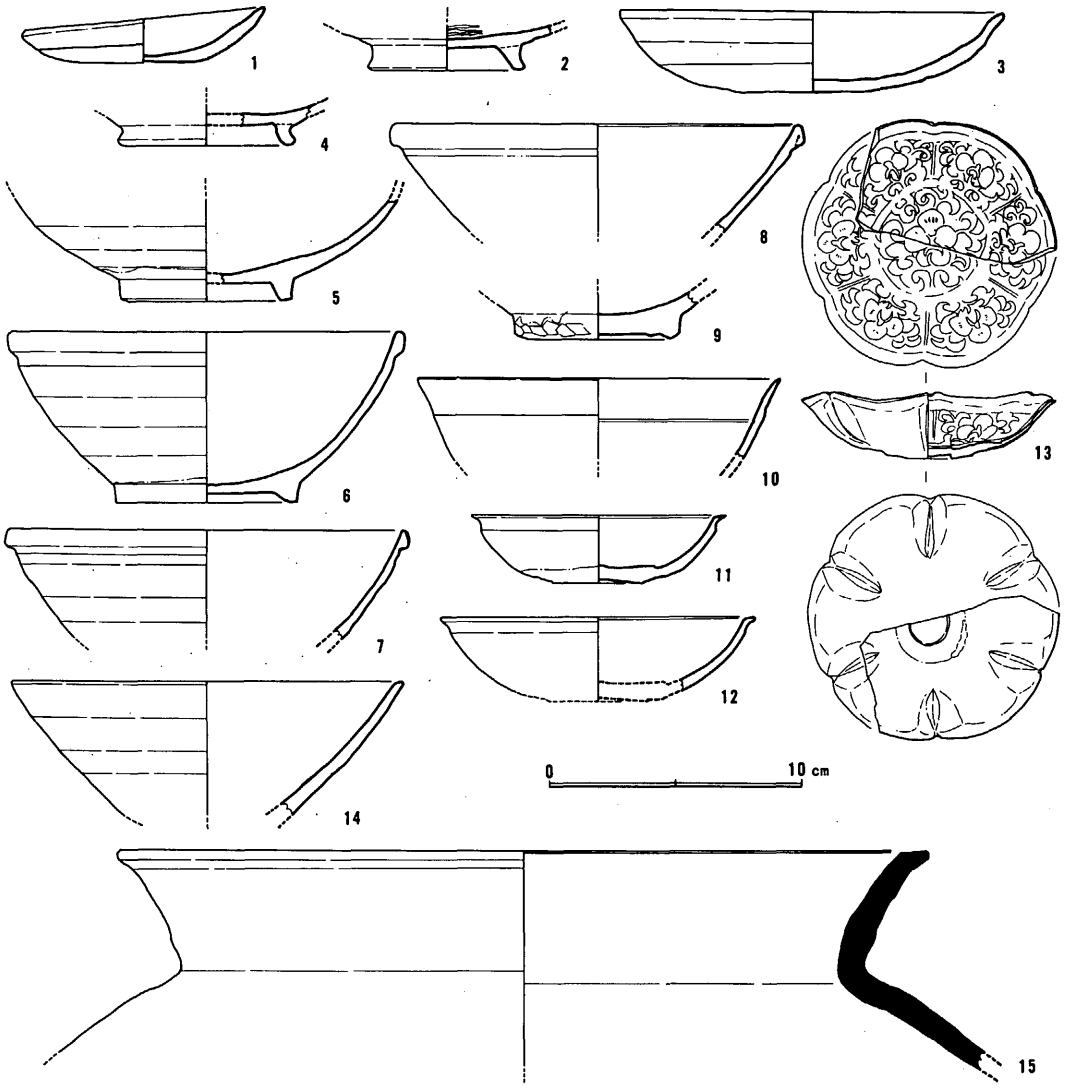


Fig.86　64SE220枠内出土土器実測図（1/3）

白磁

椀（5～10）　5は高台径6.8cmを測るII-1類である。釉は白濁色に発色し、鈍い光沢がある。体部下位以下にはかからない。6は口径15.4cm、器高6.8cm、高台径7.2cmを測るⅣ-1-a類である。釉は透明感のある明灰緑色に発色し、高台部付近にはかからない。7・8はⅣ類で、口径16.0・15.4cmに復原されるがいずれも小片である。9はⅣ-1-a類とみられるが高台部側縁を細かく打ち欠いている。10は口径13.4cmに復原するが小片である。内面体部上位に細い沈線が巡る。V-1類。

皿（11・12）　両者ともV-2類。口径は10.2・12.6cmに復原されるが、12は小片である。11の釉は明白緑色に発色し、部分的に貫入が認められる。体部下位以下には施釉されない。

耀州窯系青磁

皿（13）　印花文輪花皿とされるもので、口径10.3cm、器高2.6cm、底径1.7cmを測る。内面には型押しによる文様を入れる。体部の文様は堆線により六分割され、細かな印花文を押しているが、各ブロック内の文様は基本的には同じものである。見込みにも類似の印花文がある。口縁部は内面の堆線に合わせて輪花を入れ、外面もそれに合わせてヘラによる押圧で縦沈線を入れる。この行為によって口縁部は内側に入り込み、上方向へも盛り上がるようになり、平面的にはきれいな六花形を呈するようになる。底部は円形に削り込まれ、この部分およびその周囲には施釉されない。釉は明濃緑色（文様の盛り上がる部分／窪む部分は暗緑色）に発色し、光沢があり貫入も認められる。露胎部は明黄茶色で、胎土は明灰色を呈している。胎土と釉の境目は明白灰色の膜状に変色している（露胎部にはない）。耀州窯系青磁の国内の出土例は最近増加の傾向にあるが、それでもこの資料を含めて27点である（上田秀夫「日本出土の耀州窯系青磁」『耀州窯』1997年）。この輪花皿も他に報告例はなく、韓国弥勒寺跡の報告例が最も近い出土例であろう（国立扶餘文化財研究所『彌勒寺』(2)　1996年）。

高麗青磁

椀（14）　口径15.6cm。釉は残存部の全面に認められ、暗濃緑灰色に発色し、透明感があり光沢がある。胎土は淡灰色を呈するもので、黒色小粒が含まれる。

64SE220裏込土出土土器（Fig.87･88、CD-064266～283）

土師器

椀（1）　口径16.8cmに復原されるが小片である。内外面ともにミガキｃが顕著に認められる。表面の色調は明茶白色であるが断面を観察すると表面を除いて大半が黒色を呈しており、燻されたことによる変色とも捉えられ、本来は黒色土器B類として報告すべき資料かも知れない。

椀ｃ（2）　高台径7.0cm。内面はミガキ調整とみられる。

鉢（3）　調整はヨコナデで、胎土中には砂粒が多く含まれる。

黒色土器

椀ｃ（4）　B類。高台径5.5cm。内底部にはミガキｃが施されていたらしい。

小皿ａ（5）　B類。口径10.5cm、器高1.5cm、底径7.9cm。底部はヘラ切りされる。内外面ともにミガキｃが顕著にみられ、一部底部にまで及んでいる。

瓦器

椀（6･7）　6は高台径6.7cm。見込みに暗文風のヘラミガキがある。7は口径17.3cmで、口縁端部内側に沈線が巡る。内面及び外面の上位の一部に細かなミガキｃがみられ、体部外面中位以下には指圧痕が顕著である。両者とも畿内産と考えられる。

須恵器

鉢（9）　口縁端部を肥圧させるもので、篠窯産。

甕（10）　口縁端部の残欠で、胎土は明褐色ないしは灰茶色を呈し小粒子を含むもので、やや軟質に焼成される。

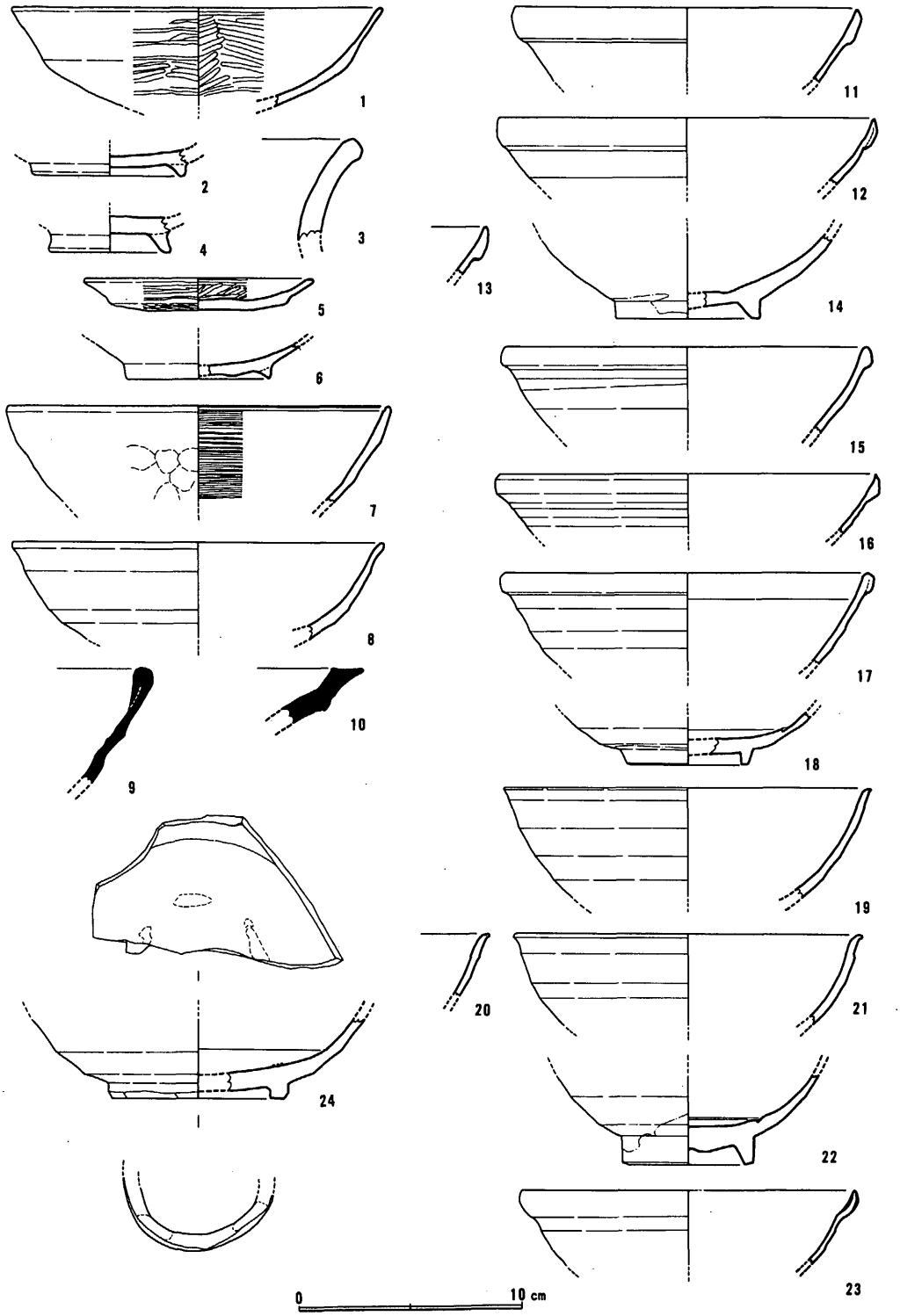


Fig.87　64SE220裏込土出土土器実測図１（1/3）

白磁

椀（11～23）　11は口径15.6cmを測るが小片である。釉は薄緑味を帯びた明白色に発色する。口縁部を幅広の玉縁状に作る。II-5類とみられるが、Ⅳ類の可能性もある。12は口径17.0cmを測るが小片である。II-5類。13はII-5類と考えられる小片である。14は高台径6.6cmを測る。釉は光沢のある淡白灰色に発色し、高台を含めた底部にはかからない。見込みに焼成時の付着物がある。II類。15･16はいずれもⅣ類で、復原される口径は16.4･17.0cmを測るが小片である。やや透明感のある釉で明白緑色に発色する。17は口径16.4cmを測るが小片である。やや小さめの玉縁状口縁は折り曲げによって形成され、釉は透明感があり明白灰色に発色する。18は高台径5.5cmを測る。高台は丁寧に削り出されるが低めである。釉は淡乳白色に発色し、高台部分にはかからない。ⅣまたはV類とみられる。19は口径16.6cmを測る。釉は淡黄灰色味を帯びた濁白色に発色する。V-1類。20･21はV-2類で、21の口径は15.8cmを測るが小片である。22は高台径6.0cmを測る。V類。23は口径15.0cmを測るが小片である。口縁部を湾曲させるもので、釉は透明感があり淡緑灰色に発色し光沢がある。貫入はほとんどない。釉から透けて胎土中に茶色班のあるのがわかる。64SE220黒色粘質土層出土（43）と同一個体の可能性がある。

皿（25）　高台径4.6cm。釉は明乳白色に発色し光沢がある。体部下位以下には施釉されない。胎土は白色で、黒色の小粒子が含まれる。III-2類か。

壺（26）　水注の可能性もある。絞られた頸部の最小径は3.0cmで、内面にはしぼり痕がある。最細部付近の外面に小さな隆線が巡る。釉は残存部の全面にみられ、薄緑色味を帯びた灰白色に発色し貫入がある。

高麗青磁

椀（24）　高台径8.2cm。見込み及び畳付けに大振りの目跡が残り、その配置から4～5個に復原できよう。釉は淡緑灰色に発色し畳付け以外にかかる（畳付けの釉は拭き取られたものと考えられる）が、表面は焼成時に気泡が多数発生したようで随所に小さな凹凸がありざらついた感じがする。胎土は明茶灰色を呈するが、砂粒を大量に含んでおりきわめて粗いものである。

灰釉陶器

壺（27）　釉は外面にかかり、透明感のある明緑白色に発色する。把手あるいは耳部が存在した跡があるが、割れ方が不自然で部分的に故意に打ち欠いた可能性がある。

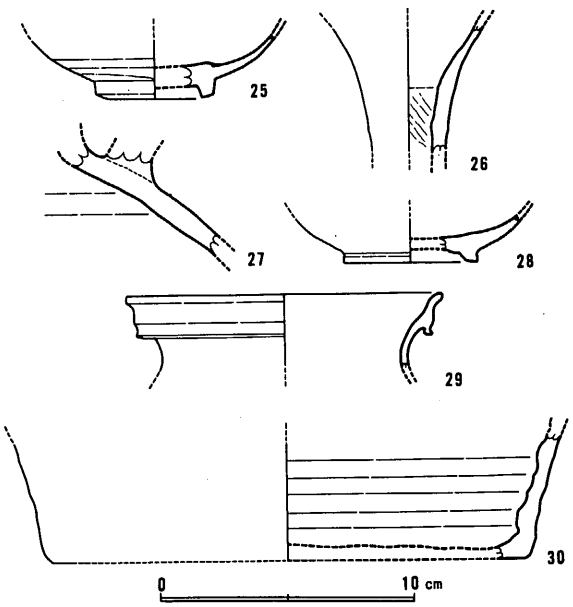


Fig.88　64SE220裏込土出土土器実測図2（1/3）

内面は露胎であるが、研磨されたことによる光沢があり、胎土中に墨痕と思われるものが浸透している。この点で把手部の打ち欠きは硯に転用することを目的として行われたと考えられよう。

灰釉系陶器

椀(8)　口径16.8cmに復原されるが、小片である。外面は強めのヨコナデ、内面もヨコナデされるが霧吹きでかけたような状況で釉が付着している。胎土中に白色の微粒子を含んでいる。

緑釉陶器

椀(28)　高台径5.2cmに復原されるが小片である。釉は畳付け以下にはなく、淡緑色で光沢はない。露胎部は茶黄色を呈している。胎土は明灰色で焼き締まっており、須恵質。

朝鮮系無釉陶器

壺(29･30)　29は口縁部の資料で、口径12.4cmに復原されるが小片である。体部は強いヨコナデにより最終調整され、表面は暗灰黒褐色（内面は灰被りで明灰白色)、胎土は暗褐色できわめて硬質に焼成される。30は底部片で、径19.6cmに復原されるが小片である。底部は未調整とみられるが、体部は強いヨコナデにより最終調整され、表面は暗灰黒褐色(内面は暗灰褐色)、胎土は暗褐色できわめて硬質に焼成される。

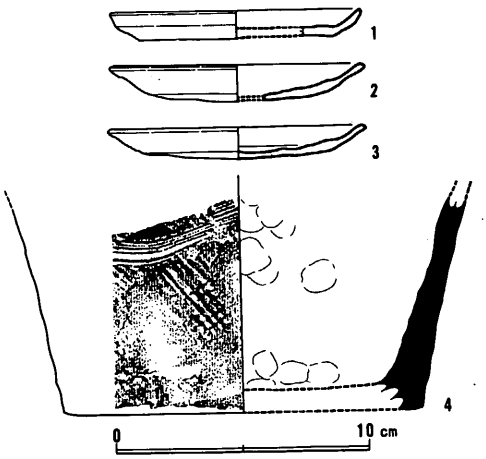


Fig.89　64SE260出土土器実測図（1/3）

64SE260出土土器（Fig.89）

土師器

小皿a（1～3）　口径10.0～10.3cm、器高1.1～1.4cmを測る。底部はヘラ切りされる。

須恵器

壺(4)　底径14.8cm。外面は平行叩き（疑格子）で、上位にハケ目状のものがみられる。内面は粗い横方向のナデでとともに指頭圧痕がいくつもみられる。

64SD110上層出土土器（Fig.90、CD-064284～294）

土師器

坏a(1～6)　口径11.3～12.4cm、器高2.7～3.2cm、底径6.7～7.6cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

坏(9)　背の高い円盤状高台（充実高台）を有するもので、径5.0cmを測る。表面は風化が著しく調整は明らかでない。薩摩国からの搬入品とみられる。

黒色土器

椀c(7･8)　7はA類。器表面は風化しているが、内面に漆とみられる暗褐色の付着物があ

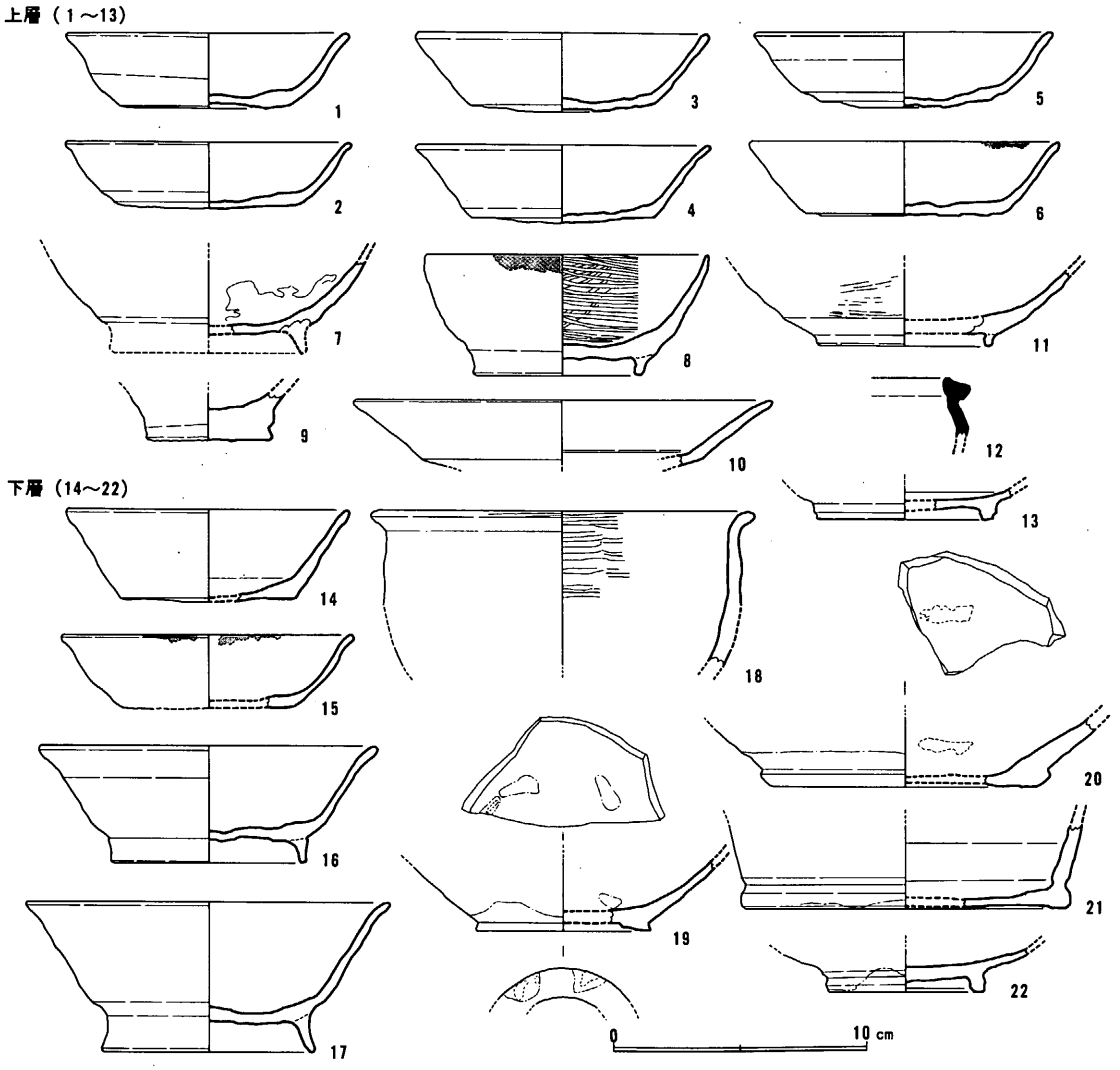


Fig.90　64SD110出土土器実測図（1/3）

る。なお付着物の下面は黒色を呈し、ミガキが観察される。8はA類で口径11.8cm、器高4.9cm、高台径6.8cmを測る。内面にミガキcが施される。口縁端部付近に油煙が多量に付着している。

須恵器

鉢（12）　口縁端部は三角形を呈する玉縁状で、内側には粘土の重なりによって生じる小さな段があり、これから推定して口縁部は一旦外側へ折り曲げられた後、内側へ巻くようにして形成されたと思われる。焼成はあまく、明白茶色。

越州窯系青磁

皿（10）　口径16.6cmに復原されるが小片である。体部中程に屈曲があり、残存部の全体にかかる釉は淡緑色に発色し、鈍い光沢がある。

緑釉陶器

椀（11･13）　11は高台径7.0cm。釉は暗緑色ないしは明緑色で斑がある。胎土は茶白色ない

しは明灰色で、軟質に焼成され釉も剥離がめだつ。長門産。13は高台径7.0cm。釉は淡緑茶色に発色し光沢があり、畳付けまではかかるがそれより内側はない。胎土は暗灰色を呈し精良で、硬質に焼成されている。洛西産か。

64SD110下層出土土器（Fig.90、CD-064295～304）

土師器

坏a（14･15）　口径11.3･11.6cm、器高3.7･3.0cm、底径6.9･6.6cmを測る。底部はヘラ切りされる。

椀c（16･17）　直線的にのびる体部を有するタイプで、口径13.4･14.4cm、器高4.7･6.0cm、高台径7.8･8.5cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

黒色土器

甕（18）　A類。口径15.3cmで、内面に丁寧なミガキcが入る。外面の一部に煤が付着している。

越州窯系青磁

椀（19･20）　19は高台径6.9cm。釉は淡緑灰色に発色するが斑があり、外面体部下位以下にはかからない。露胎部は暗茶色を呈し、胎土は明灰色で、見込み及び畳付けに目跡がある。I-1-b類。20は底径11.6cmに復原できるが小片である。釉は淡緑灰色に発色し、外面体部下位以下にはかからない。露胎部は明茶色を呈し、胎土は淡灰色である。見込みに目跡がある。II-2-b類。

長沙窯系青磁

壺（21）　水注の可能性もある。底部径13.1cm。釉は淡明緑白色に発色し鈍い光沢があり、体部外面のみで他の部分にはかからない。また釉は剥落が一部にあり、化粧土の存在がわかる。胎土及び露胎部は明灰色で、内面はヨコナデの痕跡が明瞭である。

緑釉陶器

椀（22）　高台径6.2cm。釉は明黄緑色に発色し光沢がある。畳付けより内側には施釉されない。内面にはヘラミガキが施されている。胎土は明黄茶色、淡灰色を呈し、軟質に焼成される。京都産。

64SD140出土土器（Fig.91、CD-064305～314）

土師器

皿（1）　口径20.0cm、器高1.6cm。体部の内外面にはミガキaが施され、体部外面下半から底部にかけては回転ヘラケズリされる。高坏の可能性も捨てきれない。

須恵器

蓋3（2･3）　口径19.3･19.4cm。2の天井部は回転ヘラケズリされ、3ではヘラ切りの後ナデとみられる。

坏c（4～6）　口径13.2･13.4cm、器高3.5･4.3cm、高台径8.9～10.1cmを測る。底部はヘラ切

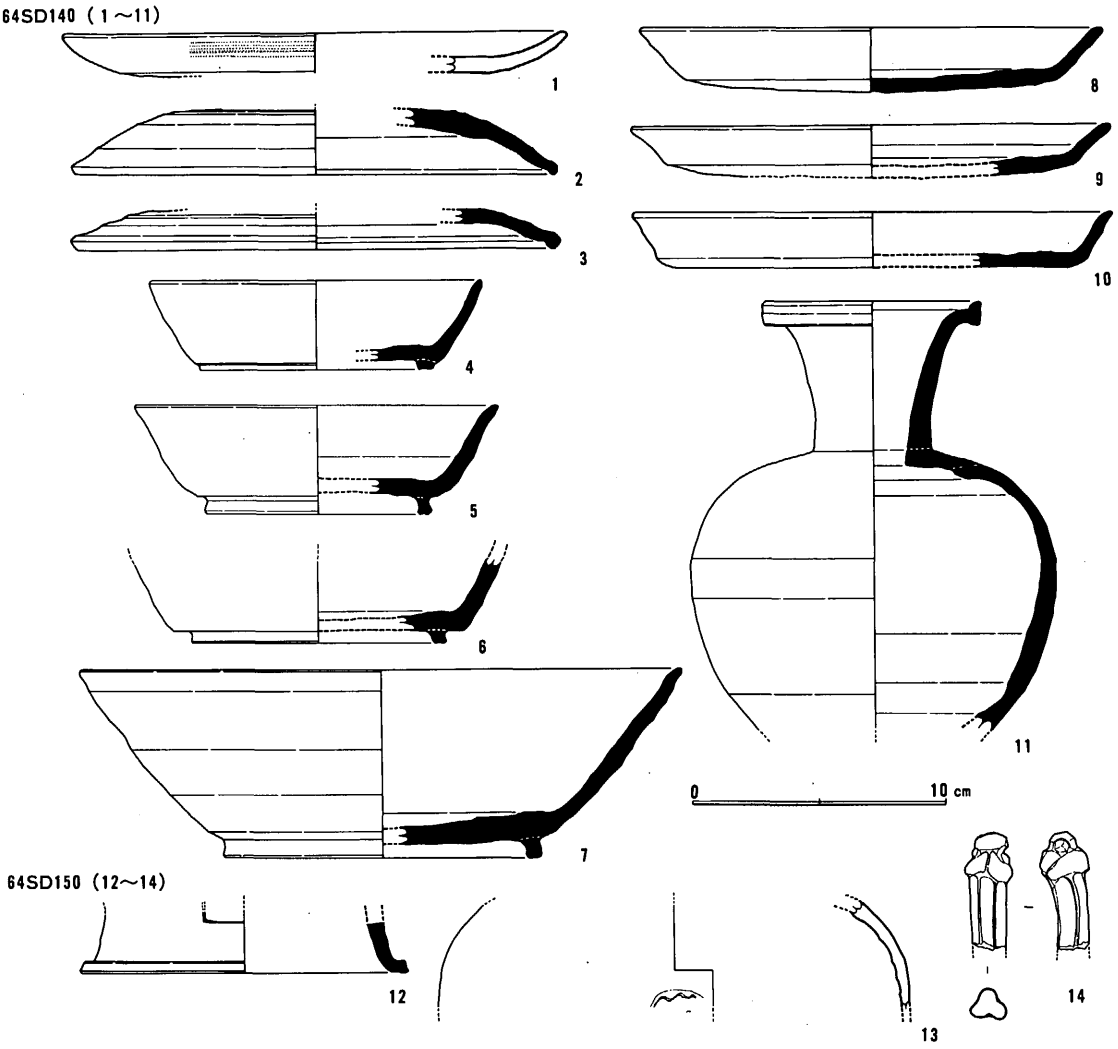


Fig.91　64SD140･150出土土器実測図（1/3）

りである。

大椀ｃ(7)　口径23.8cm、器高7.5cm、高台径12.6cmを測る。体部外面中程から底部全体にかけて回転ヘラケズリされる。

皿ａ(8～10)　口径18.4～19.0cm、器高2.2～2.6cm、底径14.6～16.0cmを測る。底部はヘラ切りの後粗雑なナデが施される。

壺(11)　口径8.7cm、胴部最大径14.4cm。外面の最大径のある辺りから以下は回転ヘラケズリ、他はヨコナデである。

64SD150出土土器（Fig.91、CD-064315～320）

須恵器

円面硯(12)　底径13.0cmで、長方形と推定される透かしがある。

白磁

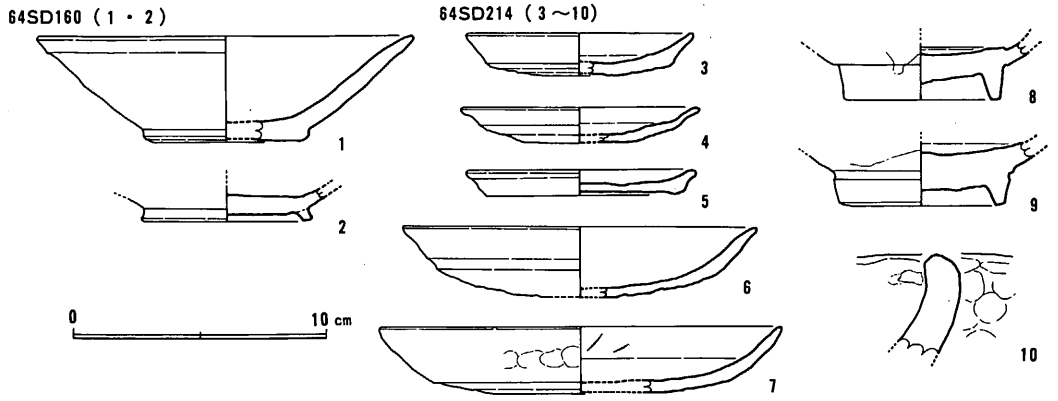


Fig.92　64SD160・214出土土器実測図（1/3）

水注（14）　把手部分の資料で、3本の帯を上位で束ねたような形状に作り、最も外側になる部分は上部を巻いて留めたように作る。釉は厚めにかかり明乳白色に発色し、光沢がある。

長沙窯系青磁

水注（13）　壺の可能性もある。体部の上位で肩部のやや下方にメダリオンが貼り付いていた形跡がある。釉は薄茶色味を帯びた淡緑灰色に発色し、部分的に垂下するため色斑がある。内面は露胎でヨコナデである。胎土は明茶白色でやや軟質。

64SD160出土土器（Fig.92、CD-064321～323）

越州窯系青磁

椀（1）　口径14.9cm、器高4.2cm、高台径5.8cmを測る。釉は畳付けを除いて他のすべてにかかり、明緑灰色に発色し鈍い光沢がある。見込み部分のみ釉が気泡化したらしく小さな凹凸が目立つ。胎土は明灰色で焼成はややあまい。

緑釉陶器

椀（2）　径6.6cmの貼付高台で、釉は畳付けから内側にはかからない。体部の調整

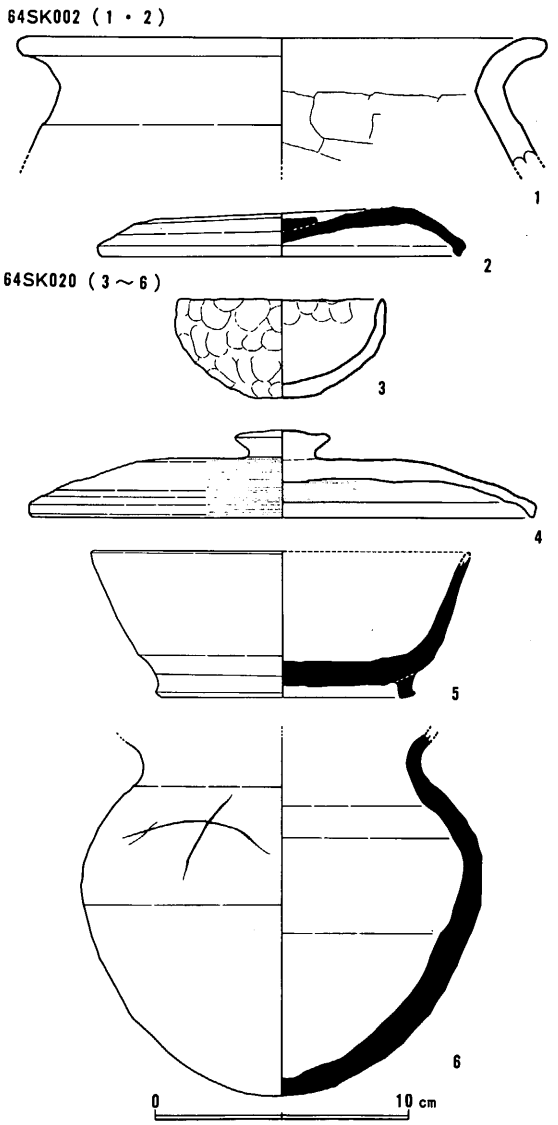


Fig.93　64SK002・020出土土器実測図（1/3）

はヨコナデで、明緑青色に発色し光沢がある。硬質に焼成される。洛西産か。

64SD214出土土器（Fig.92、CD-064324～332）

土師器

小皿ａ（3～5）　口径9.0～9.5cm、器高1.0～1.7cmを測る。３・４の底部はヘラ切り、５は回転糸切りである。

丸底坏ａ（6･7）　口径14.0･16.0cm。内面はミガキｂが施される。

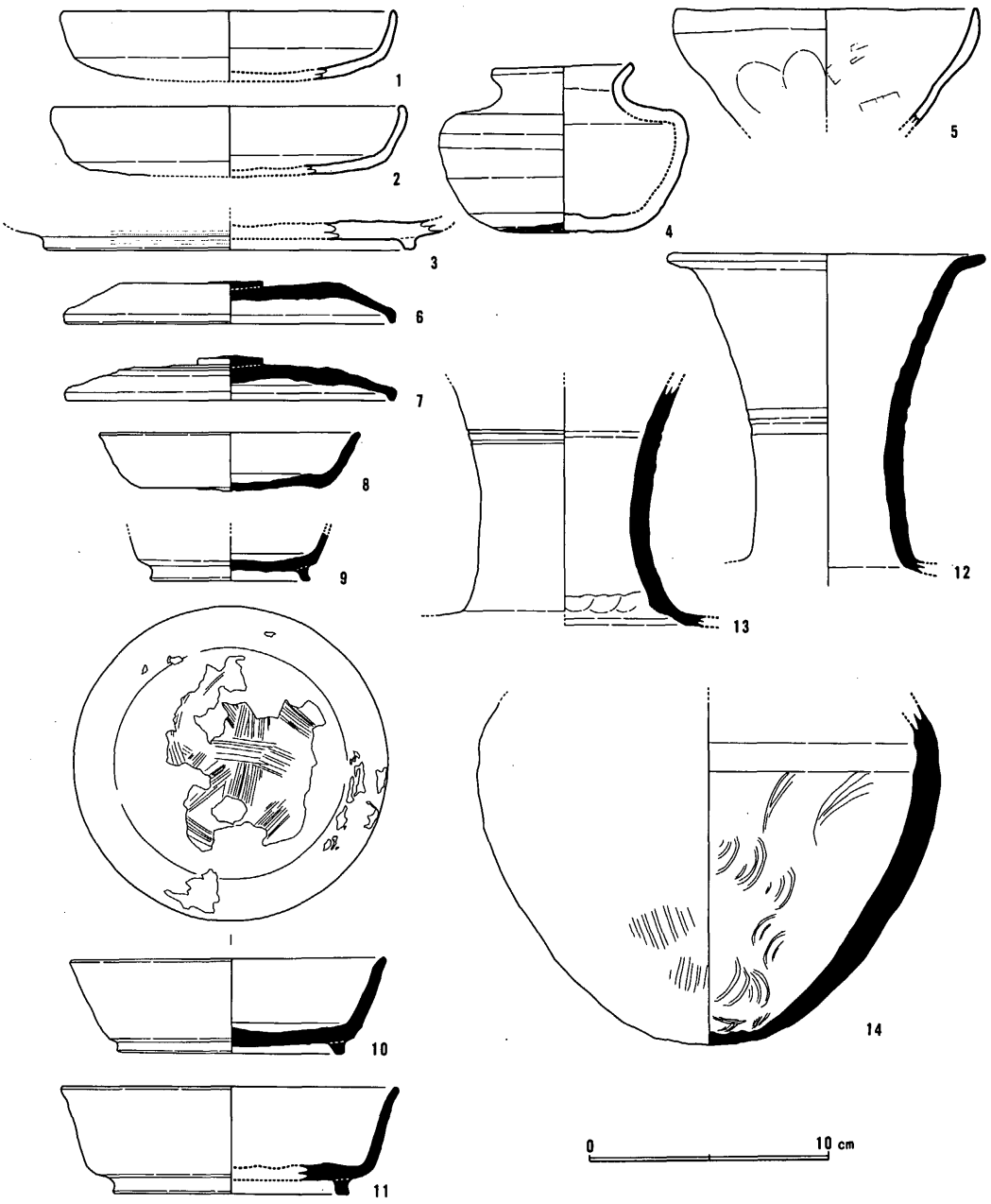


Fig.94　64SK005出土土器実測図（1/3）

白磁

椀（8･9）　高台径6.2･6.6cm。いずれもⅤ類である。

土製品

トリベ（10）　内面は明灰色、外面は明茶白色を呈する。口縁部の内側に付着物がある。

64SK002出土土器（Fig.93、CD-064333～335）

土師器

甕（1）　口径21.0cm。胴部内面はケズリ、他は風化して不明である。

須恵器

蓋c3（2）　口径14.6cm、器高1.7cmを測る。天井部は回転ヘラケズリされ、中央部に扁平な釦状の摘みが付く。

64SK005出土土器（Fig.94、CD-064340～353）

土師器

皿b（1･2）　口径14.2･15.0cmを測るがいずれも小片である。表面が風化し調整は不明。

大皿c（3）　高台径15.7cm。底部内面は回転ヘラケズリの後ミガキa、外面は回転ヘラケズリである。

小壺（4）　口径5.9cm、器高7.0cm、胴部最大径10.4cm、底部径4.8cmを測る。調整は体部外面下半が回転ヘラケズリ、他はヨコナデである。底部はヘラ切りの後粗いナデを施す。明茶色を呈するが外面の一部に赤褐色を呈する部分があり、赤色顔料を塗布していたことも考えられる。胎土は砂粒を多く含み粗めで、硬質に焼成される。

製塩土器

鉢（5）　口径12.6cm。外面には指圧痕が残る。

須恵器

蓋c3（6･7）　口径13.9cm、器高1.8･1.9cm。いずれも扁平な釦状の摘みを有するが、天井部の調整は6がヘラ切りの後ナデるのに対して、7では回転ヘラケズリを施す。

坏a（8）　口径11.0cm、器高2.5cm、底径9.6cm。底部はヘラ切りである。

小坏c（9）　高台径6.7cm。底部はヘラ切りされ、細かな板状圧痕が残っている。

坏c（10･11）　口径13.3･14.2cm、器高4.0･4.5cm、高台径9.6･9.9cmを測る。底部はヘラ切り。10の内面には漆とみられる付着物があり、その表面には刷毛の目が残っている。

長頸壺（12･13）　12の口径は13.4cm。頸部中程に2条の沈線が巡る。13も同様に沈線が巡るが、螺旋状を呈している。

甕（14）　胴部最大径19.5cm。明茶白色で軟質のため風化が著しいが、胴部上位は内外面ともヨコナデとみられ、下半は外面では平行叩き、内面では同心円の当て具痕が確認できる。

64SK020出土土器（Fig.93、CD-064336～339）

土師器

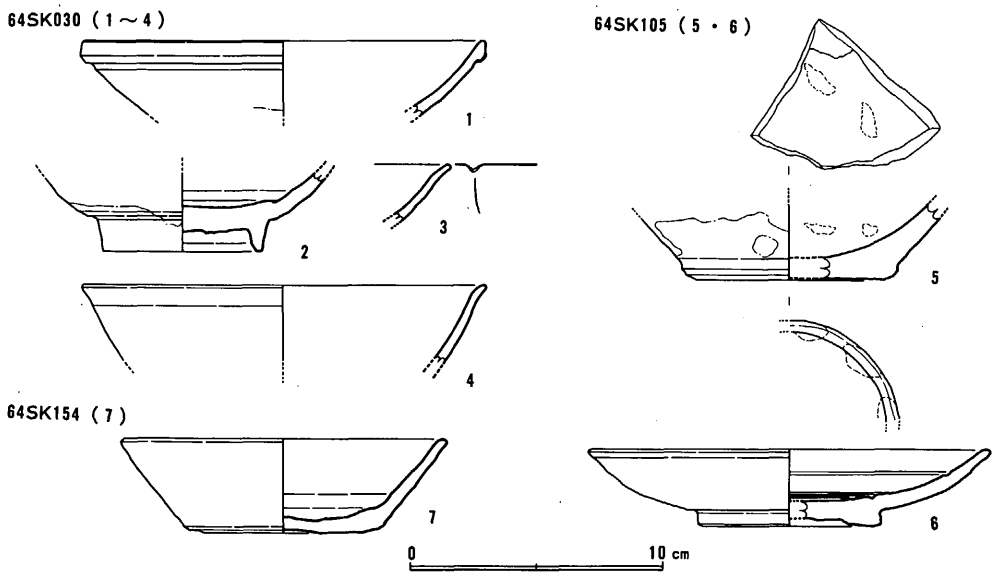


Fig.95　64SK030・105・154出土土器実測図（1/3）

小鉢（3）　口径8.2cm、器高4.0cmで、外面には指圧痕が目立つ。内面は風化が進んでいるが平滑であることから、半球状の型に粘土を押し当てて製作した可能性が強い。

蓋c3（4）　口径20.0cm、器高3.4cm。天井部中央に扁平ながらしっかりした宝珠形の摘みが付く。体部内外面ともほぼ全面にミガキaが施される。

須恵器

坏c（5）　口径15.1cm、器高5.8cm、高台径10.3cmを測る。底部はヘラ切りされた後丁寧にナデられたものと考えられる。

甕（6）　頸部径11.0cm、胴部最大径15.9cmを測る。調整は胴部の上位では内外面ともにヨコナデ、下半では外面が平行叩き、内面が同心円文の当て具痕が明瞭に残る。肩部に「×」のヘラ記号の様なものがある。施文は焼成前ながらある程度乾燥した状態で行われたらしい。

64SK030出土土器（Fig.95、CD-064354・355）

白磁

椀（1・2）　1は口径16.0cmで、Ⅳ類。2は高台径6.3cmで、Ⅴ類。

皿（3）　口縁部に輪花と、体部外面に輪花に合わせてヘラの押圧による縦線が入る。釉はやや青味を帯びた乳白色に発色する。Ⅺ′-3類。

高麗青磁

椀（4）　口径に復原できるが小片である。釉は明緑青白色に発色し、光沢がある。Ⅰ類。

64SK105出土土器（Fig.95、CD-064356～358）

越州窯系青磁

椀（5）　底径8.6cm。見込み及び底部側縁に目跡が残る。底部のものは灰茶色に変色した部分を図化している。

緑釉陶器

皿（6）　口径15.9cm、器高3.0cm、高台径7.2cmを測る。体部内面上位と見込みに沈線が巡る。表面は内外面ともにヘラミガキが行われたとみられるが不明瞭である。釉は高台外側までかかり、内側にはない。露胎部は明茶灰色を呈し、硬質に焼成される。洛西産か。

64SK154出土土器（Fig.95）

土師器

坏a（7）　口径13.0cm、器高3.7cm、底径7.9cmを測り、底部はヘラ切りされる。

64ST130出土土器（Fig.96、CD-064359～367）

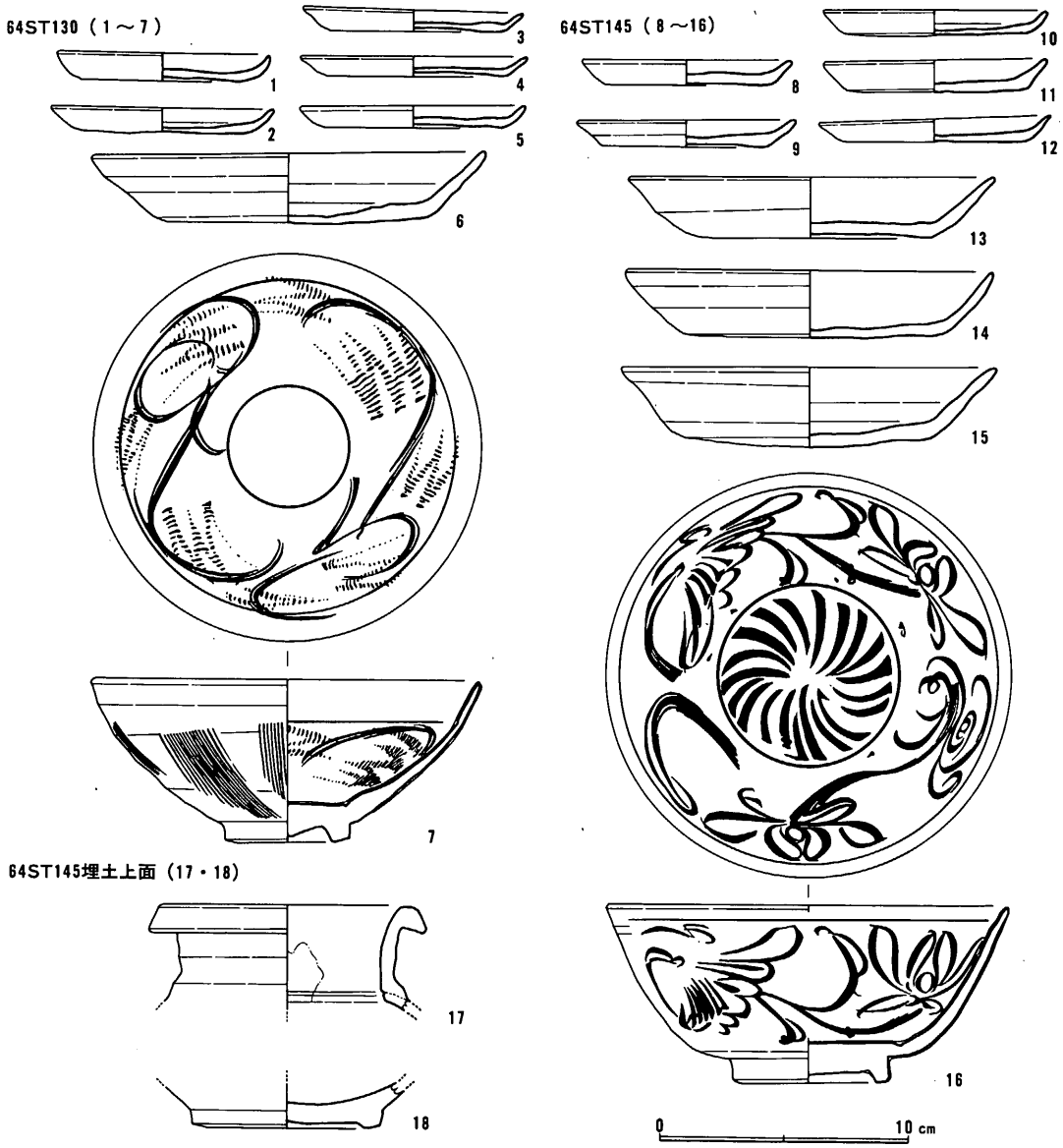


Fig.96　64ST130・145出土土器実測図（1/3）

1～7は墓壙内で検出された供献土器群である。

土師器

小皿a(1～5)　口径8.6～9.1cm、器高0.8～1.1cm、底径6.1～7.3cmを測る。底部はすべて糸切りされる。1は明褐色、他は明茶灰白色を呈する。

坏a(6)　口径15.7cm、器高2.8cm、底径10.6cm。底部は糸切りされる。

同安窯系青磁

椀(7)　口径15.8cm、器高6.6cm、高台径5.2cmを測る。口縁部を除く体部の内面にはヘラと櫛による文様があり、外面には縦ハケ状の施文がある。釉は淡緑灰色に発色し、外面体部下位以下にはかからない。露胎部は淡灰茶色を呈している。I-1-b類で完形品。

64ST145出土土器(Fig.96、CD-064368～378)

8～16は墓壙内で検出された供献土器群である。

土師器

小皿a(8～12)　口径8.4～9.3cm、器高0.9～1.3cm、底径6.7～7.3cmを測る。底部はすべて糸切りされる。すべて明茶灰白色を呈する。

坏a(13～15)　口径14.6～15.1cm、器高2.5～3.3cm、底径9.5～10.2cm。底部は糸切りされる。

龍泉窯系青磁

椀(16)　口径16.3cm、器高7.2cm、高台径6.4cmを測る。見込みにヘラの片切彫りによる放射状の曲線を描き、体部内面にも草花文を入れる。外面は無文である。釉は暗緑白灰色に発色し貫入が多く入り、畳付けの一部にまでかかるが外面底部には施されない。露胎部は褐色味を帯びた明茶白色を呈している。I-2-b類。

64ST145埋土上面出土土器(Fig.96、CD-064379･380)

白磁

椀(18)　高台径7.6cmで、Ⅳ-1-a類。

四耳壺(17)　口縁部の資料で、口径10.0cmに復原される。釉はくすんだ白緑色で、光沢はほとんどない。一部に貫入がみられる。II類。

64SX037出土土器(Fig.97)

土師器

坏a(1)　口径13.0cm、器高4.0cm、底径7.1cm。底部はヘラ切りされる。

64SX043出土土器(Fig.97、CD-064381･382)

越州窯系青磁

椀(2)　底径8.2cm。見込みに目跡があり、底部側縁には淡灰色で不整円形に変色する部分がある。釉は淡緑茶色に発色し、貫入が入る。

64SX053出土土器(Fig.97、CD-064383)

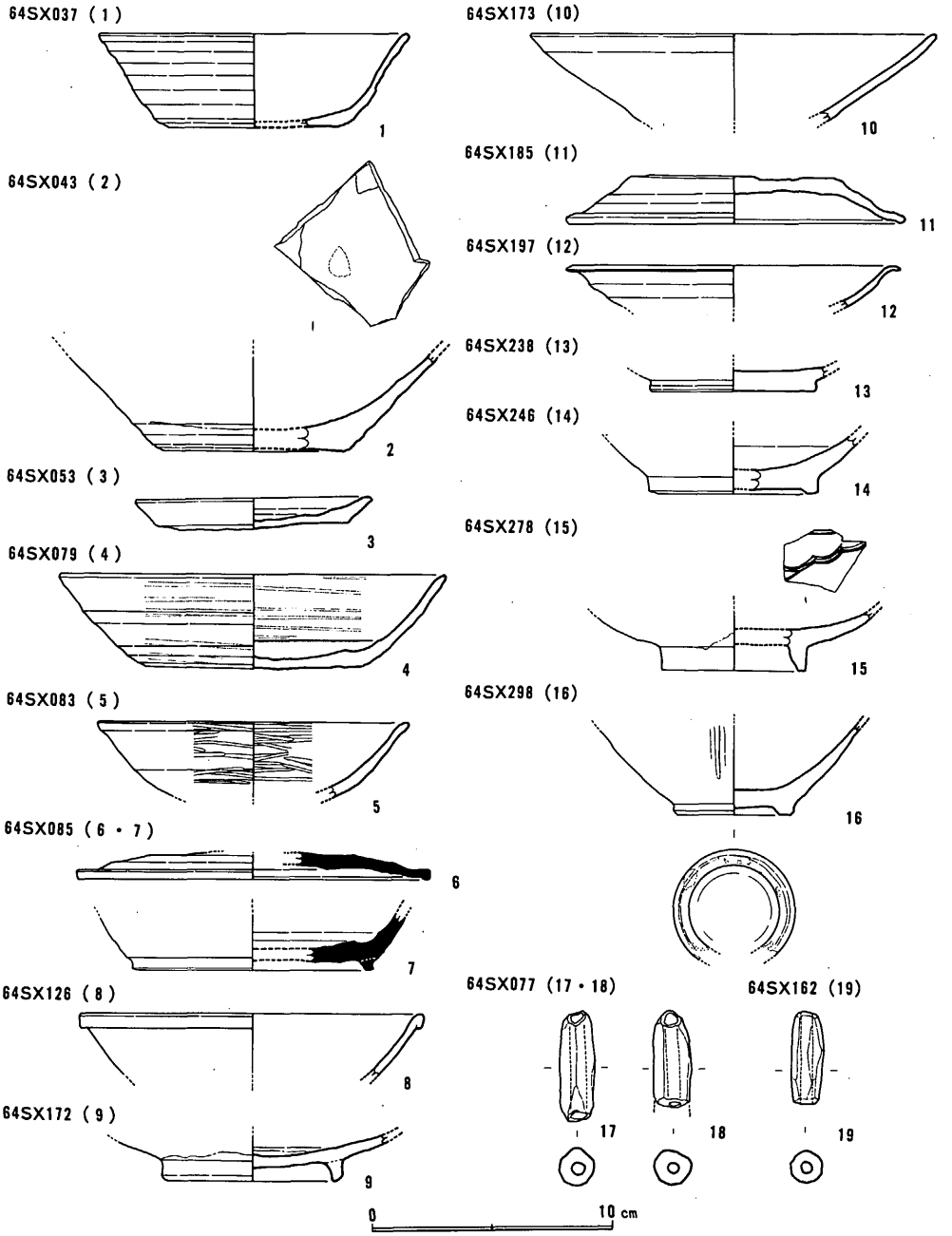


Fig.97　第64次調査各遺構出土土器実測図（1/3）

土師器

小皿ａ（3）　口径9.9cm、器高1.3cm、底径8.1cm。底部はヘラ切りされる。

64SX077出土土器（Fig.97、CD-064392）

土製品

錘（17･18）　長さ4.6･4.0cm、径1.5･1.6cmで、中央に径0.4～0.5cmの穿孔があり貫通する。胎土中は砂粒が大量に混入し粗いものである。表面の調整は風化して不明。

64SX079出土土器（Fig.97、CD-064384）

土師器

坏ｄ（4）　口径16.2cm、器高3.9cm、底径9.0cm。体部外面中位から底部は回転ヘラケズリされ、内外面ともにミガキａが施される。

64SX083出土土器（Fig.97、CD-064385･386）

緑釉陶器

椀（5）　口径13.0cm。体部外面下位に回転ヘラケズリがみられ、内外面ともにヘラミガキで仕上げられる。釉は残存部の全面にかけられ、明黄緑色に発色する。胎土は明白茶色で、軟質に焼成される。釉の剥落が目立つ。京都産か。

64SX085出土土器（Fig.97）

須恵器

蓋3（6）　口径14.0cm。低位上部は回転ヘラケズリされる。

坏ｃ（7）　高台径10.1cm。底部の高台近くはヨコナデされ、板状圧痕が残る。

64SX126出土土器（Fig.97、CD-064387･388）

白磁

椀（8）　口径14.4cm。口縁端部は折り曲げにより玉縁状に作る。釉は暗乳白色に発色し、光沢がある。部分的に貫入がみられる。Ⅰ-1類。

64SX162出土土器（Fig.97、CD-064392）

土製品

錘（19）　長さ3.9cm、最大径1.3cmで、中央に0.5cmの穿孔があり貫通する。表面の調整は不明。

64SX172出土土器（Fig.97、CD-064389･390）

灰釉陶器

皿（9）　高台径7.5cm。高台は内側にわずかに湾曲する。釉は透明感のある明緑灰色に発色し、外面底部（高台含む）にはかからない。見込みに重ね焼きの跡が残る。

64SX173出土土器（Fig.97、CD-064381･382）

越州窯系青磁

椀（10）　口径17.0cmに復原される。釉は暗緑灰色に発色し貫入がみられ、残存部の全面にかけられる。

64SX185出土土器（Fig.97、CD-064391）

須恵器

蓋ａ3（11）　口径14.2cm、器高2.0cm、天井部径9.1cm。天井部はヘラ切りされる。

64SX197出土土器（Fig.97、CD-064385･386）

緑釉陶器

皿（12）　口径14.0cmに復原されるが小片である。釉は淡緑茶色に鈍く発色し、胎土は明白茶色で軟質に焼成される。緑彩か。長門もしくは京都産と思われる。

64SX238出土土器（Fig.97、CD-064385･386）

緑釉陶器

皿（13）　径7.0cmの円盤底を呈する。見込み部分にはヘラミガキがあり、底部は回転ヘラケズリである。釉はやや茶色味を帯びた淡黄緑色で、胎土は淡白茶色を呈し、軟質に焼成される。胎土中に砂粒が少量混在するやや粗めのものである。

64SX246出土土器（Fig.97、CD-064387･388）

白磁

椀（14）　高台径7.1cmで、Ⅳ-1-a類。

64SX278出土土器（Fig.97、CD-064387･388）

白磁

椀（15）　高台径6.0cmに復原されるが小片である。内面には2～3条の櫛による波形文を入れる。釉は淡白灰色に発色し、高台部を除いてかけられる。XⅢ類。

64SX298出土土器（Fig.97、CD-064381･382）

越州窯系青磁

椀（16）　高台径5.0cmでやや小振りの椀である。体部の外面から縦方向にヘラを押し当て割花とする。釉は高台内面も含めて全面に施され、暗緑灰色に発色するが光沢はない。畳付けに目跡が残る。I-2-b-イ類。

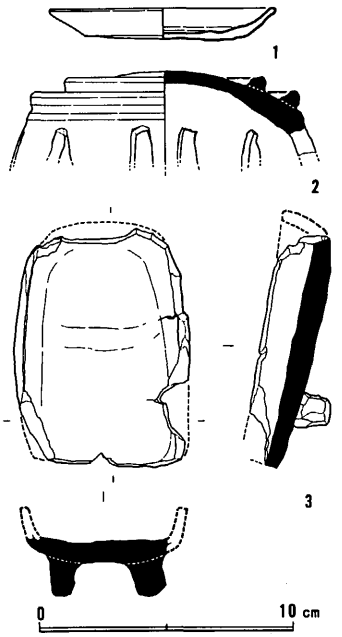


Fig.98　淡茶色土層出土土器実測図（1/3）

淡茶色土層出土土器（Fig.98、CD-064393～397）

土師器

小皿a(1)　口径8.9cm、器高1.2cm、底径6.4cm。底部はヘラ切りされる。

須恵器

円面硯（2）　外面上部に突帯が二重に巡り、内側の突帯以内が研磨されている。脚部は細めで長方形とみられる透かしがあり、推定で12箇所存在したものと考えられる。内面はナデ調整である。

風字硯（3）　小形のもので、脚がふたつ貼り付く。粘土板を折り曲げて作ったようで、随所に指圧痕が残っている。内面中央部が研磨されている。現存長9.5cm。

茶褐色土層出土土器（Fig.99･100、CD-064398～416）

土師器

小坏a(1)　底径4.0cm。底部は未調整で、内面も平坦部はないことから、壺など深めの容器

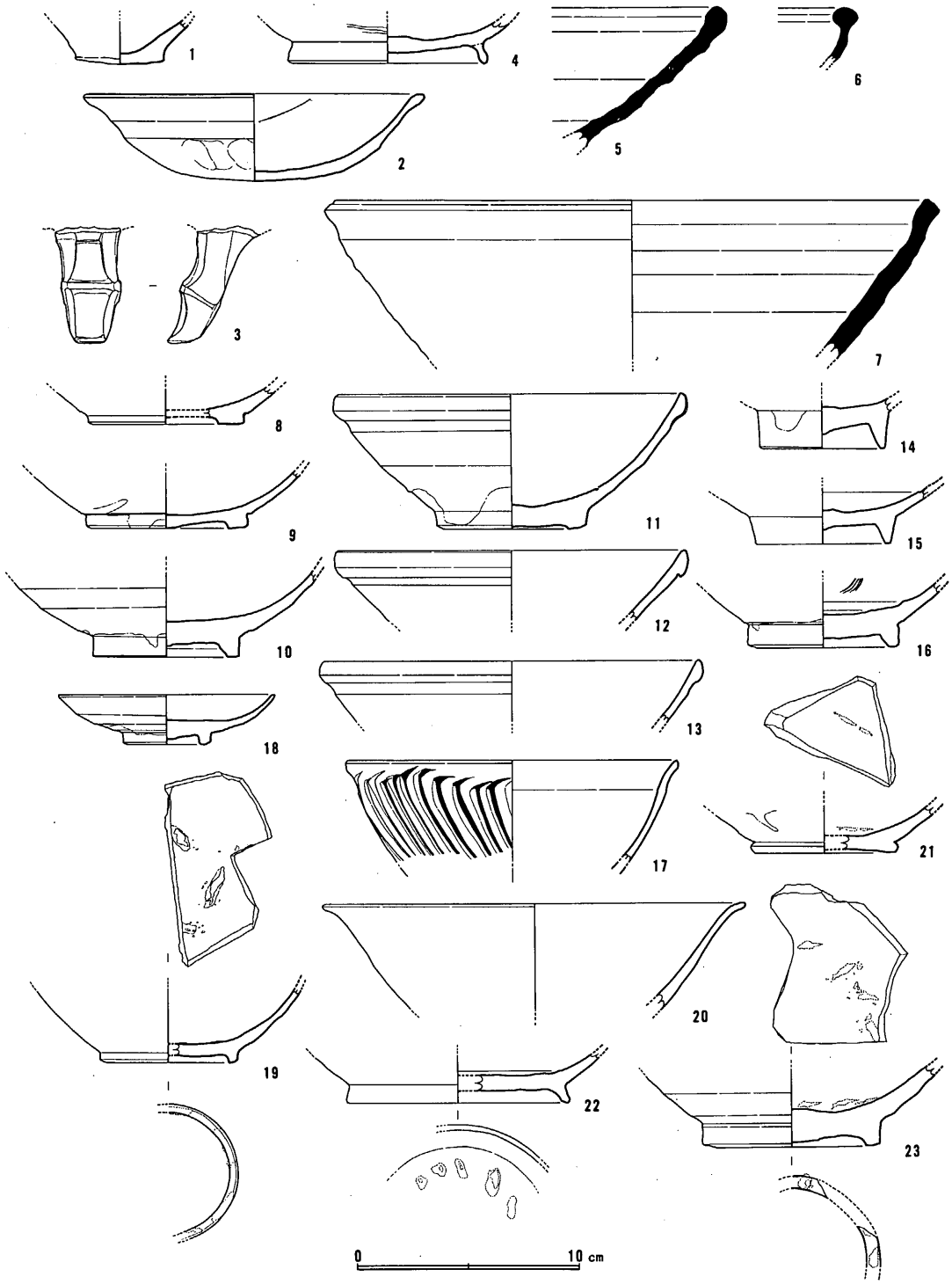


Fig.99　茶褐色土層出土土器実測図１（1/3）

の可能性が高い。

丸底坏ａ（2）　口径15.4cm、器高3.9cm。内面はミガキｂが施される。

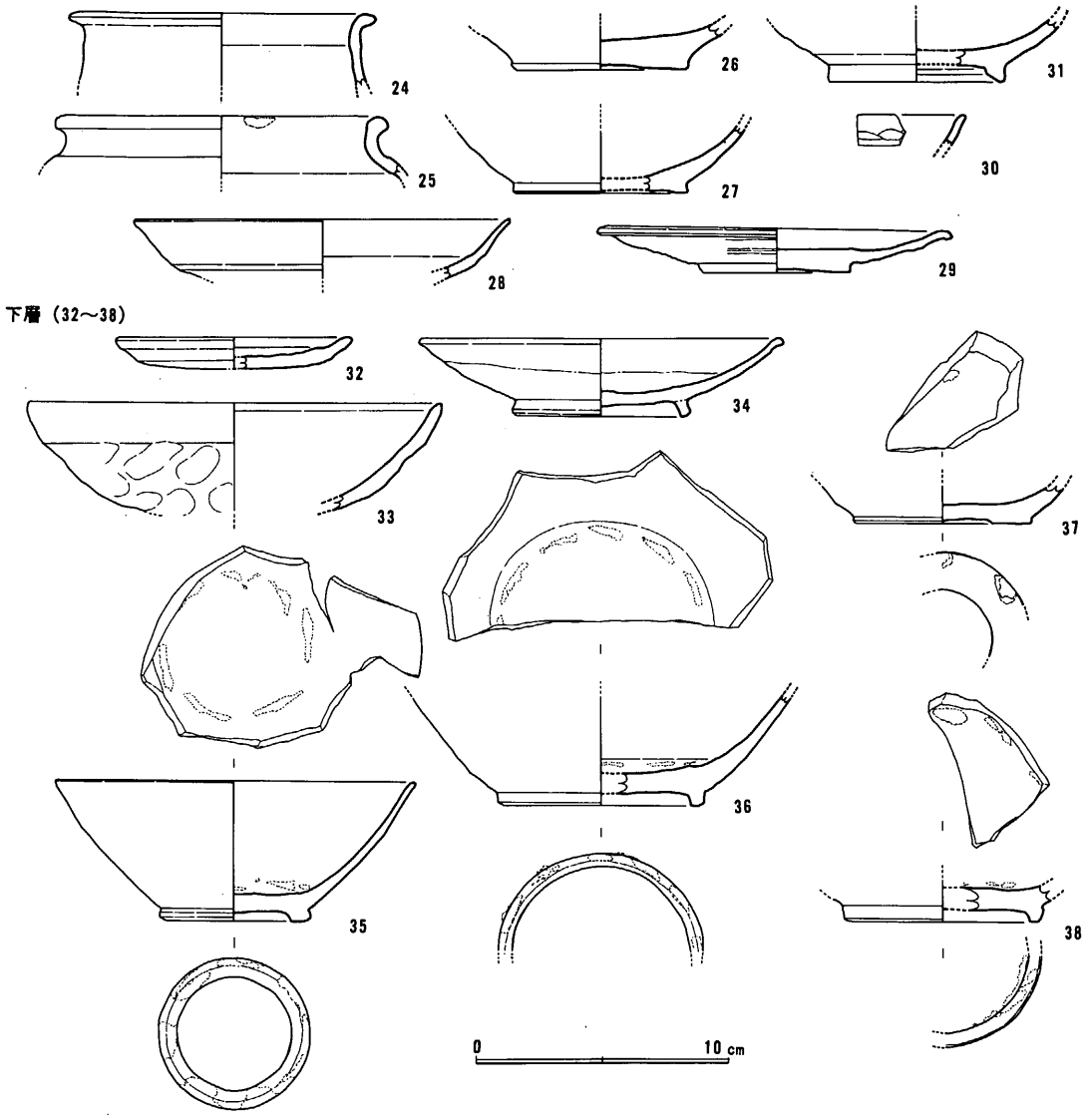


Fig.100　茶褐色土層出土土器実測図２（1/3）

脚（3）　現存長約10cmで、脚の中程に節がある。ケズリにより成形されているらしい。

黒色土器

椀ｃ(4)　Ｂ類で、高台径9.0cm。内面は風化して判別不能であるが、外面にはミガキｃが観察される。

須恵器

鉢（5～7）　5・6は篠窯系、7は口径27.8cm。胎土中には砂粒が若干混在し、表面には大小の黒灰色班が多数付着している。東播系。

白磁

椀（8～17）　8は高台径7.1cm。幅広の輪高台で、畳付けには施釉されない（拭き取り）。釉は明乳白色に発色し、光沢がある。Ｉ類。9は高台径7.3cm。やや幅広の輪高台で、高台及び底

部には施釉されない。釉は明乳白色に発色し、光沢がある。Ⅰ類。10は高台径6.6cm。透明で薄い緑味を帯びた白灰色に発色する釉がかかり、高台及び底部には施釉されない。Ⅱ類。11は口径15.5cm、器高6.1cm、高台径6.8cmを測るⅣ-1-a類である。淡黄白色に発色する釉は体部下半以下にはかからない。12・13は口径15.8・17.4cmで、Ⅳ類。14・15はⅤ類の底部で、高台径5.7・6.1cm。14の割れ面は故意に打ち欠いているものとみられる。16は高台径6.8cmで、体部内面には櫛による施文がある。釉は淡白灰色に発色し、高台部及び底部にはかからない。また見込み部分は幅1.2cm内外で拭き取られており、それに沿って重ね焼きの痕跡が残る。同様なものが畳付けの一部にもみられる。Ⅷ-2または3類。17は口径15.0cmに復原される。口縁部をわずかに外反させ、体部外面には片切彫による施文がある。釉は薄緑味を帯びた淡白灰色に発色し、貫入がある。Ⅻ類。

皿（18）　口径9.8cm、器高2.2cm、高台径3.9cmを測る。釉はわずかに灰色味を帯びた乳白色に発色し、高台周辺にはかからない。また随所に色斑がある。

越州窯系青磁

椀（19～21）　19は高台径6.2cm。見込み及び畳付けに目跡が残る。Ⅰ-2-ア類。20は口径19.1cm。口縁部をわずかに外反させ、釉は淡緑黄灰色に発色する。21は底径6.3cm。見込み及び底部側縁に目跡が残る。釉は淡緑灰白色に発色するが、剝離が著しい。Ⅱ-2-cまたはd類。

皿（22）　大振りの椀の可能性もある。高台径10.0cm。釉は暗深緑色で全面施釉され、高台より内側の底部に目跡が残る。Ⅰ-2-オ類またはⅢ類。なお体部割れ面の一部が研磨されている。

鉢（23）　高台径8.0cm。淡緑灰色で光沢のない釉が全面に施されるが、畳付けは拭き取られる。見込み及び畳付けに目跡が残る。Ⅰ類。

陶器

壺（24・25）　24は口径12.2cmに復原されるが小片である。暗茶緑色に発色する釉がかかり、貫入がある。胎土は明灰茶色を呈し、ごく小さい黒班状の混入物が微量観察される。四耳壺あるいは長沙窯系の褐釉壺と思われる。25は口径13.2cmに復原されるが小片である。釉は明茶緑色に発色するが色斑がある。口縁部内側に目跡がある。C′-a類。

緑釉陶器

椀（26・27）　円盤状の高台は糸切りされ、径7.0cm。釉は明黄緑色で、底部以外にかけられる。胎土は明茶白色を呈し、軟質に焼成され風化が進む。洛北産か。27は高台径7.0cmで中央部をわずかに窪ませて蛇の目高台とする。内面はヘラミガキが施されるが、外面は回転ヘラケズリである。胎土は茶色味を帯びた明灰色で、やや軟質。釉はなく素地のままの製品とみられる。洛西産か。

皿（28～30）　28は口径14.9cmに復原しているが小片である。体部中程に屈曲がある。内外面ともにヘラミガキが施される。釉は明緑白色で、胎土は明白茶色を呈し軟質に焼成される。京都産。29は口径14.1cm、器高1.8cm、高台径5.8cmを測る。内面はヘラミガキが施され平滑に

なっているが、体部から底部の外面は回転ヘラケズリである。色調は淡明灰色で、硬質。釉はなく素地のままの製品とみられる。洛西産か。30は小片であるが、内面に花弁の一部かとみられる沈線様の文様がある。釉は暗緑白色で硬質に焼成される。東海産か。

灰釉陶器

壺（31）　高台径7.0cm。内面に緑灰色の釉が散っている。胎土は明灰色で白色の粒子を若干含んでいる。

茶褐色土下層出土土器（Fig.100、CD-064417～421）

土師器

小皿ａ（32）　口径9.4cm、器高1.3cm、底径9.7cm。底部はヘラ切りされる。

丸底坏ａ（33）　口径16.5cm。やや深手である。

越州窯系青磁

椀（35～38）　35は口径14.3cm、器高5.5cm、高台径6.0cmを測る。全面施釉され、淡深緑色に発色する。見込み及び畳付けに目跡が残存している。I-2-a-イ類。36は高台径8.2cmで、全面施釉され暗深緑色に発色する(畳付けの釉は使用のためか部分的に擦り取られている)。見込み及び畳付けに目跡が残存している。I-2-a-ア類。37は蛇の目高台と幅広輪高台の境目のような高台で、径7.2cm。釉は淡緑灰色に発色するが、畳付けと外面底部には施釉されない。露胎部は

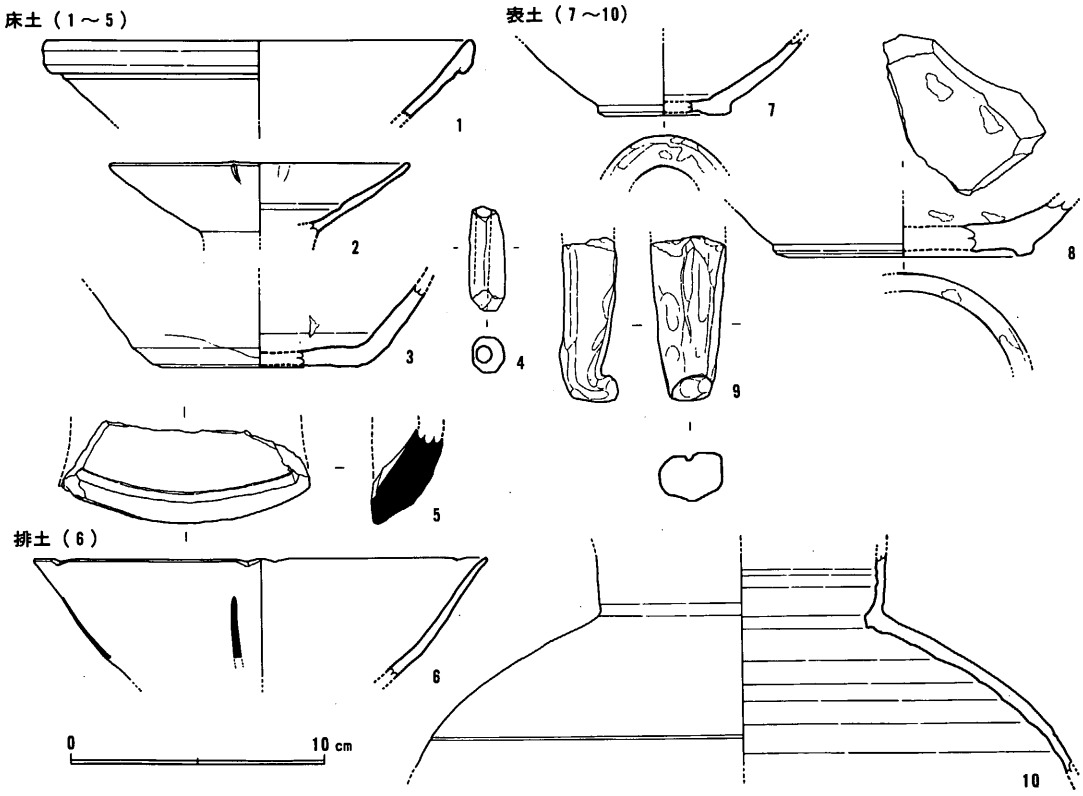


Fig.101　床土・排土・表土出土土器実測図（1/3）

暗褐色。胎土は明灰茶色、明灰色である。I-1-b類。38は高台径7.9cm。畳付けの釉は拭き取られたのか露胎になっている。見込み及び畳付け内側側縁に目跡が残り、畳付けには欠けた部分が目立つ。I-2-アまたはウ類。

灰釉陶器

皿（34）　口径14.5cm、器高3.1cm、高台径7.1cmを測る。釉は淡緑灰色に発色し透明感があるが、内外面とも口縁部付近にかけられるだけで他は拭き取られている。見込みに重ね焼きの跡と思われるものがわずかに残存する。

床土出土土器（Fig.101、CD-064422～424）

須恵器

風字硯（5）　最大幅9.9cm。表面は研磨され、裏面はヘラケズリにより調整される。

白磁

椀（1）　口径17.0cmで、Ⅳ類。

皿（2）　口径12.0cm。見込みに段があり、口縁部を外方からヘラで押圧し輪花とする。釉は残存部の全面にかかり、薄緑色味を帯びた明白灰色を呈する。

越州窯系青磁

坏（3）　底径7.8cm。体部外面下半以下は釉がかからず、暗褐色の露胎となっている。内面の体部下位に目跡とみられる付着物がある。

土製品

錘（4）　長さ4.2cm、最大径1.3cmで、中央からややずれて径0.6cmの穿孔が貫通する。胎土は砂粒を多量に含むもので、土師質である。

排土出土土器（Fig.101、CD-064425･426）

越州窯系青磁

椀（6）　口径18.0cm。口縁端部には輪花が切り込まれ、それに対応して体部外面にヘラによる縦線文が入る。この施文時に強く押圧したためかわずかに体部が窪んでいる。I-2-b類。F14地区の壁が崩落した際の残土から採集した資料である。

表土出土土器（Fig.101、CD-064427～432）

土師器

脚（9）　先端を折り曲げて足先を表現する。表面は風化が進み、調整不明。

越州窯系青磁

椀（8）　高台径10.3cm。見込みと畳付けに目跡が残る。I-2-ウ類。

高麗青磁

椀（7）　蛇の目高台風で見込みは一段窪んでいる。釉は暗緑色に発色し、畳付けには目跡が残る。I-1類。

灰釉陶器

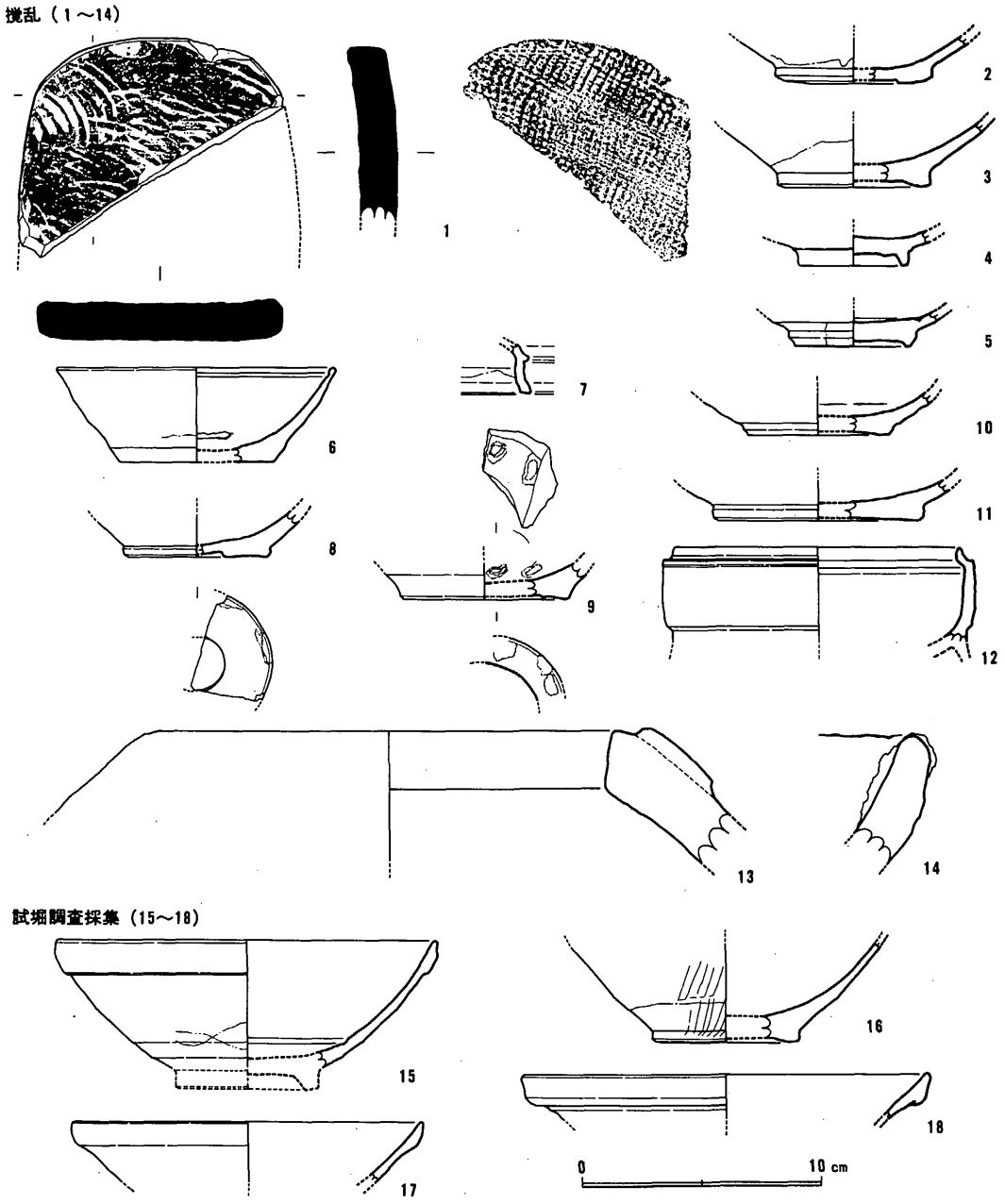


Fig.102　撹乱及び試掘調査出土土器実測図（1/3）

長頸瓶（10）　頸部径11.2cm。外面全体に明淡緑灰色の釉がかかる。内面には釉はなく明灰色を呈している。頸部は貼付により、他はヨコナデで仕上げられる。

撹乱出土土器（Fig.102、CD-064433～444）

須恵器

猿面硯（1）　甕の胴部を加工したもので、同心円の当て具痕が明瞭な部分を使用面としており、端部の一部分のみ完全に消滅するまで研磨されているものの他の部分では凹凸が若干擦り

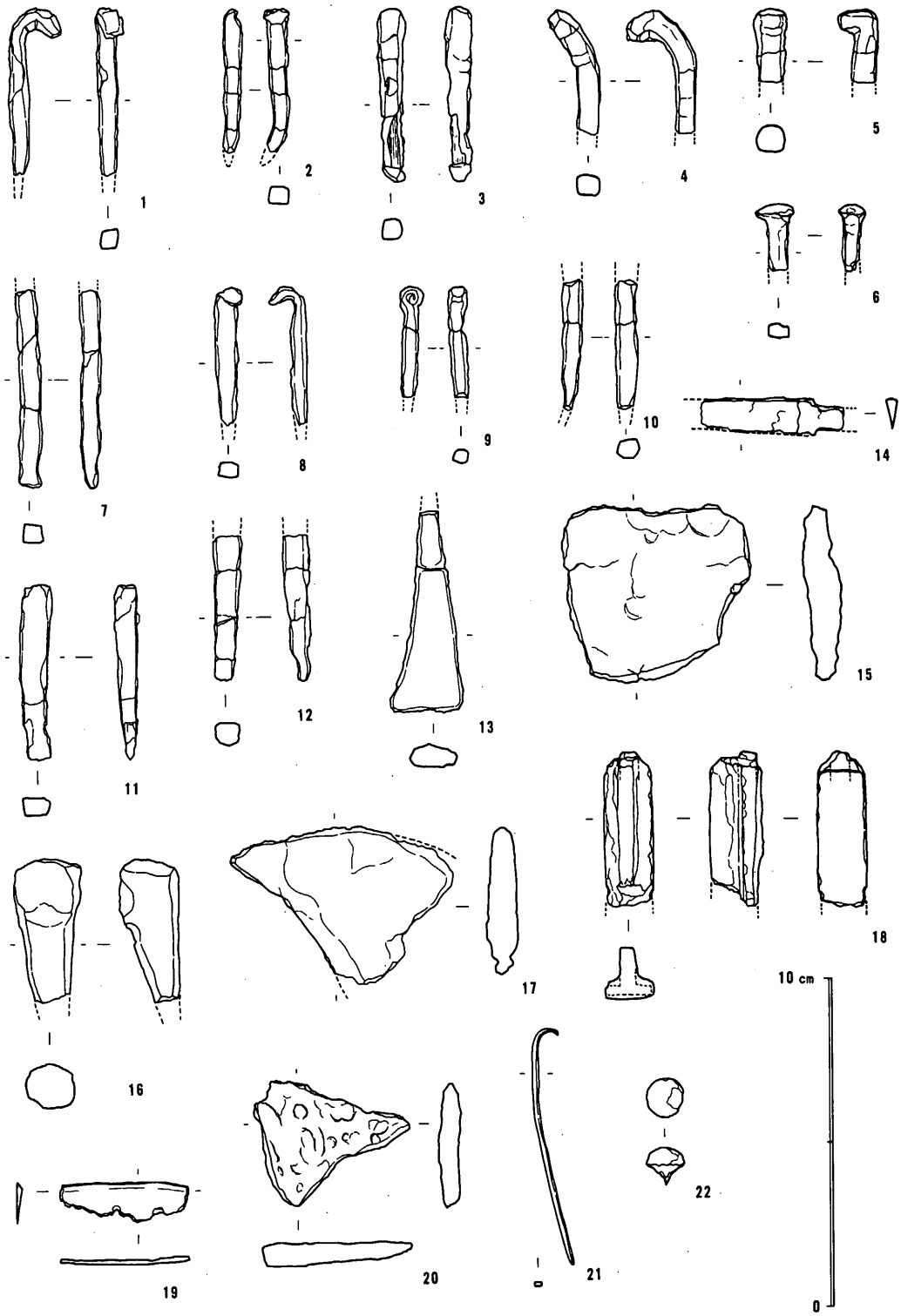


Fig.103　第64次調査出土金属製品実測図１（1/2）

減る程度である。平行叩き（疑格子）面も簡単に研磨され、側面はかなり丁寧に研磨されている。南東区の撹乱中から出土している。

白磁

椀（2･3）　2は高台径6.6cm。釉は乳白色に発色し、高台及び底部外面にはかからない。畳付けは研磨されたように擦り減っている。S-256出土。3は高台径6.4cmで、Ⅳ-1-a類。S-108出土。

皿（4･5）　4は高台径4.4cmで、Ⅲ-2類。S-206出土。5は高台径4.9cmで、Ⅺ類の可能性がある。S-108出土。

越州窯系青磁

坏（6）　口径11.8cm、器高4.0cm、底径6.6cmに復原されるが小片である。見込みに目跡が残り、口縁部内側には沈線が1条巡る。体部外面下半に釉はかからない。Ⅰ-3類か。S-206出土。

蓋（7）　香炉ないしは合子の蓋と思われる。口縁端部と内側は施釉されず、目跡とみられるものが付着している。Ⅰ類。S-108出土。

椀（8･9）　8は高台径6.4cm。蛇の目高台の側縁に目跡がある。S-256出土。9は高台径6.8cmになるが小片である。見込み及び畳付けに目跡が残る。S-108出土。

緑釉陶器

椀（10･11）　10は円盤状の高台で径6.0cm。釉は暗深緑色に発色し、底部にはかからない。見込みに重ね焼きの跡が残る。胎土は暗灰色で硬質（須恵質）に焼成される。洛西産か。S-206出土。11は円盤状の高台で径8.6cm。釉は明緑白色に発色するが大半が剥離している。胎土は明白茶色で軟質に焼成される。洛北産か。S-108出土。

香炉（12）　口径12.0cmに復原される。釉は明緑黄色に発色し、内面で顕著に残るが外面は受け部周辺にとどまる。ただし当初から存在しなかったかどうかは不明である。胎土は明茶白色で軟質に焼成される。S-206出土。

土製品

13は無頸の壺状を呈するもので、口径19.0cm。胎土中に砂粒やスサが多量に含まれており、焼成はあまい。表面に同質の付着物があるが剥離した残欠とも受け取れるため、この分の厚さだけさらに厚くなる可能性がある。14はやや大型のトリベとみられる。口縁部から内面にかけて黒灰色ないしは暗褐色の付着物があるが、表面が溶解したものと考えられる。内面の一部に銅粒が付着している。胎土は砂粒を多く含み、粗めである。いずれもS-256出土。

試掘調査出土土器（Fig.102、CD-064445･446）

白磁

椀（15～18）　15は口径16.0cmで、Ⅱ-5類。16は高台径6.2cmで、Ⅳ-1-a類。17･18は口径14.7･17.2cmで端部の形状はわずかに異なるが、いずれもⅣ類である。

(2)　金属製品（Fig.103･104、CD-064447～461）

鉄製品

釘（1～6･8～10）　頭部を渦巻き状にするもの（9）、平頭状にするもの（2･5･6）、大きく折り曲げただけのもの（1･8）などがある。1は64SE120黄灰色土層出土、2は64SK030出土、3は64ST145埋土中出土、4・5は茶褐色土下層出土、6は茶褐色土層出土、8・9は64SD110出土、10はS-121ピット出土。

楔形製品（7･11･12）　釘状を呈しているが、先端が刃状を呈している。7は64SE120黒色土層出土、11はS-57ピット群出土、12は茶褐色土下層出土。

刀子（14）　両端を失う。茶褐色土層出土。

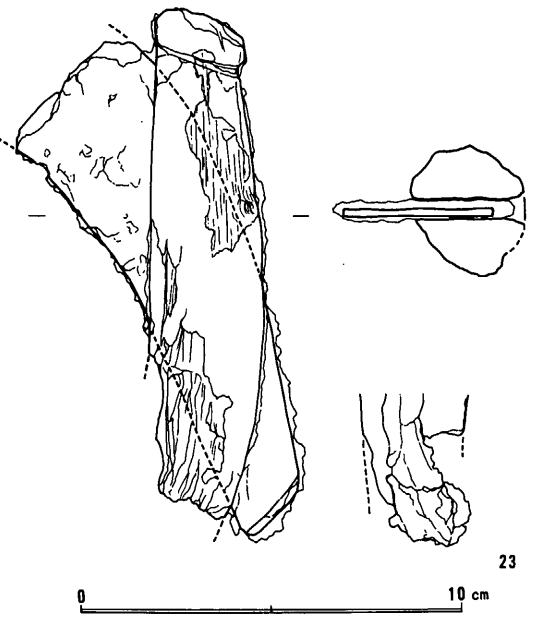


Fig.104　第64次調査出土金属製品実測図2（1/2）

鎌（23）　木製の柄が残存する。柄は長さ15.5cm以上、径2.3～3.0cmで末端が欠損するが、先端部は陽物状に加工している。64SE120下段枠内から出土した。

不明製品（15～18）　15は鉄板状のもので64SE120黄灰色土層出土。16は釘のような形状を呈するがきわめて太い。S-121出土。17は鎌の先端部とみられる資料で、S-276出土。18は凸形柱状を呈する資料である。用途は分からない。茶褐色土下層出土。

銅製品

鋲（22）　径1.2cmで半球形を呈し、短い針が付く。頭部には塗金が残存し、針部と頭部の境には木質が残存しており、両者の接合方法は不明である。茶褐色土下層出土。

針金状製品（21）　銅線の先端を折り曲げたような製品で、両端とも鋭利になっている。64SE001枠内出土。

不明製品（19･20）　19はきわめて薄い板状で端部がわずかに肥厚され、全体は少し湾曲している。椀や鉢の口縁部の可能性がある。64SD110出土。20は板状の製品でS-193出土。

(3)　木製品

64SE120出土井戸枠（Fig.105～110、CD-064462～483）

縦板（1～5）　すべて北側に利用されていた板材である。表面は上部の腐食が進行する部分を除いて、チョウナによる加工痕が明瞭に残る。底部の切断は鋸状の工具を用いたものとみられ、平坦で直線的であり、側面は丁寧に削られているものが多い。1は長さ93.7cm、幅30.2cm、厚さ2.8～3.0cm。底部から約6.0cmの位置に径0.4cm程の穿孔があり、釘穴の可能性がある。ま

た底部切断後簡単にケズリによって調整している。２は長さ74.5cm、幅21.2cm、厚さ1.5～2.0cmを測る。丸太材の外側に近い部分を使用しているようで、外面の中央部分のみ丁寧なケズリを施しているが、両側縁は樹皮を剥いだままの状況とみられる。ケズリの方向は刃がくい込んでケズリ残した痕跡を窺う限り一定していない。なお底部は部分的に削られるが他と異なり、鉈で叩き割ったような印象を受ける。３は長さ76.6cm、幅28.3cm、厚さ2.5～3.3cmを測る。表

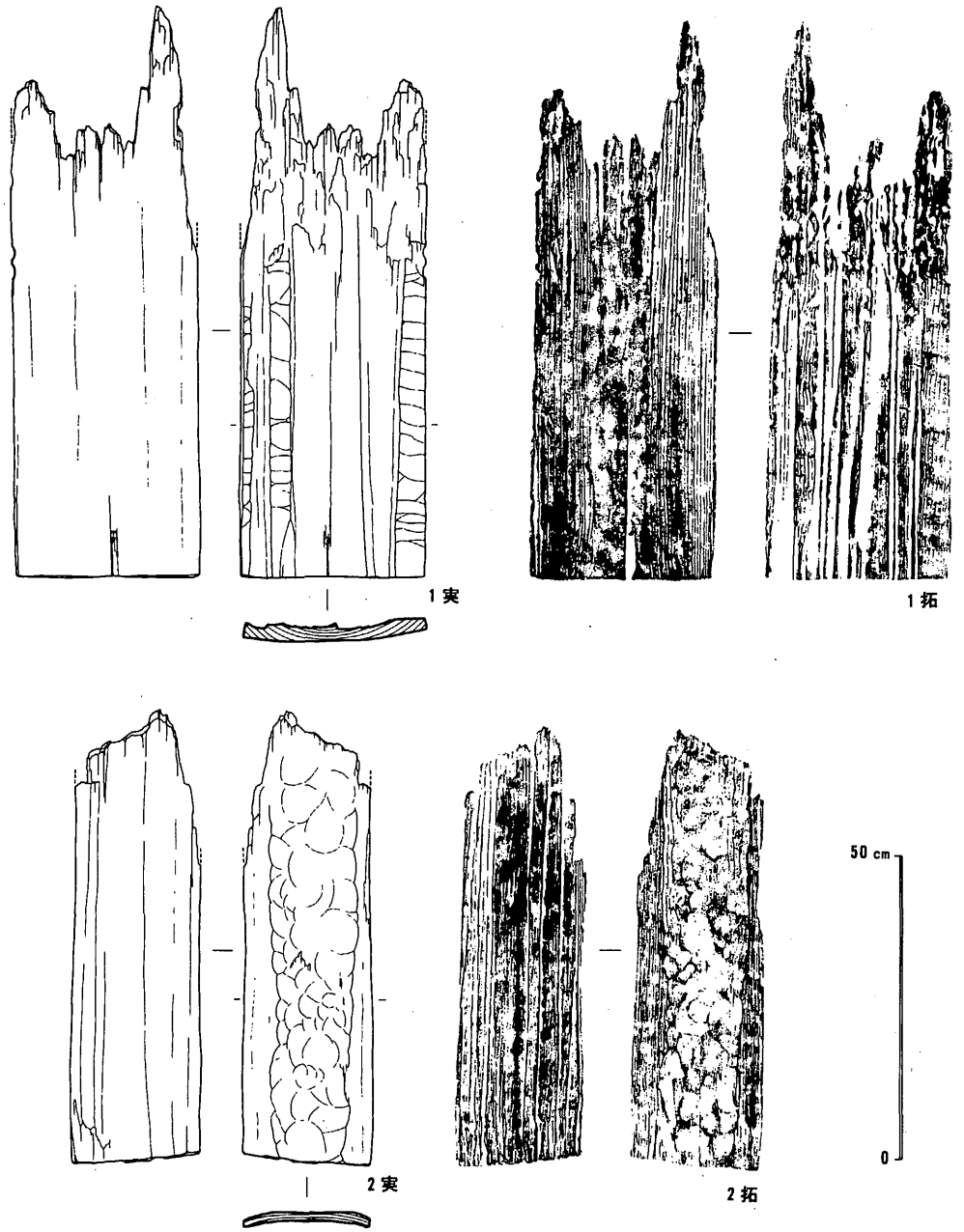


Fig.105　64SE120井戸枠材実測図・拓影１（1/12）

面はチョウナ状の工具によるケズリとみられるが、他の資料のように明瞭には見えない。4は長さ103.1cm、幅29.0cm、厚さ1.6～2.8cmを測る。片面は風化が著しく調整は見えないが、もう一方の片面は中央部がおそらく年輪の目にともなって剝落したようで残らないが、両側縁部分

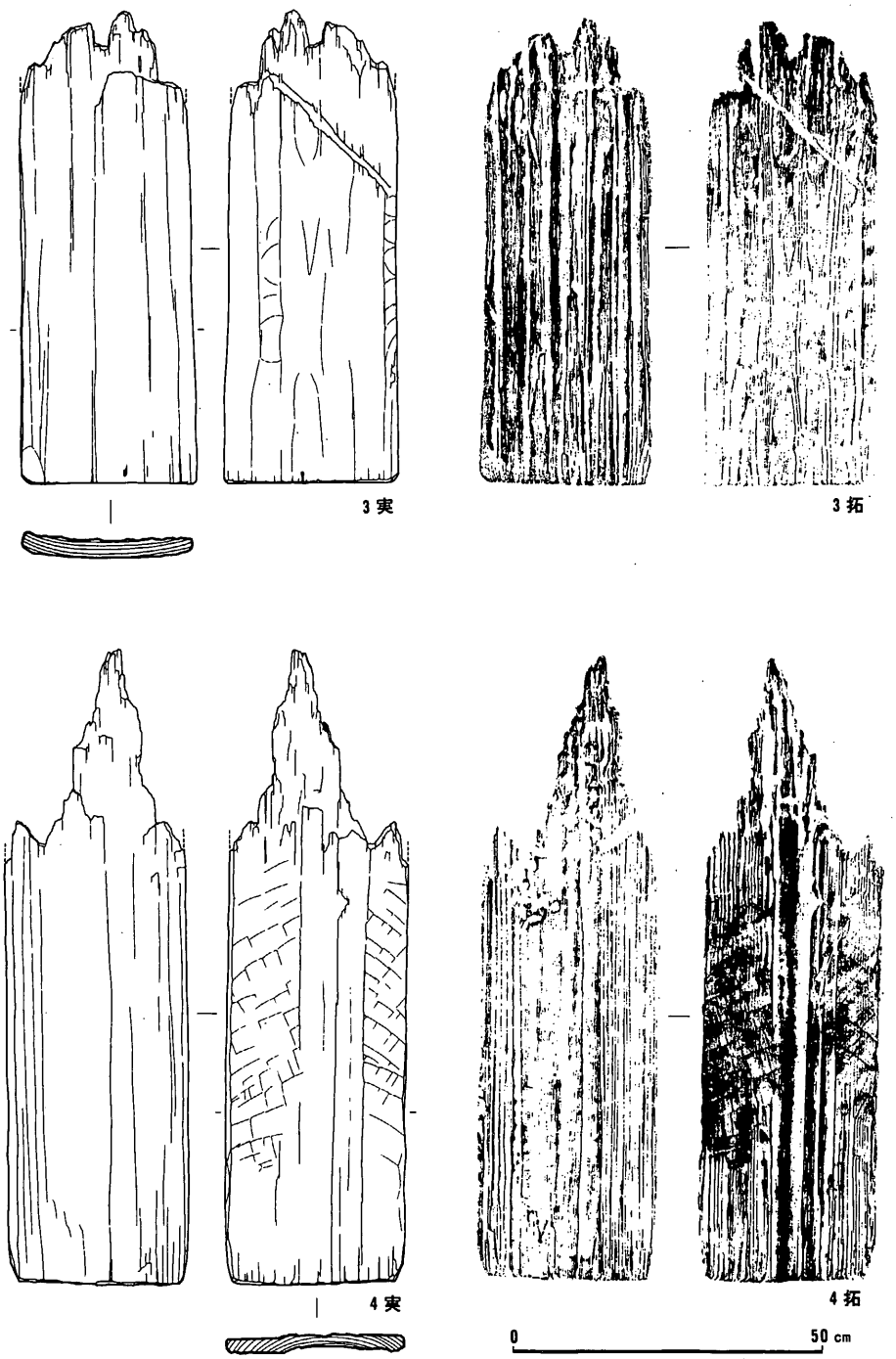


Fig.106　64SE120井戸枠材実測図・拓影2（1/12）

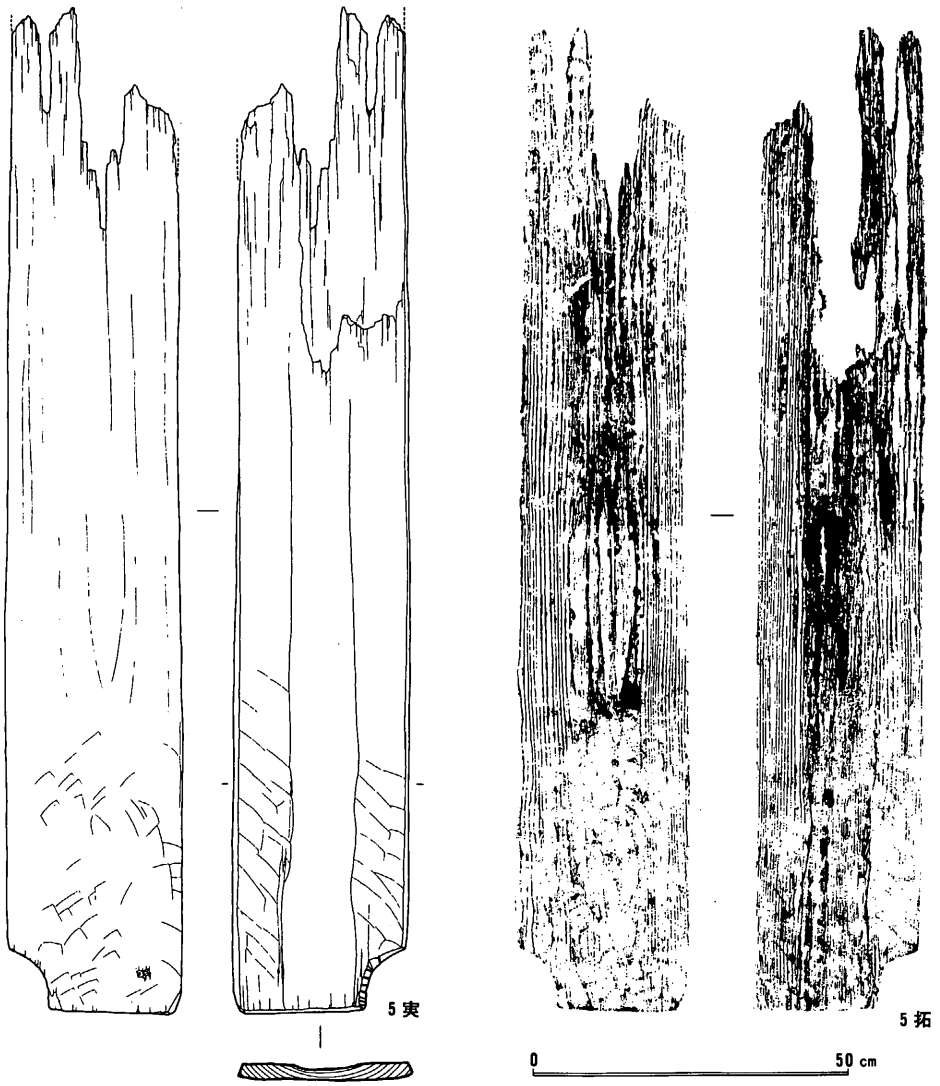


Fig.107　64SE120井戸枠材実測図・拓影３（1/12）

にケズリの跡が顕著に認められる。５は長さ158.9cm、幅27.8cm、厚さ1.7～2.8cmを測る。底部から約50cmの範囲は当初から土中にあったためか残存状況もよく、ケズリの痕跡も観察できる。底部の隅の片方を大きく抉り込んでいる。

枠板（6～9）　４枚で一組となり箱形に組み立てられ、縦板材よりもさらに下位に据えられていたものである。短材の両端は特別な加工を施さないが、長材では片面の両端に短材がはめ込まれるための溝を穿っている。さらに板材をはめ込んだ後に外側から鉄釘を打ちつけて留めている。釘は２箇所の所と３箇所の所がある。表面はすべて丁寧に削られており、チョウナ状の工具で調整されていることがわかる。調整は埋蔵環境で残存状況が異なり、据えられていた外側で顕著に観察できた。６・７は短材である。６は東側の材で、長さ57.4cm、幅55.4cm、厚さ

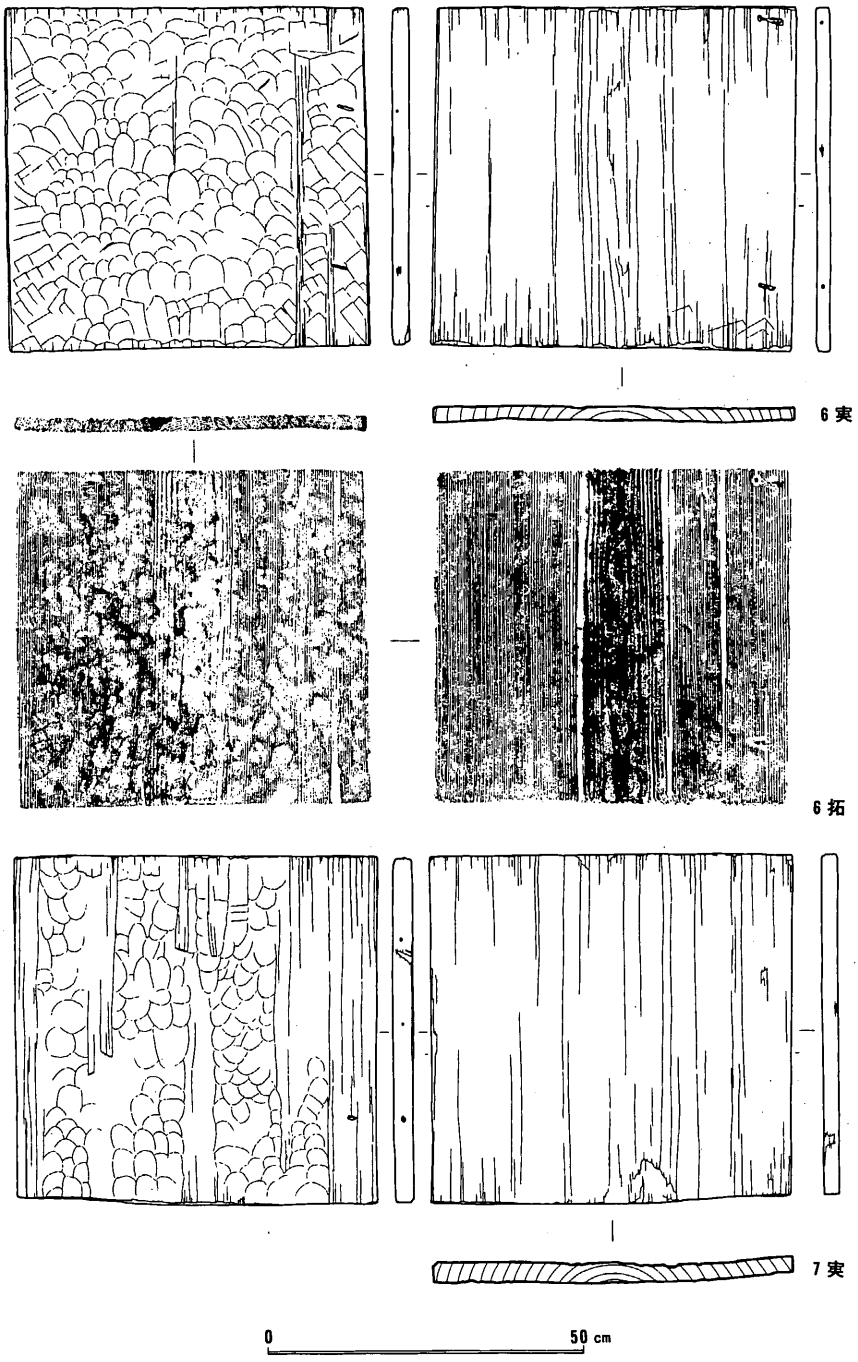


Fig.108　64SE120井戸枠材実測図・拓影４（1/12）

3.5cmを測る。側面から打ち込まれた釘が顔を出している部分があり、これから推定すると釘の長さは7.5cm程度に推定される。７は西側の材で、長さ58.0cm、幅54.6cm、厚さ2.8cmを測る。打ちつけられた釘が２箇所で顔を出している。８・９は長材である。８は南側の材で、長さ71.4cm、幅54.5cm、厚さ3.5cmを測る。短材と組み合わせるための溝を内側の両側縁に彫り込む。溝

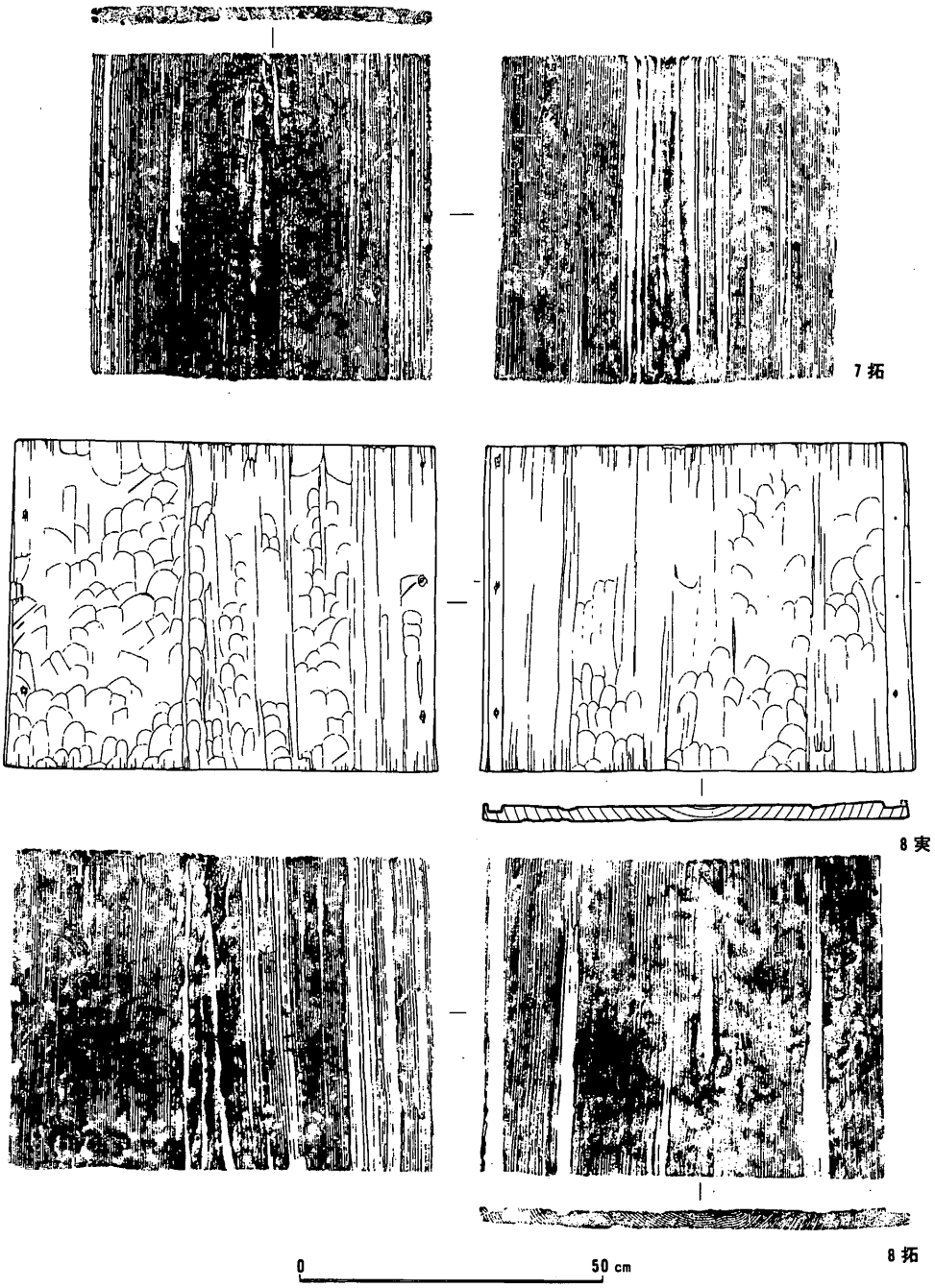


Fig.109　64SE120井戸枠材実測図・拓影5　(1/12)

の幅は2.3・3.0cm。9は北側の材で、西から17cmのところで割れているが同一の材である。復原長70.3cm、幅53.7cm、厚さ3.6cmを測る。短材と組み合わせるための溝を内側の両側縁に彫り込む。溝の幅は2.6・3.0cm。なお組み合わせの結果、短材は木心が外にくるように置き、長材は逆に内側を向くように配置されていた。歪みを考慮したものであろうか。

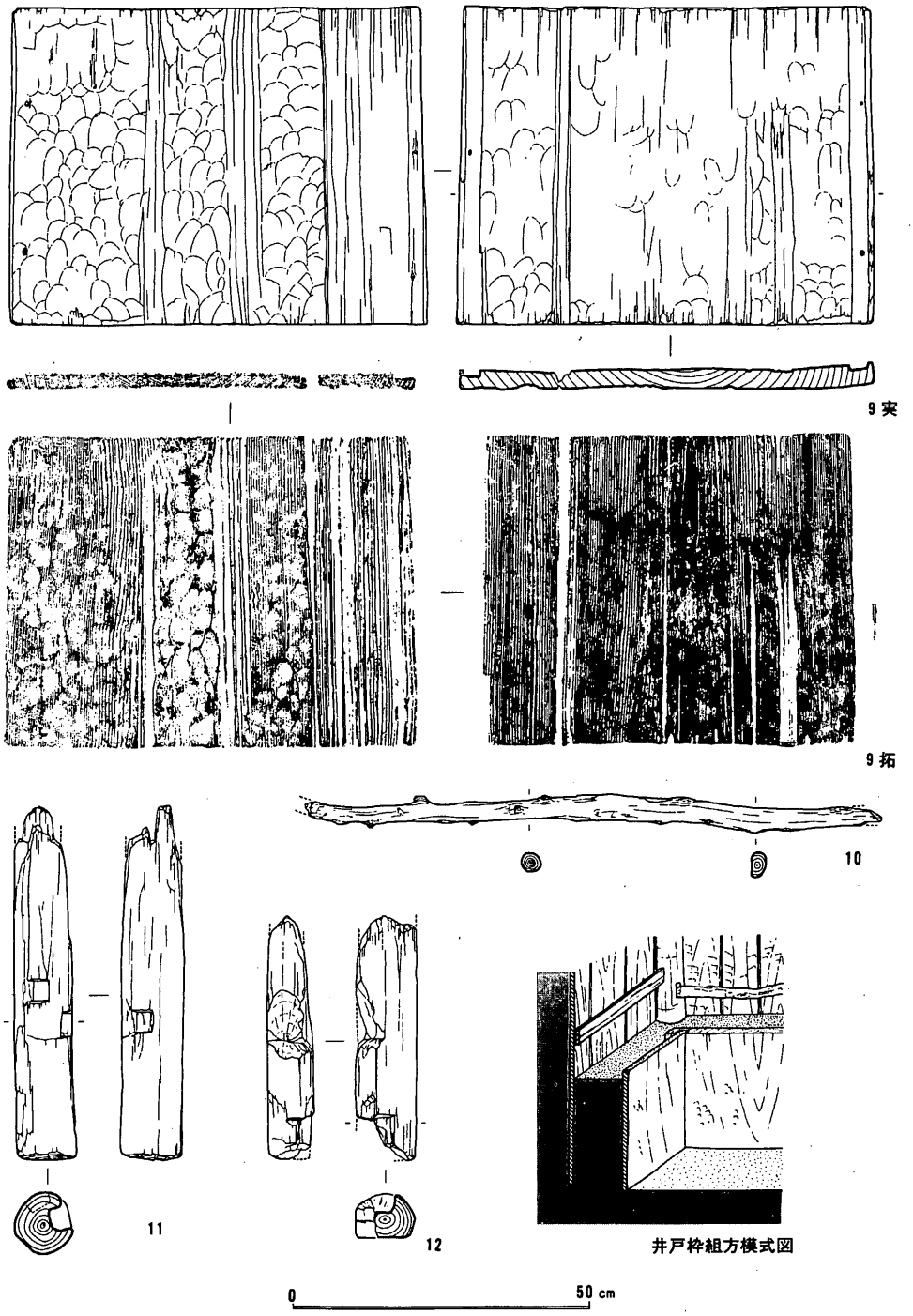


Fig.110　64SE120井戸枠材実測図・拓影6 (1/12)

横桟 (10)　長さ97.0cm、径3.2～4.3cmの自然木で、枝を切り取っただけの加工である。小口部分は腐食しており、どのような構造で支柱にはめ込まれていたかは明らかでない。残存位置から北側下位の横桟であることがわかる。

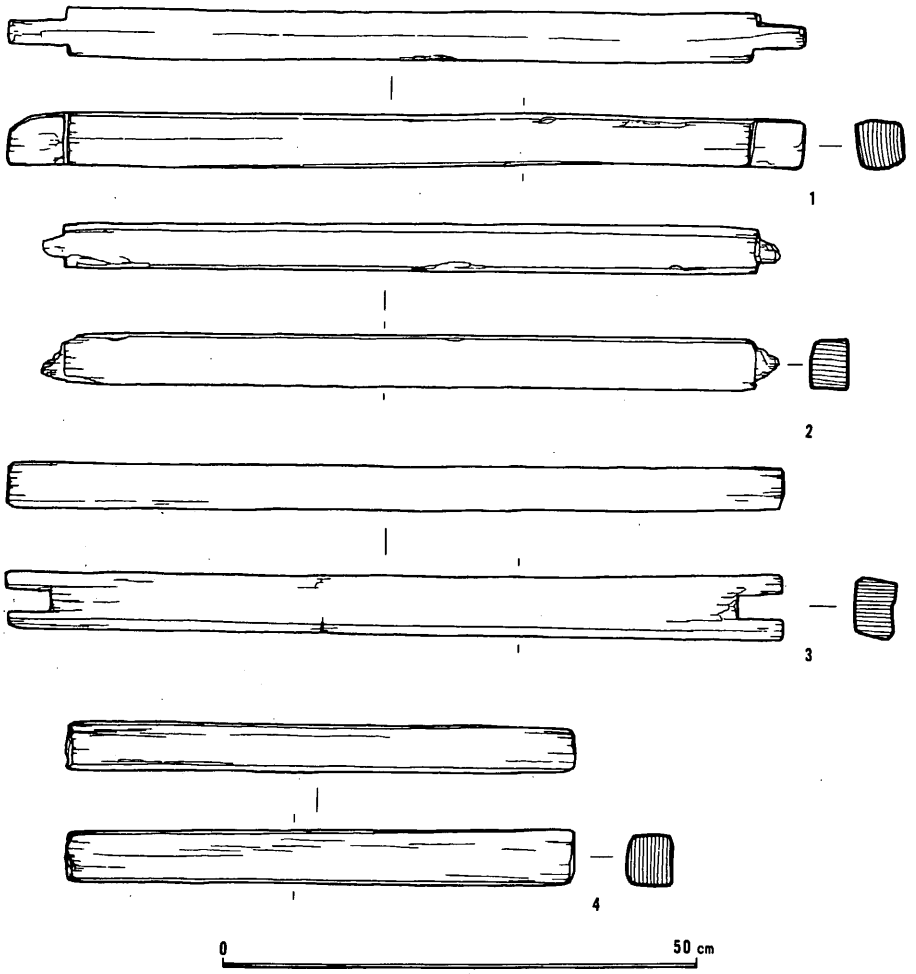


Fig.111　64SE220井戸枠材実測図（1/8）

支柱（11･12）　11は長さ59.9cm、径10.5～10.7cmを測る。丸太材を切断したもので、一部に樹皮を留めている。上端は腐食して形状を知り得ないが、下端は切断された状態のままで、平坦面をなす。底部から23cmと29cmのところに方形の臍穴があり、両者はほぼ直角の位置関係にある。臍穴は上位のものが3.5×3.5cmで深さ2.3cm、下位のほうが3.5×4.0cm、深さ3.0cmである。12は長さ61.3cm、幅10.2cm、厚さ7.9cmを測り、丸太材を切断したのち、図の両側面及び背面を平坦に加工している。下位に方形の臍穴が2箇所あり、両者は直角の位置関係にあったとみられるが破損により明確ではない。図の右側にあたるほうは、長さ5.0cm以上、幅3.0cm以上、深さ3.0cmを測る。上端は欠損、下端は大半が欠失するが一部底面とみられる部分を残しており、臍はかなり低い位置に穿たれていたようである。中程にある抉りは傷である。

64SE220出土井戸枠（Fig.111、CD-064484～490）

横桟（1～4）　1・2は臍を作り出すもので、1は総長84.3cm、幅6.0cm、厚さ5.4cm、臍の長さ5.8･6.5cm、厚さは両者とも2.8cm、幅は本体の延長上にあり同じである。片方の臍端を円形

に削っており、支柱にはめ込みやすくしたものと思われる。2は臍の両端を失うため総長はわからないが、現存長77.9cm、幅5.7cm、厚さ4.1cmを測る。3は臍をはめ込むための抉りを入れるもので、総長82.0cm、幅6.6cm、厚さ4.6cmを測る。抉り込みの深さは両端とも4.7cm、幅は2.5cm内外である。4は他のものより短いため同じセットで機能していたかどうかは不明である。長さ53.8cm、幅6.0cm、厚さ5.0cmを測る。片側の端部は欠損している可能性があり、長さはさらに長くなるかもしれないが、いま一方の小口面は切断後のままであり、特別な加工はなされていない。

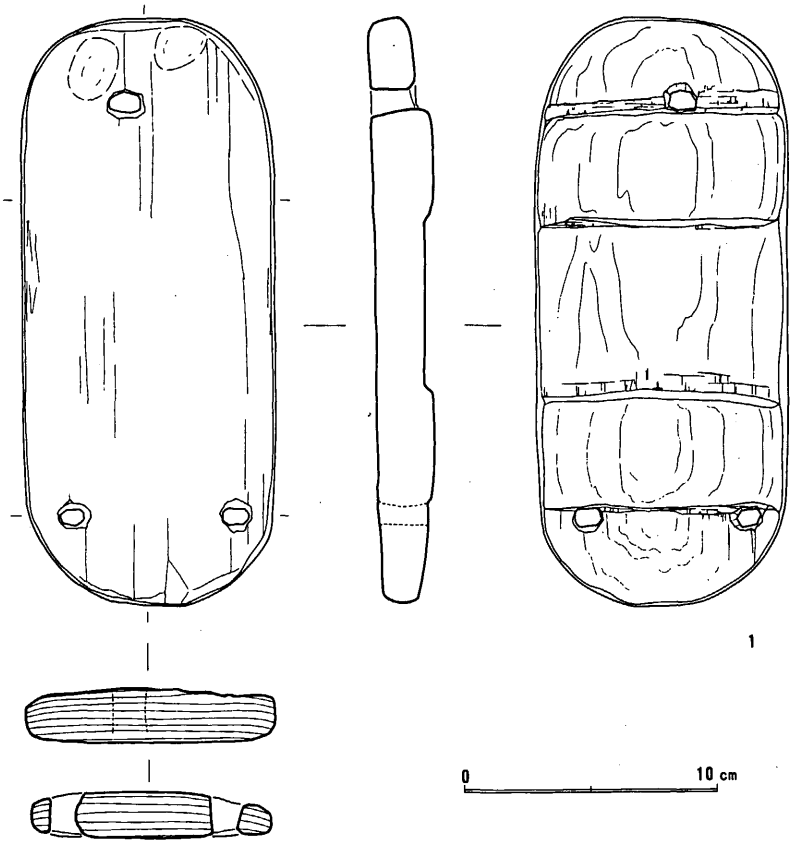


Fig.112　第64次調査出土木製品実測図1 (1/3)

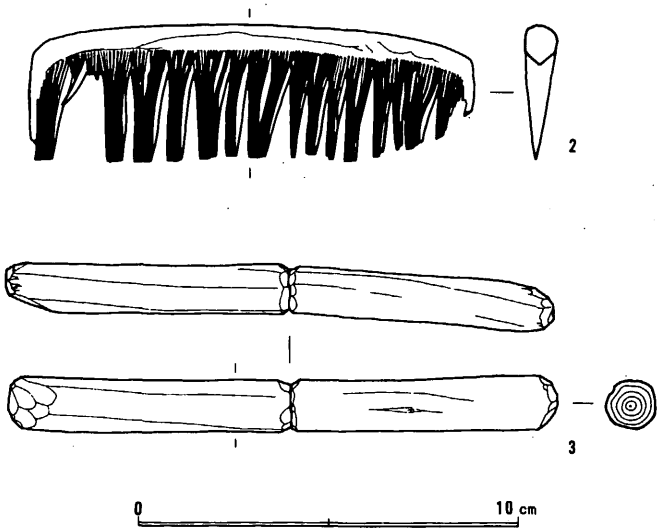


Fig.113　第64次調査出土木製品実測図2 (1/2)

その他の木製品

(Fig.112・113、CD-064491～495)

下駄(1)　長さ23.4cm、幅10.0cm、厚さ2.0cmで楕円形を呈し、刃は大きくすり減っており、高さ0.3cm程度が残存しているにすぎない。鼻緒の穴は3箇所で、いずれも端にかなり近寄った部分に穿たれ、やや横長の形状をしている。64SE015出土。

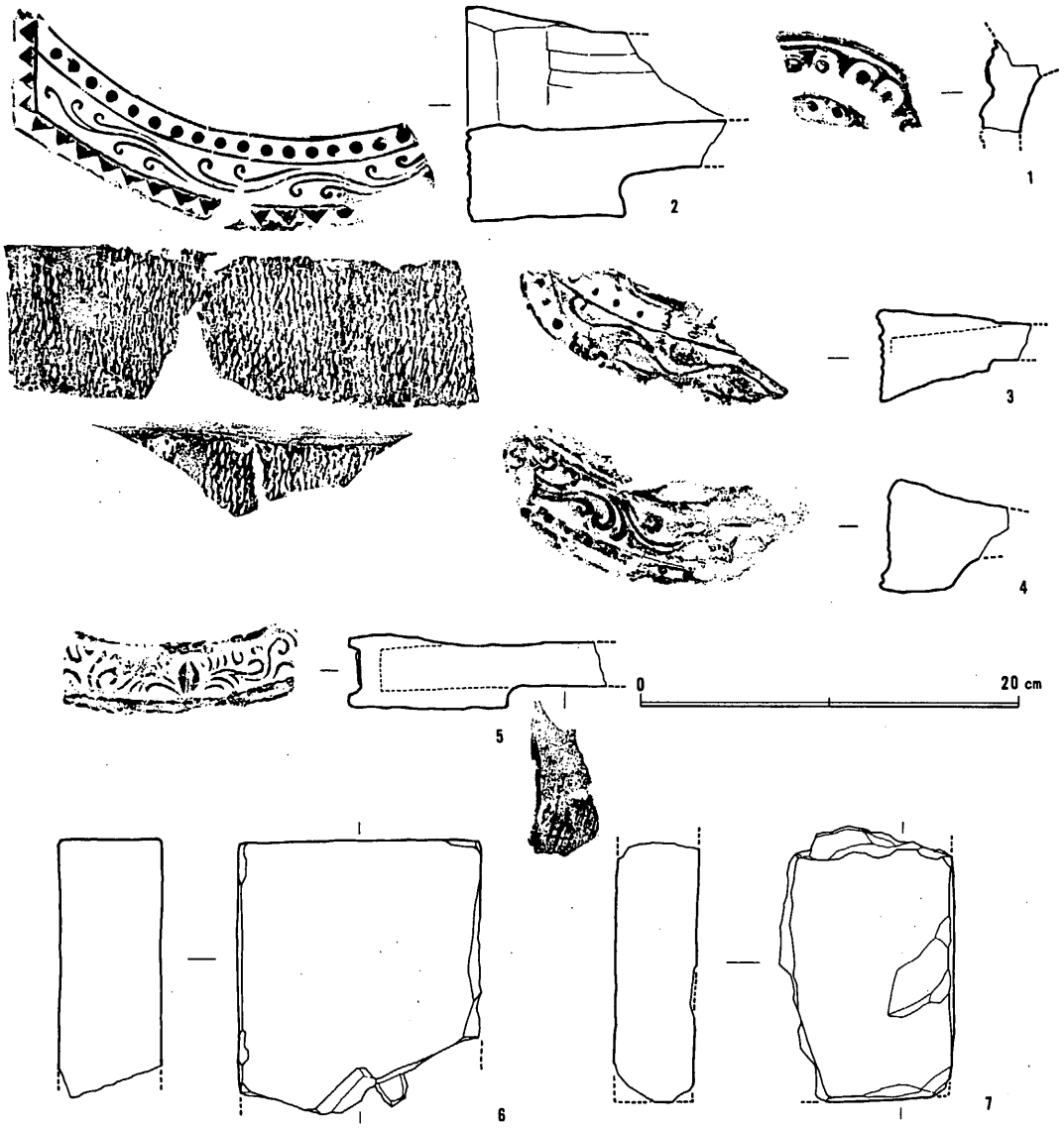


Fig.114　第64次調査出土瓦・塼実測図・拓影（1/4）

櫛（2）　長さ11.8cm、幅3.6cmの横櫛で、刃はきわめて薄く作られ、両側から切り込まれている。64SE001下層出土。

棒材（3）　頸を打ち欠いた長頸壺（Fig.79-32）の中に入っていたもので、径1.3cm内外、長さ14.7cmの円形の棒材である。棒の両小口部分は丁寧に削られ、中央部には両側から削り込んで作られた沈線が巡る。これに紐をくくりつけ、長頸壺にいれるとちょうど肩部に引っかかり吊るすことができることから、井戸水を汲む際に釣瓶として利用していたものと推定している。64SE015出土。

(4)　瓦・瓦製品（Fig.114～116、CD-064496～504）

軒丸瓦（1）　複弁蓮華文で、64SE120上段枠内出土。

軒平瓦（2～5）　2は右から左へ流れる偏行唐草文で老司Ⅱ式。顎部に縄叩き目があり、平瓦部も縄叩き目である。64SE015出土。なお64SD140出土品と接合した。3は偏行唐草文で、脇区、上下外区は珠文帯である。瓦笵と瓦当の形状が一致せず、下外区は一部を除き瓦当からはみ出している。顎部は粘土を押圧した痕跡がのこり最終調整は粗いナデで、一部に布目が観察される。64SE001枠内出土。4は偏行唐草文とみられ、文様の彫りは浅く不鮮明である。下外区は珠文帯である。南西区の床土から出土した。5は均整唐草文で中心飾りは木葉状を呈している。顎部は丁寧なヨコナデで、平瓦部分の叩きは格子目が残る。茶褐色土層出土。

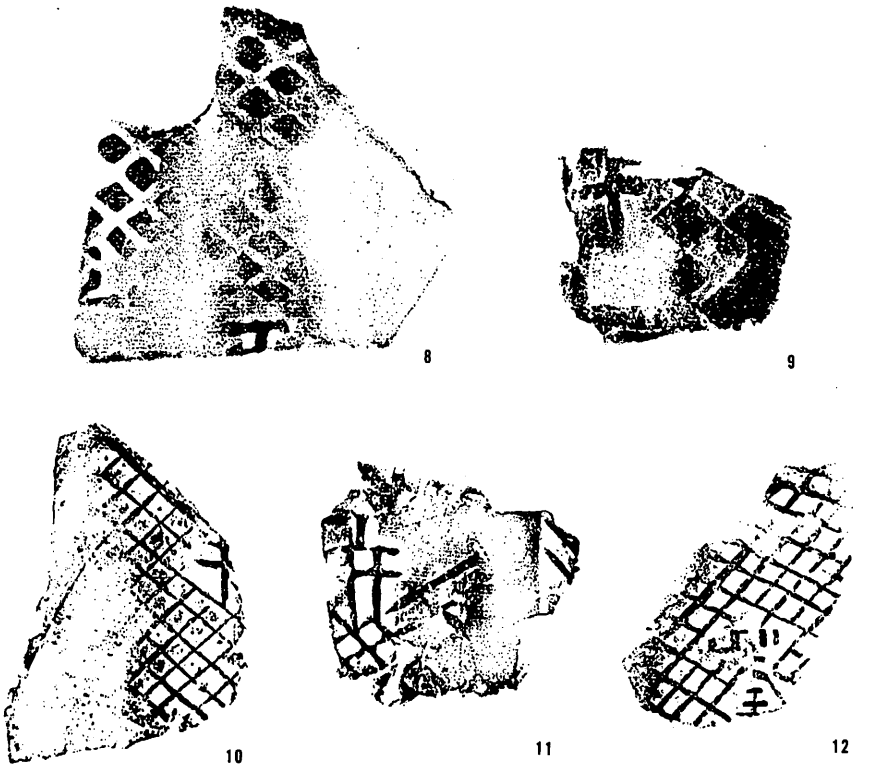


Fig.115　第64次調査出土文字瓦拓影（1/2）

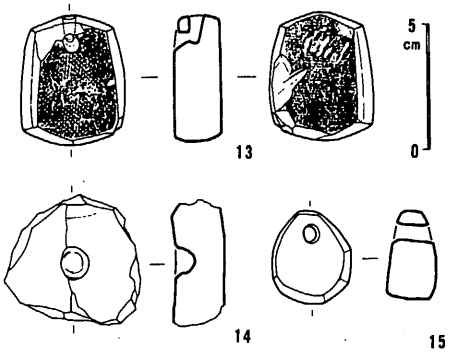


Fig.116　第64次調査出土瓦製品実測図（1/3）

塼（6･7）　6は幅13.0cm、厚さ5.5cmで、長さは15cm以上になる。64SE120灰黄色土層出土。7は茶褐色土下層出土。

文字瓦（8～12）　8は「平井」で、I-5類。茶褐色土層出土。9は「平井」でI-6類。64SE120黒色土層出土。10は「平井」とみられるが分類不詳。茶褐色土下層出土。11は「平井」でI-8-b類。撹乱（S-107）出土。12は「四王」でXⅧ。64SB200柱掘り方b出土。

瓦加工品（13～15）　13は瓦片の側縁を研磨し、上部からL字状に穿孔するものである。表面には布目と縄叩き目が観察される。S-199出土。14は平瓦片の凹面中央に径1.2cm内外、深さ



Fig.117　第64次調査出土滑石製品実測図（1/3）

0.8cmの穴を穿つものである。周囲は加工されておらず、未製品の可能性もある。64SB200柱掘り方n出土。15瓦片を水滴状に加工し、上位に径0.6cmの穴を貫通させる。表面は風化し調整等は明らかではない。茶褐色土層出土。

(5) 石器・石製品 (Fig.117・118、CD-064505～518)

石鍋 (1～3)　すべて滑石製品である。1は鍋の口縁部片。縦方向の把手がつくもので、表面はケズリ調整されているが風化が進んでいる。二次加工の痕跡はない。64SX137出土。2は鍋の口縁部片で、割れ面の二次加工はない。内面に線状の彫り込みがある。64SB200柱掘り方x出土。3は鍋の底部で、内径11.3cmを測る。内面は丁寧に調整されるのに対して、外面底部は粗く削った状態のままである。体部の割れ面を研磨し二次加工しているが、加工完成品ではなかろう。64SB200柱掘り方p出土。

石鍋加工品 (4)　滑石石鍋の底部に近い胴部片で、図の右側縁をケズリ加工している。また図の下部から中程にかけて切り込みがある。撹乱 (S-206) 出土。

円盤状製品 (5)　直径10.3cmに復原され、厚さは現状で1.8cmあるが剥離しているので当初はさらに厚かったものとみられる。中央に径0.9cm程度の穿孔がある。表面と側縁は丁寧に研磨

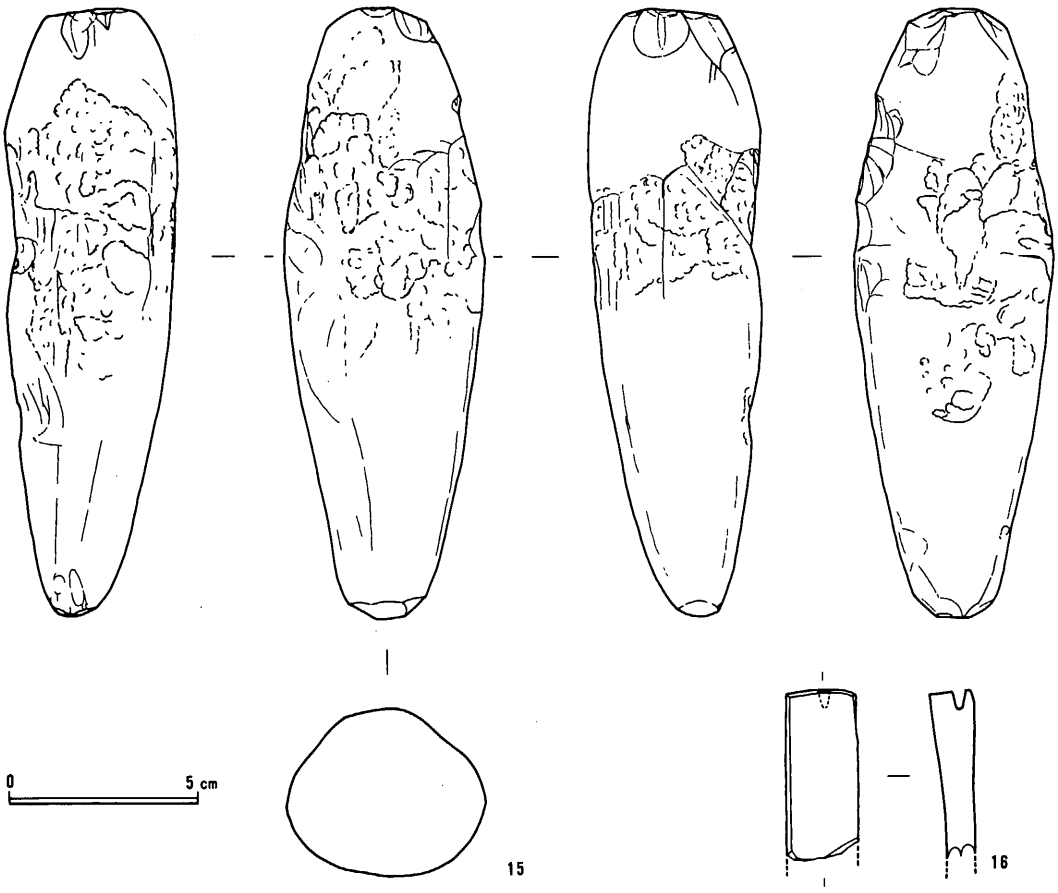


Fig.118　第64次調査出土石器実測図 (1/2)

されている。茶褐色土層出土。滑石製。

紡錘（6）　直径6.1cmに復原され、中央に径1.5cm内外の穿孔がある。側縁に至るほど幅が狭まる。表面は丁寧に削られ、研かれる。64SE011出土。滑石製。

権状製品（7～9）　7は平面凸型を呈するものでこれで完形品とみられる。突起の先端近くに小さな穿孔があり貫通している。調整は穿孔される面は両面とも自然面を残しているが、鋭利な割れ面とはなっていないため、簡易な加工が行われていると思われる。他の面は丁寧なケズリ調整で仕上がる。茶褐色土層出土。8は長さ5.7cm、幅3.2cm、厚さ2.3cmで、上部に0.5cm内外の穿孔があり貫通する。さらに頂部からも穿たれ、側面からの穴と繋がる。表面は滑らかに研磨されている。64SD110上層出土。9は長さ6.9cmでおそらく石鍋の二次加工品とみられる。上方に細線の切り込みを浅く入れることと頂部を再調整するほかは鍋の面を残すか自然面（割れ面）である。64SD160出土。すべて滑石製。

穿孔製品（10・12）　10は石鍋の胴部片の中央に径2.0cm、深さ0.8cmの擂り鉢状の穿孔があるもので、穿孔部の一部は割れにより失われる。しかしながらその面の（図面上の）下部を観察すると表面から連続する切り込みがみられる。一次加工を石鍋製作にあてれば二次加工が穿孔製品、三次加工が細線の彫り込み（9と同様の用途か）とみられる。茶褐色土下層出土。12は石鍋とみられる破片の内側に窪みを作るものである。撹乱（S-256）出土。両者とも滑石製。

編み具（11）　長さ6.2cmで、両端に突起を作る。64SE001枠内出土。滑石製。

不明製品（13・14）　13は石鍋の口縁部（左図の右側縁）片とみられ、切断面の一部を加工する。64SD160出土。14は不整形な円盤状を呈し、側縁は丁寧に削られる。平面の一部を不整形に窪ませているが作業途中の段階で停止した可能性もある。床土出土。いずれも滑石製。

打具（15）　長さ16.1cmで、断面形状は4.5×5.3cmの不整円形を呈する。石材表面は一様に研磨されたようであるが、両端部には打痕があり、中程には敲打痕がある。64SK005出土。

砥石（16）　現存長4.6cm、幅1.9cm、厚さ0.8～1.2cmを測る。各面が研磨され、頂部に径0.2cm、深さ0.5cmの小さな穿孔がある。

5．小　結

調査区の西端で検出した南北溝3条は各々の時代の朱雀大路東側溝である可能性がきわめて強い。朱雀大路については総括の章で検討することとして、ここでは年代を中心に第64次調査のまとめを行っておきたい。

奈良時代の状況

この時代に属する主要遺構は、64SB010・64SE015・64SK002・005・020・64SD140などである。まず、掘立柱建物64SB010は出土遺物から8世紀後半頃に考えられる。遺構の切り合いでも8世紀前半から中頃に考えられる土坑64SK005を直接切っており、さらにピット（S-8）を介在させているものの8世紀中頃から後半に考えられる土坑64SK020よりも新しい。これらのことから、

ここでは建物の時期を8世紀後半頃としておきたい。

同様に後半段階に考えられる遺構としては64SK020と64SD140がある。他のものはこれより遡り、8世紀前半から中頃が上限であろう。したがってこの地点での開発の開始期を8世紀前半から中頃に求めることができよう。後半に考える南北溝64SD140も遺物は、遺構の埋没段階を示していると考えられることから、その開削の時期が8世紀前半から中頃に遡る可能性も残されている。

土地利用の在り方では、この時代の主要遺構は調査区の東側に集中する傾向があることを指摘できる。南北溝からは約25m近い開きがある。この間はどのように利用されていたのか現状では明らかにはできないが、溝を検出した北区では若干のピットがこの時期に捉えられそうである。溝との切り合いで判然としないピットや遺物は古いが切り合い上確実に新期になるものを除くと、S-112・113・133・158・168・233・267・274・302（小ピットないしはピット群）などのごく限られたものとなり、しかもこれらから何らかのまとまりを読み取るのは難しい。南西区では北区より数量が増加し、調査区の中央以東に多く見られる傾向があるという以外、やはりまとまりを捉えるのは困難である。ただ北区の閑散とした状況とはちがい、量的に増加することや柱痕跡を確認できるピットが複数あることなどから、奈良時代にきわめて空間に近い状況を呈していたのは溝東側の約7mの範囲と言える。

そこで64SD140を朱雀大路東側溝とした場合、都城のイメージを持ち込んで考えれば溝の東側に築地の存在を考え得るところである。しかし今回の状況では築地を想定させるもの（寄せ柱や版築土、ないしはその崩れた土の溝内への転落等）は確認されなかった。しかし上述した幅7m内外の空間は、そうしたものが存在していた可能性を考えるうえでは十分な空間と思われる。築地は未検出であるものの、これをもって築地の存在を否定するものではなく、同時代の遺構の在り方は逆にその存在を考えさせる猶予を与えてくれているものと思う。将来の調査に期待したい。

平安時代前期の状況

時期的に大きな幅で捉えるが、溝では64SD150・110がある。年代的には64SD150が古くなるが、年代決定の参考となる出土遺物は少ない。そこで64SD110をみると、その出土土器は概ね大宰府土器編年のⅦ期に属すると考えられるものであり、9世紀中頃から後半に考えられている。したがってそれに挟まれる64SD150は8世紀末ないしは9世紀前半頃ということになろう。とにかくその狭い範囲で掘り直しが行われていることは注目され、さらに時代が下るとともに西に移動している事実は、朱雀大路の規模が徐々に縮小されていったことを物語っているのではなかろうか。64SD140と110の溝心心距離はおよそ3.5mあり、単純に両サイドが同一規模で縮小されたと推定すれば、約7mの路面縮小が成されたことになる。この数値の有効性は西側溝の調査にかかるが、規模が何らかの要因で縮小傾向にあったことは事実であろう。ただしこの成果は、少なくとも9世紀代までは何らかの形で朱雀大路が維持管理されていたことを物語るも

のでもあろう。

なお当該時期の他の遺構であるが、多量の土器を排出するような遺構はなく、小規模な遺構にこの時期と考えられるものが散見される程度である。故にこの時期の土地利用の在り方について語る資料は少ない。ただしやや下ってⅨ～Ⅹ期に入ると64SE001・011の存在があり、注意する必要がある。しかしここでも東側に偏った土地利用を行っていたようである。

平安時代後期の状況

出土遺物では大宰府土器編年のⅪ～ⅫⅠ期がこの時期の中心となる。なかでもⅫⅠ期（11世紀後半頃）は遺構も多く、活発な土地利用が行われたことを示唆している。

まず注目されるのが巨大な建物に復原できた64SB200である。各掘り方内から出土した遺物を見る限り、11世紀後半を遡ることはなさそうである。遺構の切り合いでも他の遺構よりほとんどの掘り方が新期に捉えられることもそれを物語っている。南北約12m、東西約10m（床面積約120㎡）で三面ないしは四面に庇が付く建物は大宰府に限ってみれば検出例を聞かない。またこの建物が朱雀大路に面したであろう位置に、しかも西向き（大路に面して）建てられていた可能性があることも注意しておきたい。このような巨大な建物の存在は、この地区にかなり有力な人物が居住していたことを物語っていると言える。

同時期の遺構としては主要なものでは64SK030・64SE120・220・260などがあり、ピットなどでこの時期に考えられるものは多い。なかでも64SE220は出土遺物が豊富であり、土器研究上貴重な資料を提供するものである。特に耀州窯系青磁の出土は全国でも稀少であり注目する必要があろう。なお64SE220は大宰府土器編年のⅫB期に該当し、11世紀末から12世紀初頭と考えるのが妥当であろう。

とにかくこの時期には活発な活動の痕跡が確かめられる。

平安時代末から鎌倉時代の状況

今次の調査で得られた年代の判明する遺構で最新段階のものは、土壙墓2基が該当する程度である。いずれもⅩⅣ～ⅩⅤ期で、12世紀後半を中心とする時期におさまる。このような陶磁器を有する供献土器を配置する墳墓は大宰府及び周辺でかなりの数が調査されており、屋敷墓と考えるのが一般的である。同様にこれも屋敷墓と考えるならば、その屋敷の先祖を葬るのを常套とするため当該時期の遺構が他に検出されていなければならない。しかしその遺構はまったく確認されず、しかも上面に被る土層中からも同時期の資料は極めて少ない。ある一定期間、安定した活動を行っていた形跡はまったく摑めないのである。墳墓が構築された時期のこの地域は、すでに大宰府条坊が廃絶し、宅地も疎らになり、閑散とし荒廃した風景が目に浮かぶところである。墳墓の地として故意にこうした土地を選んだのか、あるいはそこがこの被葬者にとって縁の地であったのか、現状では判断できないが、とにかく通常言われるような屋敷地の一角に設けられたものでないことは確かであろう。今後の検討課題である。



Fig.119　第64次調査遺構略測図

Tab. 4 - 1　第64次調査遺構一覧表 1

S-番号	遺構番号	種　別			地区
1	64SE001	井戸		X期	ED3・4
2	64SK002	土坑		8c前～中	D4
3		ピット		奈良	D4
4		ピット群		平安	ABC3・4
5	64SK005	土坑	5→10d	8c前～中	E3・4
6		ピット		奈良	D5
7		ピット群		奈良	D4
8		ピット	20→8→10d	奈良？	E4
	欠番			—	
10	64SB010	掘立柱建物	a～e、柱根残存	8c後	E3
11	64SE011	井戸		Ⅷ～Ⅸ期	E4・5
	欠番			—	
	欠番			—	
	欠番			—	
15	64SE015	井戸	S-5より形式的に新しい	8c中	DE5
	欠番			—	
	欠番			—	
	欠番			—	
	欠番			—	
20	64SK020	土坑	20→11	8c中～後	E4
21		ピット	21下と記したラベルは下層ピット	平安前	D10
22		ピット		平安	D11
23		窪み	23→25	平安	A11
24		ピット	柱根残存	平安	D10
25	64SD025	溝	この付近の遺構群中では最新期	近世	10ライン
26		ピット	柱根残存	奈良	B10
27		ピット群		平安	B10
28		ピット		奈良	C10
29		ピット群		平安	D10・11
30	64SK030	土坑	30→22？	Ⅻ期	CD11
31		ピット群	31→30	平安	C11
32		ピット群		奈良？	D10
33		ピット	33→24→21→29	9c？	D10
34		ピット群		平安	D11
35		ピット		Ⅵ期	C11
36		ピット群		平安	C11
37	64SX037	ピット		平安	C11
38		ピット群		平安	C11
39		ピット群		奈良？？	C11
40	64SK040	土坑		9c代	A9
41		ピット		9c代	C10
42		ピット		奈良	C10
43	64SX043	ピット		平安前	C10
44		ピット群		平安	C10

Tab. 4 - 2　第64次調査遺構一覧表 2

S-番号	遺構番号	種　別			地区
45		窪み	45→25	平安	C9·10
46		窪み	48→46→47	奈良	B11
47		ピット群		平安	B11
48		ピット群		平安	B11
49		小溝？		平安	B11
50	64SE050	井戸	50→40	Ⅸ～Ⅹ期	A9
51		ピット群		平安	B10·11
52		ピット群		平安	B11
53	64SX053	ピット		Ⅺ期？	B11
54		ピット群	49→50	平安	B10
55		ピット		奈良	A9
56		ピット群		Ⅻ期～	B11
57		ピット群		平安	A10
58		ピット		平安	A10
59		ピット群		平安	A10·11
60		ピット		奈良	C10
61		ピット群	25→61	奈良？	D9·10
62		ピット群	25→62	奈良？	C10
63		ピット群		平安前	C10
64		ピット群		奈良	C10
65		土坑	攪乱により詳細不明	平安前	A8
66		ピット群		平安	B10
67		ピット群		Ⅻ期～	B10
68		ピット群		奈良	A10
69		ピット群	69→49	平安	B11
70		土坑？	上層から切り込むピットは砂質埋土	C期	D9
71		ピット群	71→49	Ⅻ期	B11
72		ピット	柱根残存	奈良？	B9
73		ピット	柱根残存	平安？	C9
74		ピット群		平安	A9·10
75		ピット群	75→40	奈良？	A9
76		ピット群		Ⅹ期～	B9·10
77	64SX077	ピット		Ⅻ期～	B10
78		ピット群		平安	B9
79	64SX079	ピット		奈良	C9
80		窪み		平安	D10·11
81		ピット	柱根残存	奈良？	C9
82		ピット群		9c？	C9
83	64SX083	ピット	84→83	平安前	C9
84		ピット		奈良？	C9
85	64SX085	窪み		8c後～	B9
86		ピット群		平安	C9
87		ピット群		奈良？	D9
88		ピット群	88→45	奈良？	C

Tab. 4 - 3　第64次調査遺構一覧表 3

S-番号	遺構番号	種　別			地区
89		ピット	70→89	平安前	C9
90		ピット	90下は下層のピット	平安前	C11
91		ピット	91→25·86	奈良？	C9
92		窪み		奈良	C11
93		ピット群		奈良？	B11
94		ピット群		平安前	A10
95		ピット	95→98	奈良	B11
96		ピット群	96→85	奈良？	B9
97		ピット群		奈良？	D9
98		ピット		平安	B11
99		ピット群		平安	B11
100	64SX100	段落ち		奈良	B～D9
101	茶褐色土層	堆積土	茶灰色土の堆積／茶褐色土の範疇で捉えて可	XII期～	L14
102	茶褐色土層	堆積土	黒褐色土の堆積／茶褐色土の範疇で捉えて可	XII期～	KL14
103	茶褐色土層	堆積土	茶灰色土の堆積／茶褐色土の範疇で捉えて可	XII期～	M14·15
104	64SD110上層	溝	埋土最上層／識別しにくい遺構からの混入あり	VII·VIII期	14ライン
105	64SK105	土坑		平安前	M15
106	茶褐色土下層	堆積土	茶灰色土の堆積／茶褐色土の範疇で捉えて可	XII期～	14ライン
107		撹乱	平安中頃の資料多い		K12他
108		撹乱	C期の資料多い		L11·M12
109		ピット群		平安	K13
110	64SD110	溝		VII期	14ライン
111		ピット群		平安	L12
112		ピット		奈良？	L12
113		ピット群		奈良	K11
114		ピット群		平安	K11
115		土坑	新期撹乱の可能性あり	平安	LM13
116		ピット群		平安	M13
117		ピット		平安中	M15
118		溜まり		平安	M14
119		ピット	121→119	奈良？	M14
120	64SE120	井戸		XII期	LM14
121		ピット		平安前	M13
122		ピット群		X期～	M13·14
123		ピット群		平安	M13
124		ピット	底に石あり	平安	M14
125		溝状	下層は幅が狭い部分を指す	平安	L12他
126	64SX126	ピット群		平安	L12
127		ピット群	127→106	平安	K14
128		ピット	140→128→125	奈良？	L13
129		ピット群	140→129	平安	K13
130	64ST130	土壙墓	120→130	XIV～XV期	L14
131		ピット群	131→106	平安	K14
132		溝？	淡灰色土埋土	奈良	K1

Tab. 4－4　第64次調査遺構一覧表 4

S-番号	遺構番号	種　別			地区
133		ピット群	133→125下層	奈良？	L12･13
134		ピット群	140→134	平安中	L13
135	64SD135	溝？	135→136、155と連続する可能性高い	Ⅻ期	15ライン
136		ピット群	104→136？	平安	JK15
137	64SX137	ピット群		Ⅺ･Ⅻ期	L15
138	64SB200b	ピット		平安	J14
139	64SB200a	ピット		平安	J14
140	64SD140	溝	淡灰色粘質土埋土	8c後	13ライン
141		ピット群	淡茶色土→141･142	平安	I13
142		ピット群	淡茶色土→141･142	平安	H13
143	64SB200h	ピット	140→143	Ⅻ期～	J13
144	64SB200c	ピット	140→144	平安	J13
145	64ST145	土壙墓		Ⅻ～Ⅻ期	L14･15
146		ピット群	150→146	平安	K14
147		ピット群	140→147	平安	J13
148		ピット群		Ⅻ期～	J13
149		ピット群		9c代	J13
150	64SD150	溝	K14地区の資料混入多い…上層ピットか	平安前	14ライン
151	64SB200g	ピット群	150→151	平安	J14
152		ピット	柱根残存、150→152	平安	I14
153		ピット群	140→153	奈良？	I13
154	64SK154	土坑	140→154	9～10c	H13
155	64SD155	溝		平安	15ライン
156		ピット		平安	H13
157		ピット群		平安	H13
158		ピット		奈良？	H13
159		ピット群	140→159	平安	H13
160	64SD160	溝	茶褐色土埋土（S-101に近い）、この付近で最新	Ⅻ期～	Gライン
161		ピット	柱根残存	平安	H13
162		ピット群	140→162の一部	平安	H13
163		ピット		平安	I13
164		ピット群	140→164	平安	I13
165	64SD165	溝？		11c	F14
166	64SB200f	ピット		Ⅻ期～	I15
167		ピット群	104→167	平安	I14
168		ピット群		奈良？	I13
169		ピット	150→169→154	10c	H14
170	64SD150？	溝		9c前	FG14
171		ピット群	150→171	奈良？	I14
172	64SX172	ピット	172→154	平安	H13
173	64SX173	ピット群	104→173	平安	H14
174	64SB200p	ピット		Ⅻ期～	H14
175	64SD175	溝	上層と注記した資料には混入品含む可能性あり	Ⅷ～Ⅸ期	H14
176		ピット群		平安中	H14

Tab. 4 - 5　第64次調査遺構一覧表 5

S-番号	遺構番号	種　別			地区
177	64SB200t	ピット	上・下に分けて取り上げ	Ⅻ期～	G14
178		窪み	178→177	平安	G14
179		ピット群		10c 代	F12
	欠番				
181		ピット群	181→140	平安	F13
182		溝	182→160	平安	F13
183		ピット群	183→160	平安	G13
184	64SX184	ピット	140→184	平安	G13
185	64SX185	ピット	小溝状	～ 9c前	H12
186		ピット群	140→186	平安中	G13
187		ピット群	187→178	平安	G14
188		ピット群		平安	F14
189		ピット群	189→165？	平安	F14
	欠番				
191		ピット		平安	E14
192		ピット群		平安前	E14
193		溜まり	S-150の上層か	9c代？	H14
194		窪み	140→194、淡茶色土の溜まり	奈良？	G14
	欠番				
196		ピット群	196→182	平安	F13
197	64SX197	ピット群		平安前	G13
198		ピット群	198→194	奈良	G13
199		ピット群	199→160	平安前～	G14
200	64SB200	掘立柱建物		Ⅻ期	
201		ピット群	175→201→178	平安	G14
202	64SB200k	ピット	202→104	平安	I15
203		溜まり	茶褐色土埋土、この付近で最新	平安中	I14
204		ピット	150→204→169・174	平安	H14
205	64SB200x	ピット		Ⅻ期～	F14
206		撹乱			H11他
207		ピット群		平安	H13
208		ピット群		平安	H12
209		ピット		Ⅻ期～	G12
210	64SB200y	ピット		Ⅻ期～	F12
211		ピット群		平安	G12・13
212		ピット群		奈良	G12
213		ピット群		平安	F12
214	64SD214	溝	160＝214←220／160とは検出面で差異がない	Ⅻ期～	F12
215	64SB200v	ピット		Ⅻ期～	G11
216	64SD160	溝	160＝216	平安	G11
217		ピット		9c？	G10
218		ピット群		X期～	G10
219		ピット		平安	G11
220	64SE220	井戸		Ⅻ期	F11

Tab. 4－6　第64次調査遺構一覧表 6

S-番号	遺構番号	種　別		地区
221		ピット群	平安	G11
222		ピット	Ⅻ期～	G11
223		ピット群　140→223	奈良	I13
224		ピット群　140→224	奈良	I13
	欠番			
226		ピット群	奈良	J13
227		ピット群	平安前	G11
228		ピット群	平安	G11
229		ピット　229→216	平安	G11
230	64SB200q	ピット　内底に木片（薄板状）敷いている	Ⅻ期	H12
231		ピット群　231→160	平安	G12･13
232		ピット　大きいが浅い	平安	G12･13
233		ピット群　233→232	奈良	G13
234		ピット群	平安	G13
235	64SB200n	ピット	Ⅻ期～	I11
236		ピット	平安	G12
237		ピット群	9c代	G12
238	64SX238	ピット	平安	G12
239		ピット　淡灰色粘質土埋土、柱掘り方状（柱痕跡未確認）	奈良	G12
240	64SB200m	ピット	Ⅻ期～	I12
241		ピット群	平安	G12
242		ピット群　242→206	平安	G12
243		ピット　243→206	平安	G11
244		ピット	平安	J13
245	64SB200i	ピット	Ⅻ期～	J12
246	64SX246	ピット	Ⅻ期～	J13
247		ピット群	平安	J12
248		ピット群　248→245	平安前	J12
249		ピット群	平安	I12
	欠番			
251	64SB200d	ピット	Ⅺ～Ⅻ期	J12
252	64SB200j	ピット	Ⅻ期～	J11
253		ピット群　252→253	平安	J11
254		ピット群	平安	J11･12
	欠番			
256		撹乱		J11
257		ピット群	平安	J12
258		ピット群	平安	J12
259		ピット	平安	J12
260	64SE260	井戸　260→256	Ⅻ期	J11
261		土坑？	新期か？平安	J12
262		ピット　262→261	Ⅻ期～	K11
263		ピット群	平安	J11
264		ピット群	平安	H12

Tab. 4－7　第64次調査遺構一覧表 7

S-番号	遺構番号	種　別		地区
265	64SB200z	ピット　265→220	Ⅻ期～	G11
266		ピット群	平安	H11
267		ピット群	奈良	I12
268		ピット群	平安	I11
269		ピット群	Ⅻ期～	I11
	欠番			
271		ピット	平安	I12
272		ピット	平安	H12
273		ピット群	Ⅻ期～	I12
274		ピット	奈良？	I12
275	64SB200e	ピット　282→275→262→261	平安	K11
276		ピット群	Ⅻ期～	I13
277		ピット	Ⅻ期～	I13
278	64SX278	ピット	平安	I13
279		ピット	平安	I13
	欠番			
281		ピット群	平安	I12
282		ピット	平安	J11
283		ピット	平安	M14
284		ピット群　284→130	平安	L14
285	64SB200l	ピット　150→285	平安	I14
286		ピット群　S-110調査後確認したが、上層ピットらしい	平安	K14
287		ピット群	平安	H14
288		ピット	平安	H14
289	64SB200o	ピット	Ⅻ期～	H15
	欠番			
291		ピット　柱根残存、150→291 と判断	平安	H14
292		ピット群　150→292 と判断	平安	H14
293		ピット	平安	K13
294		ピット	平安	J13
	欠番			
296		ピット群	Ⅹ期～	M19
297		ピット群	平安	G14
298	64SX298	ピット群　298→170 と判断	平安	F14
299		ピット群　110→299	平安	F14
	欠番			
301		ピット　268上と同じ。301→235	平安	I11
302		ピット	奈良？	F12
303	64SX303	ピット　104→303	平安	F14
304		ピット群	平安中	EF13
	欠番			
306		ピット		F12

(4) 第68次調査

1．はじめに

調査地は、太宰府市大字太宰府2562-1に所在する。当該地は太宰府市が昭和54年度から実施している、観世音寺土地区画整理事業にかかり従前の道路拡幅と新たな区画の設置が行われる場所であり、その事前調査として発掘調査を実施することとなった。

現地での調査は昭和62（1987）年10月8日から11月30日まで実施し、調査面積は420㎡で、緒方俊輔、山村信榮、狭川真一が担当した。整理作業は主として狭川が担当し、遺物実測については中島恒次郎の協力を得た。

なお今次の調査で検出された瓦積みの井戸は、その位置がちょうど道路の脇にあったことから見学する人も多く、調査終了段階には井戸について記者発表を行った。また積まれている瓦は個別に番号を付して取り上げており、移築復原することが可能である。

2．層位など

調査前はすでに宅地として利用されており、それに伴う現代の盛り土が1m余り存在した。それを除去すると暗灰色土層が検出され、その直下が灰色砂質土及び黄色粘土の地山となっていた。遺構はすべて地山から直接穿たれる形で検出されたが、遺構の残存状況をみると深い遺構ばかりが目立つことから、遺構面はすでに大きく削平を受けているものと考えられる。

なお、調査区北東部で溝状の撹乱が連続して存在する地点を中心に灰褐色砂が堆積していたが、撹乱に関連する新期の溜まりと考えられる。

3．検出遺構

(1) 井戸

68SE002（CD-068021） 68SX001を切って構築される遺構で、南北2.1m、東西1.92m、深さ1.1mを測る。掘

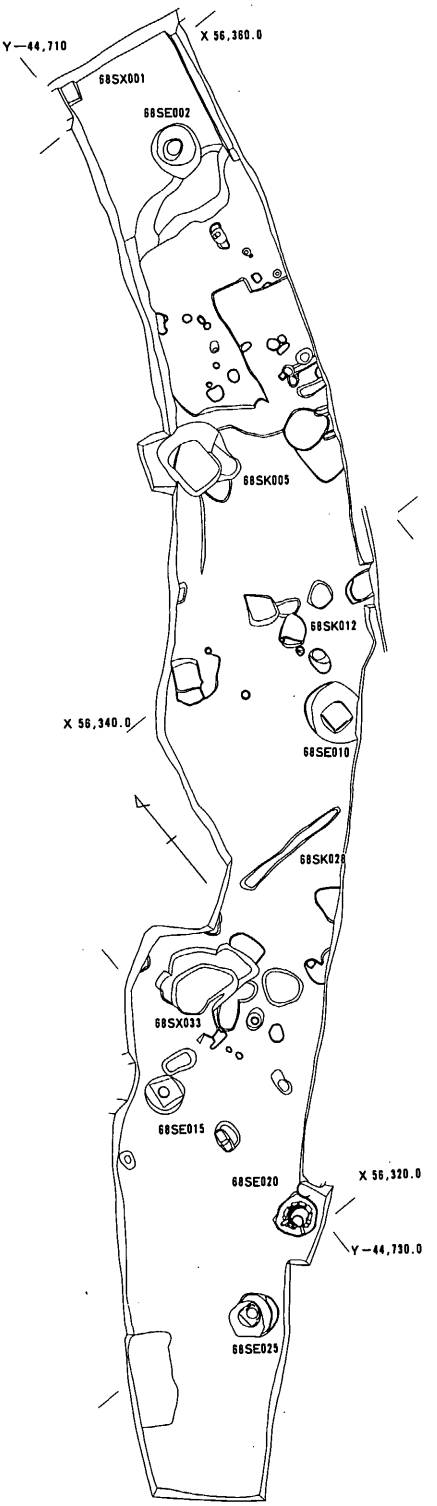


Fig.120 第68次調査
遺構配置図（1/300）

り方の形状は略円形で、底部に0.75×0.93m、深さ約0.4mで不整円形の窪みがあり、曲物が据えられていた痕跡と考えられる。埋土は黒灰色粘質土が全体にわたって堆積していた。

68SE010(CD-068022)　掘り方の一部が調査区外にあるが、ほぼ全貌が窺える。略円形の掘り方で、南北2.55m、東西2.25m、深さ約1.8mを測る。検出面から若干掘り下げたところで1.1×1.15mで略方形のプランを確認し、それを掘り下げると底部近くに至って縦方向の板材の一部とそれを押さえる横木の一部が残存していた（この底部付近から出土した遺物は枠内で報告し、上位の暗灰色土と分けている)。枠内の底部は平坦で、曲物を据えた形跡は見当たらなかった。

埋土は枠内に該当する部分の大半が暗灰色土で構成され、裏込めには黄茶色粘質土が使われていた。

68SE015(CD-068023)　略円形の掘り方を有し、南北1.5m、東西1.55m、深さ約1.2mを測る。底部付近に至って0.95×0.85～1.1mで台形状のプランを確認したが、その面の中央部で径0.45m、深さ約0.3mの曲物を据えた痕跡を確認した。この台形状のプランは枠が据えられていた形跡とみられるが、そのまま曲物の裏込め土の役割も果たしている。

埋土は全体に黒色土で構成されている(遺物の報告に際しては曲物痕跡内を枠内とし、その周囲を裏込め土で報告した。黒色土で報告するものはそれより上位の埋土全体を指す)。

68SE020（Fig.121、CD-068024～082）瓦積みの井戸である。掘り方の形状は略円形で、南北1.61m、東西1.71m、深さ1.63mを測る。底部の南西に寄った位置に径約0.45m、深さ約0.1mで略円形の曲物を据えた痕跡がある。瓦はその面を底部として積み上げられ、平面形状は略円形を呈し径約0.8m、現存の高さは1.25mを測る。

瓦の積み方には大凡の傾向が見受けられ、下から10～14段目（場所によって段数が異なるのは上位にある丸瓦列までの高さ調整を行ったためか）までは平瓦の長側面を井戸内側に向けて重ね、その上の3段は丸瓦の長側面を、そして平瓦の長側面を向けた列を1段かませて再び丸瓦の長側面を内側

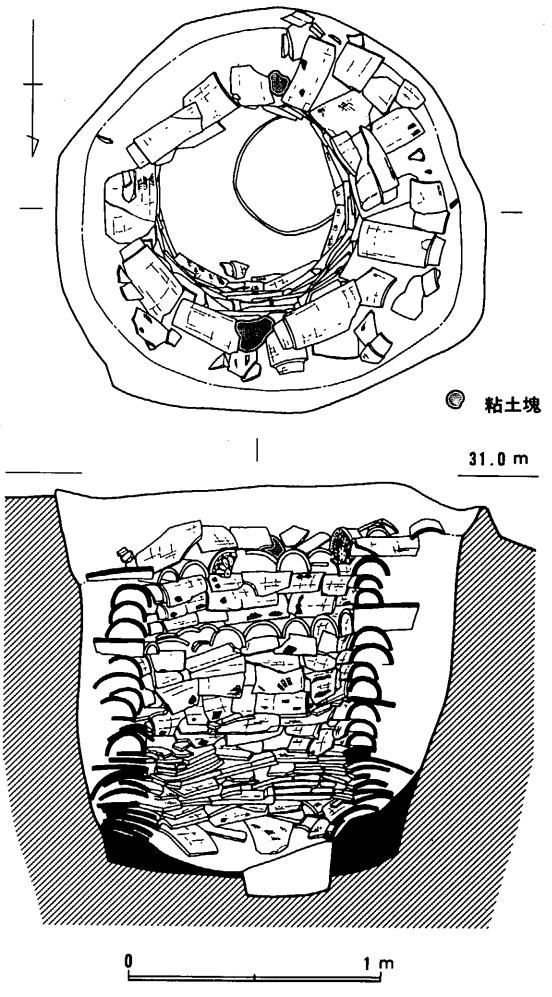


Fig.121　68SE020実測図（1/30）

に向けた列を4段積み重ねている。さらにその上には丸瓦の小口面（広端面）を内側に向けて1段積み、再び丸瓦の長側面を内側に向けた列を3段重ねている。そして再び丸瓦の小口面を並べた後に丸瓦の長側面を並べている。これより上位は残念ながら残存していないが、これまでの積み方を踏襲していると推定すれば、長側面を向ける列を3～4段積んだ後、小口面を向ける列を1段積むというパターンの繰り返しであろうと想定される。ただし、最上位の構造は明らかにはできていない。なお、丸瓦の小口面を向けた列には一部に軒丸瓦を使用する部分もあった。

埋土は瓦積み上面が検出されるまでの崩落土を上面として遺物を取り上げたほかは、瓦の枠内には上位から暗茶色土（粘性やや強め）、淡灰色砂、暗灰色粘土、灰色砂が堆積していた。

68SE025（CD-068083～087）　不整略円形の掘り方を有し、南北1.72m、東西2.05m、深さ約1.4mを測る。枠は一辺0.75m程度の方形であったとみられるが、東側では土圧によって形状が乱れている。枠材は幅0.15～0.25mの板材を縦方向に並べ、部分的に横木で留める構造を呈しているが、四隅には丸杭を建てて支柱にしていたと見られる。腐食により支柱と横木の組み方は不明である。底部には径0.4m程度の曲物を据えた形跡が確認された。

なお、枠の痕跡を確認できるまでの崩壊土及び枠内に堆積する埋土はいずれも黒色土であったが、枠痕跡検出までを上層として遺物を取り上げている。また曲物痕跡内には淡灰色砂が堆積していた。

(2)　土坑

68SK005（CD-068011～015）　南北2.65m、東西1.82～2.65m、深さ1.0mの平面形状が不整方形の土坑である。検出面では形状に出入りがあり、複数の遺構が切り合っているように見える。掘り下げてみると東側に0.1～0.3mの段を有しているが、主体となる土坑の形状は隅丸長方形で南北2.65m、東西1.8mを測る。

埋土は上位から茶灰色土、暗茶色土（赤色粘質ブロック土混入）、灰色粗砂、茶色粘質土、茶色砂、灰色砂の順で堆積するが、茶色砂の一部は検出面に顔を出しており、堆積状況をみると茶色粘質土から上位とそれ以外（茶色砂、灰色砂）で大きく二つに分けることが可能である（Fig. 159）。下位の2層には遺物がきわめて少なく年代的な差を見出すには至っていないが、二つの遺構が重複していた可能性も残しておきたい。

なお井戸の可能性も考えられるが、今次の調査で検出した他の井戸遺構と比べると底部の標高が高く、積極的に井戸とするのは困難である。

68SK012（CD-068016～020）　遺構の東側が調査区の外に延びており全体は明らかではない。南北1.05m、東西1.45m以上、深さ0.3mで西側に段がある。埋土はその段より上位が灰色粘土、下位が灰色土で構成されるが、さらにそれより下位に黄色土、茶色土、灰色砂が堆積する。

68SK028　遺構の東側が調査区の外に延びており全体は明らかではない。形状は不定形で1.48×0.95m以上、深さ約0.2mを測る。

(3) その他の遺構

68SX001　調査区北端で検出した大きな段落ち遺構である。御笠川の氾濫に伴う遺構の可能性が強く、南肩は上面では明瞭に確認できたが、掘り下げると複雑にオーバーハングしており、複数の流れによって形成されたことが窺える。最終段階における基本的な堆積は、下位から灰色粘土、黒灰色土、黒褐色土である（Fig.159）。

68SX033（CD-068088）　検出段階では複雑に切り合った複数の遺構と認識していたが、掘り上げてみると埋土の違いによるものと判明し、一つの遺構として報告する。西側を撹乱で失うが、南北2.3～2.45m、東西3.5m以上、深さ0.05～0.30mを測る。埋土中程に5～20cm大の礫や瓦の破片が堆積していた。

4．出土遺物

(1) 土器・陶磁器

68SE002出土土器（Fig.122、CD-068189～092）

土師器

小皿a（1）　底部は糸切りである。

小椀c（2）　高台径4.2cm。

丸底坏a（3）　口径15.1cm。内面にミガキbが観察される。

緑釉陶器

椀（a）　表面はヨコナデで仕上げられ、釉は暗緑色でわずかに光沢がある。胎土は暗灰色で須恵質（硬質）に焼成される。

68SE010最上層出土土器（Fig.122、CD-068093・094）

白磁

皿（4・5）　4は口径10.8cm、器高2.5cm、底径3.8cmを測る。底部外面のみ露胎で、他にかかる釉は淡黄白色に発色し、光沢がある。貫入も認められる。V-1類。5は玉縁状の口縁を有する資料で、残存部前面に空色味を帯びた白色の釉がかかる。XI-1類。

68SE010暗灰色土層出土土器（Fig.122、CD-068095～100）

土師器

小皿a（6～13）　口径9.8～11.8cm、器高1.0～1.5cm、底径6.8～11.0cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

坏a（14）　口径14.0cm、器高3.0cm、底径8.8cmを測る。底部はヘラ切りされる。

丸底坏a（16）　口径13.4cm。内面にミガキbが観察される。

椀c（15・17）　高台径6.2・6.3cm。17の底部はヘラ切りされる。

須恵器

鉢（18）　底径13.0cm。外面底部はナデで仕上げられる。

白磁

椀（19･20）　19は高台径7.0cm。空色味を帯びた白色に発色する釉がかかる。XI類。20は高台径6.0cm。釉は薄くかかり乳黄白色に発色し光沢がある。内面に櫛画きによる文様がある。XIII-1-b類。

皿（21）　口径10.8cm。釉は淡黄白色に発色し、光沢がある。貫入も認められる。V-1類。

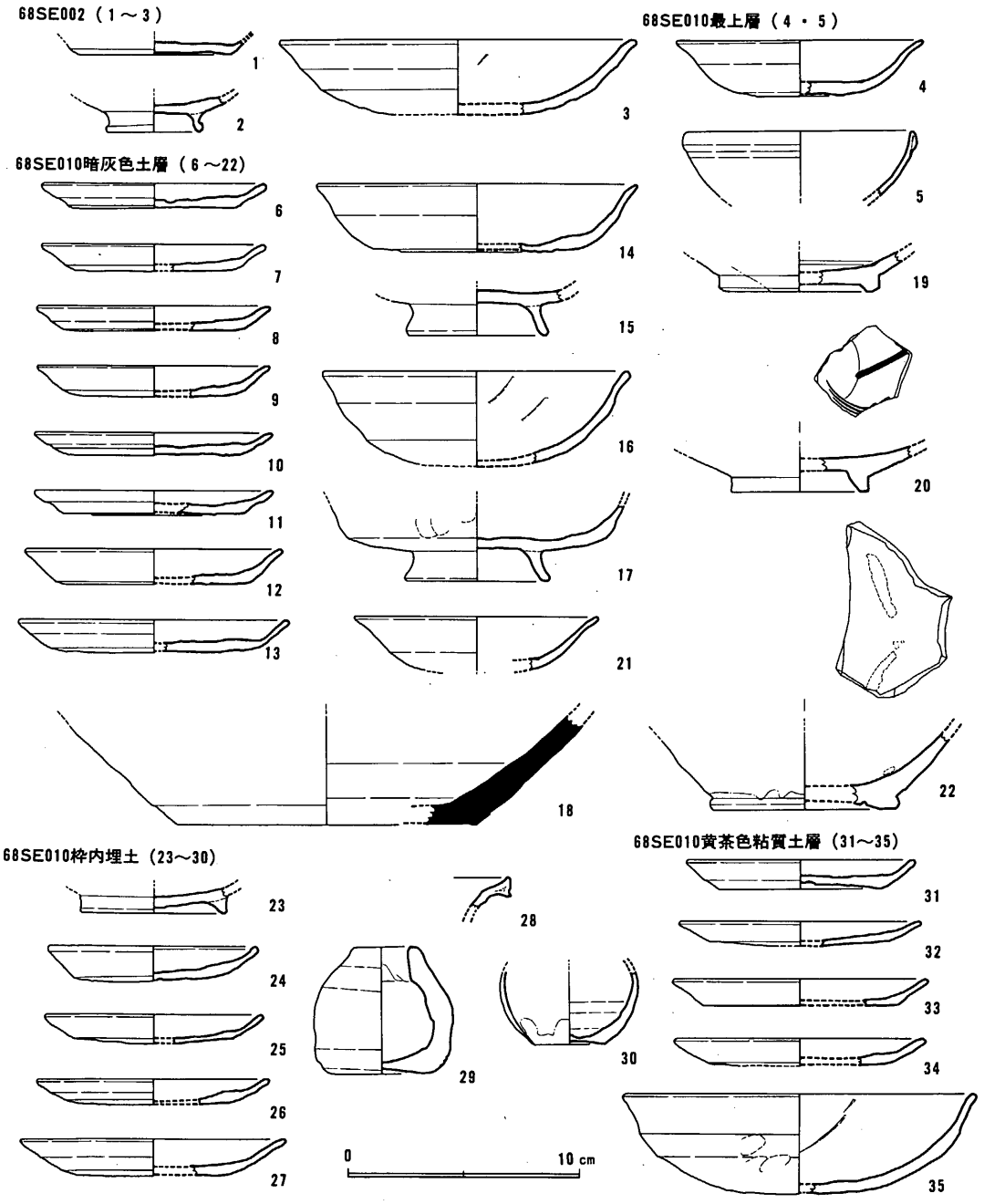


Fig.122　68SE002･010出土土器実測図（1/3）

最上層出土資料（Fig.122-4）と同一個体。

越州窯系青磁

椀（22）　高台径8.2cm。内面に横長の目跡が残る。II-1-b類。

68SE010枠内埋土出土土器（Fig.122、CD-068101～105）

土師器

小皿a（24～27）　口径9.2～11.4cm、器高1.2～1.7cm、底径7.0～7.9cmを測る。底部はヘラ切りされる。

椀c（23）　高台径6.4cm。

小壺（29）　無頸の壺で、口径2.7cm、器高5.5cmを測る。底部は平底でヘラ切りされる。底部と体部の境目は回転ヘラケズリが施される。

白磁

小壺（30）　胴部の6箇所にヘラによる縦方向の沈線を入れる。体部下半には施釉されないが、内面の多くには釉がかけられている。ただし故意によるものかどうかは明らかではない。II類系。

朝鮮系無釉陶器

壺（28）　表面は暗青灰褐色、胎土は暗赤褐色を呈し、硬質に焼成される。口縁端部は折り曲げによって玉縁状にする。

68SE010黄茶色粘質土層出土土器（Fig.122）

土師器

小皿a（31～34）　口径10.0～11.2cm、器高1.1～1.3cm、底径7.5～8.5cmを測る。底部はヘラ切りされる。

丸底坏a（35）　口径15.4cm、器高4.4cm。内面にはミガキbが観察される。

68SE015黒色土出土土器（Fig.123、CD-068106～112）

土師器

小皿a（1～8）　口径9.0～11.0cm、器高1.0～1.7cm、底径6.3～8.8cmを測る。底部はヘラ切りされる。

小皿a2（9）　口径10.4cm、器高0.7cm、底径7.9cmを測る。口縁部内面に沈線が巡る。底部の切り離しは不明。

丸底坏a（10～13）　口径12.7～15.2cm。内面にはミガキbが観察される。

器台（20）　外面は9面に面取りされ、中央に径1.0cmの穿孔がある。

瓦器

坏a（14）　口径10.9cm。底部はヘラ切りされ、内外面ともにミガキcが観察される。

椀c（15）　低くつぶれたような高台の径は6.8cm。底部はヘラ切りされる。

白磁

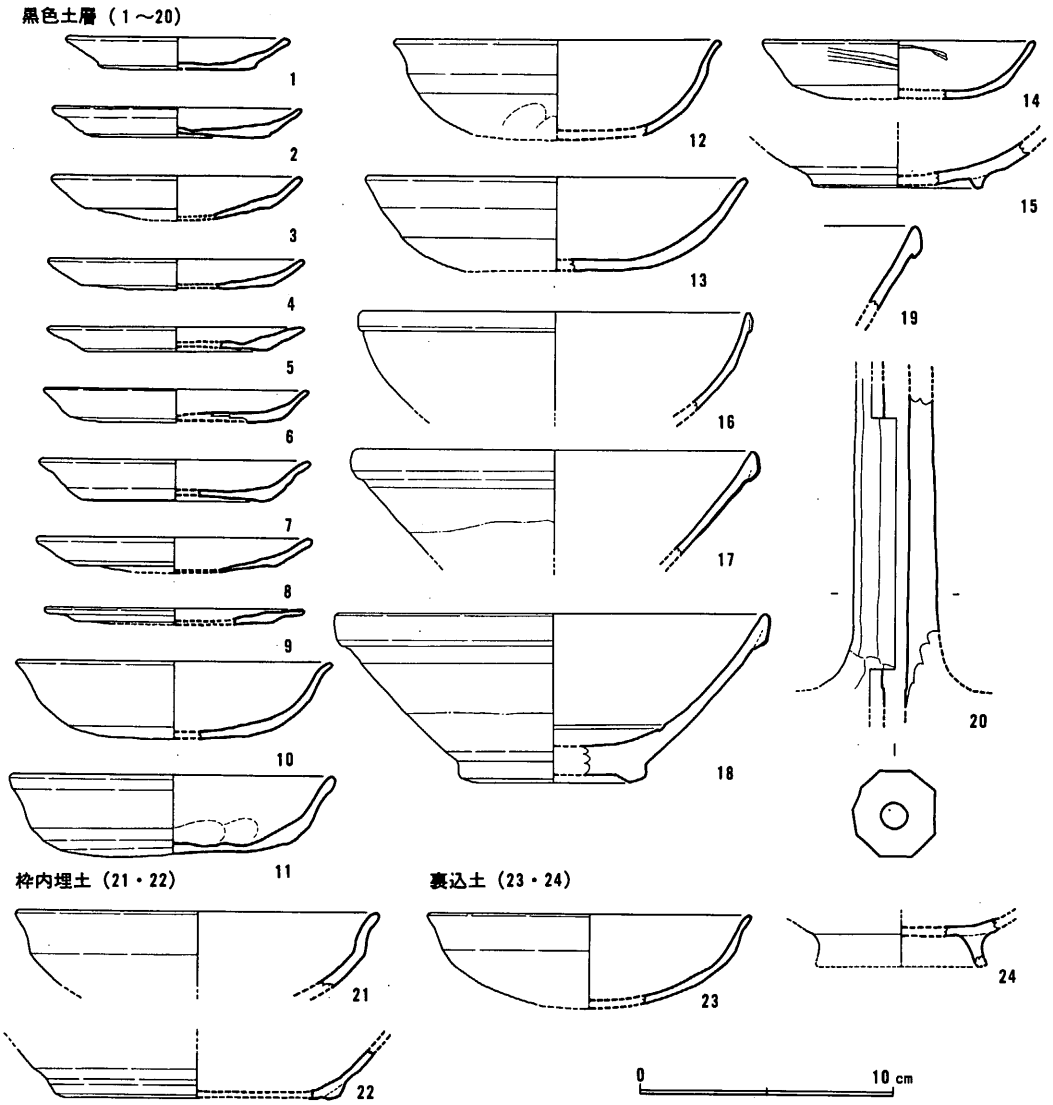


Fig.123　68SE015出土土器実測図（1/3）

椀（16～19）　16は口径16.6cmを測り、黄白色で光沢のある釉がかかる。II-1類。17・19はⅣ類。18はⅣ-1-b類で、体部下半は露胎である。口径17.2cm、器高6.8cm、底径7.5cm。

68SE015枠内埋土出土土器（Fig.123）

土師器

椀（21・22）　21は口径14.4cmで体部中程に屈曲がある。22は底部の資料で、体部と底部の境目に粘土紐状のものを貼り付ける。高台を意識したものか。

68SE015裏込め土出土土器（Fig.123）

土師器

丸底坏a（23）　口径12.8cm。

椀ｃ（24）　残存部の調整はヨコナデである。

68SE020上層出土土器（Fig.124、CD-068113･114）

土師器

椀ｃ（1･2）　高台径9.0･9.4cm。底部はヘラ切りされる。

須恵器

壺ｆ（3）　口径9.7cm。焼成がやや軟質で瓦質に近い。

68SE020暗茶色土層出土土器（Fig.124、CD-068115～120）

土師器

坏（4）　口径12.3cm。

坏ａ（5）　底部はヘラ切りされる。

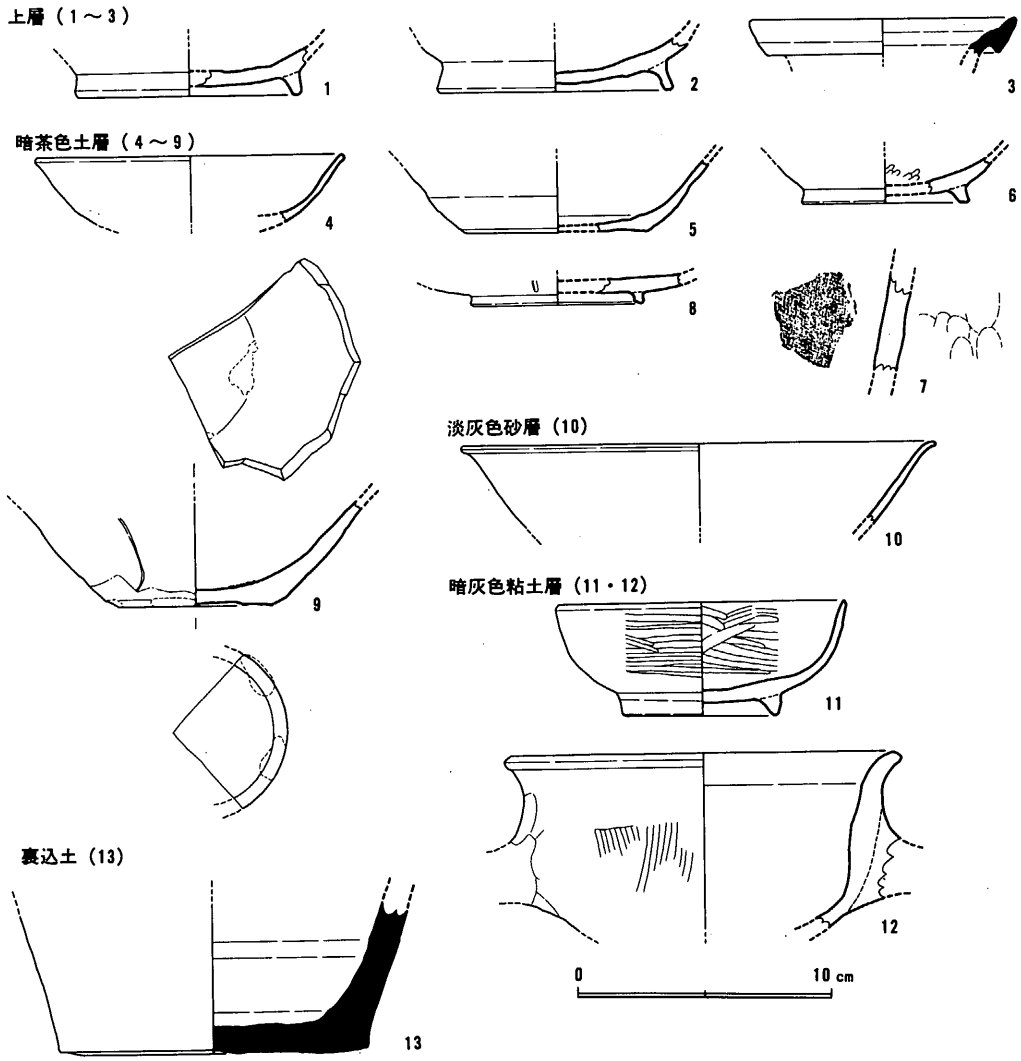


Fig.124　68SE020出土土器実測図（1/3）

黒色土器

椀ｃ（6）　高台径6.7cm。内面にミガキｃが観察される。A類。

製塩土器

壺（7）　外面は指圧痕、内面は布目が観察される。

緑釉陶器

皿（8）　小さめの高台の径は7.0cm。内外面ともにかなり丁寧なヘラミガキが施され、淡灰緑色の釉が薄くかかり光沢がある。胎土は淡灰茶色で硬質に焼成される。体部外面に縦方向のヘラによる沈線文様がある。猿投産。

越州窯系青磁

椀（9）　体部下位以下には施釉されず、目跡が残る。見込みにも目跡が確認される。釉は淡緑灰色に発色する。I-5類。

68SE020淡灰色砂層出土土器（Fig.124、CD-068121･122）

越州窯系青磁

椀（10）　灰黄色に発色する釉が施される。I類。

68SE020暗灰色粘土層出土土器（Fig.124、CD-068123～125）

土師器

小甕（12）　口径15.7cmで、体部に把手が付く。外面は縦方向のハケ目がみられる。外面には煤が付着している。

黒色土器

椀ｃ（11）　口径11.5cm、器高4.6cm、高台径6.2cmを測る。内外面ともにミガキｂが丁寧に施される。B類。

68SE020裏込め土出土土器（Fig.124、CD-068126）

須恵器

壺（13）　底径12.3cm。体部外面は回転ヘラケズリ、底部は簡単なナデが観察されるが、ほとんど調整されていない。

68SE025上層出土土器（Fig.125、CD-068127～132）

土師器

椀ｃ（1～3）　高台径7.2～8.0cm。残存する体部は丸味を帯びる。

脚片（5）　現存長3.2cm、最大厚1.1cmで、指圧によって仕上げられている。基部は剝離した跡とみられ皿に貼り付けられていたものと考えられる。

白磁

椀（7）　小さな玉縁状の口縁を有する。XI-1類か。

灰釉陶器

椀（9）　高台径8.2cm。淡緑灰色に発色する釉は高台には及んでいない(垂れる程度)。見込

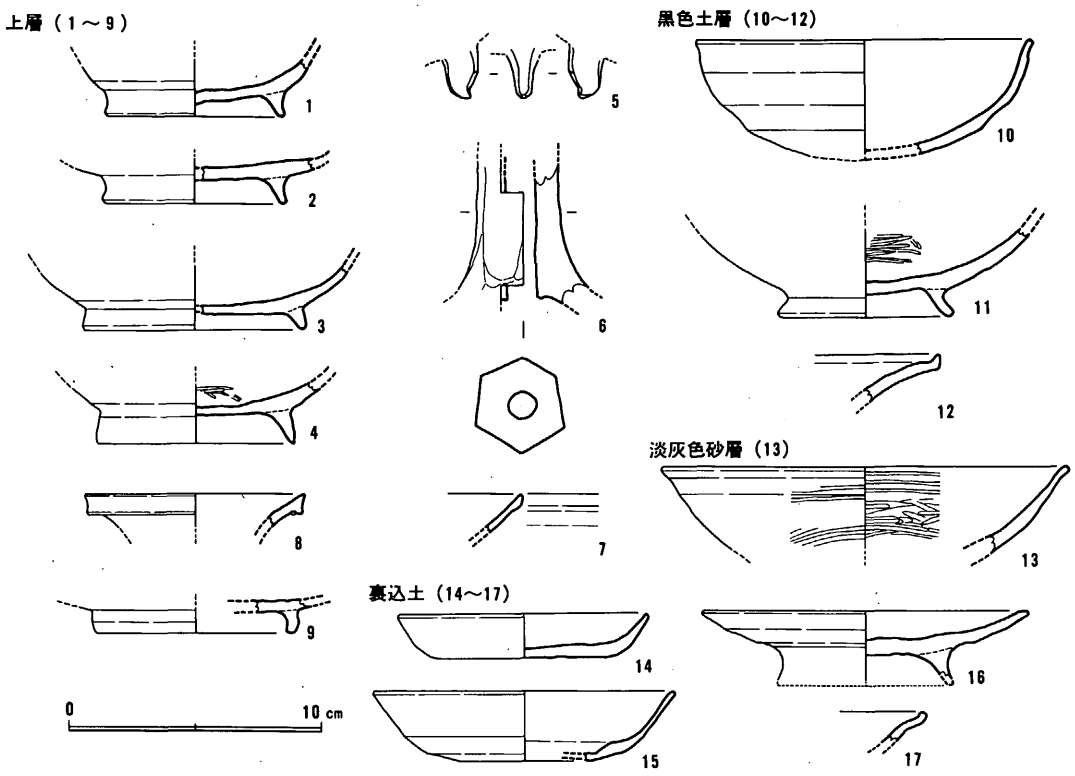


Fig.125　68SE025出土土器実測図（1/3）

みに重ね焼の痕跡がみえる。

壺（8）　口径8.8cmに復原できる。内面は緑灰色、外面には透明な釉をかける。

68SE025黒色土層出土土器（Fig.125、CD-068133･134）

土師器

椀ａ（10）　口径13.4cm。底部はヘラ切りされた後押し出される。

黒色土器

椀ｃ（11）　高台径7.0cm。内面にミガキｃが観察される。Ａ類。

緑釉陶器

壺（12）　口縁部内面に段があり、識別しにくいがヘラミガキが施されるものとみられる。焼成は軟質で、胎土は明茶白色を呈し、残存部全面に施される釉は淡白黄緑色に発色する。

68SE025淡灰色砂層出土土器（Fig.125）

黒色土器

椀（13）　口径16.2cm。内外面ともにミガキｃが施される。Ｂ類。

68SE025裏込め土出土土器（Fig.125、CD-068135～137）

土師器

坏ａ（14･15）　口径10.0･12.0cm、器高1.8･2.8cm、底径7.3･5.2cmを測る。底部はヘラ切り

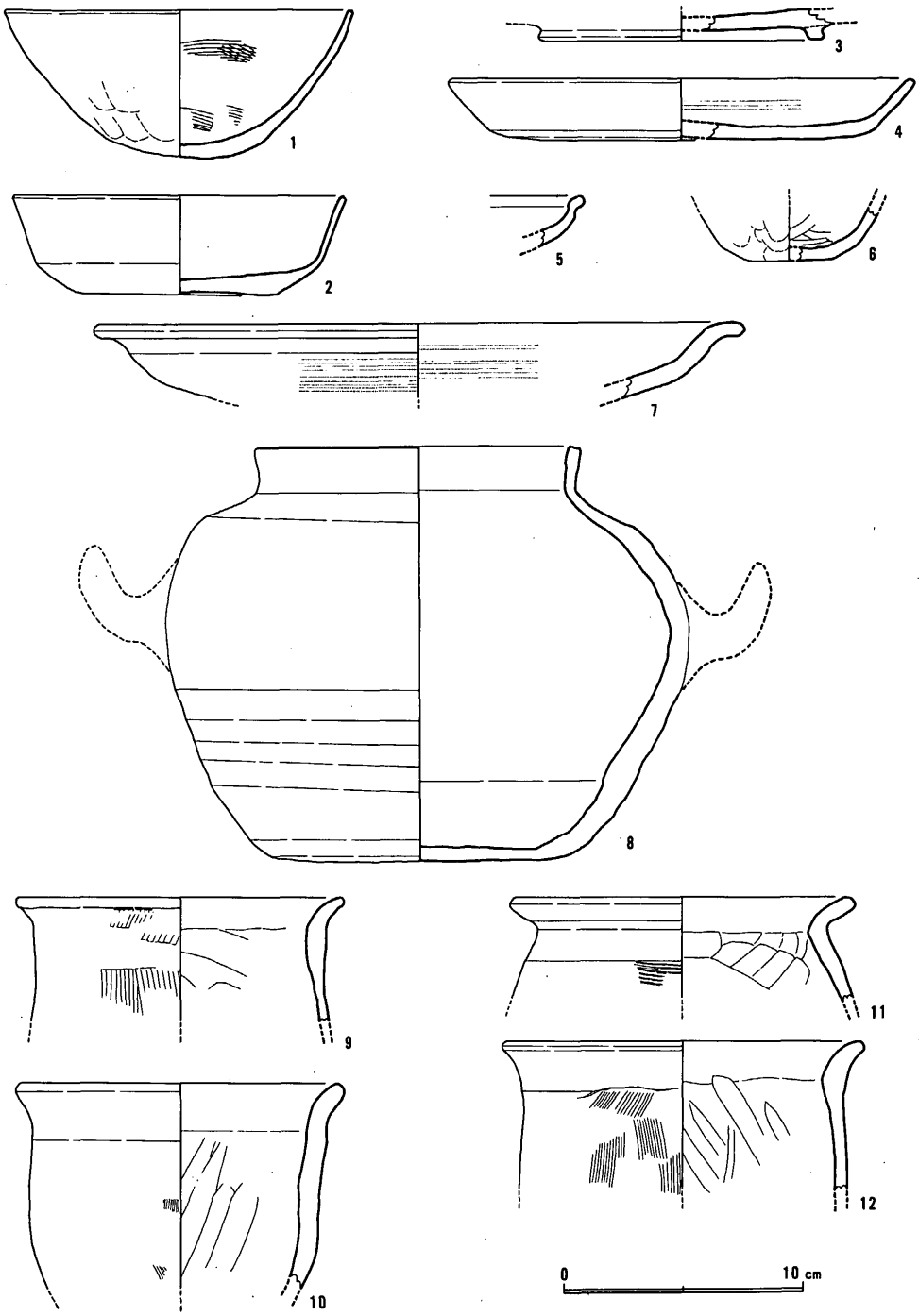


Fig.126　68SK005茶灰色土層出土土器実測図１（1/3）

される。

皿ｃ（16）　口径13.0cm。底部には高めの高台が付く。ヘラ切り。

皿（17）　口縁端部を内面に小さく折り返し軽い段状に作る。表面はやや褐色味を帯びた淡白色を呈する。京都系の搬入品。

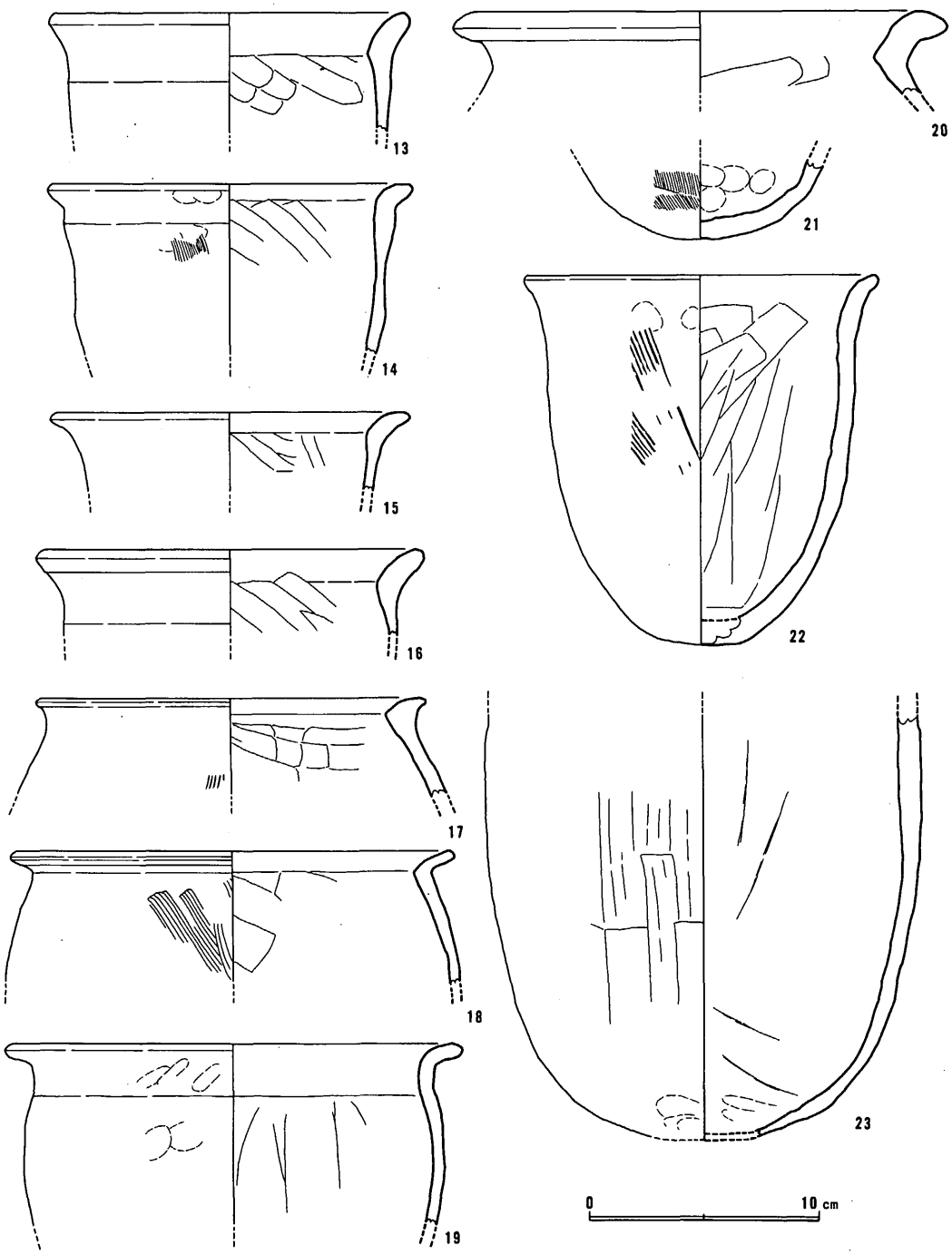


Fig.127　68SK005茶灰色土層出土土器実測図２（1/3）

68SK005茶灰色土層出土土器（Fig.126～129、CD-068138～169）

土師器

坏（1）　口径14.7cm、器高6.2cmを測る。内面はハケ目調整され、外面は指圧痕が明瞭に残る。底部はヘラケズリされる。古い資料の混入品である。

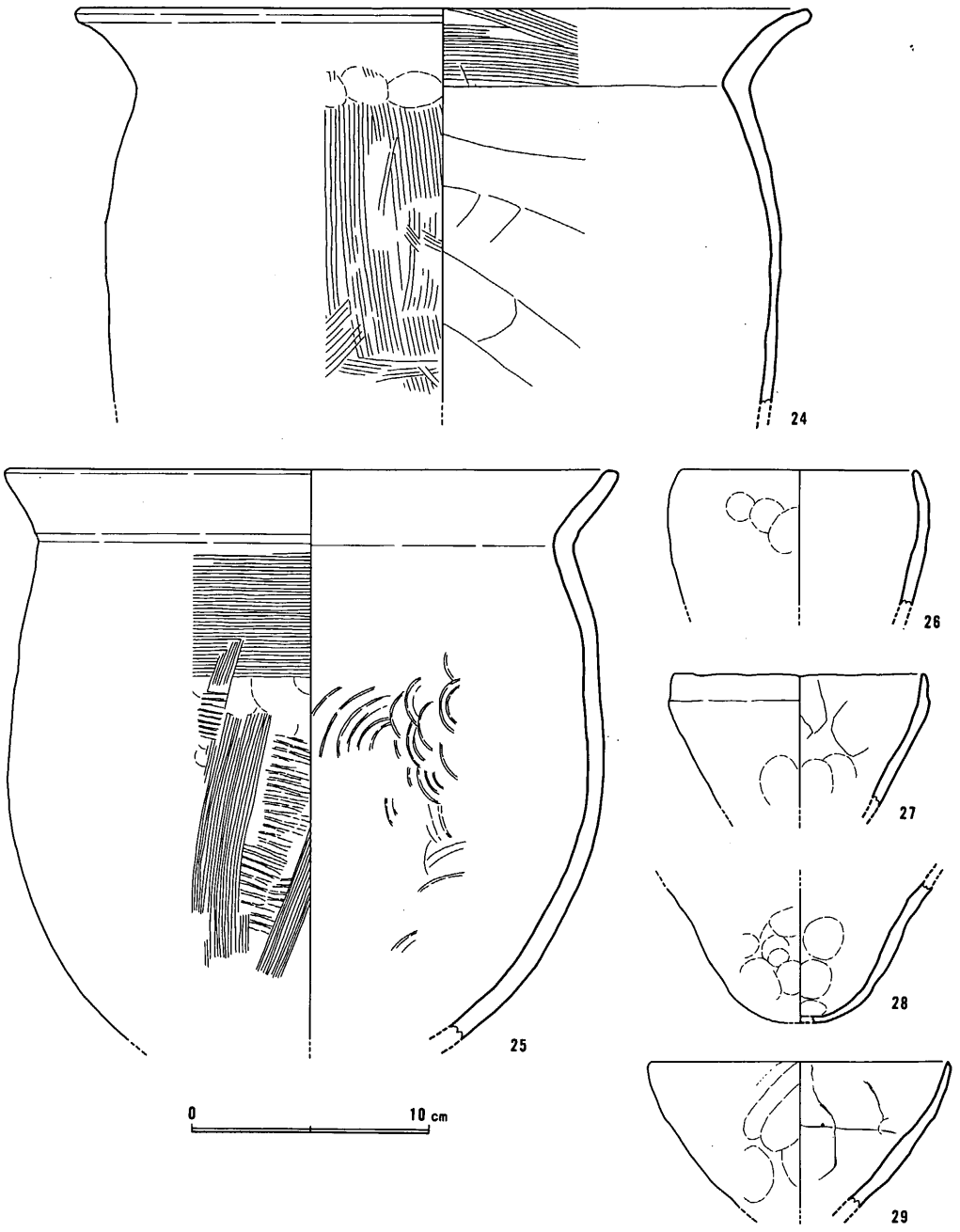


Fig.128 68SK005茶灰色土層出土土器実測図３（1/3）

坏ａ（2）　口径14.0cm、器高4.2cm、底径8.2cmを測る。底部はヘラ切りされる。

坏ｃ（3）　高台径12.0cm。底部は回転ヘラケズリされる。

皿ａ（4）　口径19.6cm、器高2.6cm、底径16.2cmを測る。体部から底部の内面にミガキａ、外面底部は回転ヘラケズリを施す。

鉢（5）　鉢としたが坏の可能性もある。体部はヨコナデで仕上げられる。

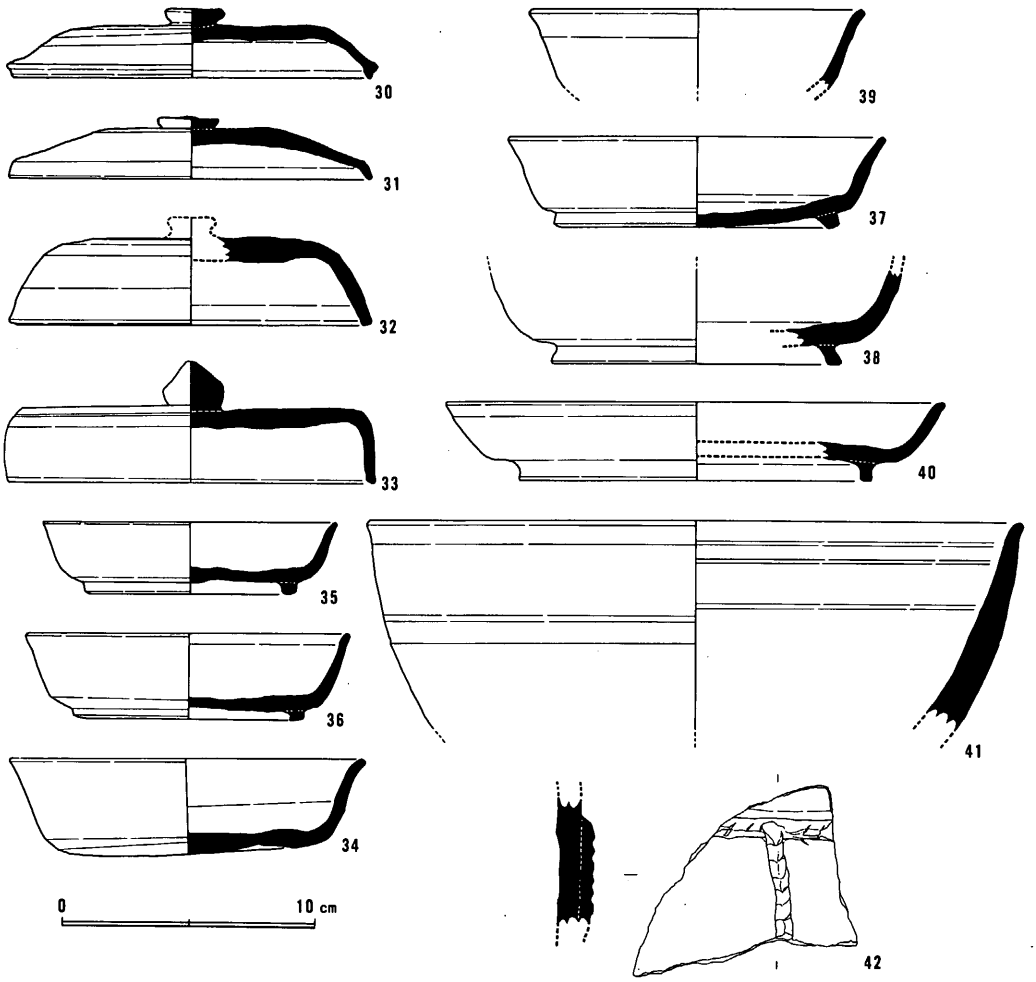


Fig.129　68SK005茶灰色土層出土土器実測図４（1/3）

小坏（6）　小さな平底を呈する。内面はナデ、外面は指圧痕がわずかにみられる。

高坏（7）　口径27.4cm。内外面ともにミガキａが観察される。

短頸壺（8）　口径13.7cm、器高17.5cm、底径12.4cmを測る。胴部最大径を有するあたりに把手が付いていた痕跡を残す。外面の体部下半から底部にかけては回転ヘラケズリ、他はヨコナデである。

甕（9～25）　口縁部の形状をみると内面に強い稜があり外方へ屈曲するものと、稜を持たないものがあり、さらに端部を太めに作り外反させるものなど多様であるが、表面の調整は基本的に外面が縦方向のハケ目、内面が下から上に向かうヘラケズリである。なお24の口縁部内には横方向のハケ目がある。また、25の資料は内面に同心円の当て具痕を残し、外面には平行叩きがみられる。外面はさらに上位でカキ目を施し、その後で縦方向のハケ目を施している。口縁部はヨコナデである。口径25.7cmで、豊前型の甕と思われる。

製塩土器

壺（26～29）　いずれも底部を尖り気味に作る資料とみられ、内外面ともに指圧痕が明瞭に残っている。口径10.0～12.8cm。

須恵器

蓋c3　(30･31)　ボタン状の摘みを有し、天井部は回転ヘラケズリされる。

壺蓋　(32･33)　33は背の高い宝珠形の摘みを有し、天井部と体部の境目に断面形状が三角形を呈する突帯を貼り付ける。

坏a（34）　口径14.1cm、器高3.8cm、底径10.8cm。底部はヘラ切りされる。

坏c（35～38）　口径11.7～15.9cm、器高2.9～3.6cm、高台径8.4～11.4cmを測る。

坏（39）　口径13.3cm。

大皿c（40）　口径19.8cm、器高3.2cm、高台径14.0cmを測る。体部はヨコナデである。

鉢（41）　口径26.0cm。外面体部下半はカキ目調整される。

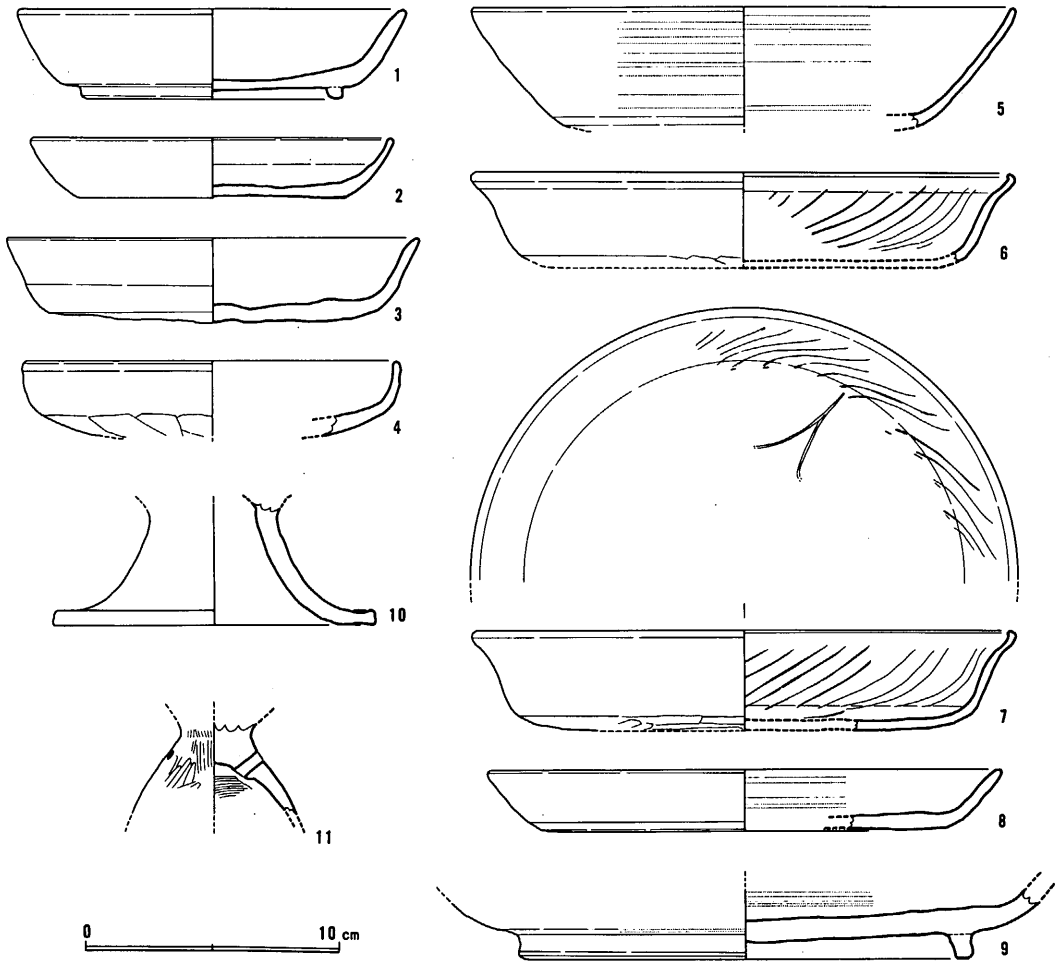


Fig.130　68SK005暗茶色土層出土土器実測図1　(1/3)

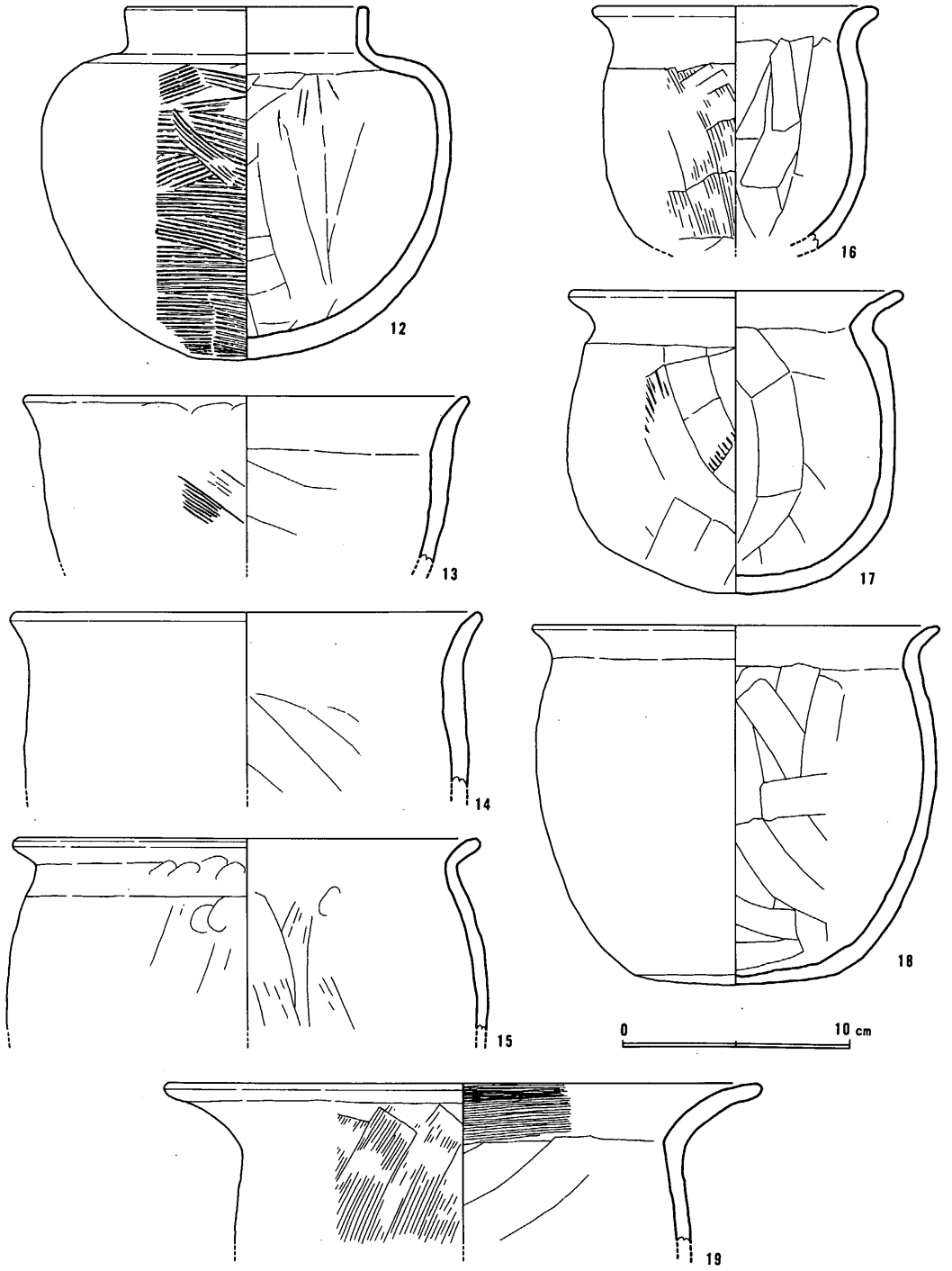


Fig.131　68SK005暗茶色土層出土土器実測図２（1/3）

壺（42）　体部外面に粘土紐による突帯を貼り付けた資料である。突帯は縄を模したような形状を呈している。豊前市所在の荒堀雨久保遺跡（福岡県文化財調査報告書第99集掲載）に近似した例が知られている。

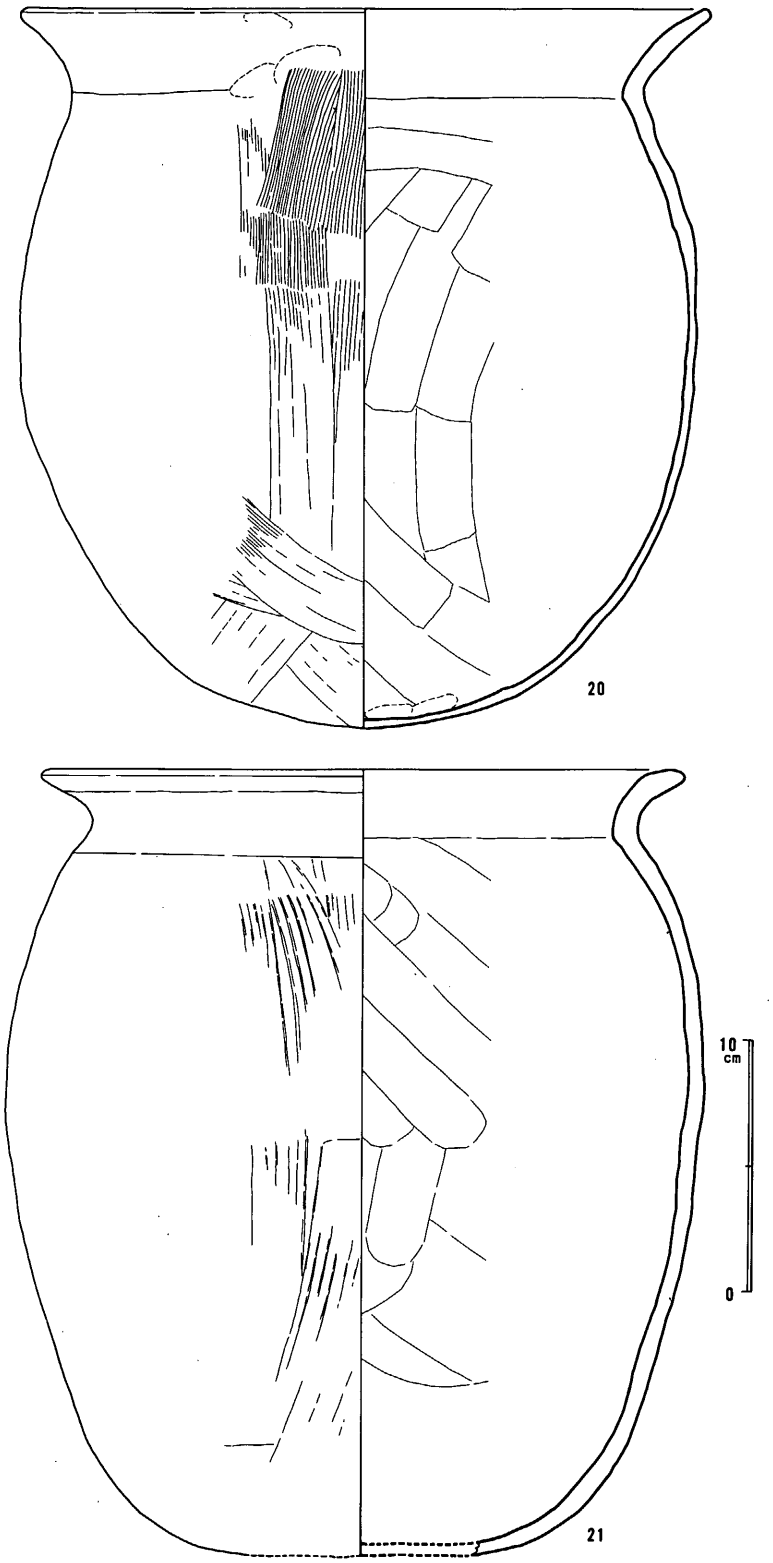


Fig.132　68SK005暗茶色土層出土土器実測図３（1/3）

68SK005暗茶色土層出土土器

（Fig.130～133、CD-068170～203）

土師器

坏ｃ（1）　口径15.4cm、器高3.6cm、高台径10.4cmを測る。外面底部はヘラ切り後回転ヘラケズリを施したものとみられる。

大坏（5）　口径21.6cm。内外面ともにミガキａが観察される。

坏（6･7）　両者とも畿内系の土師器坏で平城Ⅲに近似する。口径21.6･21.5cm。口縁端部を内側にわずかに折り曲げる。体部外面下位はヘラケズリ、上位はヨコナデ、内面は回転ヘラミガキののち右斜め上がりの暗文を施す。底部の残る７では内面底部にも暗文がある。

皿ａ（2･3･8）

２は口径14.4cm、器高2.4cm、底径10.6

cmで、底部はヘラ切り後丁寧なナデを施す。３は口径16.4cm、器高3.4cm、底径13.0cmを測る。底部はヘラ切りされる。８は口径20.4cmで内面にミガキａが施される。

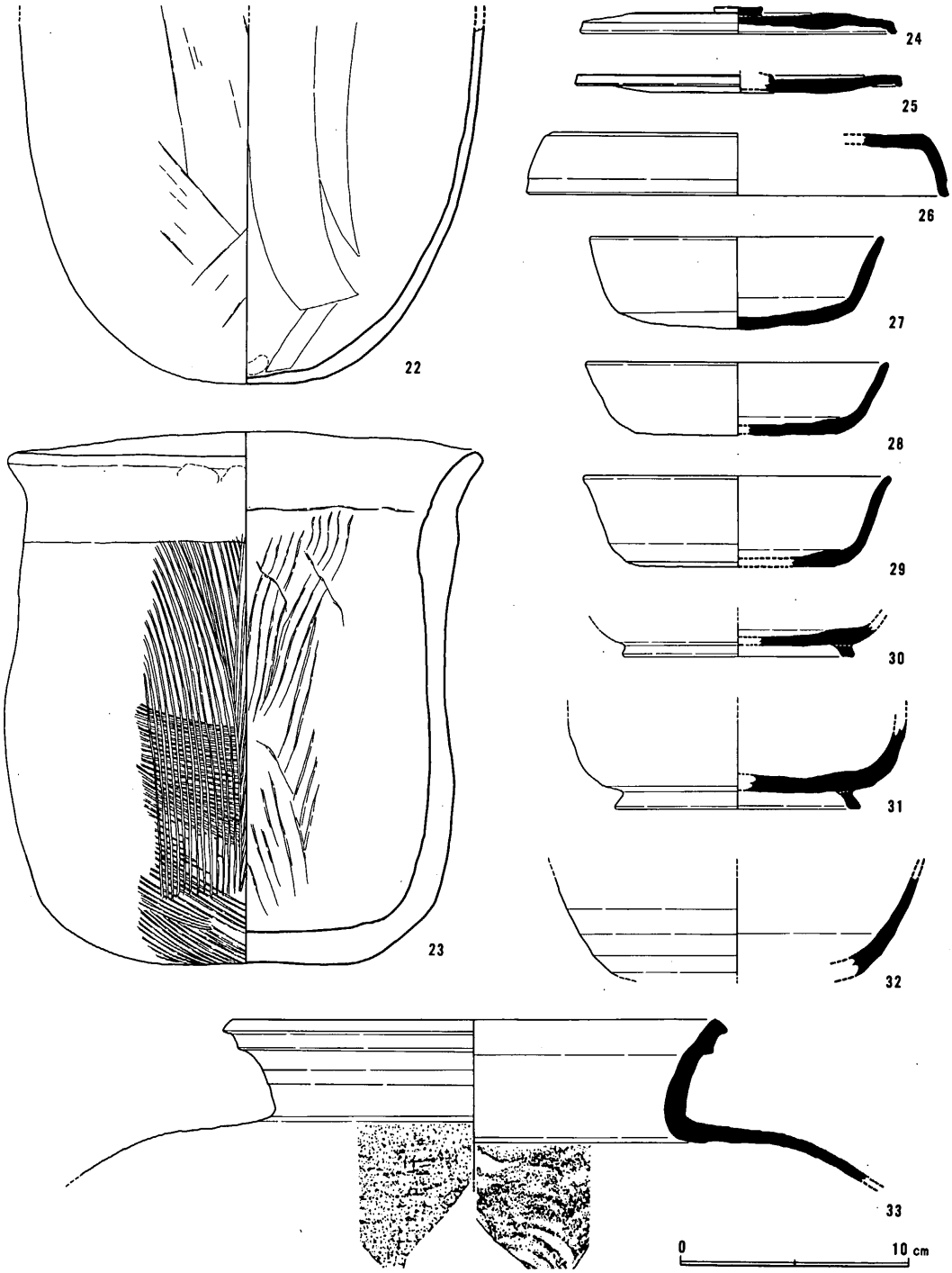


Fig.133　68SK005暗茶色土層出土土器実測図４（1/3）

皿ｂ（4）　口径15.0cm。体部中位以上はわずかに内湾し、体部下半はヘラケズリされる。

大皿ｃ（9）　高台径18.0cm。内外面ともにミガキａが観察され、外面底部は回転ヘラケズリを施す。

高坏（10･11）　10は脚端部径18.0cm。11は内外面ともにハケ目調整され、４箇所に穿孔がある。古い資料の混入とみられる。

壺（12）　口径10.8cm、器高15.6cm。体部外面は横方向のハケ目でわずかに縦方向のハケ目もみられ、内面は丁寧なナデで仕上げられる。肩部から口縁部は内外面ともにヨコナデである。

甕（13～23）　口縁部は外反するが内面に明瞭な稜を有さないもの（13･14･23）、口縁部を大きく外方へ折り曲げ、内面に強い稜を有するもの（19･20）、口縁部を小さく外方へ折り曲げ、内面に稜をもつもの（その他）などがある。調整は基本的に外面をハケ目、内面をヘラケズリで仕上げるが、18の外面はヨコナデで仕上げられ、23の内面はハケを用いてナデられている。

須恵器

蓋ｃ3（24･25）　口径14.0･14.2cm、器高1.2･0.7＋cm。天井部はヘラケズリされ、扁平な釦状の摘みが付く。

壺蓋（26）　口径18.6cm。天井部は回転ヘラケズリされる。

坏ａ（27～29）　口径13.4～13.6cm、器高3.2～4.1cm、底径8.1～10.7cmを測る。すべて底部はヘラ切りされる。

坏ｃ（30･31）　高台径10.2･10.8cm。高台はわずかに外方へ開き気味に作られる。

鉢（32）　体部下半は回転ヘラケズリされる。

甕（33）　口径22.2cm。体部外面は擬格子叩き、内面は同心円の当て具痕が残る。

68SK005灰色粗砂層出土土器（Fig.134、CD-068204･205）

土師器

蓋4（1）　口径17.0cm。体部内外面ともにミガキａが施される。

68SK005茶色粘土層出土土器（Fig.134、CD-068206）

須恵器

蓋2（2）　口径15.4cm。口縁端部は長めに折り曲げられる。

壺蓋（3）　口径17.0cm。天井部は回転ヘラケズリされる。

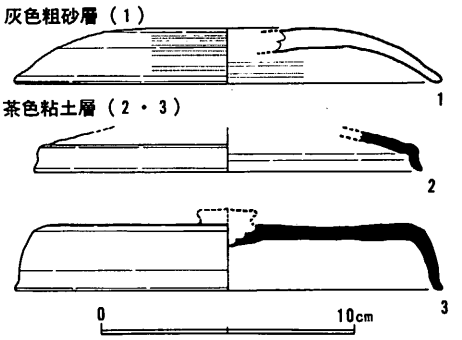


Fig.134　68SK005各層出土土器実測図（1/3）

68SK012灰色粘土層出土土器（Fig.135、CD-068207～216）

土師器

坏ａ（1）　口径11.0cm、器高2.3cm、底径8.0cmを測る。底部はヘラ切りである。

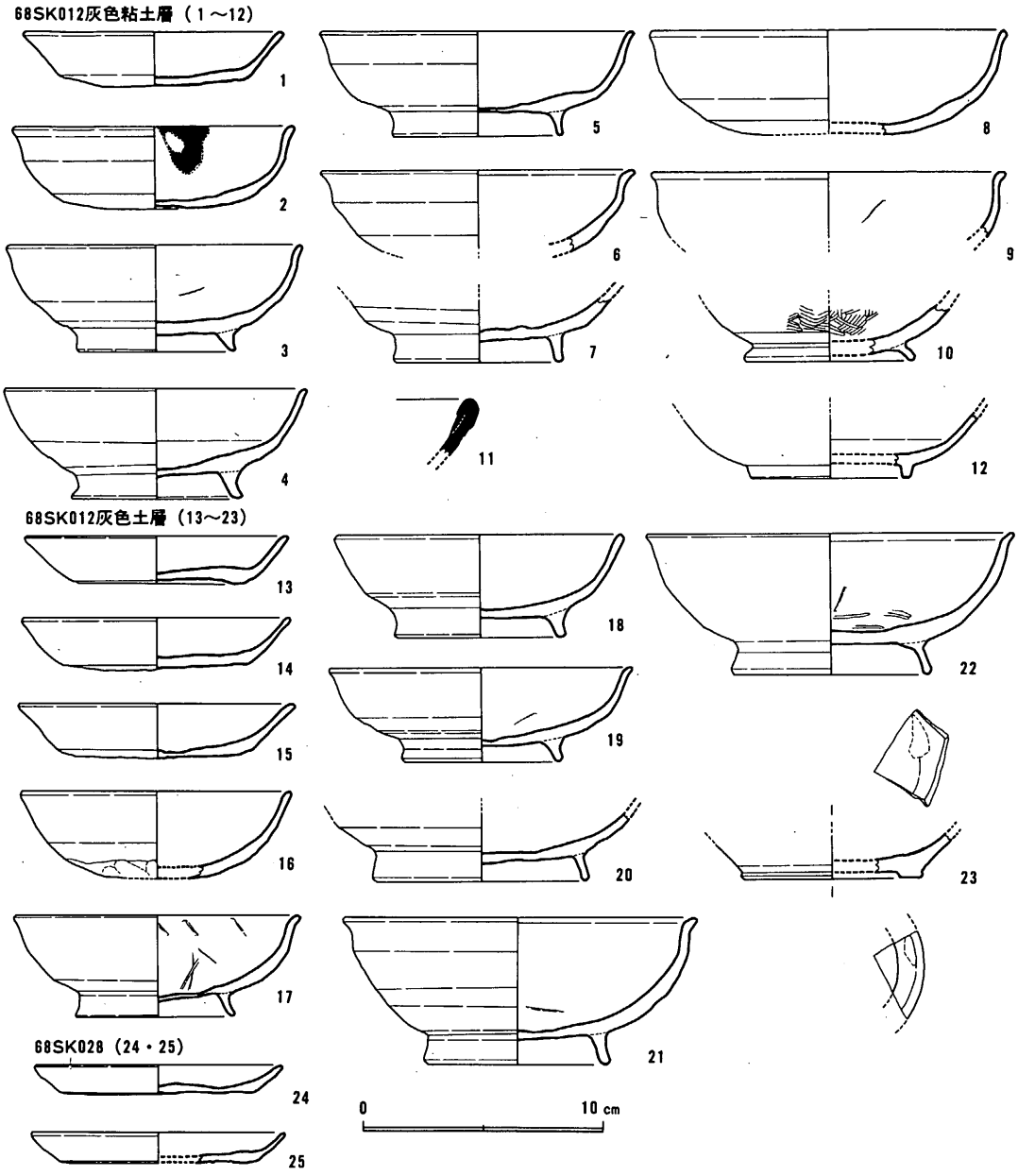


Fig.135　68SK012・028出土土器実測図（1/3）

椀ａ（2・8）　口径11.8・15.0cm。底部はヘラ切りである。２の口縁部内面に黒茶色の付着物がある。

椀ｃ（3～5・7）　口径12.5～13.2cm、器高4.5～4.7cm、高台径6.7～7.3cmを測る。底部はヘラ切りされる。

椀（6・9）　口径13.2・15.0cm。６は体部中程に屈曲があり口縁部を外反させる。９は口縁端部を外方へ小さく折り曲げる。

黒色土器

椀ｃ（10）　高台径7.2cm。体部内外面ともにミガキｃが施される。Ｂ類。

須恵器

鉢（11）　口縁部を肥圧させ玉縁状に作るもので、篠窯系とみられる。

越州窯系青磁

皿（12）　高台径6.8cm。畳付けは露胎であるが、他はくすんだ灰黄色に発色する釉を施す。胎土は淡褐灰色でやや粗めである。Ｉ類。

68SK012灰色土層出土土器（Fig.135、CD-068217～226）

土師器

坏a（13～15）　口径11.1～11.7cm、器高2.0～2.3cm、底径7.0～7.2cm。底部はヘラ切りされる。

椀ａ（16）　口径11.4cm。体部外面下半には指圧痕が残る。

椀ｃ（17～19）　口径12.0～12.8cm、器高4.0～4.4cm、高台径6.8～7.2cm。17･19の内面にはミガキｂが観察される。

大椀ｃ（20･21）　高台径9.1･7.8cm、21の口径は14.9cmで内面にはミガキｂが観察される。

黒色土器

大椀ｃ（22）　口径15.5cm、器高6.0cm、高台径8.5cmを測る。内面にミガキｃが確認されるが、上位にはミガキｂの痕跡も認められる。Ａ類。

越州窯系青磁

椀（23）　幅広の輪状高台の径は7.7cm。畳付け及び外面底部は露胎で、他は灰緑色の釉がかかる。畳付け及び見込みに目跡が観察される。Ｉ-2-ウ類。

68SK028出土土器（Fig.135、CD-068227･228）

土師器

小皿ａ（24･25）　口径10.4･10.6cm、器高1.2･1.3cm、底径8.0･8.3cmを測る。底部はヘラ切りされる。

68SX001出土土器（Fig.136、CD-068229～239）

土師器

小皿ａ（1～3）　口径8.6～9.4cm、器高0.8～1.4cm、底径7.2～7.4cmを測る。底部はすべて糸切りである。

坏ａ（4）　口径14.4cm、器高3.6cm、底径10.1cmで、底部は糸切りである。

白磁

椀（5～10）　5は口径15.2cmでII-3類、6は高台径6.7cmを測り、体部内面の段は不明瞭ながらⅣ-1-b類と判断したい。7は体部内面の段が沈線状を呈しておりⅣ-1-a類。8は段の判別ができないのでⅣ-1類。9は玉縁口縁を有するものでⅣ類。10は高めの高台を有するＶ類である。

皿（11･12）　11は口径12.8cmで、体部外面に縦方向の沈線を入れ、それに対応するように口

縁部には輪花を刻む。乳灰白色で透明感のある釉を施す。XI-5類。12は高台径6.9cmで、VII-2類。

越州窯系青磁

椀（14）　口径16.0cm。体部に縦方向の沈線と口縁部に輪花を刻む。

高麗青磁

椀（13）　灰緑色で透明感のある釉を施す。初期高麗青磁。

陶器

壺（15）　口径16.0cm。白色及び黒色の微細な粒子、金雲母等を含む胎土は淡灰色を呈し、釉は残存部全面にかかり淡茶褐色に発色する。XII類。

68SX033出土遺物（Fig.136、CD-068240～245）

土師器

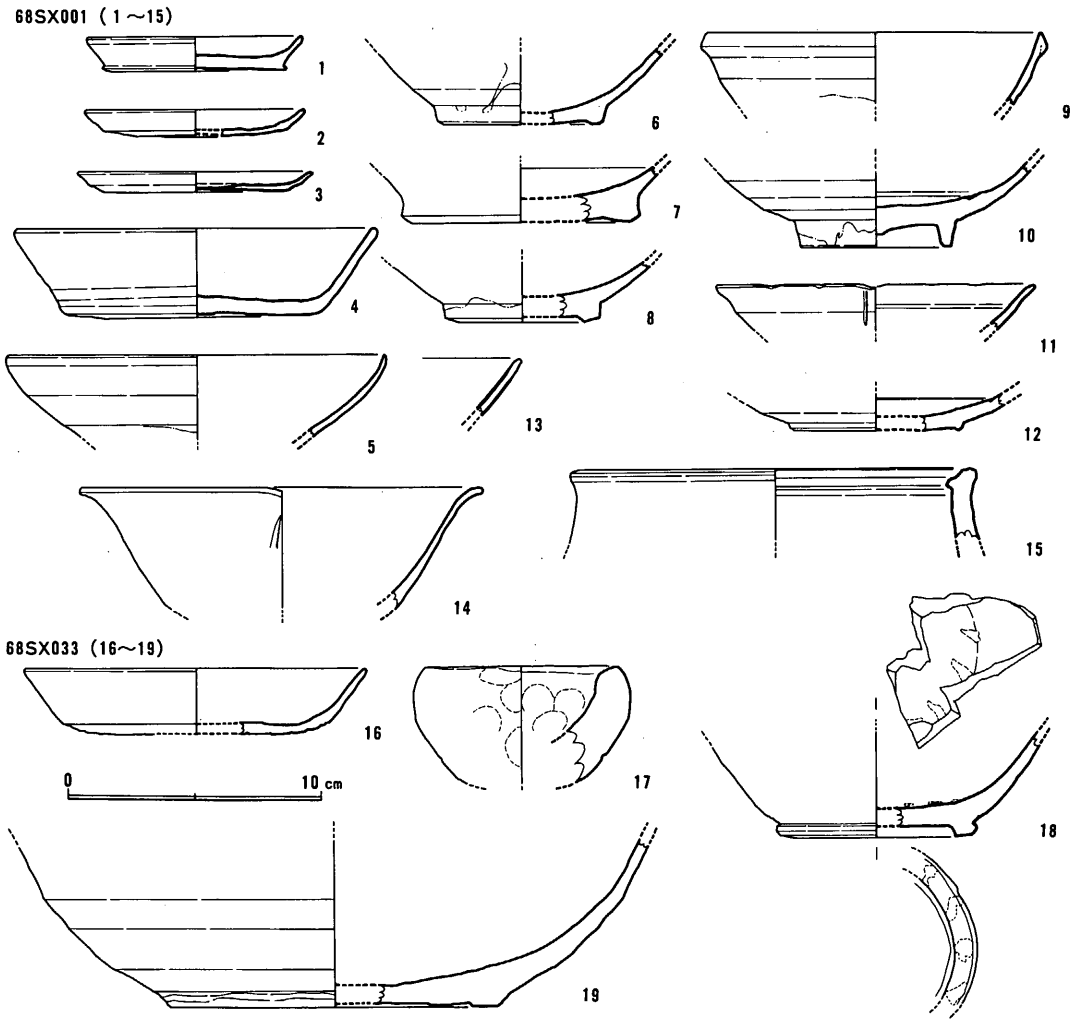


Fig.136　68SX001・033出土土器実測図（1/3）

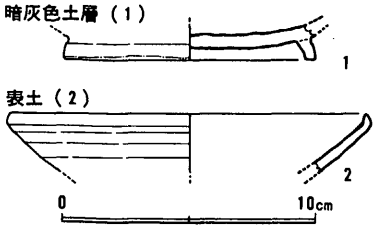


Fig.137　第68次調査各層出土土器実測図（1/3）

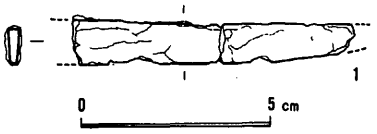


Fig.138　第68次調査出土鉄製品実測図（1/2）



Fig.139　第68次調査出土銅銭拓影（1/1）

坏a（16）　口径13.6cm、器高2.7cm、底径10.5cmで、底部はヘラ切りされる。

土製品

トリベ（17）　口径7.6cm。表面は指圧により整形される。胎土は暗黒灰色を呈したスサ入りの粗いもので、色調は外面が淡茶白色、内面が明赤褐色を呈している。鉱物の目立った付着や溶解による内面の変質はない。

越州窯系青磁

椀（18）　高台径8.0cm。見込み及び畳付けに目跡がみられる。I-2類。

陶器

鉢（19）　底径13.0cm。外面の調整はナデ、底部は成形台から外したままの状態とみられ、内面は使用による磨耗で平滑になっている。胎土は淡茶灰色で砂粒を多量に含む粗いものである。

暗灰色土層出土土器（Fig.137、CD-068246･247）

灰釉陶器

椀（1）　高台径10.0cm。外面底部は回転ヘラケズリ、他はヨコナデである。高台外面のみ淡灰緑色に発色する釉が確認される。

表土出土土器（Fig.137、CD-068248･249）

越州窯系青磁

坏（2）　口径14.4cm。釉は濃緑色に発色する。I-3類。

(2)　金属製品

鉄製品（Fig.138、CD-068250･251）

刀子（1）　現存長7.4cm、最大幅1.1cm、最大厚0.3cm。両端ともに欠失するものと考えられる。暗灰色土層出土

銅製品（Fig.139、CD-068252･253）

銭（2）　「□元重寶」。68SX001出土。

(3)　瓦類

68SE020出土瓦（Fig.142～153、CD-068254～384、付表1・2）

井戸枠に転用された瓦は200枚以上を数え、その多くが半分程度の残存率を留めている。特に

平瓦、丸瓦では表面の風化も少なく、瓦の情報を得るには格好の資料と考えられた。

そこで瓦を整理、解説するにあたって統一した観察を行うことを心がけ、そのために専用のカードを作成した。各出土瓦を解説する前に、今回観察を行った視点について記載しておく。観察結果は付表1・2に示したので参照されたい。なお、平瓦については興味ある所見を得たので小結の項で検討を加えた。併せて参照されたい。

まず記録の方法であるが、丸瓦と平瓦では基本的に製作方法が異なることから、同じカードは用いず、各々に対応できるよう平・丸の2種類を作成した。ただし共有できる箇所はできるだけ同じ用語や記号を用いるようにした。

記録を行うにあたっての注意事項や記号化した部分について以下に記しておく。

丸瓦（Fig.140）

（計測値）　図に示すとおりａ～ｇまでの部位を計測した。ａは瓦の全長、ｂは玉縁長、ｃは本体長、ｄは丸瓦末端幅、ｅは玉縁端部幅、ｆは玉縁付け根幅、ｇは丸瓦先端幅を示す。それとともに一見して長い玉縁と短い玉縁が存在するように思えたので、玉縁長の全体長における比率

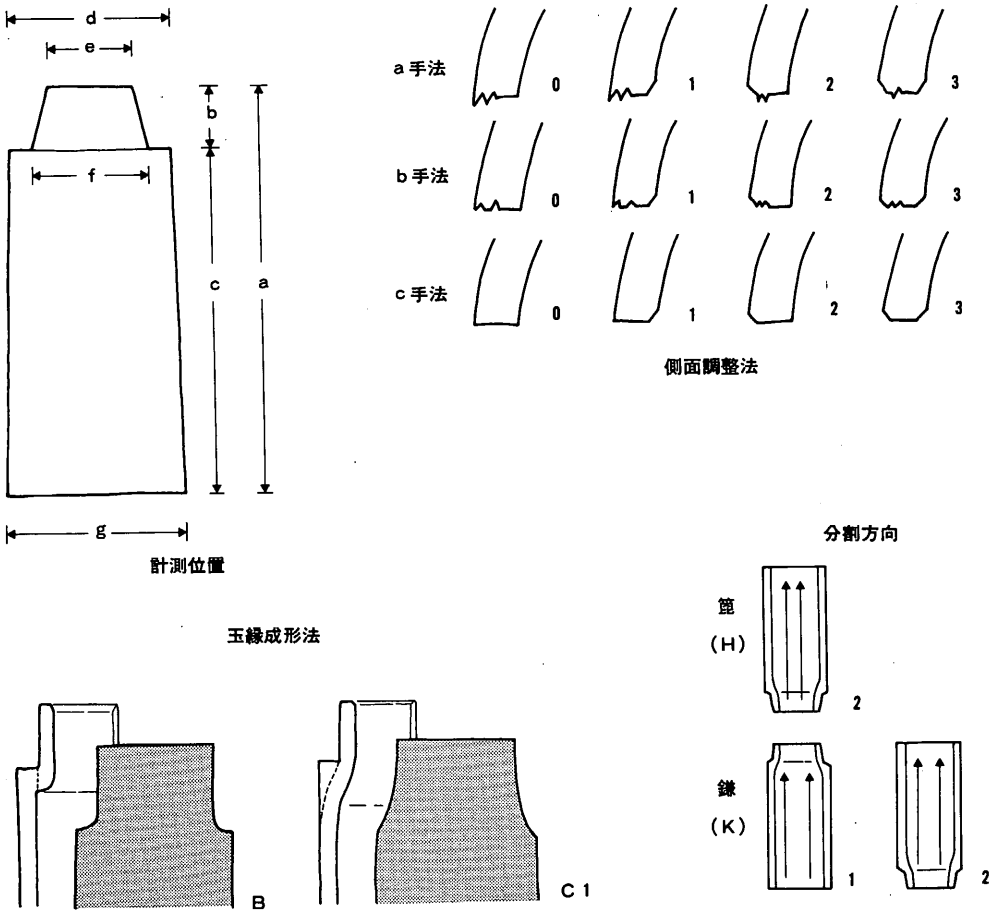


Fig.140　丸瓦観察部位模式図

(b÷a) と玉縁長と本体長の比率 (b÷c) を求めてみた。さらに玉縁先端の幅が狭くなる資料も存在したことから、玉縁幅と本体幅の比率 (e÷d) と玉縁部の付け根と先端の計測値を比較した比率 (e÷f) も求めた。

(側縁調整法)　丸瓦切り離し部の調整について記録した。その形状から記号化を進めたが、それは大脇潔の提示したもの[1]をベースにした。なお左右の記載は、凹面を向けて玉縁部を上にした時の状態である。分割方法もこれに従い、図に示した記号を用いた。

(叩き目の記録)　叩きの単位は瓦1点当たりに押圧された数量を示している。特に平安時代に属する格子叩き目 (文字瓦を含む) は丁寧に並べられて押圧されており、いわゆる叩き締めによる押圧とは性格を異にしている可能性があるため[2]この項目を設定した。また叩き目の全容を窺える資料が多いため、長さと幅についても記録した。なお、今回は叩き目自体の分類は行わなかった。ただ同じ叩き目を同定するために便宜上2桁の番号を与えているが、形式分類を目的としたものではない。平瓦も同じである。

(玉縁取付と調整)　玉縁取付法、玉縁調整法については図のように大脇が示す記号化したものを使用した。また水切施設についてはほとんどの資料で観察されなかったが、存在するものについては「溝」などの用語を記載した。

(布に関する事項)　布の巻き方、継ぎ目、縫い方等について、大脇の示す記号を利用した。

(端部の調整)　狭端部とは玉縁先端部を示し、広端部はその反対側、つまり丸瓦先端部を指す。その部分は何らかの形で調整痕が残されていることが多く、記録することとした。さらに凹面広(狭)端部調整とは、凹面の各端部に該当する部分に調整を加える資料があったことから、記録に加えた。

なお、これらに記録されない情報は備考欄に記載した。

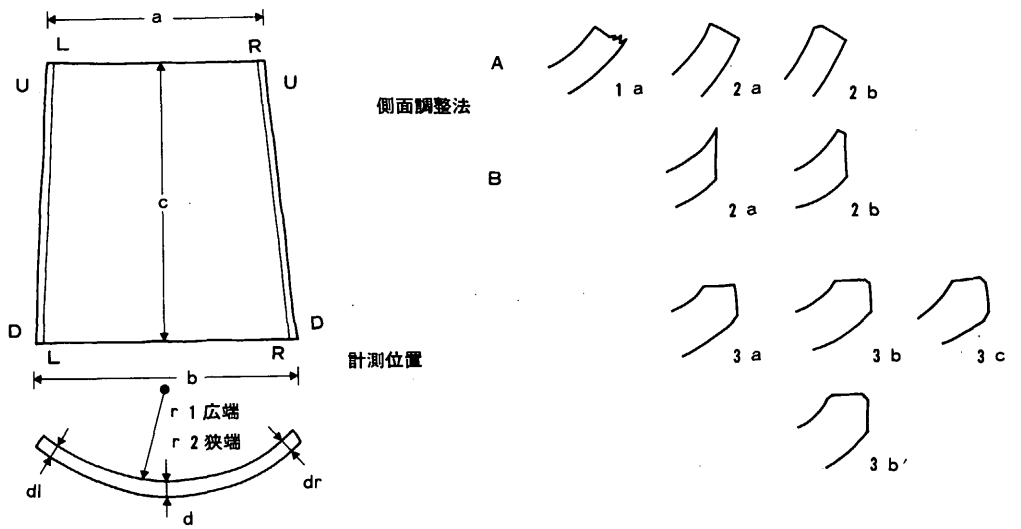


Fig.141　平瓦観察部位模式図

平瓦（Fig.141）

（計測値）　8箇所を計測した。aは狭端部の弦長、bは広端部の弦長、cは全長、dは中央部の厚さ、drは凹面を向けて狭端部を上にしたときの右側の厚さ、dlは同じく左側の厚さ、r1は広端部における半径、r2は狭端部における半径である。

（側面の形状）　丸瓦同様、切断面が再調整されているものが多いため、その形状を記号化して記録した。丸瓦の調整法を参考にして次の基準で記号化した。まず大分類として側縁の傾斜角度が円弧の中心に向かうものをAとし、垂直方向に切り落とされるものをBとした。中分類として、その切断面が未調整で分割痕がそのまま残るものを1、平面的にきれいにケズリ調整されるものを2、さらに凹面側に幅広く削り調整を行うものを3とした。小分類は主に面取りの有無を表現し、aは面取りが無いもの、bは凹面側の側縁部分に面取りを行うもの、cは凸面側の側縁部分に面取りを行うものとした。さらに3タイプで凹面側のヘラケズリ調整の後、内側に面取りを行うものには'を付した。これらを並列してA1a、B3b'のように表記した。なお、B2bでは面取りの角度が傾斜するものと水平のものとが存在したが、ここでは分けていない。

（粘土板の重ね）　有・無で表示した。なお判明するものはS・Zの表示[3]も行った。

（叩き目）　縄叩き目については、縄種類の項で叩き行為によって描かれる形状を示した。それには円弧や平行などが思い浮かぶが、平行方向のものについては数段にわけて叩かれているものが多く、その場合は判明する段数を記載している。また縄の粗密の項では、幅3㎝当たりの条数とした。3㎝とした根拠は特になく、強いて言えば1㎝では狭すぎ、5㎝では広すぎるという程度である。格子叩き目については丸瓦の項で述べたことと同じである。

（糸切りの方向）　平瓦では粘土板を切り離した時の糸切り痕を観察できるものが多く、その方向を記載した。なお方向の表示は記号で行った。記号は図に示すとおり、例えば凹面を向けて狭端部右上から広端部左下に向かうものはRU—LDで表示した。

（側縁と端部の調整）　いずれもケズリ調整の方向について記号を用いて記録した。記録は糸切りの方向を示す時に用いたものをそのまま利用し、狭端部の左から右へ削られるものはL→Rというように記録した。

（布の状況）一部の資料で縫い目や綴じ目が観察できたため、その方向を記録した。横とあるものは左側縁から右側縁（またはその逆）に綴じられるもので、縦は狭端部から広端部（またはその逆）の方向に綴じられるものを示す。

（分割突帯）　有・無で表示した。

（風食痕）　まず有・無で表示し、有については出来る限り広端部または狭端部から風食が始まる部位までの距離を計測した。資料の残存率の違いで計測開始箇所が異なるため（ ）内に開始部位を略して記載した。（狭）は狭端部、（広）は広端部。この数値と全長を比較すると使用時の瓦の重ねる度合いを知ることができる。

（模骨痕）　模骨痕の有・無と、有の場合は模骨の幅を計測した。

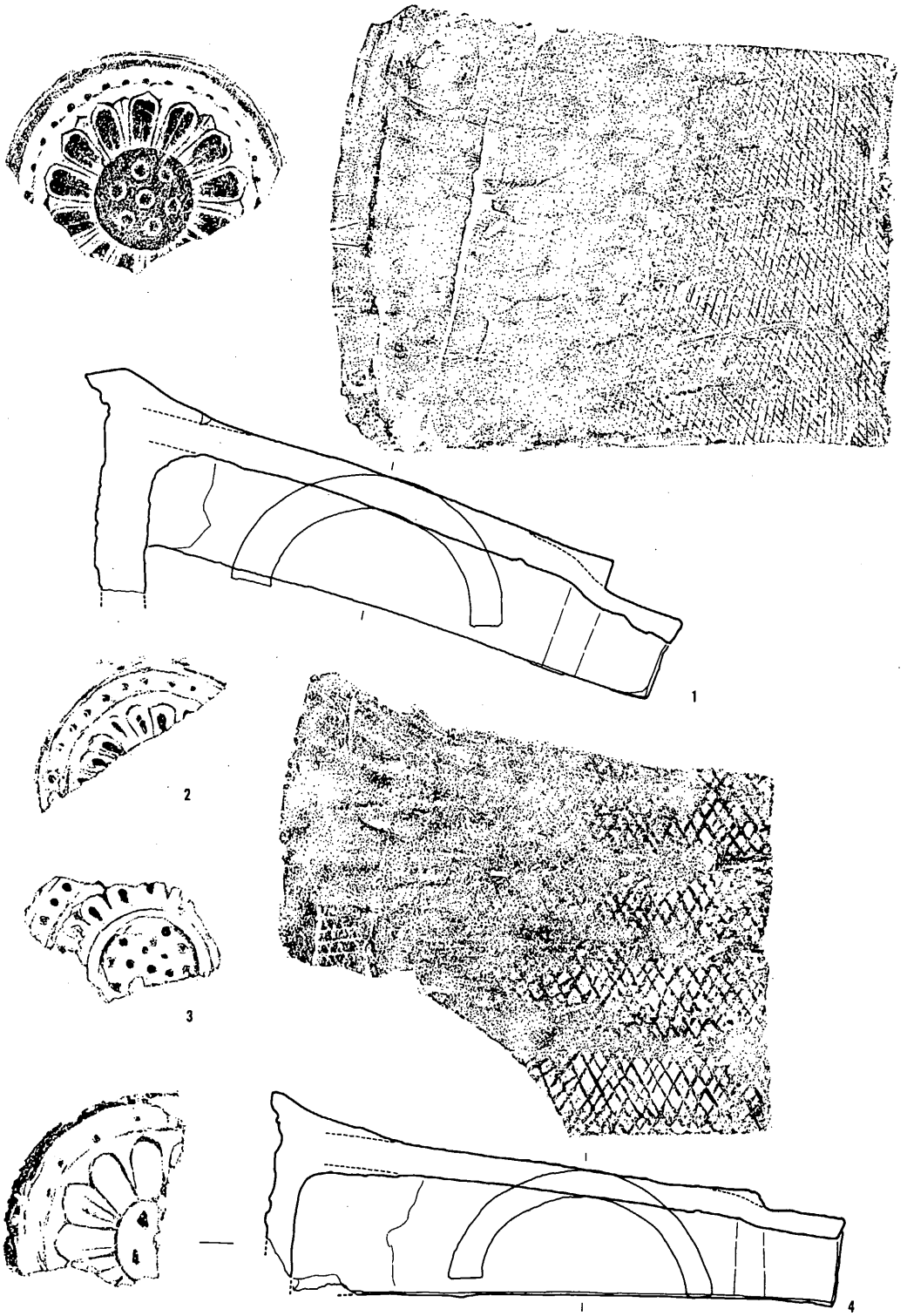


Fig.142　68SE020出土軒丸瓦実測図・拓影（1/4）

（凹型台の痕跡）　有・無で表示した。ただし凸面の叩き痕が随所で押圧される例があり、直接の痕跡を残さなくてもその存在を推定できる可能性がある。これについては無と表示しているものの、次の凸面調整の項で押圧の表記を行っておいた。

（調整）　端部、側縁以外の調整、つまり凹面、凸面に残された調整を記録した。

これ以外の情報は、備考欄に記入した。

(1)　大脇潔「丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』奈良国立文化財研究所　1991年

(2)　狭川真一「第1次調査出土平・丸瓦の整理」『太宰府天満宮Ⅲ』太宰府市教育委員会　1995年

(3)　佐原真「平瓦桶巻き作り」『考古学雑誌』58巻2号

軒丸瓦（1～4）　1は単弁十三葉蓮華文で外区に珠文帯が巡る。丸瓦部凸面は細かな格子叩き目がみられ、整然と配置され叩かれた状況が理解できるが、瓦当部側の半分程度はナデによって擦り消されている。また丸瓦の切断面に特別な加工は施されていない。井戸枠転用。2は複弁蓮華文で、外区に珠文帯が巡る。裏込土出土。3は複弁蓮華文で、中房が大きく1＋6＋10の蓮子が配される。上層出土。4は単弁蓮華文で、弁の輪郭を低い突線で表し、子葉も同様であるが全体には確認されない。丸瓦部凸面はやや粗めの格子叩き目がみられ、整然と配置され叩かれ

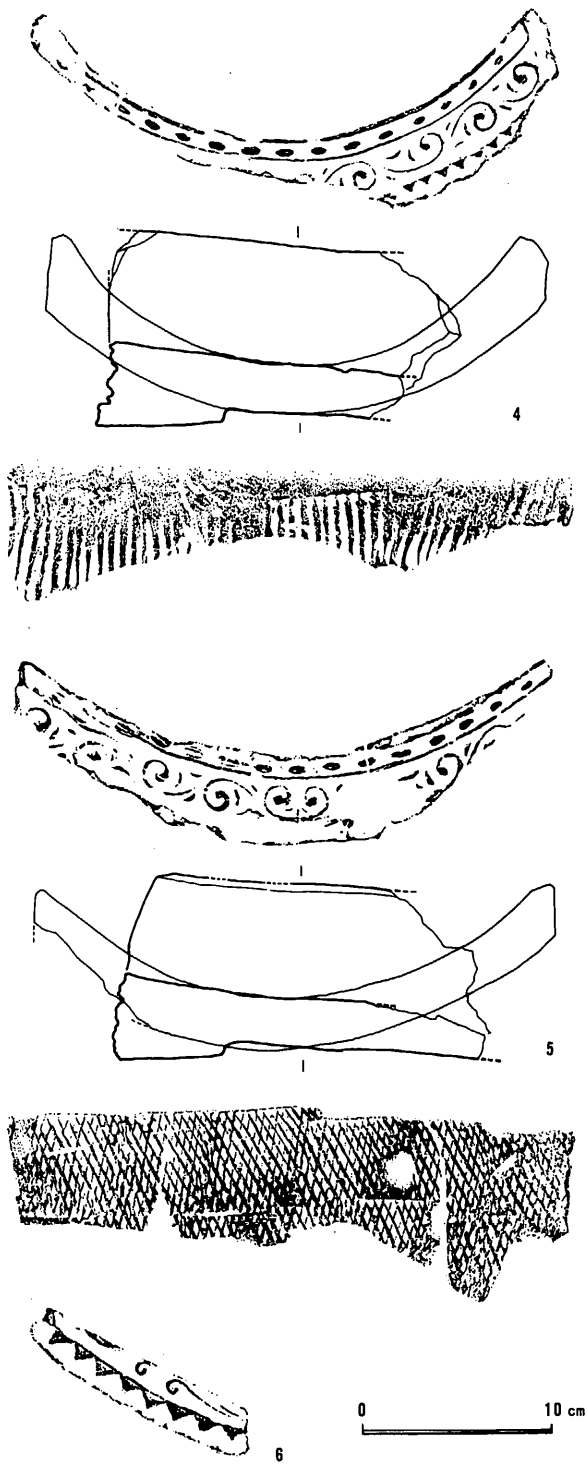


Fig.143　68SE020出土軒平瓦実測図・拓影1（1/4）

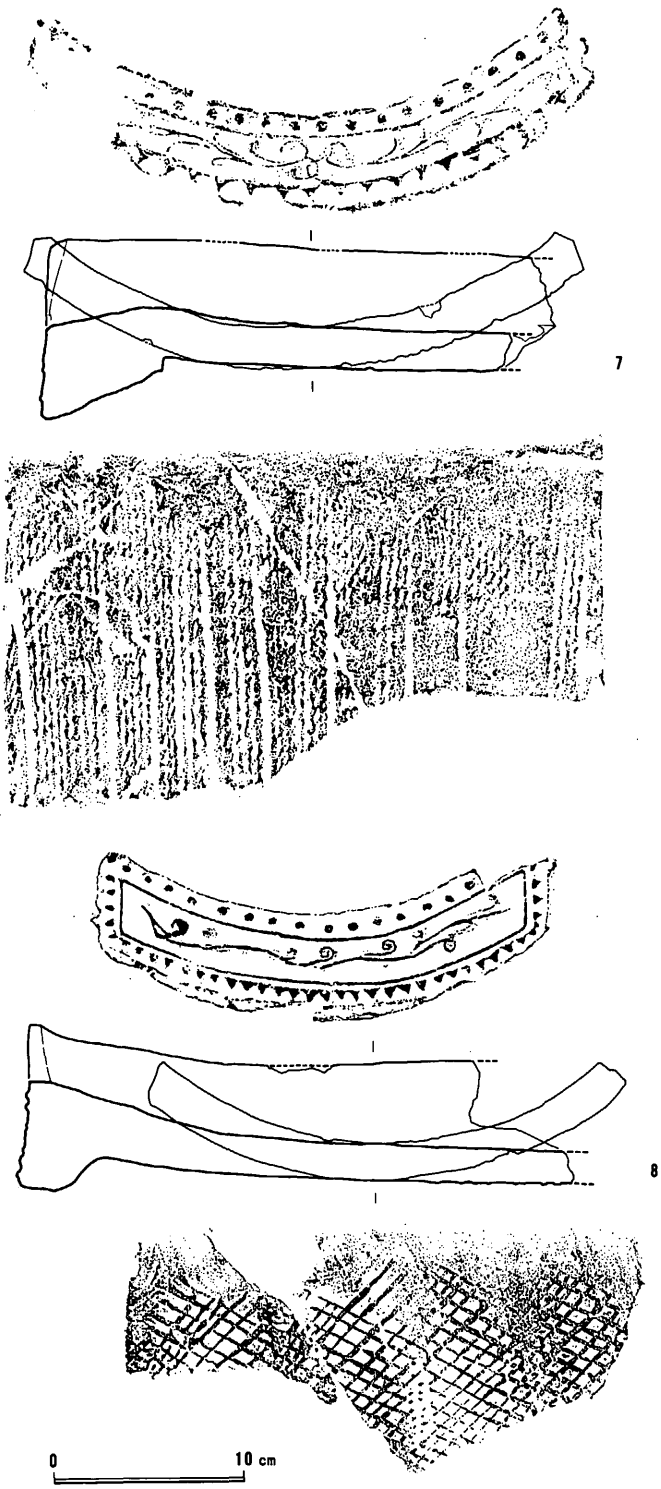


Fig.144　68SE020出土軒平瓦実測図・拓影２（1/4）

た状況が理解できるが、瓦当部側の半分程度及び叩き目の接する部分はナデによって擦り消されている。また丸瓦の切断面は簡易な面調整が行われている。井戸枠転用。

軒平瓦（4～8）　4は均整唐草文で鴻臚館式である。平瓦部凸面の叩き目は平行叩き、側縁の調整はケズリで、形状はB2bである。凹面には幅約17cmの風食痕がみられ、顎部と平瓦部との境目付近に赤色顔料が付着している。5は4と同じの瓦当文様であるが、平瓦部凸面の叩き目が細かな格子目を呈している。叩きは残存部の範囲で2段階確認され、細かく丁寧に叩き締められていたようであるが、顎部境目から約6cmの範囲はヨコナデが施される。ヨコナデは叩きに先行する。側縁の調整はケズリで、形状はB2bである。凹面には風食痕がみられ、顎部と平瓦部との境目付近に赤色顔料が付着している。4・5とも井戸枠転用。6は老司II式の断片で、裏込土出土。7は均整唐草文で、上外区を珠文帯、下外区を凸鋸歯文帯とし、唐草主茎根部の絡みをもって中心飾りとしている。平瓦部凸面は縦方向に平行して叩かれる縄叩き目で、側縁の調整はケズリ、形状はやや内傾す

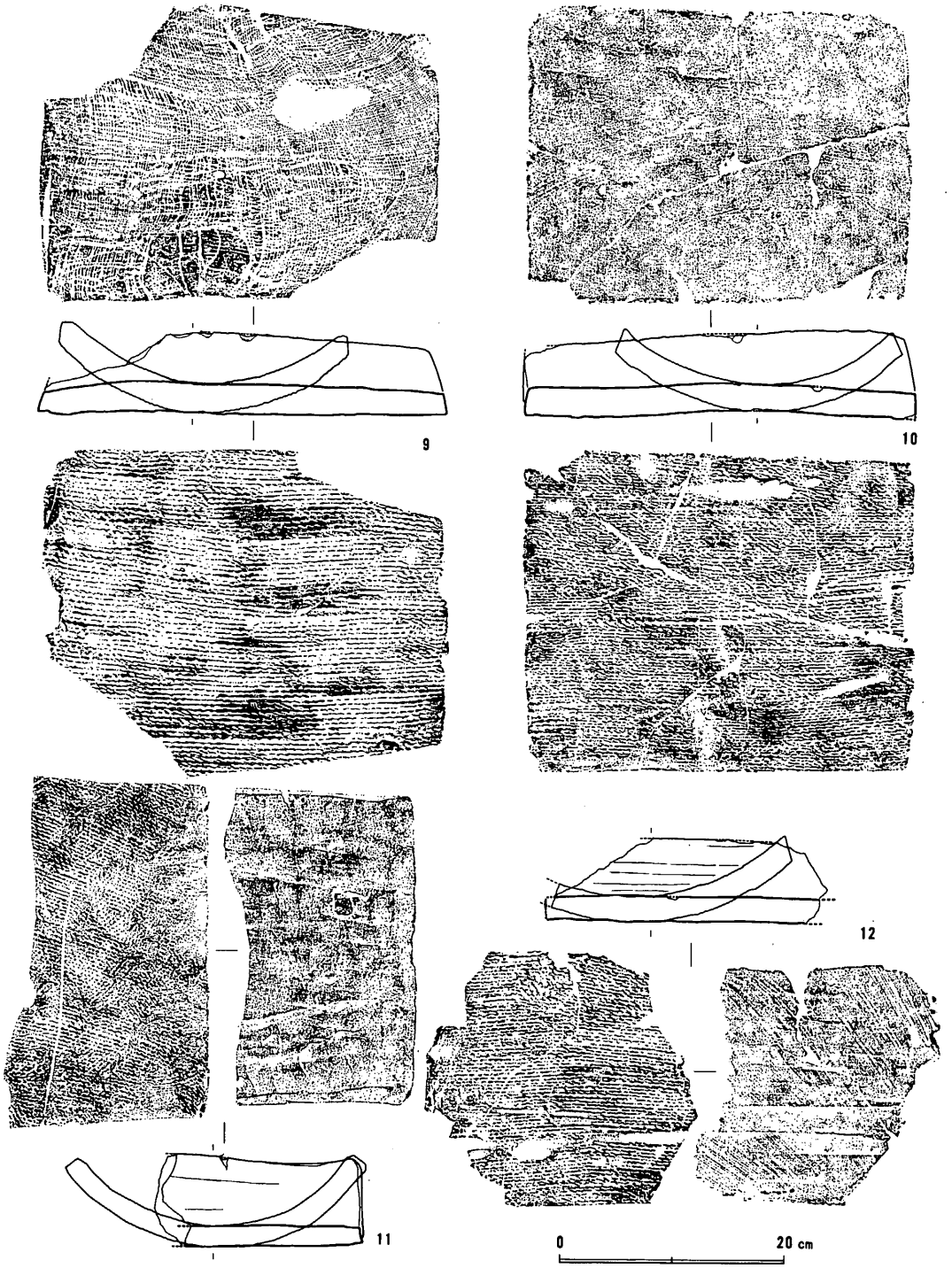


Fig.145　68SE020出土平瓦実測図・拓影１（1/6）

るもののB2bとして捉えたい。凹面には幅約18.5cmの風食痕がみられ、顎部と平瓦部との境目付近に赤色顔料が付着している。また顎部の表面の風化が著しい。井戸枠転用。８は瓦当幅24

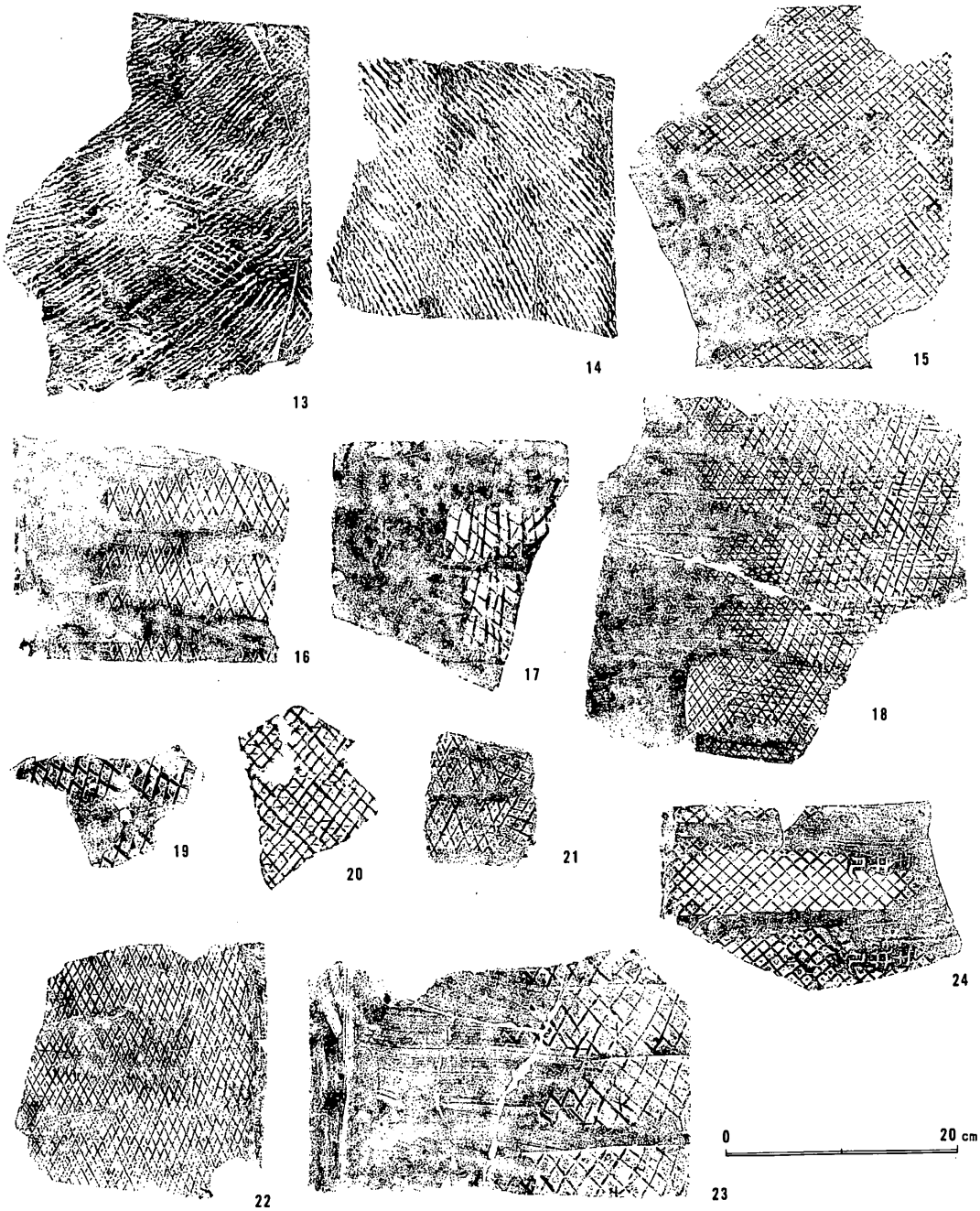


Fig.146　68SE020出土平瓦実測図・拓影２（1/6）

cm余りのやや小さめのもので、偏行唐草文を配し、上外区に珠文帯、下外区と脇区には凸鋸歯文帯を巡らす。鋸歯文は界線には接していない。平瓦部凸面には粗めの格子叩き目がみられるが、顎部境から18cmの間はナデによって擦り消されている。側縁は切り離し後未調整で、形状はA1aである。

平瓦（9～27）　主要な個体のみ報告し、他は付表にゆずる。

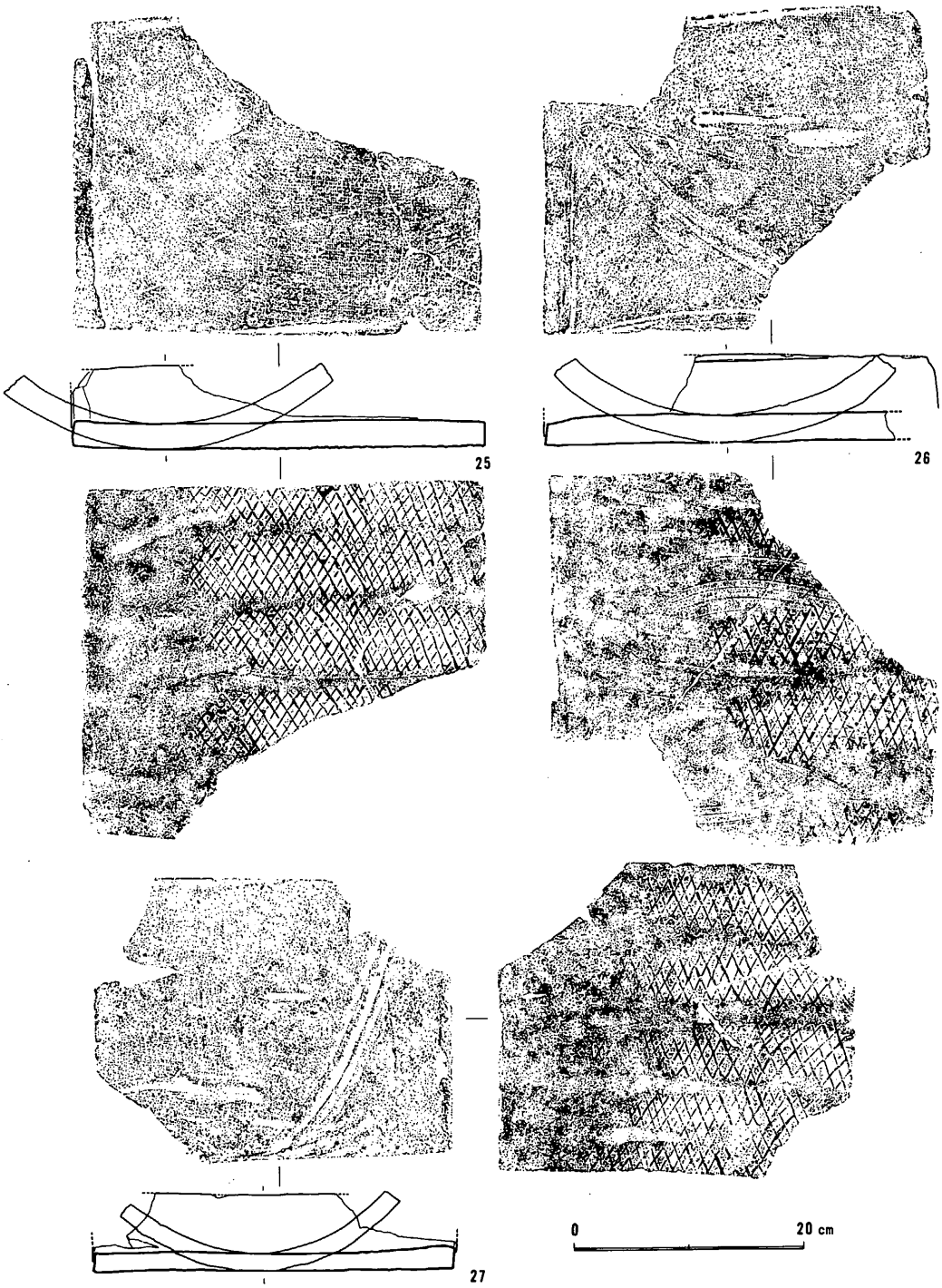


Fig.147　68SE020出土平瓦実測図･拓影３（1/6）

９～14は凸面が縄叩き目の資料である。９は凸面の叩き目が平行で３～４段に施されるもので、凹面に残る布目痕から布はかなり傷んでいるが、中央部付近で狭端部方向に引っ張られた形跡を示すものである。側縁の調整はケズリで、形状は B2b である。また、縄叩き目が随所で

押圧されており、凹型台の使用を窺わせる。一枚作りと推定できる資料である。井戸枠転用。10はほぼ完存する個体で、側縁の調整はケズリで、形状はやや内傾するがB2aで捉えたい。縄叩き目が随所で押圧されており、凹型台の使用を窺わせる。粘土板は糸切り離しによるが、広端部から狭端部にやや弧を描きながら切られている。井戸枠転用。11は凸面の縄叩き目が円弧を描くものと推定される資料で、凹面には模骨痕がみられ、布の継ぎ目と考えられる痕跡が縦方向に走っている。両面ともナデによる擦り消しがみられる。側縁の調整はケズリで、形状はA2b'である。桶巻作りであろう。井戸枠転用。12は側縁の形状がB2aを呈するもので、凹面には幅2～2.5cmの板状工具による叩き目と思われる痕跡がある。凸面の叩き目は平行で2～3段に分けて叩かれたものとみられる。井戸枠転用。13は凸面狭端部に凹型台かと思われる痕跡を残す資料で、縄叩き目も随所で押圧されている。凸面の叩き目は円弧を描き、側縁の形状はB3a、粘土板の継ぎ目がみられ、分割突帯も存在する。模骨痕も観察され、桶巻き作りによるものと考えられる。井戸枠転用。14は凸面の叩きが円弧を描くもので、側縁の形状はA3c、凹面には模骨痕が観察される。井戸枠転用。

15～27は凸面に格子叩き目を残す資料である。15～18は整然と並べられた叩き痕が明瞭で、叩き目の接する部分はナデにより擦り消している。15～17は井戸枠転用、18は裏込土出土。19は埋土中出土、20･21は裏込土出土で、いずれも小片で全容を知り得ない。22は井戸枠転用。23は大きめの格子目に「大」とあり、XV類。凸面の約半分はナデにより擦り消されている。井戸枠転用。24は「平井瓦」と正字で陰刻されるもので、I-2類。井戸枠転用。25は凹面広端部に布の端部が確認されるもので、両側縁に近い部分に幅1cm内外の紐によるとみられる分割突帯が観察される。外面の格子目は平行に並べられて叩かれており、叩きの消滅する部分はナデによって擦り消されている。側縁の形状はA1a。井戸枠転用。26はやや疎らに配置された格子叩き目の隙間はナデによって調整されている。完存しないため幅は特定できないが、側縁の傾斜がきわめて小さく狭端･広端の区別がつかない。図の右側の端部（狭端部か）は簡素なナデで終わるが、左側の端部は強いヘラケズリが施される。凹面の推定狭端部側に強めのナデが施され、布目が消滅している。井戸枠転用。27は厚さ1.7cm内外と薄く作られた資料で、26と同様に広狭端部の区別がつきにくい。叩き方をみると図の左側が狭端部である可能性が高い。井戸枠転用。

丸瓦（28～74）　28･29は凸面の叩き目が明らかでない資料であるが、いずれも回転ヘラケズリ（または強めの回転ナデ）によってきれいに擦り消されたものと考えられる。また28の凹面には粘土紐の痕跡が明瞭に残り、一本の幅は2～3.5cmで、丸瓦本体部分では11～12本分が確認できる。裏込土出土。29の凹面では分割突帯が確認できるが、模骨の玉縁部の段差部分と玉縁の先端には存在しない。また個体の中央部に太さ6㎜程度の抜き縄が垂れ下がっているのがわかる。細部の観察結果では大半が模骨に被せられた布の外側を通るようであるが、くびれ部付近から玉縁部にかけては布の内側を通っていたようである。井戸枠転用。

30～32は縄叩き目を有する資料でいずれも井戸枠に転用されていたものである。いずれもか

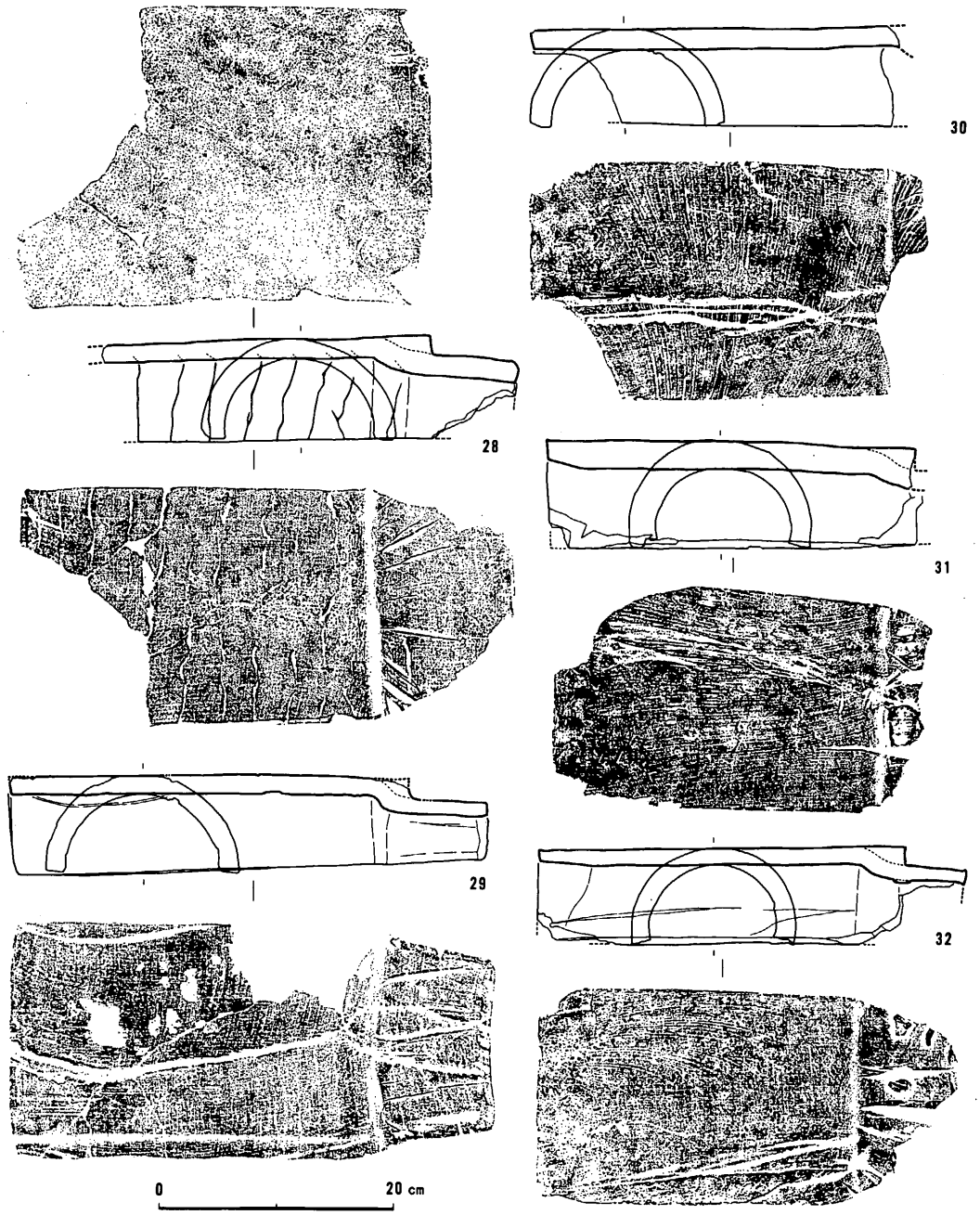


Fig.148　68SE020出土丸瓦実測図・拓影１（1/6）

なり丁寧に擦り消されており、辛うじて縄目が観察出来る程度であるが、凹面には様々な情報が残されている。30の模骨に被る布は布Bの2dとされる重ね方で、その重ね目には中央付近以下に隙間があり、模骨面が写されている。そこには抜き縄痕とみられる太さ1.5㎜の紐が垂れ下がっており、布が重なる部分から玉縁部分にかけては布の内側を紐が通過している。布重ね目の縫い目痕はダーツ状で、MSrIとされるものとみられる。また側縁から側縁に抜ける糸切り痕

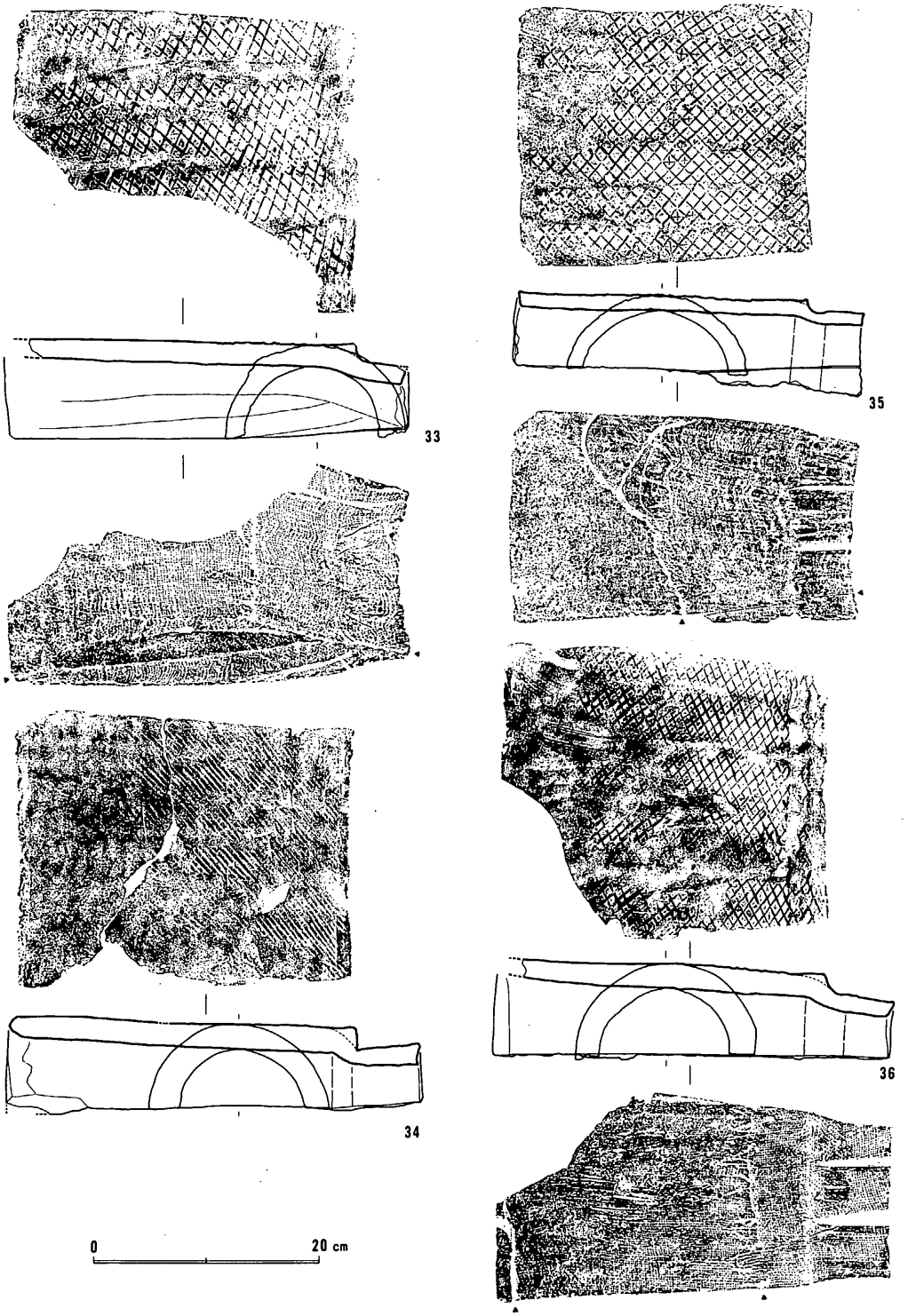


Fig.149　68SE020出土丸瓦実測図・拓影２（1/6）

も明瞭である。31では中央に抜き縄と見られる紐が観察され、くびれ部付近で布に縫い付けられていたようである。32は30と同様に布Bの2dとされる重ね方で、その重ね目にはくびれ部付

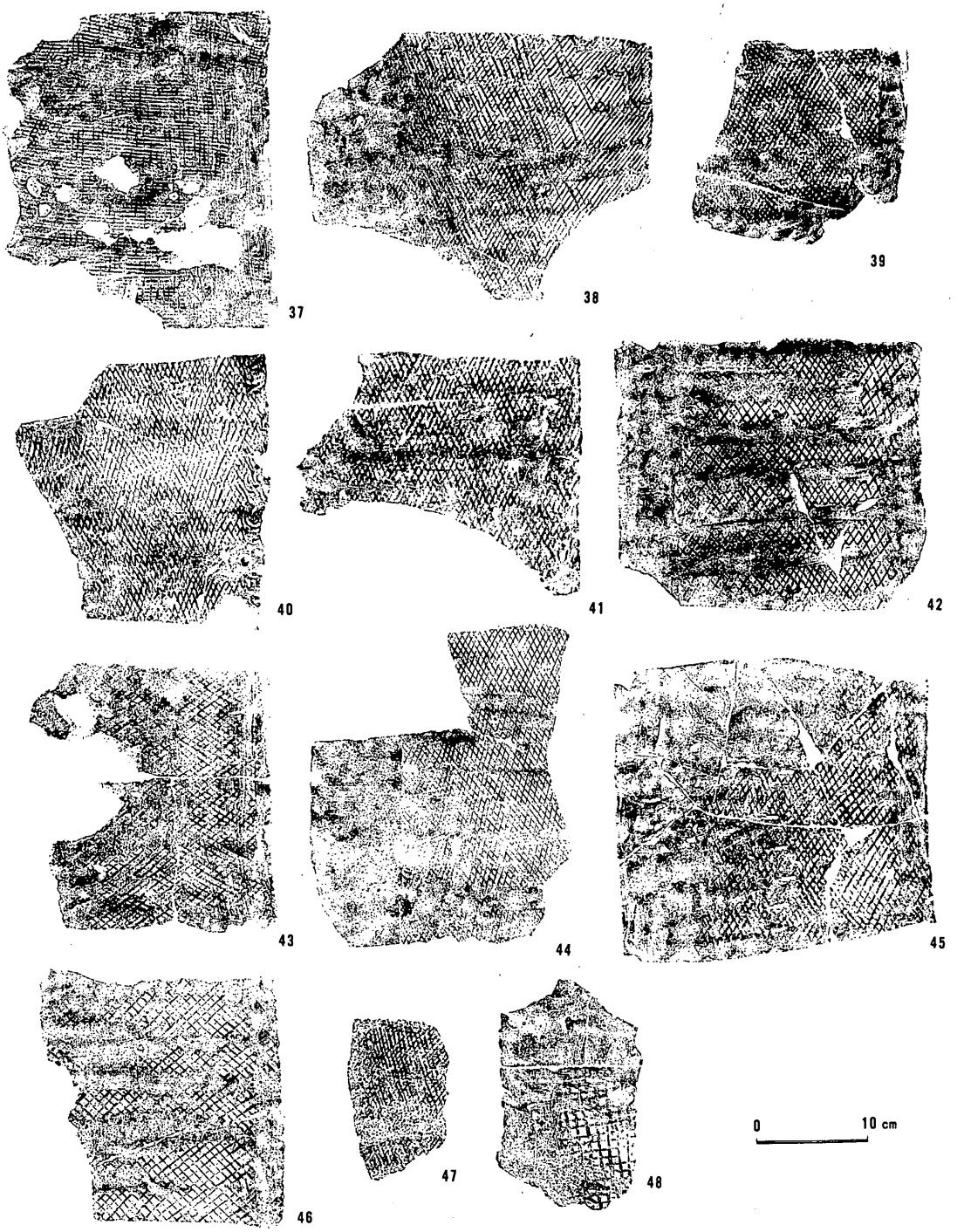


Fig.150　68SE020出土丸瓦実測図・拓影３（1/6）

近より広端部側に隙間があり、模骨面が写されている。この重ね目に隣接して、抜き縄痕とみられる太さ２～３㎜の紐が垂れ下がっており、基本的には布の内側を通過している。玉縁内側に剝離した粘土が付着している。

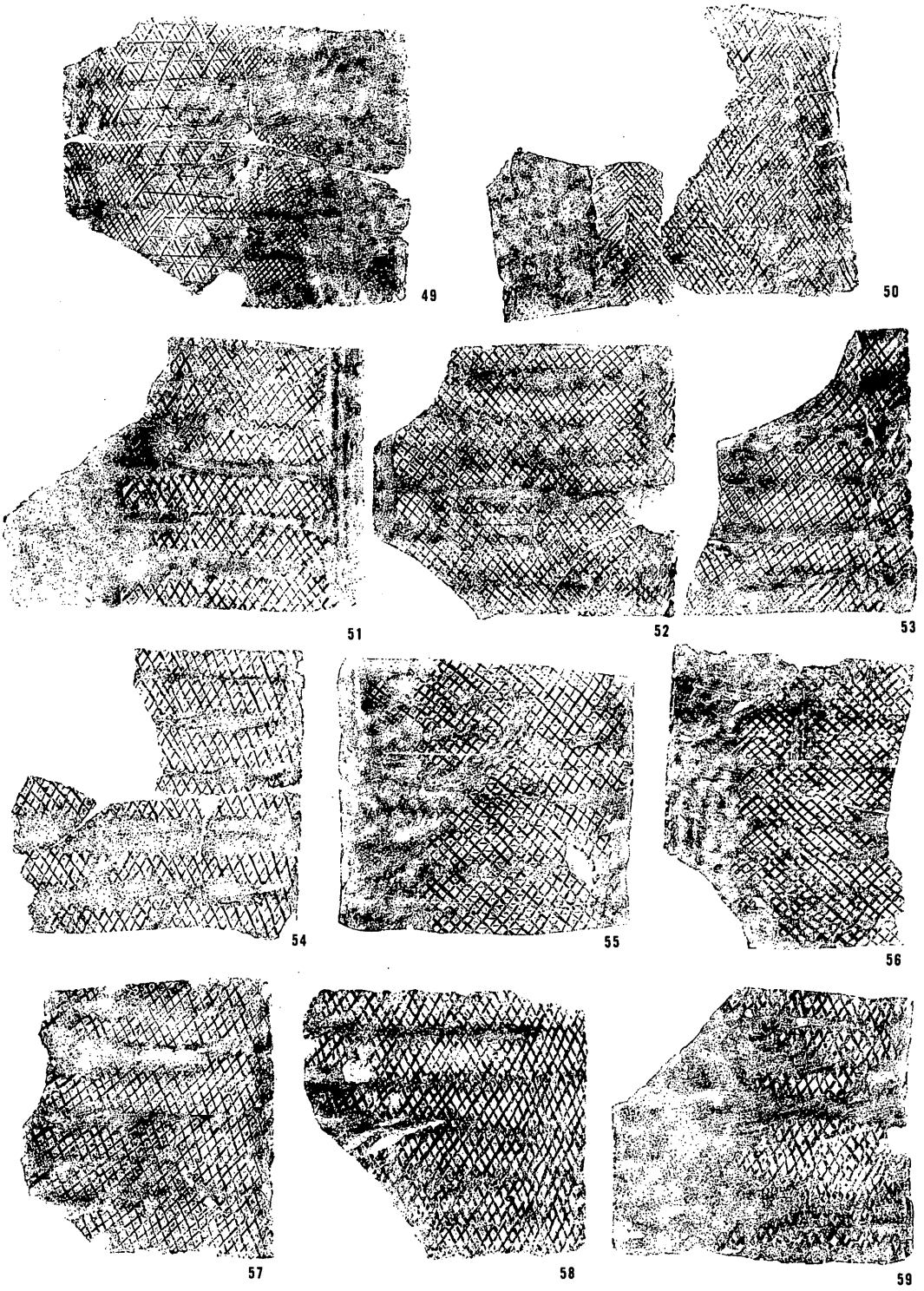


Fig.151　68SE020出土丸瓦実測図・拓影４　(1/6)

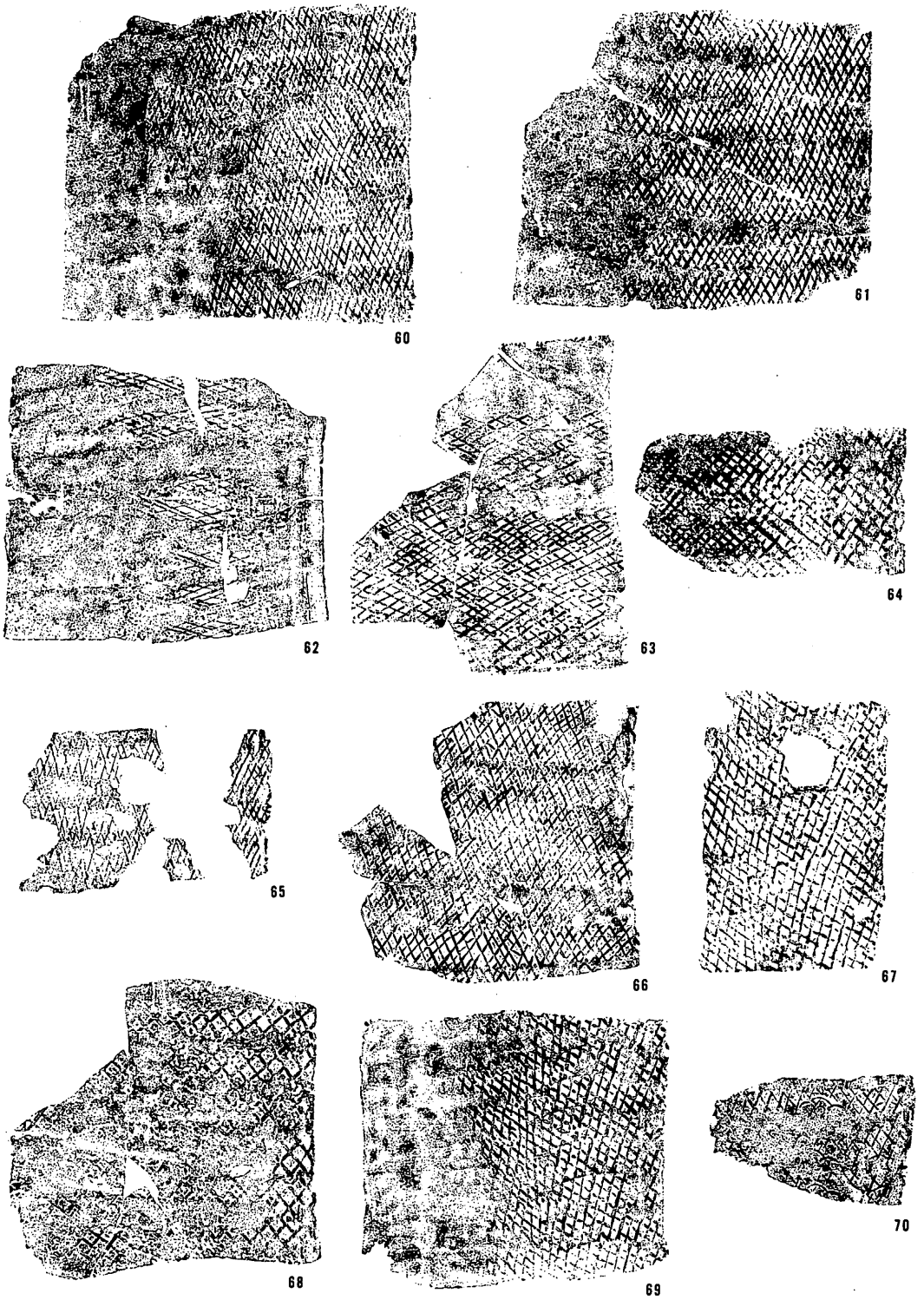


Fig.152　68SE020出土丸瓦実測図・拓影５　(1/6)

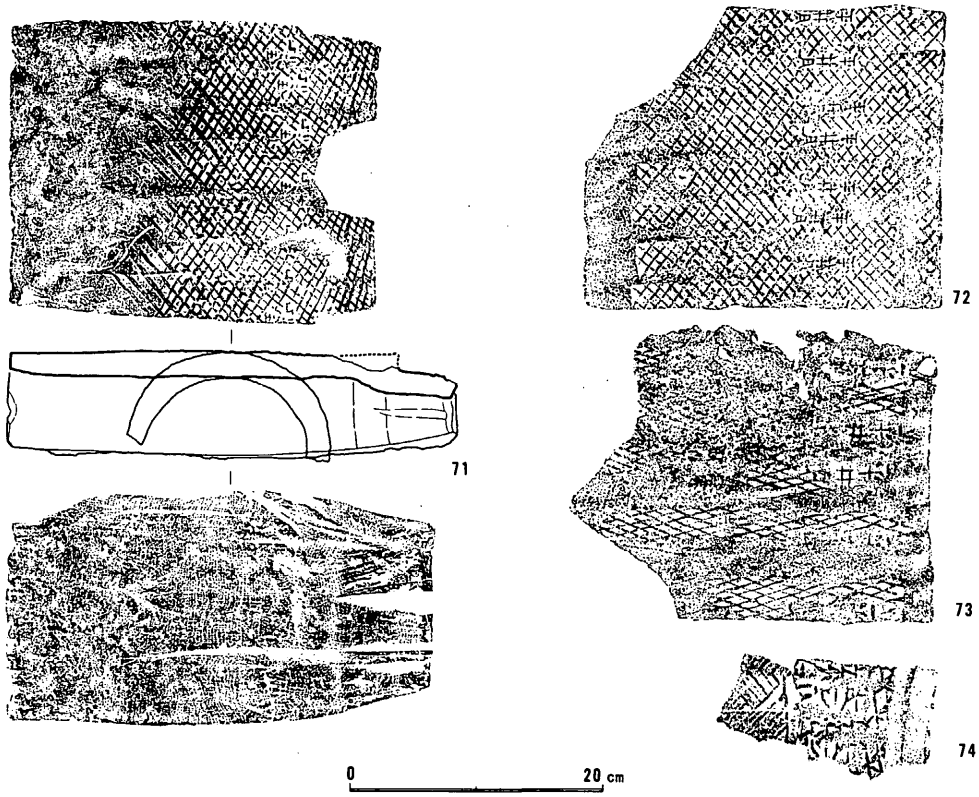


Fig.153　68SE020出土丸瓦実測図・拓影6　(1/6)

33・35～70は格子叩き目の資料で、整然と配置された叩き目の接する部分はナデによって擦り消されるものが多い。33は布Bで布の重ね目は2dとされるタイプである。玉縁先端から13cm付近に布の継ぎ目がある。裏込土出土。35は体部中程に布の継ぎ目が観察されるとともに、抜き縄とみられる紐が横方向に走っている。井戸枠転用。36は布の継ぎ目が明瞭で、解れた糸が垂れ下がっている様子が窺える。また布の端部が広端部側に観察できる。井戸枠転用。37～41は細かな格子目で、40の端部には巴の尾が並んだような文様が配されている。41も同じものである可能性があるが、文様部分はほとんど見えない。37・38・40は井戸枠転用、39・41は暗茶色土層出土。42～44・46・48・49・51～53・55～61・65～69は井戸枠転用、45・63は裏込土出土、47は灰色砂

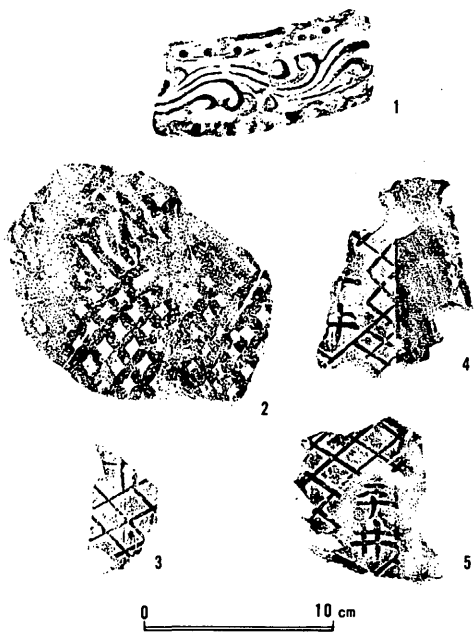


Fig.154　その他の地点出土瓦拓影　(1/4)

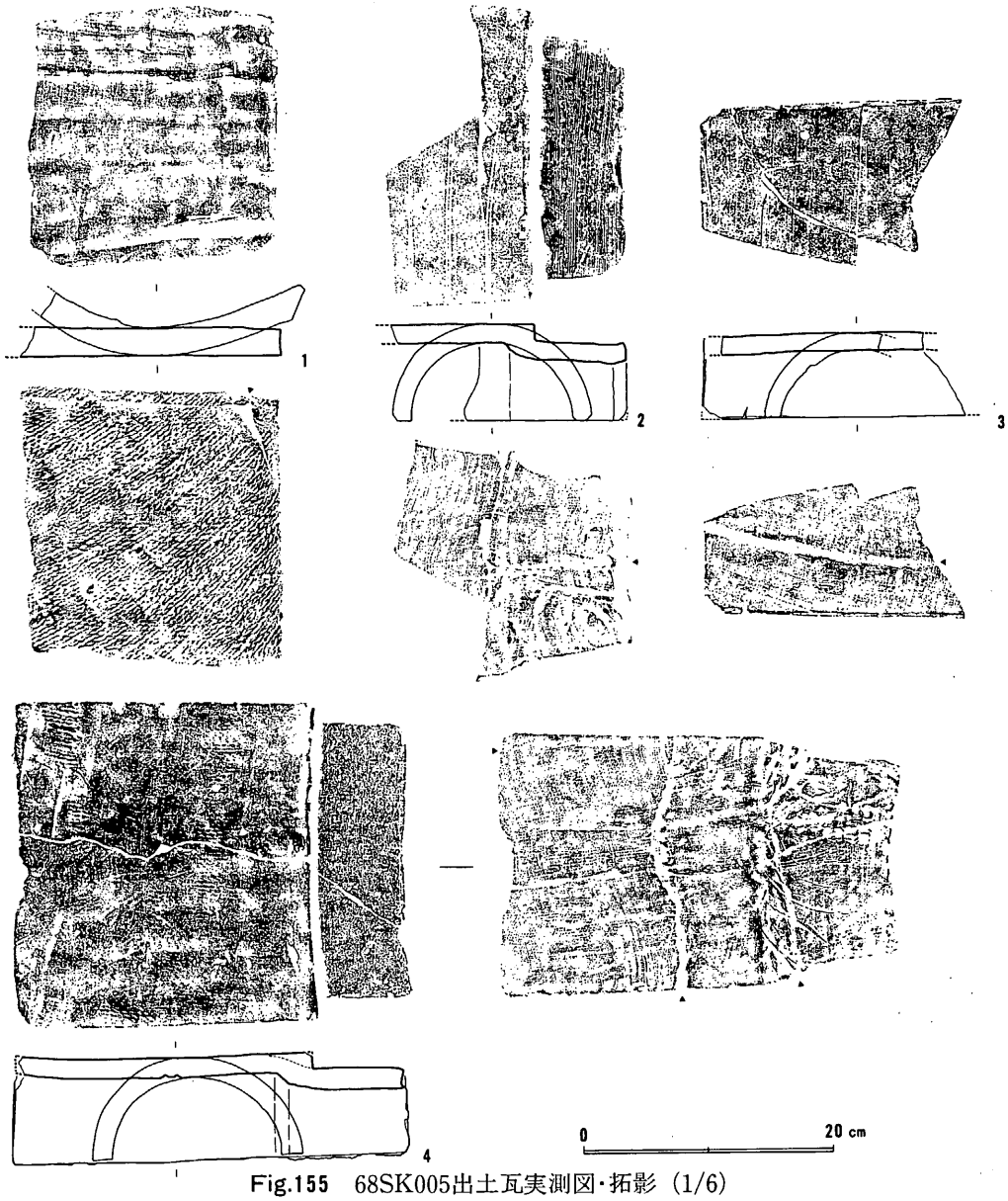


Fig.155　68SK005出土瓦実測図・拓影（1/6）

層出土、50は暗茶色土層出土、54・62は埋土中出土。70は格子叩き目の中程に雲形状の突線による文様を配するもので、裏込土出土。

34は平行叩き目で約45°ほど傾斜している。井戸枠転用。

71～74は格子叩き目に文字を記載したいわゆる文字瓦で、71～73は井戸枠に転用されていたものである。71は「四王」でXVIII類。整然と並べられた叩き目が明瞭であるが、広端部側の約半分は擦り消されている。72は「平井瓦」の左字でI-3類、73も「平井瓦」の左字でI-4類である。74は「□□瓦」（XI類）と記す文字瓦で、文字は左字と考えられるが上の二文字は判読できない。ただ格子目は「佐」と記す文字瓦に類似のものである。暗茶色土層出土。

68SK005出土瓦(Fig.155、CD-068385～388)

平瓦(1)　凸面の縄叩き目は円弧を描き、狭端部側に凹型台の痕跡がみられ、縄目も随所で押圧されている。凹面は簡素なナデで擦り消され情報が失われるが模骨痕は明瞭であり、粘土板の重ね目(Sタイプ)も確認できる。側縁はケズリによって整形され、形状はB2bである。暗茶色土層中から出土した。

丸瓦(2～4)　2は玉縁部分の資料で、本体凸面は回転ヘラケズリ、玉縁部の凸面は刷毛状工具によるカキ目が残される。側縁は丁寧にヘラケズリされ、凹面には布の継ぎ目が観察される。3は凸面を回転ヘラケズリで成形し、側縁も丁寧に削りが加えられる。凹面には抜き縄が確認され、布の内側を通っていたことがわかる。4はほぼ完存する資料で、本体がきわめて短く寸詰まりな形状である。凸面は縄叩き目が確認されるが、大半をヨコナデによって擦り消している。玉縁部凸面もヨコナデである。側縁は切り離したままの状態で特別な調整は行われておらず、a1タイプである。凹面の観察から模骨に巻かれた布は上下3段に分かれており、それぞれを繋ぎ合わせている。布は玉縁部分にあるものが粗めで、さらに縦方向に縫い合わせている。中央の布は最も細かく、目が詰まっている。粘土板の重ね目もわずかに確認でき、Sタイプとみられる。2・3は茶灰色土層出土、4は暗茶色土層出土。

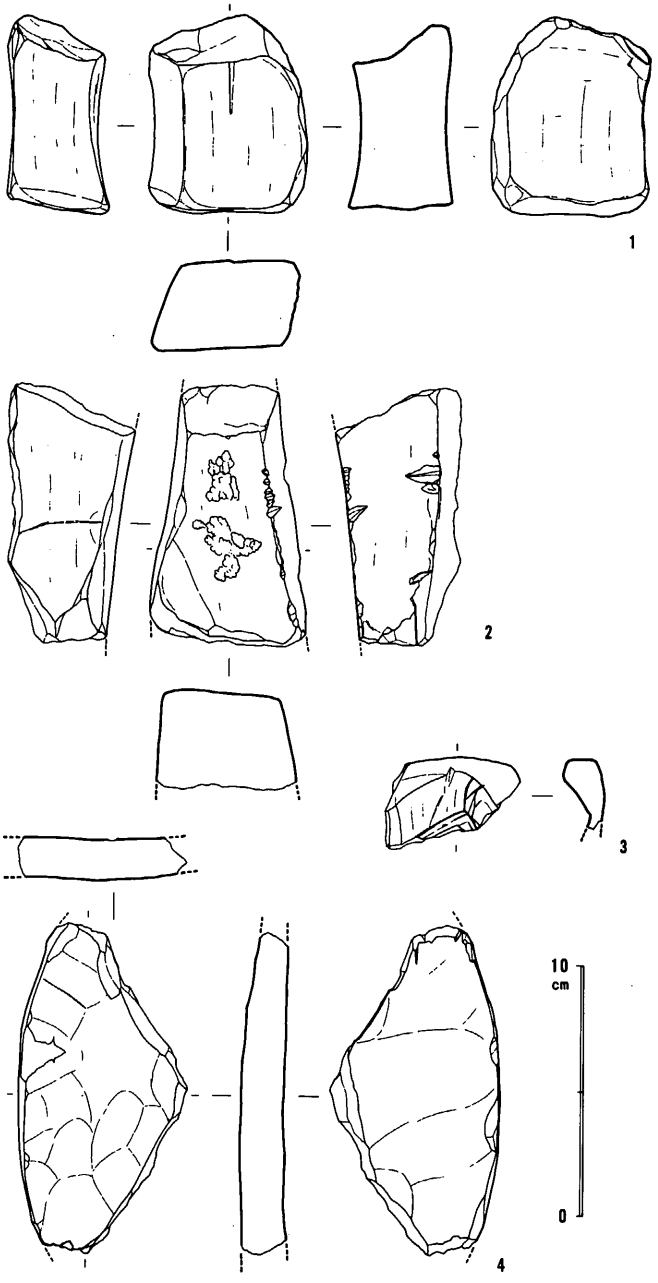


Fig.156　第68次調査出土石製品実測図(1/3)

その他の地点出土瓦(Fig.154)

軒平瓦(1)　偏行唐草文と推定され、老司Ⅰ式を意識した文様である。上外区は小粒で間隔が開く珠文帯、下外区は不明瞭ながら鋸歯文帯と推定している。68SX033出土。

文字瓦(2～5)　2は「佐」の左字でII-2類。3は「平井」とみられⅠ-8-a類であろう。4・5は「平井」でⅠ-7-a類。4は68SK028、5は暗灰色土層出土。

(4) 石器・石製品

(Fig.156・157、CD-068389～400)

砥石(1・2)　1は細粒砂岩製で、4面を使用する。68SK005暗茶色土層出土。2は細粒砂岩製で、3面を使用する。1面中央部に打剝痕があり、打ち台にも使用したらしい。

滑石加工品(3・4)　3は暗灰色土層出土。4は石鍋の加工品で、温石としていたらしい。68SX033出土。

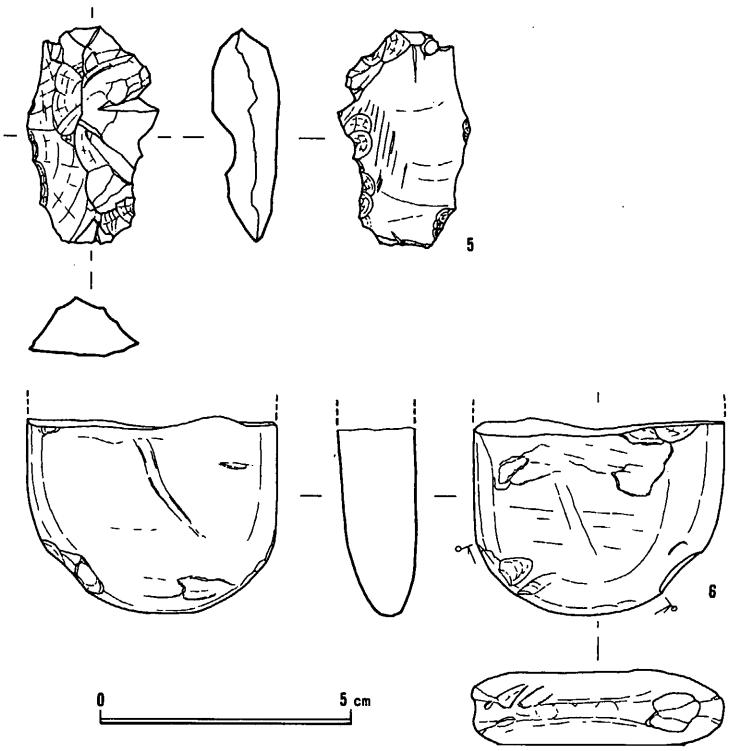


Fig.157　第68次調査出土石器実測図(2/3)

5は打面再生剝片とみられ黒曜石製で、68SE025裏込め土出土。6は擦り石の可能性が考えられる資料で黒色片岩製。側縁は研磨され先端は敲打痕跡がある。68SX001出土。

5．小　結

遺構面が大きく削平されていたようで、深い遺構のみが残存している状況であったが、奈良時代から平安時代にかけての井戸や土坑が確認されたことから、各時代の生活空間が存在していたことを窺わせるものである。なお、各遺構の年代については Tab. 5 に記載したのでそれを参照していただくとして、ここでは68SK005出土土器と68SE020出土瓦について若干の検討を行うことでまとめとしたい。

A) 豊後型甕の出土

1) はじめに

九州管内で生産された食器は、広域流通品の食器に比べまだ未解明な部分が多く残っている。先学等によって肥後産須恵器の出土等、概略的に取り上げられることはあったが、並行関係の解明等へと進展した研究はまだ途上の段階といえる。しかし近年の氾濫した発掘調査情報の整理によって次第に九州管内生産品の出土例が多くなってきている。先に薩摩国に分布中心を有する椀の出土を太宰府にて確認し報告した例（中島・城戸、1994）などは、実見情報によって抽出できた好例といえる。このような肥後産須恵器の九州管内での出土例をはじめとして、九州管内で生産された製品の確認は、地域間並行関係を求める際に有効となるばかりか、流通背景を考察しなければならないという課題を背負うことになる。後者の課題に関しては、文献史学等隣接諸科学の手立てを借りなければ、容易に解決できる課題ではない。ただ前者の課題に関しては、出土情報の提供によって十分解決できる課題である。この際注意を要することは、出土背景（歴史）を考慮して情報を歪曲するのではなく、出土情報から歴史を構築してゆく姿勢が重要である。

本稿では、筑前には分布中心のない稀な煮炊き具の出土が、本報告にてなされた条68SK005より確認できたため、この煮炊き具の生産地推定と太宰府での時間軸上での位置について考えてみたい。出土背景に関しては、言及する力量を持ち合わせていないことから、今後の課題とする。

2）資料概説

奈良時代の大宰府において一般的な土師器甕は、頸部を「く」字状に屈曲させ、内面ヘラ削り、外面ハケによる調整を行ったものが多く出土する（以下「一般的な土師器甕」と呼称する）。ただし形態や調整の方向において各種存在しており、同時期の多様性として理解されている。胎土の特徴も、花崗岩風化生成物を利用しているため、白色鉱物（石英、長石等）を混入鉱物とし、全体的に明るい色調のものが多い。このような中にあって、異質な土師器甕が極少数ながら見られる。この異質な土師器甕には、以下のような各属性を備えたもので、1→3へと向かうほど伝統的な土師器の技法というよりは、回転台を多様する須恵器の技法を有している。

a．形態は一般的な土師器甕と同様

1．外面ヘラ削り、内面ハケないしはヘラ削り調整（博多遺跡群63次 SK0465[1]）

2．外面叩きないしはカキ目調整、内面ヘラ削り調整（大宰府史跡147次 SD4037[2]）

3．外面叩き、内面当て具痕跡残存。頸部外面カキ目残存（大宰府条坊跡68次SK005茶灰色土）

一般的な土師器甕とは異質な形態を有するもので、1～3の調整属性を有する製品は、現在のところ確認できていない。

これら極少数しか存在しない土師器甕の出土傾向は、現在のところ九州管内の国府所在地ないしは推定地では、大宰府と同様の傾向にあり、あまりに資料数が少ないことから、他地域からの搬入品として処理してしまう場合が多い。この場合の解決方法の一つとして技法の面から

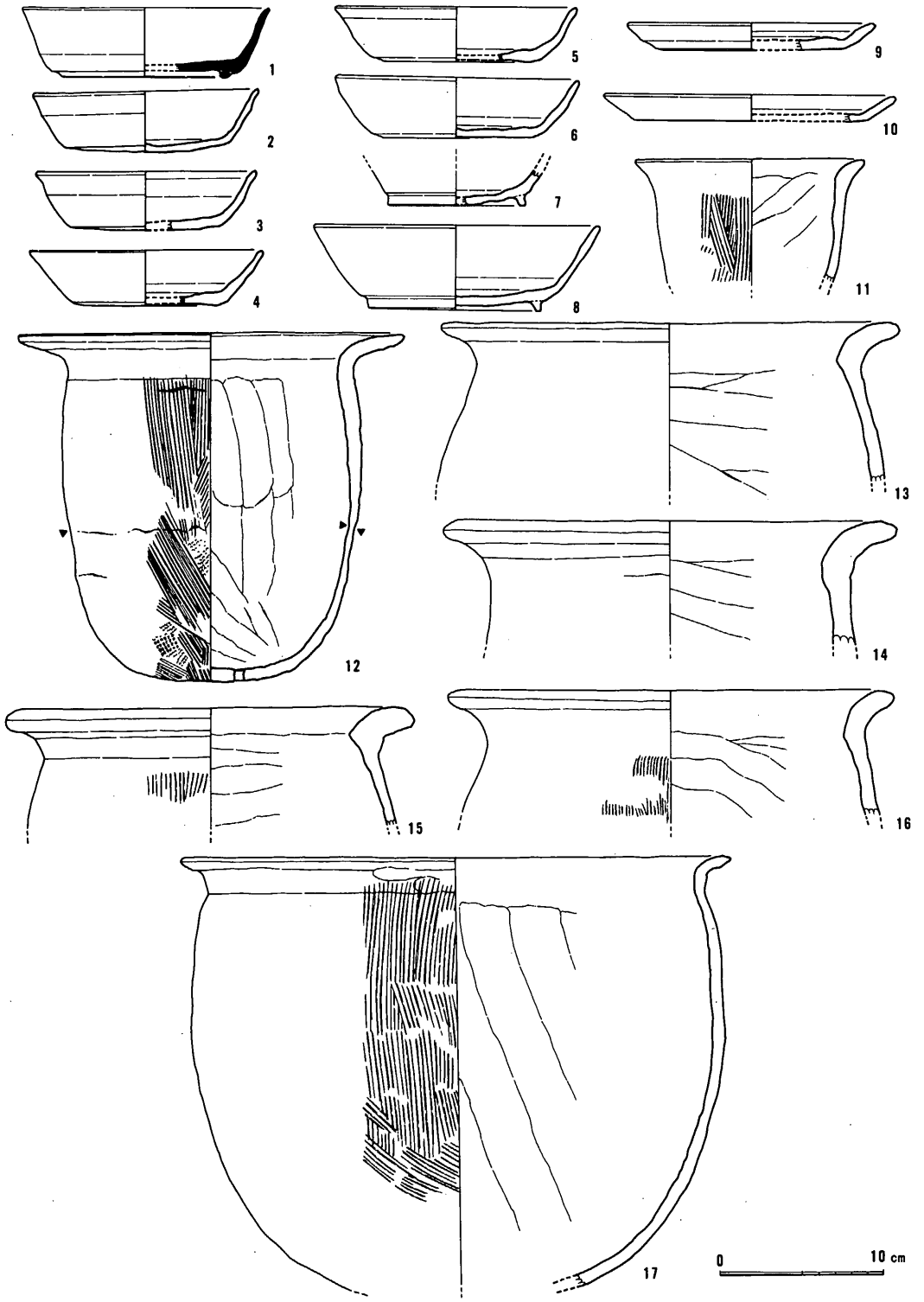


Fig.158　筑後国府跡第128次 SD4403出土資料（久留米市教委　1995より抽出、改変）

だけではなく胎土特徴から、検討できる可能性はある。今回報告した条68SK005茶灰色土出土の異質な土師器甕は、胎土の特徴が角閃石を多く含み、暗い色調を有している。塩基性岩の風化生成物によってつくられたものと考えられるが、太宰府周辺は花崗岩風化生成物によって構成され、酸性岩の風化生成物である。したがって、太宰府在地ないしは周辺で生産されたものではない可能性が高い。また製作技法からも先述したように項目3に該当し、一般的な土師器甕とは大きく異なっている。同じ特徴を有する土師器甕の分布地が、生産地である可能性が高いと考えられる。

ところで、この異質な土師器甕の空間的な位置づけを検討する前に、時間軸上で位置について検討を加える。共伴した資料には、須恵器蓋・坏等の供膳具をはじめ製塩土器などの特殊な資料も含まれている。出土状況は廃棄による埋没であると考えられるが、全て破片による出土であることから、土壙周辺に散在ないしは不要品として蓄積されていた破片類が廃棄されたものと考えられる。したがって廃棄の共時性は高いが、使用の共時性については必ずしも高いとは言えない可能性がある。特に甕については、破片化が著しい傾向にあり、土壙周辺に散在したゴミの混入である可能性がある(3)。廃棄のみの共時性が認定できるが、出土資料群の様相から導き出される時間軸上での位置づけによって、その位置づけられた時間以前の遺物が混入したことが想定できる。したがって使用の共時性という認定条件に欠けているが、時間軸への位置づけには、主体を占める型式の複合状況から導き出し、補足的に稀少型式を取り上げ検討する。

68SK005茶灰色土出土資料は、須恵器の出土傾向が低く、土師器煮沸具の出土が顕著である。稀少な須恵器には、蓋・坏・壺蓋・鉢があり、いずれも切り放し後の処理が丁寧になされている。また蓋のつまみは扁平な形状を有し、坏の底部から体部への移行状況は丸い。したがって須恵器は奈良時代前半（大宰府II期＜III期）に位置づけることが可能であろう。土師器の供膳具についても同様な傾向にあり、特に皿・坏類の底部から体部への移行が丸く仕上げられる特徴を有している。したがって須恵器と同様の時期が想定できる。よって68SK005茶灰色土の埋没時期は、大宰府II期＜III期が考えられ、実年代をあえて記載すると8世紀第II四半期頃が考えられる。

3）生産地推定

胎土の面から角閃石を顕著に含むという特徴を有していることは既に述べた。この角閃石が風化生成物中に残存する可能性は、角閃石自体が風化に弱いため、母岩である岩石に顕著に含まれないと残存する確率は低くなる。この角閃石を顕著に含む土師器甕は、現在のところ九州管内では豊後国と筑後国北部に見られる。筑後国北部についても、特に筑後国府周辺において顕著に見ることができる。したがって、太宰府で出土した異質な甕の生産地はこの両国のどちらかということになるが、筆者自身も九州管内の土師器甕を全て実見したわけではないため、可能性にとどめておく。次に製作技法から見ると、筑後国の土師器甕は、太宰府で出土する一般的な土師器甕同様に、内面ヘラ削り、外面ハケによる器面調整を行っている。頸部内面の屈

曲具合が削りの位置関係から太宰府のものよりルーズさが看取できるが、アナログ的には同じ印象を受ける。ただし、異質な土師器甕（項目２）として取り上げたもの（Fig.158-12）が１点ではあるが出土しており、この資料の出自については今後の検討課題となる。さて同様の胎土を有している豊後国の資料であるが、豊後での一般的な土師器甕は、やはり太宰府と同様な甕が使用されている。しかし豊後国の状況が不明瞭なため、客観的な情報を提示できないが、68SK005茶灰色土から出土した資料と同一属性を有する資料が大分市下郡遺跡SK15およびSK22から出土している(4)。これらの資料と同様な資料については、大分平野に顕著に出土しているということであり(5)、現状では豊後国中部から搬入されたものと考えるのが蓋然性が高い。この地域では須恵器の消費があまり顕著ではないとされており、須恵器の技法をもつこの土師器甕の出自を考える上で、工人の移動（融合）を考慮する必要も考えられる。

４）まとめ

九州管内における総括的な土師器甕の地域型についての検討は、山本・中村（1996）によって提示されたが、今後分布や時間軸上での変化の詳細な検討が必要になってくる。食卓に上ることない煮沸具は、地域の人間像を如実に表現してくれる。特に今回記述しなかったが、「薩摩」型の甕は、九州管内の他地域の甕とは全く形状の異なった古式土師器的様相を呈している。これら地域型の背景を考察してはじめて「律令」体制の実態に迫ることができると考えている。

九州管内にて生産された土師器甕は、筑前にて一般的に出土する甕と同様な製作技法で生産されたものであり、細部において若干の違いが見い出せる程度で大きな差はないといえる。このような中において先述してきたように極少数ないしは客体的に異質な土師器甕が見受けられる。筑前内においても同様で、今回取り上げた土師器甕のように回転台を多用したもの、叩きによって調整したもの等、須恵器に一般的な技法が用いられている甕が稀に見られる。太宰府における出土例は、以下に示すとおり２例しかない。また内外面の技法が逆転したかのような甕（項目１）も筑前国内において存在しており、これら異質な土師器甕の意味するものは何かが検討課題として残る。今回の土師器甕については、生産地の違いの可能性が高く、筑前内における生産体制にまで言及できるものではないが、大宰府史跡147次SD4037出土土師器甕のようにカキ目が確認できる例があり、背景として須恵器の技法が想定できる。実際に牛頸窯跡群内からの出土例がなく即断できないものの、大宰府II期以降の技術融合を物語る回転台土師器生産に関連した一事象と捉えることも可能である(6)。大宰府史跡94次SD2680下層および筑後国府跡128次SD4403(7)でも出土例があり、内面は土師器甕に一般的なヘラ削りによって調整されており、技法の融合が見られる点で、他の回転台多用の土師器甕とは異なっている。折衷型とでもいえる資料である。このように一般的な土師器甕から、筑後国府例のような折衷型、さらに全く異質な回転台および叩き多用の甕など煮沸具である甕にも多様な状況が看取できる。しかし折衷型以降の土師器甕は各地域においては客体的な存在でしかなく、一般化までには至っていない。これら客体的な甕の成立背景は、土師器工人と須恵器工人相互の融合を物語ってい

るのかもしれない。この融合[8]を引き起こした原因については、食器の生産体制全般にわたる考察が必要となってくる。

課題のみを列記してきたが、今回報告した叩きのある甕は、胎土の特徴および製作技法の特徴から豊後国中部から持ち込まれた可能性が高い。また共伴した大宰府在地の食器相から、大宰府II期からIII期（大宰府II期＜III期）のある時期に廃棄されたものと考えられる。したがって豊後南部の食器相との相対的位置づけを考える上において有効な資料群となる。今回の豊後型甕や豊前型土師器坏など東九州からの搬入品が希少ながら太宰府においても見受けられる。このような九州管内で生産された製品の出土例の確認と提示が相対的並行関係の足がかりとして重要な意味を持っていることは述べるまでもないであろう。これら基礎的な課題を検討し、実年代先行型の議論から相対的位置づけを立論背景とした食器相の議論が進むことを期待したい。

引用資料一覧（甕属性による項目番号）及び引用文献

博多遺跡群63次 SK0465（項目１）　福岡市教育委員会（1992）『博多　31』

大宰府史跡94次 SD2680下層（項目２）　九州歴史資料館（1986）『大宰府史跡　―昭和60年度発掘調査概報―』

大宰府史跡147次 SD4037（項目２）　九州歴史資料館（1994）『大宰府史跡　―平成５年度発掘調査概報―』

筑後国府跡128次 SD4403（項目２）　久留米市教育委員会（1995）『筑後国府跡』

神道遺跡７次 SK150（項目１）　久留米市教育委員会(1988)『東部土地区画整理事業関係埋蔵文化財調査報告書　第７集』

石塚遺跡Ｃ地点（肥後国池辺寺）（項目２）　熊本市教育委員会（1996）『池辺寺跡Ｉ』

中島恒次郎･城戸康利（1994）「薩摩国から来た食器」『中近世土器の基礎研究Ｘ』

註

1）筑後国神道遺跡７次 SK150からも同様の調整を有する甕が出土している。

2）大宰府史跡94次 SD2680下層、筑後国府跡128次 SD4403および石塚遺跡Ｃ地点（肥後国池辺寺）で出土例がある。

3）使用･廃棄の共時性については、別稿に記載。

4）塩地潤一･坪根伸也両氏（大分市教育委員会）の御配慮により資料実見の機会を得た。記して心より深く感謝いたします。

5）田中祐介（大分県教育委員会)･坪根伸也（大分市教育委員会）の両氏より御教示および資料実見に際し便宜を図っていただいた。記して深く感謝いたします。

6）中島恒次郎（1997）「７世紀の食器　―九州消費地―」『第５回シンポジウム　７世紀の土器』古代の土器研究会

7）白木守氏（久留米市教育委員会）の御配慮により実見および実測させていただいた。記して深く謝意を表します。

筑後国府跡128次 SD4403出土資料は、実見、実測の結果、外面下半に擬格子叩きを行ない、その後ハケによって器面調整を行なっている。内面は、「ヘラ削り」との報告がなされているが、指による小刻みなナデ上げによって調整されていた。内面には当て具の痕跡は確認できていない。外面の叩き痕跡が平坦面を形成していないことから、手の平を当て具にして小刻みに叩き上げた可能性もある。また口縁部内外面は、

丁寧なヨコナデによって仕上げられており、回転台調整としてもよい程の仕上がりを有している。体部中位よりやや下がった箇所(Fig.158-12、▲印)が全周に渡って凹んでおり、この部分で成形の異なった個体を接合した可能性がある。

8）融合という単語より、統合分離された結果と解する方が、考古事象を解釈する際には適語かもしれない。言葉の概念については詳細に検討したい。

B）68SE020出土の瓦について　—大宰府における平瓦一枚作りの普及—

1）はじめに

井戸枠として再利用[1]されていた瓦には軒丸瓦、軒平瓦を若干含むものの平瓦と丸瓦がその大半を占めていた。しかもそれらは完全な形状を留めるものを含み、半分程度以上残存している資料が大半であり、凹凸両面に残される様々な情報を収集し、検討することによって大宰府の瓦の一面を語ってくれるものと信じる。今回整理を行う機会を得て、瓦群から様々な情報を採集したが、平瓦において興味ある状況が判明したのでこの場を借りて報告しておく。

それは平瓦一枚作りの存在についてである。検討する前に大宰府の平瓦一枚作りについて、これまでの研究を簡単に整理し、問題点を明確にしておきたい。

2）北部九州における平瓦一枚作りの研究

九州における平瓦一枚作りの研究はあまり進展しているとは言えない。このことについて最初に述べたのは佐原真で[2]、九州には一枚作り平瓦は存在しないとしている。その当時の資料からではこうした結論もいたしかたないものと言えるだろう。

その後長く九州には一枚作り平瓦はないものとして理解されていたが、1980年に五十川伸矢によって薩摩国分寺瓦窯とされる鶴峯1号瓦窯の出土品に一枚作りを見い出し[3]、その存在が認識され、1983年に至って亀田修一が九州管内の出土例を集成し、きわめて類例は乏しいがほぼ凡九州的に事例が認められることを指摘した[4]。そのなかで概ね8世紀中頃から後半にその技術の流入があったとし、官との関係が窺えることから国分寺造営を契機として技術が導入されたと結論づけたのである。ここにおいて九州に一枚作り平瓦の存在することは多くの研究者が認めるところとなった。

その後、若干の事例が増加し、1990年には天台寺跡の事例が報告され[5]、同年に栗原和彦が一枚作り平瓦について詳細な検討を行うに至った[6]。栗原によるとその段階での事例は九州管内で14例の報告があるとされ、技法の畿内からの移入は宇佐弥勒寺の造営を契機とすると考えた。さらに九州内への普及については現状での事例と『続日本紀』の記載などから国分寺の造営をその要因と考えた。しかしその普及率は低く、平安時代になって再び九州では桶巻作りが主流を占めることから、生産の主体は桶巻作りであり、一枚作りはその補足的な存在でしかなく恭仁宮のC形式の例から大宰府系官窯のものではないと考え、基本的には大宰府では一枚作りは行われなかったと考えている。

こうした意見はこれまで研究者の間で広く認識されていたものであるが、今回提示する資料

はある一定程度の量が大宰府に安定して供給されていたことを窺わせるものであり、重要な所見を提示しているものと考え、以下にその概要を記す。

3）出土瓦の分析

平瓦が、一枚作りで製作されたかどうかを1個体で特定することはきわめて難しい。そこで平瓦が一枚作りであるかどうかを特定するための条件を列記してみた。

a) 側縁部の成形が円弧の中心を向かない（垂直方向にカット）。
b) 分割突帯がない（桶巻作りでは左右に半分ずつ、またはどちらかに一個）。
c) 模骨痕が観察されない。
d) 糸切りの方向が縦方向または縦に近い斜め方向。
e) 縄叩きが円弧を描かない。
f) 粘土板の継ぎ目が観察されない（通常4枚に1枚の割で入っているはず）。
g) 布の継ぎ合わせ目がない。または横方向しかない。
h) 布の端部が側縁部分に観察される（縦方向）。
i) 布が中央付近で引っ張られた痕跡がある。
j) 凹（凸）面の円弧が大きい（計測値r1・r2）。または円を形成しない。
k) 厚さが部位で異なる（均一に叩かれるが縁の粘土が中央に寄って厚くなる）。

などである。

このうち、h)の条件が包含されておれば、それはその個体が一枚作りであると特定できそうであるが、そのような資料にはなかなかお目にかかれない。今回の資料ではR-164がこれに該当するとみられるがわずかに1点である。

さて、これらのほとんどが1枚の瓦中に観察された場合は、その個体が一枚作りであるとほぼ特定することができるであろう。ただ、そのすべてを満足のいく状態で満たしているものは皆無に近い。そこで今回は、個々の瓦では以上のデータすべてが完備されないものの、相当数の瓦がこの内のいくつかの要素を備えていると推定されたため、すべての個体を観察することにより、それらが一枚作りの条件にどの程度見合っているかを検討した。

瓦は個体別にカード化を行い、検討したことは前章で詳述した。その結果を付表2に掲載したのでそれを参照しつつ解説してゆきたい。なお今回検討する瓦は転用品であるため時代の異なる資料が混在していることから、一枚作りについて検討するのは主として縄叩き目を残す資料であることを付記しておきたい。

さて上記した条件のうち、数量的に把握することによって解決する部分がいくつかあることに気付く。それはb)、f)、g）である。

まずb)から見てみよう。分割突帯はその形状には様々なものがあるものの、上記したように桶巻作りでは左右に半分ずつ、またはどちらかに一個が観察されることとなる。桶から外し切断後に側縁を垂直方向に大きく削り取ってしまう場合はその残存率は悪くなるが、通常では残

されたままであることが一般的である。今回の資料は側縁の切断方向が垂直である点で残存率が悪いと考えなければならない部類に属するが、表に示すように縄目叩きを有する資料で分割突帯が確認できたのはわずかに1点であった。

次にf)の条件を検証してみる。これも桶巻作りであるならば3～4枚に1枚の割合で粘土板の重ね目が確認されるはずである。大きな擦り消しを行わない限り、これは必ず残存するものであり、布目が凹面に残る資料では確実に観察されていいはずである。しかし今回の資料では皆無に等しく、わずか3点が確認できただけである。縄叩き目を有する瓦の観察総数が70点であることから、桶巻作りにおける出現頻度には到底近づかない。

布の継ぎ目を視点にしたg)では桶巻作りの場合、1枚の布が桶を一周するものとすればf)と全く同じ頻度で出現するはずである。しかし縦方向のものに限定すれば3～4例がほぼ特定できるという程度であり、粘土板の重ね目同様にその出現頻度はきわめて低いものと言わざるを得ない。

以上の観点で今回整理した平瓦の多くが一枚作りで製作された可能性が強くなってきたと言えそうである。では逆に桶巻作りと特定できる資料を抽出し、その条件と上記の条件を比較してみることとする。

桶巻作りと考えられる資料は上記の条件とは逆のもので、粘土板の重ね目のある資料、縦方向の布の継ぎ目がある資料ということになる。これらの条件に該当した瓦は数例であるが、これらの観察結果を表の横列に見てゆくと、R-134では縄種類とした叩きの方向が円弧を描き、分割突帯も観察される。さらに模骨痕も観察され、桶巻作りであることは確実であろう。R-161でも粘土板重ね目、布の継ぎ目、縄種類が円弧であるうえに模骨痕が観察され、分割突帯は観察されないが桶巻作りの条件は十分に満たしているであろう。

しかし桶巻作りとて数枚に1枚の割合で出現する条件をすべて満たす確率は低く、桶巻作りに考えられるデータを有する資料を追加して見てみると、切断面が円弧の中心を向いているA2aが6例、叩きが円弧を示す例が先の2例を含めて5例、模骨痕のあるものは軒平瓦1例を加えても6例である。これらを仮に桶巻作りであると仮定して他の共通項を探すと、切断面の形状がA2a以外にB3aもそれに該当する可能性のあることが指摘できる。これらを含めると70資料のうち17点が桶巻作りの可能性が高い資料となる。先の粘土板重ね目の残存率及び布の縦方向の継ぎ目の出現率は17÷3≒5.67となり、未だその数値は高いがその出現頻度は、かなり近い数値になっていると言えよう。

こうなるとやはり残る53点の縄叩き目平瓦は、先に提示した一枚作りの条件のほうに見合うデータを提示していることになり、今回検出した縄叩き目平瓦の多くは一枚作りで製作されたものと推定できるのではないだろうか。

このように、一枚作り平瓦は上記した所見を個別に検討することで若干の個体識別がなされてきたが、ここに示したような数量的な検討を行うことによって、より実態に近い一枚作り平

瓦の導入が明らかにできることは確実といえるだろう。

4）まとめ

今回検討した瓦の年代は井戸出土土器から10世紀中頃前後を下ることはないとみられるが、過去の成果を含めると格子叩きはこれにきわめて近しい時期のものであるが、縄叩き目のものは奈良時代のものと考えていい資料であろう。個別の詳細な年代観は現状では示せないが、奈良時代のある段階では大宰府における瓦製作の中に一枚作りの技法が主流を占めていた時代が存在したことを肯定できるデータであると考えたい。

また、今回検出した一群の瓦は微量ながら混入している軒瓦形式から大宰府政庁を含めた官衙域の範囲から持ち込まれたものと考えられ、すべてが再利用品とみられるものである。今回検出した平瓦の比率は、縄叩き目桶巻作り：一枚作り：格子目桶巻作り＝17：53：36となる。これは瓦使用建物が廃絶した最終段階の様相を呈しているとみられるが、古い段階の桶巻作りはきわめて少なく、それに対して一枚作りと認識した瓦の比率は従来から論じられているような、桶巻作りの補足的なイメージを否定するものと言えよう。ここでは年代的な問題を論証することができないのは残念であるが、大宰府に相当量の一枚作り平瓦が存在したことだけは事実であり、九州にその技法が導入される契機はやはり大宰府政庁の建設あるいは周辺官衙の整備に起因するのではなかろうか。平城宮から「官」としてのルートを伝いながら導入されたとするならば、これ以上の要因を九州管内で見い出すのは難しいのではなかろうか。今後の瓦整理、特に大宰府政庁およびそれに付属する官衙域の整理の成果に期待したい。

なお未検討の格子叩き目の平瓦も粘土板重ね目や分割突帯は確実に存在し、切断面もA1aであり桶巻作りで製作されたことは確実と思われるが、模骨痕を残すものは1点も存在しない。また広端部、狭端部の区別が難しいなど従来の桶巻作りとは若干異なる技法を用いている可能性も考えられる。今後の課題としたい。さらに今回は、報告書作成という時間的な制約のなかでまとめたものであり、提示したデータ項目には必要でありながら不足しているものも数多い。今後時間の許す限り、補足することに努めたいと思う。

最後になったが、本稿を作成する契機は花谷浩氏に当該資料を実見していただき、多くのご助言を得たことに始まる。氏のご指導がなければ成立しなかった稿であることを記し、末尾ながら感謝申し上げる次第である。また西日本古瓦研究会の席上でこの概要を報告する機会を得、小田富士雄、武末純一、石松好雄、栗原和彦、高橋章、亀田修一の各氏からご意見、ご教示をいただいた。併せて感謝申し上げる次第である。

（註）

(1) 再利用であることは次の点から確実である。まず風喰痕跡が明瞭なものが多く含まれており、特に縄目に多いこと。さらに軒平瓦裏面にベンガラが付着する資料があり、軒に確実に拭かれていたことを物語っている。以上の2点である。したがってここでは再利用と明記した。

(2) 佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻2号 1972年 日本考古学会
(3) 五十川伸矢「古代瓦生産の復原」『考古学メモワール』1980年 京都大学考古学メモワール編集委員会
(4) 亀田修一「九州地方の瓦窯」『仏教芸術』148号 1983年 毎日新聞社
(5) 石松好雄ほか『天台寺跡（上伊田廃寺）』1990年 田川市教育委員会
(6) 栗原和彦「九州における平瓦一枚作り」『研究論集』15 1990年 九州歴史資料館

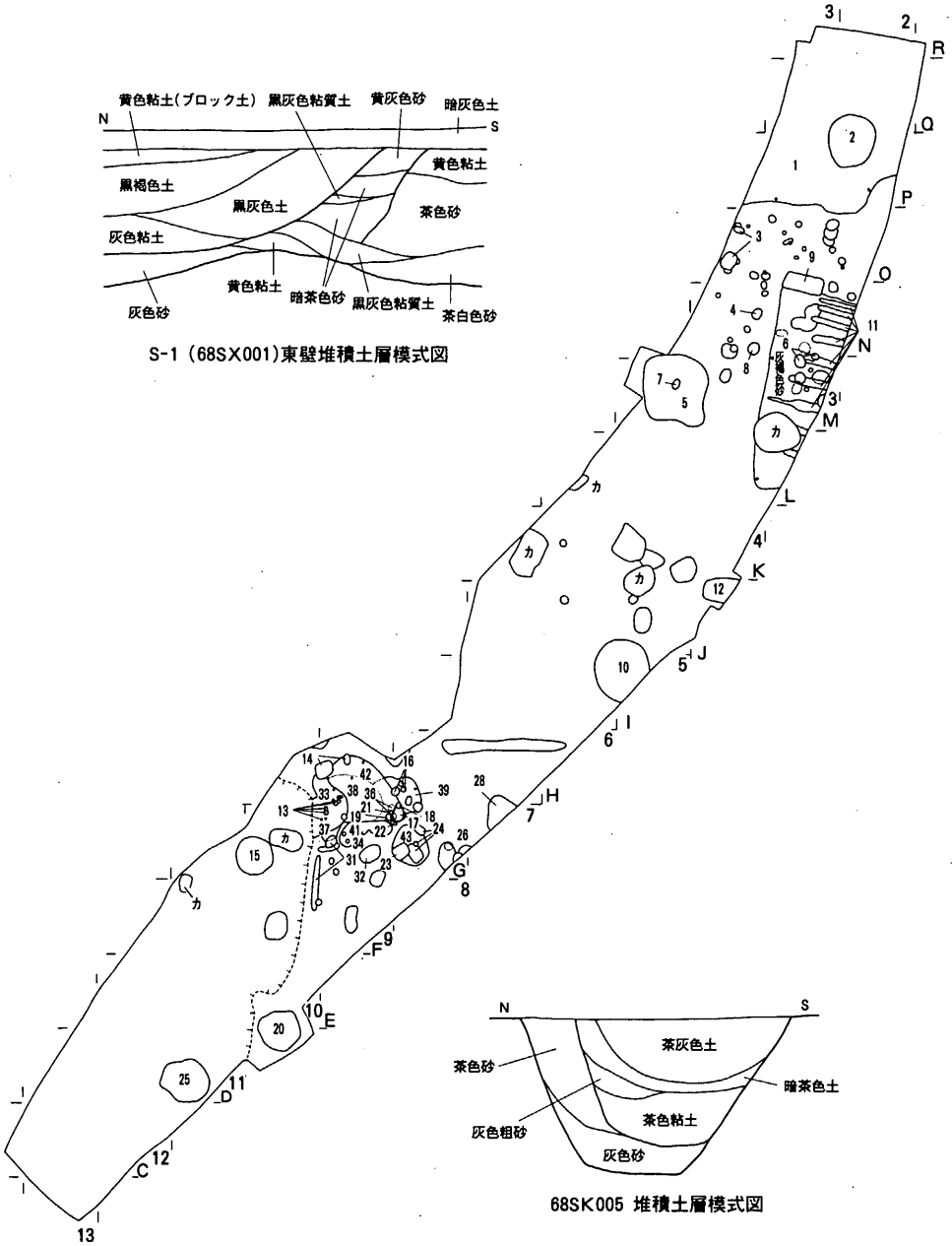


Fig.159 第68次調査遺構略測図及び68SX001・68SK005堆積土層模式図

Tab. 5　第68次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別			地区
1	68SX001	段落ち	河川の氾濫の一部か	XIII～	Q以北
2	68SE002	井戸		平安	PQ2
3		ピット		新	O4
4		ピット群			N4
5	68SK005	土坑	井戸の崩壊したものか	II・III	M4・5
6		ピット群		近世～	M3
7		ピット	5→7		M5
8		ピット			N4
9		土坑		平安	ON3
10	68SE010	井戸		XII	I5
11		溝状の撹乱		新	MN3
12	68SK012	土坑		X	J4
13		ピット群	黒色土埋土	平安	G9
14		ピット群	黒色土埋土		H9
15	68SE015	井戸		XII	G10
16		ピット群	黒色土埋土	平安	H8・9
17		ピット	黒色土埋土	平安	G9
18		ピット	黒色土埋土	平安	H9
19		ピット	黒色土埋土	平安	G9
20	68SE020	井戸	瓦積み	VIII～IX	DE10
21		ピット	黒色土埋土	平安	G9
22		ピット	黒色土埋土	平安	G9
23		窪み状	黒色土埋土	平安	G8
24		ピット群	黒色土埋土	平安	G8
25	68SE025	井戸		X	D11・12
26		ピット群	黒色土埋土	平安	G8
27		ピット	黒色土埋土	平安	G9
28	68SK028	土坑		XII	G7
29		ピット		中世	F8
30	欠番				
31		ピット群		平安	FG9・10
32		ピット		平安	G9
33	68SX033	窪み状	68SX033の最上層、37～42は埋土の違いで分割	平安	H9
34		ピット群		平安	G9
35	欠番				
36		ピット群		平安	G8
37	(68SX033)	窪み状	明茶色粘土埋土　37→33	平安	H9
38	(68SX033)	窪み状	暗灰色土埋土　41・42→39→38→33	平安	H9
39	(68SX033)	窪み状	淡灰色土埋土　41・42→39→38→33	平安	H9
40	欠番				
41	(68SX033)	窪み状	灰色土　41・42→39→38→33	平安	H9
42	(68SX033)	窪み状	茶色土　41・42→39→38→33	平安	H9
43		窪み状	43→23・24	平安	G8

(5) 第73次調査

1．はじめに

調査地は太宰府市大字太宰府字鼓石2574-1に所在する。調査原因は観世音寺土地区画整理事業に伴うもので、当該地は道路敷設部分にあたり、工事着手前に調査を行うこととなった。

現地での調査は昭和63(1988)年7月2日から7月12日まで行い、調査面積は93㎡で、山本信夫及び補助員の山田富美が担当した。整理作業は狭川真一が担当した。

2．層位など

表土を除去すると、盛り土以前の耕作土と思われる黒灰色土があり、その下に暗茶色土が堆積している。遺構はこの暗茶色土を除去すると検出されるが、遺構面を形成する地盤は暗茶色粘質土、黄灰色砂層であった。調査区の東側には黒茶色粘質土の堆積があり、調査区外に延びている。

3．検出遺構

(1) 井戸

73SE005(Fig161、CD-073003) 2.81×2.64mで略円形の掘り方を有する井戸である。検出段階で略方形の枠の痕跡と思われる暗茶色土の堆積を確認したが底までは続いておらず、さらにその周囲にあった暗褐色土を裏込め土とみたがこれも途中で消滅し、掘り方内中位から底近くには黒灰色土の堆積があった。それを除去すると0.84×0.91mで方形の枠の痕跡が見つかったが、枠は残存していなかった。枠の痕跡は深さ5cmほどで底になり、中央に直径約0.5m、深さ約0.1mの曲物を据えた痕跡を検出した。なお曲物痕跡底から検出面までの深さは1.47mを測る。

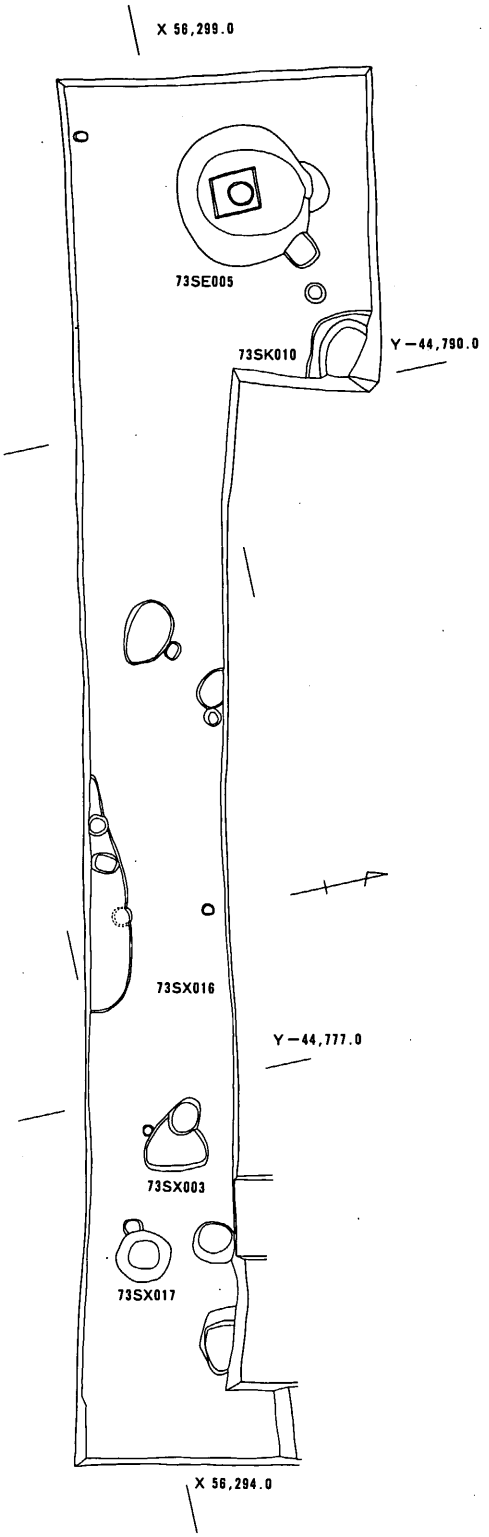


Fig.160 第73次調査遺構配置図(1/150)

(2) 土坑

73SK010　北及び東側が調査区の外に延びており全体の規模や形状は明らかではないが、略円形プランを有する土坑と考えた。土坑は2段になっており、全体の深さは0.76mである。

(3) その他の遺構

73SX003　1.23×1.17m、深さ0.12mで不整形のピットである。

73SX016　不整形な窪み状の遺構で、南側は調査区の外に延びている。検出長4.73m、深さ約0.1mを測る。

73SX017　直径1.04～1.10m、深さ約0.6mのピットである。

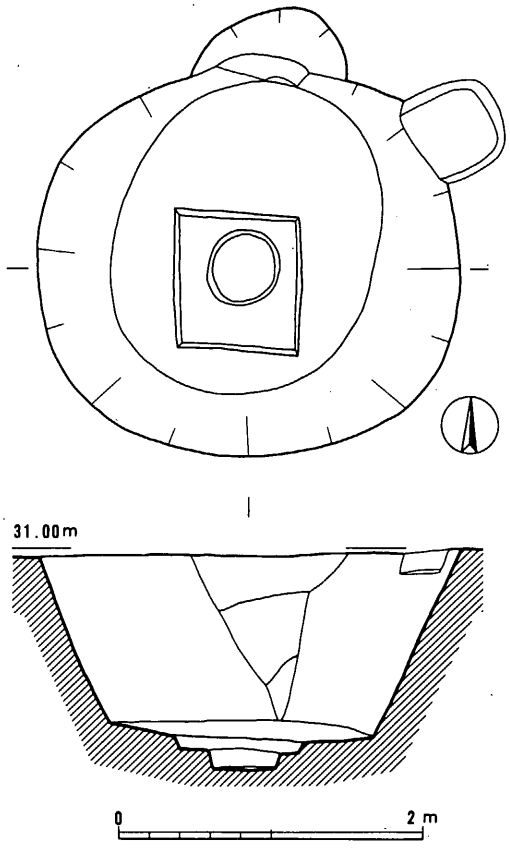


Fig.161　73SE005実測図（1/50）

4.　出土遺物

(1) 土器・陶磁器

73SE005暗茶色土層出土土器

（Fig.162、CD-073004～020）

土師器

小皿a（1～7）　口径9.8～10.1cm、器高1.2～1.85cm、底径6.6～7.7cmを測る。すべて底部はヘラ切りされ、板状圧痕が観察される。

丸底坏a（10～13）　口径14.6～15.6cm、器高2.9～3.6cmで、底部はヘラ切りされる。13の口縁部内面には油煙が付着している。

椀c（8）　高台径7.6cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が見られる。

小壺（9）　底径6.0cm。底部はヘラ切りののち粗いナデを施す。また内面底部には指圧痕が認められる。

甕（14）　体部の外面は不定方向の粗雑なハケ目、内面はヘラケズリである。

白磁

椀（15）　Ⅳ類。口径15.6cmで、釉は淡緑灰色に発色する。

皿（16）　II-1-a類。口径11.2cmで、釉は淡黄白色に発色する。

高麗青磁

椀（17）　口縁部の小片である。胎土は白色の小粒子を含むやや粗めのもので、釉は暗緑灰色に発色する。

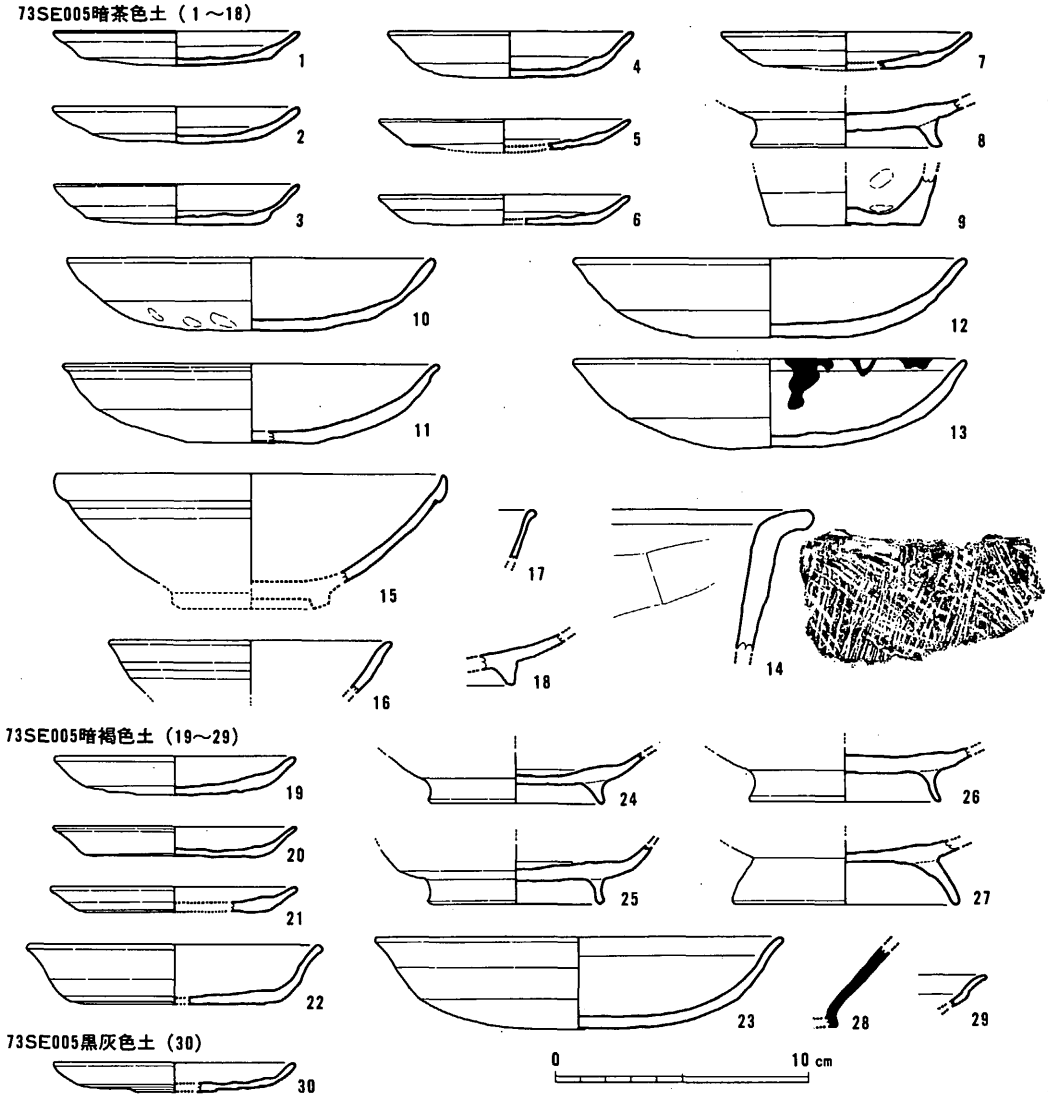


Fig.162　73SE005出土土器実測図（1/3）

緑釉陶器

椀（18）　高台部分の資料で、釉は残存部の全面に施され、淡緑灰色を呈している。

73SE005暗褐色土層出土土器（Fig.162、CD-073021～027）

土師器

小皿ａ（19～21）　口径9.6～9.8cm、器高1.2～1.55cm、底径7.2～7.7cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕がみられる。

坏ａ（22）　口径11.8cm、器高2.4cm、底径8.3cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕がみられる。

丸底坏ａ（23）　口径16.2cm、器高3.6cmを測る。底部はヘラ切りされる。

椀ｃ（24～27）　すべて高台部分の資料で、高台径7.0～9.0cm。27の高台は、やや高めで内

湾している。

須恵器

椀（28）　体部の調整はヨコナデ、底部は残存部が狭小で不確実ながら糸切りとみられる。

緑釉陶器

皿（29）　胎土は灰色を呈し、硬質に焼成される。釉は薄く淡明緑色に発色する。近江産と考えられる。

73SE005黒灰色土層出土土器（Fig.162）

土師器

小皿ａ（30）　口径9.6cm、器高1.2cm、底径7.8cmを測る。底部はヘラ切りされる。

73SK010出土土器（Fig.163、CD-073028）

土師器

椀ａ（1）　口径15.7cm、器高3.6cmを測る。底部はヘラ切りされる。

73SX003出土土器（Fig.163）

土師器

坏ａ（2）　底径8.0cm。底部はヘラ切りされる。

73SX016出土土器（Fig.163、CD-073029･030）

土師器

椀ｃ（3）　高台径8.2cm。内面はミガキｂが施される。

緑釉陶器

椀（4）　高台径6.8cm。内面及び高台外面と体部に薄く明緑灰色に発色する釉が施される。見込みはナデ調整される。

73SX017出土土器（Fig.163、CD-073031･032）

須恵器

蓋3（5）　口径18.8cm。端部の形状は明瞭な三角形である。

皿ａ（6）　口径20.8cm、器高2.0cm、底径17.8cmを測る。底部は回転ヘラケズリされる。

黒茶色粘質土層出土土器（Fig.164、CD-073033･034）

土師器

小皿ａ（1）　口径9.6cm、器高1.25cm、

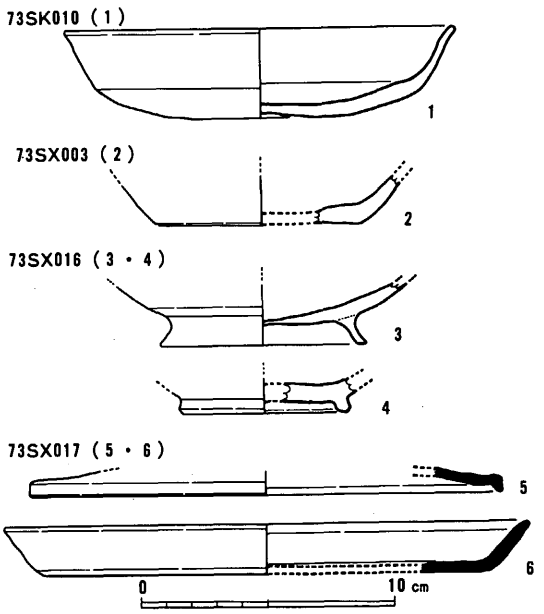


Fig.163　第73次調査各遺構出土土器実測図（1/3）

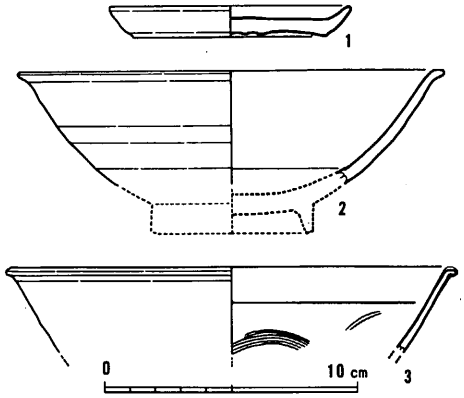


Fig.164　黒茶色粘質土層
出土土器実測図（1/3）

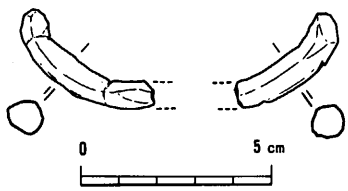


Fig.165　73SE005暗茶色土層
出土鉄器実測図（1/2）

底径7.7cmを測る。底部は糸切りされる。

白磁

椀（2･3）　2はV-4-a類で、口径17.0cm。3は口縁部が外方に折り曲げられ、内面には櫛による施文がある。V-4-b類とみられ、口径18.0cm。

表土採集土器（CD-073035･036）

青磁

椀（a）　外面には蓮弁の境目と思われる縦筋がみられ、内面に花弁状の陽刻文様がある。破片の部位は体部下半あたりとみられ、陽刻の文様は体部内面に存在したものと考えられる。胎土は淡茶白色で精良であるが、やや軟質である。釉はやや厚めで残存部の全面に施され、淡緑灰色に発色し鈍い光沢がある。龍泉窯系青磁の新しいタイプもしくはベトナム産の可能性が考えられる。

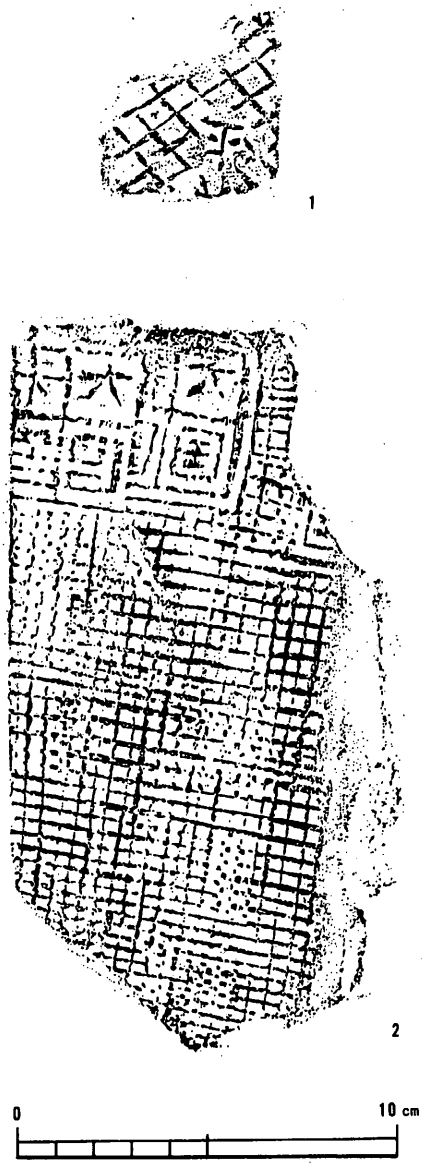


Fig.166　第73次調査出土文字瓦拓影（1/2）

(2)　金属製品（Fig.165、CD-073037･038）

鉄製品　類似の形状をした2個体の資料で、断面形状は5～6面体とみられる。73SE005暗茶色土層出土。

(3) **瓦類** (Fig.166)

文字瓦(1・2)　1は「平井□」でI-3類。73SE005暗褐色土層出土。2は「大国」でⅦ類。73SX016出土。

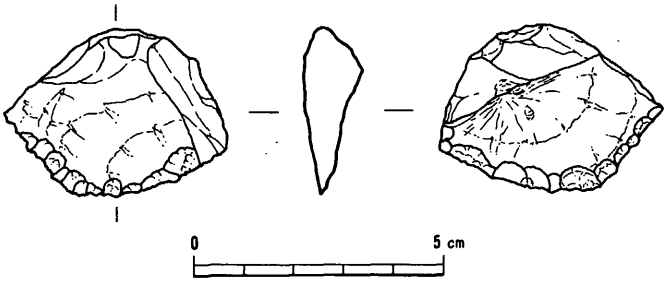


Fig.167　73SX016出土石器実測図 (2/3)

(4) **石器**(Fig.167、CD-073039・040)

刃器　安山岩の剝片下端部に2次調整を加えたものである。

5．小　結

検出した遺構の時期は概ね大宰府土器編年Ⅻ期を主体としており、11世紀後半頃とみられる。大宰府条坊内の宅地利用の様相を示す地点であるが、調査面積が狭小であり周辺の調査成果と併せて検討する必要がある。

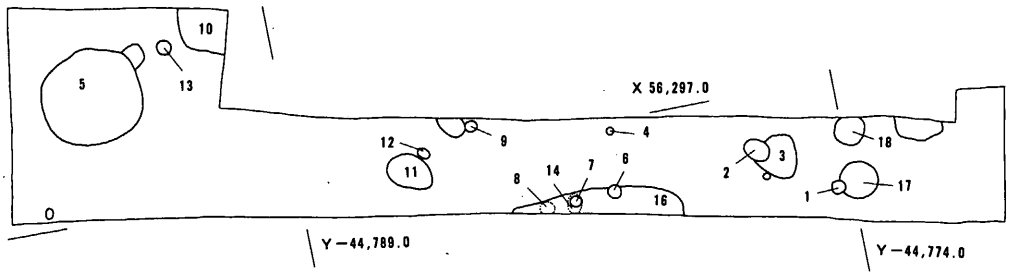


Fig.168　第73次調査遺構配置略測図

Tab. 6　第73次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別			地区
1		ピット			
2		土坑	3→2	奈良	
3	73SX003	土坑	3→2	平安	
4		ピット			
5	73SE005	井戸		11c後～	
6		ピット	6→16	平安	
7		ピット	16→7	平安	
8		ピット	16→8	平安	
9		ピット			
10	73SK010			11c後～	
11		ピット		平安	
12		ピット		平安	
13		ピット			
14		ピット	16→14		
	欠番				
16	73SX016	土坑？	6→16→7・8	10c	
17	73SX017	ピット		奈良	
18		ピット		平安	
19				平安	

(6) 第76次調査

1．はじめに

調査地は、太宰府市大字通古賀字丸石42-15で、住宅建築に先立って発掘調査を実施した。調査は昭和63（1988）年９月１日に行い、狭川真一が担当した。

2．調査所見

調査地は周辺の調査成果から敷地南端で東西道路の北側溝が検出される可能性が強かったことと、朱雀大路に面し且つ政庁にきわめて近い位置にある右郭一坊の範囲内であったことから期待が大きかった。

しかし、表土を除去してみると砂混じりの堆積層が積み重なるだけで、遺構面を形成する層位及び黄色粘質土系の地山は検出されず、現地表下約２ｍまで掘り下げたが遺構は全く確認できなかった。

遺物は堆積層の中から中世前期まで下る陶磁器類が若干出土した。中には平安期や奈良期に属する資料も含まれるが、基本的には中世前期の堆積と見なし得るものである。

これらのことと、近接する第59次調査の所見を合わせると、この付近のみ中世のある段階で御笠川が大きく入り込んでいたものとみられ、これによって古代の遺構は失われたものと考えられる。



Fig.169　第76次調査地全景（西から）

(7) 第91次調査

1．はじめに

調査地は太宰府市大字太宰府字御垣野2590-7で、第64次調査地の西側隣接地に当たる。調査原因は集合住宅建設で、現地での調査は平成2（1990）年1月17日から2月1日まで実施した。残土を調査地内に置かざるを得なかったことと、表土から遺構面までが深かったことから調査面積は44m²にとどまる。調査は他の現場と並行して行ったことから、狭川真一、城戸康利、緒方俊輔の3名が交替して担当した。整理作業は狭川が担当した。

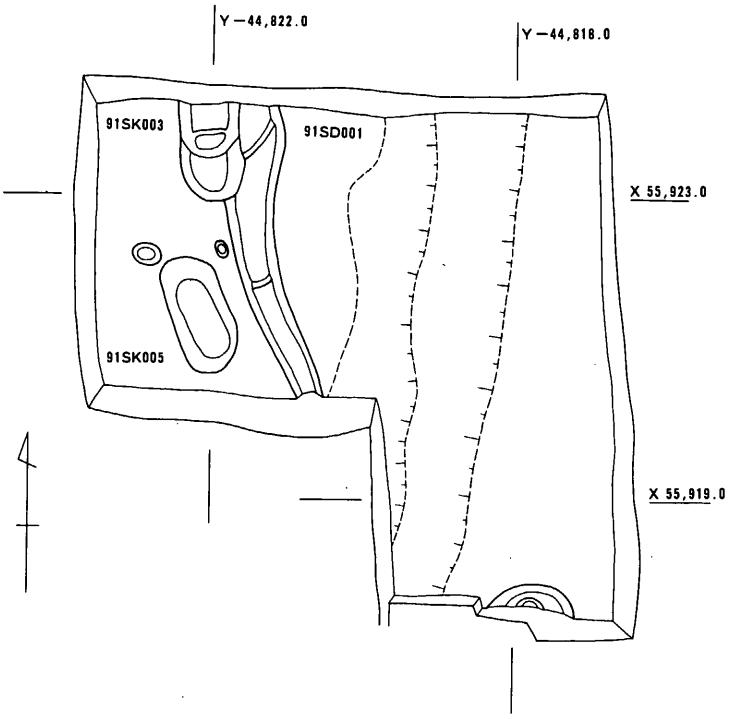


Fig.170　第91次調査遺構配置図（1/100）

2．層位など

2m余りあった現代の盛り土を除去すると、それ以前の耕作土（灰青色土）が現れる。その下層は茶色土となり、さらに西に傾いた地形から西側に厚く暗茶色土、暗灰色粘質土の順で堆積する。これらを除去すると黄色粘土及び茶色砂質土の地山が顔を出す。遺構はこの地山から

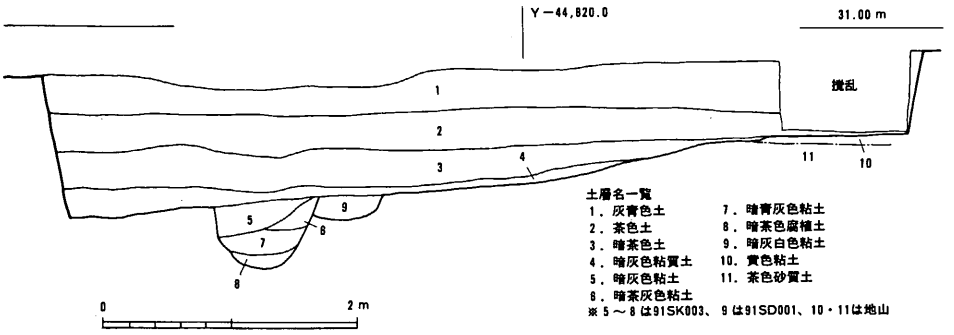


Fig.171　調査区北壁土層観察図（1/60）

穿たれる形で検出された（Fig.171、CD-091005･006）。

3．検出遺構

(1) 溝

91SD001　91SK003に切られている南北方向の溝で、僅かに蛇行する。検出長3.95m、幅0.35～0.65m、深さ0.15～0.2mを測る。埋土は暗灰白色粘土の単一層で、溝底には凹凸があり流れの方向は特定できない。

(2) 土坑

91SK003　91SD001を切る土坑で、検出長1.32m、幅0.8m内外、深さ0.35～0.45mを測る。埋土は底部に腐植土が堆積しており、耐水していた時期のあることを窺わせる。

91SK005　91SK003の南で検出した土坑で、長さ1.6m、幅0.8m、深さ0.9～1.0mを測る。埋土は91SK003に似る。

4．出土遺物

(1) 土器･陶磁器

91SD001出土土器（Fig.172、CD-091006～012）

土師器

小皿a（1･2）　口径9.0cm、器高1.2･1.45cm、底径6.1･6.7cmを測る。底部はヘラ切りである。

越州窯系青磁

水注（3）　水注の鉦部分にみられる装飾で、中央に一重の圏線で囲まれた二つ巴文を配し、その周囲に火炎状の文様を配したものである。表面にかかる釉は暗緑色に発色する。

緑釉陶器

椀（4）　高台径7.0cm。底部にヘラミガキの痕跡が確認される。軟質に焼成され、胎土は乳橙色、釉は黄緑色に発色する。

91SK003出土土器（Fig.172、CD-091011～015）

土師器

小皿a（5･6）　口径9.6･9.8cm、器高1.2cm、底径7.0･7.8cmを測る。底部はヘラ切りされる。

丸底坏a（7）　口径16.4cmで、内面はミガキbが施される。

黒色土器

椀（8）　B類で、口径17.0cm。内外面ともにヘラミガキが施される。

91SK005出土土器（Fig.172、CD-091016～028）

土師器

小皿a（9～13）　口径9.6～10.2cm、器高1.1～1.6cm、底径7.2～7.8cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕の残る資料もある。

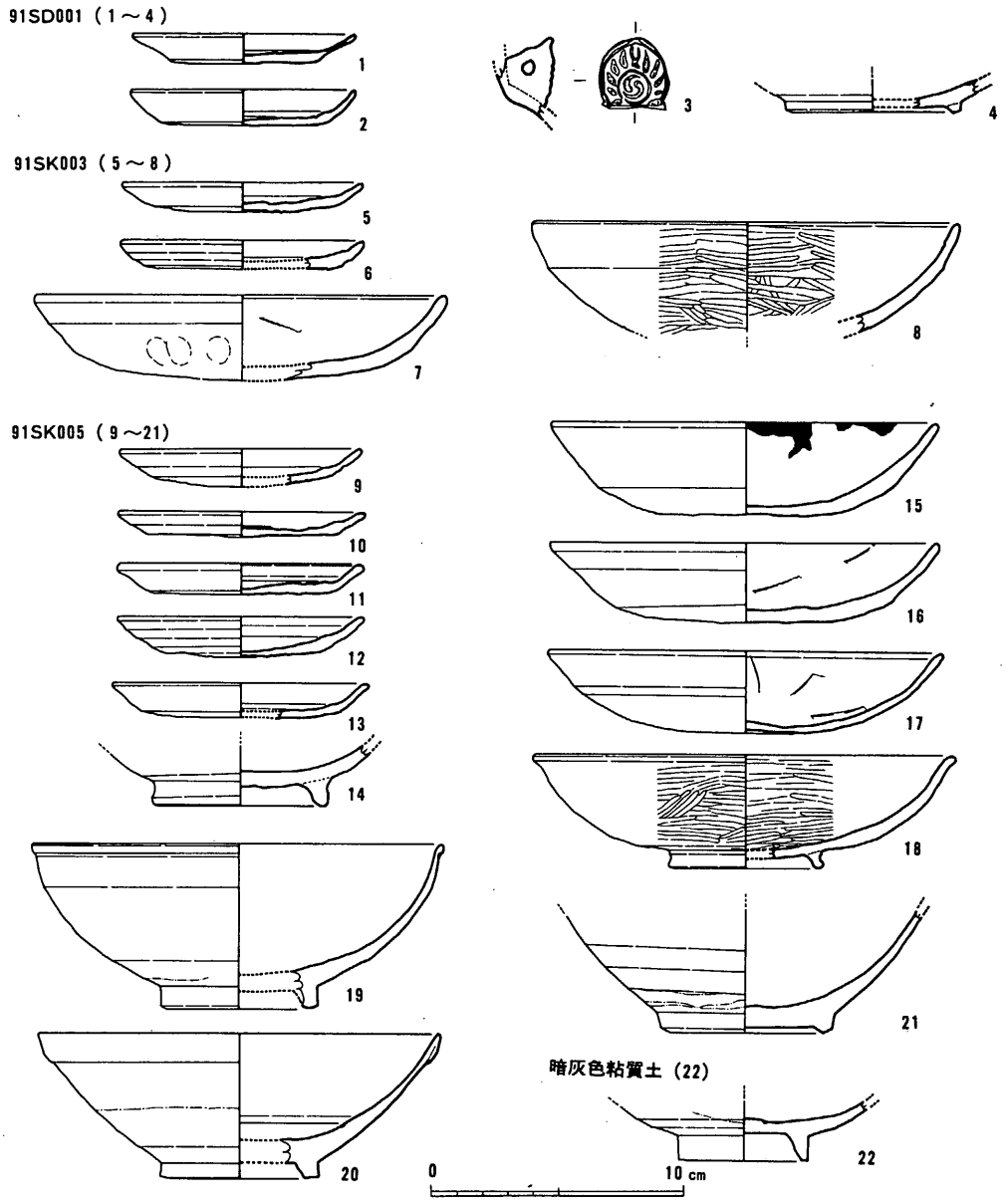


Fig.172　第91次調査出土土器実測図 (1/3)

丸底坏a (15～17)　口径15.4～15.8cm、器高3.2～3.7cmを測る。内面はミガキbで仕上げられる。15の口縁部には油煙が付着している。

椀c(14･18)　14は、高台径7.0cm。18は口径16.8cm、器高4.4cm、高台径6.2cmを測る。内外面ともにかなり丁寧なヘラミガキを施す。燻された形跡はない。

白磁

椀 (19～21)　19は、II-1類で口径16.4cm、器高6.6cm、高台径6.3cmを測る。釉は乳白色を呈するが発色が悪く不透明である。外面の高台部付近は露胎で、回転ヘラケズリである。20は、II-5類で口径16.0cm、器高5.8cm、底径6.4cmを測る。釉は乳黄色に発色し、光沢がある。外面

体部下半は施釉されず、回転ヘラケズリが観察される。21は、Ⅳ-1-a類で高台径6.9cm。釉は淡乳緑色に発色する。

暗灰色粘質土層出土土器（Fig.172、CD-091027･028）

白磁

椀(22)　Ⅻ類で、高台径5.2cm。釉は淡黄緑色に発色し、光沢がある。外面体部下半には施釉されず、回転ヘラケズリが観察される。

(2)　土製品（Fig.173、CD-091029～032）

1は鞴羽口で、推定径6.3cmで、中央に推定径2.3cmの穿孔がある。表面の色調は上位から暗茶灰色、灰白色、暗灰色と変化し、断面では中央部が暗茶灰色を呈している。2は鋳型と思われる資料片であるが、本来の形状がはっきりしない。両者とも91SK005出土。

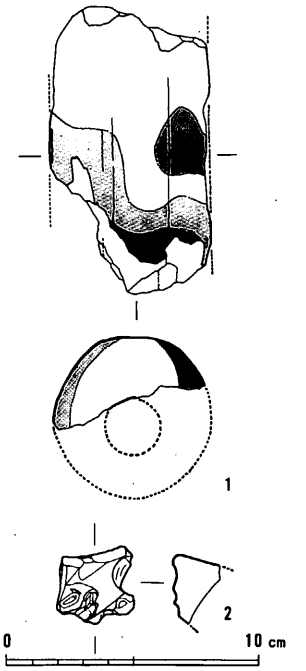


Fig.173　第91次調査出土土製品実測図（1/3）

(3)　木製品（Fig.174、CD-091033～036）

1は厚さ0.5cm内外の板材で、2面は失われており当初の形状は不明である。ただ片方の小口面に二次加工とみられる切断痕があり、この形状で使用された段階があったことも窺われる。現状の長さ24.2cm、幅8.7cmである。両面とも細かな傷が多数観察されるが、概ね右上がりの方向性をもったものが多い。また隅部分に5箇所の穿孔があり、内2つには桜皮（とみられる）が通された状況で残存している。さらに片面に限って漆が塗られていたとみられ、僅かにその痕跡をとどめている（図の網部分）。2は長さ21.9cm、幅1.7cmの棒状製品で、当初は板材であったものをこの大きさに割ったものと考えている。一方の小口部分を焼いており、その先端の形状が三角形になっているのは焼成に伴うものとみられ、

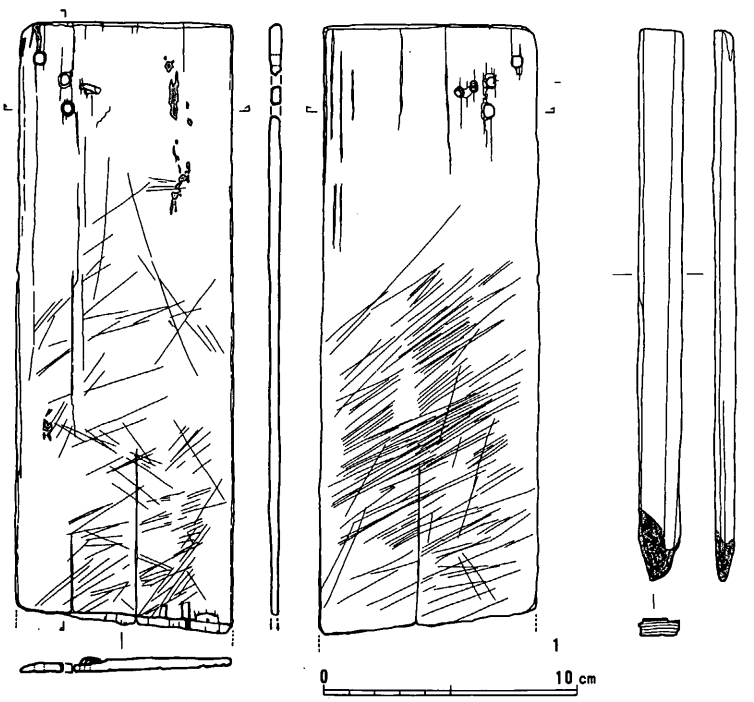


Fig.174　第91次調査出土木製品実測図（1/3）

加工によるものではなさそうである。
両者とも91SK005出土。

(4) 石製品

(Fig.175、CD-091037･038)

石鍋　体部の残欠で、外面には煤が付着している。91SK005出土。

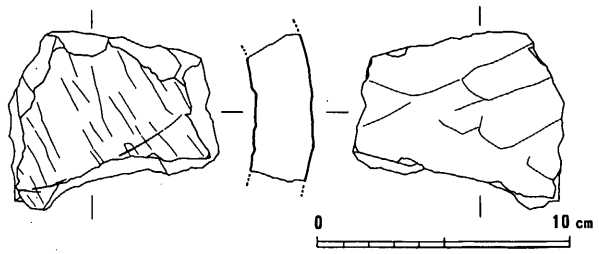


Fig.175　第91次調査出土石製品実測図 (1/3)

5．小　結

91SD001は、出土遺物から大宰府土器編年Ⅻ期(11世紀後半)に該当する遺構である。この溝はわずかに蛇行するものの位置的には、平安時代後期の朱雀大路東側溝である可能性も考えられるものである。その任意中点の座標から導かれる中軸線からの距離は、東へ7.011ｍとなり、中軸線で折り返すと幅約14ｍの道路が想定できる。

さらに同時に出土した土坑は両者とも形状、埋土が類似し、これまで大宰府条坊跡で検出されている区画溝は連続する土坑群として確認される場合が多々あり、これらもこうした遺構である可能性は捨てきれない。

このように91SD001や土坑は、他地点の11世紀後半段階の区画溝の在り方と近似することを含めると、大宰府条坊跡の区画に伴うものとみることができ、位置的な点から11世紀段階の朱雀大路の規模を窺わせる資料として捉えることも可能である。

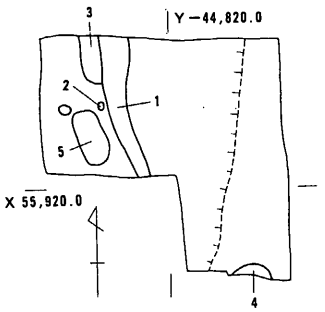


Fig.176　第91次調査遺構配置略測図

Tab. 7　第91次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別	地区
1	91SD001	溝　11c 後～	
2		ピット　11c 後～	
3	91SK003	土坑　1→3　11c 後～	
4		土坑　11c 後～	
5	91SK005	土坑　11c 後～	

(8) 第93次調査

1．はじめに

調査地は太宰府市大字太宰府2567番地-2ほかで、観世音寺土地区画整理事業の事前調査として実施した。調査は平成2（1990）年4月21日から7月10日まで実施し、狭川真一が担当した。開発対象面積は約1,000㎡、調査面積は上層603㎡、下層462㎡である。

2．層位など

調査前の状況は区画整理に伴って宅地が立ち退いた直後の状況で、隣接する道路面とほぼ同じ高さで盛り土がなされていた。この盛り土（多くは真砂土）を除去すると水田の旧耕作土が出現し、その直下が遺構面となっていた。

遺構面は黄灰色粘土や淡茶色土で構成され、多数の遺構が穿たれていた。このうち当初は地山と思われていた淡茶色土は、厚さ約0.1m程度の整地層であることが判明し、これを除去すると古い遺構面が姿を現す結果となった。ただし調査地の南側で（X56,270.0～56,275.0付近以南）にはこの淡茶色土はなく、直接地山が顔を出していた。したがってこの部分には上下二面の遺構が同時に検出されていることになる（Fig.245）。

また黄灰色粘土を地山と表現しているが、一部に弥生土器が包含されている部分があった。この部分は確かに僅かながら色調が異なる（暗灰色系）部分であったが、A～Cの3本のトレンチを設定（Fig.245）して調査したが遺構とはならず（色調変化線が途中で消滅する）、地盤形成における堆積中に土器が包含された可能性を考えるに至った。この地区の地盤形成の新しさを物語るものと言えよう。

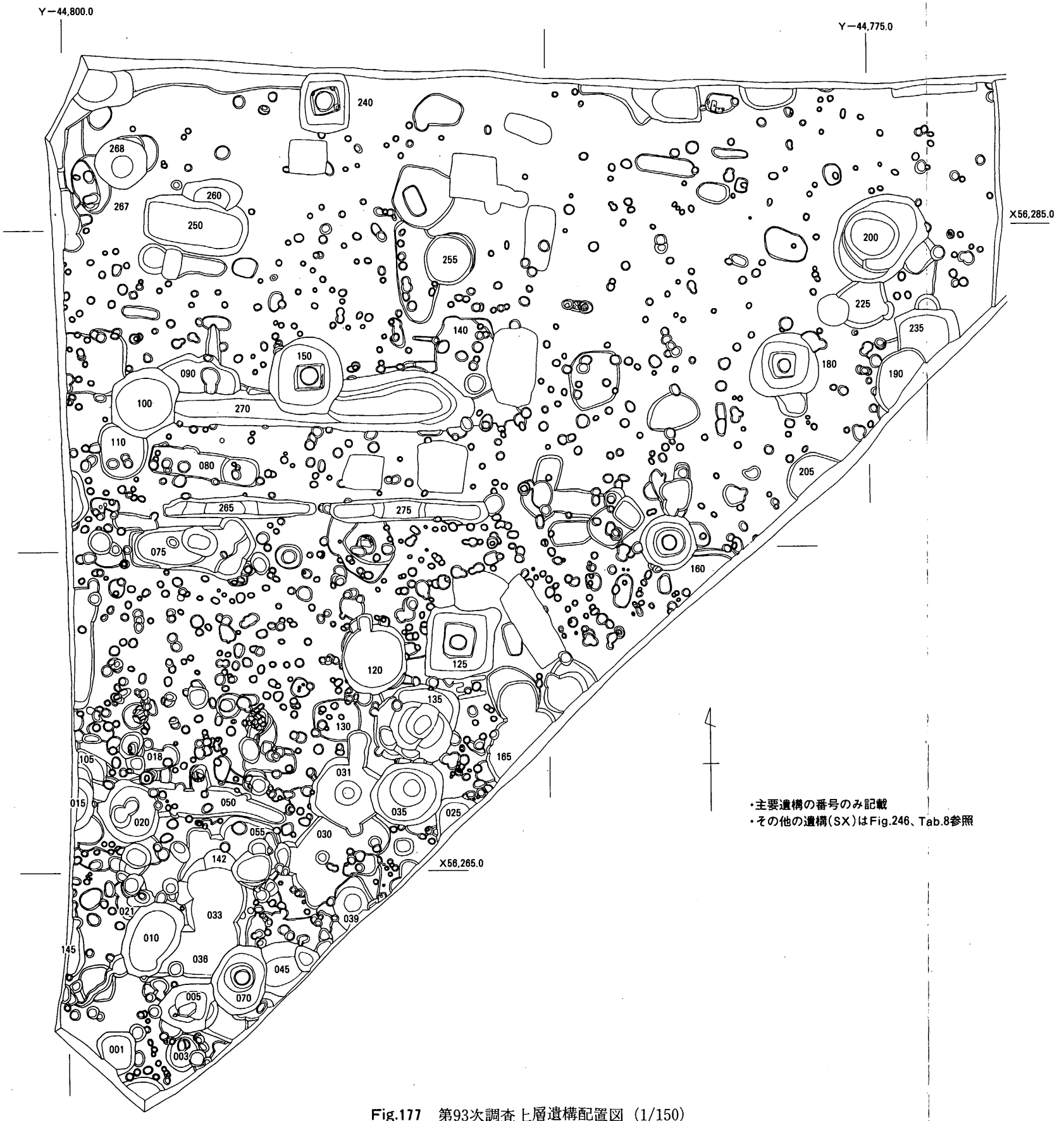
なお、茶灰色土としたものは上層遺構面の上に被る土を表現しているが、実際には包含層はほとんど残存せず、遺構面検出の際に採集した遺物がこの層から出土した遺物の大半を占めていることを付記しておく。

3．検出遺構

調査の結果、掘立柱建物1棟、井戸12基、溝6条、土壙墓3基をはじめ多数の土坑やピットが検出された。報告にあたって確実に下層から検出されたものは遺構番号に300番台を与え他と区別した。ただし上下両面が同時に調査されたエリアはこの限りではない。

(1) 掘立柱建物

93SB310（Fig.179、CD-093053～093）　南東隅の掘り方を失うが東西5間、南北2間の東西棟で、柱間は南北が2.50m等間と推定されるのに対して、東西は2.5～3.0m程度でやや不揃いである。推定される建物規模（柱心心間）は東西で13.7m前後、南北で5.0m前後であり、床面積は約68.5㎡になる。



・主要遺構の番号のみ記載
・その他の遺構(SX)はFig.246、Tab.8参照

Fig.177　第93次調査上層遺構配置図（1/150）

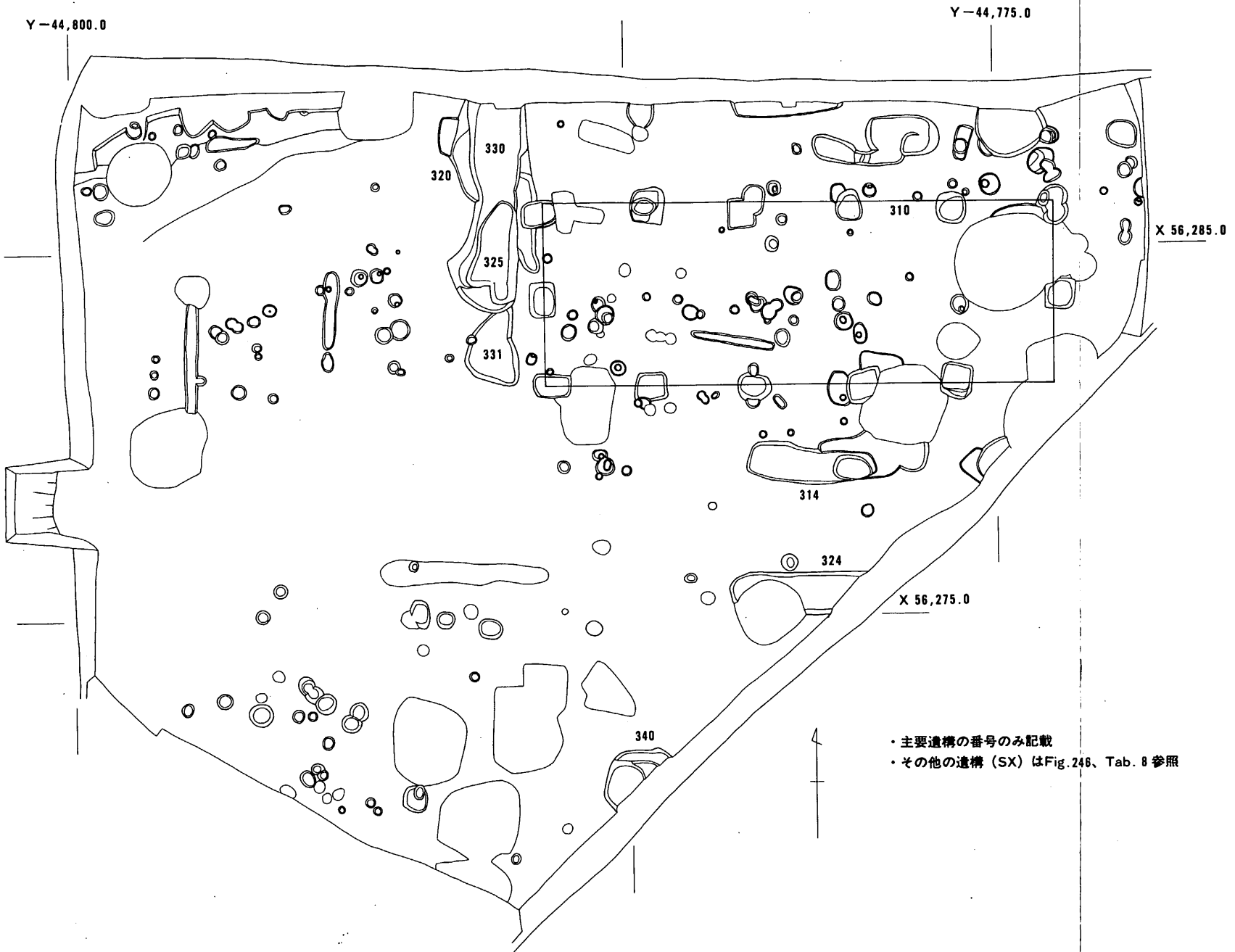


Fig.178　第93次調査下層遺構配置図（1/150）

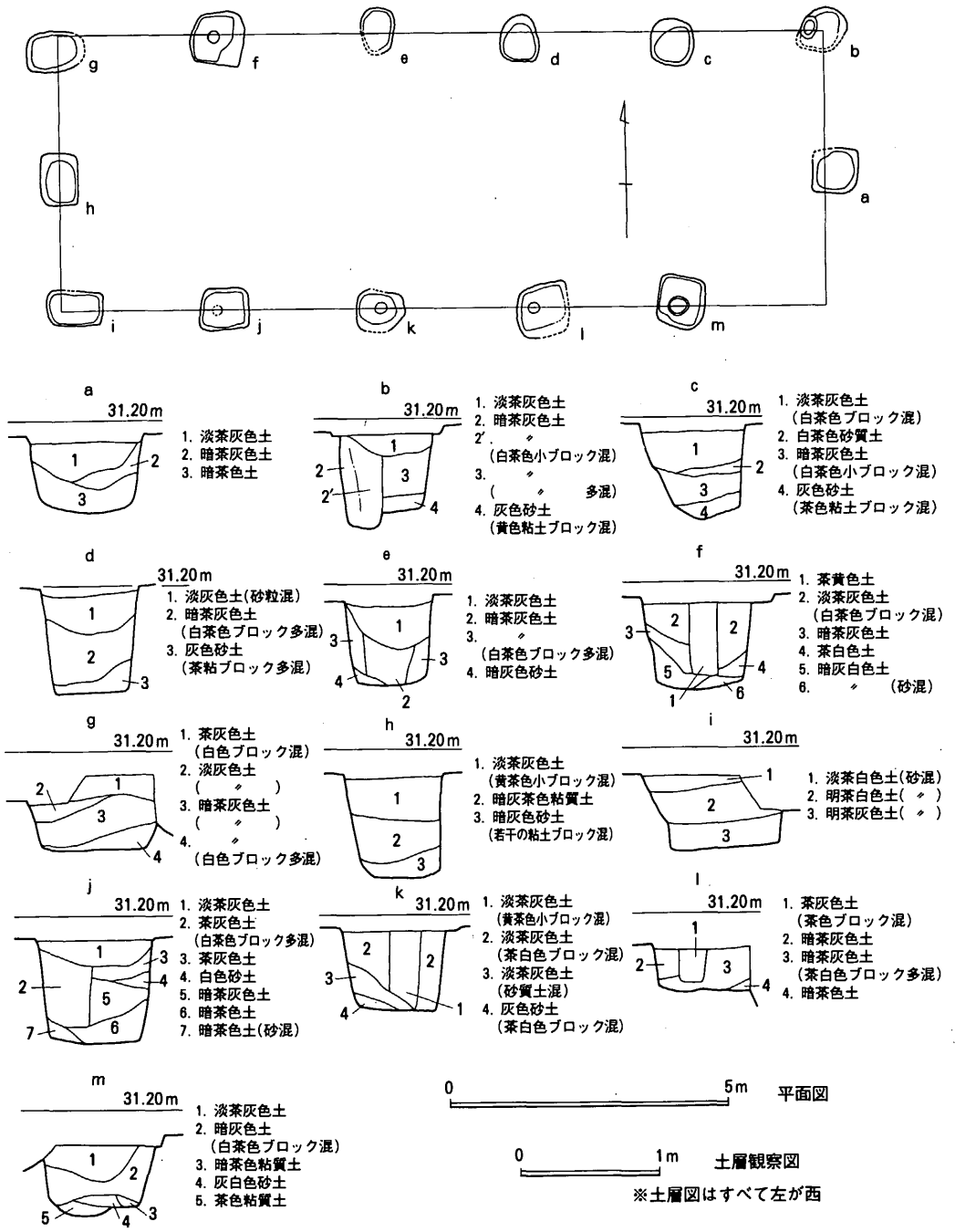


Fig.179　93SB310実測図・柱掘り方土層観察図（1/125・1/50）

柱掘り方は隅丸方形を呈するものが主体を成し、一辺長0.65～1.0m、深さは0.35～0.75mを測る。柱痕跡を確認できたものはf・k・lの3箇所で、それらから柱径は約0.2mであったことが知られる。なおb・e・jではやや太めの柱痕跡状の土層がみられたが、共通して白茶色ブロック土が混入し、しかも上方へ開き気味であること、いずれもその柱痕跡状の上面に掘り込まれたよ

うな土層が堆積することから、少なくともこの3本は抜き取られた可能性が考えられる。他の掘り方も上から掘り込まれたような土層の堆積するものがあり、基本的には柱は抜き取られたものと考えておきたい。

(2) 井戸

93SE005　東西1.8m、南北1.5mで西に張り出した略方形プランを有する。約0.8mほど掘り下げたところで大石が顔を出したことと、周囲が崩落しかかったことから完掘していない。この部分までの埋土は上位が黒色土、下位が灰色砂層であった。93SK065・93SX028等を切っている。

93SE031　2.15×2.05mで略方形のプランを有する。検出段階から中央に径0.8m内外で略円形のプランが検出され、それを枠の痕跡と考えた。検出面から底部までの深さは0.74mしかない。93SE035に切られている。

93SE035　2.0×2.25mで略円形のプランを有し、深さ約1.7mを測る。検出面から約0.9mのところで径1.1mの円形のプランが確認され、これを枠の痕跡と考えたが積極的に肯定する材料には恵まれなかった。93SE031より新しい。

93SE070 (CD-093011・012)　上位の遺構に各所が切られており本来の形状を大きく損ねているが、南北2.2m、東西1.7mの略楕円形プランを呈している。上位の遺構を掘り下げた段階で検出されたことから、検出面ですでに枠痕跡とみられる一辺約0.9mの略方形プランが確認できた(下層では略円形を呈するようになる)。最下部はさらに径0.5mで深さ0.3m分深くなっており、ここに曲物を据えたものと考えられる。

93SE120　南北2.2m、東西2.0mで略円形プランを有し、深さ0.6m内外でとまる。断面形状は逆円錐形を呈しているが、壁面は凹凸が著しく井戸掘削途中で作業を放棄したものではないかと考えている。

93SE125　南北2.3m、東西2.1mの略方形プランを呈している。検出面から約0.9mほど掘り下げたところで、一辺南北1.2m、東西1.0mで方形のプランが検出され、これを枠痕跡と考えた。この痕跡は深さ約0.5m分残存し、その底には径0.5m、深さ0.13mで円形の窪みが確認され、曲物を据えていたものと考えられる。すべて木材は残存していなかった。

93SE150　南北2.4m、東西2.3mで略円形を呈するプランを有し、最下部までの深さは1.9m内外を測る。検出面から約1.5mのところで南北0.8m、東西0.95mの方形プランを確認し、それが枠のプランと合致するものであった。枠は2段分確認され上段は、先述のプランとほぼ同規模で角材を用いて背後の板材（縦方向）を固定するものである。これに対して下段はそれよりやや小さめのもので、板材を横方向に配置し各辺1枚で構成されている。上下段ともに腐食が進行し接合状況は明らかにはできなかった。なお中央部に径0.6m、深さ0.18mで円形の窪みがあり曲物を据えていた痕跡と考えた。曲物自体は残存していなかった。

埋土は検出面から約0.2m程度を人為的に分層し上層として取り上げたが、続く黒色土層の範

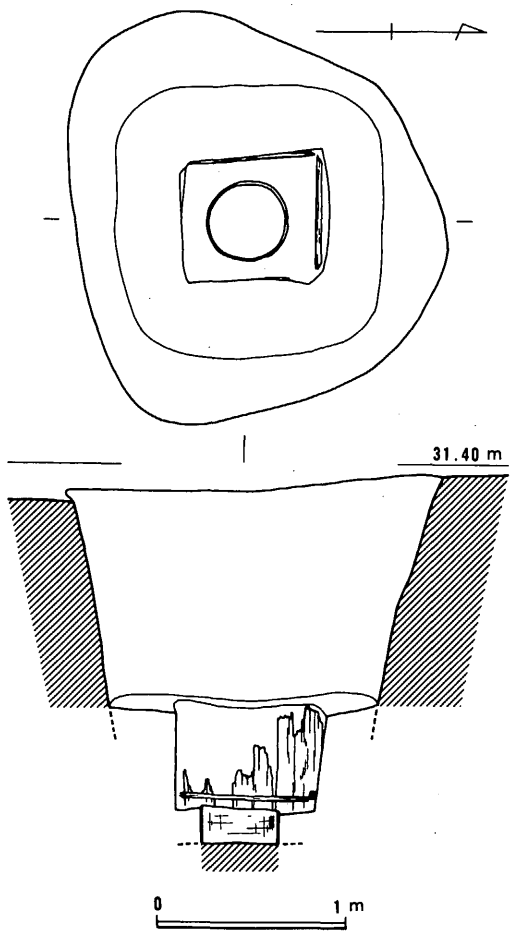


Fig.180　93SE180実測図（1/40）

囲内で捉えられる。この黒色土層は検出段階で略方形を呈したが途中で消滅し、周囲の黒灰色土層と識別ができなくなった。黒灰色土を除去すると上述の枠痕跡が顔を出す状況であった。黒色土層、黒灰色土層ともに崩壊時の堆積と考えられる。93SD270を切っている。

93SE160　南北1.8m、東西1.7mでほぼ円形のプランを呈している。最下部までの深さは約1.4mで、検出面から約0.7m付近で0.9×1.0mの隅丸方形プランを検出し、これを枠痕跡とみなした。その底部には径0.45～0.5m、深さ0.28m内外の円形の窪みがあり、曲物を据えた痕跡とみられる。

93SE180（Fig.180、093013）　南北1.95m、東西2.2mで不整形なプランを呈する。検出面から約1.2mのところで0.8×0.7mの方形プランが確認され、これが枠の痕跡であった。枠材は幅0.2m強の板材（最大残存長0.55m）を立て並べ、それを横桟で固定するものである。桟の両端は腐食し、支柱となる材も残存していなかった。最下部には径0.4m、高さ0.18mの曲物を据えており、その周囲は小礫混じりの砂層であった。埋土は黒色土層が主体を占めており、便宜上上位のものを上面とし、枠痕跡検出面以下のものを枠内として遺物取り上げを行ったが、少なくとも上面表示と黒色土表示は同一土層と捉えて差し支えないものである。

93SE200　3.1×2.5mで不整形なプランを呈しており、やや掘り下げた段階で1.7×1.5mで略円形のプランを検出した。規模がやや大きいが枠痕跡の崩壊した跡の可能性を考えている。なお調査途中で崩落が始まったため、検出面から約1.3m付近で掘り下げをあきらめた。周囲にある同時期の井戸から推定してあと0.7mほどで底に到達するものと思われる。

埋土は検出面から若干の深さを上面と記録して遺物を取り上げたが、続く黒色土の一部と認識している。なお東側に張り出した部分（略図のS-230）は裏込土と認識して遺物取り上げを行っている。

93SE235　一辺1.8～2.0mを測る方形を呈し、深さは0.7mである。底部は平坦な状態で検出されたが、全体の形状と規模は井戸を思わせるものであり、土坑の可能性もあるがここでは井戸として報告した。井戸とした場合、93SE120と同様に未完成の状態とみられる。93SK190・220

に切られている。

93SE240　南北1.9m、東西1.55mで隅丸長方形を呈する。検出面から約0.9mのところで、一辺0.8～0.9mの方形プランが確認され、これが枠痕跡であった。枠自体は残存していなかったが、方形プランの底部隅に径0.1m強の円形ピットが確認され、枠を固定した支柱の痕跡と考えられる(西南隅は検出されなかった)。最下部には径0.6m、深さ0.3mの円形の窪みがあり、曲物を据えた痕跡と認識される。

埋土は検出段階で中央付近に不整形プランを呈する黒色土層が確認されたが枠検出面までには至らず、その下層には淡黄色土層が堆積していた。これを除去すると枠痕跡が検出された。黒色土層、淡黄色土層ともに崩壊に伴う堆積であろう。北側の段落ち93SX245に切られる。

(3) 溝

93SD050　東西方向の溝で、検出長4.0m、幅0.45～1.15m、深さ約0.25mを測る。東側には延びないが西側は、93SK020に切られており不明である。

93SD265　東西方向の溝で、長さ4.75m、幅0.4～0.7m、深さ0.3～0.35mを測る。中央やや西寄り部分がわずかに深くなる。93SD275と一連のもので、しかも93SD270と対になるものとみられる。

93SD270 (CD-093031)　東西方向の溝で、検出長9.3m、幅1.0～1.9m、深さ0.5～1.0mを測る。東側半分が大きく膨らんでいる。西端は93SK100に切られて明らかでないが、それ以上西には延長されない。土層の堆積は検出面から下へ淡茶色土、茶色砂、暗茶色粘質土、暗灰色粘質土の順に堆積し、断面形状は盆状を呈している。暗灰色粘質土層出土土器のみ下層として取り上げた。93SE150・93SK090等に切られている。93SD265・275と対になるものとみられる。

93SD275 (CD-093032～037)　東西方向の溝で、長さ4.85m、幅0.6～0.7m、深さ0.3～0.45mを測る。中央部分がわずかに浅くなる。93SD265と一連のもので、しかも93SD270と対になるものとみられる。

93SD314　下層で検出されたもので、長さ4.2m、幅0.95～1.1m、深さ0.2～0.25mを測る。

93SD324　下層で検出されたもので、検出長3.5m、幅1.15m、深さ約0.2mを測る。

(4) 土坑

93SK001　遺構の南西隅が調査区外にあるが、南北1.4m、東西1.2m、深さ0.3mを測り、略隅丸長方形を呈している。

93SK003　略円形を呈するもので、径1.1～1.2m、深さ0.15mを測る。途中に別遺構を挟んで93SE005より新しいことがわかる。

93SK010　不整長円形を呈する土坑で、長さ2.45m、幅1.72m、深さ約0.35mを測る。93SK021に切られる。

93SK015　西半分が調査区外にあり全容は知れない。長さ2.1m、幅0.5m以上、深さ約0.4mを測る。検出段階では辛うじて切り合いがみられ、93SK020より新しいものである。

93SK018　西側を別遺構(S-19)に切られており全体像は不明である。長さ1.1m以上、幅0.7m、深さ約0.15mを測る。

93SK020　径1.9～2.0mで略円形を呈し、深さは約0.35mである。土坑底に浅いピットが確認された。

93SK021　長さ1.4m、幅0.9m前後、深さ約0.1mである。埋土中から焼土塊状の資料が多数出土した。なお埋土除去後、土坑の北寄りに径約0.5m、深さ0.55mのピットが確認されたが、土坑に伴うものとは考えがたい。

93SK025　半分以上が調査区外にあるものとみられる。検出長1.4m、検出幅1.2m、深さ0.35mを測る。

93SK030　検出段階では略円形のプランを呈しており、径約2.8m、深さ約0.15mを測る。93SE031に切られ、93SK039を切っている。なお埋土除去後に複数のピットが検出されたが土坑とは無関係であろう。

93SK033　南北2.4m、東西1.9mで不整形なプランを呈し、深さは0.25m程度である。93ST040に切られ、93SK036を切っている。

93SK036　93SK011･033に切られる土坑で、当初は略長方形プランを呈していた可能性が強い。検出段階で知られる最大長は2.8m、幅は1.6mで、深さは約0.3mである。93SE070を切っている。

93SK039　略長円形に近い形状とみられ、東西1.15m、南北0.9m以上、深さ0.45mを測る。93SK030に切られている。

93SK045　東側は調査区外にあるため全容は知り得ない。長さ2.2m以上、幅1.7m、深さ約0.6mを測る。93SE070･93SK065を切っている。

93SK055　南北2.3m、東西2.0m分を検出したが、複数の遺構と重なり合っているために最終的には本来の形状はほとんどわからない。深さ0.15m。埋土中に焼土塊や炭化物が混入していた。

93SK065　検出長2.3m、幅1.1m、深さ約0.25mを測る。93SE070･93SX124を切り、93SE005･93SK045等に切られる。

93SK075　東西に長い不整隅丸長方形を呈する土坑で、長さ3.5m、幅1.1～1.7m、深さ0.1～0.35mを測る。土坑底の一部が長円形に窪んでいる。93SX117を切っている。

93SK080　東西に長い隅丸長方形を呈する土坑で、長さ3.4m、幅0.8～0.9m、深さ0.15～0.2mを測る。土坑底の東側がわずかに窪む。

93SK090　東西に長い不整楕円形を呈する土坑で、検出長2.5m、幅約1.1m、深さ約0.25mを測る。西側を93SK100に切られ、93SD270を切っている。

93SK100　93SK090を切る略円形の土坑で、径2.2～2.3m、深さ約0.9mを測る。底部はほぼ平坦で、井戸の未完成の可能性が考えられる。

93SK105　93SK015・020に切られ、しかも西側は調査区外に延びるため全体の形状はつかめない。深さ0.15～0.2ｍを測る。

93SK110　南北にやや長い隅丸方形を呈する土坑で、長さ1.7ｍ、幅1.5ｍ、深さ約0.2ｍを測る。93SK100に切られている。

93SK130　東西にやや長い隅丸方形で、長さ1.5ｍ、幅1.3ｍ、深さ約0.1ｍを測る。土坑底から複数のピットが検出されたが、土坑に伴うものではないと判断している。

93SK135　遺構上面に一段広い部分がありそれを上面として捉えており、この部分は93SE120に切られている（完掘した結果ではこの上面部分を別遺構と見なした方が妥当であろう）。土坑本体と考えられる部分は上面プランの南寄りにあり、不整円形を呈するもので、径2.5～2.55ｍを測る。土坑壁は底部に向かって逆円錐形に小さくなるが、凹凸がある（平面的には段差があるように見える）。深さは約0.9ｍを測る。埋土は基本的には黒色土の単一層であるが、便宜上土坑中位でプランが小さくなる付近以下を下層として捉え、遺物取り上げもこれに従った。なお隣接する93SE120等とともに、井戸掘削途中で放棄したものと思われる。

93SK140　東側を撹乱で失う。長さ2.5ｍ、幅1.8ｍ以上、深さ約0.1ｍを測る。土坑底部から複数のピットを検出したが、土坑との関連性はないとみている。93SD270を切っている。

93SK142　93SK055の埋土除去後に検出され、93SK033・93SX066に切られているため当初の形状はまったくわからない。深さ0.1ｍ弱を測る。

93SK145　西側の大半が調査区外にあり全容は不明である。検出長2.15ｍ、検出幅0.5ｍ、深さ0.18ｍ内外である。出土遺物をみる限り下層面に対応する遺構とみられる。

93SK165　遺構の東南半分が調査区外で、検出長2.7ｍ、検出幅1.2ｍ、深さ約0.2ｍを測る。

93SK190　遺構の東南半分が調査区外で、検出長2.1ｍ、検出幅1.2ｍ、深さ約0.9ｍを測る。93SK220に切られているが、その下層の93SE235との関係は不明である。

93SK205　遺構の東南半分が調査区外で、検出長0.9ｍ、幅1.6ｍ、深さ約0.2ｍを測る。

93SK209　別遺構に分断されるが一つの遺構として捉えている。南北方向の楕円形を呈するもので、長さ2.1ｍ、幅0.8ｍ、深さ0.15ｍを測る。

93SK215　遺構の北半部は調査区外である。長さ1.8ｍ、検出幅0.7ｍ、深さ0.25ｍ内外。

93SK220　93SE235・93SK190を切る楕円形を呈する土坑で、南東部は調査区外にある。長さ1.2ｍ、幅0.65ｍ以上である。

93SK225　西側を撹乱で失い、北側の一部を93SE200に切られる。不整略円形の土坑で、径1.45ｍ程度、深さ約0.35ｍである。

93SK250　東西に長い隅丸長方形の土坑で、長さ3.25ｍ、幅1.65ｍ、深さ0.35ｍを測る。93SK260に切られている。

93SK255　ほぼ円形のプランを呈する土坑で、径1.55～1.75ｍ。深さは約0.15ｍである。隣接する93SX243とは切り合うが、埋土が類似しており前後関係は不明である。

93SK260　長さ2.3m、幅1.8m、深さ約0.3mを測る。93SK250を切っている。

93SK267　長さ1.85m、幅1.15mの不整楕円形を呈し、底部は2段になる。深さは0.05～0.15mを測る。93SK268を切っている。

93SK268　径1.6mのほぼ円形を呈するプランを有し、深さは1.35mを測る。井戸の可能性もある。

93SK320　93SB310の西側に南北に重なり合う土坑の一つで、これが最も新しい。検出長2.7m、最大幅1.3m、深さ約0.1mを測る。下層遺構。

93SK325　93SB310の西側に南北に重なり合う土坑の一つで、93SK320を切っている。形状は溝状に南北に長い。検出長5.8m、最大幅1.7m、深さ0.2～0.25mを測る。埋土除去後に93SK330が検出された。下層遺構。

93SK330　93SB310の西側に南北に重なり合う土坑の一つで、93SK325の下層で検出され、その一部として捉えることもできる。形状は不整長円形で、長さ2.5m、幅約0.9m、深さは93SK325底から約0.2mである。下層遺構。

93SK331　93SB310の西側に南北に重なり合う土坑の一つで、最も古期になる。検出長2.2m、幅1.5m、深さ約0.2mを測る。下層遺構。

93SK340　南東部分は調査区外に延びており全容は知り得ない。検出長2.1m、検出幅1.2mで、底部は3段になり深さ0.1～0.6mを測る。下層遺構。

(5)　土壙墓

93ST040（Fig.181、CD-093014～024）　ほぼ南北に軸をとる土壙墓で

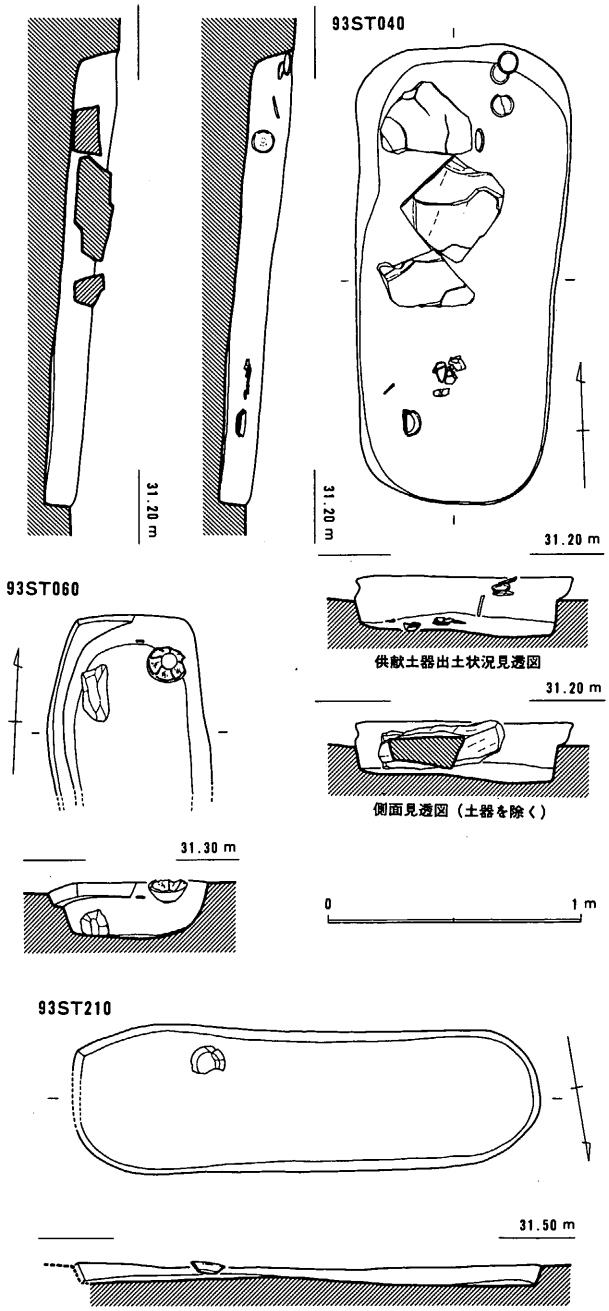


Fig.181　93ST040・060・210実測図（1/30）

ある。釘が出土しているが全体量としては少なすぎることから、鉄釘を使用した木棺の存在は肯定しがたい。墓壙は長さ1.81m、最大幅0.85m、深さ0.1～0.14mを測り、埋土は暗茶黒色土の単一層で特に分層できなかった。墓壙の底部は北がやや高く、遺物の出土状況や墓壙の幅を考慮すると北側が頭位と考えられる。遺物は墓壙北側に土師器小皿4点と龍泉窯系青磁椀1点、南側中央に土師器坏1点、そのすぐ南西に半分に割って重ねられた白磁皿1点と鉄釘1点が出土した。いずれも墓壙底部から浮いているだけでなく、転倒するものもあり墓壙内部に置かれたものではなく、蓋の腐食に伴って転落したものと予想される。また墓壙内には幅0.4m前後の石が3個落ち込んでおり、蓋上に置かれた標石とみられる。

なお残念ながら北側にあった龍泉窯系青磁椀は口縁部付近を確認した時点で盗難に遭い、スタンプすら残されていなかった。その時のわずかな観察ではI-5-a類と記憶している。

93ST060（Fig.181、CD-093025～027）　南側を他の遺構に切られており全体は知られないが、北東隅に龍泉窯系青磁椀1点が確認され、土壙墓の可能性を考えている。現存長0.72m、最大幅0.63m、深さ約0.2mを測る。墓壙内北西部に長さ0.2mほどの石がある。埋土は墓壙中央部が窪むように堆積しており、上位が茶灰色土(黄色粘土ブロック混在)、下位が暗茶灰色土であった。青磁椀の傾きは暗茶灰色土の堆積状況に近く、この土層が（青磁椀を置いた）蓋上に被せられていたことも考えておく必要があろう。

93ST210 (Fig.181、CD-093028～030)　東側を別の遺構に切られるが、長さ1.85m程度、最大幅0.6m、深さ3～9cmを測る。墓壙内の南東部に白磁皿1点が置かれていた。

(6) その他の遺構

93SX002　大半が調査区の外にあり全容は知り得ない。検出長0.7m、検出幅1.3m、深さ0.05mを測る。

93SX004　93SK036の上面から切り込むピット群。

93SX007　93SK010・145の間にあるピット群。

93SX009　93SK010に切られるピットで、径0.7m、深さ約0.15m。

93SX011　93SK145の南にある小ピットで、西半分は調査区外。径0.7m、深さ約0.2m。

93SX012　93SX011の周囲にあるピット群でこの付近の切り合いでは最も新しい。

93SX014　93SK003の周囲にあるピット群。

93SX017　93SK020の北側に展開するピット群。

93SX023　東半分は調査区外にあるピットで、長さ0.4m以上、幅0.7m。底部に石が置かれていた。

93SX026　0.75×0.9mの略円形を呈し、深さは0.1～0.15mを測る。

93SX028　93SK045・065・93SE070の上面を覆うように検出された窪み状の遺構で、93SE005・93SK036より古い。

93SX041　S-19の下層で検出されたピット群。

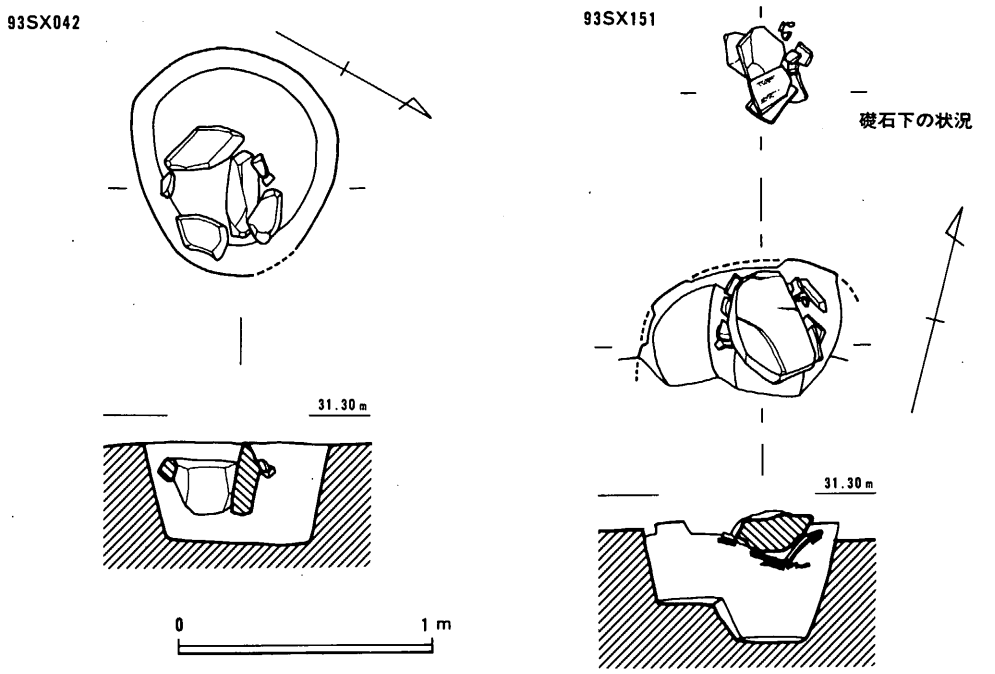


Fig.182　93SX042・151実測図（1/30）

93SX042（Fig.182、CD-093038）　南北0.8m、東西0.9m、深さ0.4mを測る。ピットの東側に寄って略方形に配置された石がある。大きく4石で囲いを作り、その内側は0.2×0.2mの空間となる。埋土中程で検出されており、柱の根巻石と考えられ類似する遺構(93SX052)が東側3.5mの位置にある。

93SX049　93SK130の西側にあるピット群。

93SX052（CD-093039）　93SX042の東側3.5mの位置にあるピットで、配石状の石群がある。93SX042のように中空にはならないが、距離的にみても両者は対になる可能性が高い。ピットの径0.75～0.85m、深さ0.45m。

93SX063　S-32に切られ、93SK142を切るピットで、径0.35m、深さ0.25m。

93SX066　93SK055の埋土を除去した段階で検出されたピットで、1.25×1.15m、深さ約1.0mもある。埋土中に焼土を含んでいる。

93SX068（CD-093040）　93SX066を切る径0.4mのピットで、根石状の石が残存する。

93SX073　不整円形で0.9×0.8m、深さ約0.5m。

93SX077　径0.25m、深さ0.1mのピットで、周辺のピット群中最も古い。

93SX096　不整形ピットで、0.75×0.85m、深さ0.7mを測る。93SK045の埋土除去後に検出された。

93SX098　S-85に切られる方形ピットで、深さ約0.1m。

93SX099　93SK075の西側に展開するピット群。

93SX106　93SK075の東側から南東側にかけて展開するピット群。

93SX111　径0.4m、深さ0.25mのピット。

93SX115　93SK020の北にある小ピットで、径0.25m、深さ0.15m。出土遺物から下層面に伴う遺構とみられる。

93SX117　93SK075に切られる遺構で、不整形な形状を呈している。

93SX118　長円形のピットで、0.90×0.75m、深さ0.7mを測る。S-6の下層で検出された。

93SX124　深さ0.25mで周囲の遺構に切られ、一部が段落ち状に検出されたに留まる。

93SX128　南北1.9m、東西1.9m以上で、深さ約0.15mの隅丸長方形を呈する窪み状の遺構である。93SK100を切っている。

93SX133　93SE035・93SK135を切るピット群である。

93SX137　93SE120の北東部に集中して検出された小ピット群である。

93SX151（Fig.182、CD-093041～043）　93SE120の北側でこれに切られる状態で検出された礎石である。礎石は長さ0.42m、幅0.28m、厚さ0.15m前後を測り、根石として瓦を敷いている。掘り方とみられる遺構は東西0.75m、南北0.5m以上で底部が2段になっており、深さは0.55mある。断ち割り観察を怠ったため情報を失ったが、当初掘立柱として建設したものを後に礎石に作り替えた可能性があるとみている。北側2.5mの位置にも礎石遺構（93SX169）がある。

93SX152　93SD275の南側に展開するピット群である。

93SX155　93SD275に切り込むピットで、出土した遺物は93SD275からの混入品である。

93SX157　93SD275の北西側に展開するピット群である。

93SX161　93SD270の北側に展開するピット群である。

93SX166　南北2.5m、東西2.1m、深さ0.05m以下の浅い窪みで、93SD270や93SX169の上に被っている。

93SX169（CD-093044）　93SX151の北側約2.5mの位置で検出された礎石である。礎石は0.3×0.3mで、若干の根石によって固定されていた。S-167とした浅い窪みを除去した段階で検出され、掘り方の深さは0.1m程度である。

93SX170　長さ1.75m、幅1.2m、深さ0.15～0.2mの隅丸長方形の土坑状を呈し、北側の一部が窪んでいる。

93SX172　93SD270の北側に展開するピット群。

93SX174　93SD270の東側を覆うように検出された浅い窪み状遺構で、東西3.3m、南北2.3mで幅広の略長方形を呈している。

93SX175　不整形な土坑状を呈する遺構で、東側が調査区外にある。長さ1.75m、幅1.3mで、底部は2段になり深さ0.25～0.3mを測る。

93SX179　G8地区のピット群を指す。

93SX184　93SE180の西側にある、径0.4m、深さ0.2m強のピットである。

93SX188　I7地区にあるピット群。

93SX194　S-193ピットに切られるピット群である。

93SX201　93SE160に切られる小溝状の遺構で、検出長1.45m、幅0.2m、深さ0.1m。

93SX202　93SE160に切られる小土坑状の遺構で、長さ0.75m、幅0.45m以上、深さ0.1m。

93SX214　93SK190の南西側で検出したピット群。

93SX216　93SE180と93SK190の間で検出したピット群。

93SX218　93SE200の北側に展開するピット群。

93SX222　調査区外の北側に延びているとみられる段落ち状の遺構である。東西3.75m、南北1.1m以上、深さ0.05～0.2mを測る

93SX223　93SK215の周辺で検出したピット群である。

93SX224　K6区にあるピット群。

93SX227（CD-093045）　東西0.85m、南北0.6m、深さ約0.15mの楕円形を呈する遺構で、底部にはL字形に平瓦を敷いている。礎石の根石的な役割を果たしていたものであろうか。

93SX228　93SE235を切るピットで、径0.8m、深さ0.3mを測る。

93SX229　93SE200上面から切り込むピット群。

93SX236　1.0×0.55m、深さ0.15mを測る隅丸長方形を呈する土坑状遺構である。

93SX243　93SK255の西にある浅い窪み状遺構で、長さ3.3m、幅1.3m、深さ0.05mを測る。93SK225との切り合い関係は明確にできなかった。

93SX244　93SE240に切り込む長方形土坑状を呈する遺構で、長さ1.4m、幅0.6mを測る。

93SX245　93SE240の一部にかかる段落ち状の遺構で、北側及び北西側へ延びている。底部は下層遺構面として認識している、黄色粘質土層の下層にある暗灰色砂層が顔を出している。これより北側で調査した第73次調査（本書に報告）でも遺構面は砂層となっており、遺構も希薄であったことを含めると、この段落ちは後世の削平に伴うものとみられ、これより以北には密な遺構の残存状態は望めない。

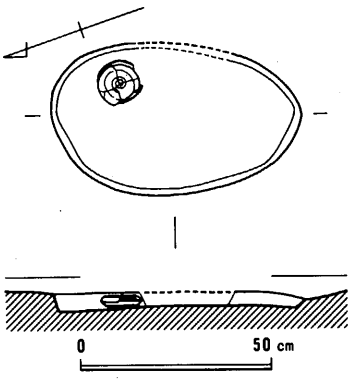


Fig.183　93SX247実測図（1/20）

93SX247（Fig.183、CD-093046～050）　南北0.66m、東西0.41m、深さ0.03～0.05mを測る長円形の浅いピットで、北東隅に土師器坏が合わせ口状態で重なって出土した。土器内には何も残存していなかった。祭祀に関連する遺構と考えている。

93SX253　径0.6m、深さ0.2mのピットである。

93SX254　93SK250･260の重複関係を明確にするために、人為的に数cmほど掘り下げたものを指し遺構ではない。

93SX257　撹乱に分断されるが、S-256と同一遺構と考えられる。長さ2.75m、幅0.55～0.9m、深さ0.1～0.3mで西側が深くなる。

93SX312　長さ3.1m、幅0.55m以上、深さ0.05m程度の浅い窪み状遺構である。下層遺構。

93SX313　93SB310柱掘り方lを切り、93SE180に切られるピット群である。下層遺構。

93SX315　径0.35m、深さ0.15mのピットである。93SB310と近似した埋土で、柱掘り方eとkのちょうど中間付近に位置する。下層遺構。

93SX317　径0.25m、深さ0.2m弱のピットである。下層遺構。

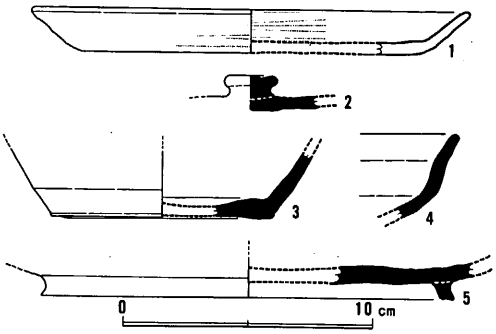


Fig.184　93SB310出土土器実測図（1/3）

93SX323　93SD314・324の間に検出されたピット群である。下層遺構。

93SX332　93SB310柱掘り方gの一部を切る南北方向の溝状遺構である。検出長4.6m、幅0.4m程度、深さ0.1mを測る。西側の大半を93SK325に切られている。93SB310西側に集中する土坑群では最も古く位置づけられる。下層遺構。

4．出土遺物

(1)　**土器・陶磁器**

93SB310出土土器（Fig.184、CD-093094・095）

土師器

皿a（1）　口径17.6cm、器高1.8cm、底径13.7cm。底部は回転ヘラケズリされ、体部には内外面ともにミガキaが施される。柱掘り方b出土。

須恵器

蓋c（2）　宝珠形の摘みの径は1.2cm。柱掘り方b出土。

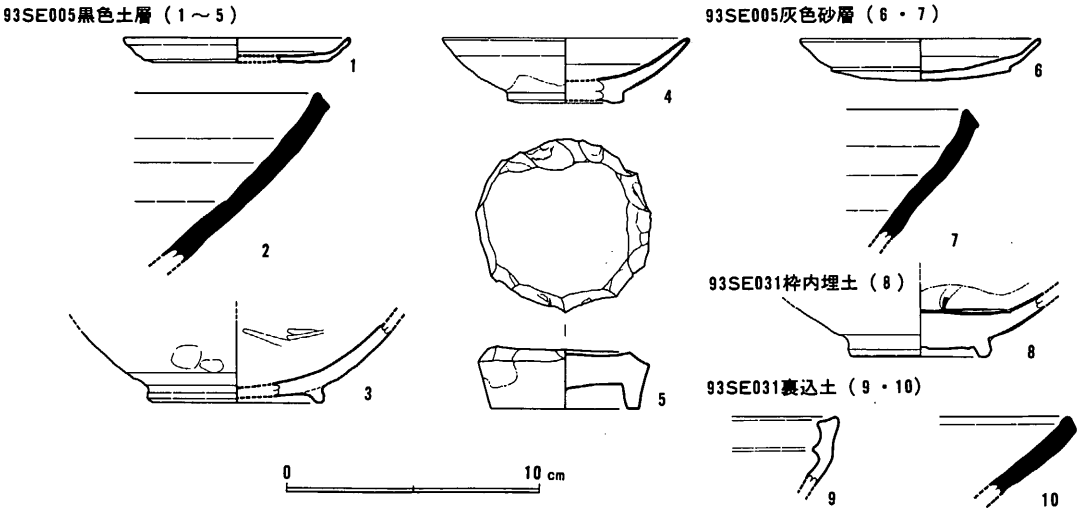


Fig.185　93SE005・031出土土器実測図（1/3）

坏ａ（3）　底径8.8cm。底部はヘラ切りの後丁寧なナデを施す。柱掘り方ｂ出土。

坏（4）　体部中程に屈曲がある。柱掘り方ｉ出土。

大皿ｃ（5）　高台径16.6cm。底部はヘラ切りの後ヨコナデされる。柱掘り方ｂ出土。

93SE005黒色土層出土土器（Fig.185、CD-093096～101）

土師器

小皿ａ（1）　口径8.8cm、器高1.0cm、底径7.4cm。底部は糸切りされる。

須恵器

鉢（2）　体部はヨコナデ調整される。東播系。

瓦器

椀ｃ（3）　高台径7.0cm。外面の下半部には指圧痕、内面はミガキｃを施す。

白磁

皿（4）　口径9.8cm、器高2.6cm、高台径4.7cm。II-1-a類。

椀（5）　高台径5.9cm。体部の割れ面は人為的に打ち欠いて加工している。Ｖ類。

93SE005灰色砂層出土土器（Fig.185、CD-093102～104）

土師器

小皿ａ（6）　口径9.6cm、器高1.7cm、底径7.1cm。底部はヘラ切りされる。

須恵器

鉢（7）　体部はヨコナデ調整される。東播系。

93SE031枠内埋土出土土器（Fig.185、CD-093105･106）

龍泉窯系青磁

椀（8）　高台径5.7cm。体部内面に片切彫りの施文がある。Ｉ-4類。

93SE031裏込土出土土器（Fig.185、107･108）

須恵器

鉢（10）　体部はヨコナデ調整される。東播系。

陶器

鉢（9）　口縁部内面に突帯を設け２段にする。表面は暗褐色を呈し、胎土は暗灰色で白色の砂粒が多数混入している。Ｉ-2-a類。

93SE035出土土器（Fig.186、CD-093109～121）

土師器

坏ａ（1）　口径15.4cm、器高2.7cm、底径10.8cm。底部は板状圧痕が観察されるものの、切り離しは不明。

瓦器

椀ｃ（2）　口径17.7cm、器高5.1cm、高台径5.7cm。底部はヘラ切りされる。口縁部はヨコナデ、体部はミガキｂの後ミガキｃを施す。

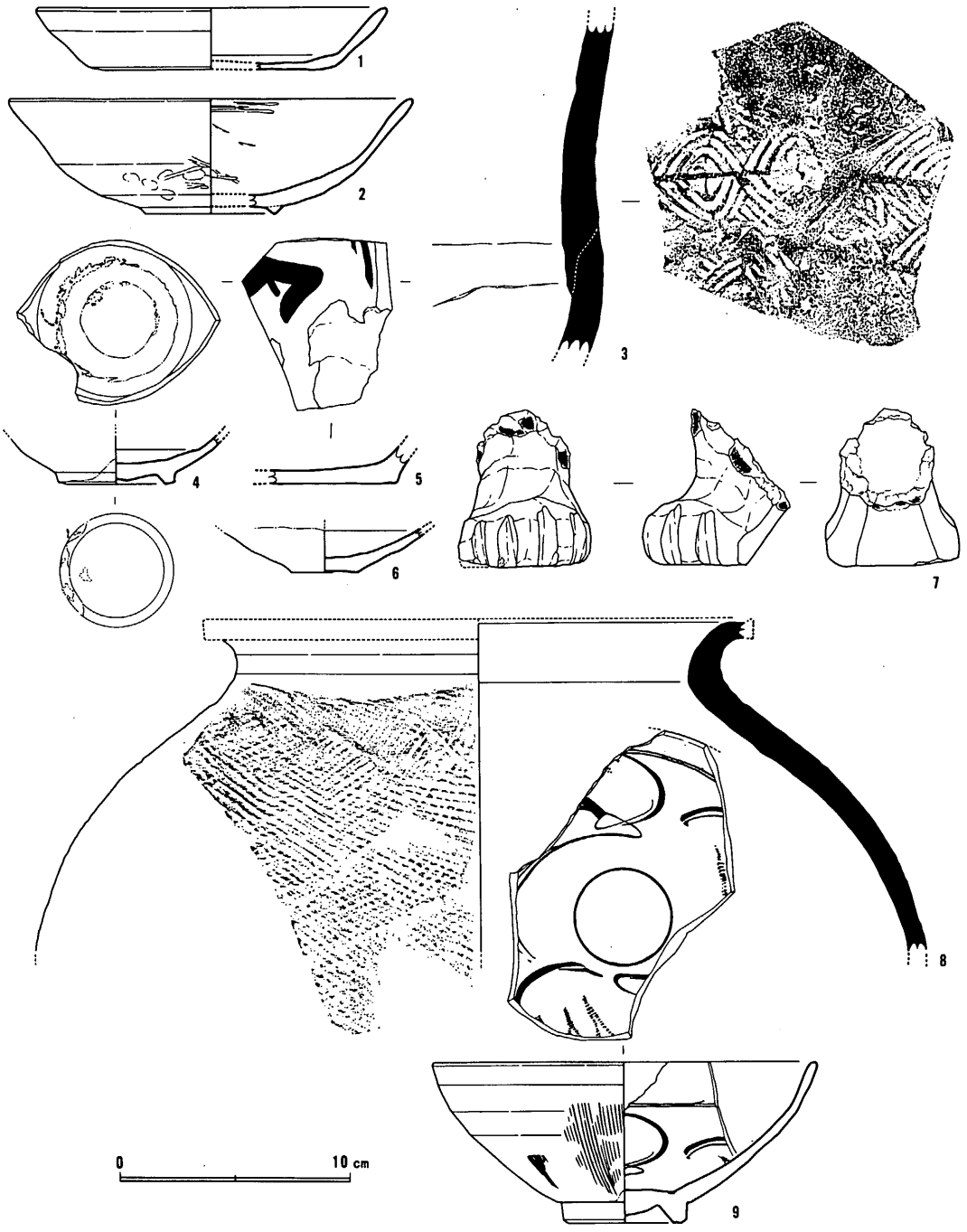


Fig.186　93SE035出土土器実測図（1/3）

須恵器

甕（3･8）　3は外面の叩きが略菱形を呈するものである。内面はナデにより擦り消される。8は口径24.0cmで、外面は平行叩きで肩部付近では逆方向からも叩いており、叩き目が交錯している。内面はヘラケズリ風の強いナデで仕上げられる。東播系。

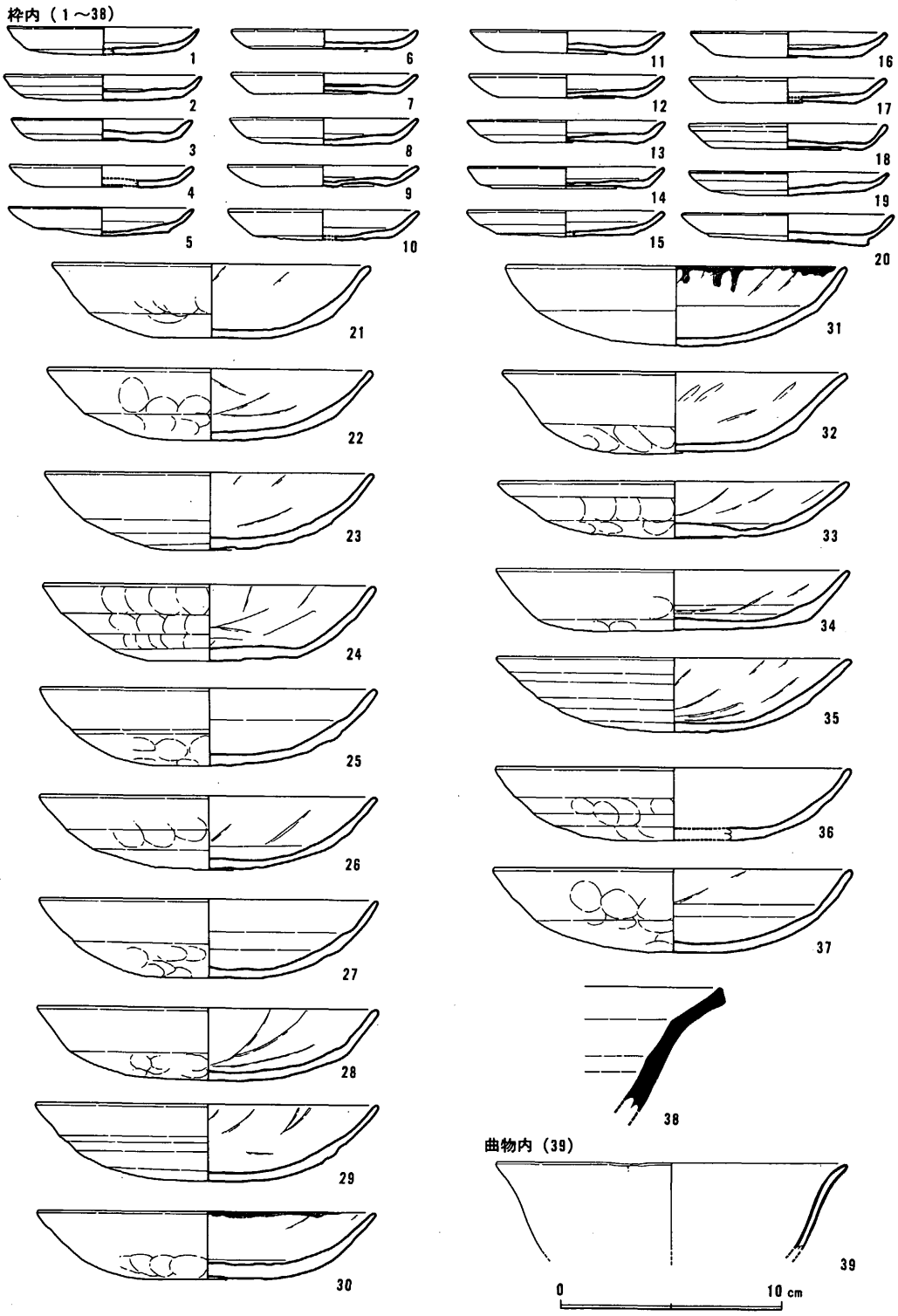


Fig.187　93SE070出土土器実測図（1/3）

獣脚（7）　虎や獅子の足をイメージさせるようなもので、足先は縦方向の切り込みを入れて指を表現する。正面にあたる部分はナデによって仕上げられ、側面と背面はケズリ調整で終わる。脚部の付け根付近で、おそらく剥離した部分の粘土の残るところに布目痕が残る。ただし布目はいわゆる布目痕のスタンプで、布自体が浮き出て見える。

白磁

皿（4･6）　4は高台径5.2cm。見込みは円形に釉を欠き取り、その周囲には帯状の目跡が観察される。畳付けの一部にも目跡状のものが見られる。Ⅲ-1類。6は残存部の範囲内で外面には施釉されない。釉は緑灰色に発色し、貫入がある。Ⅵ-1類。

同安窯系青磁

椀（9）　口径16.8cm、器高7.1cm、高台径5.4cm。内面は口縁部下部に沈線を1条巡らし、それ以下に片切彫り及び櫛による施文がある。外面は回転ヘラケズリの後、縦方向の櫛目を入れる。I-1-b類。

陶器

盤（5）　内面に淡緑茶色に発色する釉をかけ、鉄絵を描く。胎土はやや茶色味を帯びた暗灰色を呈し、暗褐色斑及び砂粒が多量に混在する。

93SE070枠内出土土器（Fig.187、CD-093122～158）

土師器

小皿a（1～20）　1・2は底部をヘラ切りするもので、口径8.8･9.0cm、器高1.3･1.2cm、底径6.8･7.4cmを測る。3～20は底部を糸切りするもので、口径8.2～9.7cm、器高0.9～1.4cm、底径5.6～7.4cmを測る。

丸底坏a（21～37）　口径14.6～16.4cm、器高2.6～3.6cmを測る。底部はすべてヘラ切りされ、内面にはミガキbが観察される。なお33･34は平底風であるが、押し出した形跡があるのと内面にミガキbが存在することからここに含めた。

須恵器

鉢（38）　体部の調整はヨコナデである。資料は片口部分を含んだ破片である。東播系。

93SE070曲物内出土土器（Fig.187、CD-093159･160）

白磁

椀（39）　口径16.0cm。Ⅴ～Ⅷ類。

93SE120出土土器（Fig.188、CD-093161～164）

土師器

小皿a（1）　口径9.2cm、器高1.2cm、底径7.0cm。底部は糸切りされる。

須恵器

鉢（2）　表面はヨコナデ調整される。東播系。

白磁

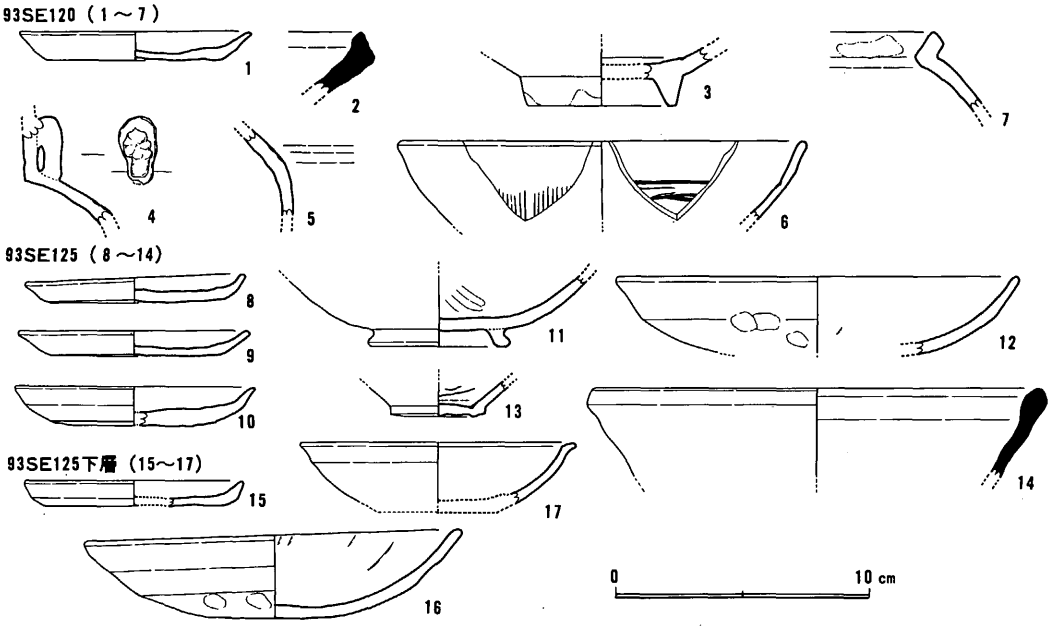


Fig.188　93SE120・125出土土器実測図（1/3）

椀（3）　高台径5.9cm。Ⅴ類。

水注（4・5）　壺の可能性もある。4は耳の付く頸部から肩部にかけての破片で、耳の正面に何らかの文様を配するが釉が厚く明らかではない。型によるものとみられる。Ⅲ類。5は、肩部と体部の境目に稜がある。4と同一個体の可能性がある。

同安窯系青磁

椀（6）　口径16.2cmに復原されるが小片である。内面に片切彫りの文様、外面に縦方向の櫛目を入れる。I-1-b類。

陶器

壺（7）　淡緑色に鈍く発色する釉が外面にかかる。口縁部内側に目跡が残る。

93SE125出土土器（Fig.188、CD-093165～169）

土師器

小皿a（8～10）　口径8.8～9.6cm、器高1.0～1.6cm、底径6.5～7.2cm。底部はヘラ切りされる。

丸底坏a（12）　口径16.0cm。内面はミガキb。

椀c（11）　高台径5.6cm。内面は風化するがミガキがあり、燻されたような形跡があるため黒色土器の可能性も考えておきたい。

須恵器

鉢（14）　口径18.2cmで、端部を肥厚させる。篠窯系。

白磁

小椀（13）　きわめて低い高台の径は3.8cm。外面は露胎で、内面には明白緑色で透明感のあ

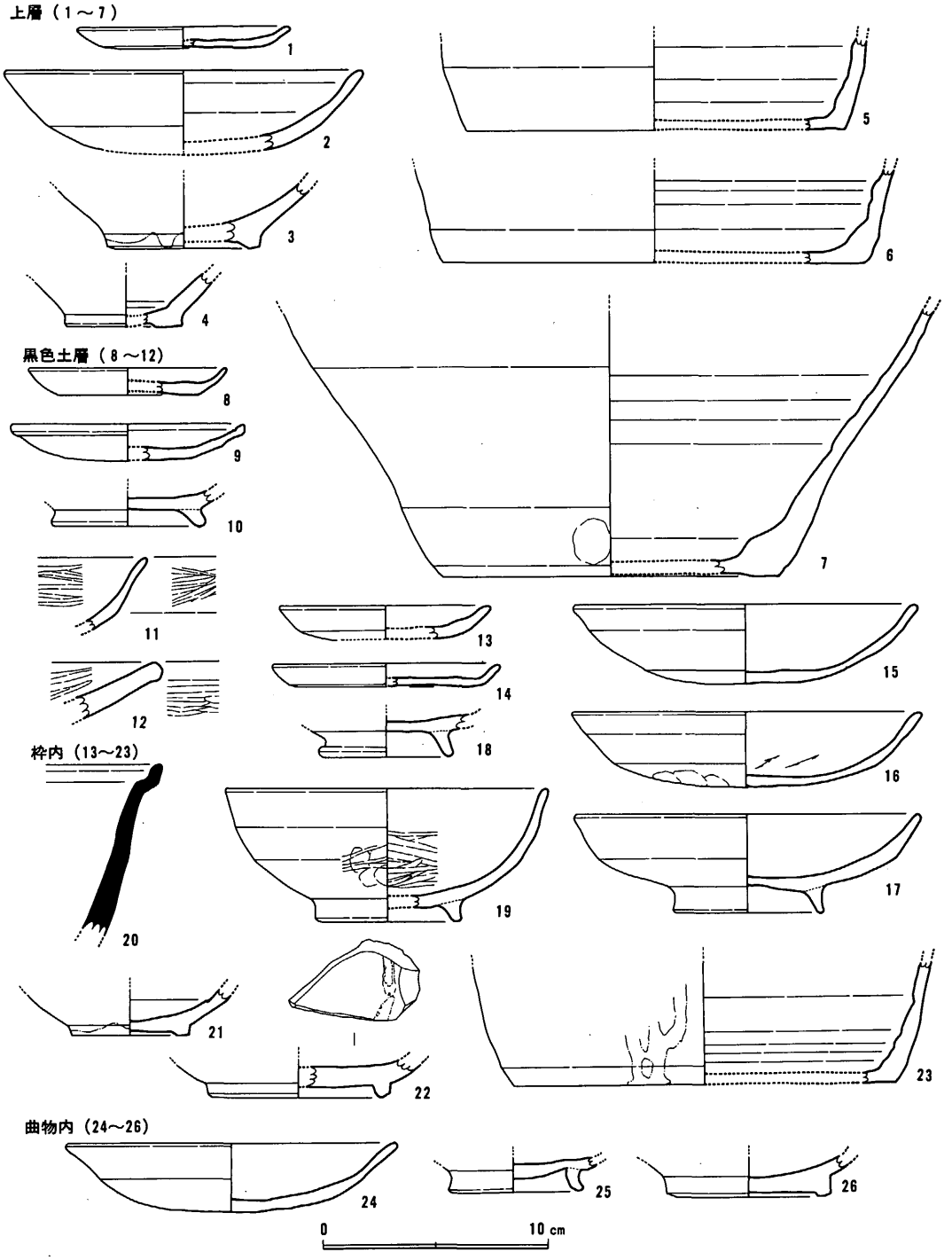


Fig.189　93SE150各層出土土器実測図（1/3）

る釉がかかる。体部に篦先による施文がある。

93SE125下層出土土器（Fig.188、CD-093166･167･170）

土師器

小皿ａ（15）　口径8.7cm、器高1.1cm、底径7.4cm。底部は糸切りと思われる。

丸底坏ａ（16）　口径15.0cm、器高3.3cm。内面はミガキｂ。

白磁

皿（17）　口縁部を外反させるもので、Ⅴ-2類。

93SE150上層出土土器（Fig.189、CD-093171～174）

土師器

小皿ａ（1）　口径9.6cm、器高1.0cm、底径7.5cm。底部はヘラ切りされる。

丸底坏ａ（2）　口径16.1cm。内面はミガキｂとみられる。

白磁

椀（3）　高台径6.8cm。Ⅳ類。

高麗青磁

椀（4）　高台径5.2cm。見込みを円形に窪ませるもので、Ⅰ-1類。

朝鮮系無釉陶器

壺（5～7）　5・6は底径17.0・19.0cm。体部はヨコナデされる。5は黒褐色を呈し、胎土は暗褐色を呈する。6はやや焼成があまく暗灰白色を呈し、胎土も暗灰色を呈している。7は大きく開く胴部を有するもので、甕の可能性もある。体部の調整はヨコナデ。底部径15.0cmで暗灰色を呈し、胎土は暗褐色である。

93SE150黒色土層出土土器（Fig.189、CD-093175・176）

土師器

小皿ａ（8・9）　8は口径8.9cm、器高1.2cm、底径6.3cm。底部の切り離しは不明。9は口径10.6cm、器高1.6cm、底径5.6cm。口縁部は須恵器蓋3を逆にしたような形状を呈している。回転台を使用しているように思えるが、形状から京都系のものの可能性もある。

黒色土器

椀ｃ（10）　Ｂ類で、高台径6.9cm。見込みにミガキｃが観察される。

椀（11）　Ｂ類。体部に屈曲がある。内外面ともにミガキｃが施される。

鉢（12）　Ｂ類。内外面ともにミガキｃが施される。

93SE150枠内出土土器（Fig.189、CD-093177～186）

土師器

小皿ａ（13・14）　口径9.4・10.2cm、器高1.5・1.1cm、底径7.6・8.6cm。底部はヘラ切りされる。

丸底坏ａ（15・16）　口径15.4・15.6cm、器高3.6・3.4cm。底部はヘラ切りされ、内面にはミガキｂが観察される。

丸底坏ｃ（17）　口径15.5cm、器高4.5cm、高台径6.6cm。調整は残念ながら不明。

黒色土器

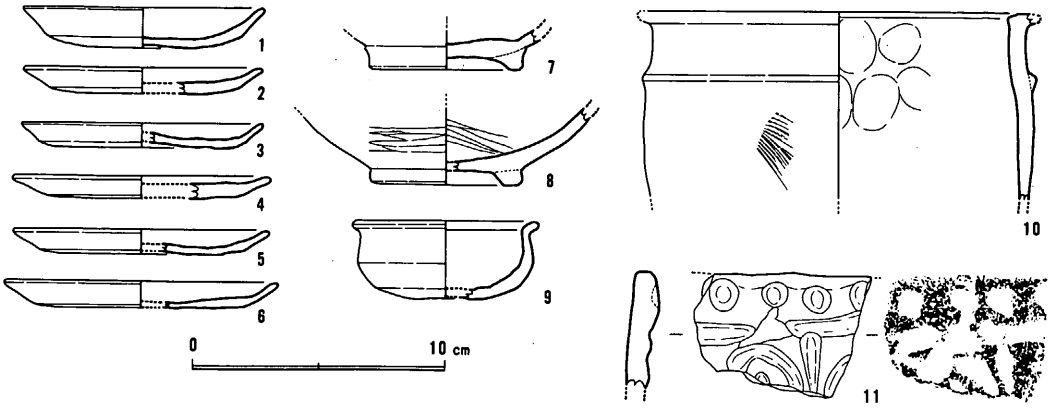


Fig.190　93SE150裏込出土土器実測図（1/3）

椀ｃ（18･19）　18はＡ類で高台径6.0cm。19はＢ類で口径14.4cm、器高6.0cm、高台径6.6cm。外面には指圧痕がありその上からミガキｃがある。内面は丁寧なミガキｃを施す。

須恵器

鉢（20）　口縁部を折り曲げて受け部のように作る。調整はヨコナデである。産地不詳。

白磁

皿（21）　高台径5.2cm。見込みに小さな段がある。II-1類。

越州窯系青磁

椀（22）　高台径8.2cm。畳付け以外は全面施釉され、暗緑灰色に発色する。見込み及び畳付けには目跡が残る。

朝鮮系無釉陶器

壺（23）　底部径17.0cm。外面には黒茶色に発色する自然釉が垂下し、底部に溜まりができている。胎土は暗褐色を呈している。

93SE150曲物内出土土器（Fig.189、CD-093187･188）

土師器

丸底坏ａ（24）　口径14.9cm、器高3.1cm。底部はヘラ切りされ、内面はミガキが施される。

椀ｃ（25）　高台径6.0cm。

白磁

椀（26）　高台径7.4cm。Ⅳ類。

93SE150裏込土出土土器（Fig.190、CD-093189～199）

土師器

小皿ａ（1～6）　口径9.6～10.9cm、器高1.0～1.6cm、底径5.2～8.3cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

椀ｃ（7･8）　畳付けが幅広で平坦な高台を有するもので、底部は糸切りされる。豊前産。8の体部には内外面ともにヘラミガキが観察される。高台径6.1･6.0cm。

小鉢（9）　口径7.4cm、器高3.1cm。体部はヨコナデされる。

弥生土器

甕（10）　口縁部外面に2段の突帯を有するが、風化が著しく刻みの有無は不明。体部はハケ目である。

縄文土器

深鉢（11）　押圧による施文を外面に施す。胎土中に滑石を多量に含んでいる。阿高式。

93SE160上層出土土器(Fig.191、CD-093200・201)

白磁

椀（1）　口径16.0cm。見込みに段がある。Ⅳ-1類。

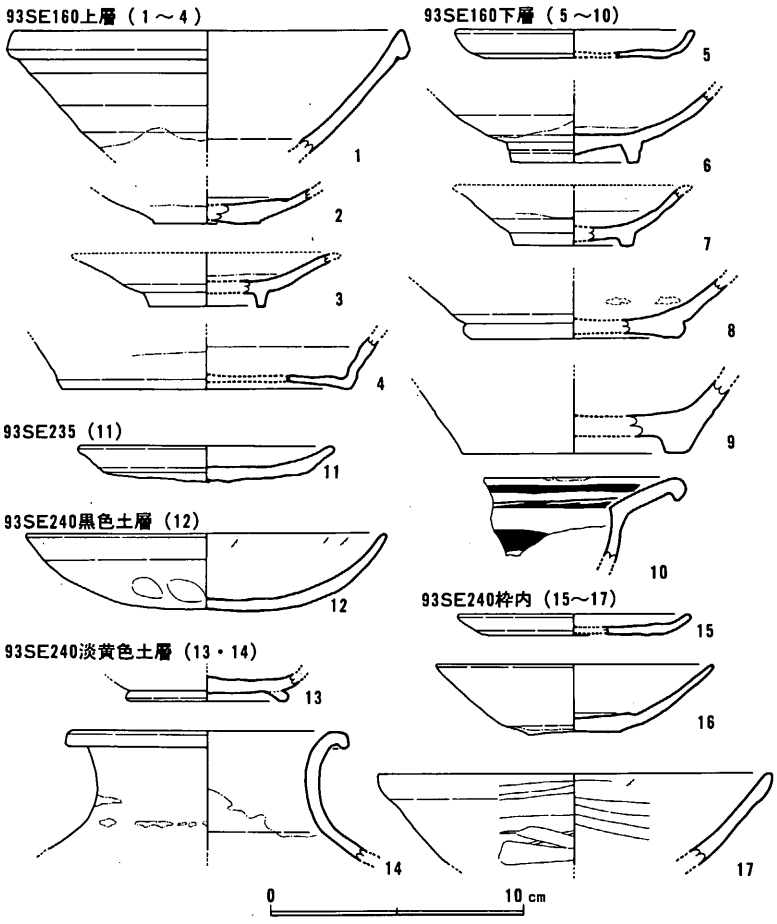


Fig.191　93SE160・235・240出土土器実測図（1/3）

Ⅲ（2・3）　2は底径4.1cm。外面は下半が露胎、内面は全面施釉される。釉は淡黄緑色に発色し、貫入がある。Ⅵ-1-b類。3は高台径4.6cmで、見込みは円形に釉を拭き取る。Ⅲ-1類。

陶器

壺（4）　体部外面の一部に褐釉がかかるが、他は露胎で明灰色を呈している。胎土中に小黒斑が若干みられる。

93SE160下層出土土器（Fig.191、CD-093202～205）

土師器

小皿a（5）　口径9.6cm、器高1.2cm 、底径7.2cm。底部は糸切りされる。

白磁

椀（6）　高台径5.2cm。見込みは輪状に釉を欠き取り、外面の体部下半には施釉されない。Ⅷ類。

皿（7）　高台径4.8cm。釉は暗緑灰色に発色する。Ⅲ-2類。

越州窯系青磁

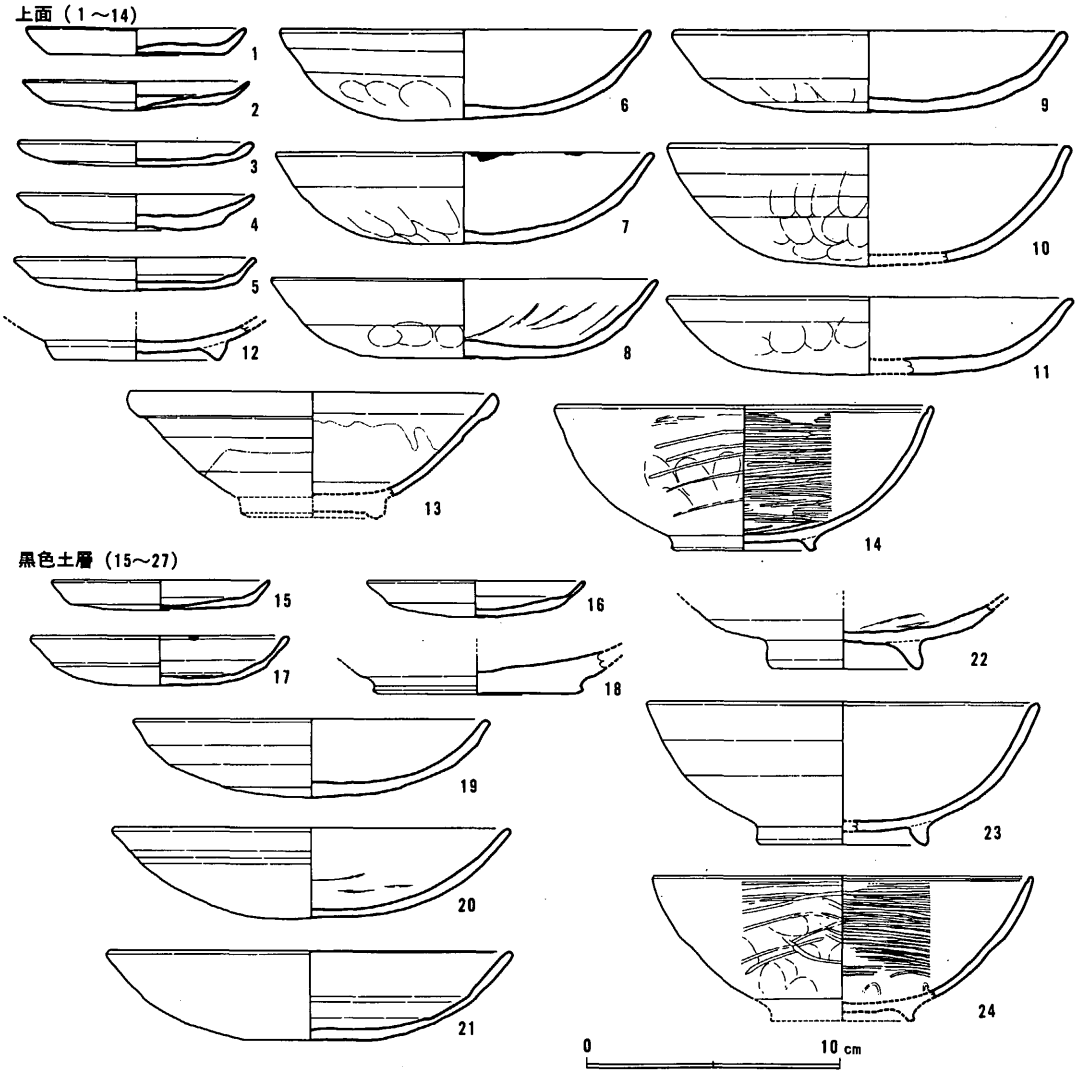


Fig.192　93SE180出土土器実測図1（1/3）

椀（8）　底径8.8cm。残存部の範囲内で外面は露胎、内面は全面施釉される。釉は淡緑灰色に発色し、見込みに目跡が観察される。II-2類。

陶器

壺（9）　底部径9.0cmに復原できるが小片である。光沢がなく明乳緑色に発色する釉は内面にまでかかっている。

盤（10）　体部内面に淡灰茶色で光沢のない釉がかかり、鉄絵が描かれる。I-1-b類。

93SE180上面出土土器（Fig.192、CD-093212～224）

土師器

小皿a（1～5）　口径8.8～9.6cm、器高1.0～1.5cm、底径6.6～8.2cm。底部はすべてヘラ切

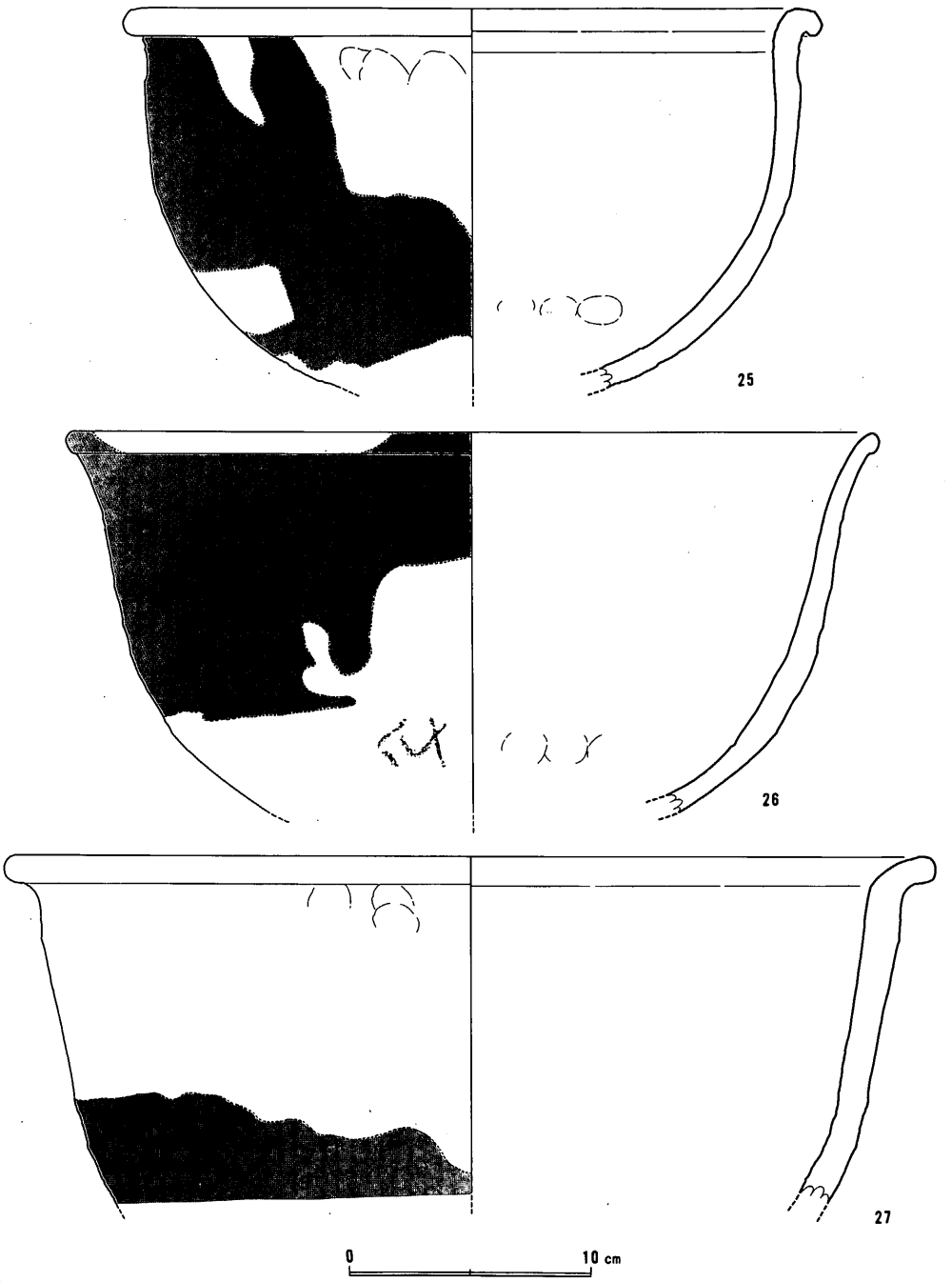


Fig.193　93SE180出土土器実測図２（1/3）

りされる。

丸底坏ａ（6～11）　口径14.8～16.2cm、器高3.2～3.6cm。底部はヘラ切りされ、内面にはミガキｂが観察される。なお10は深さ4.7cm以上あり、椀で捉えるべきかも知れない。

椀ｃ（12）　高台径6.6cm。底部はヘラ切りされる。

瓦器

椀ｃ(14)　口径15.2cm、器高5.8cm、高台径5.8cmを測る。口縁部内面に沈線が巡る。体部外面中位には押圧の痕跡が多数残り、粗めのヘラミガキがある。内面はきわめて丁寧な線の細いミガキｃで、見込みには横線数条の暗文がある。畿内産。

白磁

椀（13）　口径14.9cm。Ⅳ類。

93SE180黒色土層出土土器（Fig.192･193、CD-093225～239）

土師器

小皿ａ(15～17)　口径8.7～10.2cm、器高1.2～2.0cm、底径7.1～8.5cm。底部はすべてヘラ切りされる。

丸底坏a(19～21)　口径14.2～16.2cm、器高3.2～3.6cm。底部はヘラ切りされ、内面にはミガキｂが観察される。

椀（18）　低い円盤状を呈する底部は糸切りによって形成されたものである。器肉は厚く、胎土中に砂粒若干と白色微粒子が多量に混在している。備後周辺のものか。

椀ｃ(22･23)　22は高台径6.2cm。底部はヘラ切りされる。23は口径15.6cm、器高5.7cm、高台径6.9cmを測る。底部はヘラ切りされる。

鍋（25～27）　口径29.1～38.8cm。25･27の口縁部は小さく外反させるが、26では開き気味に立ち上り端部をわずかに膨らませて終わる。いずれも口縁部付近はヨコナデ、体部中位までの内外面は工具を利用したような強めのナデないしはヨコナデ、内面底部近くは指圧痕がみられ、外面の下半は格子叩きの痕跡が残っている。外面に煤が付着している。

瓦器

椀ｃ(24)　口径15.2cmを測る。口縁部内面に沈線が巡る。体部外面中位には押圧の痕跡が多数残り、粗めのヘラミガキがある。内面はきわめて丁寧な線の細いミガキｃが施される。瓦質化していない部分が多く、大半が明白茶色を呈している。畿内産。

93SE200上面出土土器（Fig.194、CD-093240～

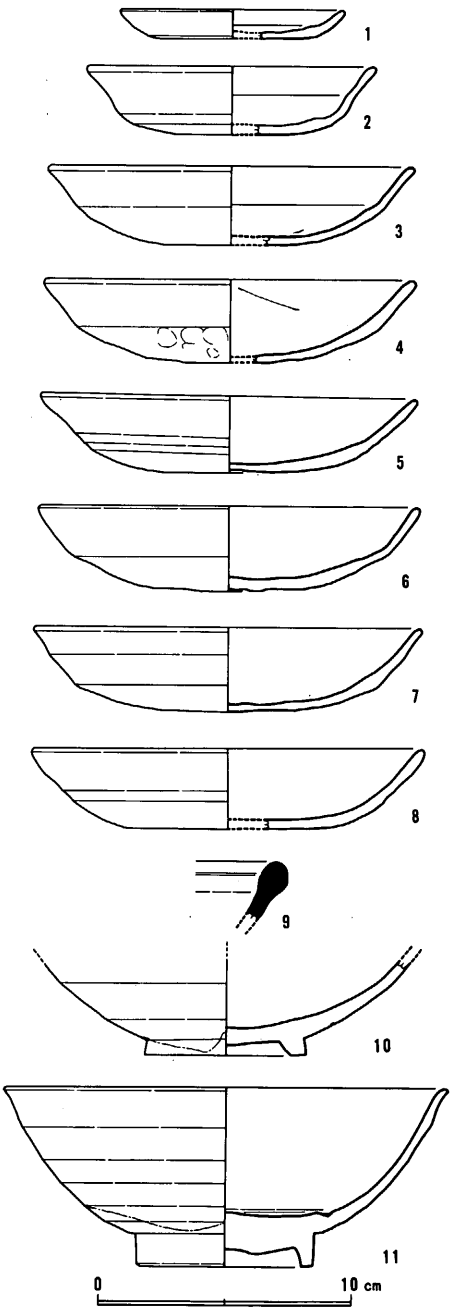


Fig.194　93SE200上面出土土器実測図（1/3）

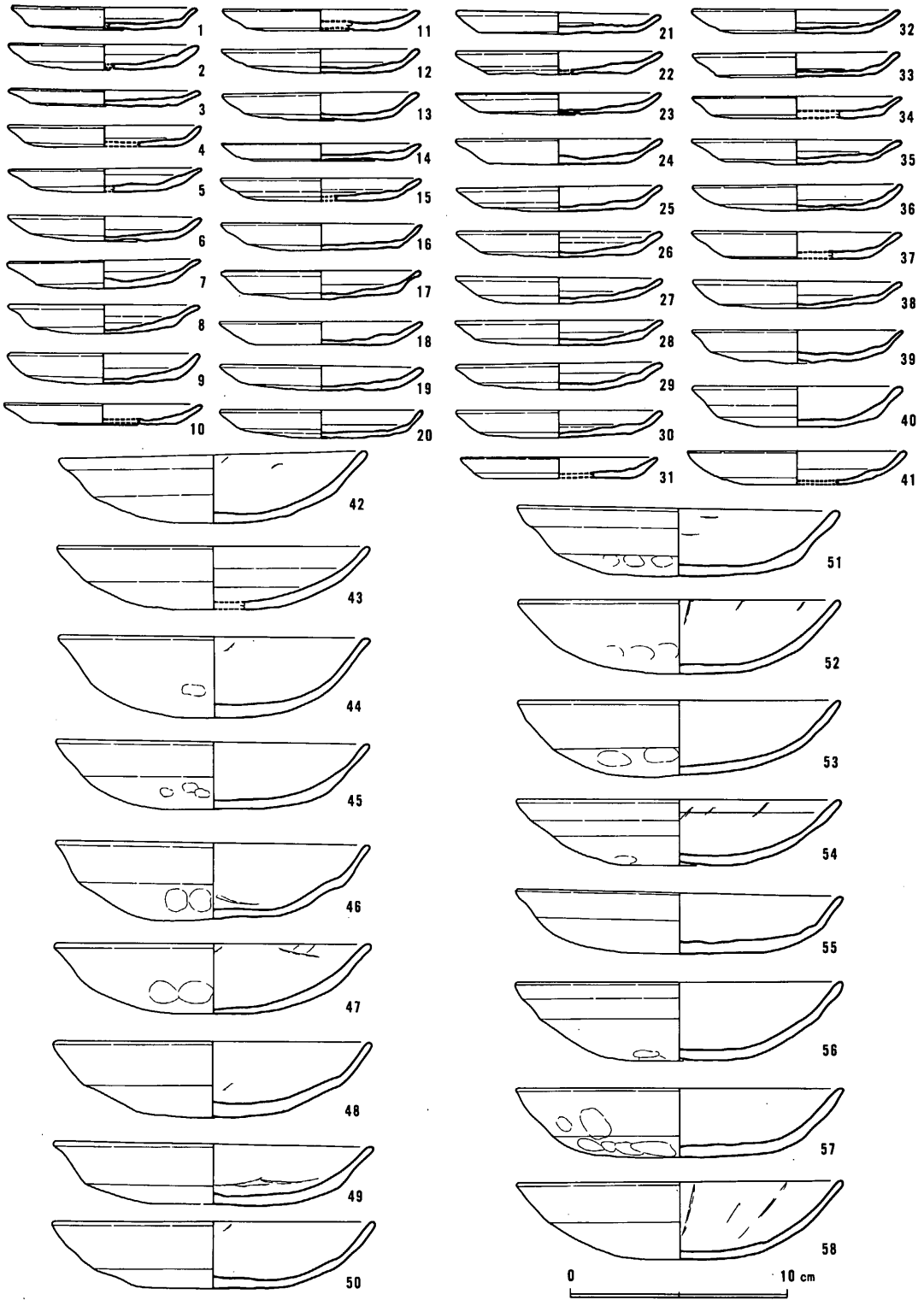


Fig.195　93SE200黒色土層出土土器実測図１（1/3）

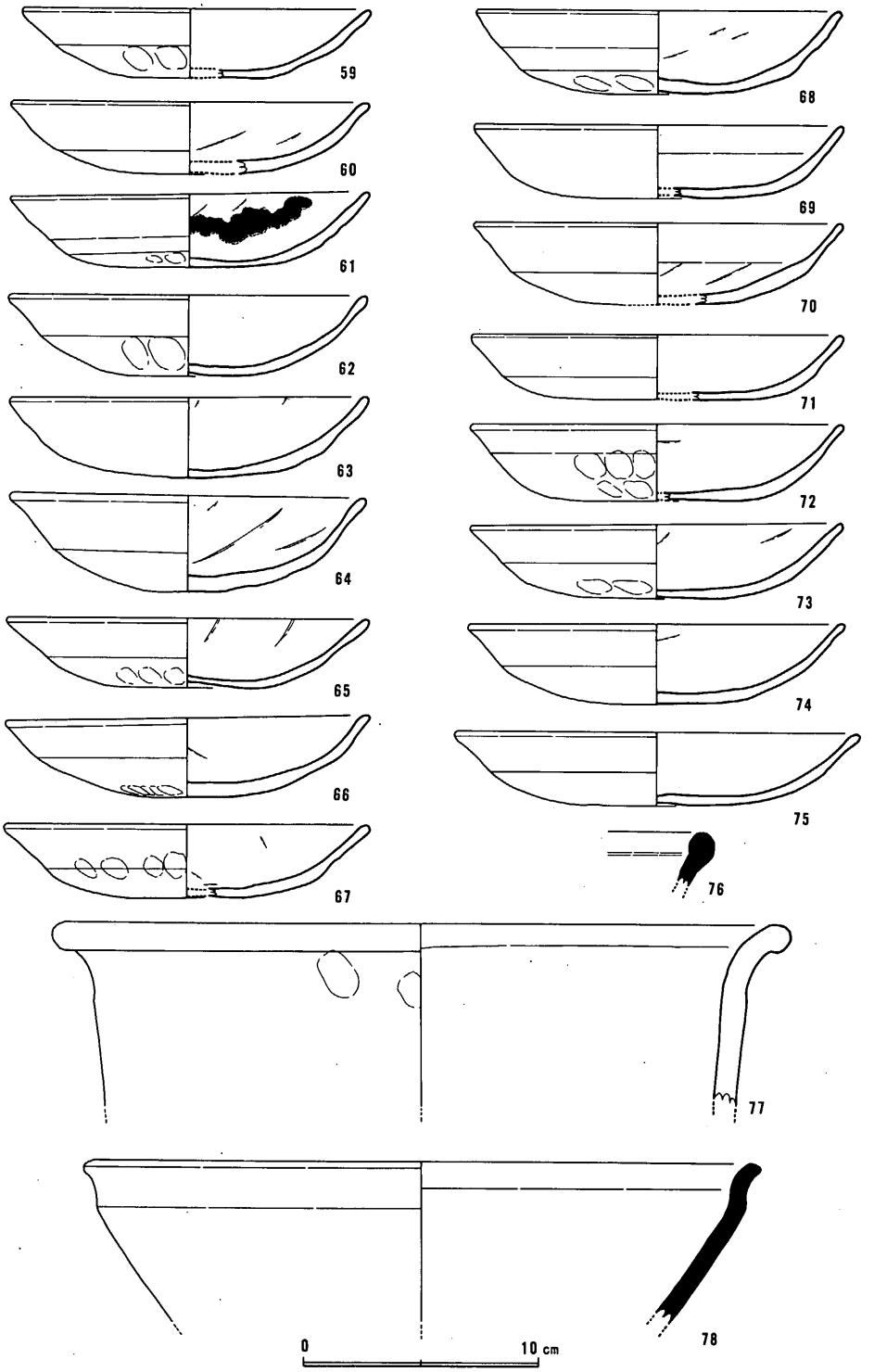


Fig.196　93SE200黒色土層出土土器実測図２　(1/3)

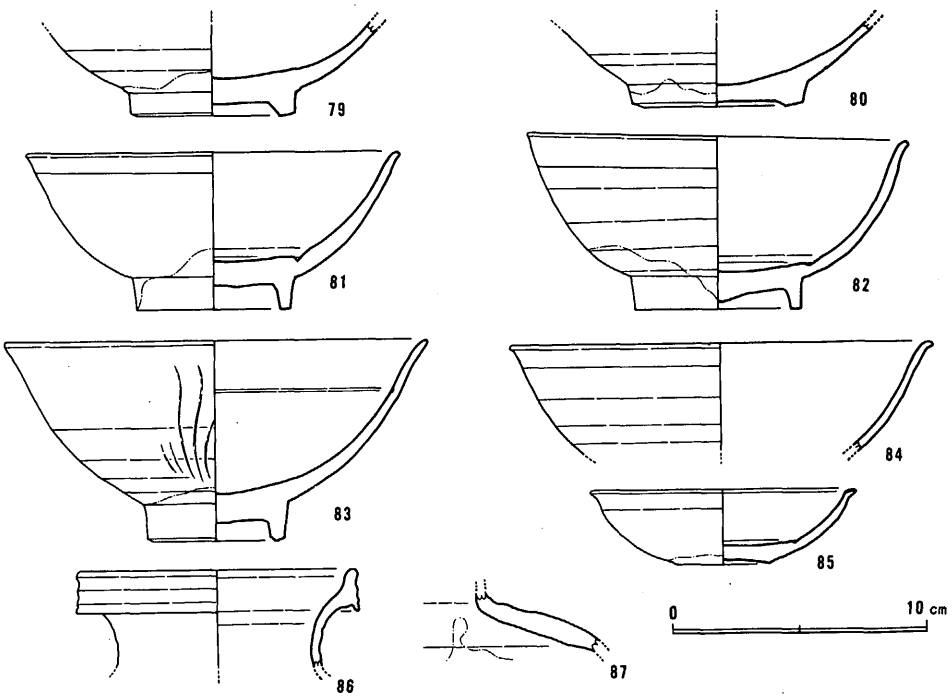


Fig.197　93SE200黒色土層出土土器実測図３（1/3）

250)

土師器

小皿ａ（1）　口径9.0cm、器高1.2cm、底径6.7cmを測る。底部の切り離しは不明。

坏ａ（2）　口径11.4cm、器高2.8cm、底径7.9cmを測る。底部はヘラ切りされる。

丸底坏ａ（3～8）　口径14.6～15.6cm、器高3.1～3.4cmを測る。底部はすべてヘラ切りされ、内面にはほとんどの資料でミガキｂが観察される。

須恵器

鉢（9）　口縁端部を玉縁状に作るもので、篠窯系。

白磁

椀（10･11）　10は高台径6.4cmで、II類。11は口径17.6cm、器高7.2cm、高台径7.0cmを測る。体部下半以下には施釉されない。V-2類。

93SE200黒色土層出土土器（Fig.195～197、CD-093251～324）

土師器

小皿ａ(1～41)　口径8.6～10.2cm、器高0.8～1.9cm、底径6.4～8.1cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

丸底坏ａ（42～75）　口径14.3～17.4cm、器高2.8～4.2cmを測る。底部はすべてヘラ切りされ、内面にはほとんどの資料でミガキｂが観察される。

鍋（77）　口径31.6cm。口縁端部を玉縁状に作る。口縁部付近はヨコナデであるが、体部は

強めのナデで仕上げられる。胎土中に砂粒を多量に含んでいる。

須恵器

鉢（76・78）　76は口縁端部を玉縁状に作るもので、篠窯系。灰白色を呈し、軟質に焼成される。78は口径29.0cmに復原されるが、小片である。外面の体部下半は工具による粗雑なナデ調整で、内面も口縁部付近以下はナデである。

白磁

椀（79～84）　79は高台径6.6cmを測るII類で、体部下半には施釉されない。80は高台径6.7cmのIV類である。81・82は口径14.8・15.1cm、器高6.3・6.4cm、高台径6.1・6.6cmを測る。いずれも体部下半には施釉されない。V-1類。83は口縁部内面下位に沈線が巡り、体部外面にはヘラにより縦線文が施される。V-2類。84は口縁部を小さくつまみ出すもので、口径16.8cmを測る。V-3類。

皿（85）　口径10.6cm、器高3.0cm、底径3.7cmを測る。口縁部を小さく外方に折り曲げるも

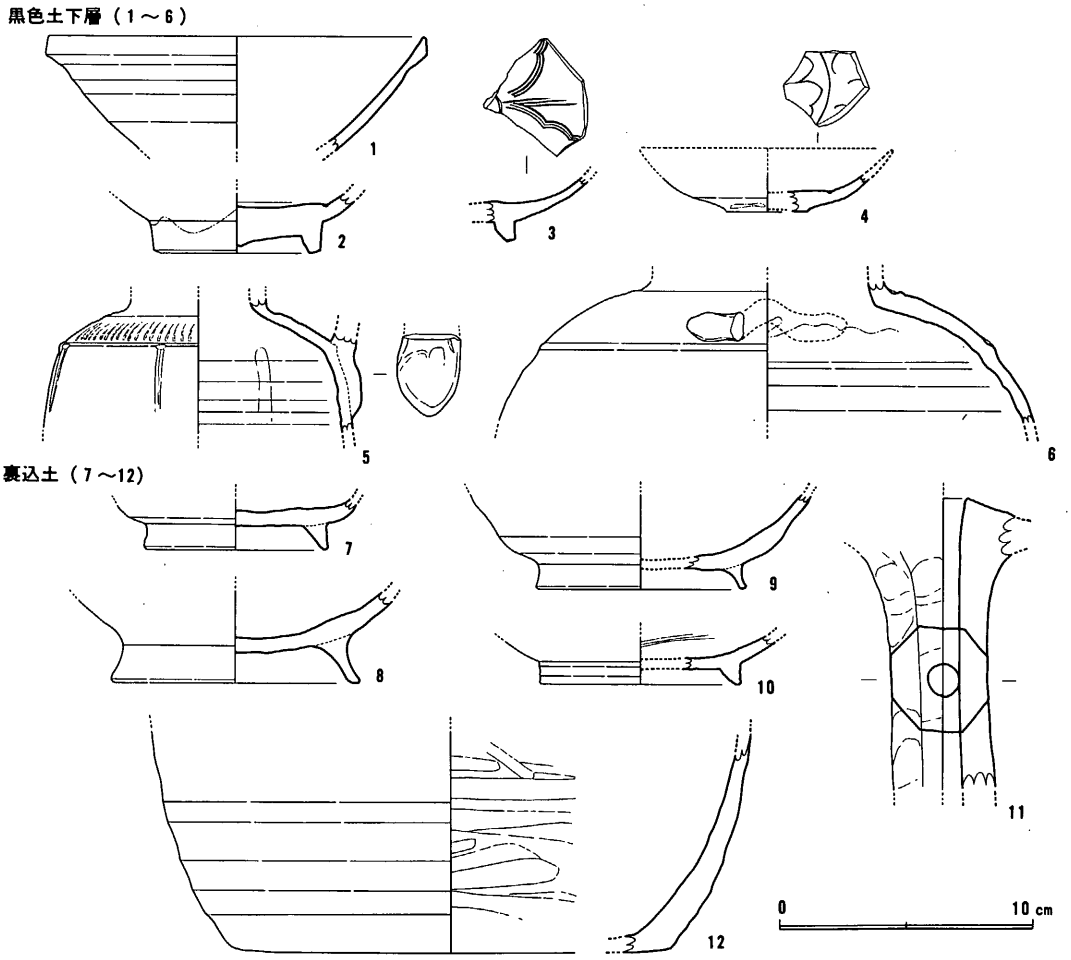


Fig.198　93SE200黒色土下層・裏込土出土土器実測図（1/3）

ので、体部下半以下には施釉されない。V-2類。

朝鮮系無釉陶器

壺（86）　口径11.2cm。外面は暗灰黒色を呈し、内面は付着物で覆われる。胎土は暗褐色できわめて硬質に焼成される。

緑釉陶器

壺（87）　短頸壺とみられる肩部である。外面にかかる釉はやや厚めで淡緑灰色に発色し、内面に垂下するものは明黄緑色に発色する。胎土は淡茶白色でやや軟質に焼成される。

93SE200黒色土下層出土土器（Fig.198、CD-093325～332）

白磁

椀（1～3）　1は口径15.2cmで、Ⅳ類。2は高台径6.6cmで、Ⅴ類。3は、見込み中央が円形に盛り上がり、そこから派生するような花弁をイメージした文様が櫛により施される。XIII類。

皿（4）　底径3.4cmで、内面に細いヘラによる文様が施される。Ⅶ-1-b類。

水注（5）　縦方向の把手が取付られていた部分の資料で、肩部に櫛目文様を巡らし、体部にはヘラの押圧によって縦方向の沈線を入れる。外は施釉され、内面は露胎でヨコナデされる。

青白磁

壺（6）　頸部と肩部の境付近と、肩部と胴部の境目付近に各1条の突帯を巡らし、下位の突帯付近に耳部が取り付く。外面の釉は淡白青緑色に発色し、光沢があり貫入が多数みられる。内面は肩部付近まで釉が垂下するが、胴部は露胎でヨコナデされる。

93SE200裏込土出土土器（Fig.198、CD-093333～336）

土師器

椀ｃ（7･8）　高台径7.3･9.8cm。8は明茶褐色を呈している。

器台（11）　支柱部分をヘラケズリによって八角形にする。中央部に径1.2cmの穿孔がある。

黒色土器

椀ｃ（9）　A類。高台径8.3cm。内面は風化してヘラミガキを認識できない。

鉢（12）　A類。内面に幅広のミガキｃが施される。外面は粗いヨコナデである。

緑釉陶器

椀（10）　高台径8.0cmで、内面にヘラミガキが認められる。釉は淡緑白色に発色するが、高台部分にはほとんどかからない。胎土は明灰色を呈し、硬質に焼成される。京都産か。

93SE235出土土器（Fig.191）

土師器

小皿ａ（11）　口径10.2cm、器高1.5cm 、底径8.2cm。底部はヘラ切りと思われる。

93SE240黒色土層出土土器（Fig.191、CD-093206）

土師器

丸底坏ａ（12）　口径14.3cm、器高3.1cm。底部はヘラ切りされ、内面にはミガキｂが観察さ

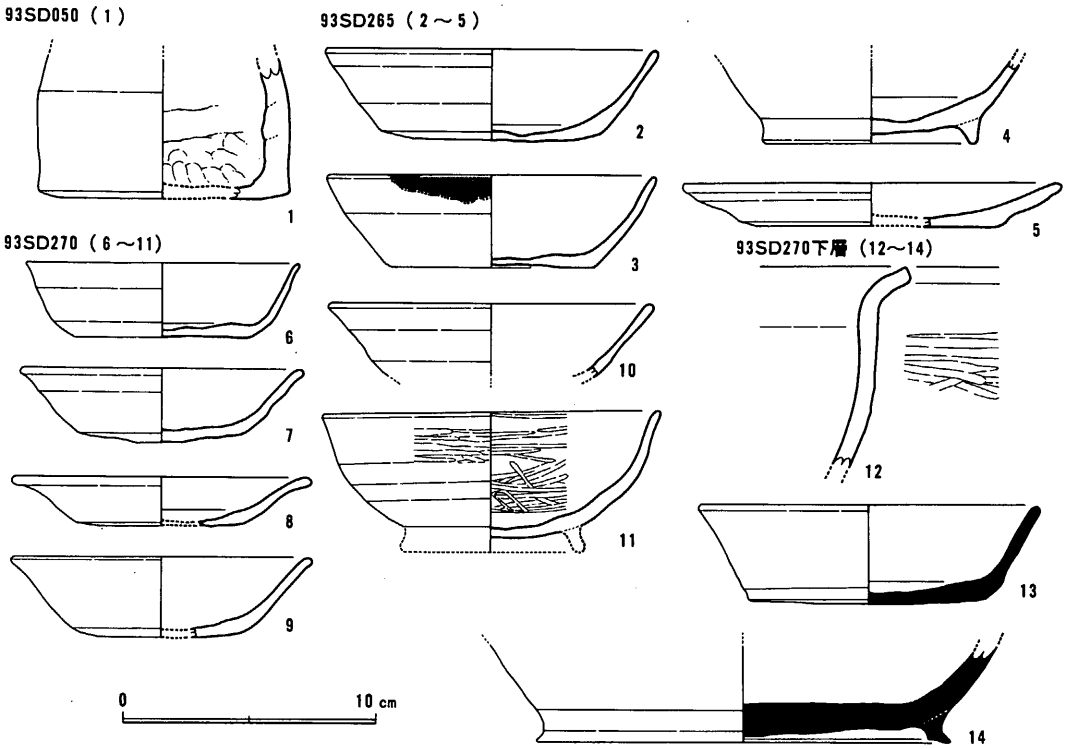


Fig.199　93SD050・265・270出土土器実測図（1/3）

れる。

93SE240淡黄色土層出土土器（Fig.191、CD-093207・208）

瓦器

椀ｃ（13）　高台径6.4cm。見込みはミガキｃが施される。

陶器

壺（14）　口径11.2cm。釉は剥離したためか明茶白色を呈する部分を随所に認める程度で、本来の釉調を留めるのは頸部末端のごくわずかな部分である。釉は淡緑茶色に発色する。胎土は淡灰色で、黒色斑を含んでいる。

93SE240枠内埋土出土土器（Fig.191、CD-093209～211）

土師器

小皿ａ（15）　口径9.3cm、器高0.9cm 、底径7.1cm。底部はヘラ切りされる。

瓦器

椀（17）　口径15.6cm。内外面ともにミガキｃが施される。

白磁

皿（16）　口径11.0cm、器高2.6cm 、底径3.7cm。釉は淡緑灰色に発色し、内面の一部は淡茶色に変色している。体部外面下半以下には施釉されない。

93SD050出土土器（Fig.199、CD-093337）

土師器

小壺（1）　底径10.0cm。外面はヨコナデ、内面もヨコナデで仕上げられるが底部近くには指圧痕が多数見られる。また粘土紐の痕跡も明瞭である。

93SD265出土土器（Fig.199、CD-093338～340）

土師器

坏ａ（2･3）　口径13.2･13.0cm、器高3.7cm、底径8.6･8.0cm。底部はヘラ切りされる。

椀ｃ（4）　高台径8.5cm。底部はヘラ切りされる。

皿ａ（5）　口径15.0cm、器高1.8cm、底径10.5cmを測る。底部はヘラ切りされる。

93SD270出土土器（Fig.199、CD-093341～344）

土師器

坏ａ（6～9）　口径10.9～12.0cm、器高2.0～3.2cm、底径6.5～7.1cm。底部はすべてヘラ切りされる。

坏（10）　口径12.9cm。

黒色土器

椀ｃ（11）　Ｂ類。口径15.4cmを測る。外面体部下半は回転ヘラケズリ調整される。内外面ともにミガキｃが施される。

93SD270下層出土土器（Fig.199、CD-093345～347）

土師器

甕（12）　体部外面はヘラミガキ、口縁部はヨコナデ、体部内面はヘラケズリである。

須恵器

坏ａ（13）　口径13.6cm、器高3.9cm、底径9.4cm。外面底部にはハケ目状のナデが縦横にみられる。

大椀ｃ（14）　高台径16.4cm。内面は粗いナデもしくはヨコナデで、凹凸が著しい。壺類の可能性も考えておきたい。

93SD275出土土器（Fig.200～203、CD-093348～404）

土師器

坏ａ（1～26）　口径12.4～13.6cm、器高3.2～4.0cm、底径6.7～9.0cm。底部はすべてヘラ切りされる。5の口縁部には煤が多量に付着しており、11の内面には赤色顔料が塗布されたような形跡がある。また26の底部には「大」とみられる墨書がある。

皿ａ（27～35）　口径13.0～15.0cm、器高1.6～2.4cm、底径9.7～11.4cm。底部はすべてヘラ切りされる。

椀ｃ1（36～43）　口径14.4～15.8cm、器高4.2～6.4cm、高台径8.0～8.9cmを測る。38の底部には焼成後に穿たれる穿孔がある。

大椀ｃ（44･45）　大振りのもので口径18.3･18.6cm、器高6.5･8.2cm、高台径9.1･9.9cmを測る。44は古いタイプで、体部をヘラケズリにより成形し、内外面ともにミガキａを施す。色調

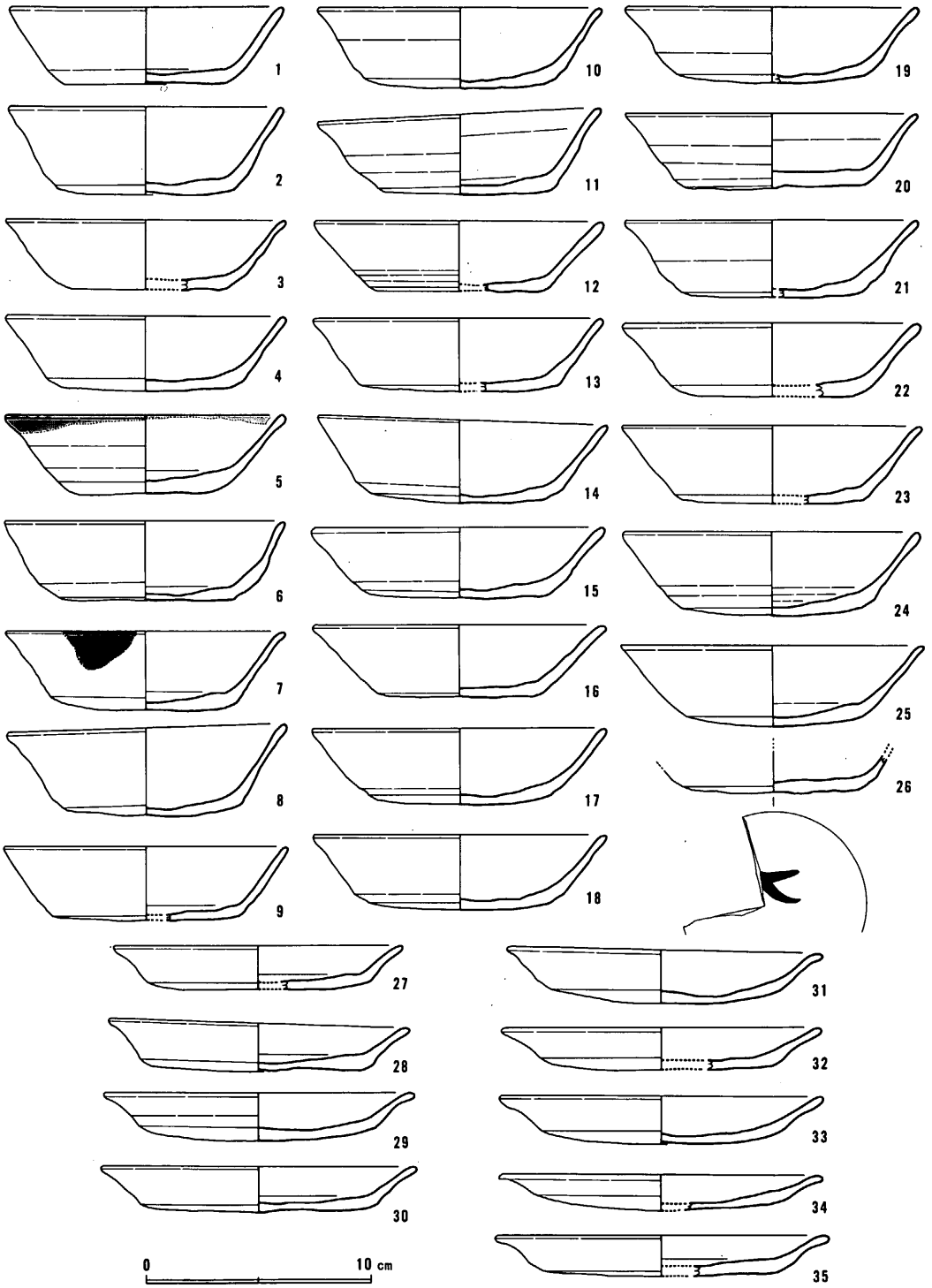


Fig.200　93SD275出土土器実測図１（1/3）

も明茶色を呈している。45は前記椀c1の大型のものと認識される。

椀c（46～53）　高台径8.6～9.6cm。底部にヘラ切り痕を残すものが多い。

甕（54～61）　54は口径18.0cm。体部外面はハケ目、内面は口縁部付近がハケ目、体部はヘ

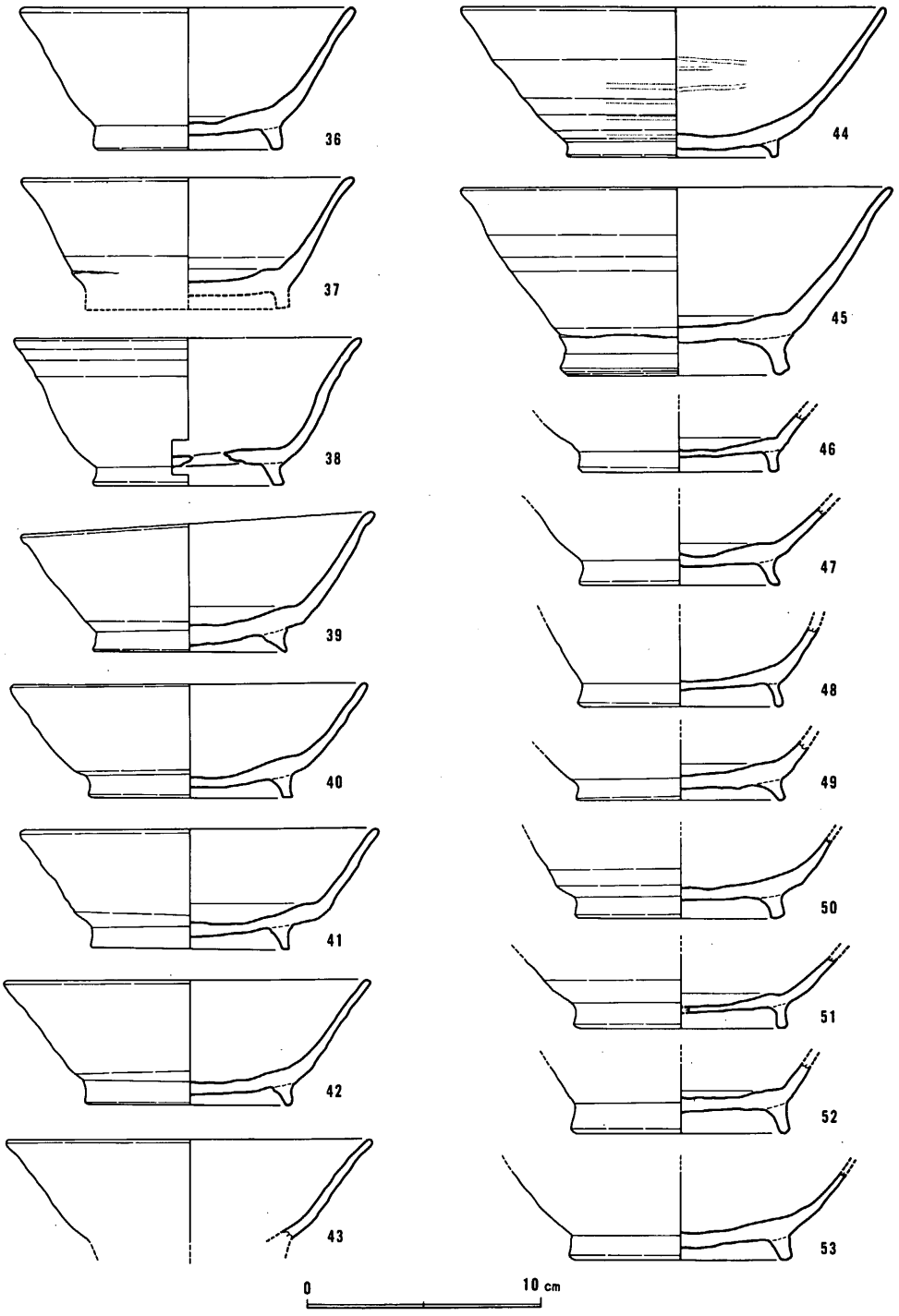


Fig.201　93SD275出土土器実測図2（1/3）

ラケズリである。55は口径19.2cm。体部外面はハケ目、内面はヘラケズリである。口縁部付近はヨコナデである。56は口径22.4cm。体部外面はハケ目、内面は口縁部付近がハケ目、体部は

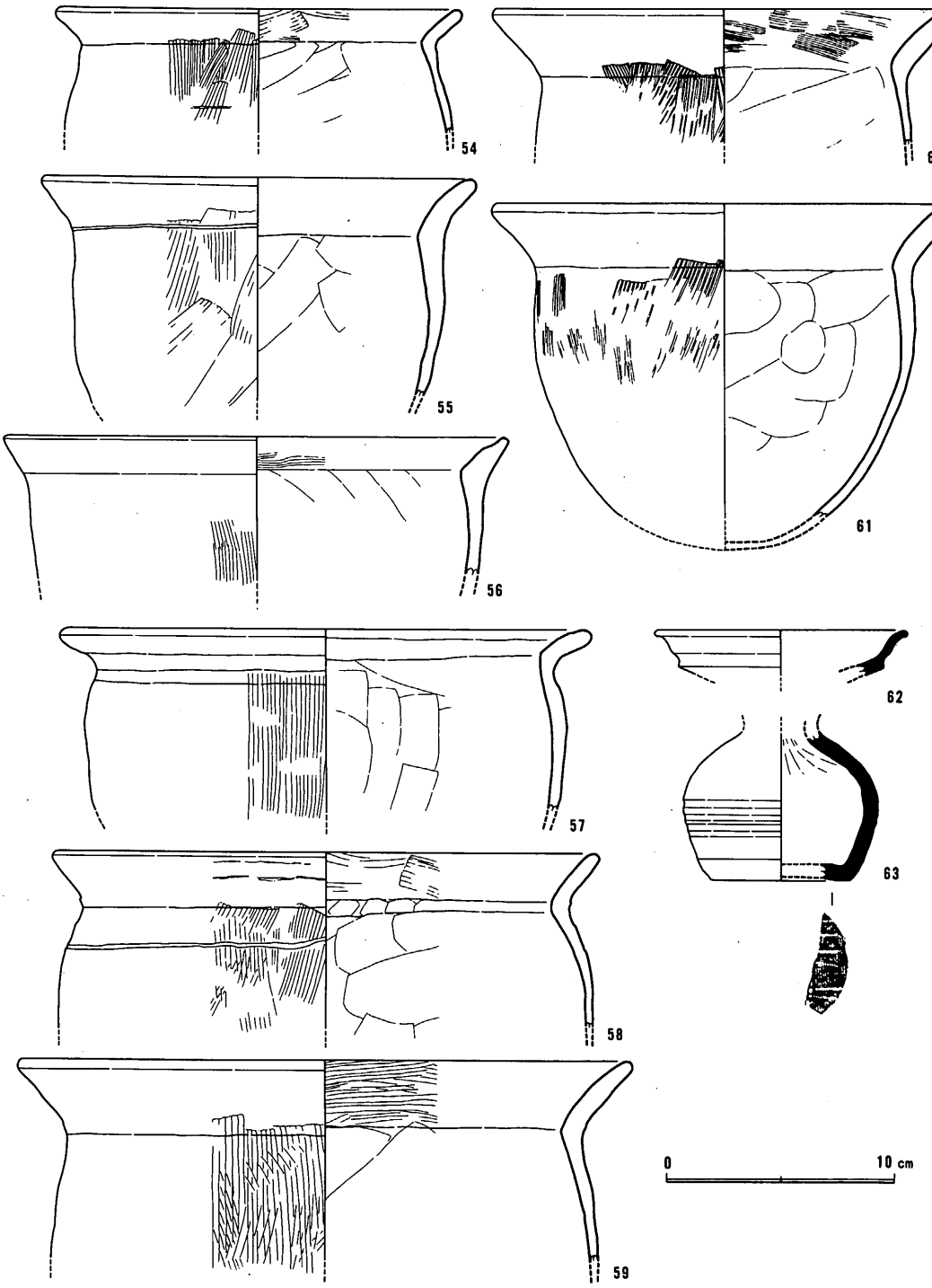


Fig.202　93SD275出土土器実測図３（1/3）

ヘラケズリである。55・56ともに外面では口縁部と体部の境目は不明瞭である。57は口径23.6cm。体部外面はハケ目、内面はヘラケズリである。口縁部付近はヨコナデである。58は口径24.2cm。体部外面はハケ目、内面は口縁部付近がハケ目、体部はヘラケズリである。59～61は、体部から大きく開く口縁部を有するもので口径27.2・20.5・20.6cm。59・60は体部外面はハケ目、内面は口縁部付近がハケ目、体部はヘラケズリである。61は口縁部が内外面ともにナデである。

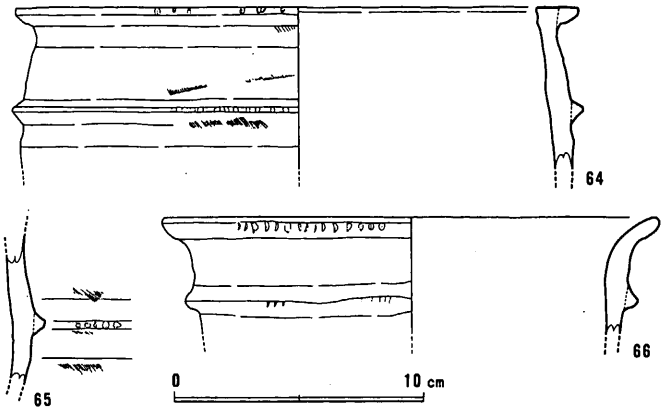


Fig.203　93SD275出土土器実測図4　(1/3)

須恵器

壺（62）　口径11.2cm。壺の口縁部と判断したが疑問な点もないわけではない。

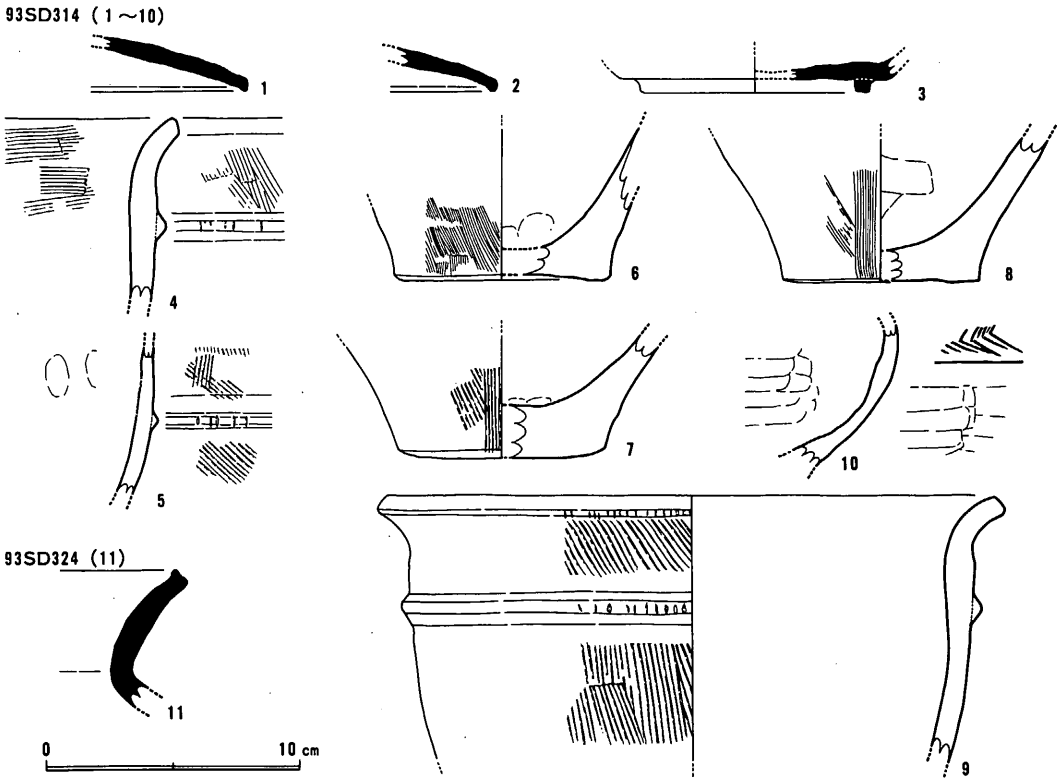


Fig.204　93SD314・324出土土器実測図（1/3）

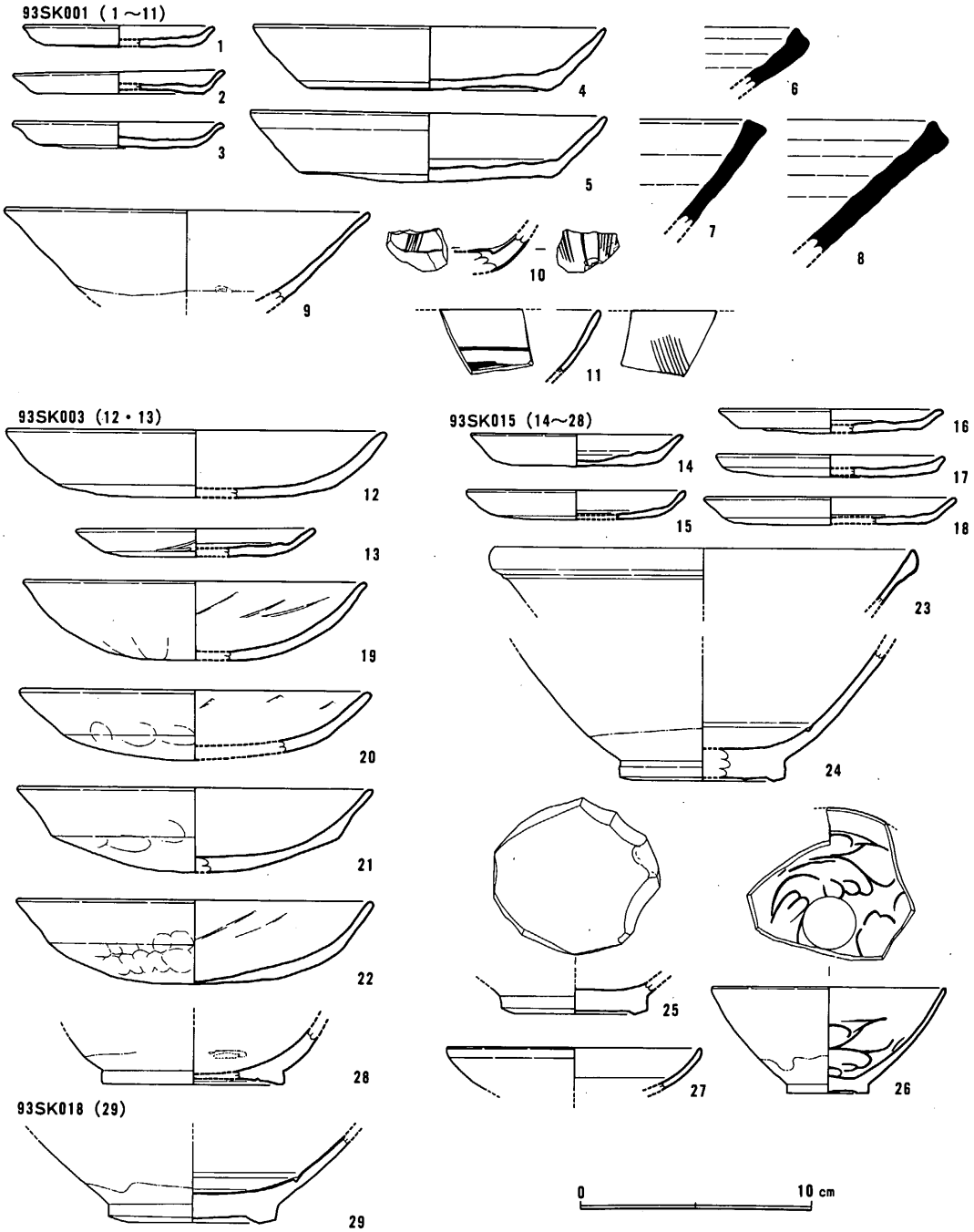


Fig.205　93SK001・003・015・018出土土器実測図 (1/3)

小壺 (63)　底径6.2cm。底部外面に板状圧痕状のものが残る。体部はヨコナデで仕上げられる。

弥生土器

甕 (64～66)　64は口径22.6cm。口縁部下位に突帯を巡らせ、口縁端部とともに先端に刻み

目を入れる。65も同様に口縁部近くの資料と見られ、突帯の先端には刻み目が観察される。66は口径20.0cm。外反する口縁部の先端及び突帯に刻み目を入れる。

93SD314出土土器（Fig.204、CD-093405～412）

須恵器

蓋3（1･2）　ともに端部を小さな三角形状につくる。天井部はナデもしくはヨコナデである。

坏ｃ（3）　高台径9.1cm。底部はヘラ切りである。

弥生土器

甕（4～9）　4は口縁部付近の資料で、口縁部下位に突帯が巡る。突帯の先端には刻みがあるが、口縁端部については風化のため明らかではない。調整は外面が縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目である。5もおそらく口縁部近くの資料とみられ、口縁部下位に突帯が巡り、その先端には刻みがある。調整は外面が縦及び斜め方向のハケ目、内面は風化するが指圧痕が一部にみられる。6～8は底部資料で、底径7.8～8.6cm。外面に縦方向のハケ目が残る。9は口径24.9cm。口縁端部と突帯先端に刻み目が巡る。調整は外面が縦方向のハケ目、内面は風化のため不明である。

壺（10）　胴部の最大径を持つ付近に沈線を巡らせ、そこに綾杉文様を施す。外面の下位は横方向の工具を用いたとみられるナデ、内面は強めのナデで仕上げる。

93SD324出土土器（Fig.204）

須恵器

甕（11）　口縁端部をわずかに摘み出す。

93SK001出土土器（Fig.205、CD-093413～421）

土師器

小皿ａ（1～3）　口径8.4～9.8cm、器高1.0～1.2cm、底径6.7～7.4cm。1･2の底部は糸切り、3はヘラ切りである。

坏ａ（4･5）　口径15.4･15.6cm、器高2.8･3.2cm、底径10.7･11.0cmを測る。両者とも底部は糸切りされる。

須恵器

鉢（6～8）　6には片口部の一部が残存している。すべて東播系と考えられる。

白磁

椀（9）　口径16.0cm。体部外面下半には施釉されない。また見込みの釉は拭き取っていた形跡がみられる。Ⅷ-2類。

龍泉窯系青磁

椀（10）　小片である。釉はかなり厚めにかかり、透明感がある明緑白色に発色するもので大きな貫入が認められる。内外面ともに体部に櫛目の文様がある。

同安窯系青磁

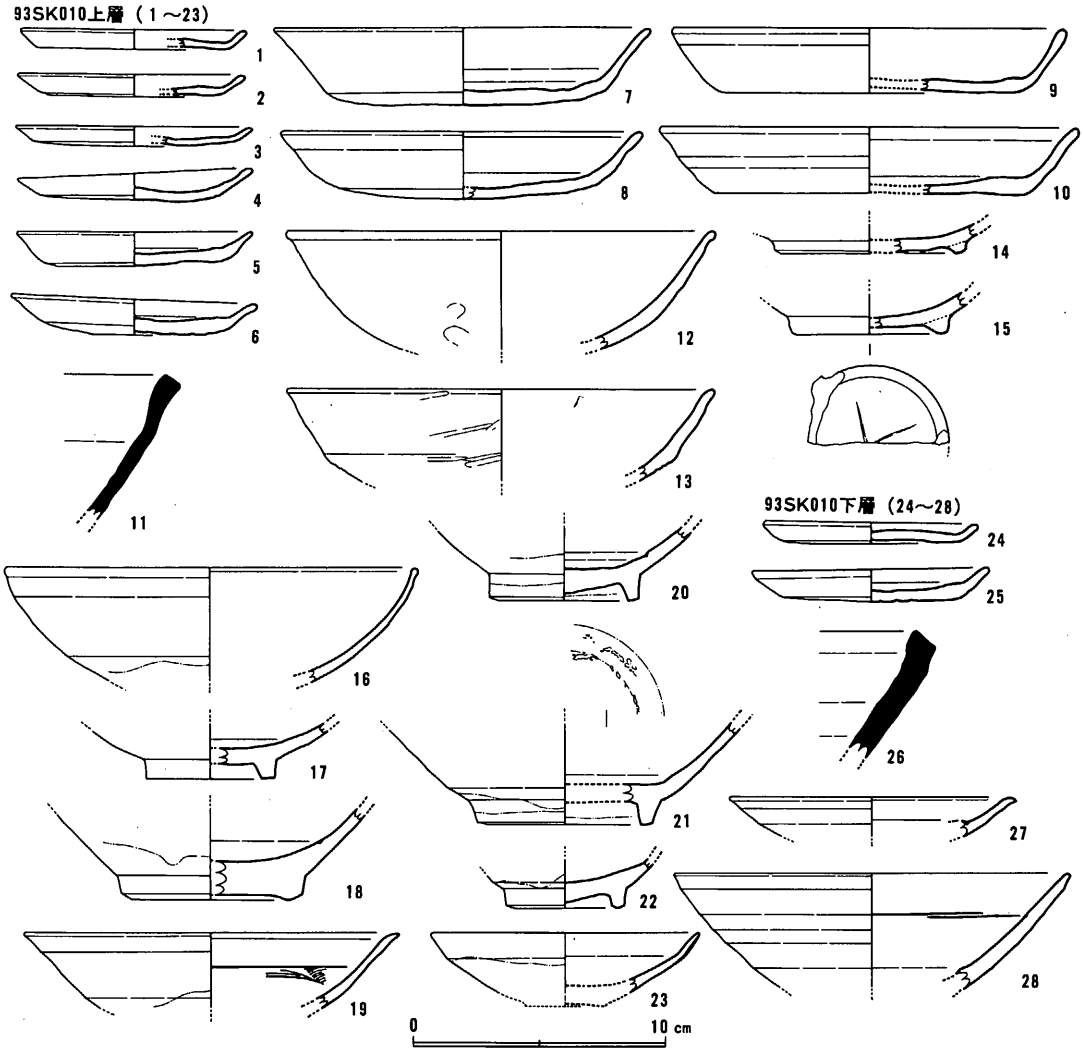


Fig.206　93SK010出土土器実測図（1/3）

椀（11）　外面に櫛目、内面はヘラの片切彫りによる文様がある。I-1-b類。

93SK003出土土器（Fig.205）

土師器

丸底坏a（12）　口径16.6cm、器高3.0cm。底部はヘラ切りとみられる他は、風化により調整不明。

瓦器

小皿a（13）　口径10.5cm、器高1.3cm、底径8.2cmを測る。底部は板状圧痕が残るがその上からミガキが行われているようである。他の部位も粗いながらミガキcがある。

93SK010上層出土土器（Fig.206、CD-093430～445）

土師器

小皿a（1～6）　1～3は口径9.0～9.4cm、器高0.8～0.9cm、底径7.0～7.9cm。底部は糸切

りされる。4～6は口径9.4～9.8cm、器高1.1～1.4cm、底径7.1～7.4cm。底部はヘラ切りされる。

坏a（7～10）　7・8は口径15.0・14.4cm、器高3.1・2.8cm、底径11.0・9.8cm。底部は糸切りされる。9・10は口径15.6・16.6cm、器高2.6・2.7cm、底径12.0・12.2cm。底部はヘラ切りされる。

須恵器

鉢（11）　東播系。

瓦器

椀（12・13）　口径17.0cm。外面にはミガキc、内面にはミガキbが認められる。両者とも押し出して作られたとみられ、外面に指圧痕が残る。なお13の底部は糸切りである。

椀c（14・15）　高台径7.6・6.2cm。両者とも底部にヘラ記号とみられるものがあり、15は「×」印と思われる。

白磁

椀（16～21）　16は口径16.4cm。口縁部外面に沈線を巡らせ端部を丸くおさめ、ごく小さな玉縁状に見せている。17は高台径5.2cmで、II-2類。18は高台径7.2cmで、Ⅳ-1-a類。19は口径14.8cmで内面に櫛による文様がある。Ⅵ-1-b類。20・21は見込みの釉を環状に欠き取るもので、21の欠き取り部分には目跡が付着する。両者ともⅧ類。

皿（22・23）　22は高台径4.7cm。III-2類と考えられるが小椀の可能性もある。見込みに焼成時の付着物が多数残る。23は口径10.7cm。外面体部下半には施釉されない。Ⅵ-1-a類。

93SK010下層出土土器（Fig.206、CD-093446～449）

土師器

小皿a（24・25）　口径8.5・9.4cm、器高0.8、1.3cm、底径7.0・7.1cm。底部は24が糸切り、25がヘラ切りされる。

須恵器

鉢（26）　東播系。

白磁

椀（28）　口径15.6cm。見込みの釉を環状に欠き取るものとみられ、Ⅷ-2類。

皿（27）　口径11.2cm。III類。

93SK015出土土器（Fig.205、CD-093422～427）

土師器

小皿a（14～18）　口径9.4～11.0cm、器高1.0～1.4cm、底径7.4～9.4cm。底部はすべてヘラ切りされる。

丸底坏a（19～22）　口径15.0～15.6cm、器高3.7cm。底部はすべてヘラ切りされ、内面にはミガキbが施される。

白磁

椀（23～25）　23は口径18.7cmで、Ⅳ類。24は高台径7.2cmで見込みに沈線状の段がある。

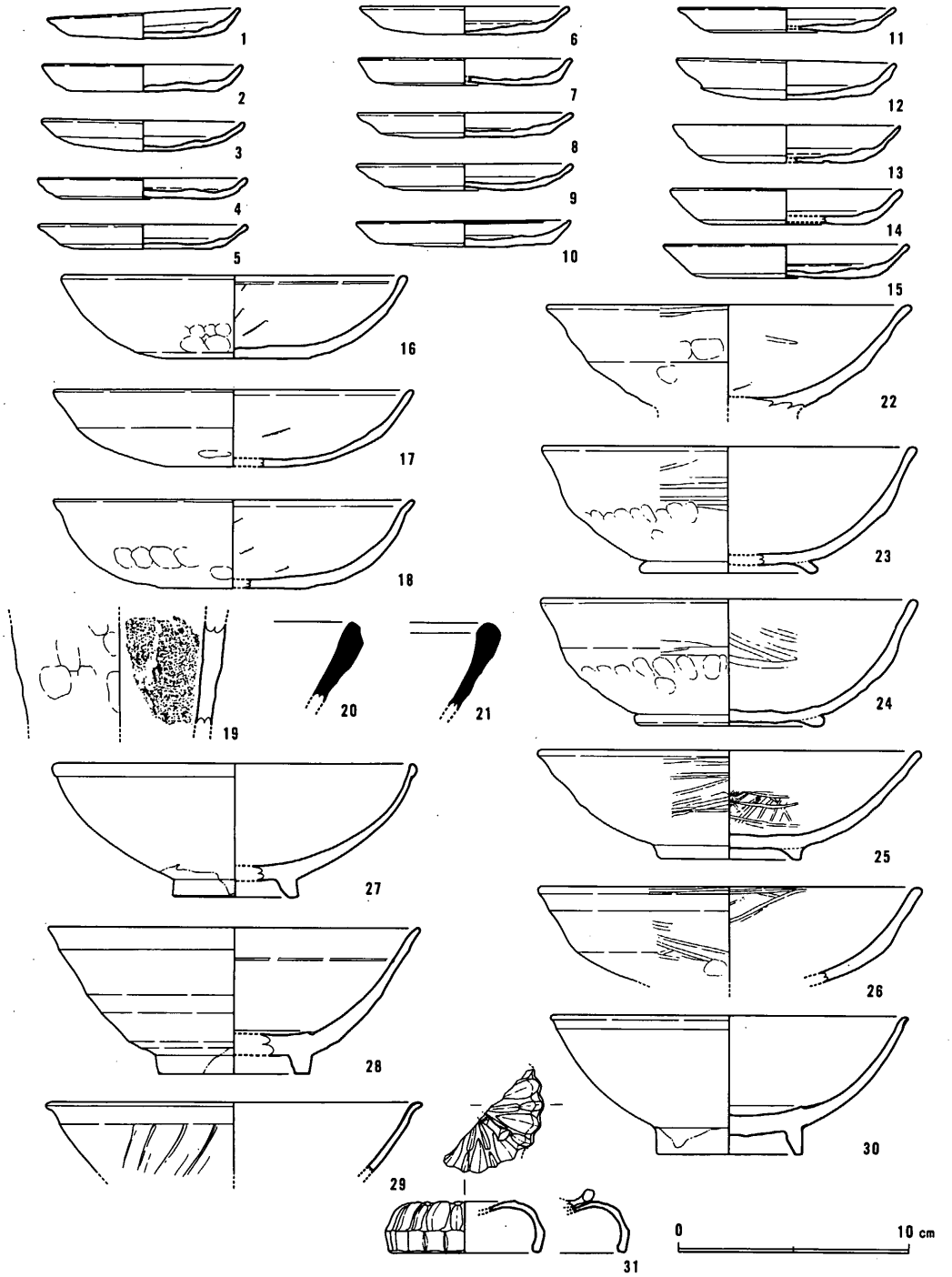


Fig.207　93SK020出土土器実測図（1/3）

Ⅳ-1-a類。25はⅣ-1類の底部片を利用した加工品で、破面を丁寧に打ち欠いている。

小椀（26）　口径10.2cm、器高4.7cm、高台径3.6cmを測る。釉は濁白灰色に発色し、鈍い光沢を有するが剝離が目立つ。体部外面下半以下には施釉されない。内面にはヘラ先による施文

がある。V-2-a類。

皿（27）　口径11.2cmに復原できるが小片である。釉は淡白緑色に発色し光沢がある。口縁部に輪花状の突起があるが、胎土中から押し上げられているようであり、気泡の膨張によるものと判断される。

越州窯系青磁

椀（28）　高台径8.0cmで、見込みに目跡がある。外面の下半には施釉されず、胎土は暗灰色で黒色斑が含まれている。

93SK018出土土器（Fig.205、CD-093428・429）

白磁

椀（29）　高台径7.4cm。Ⅳ-1-a類。

93SK020出土土器（Fig.207、CD-093450～480）

土師器

小皿a（1～15）　口径8.5～10.8cm、器高1.0～1.8cm、底径6.1～8.3cm。底部はすべてヘラ切りされる。

丸底坏a（16～18）　口径15.2～15.8cm、器高3.4～3.9cm。底部はすべてヘラ切りされ、内面にはミガキbが観察される。

製塩土器

壺（19）　外面には指圧痕、内面には布目痕がみられる。

須恵器

鉢（20・21）　20は東播系、21は篠窯系とみられる。

瓦器

椀c（22～26）　口径16.0～16.8cm、器高4.8～5.6cm、高台径6.4～8.3cm。観察できるものの底部はヘラ切りである。23は風化が進行し判別しにくいが、他は内外面ともにミガキcを施す。

白磁

椀（27～30）　27は口径16.0cm、器高5.9cm、高台径5.5cmで、口縁部を小さな玉縁状に作る。II-1-a類。28は口径16.2cm、器高6.4cm、高台径6.6cm。V-1類。29は口径16.4cm。体部外面に縦方向のヘラによる沈線が入る。30は口径15.6cm、器高6.1cm、高台径6.4cm。口縁端部をわずかに外方へつまみ出す。V-3-a類。

青白磁

合子蓋（31）　口径6.6cm。外面下位は円筒状の文様を並べ、それに対応するように上位には蓮座状の文様を配する。天井部にはリンゴの茎のような摘みを取り付ける。

93SK025出土土器（Fig.208、CD-093481・482）

土師器

小皿a（1）　口径9.0cm、器高1.2cm、底径7.5cm。底部は糸切りされる。

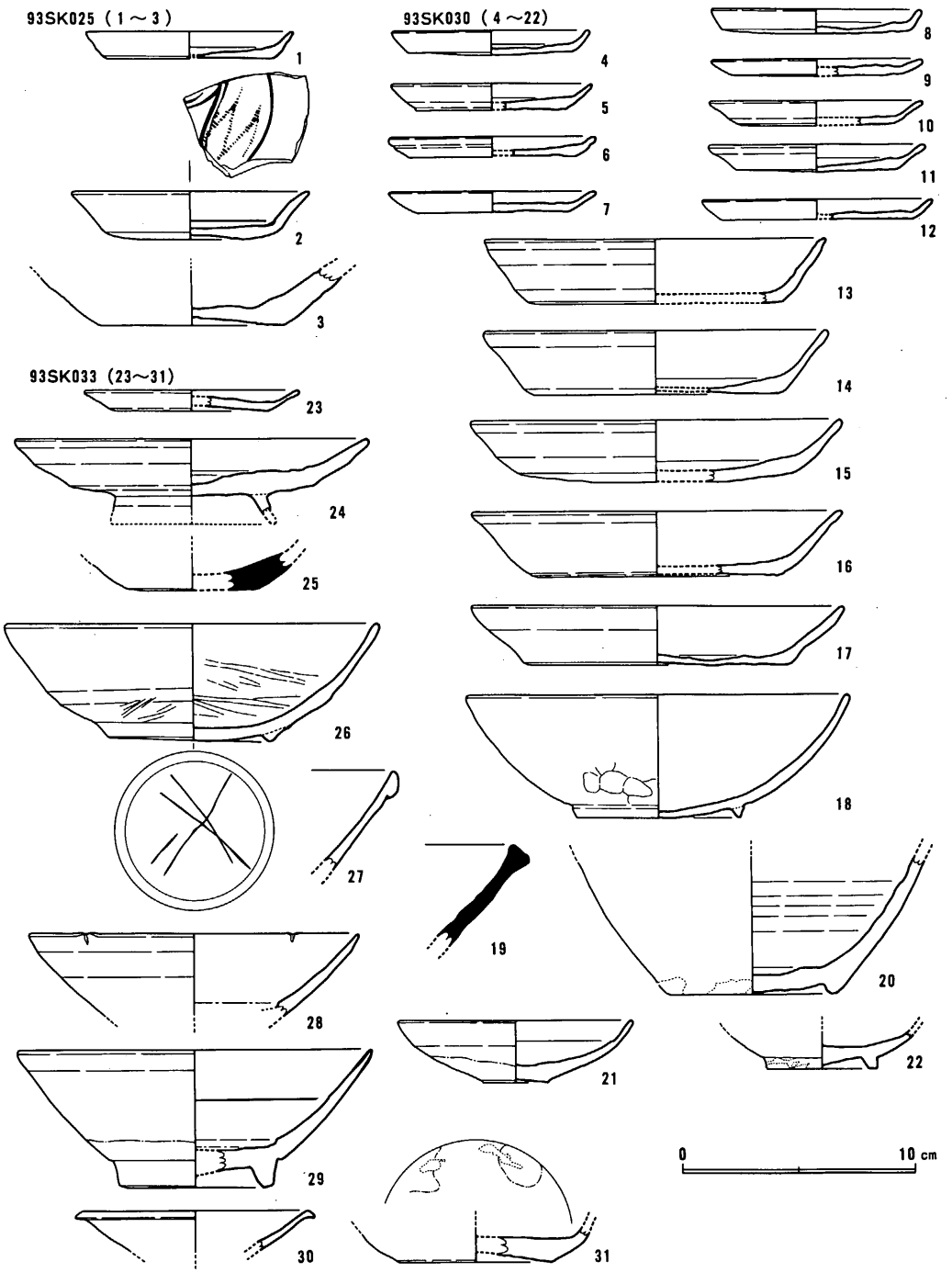


Fig.208　93SK025・030・033出土土器実測図（1/3）

同安窯系青磁

皿　(2)　口径10.3cm、器高2.1cm、底径4.5cm。底部外面以外に施釉され、見込みに櫛及びヘラの片切彫りによる文様がある。I-2類。

陶器

壺（3）　底径8.0cmで、残存部分はすべて露胎で赤褐色を呈している。胎土中に若干の砂粒を含んでいる。

93SK030出土土器（Fig.208、CD-093483～496）

土師器

小皿ａ（4～12）　口径8.6～10.0cm、器高0.8～1.2cm、底径6.6～8.2cm。４の底部はヘラ切りされ、他は糸切りである。

坏ａ（13～17）　口径14.4～16.2cm、器高2.7～2.9cm、底径10.6～12.0cm。底部は糸切りである。

須恵器

鉢（19）　東播系とみられる。

瓦器

椀ｃ（18）　口径16.6cm、器高5.4cm、高台径7.2cm。内面は明らかにミガキが施されているがその単位については明瞭ではない。外面は体部上位で条痕を強く残すヨコナデ、下位では指圧痕が明瞭である。

白磁

皿（21･22）　21は口径10.2cm、器高2.7cm、底径2.8cm。釉は剝離が著しく光沢も失われているが、淡緑灰色に発色しており体部下半には施釉されない。Ⅳ-1-a類。22は高台径4.8cmで、高台外側面及び畳付けの一部に目跡状の付着物がある。Ⅲ-2類。

陶器

壺（20）　底径7.2cmで、底部外面下端に目跡が残る。外面の釉は暗緑灰色を呈し、内面は露胎である。胎土中に黒褐色斑、白色粒子が含まれる。水注の可能性もある。

93SK033出土土器（Fig.208、CD-093497～502）

土師器

小皿ａ（23）　口径9.3cm、器高0.9cm、高台径6.5cm。底部は糸切りされる。

皿ｃ（24）　口径15.3cmで、やや高めの高台が付く。底部は高台貼付に伴うヨコナデが底部全面に及んでおり、切り離し方法は不明。

須恵器

鉢（25）　底径5.8cmで、底部は糸切りされる。やや軟質に焼成される。

瓦器

椀ｃ（26）　口径16.2cm、器高5.1cm、高台径7.2cm。内外面ともにミガキｃが施され、外面底部に細線によるヘラ記号がある。

白磁

椀（27～29）　27は口縁部を玉縁状にするもので、Ⅳ類。28は口径14.3cm。見込みの釉を欠き取り、体部外面下半にも施釉しない。釉は明緑灰色に発色する。口縁端部に輪花があり、それに対応して内外面ともに押圧による小さな刻み目を施す。Ⅷ類。29は口径13.3cm、器高6.0

cm、高台径6.6cm。見込みは環状に釉を欠き取り、体部外面下半にも施釉されない。釉は淡緑灰色に発色する。Ⅷ-2類。93SK001及び茶灰色土層出土資料と接合した。本来93SK001の項で報告すべきものと考える。

皿（30）　口径9.8cmで、Ⅳ-2-a類。

越州窯系青磁

椀（31）　底径6.6cm。残存部の外面は露胎、内面には暗緑色に発色する釉がかかり、見込みに目跡が残る。Ⅱ類。

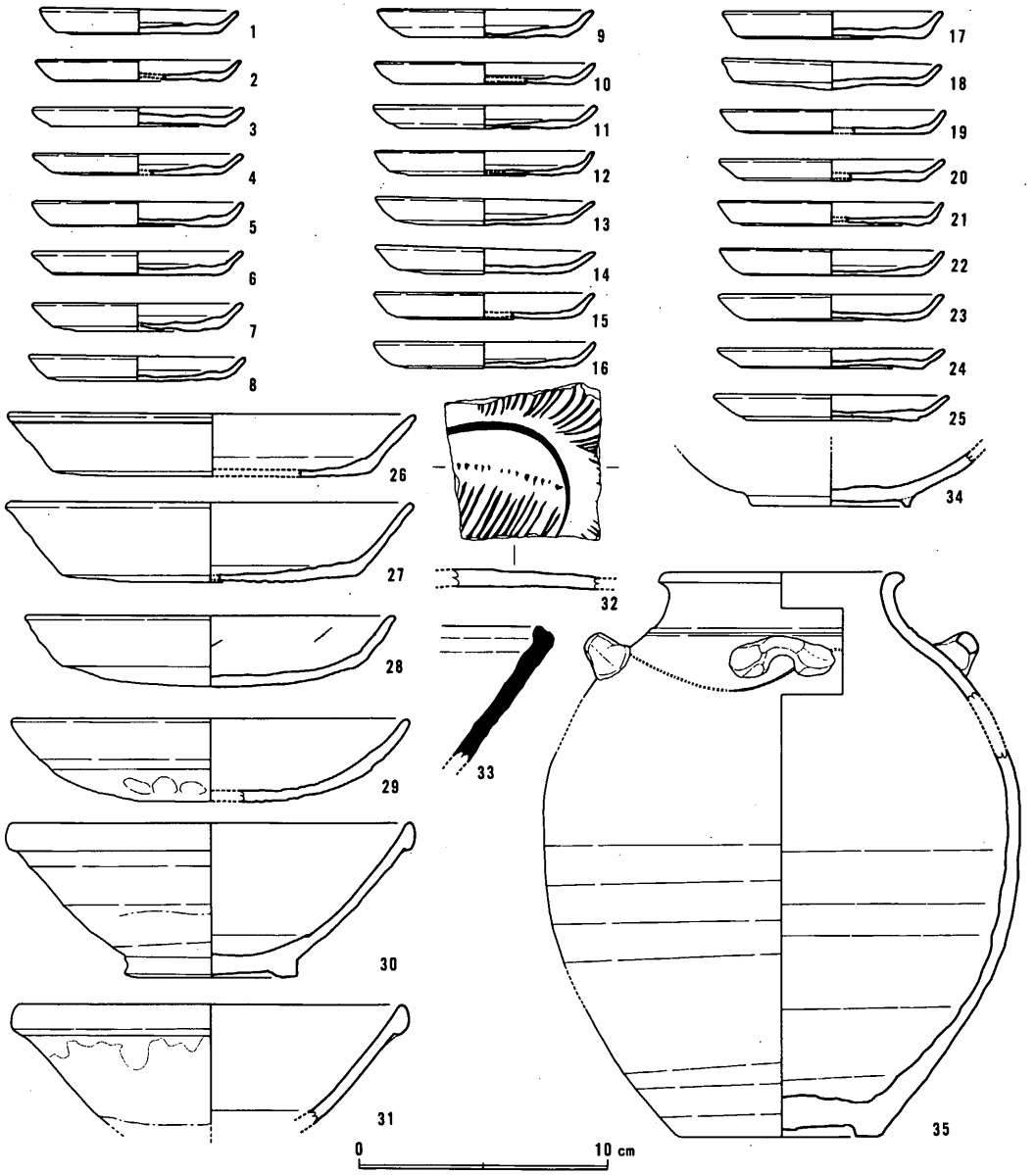


Fig.209　93SK045出土土器実測図（1/3）

93SK036出土土器（Fig.210、CD-093539～543）

土師器

小皿ａ（1）　口径8.8cm、器高1.0cm、底径6.8cm。底部は糸切りされる。

坏ａ（2）　口径14.8cm、器高2.6cm、底径10.7cm。底部はヘラ切りされる。

壺（6）　口径6.7cm、器高16.0cm、底径10.4cm。底部は台上に粘土板を置いた状態のままとみられ簡単なナデがみられる他は未調整であろう。頸部内面から外面全体にかけてはヨコナデで仕上げられるが、内面は指圧痕と粗雑なナデが観察される程度である。

瓦器

椀（3）　口径15.9cm。内外面ともにミガキｃが観察され、内面上位にミガキｂの痕跡もみられる。底部はほとんど残らないが、糸切りの可能性が高い。

白磁

皿（4）　高台径4.0cm。Ⅲ-2類。

陶器

壺（5）　底部径7.8cm。体部外面下位と底部には施釉されない。水注の可能性もある。

93SK039出土土器（Fig.210、CD-093544）

小皿ａ（8･9）　口径12.0･9.6cm、器高1.3･1.8cm、底径8.1･7.0cm。底部はヘラ切りされる。

丸底坏ａ（7）　口径14.9cm。表面は風化が著しい。

93SK045出土土器（Fig.209、CD-093503～538）

土師器

小皿ａ（1～25）　口径8.1～9.6cm、器高0.8～1.2cm、底径6.5～7.9cm。底部はすべて糸切りされる。

坏a(26･27)　口径16.6cm、器高2.6･3.3cm、底径12.9･12.0cm。底部はいずれも糸切りされる。

丸底坏ａ（28･29）　口径15.0･16.2cm、器高2.9･3.4cm。底部はすべてヘラ切りされ、内面にミガキｂが施される。

須恵器

鉢（33）　口縁端部をわずかに内側へつまみ出す。東播系。

瓦器

椀ｃ（34）　高台径6.5cm。外面は風化してわからないが、内面にはミガキｃが観察される。

白磁

椀（30･31）　口径16.6･16.2cmで、いずれも見込みに沈線状の段がある。Ⅳ-1-a類。

陶器

盤（32）　底部の資料で、内面に文様がある。釉は内面のみにみられ、茶色味を帯びた暗緑灰色に発色する。文様は暗緑茶色を呈している。外面は露胎で明灰色を呈し、胎土はそれにやや茶色味を強くしたような色調を呈している。白色粒子と黒褐色斑を混入する。Ⅰ類。

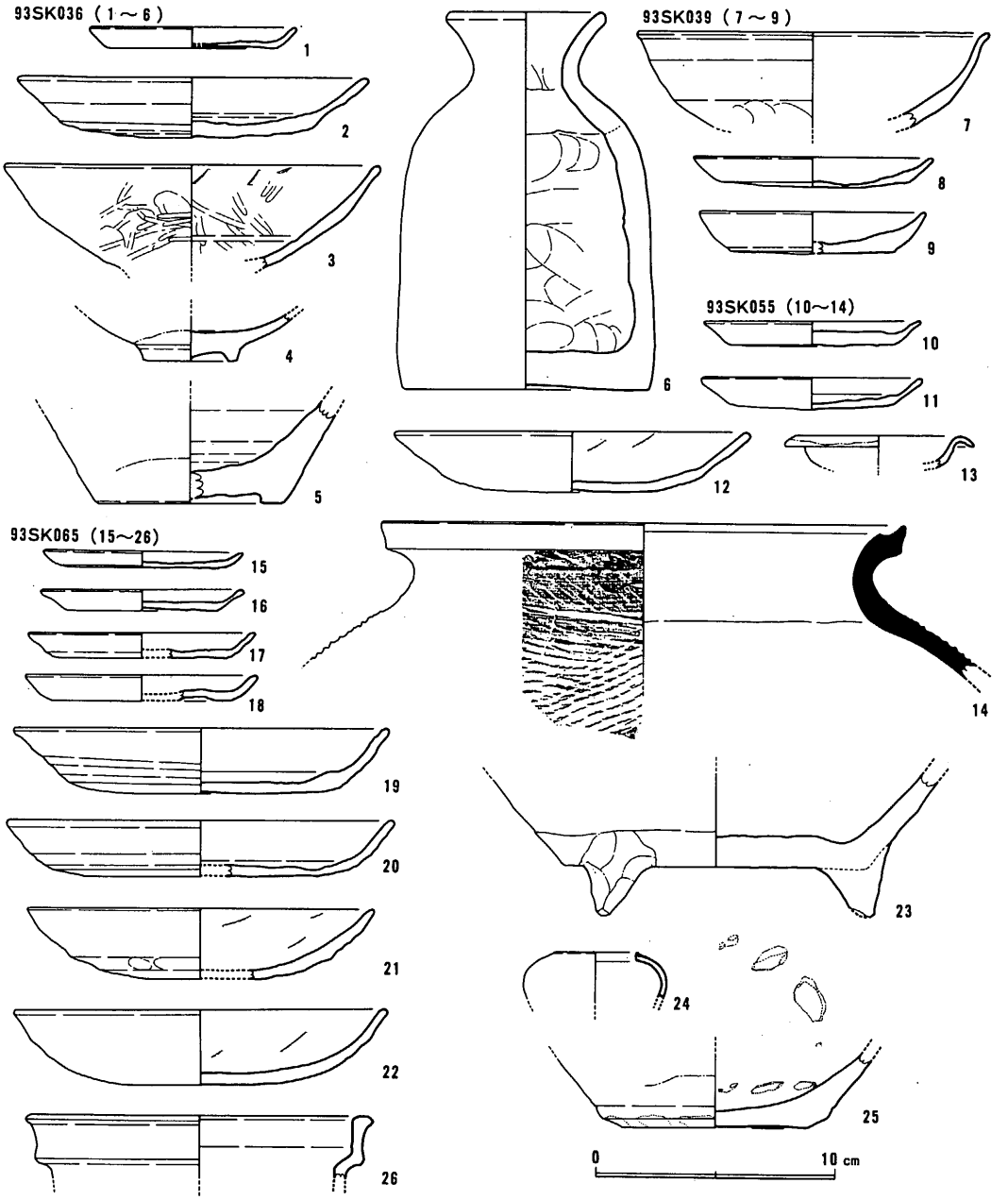


Fig.210　93SK036・039・055・065出土土器実測図 (1/3)

四耳壺 (35)　口縁部と体部は残念ながら接合しないが、同一個体と判断して報告する。口径10.0cm、底径8.3cmで、高さは約23.0cmに復原できる。頸部に中央がわずかに窪む突帯を巡らせ、肩部に耳部を配しその位置に大きくうねる波状の沈線を１条巡らせている。外面の胴部中程以下、底部の形成に至るまでは回転ヘラケズリであるが、他はヨコナデである。釉はほぼ全面に施され、淡緑灰色に発色する。Ｖ類。

93SK055出土土器 (Fig.210、CD-093545～550)

小皿ａ（10･11）　口径9.2･9.4cm、器高1.1･1.4cm、底径6.9･6.5cm。底部はヘラ切りされる。

丸底坏ａ（12）　口径15.0cm、器高2.6cm。底部はヘラ切りされ、内面にはミガキｂが観察される。

須恵器

甕（14）　口径22.1cm。口縁部上端を浅く窪ませる。胴部外面は平行叩き目が残り、内面はナデである。東播系。

陶器

壺蓋（13）　口径8.2cm。釉は暗緑茶色を呈し、口縁部上端から内面にかけて施されるが剥離が著しい。口縁端部と外面は露胎で明茶色を呈している。

93SK065出土土器（Fig.210、CD-093551～562）

土師器

小皿ａ（15～18）　口径8.4～9.8cm、器高0.7～1.1cm、底径6.3～7.2cm。底部はすべて糸切りされる。

坏ａ（19･20）　口径15.8･16.4cm、器高2.8･2.4cm、底径11.4･12.6cm。底部は両者ともヘラ切りされる。

丸底坏ａ（21･22）　口径14.6･15.7cm、器高3.0･3.2cm。底部はヘラ切りされ、内面にミガキｂが観察される。

脚付鉢（23）　底径12.7cm。底部と体部の境目に接して3箇所に脚を貼り付ける。脚は略円錐状でナデによって成形される。鉢部の底部は外面が丁寧なナデによって仕上げられ内面は粗雑なナデで終わる。体部は内外面ともに粗いヨコナデである。胎土中に多量の砂粒を含む。

白磁

小壺（24）　口径3.4cmで、口縁部は体部（肩部）からわずかにつまみ上げただけのものである。釉は残存部の全面に認められ、透明感のある明白緑色に発色し光沢がある。II類。

越州窯系青磁

椀（25）　底径7.7cm。釉は暗濁緑灰色に発色し、外面下位から底部は露胎で暗褐色を呈している。見込み及び底部側縁に目跡がある。I-5類。

陶器

壺（26）　口径14.6cmに復原できるが小片である。残存部全面に暗茶色の釉がかかり、胎土は茶色味を帯びた暗灰色で白色の砂粒が多く含まれる。

93SK075出土土器（Fig.211、CD-093563～568）

土師器

小皿ａ（1）　口径9.2cm、器高1.3cm、底径5.4cm。底部は糸切りされる。

丸底坏ａ（2）　口径15.5cm、器高3.1cm。底部はヘラ切りで、内面にミガキｂが観察される。

須恵器

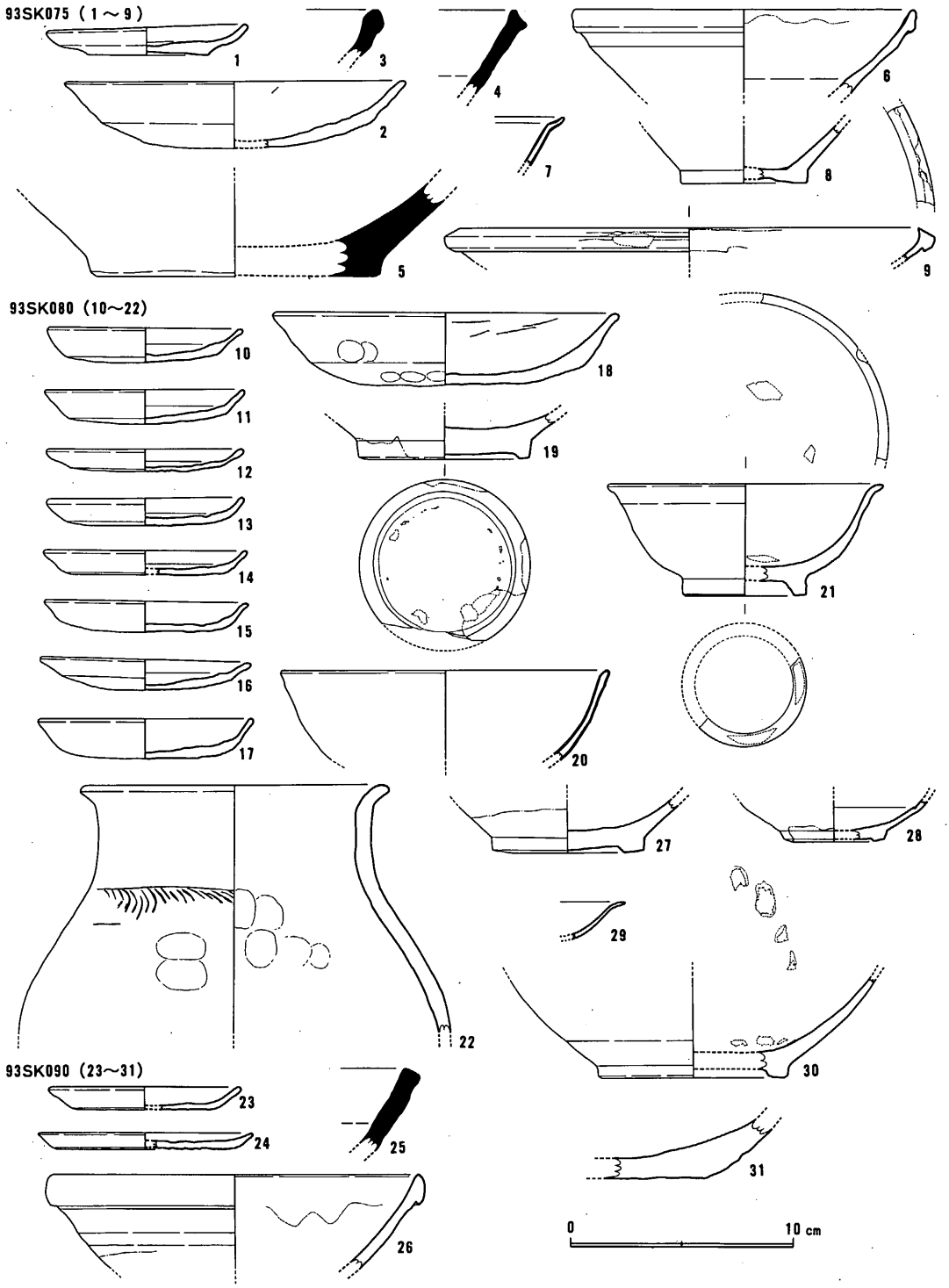


Fig.211　93SK075・080・090出土土器実測図（1/3）

鉢（3～5）　3は篠窯系。4は東播系。5は底径13.2cmで東播系。全体に風化が進行し、調整は明らかでない。

白磁

椀（6）　口径16.6cmで、見込みに大きな段がある。Ⅳ-1-b類。

青白磁

椀（7）　口縁端部を折り曲げるもので、釉は薄い青緑色味を帯びた明白色に発色し、胎土は明白色で混入物はほとんど認められない。

高麗青磁

椀（8）　高台径5.8cm。蛇の目高台で、全面に淡緑色に発色する釉がかかる。I-1類。

陶器

鉢（9）　口径22.2cmに復原されるが小片である。釉は随所に拭き取られた形跡がある。口縁部外側縁に目跡がみられ、上面にも同様の小さな付着物がある。

93SK080出土土器（Fig.211、CD-093569～581）

以下に報告する93SK080の資料のうち22を除く12点は、選別作業中に不注意からラベルを紛失し、その出土遺構が不明となる事態となった。その後の追跡調査で台帳や非抽出資料との比較、整理段階での記憶などを辿り、なんとかこの遺構の出土品であることを突き止めた。ただし100%の確信を得たものではないため、この事実をここに記載し活用段階での注意を促すこととしたい。ただし、10～21までの資料が同一遺構から出土したことは疑いないところである。

土師器

小皿a（10～17）　口径8.9～9.8cm、器高1.0～1.8cm、底径6.9～8.0cm。底部はすべてヘラ切りされる。

丸底坏a（18）　口径15.8cm、器高3.3cm。底部はヘラ切りで、内面にはミガキbが施される。

白磁

椀（19･20）　19は高台径7.8cmで、高台内側に目跡が環状に付着し、一部は剝落する部分もある。Ⅳ-1-a類か。20は口径14.9cmで、V-1類。

高麗青磁

椀（21）　口径12.5cm、器高5.1cm、底径5.6cmを測る。釉は畳付けを除く全面に認められるが、淡灰緑色で光沢がなく表面には小さな気泡が無数に認められる。見込み及び畳付けに目跡が観察される。初期高麗青磁椀III-1-a類。

弥生土器

壺（22）　口径14.0cm。頸部と肩部の境目には綾杉状の文様が巡る。

93SK090出土土器（Fig.211、CD-093578･579･582～585）

土師器

小皿a（23･24）　口径8.8･9.8cm、器高1.1･0.8cm、底径6.7･8.6cm。24の底部はヘラ切りされるが、23は不明。

須恵器

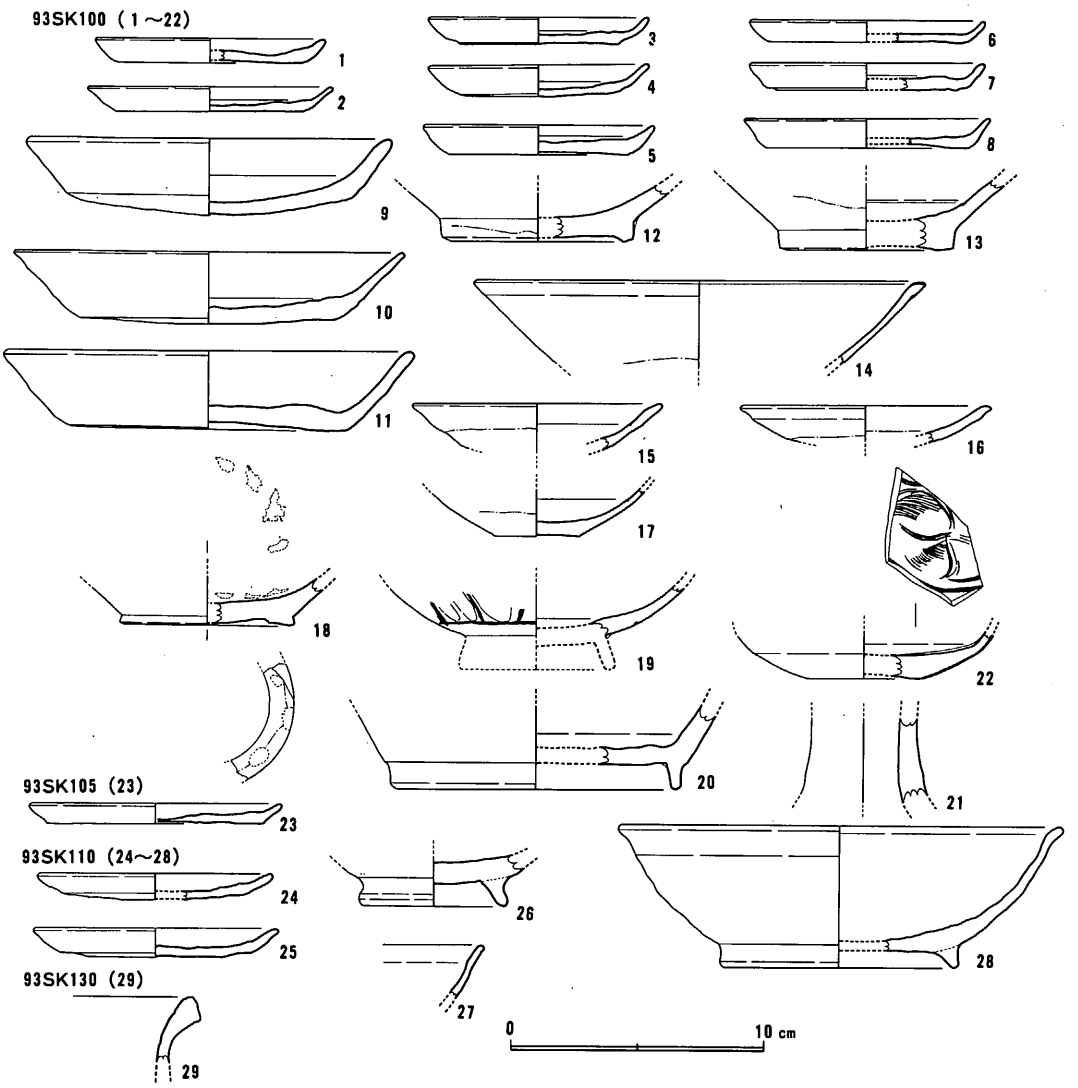


Fig.212　93SK100・105・110・130出土土器実測図 (1/3)

鉢 (25)　東播系。

白磁

椀 (26・27)　26は口径17.2cmで、Ⅳ類。27は高台径9.0cmで、Ⅳ-1-a 類か。

皿 (28)　高台径4.6cmで、Ⅱ類。

青白磁

皿 (29)　口縁部を外方へ折り曲げるもので、釉は透明感のある明白灰色に発色し、残存部の全面にかかる。

越州窯系青磁

椀 (30)　高台径8.6cm。畳付けの磨耗する部分以外は釉が観察され、明緑白色に発色するが光沢がなく表面はざらついている。見込みに目跡が残り、畳付けにもそれとみられるものが付

着している。I-2類。

陶器

鉢（31）　底部の小片である。残存部は無釉で、暗茶褐色を呈している。胎土中に白色粒子を多数含んでいる。

93SK100出土土器（Fig.212、CD-093586～604）

土師器

小皿a（1～8）　1・2は口径9.2・9.8cm、器高1.0cm、底径7.3・7.4cmで、底部はヘラ切りされる。3～8は口径8.8～9.8cm、器高0.9～1.3cm、底径6.3～8.0cmで、底部は糸切りされる。

坏a（9～11）　口径14.6～16.4cm、器高2.9～3.2cm、底径10.3～11.4cm。底部はすべて糸切りされる。

白磁

椀（12～14）　12は高台径7.6cmで、Ⅳ類。13は高台径6.9cmで、見込みに沈線状の小さな段を有する。Ⅳ-1-a類。14は口径18.0cm。口縁端部はわずかに外方へつまみ出すような形状を呈している。Ⅷ-1もしくは3類。

皿（15～17）　15は口径10.0cmで、体部外面下半には施釉されない。Ⅲ-2類。16は口径10.2cmで見込みの釉を環状に欠き取っている。Ⅲ-1類。17は底径3.4cmで、体部外面下半には施釉されない。Ⅵ-1-a類。

越州窯系青磁

椀（18）　輪状高台の径は7.0cm。全面施釉されるが、畳付けのごくわずかな範囲（実際に接地する範囲）は磨耗により釉は観察されない。見込みと畳付けに目跡が観察される。

龍泉窯系青磁

皿（22）　底径4.4cm。底部のみ釉を拭き取っている。見込みには櫛目とヘラの片切彫りによる文様がある。I-2類。

高麗青磁

椀（19）　体部外面にヘラの沈線による蓮華文を配し、各弁の中央に縦方向で2条の凹線を入れることにより花弁の雰囲気を醸し出している。釉は残存部の全面にやや厚めにかかり、暗緑灰色に発色している。見込み中央部を窪ませる。II-1類。

壺（20・21）　20は高台径11.6cm。畳付け周辺には目跡状の付着物が多数みられる。釉は暗緑灰色に発色し、内面にはかからない。内面はヨコナデで、暗灰色を呈している。胎土は明灰色で白色粒子や暗茶色斑を含んでいる。21は頸部の資料で、内外面ともに施釉される。20に類似した釉調、胎土である。

93SK105出土土器（Fig.212）

土師器

小皿a（23）　口径10.0cm、器高0.9cm、底径8.6cm。底部の切り離しは不明である。

93SK110出土土器（Fig.212、CD-093605・606）

土師器

小皿ａ（24・25）　口径9.4・9.8cm、器高1.1・1.2cm、底径7.5・7.6cm。25の底部はヘラ切りされるが、24は不明。

黒色土器

椀ｃ（26）　Ｂ類。高台径5.6cmで、見込みにミガキｃがみられる。

灰釉陶器

椀（27）　口縁部の小片で、内面の釉はほとんど透明、外面は淡緑灰色に発色する。

灰釉系陶器

椀（28）　口径17.7cm、器高5.7cm、高台径9.5cm。釉は内面の一部に自然に発色したとみられるものがある程度で、基本的には無釉である。図では表現できていないが、口縁部の一部に切り込み状のものがみられることから、輪花があったと思われる。色調は表面、胎土ともに明灰色である。底部は糸切りである。

93SK130出土土器（Fig.212、CD-093607・608）

朝鮮系無釉陶器

壺（29）　硬質に焼成され、表面は暗灰褐色、胎土は明茶褐色を呈している。残存部分はすべてヨコナデである。

93SK135上面出土土器（Fig.213、CD-093609～612）

須恵器

鉢（4）　底径7.2cmで、底部は糸切りされるが、仕上がるまでに多くの粘土が付着している。東播系。

同安窯系青磁

皿（1・2）　1は口径11.0cmで、Ｉ類。2は口径11.0cm、器高2.2cm、底径4.9cmで、見込みに櫛とヘラの片切彫りによる文様がある。釉は外面底部を拭き取っている。I-2類。

陶器

壺（3）　底径8.0cm。外面は一部が明褐色であるが大半が暗灰白色、内面は明灰色である。胎土中に黒色粒が混入する。Ｅ類。

93SK135黒色土層出土土器（Fig.213、CD-093611～624）

土師器

小皿ａ（5）　口径9.4cm、器高1.0cm、底径7.3cm。底部の切り離しは不明。

小皿ｃ（6）　口径9.4cm、器高1.6cm、高台径6.4cm。底部の切り離しは不明。

鍋（7）　口縁部上面に刻み目状のものを施すが、最終調整のヨコナデ及びハケ目によって周囲が消滅している。体部の外面は縦方向のハケ目、内面は横乃至は斜め方向のハケ目である。胎土中には砂粒が多量に含まれている。

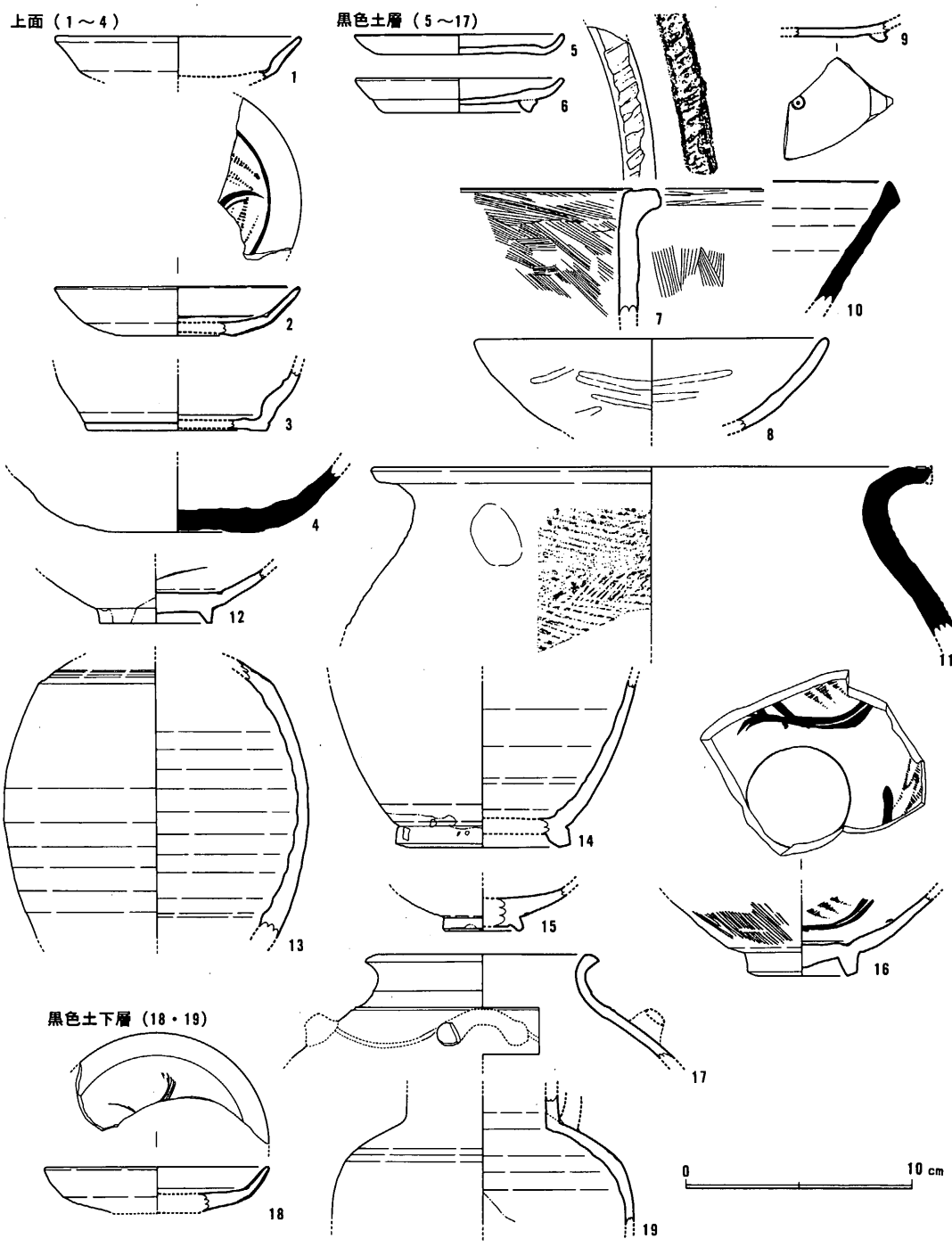


Fig.213　93SK135出土土器実測図（1/3）

須恵器

鉢（10）　東播系。

甕（11）　口径25.0cm。胴部外面は平行叩き、内面はナデである。東播系。

瓦器

椀（8）　口径16.8cm。内外面ともにミガキｃが施される。

椀ｃ（9）　底部外面中央に竹管文状のスタンプがある。

白磁

椀（12）　高台径5.0cm。釉は高台付近にはかからず、体部内面にはヘラによる施文が認められる。Ⅷ類。

壺（13･14）　13は肩部に2条の沈線状の段が巡る。内面はヨコナデにより凹凸が著しい。残存部の全面に淡灰緑色に発色する釉が施される。14は高台径7.8cm。外面の高台付近のみ施釉されない。内面はヨコナデによる凹凸が著しい。両者とも水注の可能性もある。Ⅲ類。

龍泉窯系青磁

小椀（15）　高台径3.7cm。釉は明緑灰色に発色し、畳付けと底部外面には施釉されない。

同安窯系青磁

椀（16）　高台径5.0cm。内面に櫛及びヘラの片切彫りによる施文があり、外面には縦方向の櫛目による文様が配される。外面の体部下半以下には施釉されない。I-1-b類。

陶器

四耳壺（17）　口径10.4cm。釉は暗緑茶色、暗緑色に発色し、残存部の全面に施される。肩部に大きくうねる波状沈線を巡らし、それに重ねるように耳が取り付く。Ⅴ類。

93SK135黒色土下層出土土器（Fig.213、CD-093625･626）

白磁

皿（18）　口径10.0cm、器高2.0cm。見込みに櫛による施文がある。釉は残存部の全面に認められ、淡濁乳白色に発色し気泡が目立つ。Ⅷ-1類。

水注（19）　頸部径7.0cm内外で、肩部との境目に耳が取り付いていた形跡がある。釉は残存部の全面にかかり、緑色味を帯びた淡灰色を呈する。93SE120から出土したものと形状が近似している。

93SK140出土土器（Fig.214、CD-093627～638）

土師器

小皿ａ（1～6）　1・2は口径9.3･9.4cm、器高1.2･0.9cm、底径7.2･6.5cmで、底部はヘラ切りされる。3～6は口径8.3～9.8cm、器高0.8～1.2cm、底径6.4～8.4cmで、底部は糸切りされる。

坏ａ（7～9）　口径15.0～15.4cm、器高2.2～2.7cm、底径11.3～12.3cm。7の底部はヘラ切り、8・9は糸切りである。

白磁

椀（10）　口径17.5cm。見込みに小さな段を有するもので、Ⅳ-1-a類。

陶器

盤（11）　口径39.0cm、器高8.1cm、底径25.1cmに復原される。明緑白灰色の釉がかかり、内

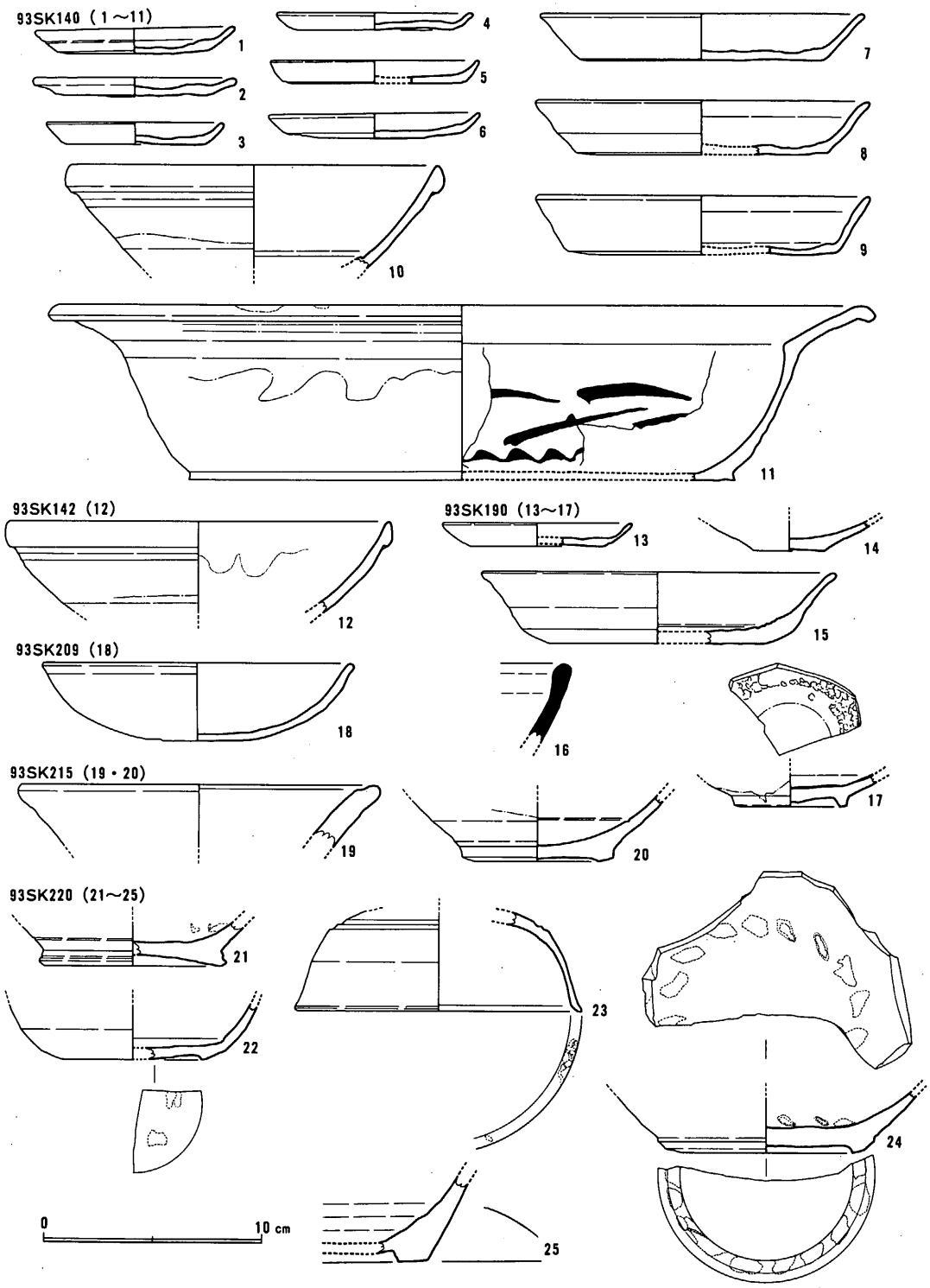


Fig.214　93SK140・142・190・209・215・220出土土器実測図（1/3）

面には鉄絵が描かれる。

93SK142出土土器（Fig.214、CD-093639）

白磁

椀（12）　口径17.8cmで、Ⅳ類。

93SK190出土土器（Fig.214、CD-093640・641）

土師器

小皿ａ（13）　口径8.7cm、器高1.1cm、底径6.1cm。底部は糸切りと思われる。

坏ａ（15）　口径16.3cm、器高3.3cm、底径12.5cm。底部はヘラ切りされる。

須恵器

鉢（16）　篠窯系。

白磁

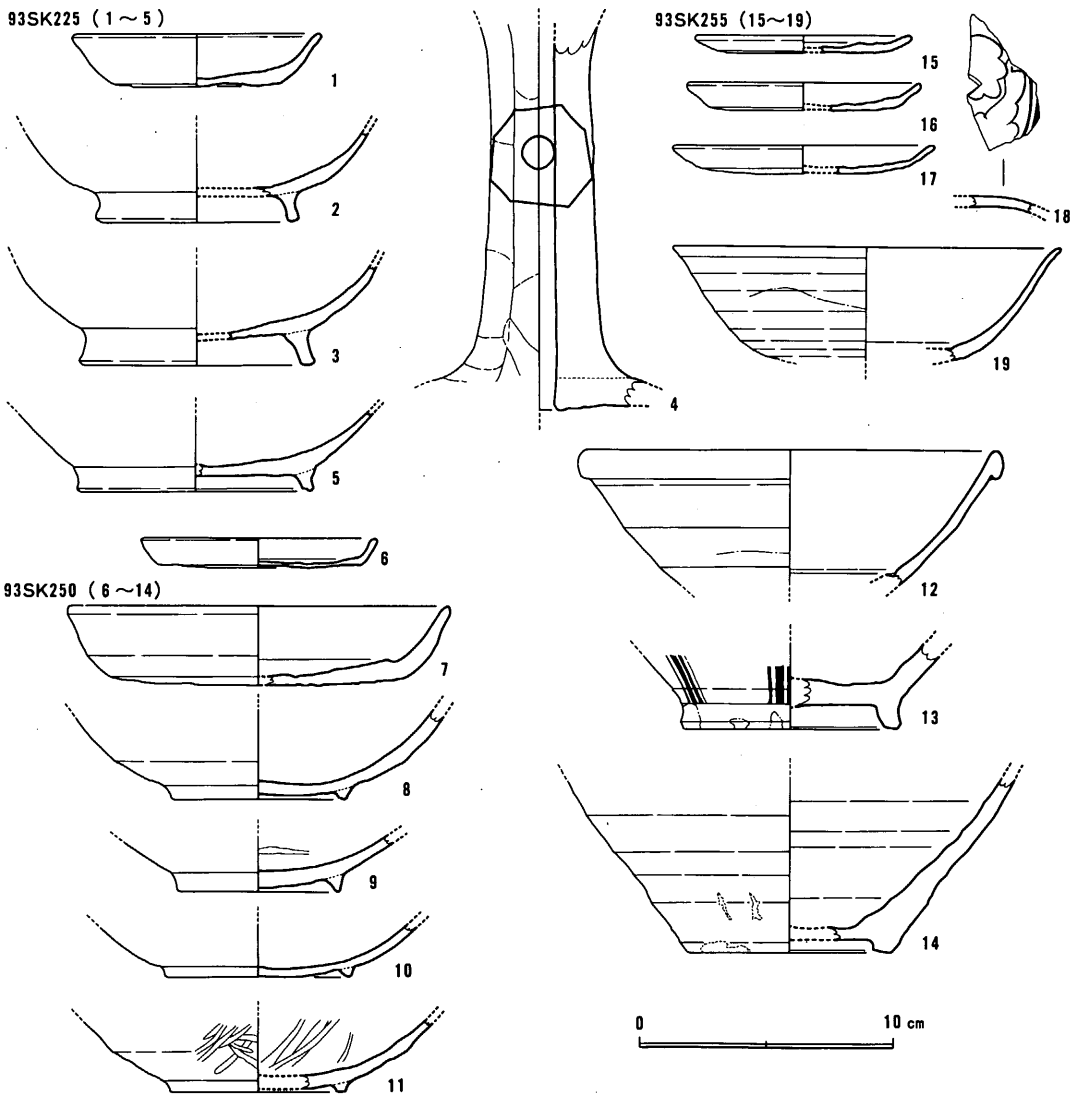


Fig.215　93SK225・250・255出土土器実測図（1/3）

椀 (17)　高台径5.2cm。見込みの釉は環状に拭き取られ、それに接するように敲打痕のような形跡が多数確認される。しかし同様のものが外面にもあり、気泡の破裂によるものの可能性が高い。Ⅷ類。

皿 (14)　底径3.2cmで、外面には施釉されない。Ⅵ-1-a 類。

93SK209出土土器 (Fig.214、CD-093642)

土師器

丸底坏 a (18)　口径14.4cm、器高3.6cm。底部はヘラ切りされる。他の調整は不明。

93SK215出土土器 (Fig.214、CD-093643･644)

土師器

壺 (19)　口径16.7cmで、口縁部内面をわずかに窪ませる。

白磁

椀 (20)　高台径7.0cmで、見込みに沈線状の小さな段がある。Ⅳ-1-a 類。

93SK220出土土器 (Fig.214、CD-093645～648)

越州窯系青磁

椀 (21･24)　21は底径8.7cm。残存部の外面は露胎で、内面には目跡が観察される。II-2類。24は高台径9.9cmで、畳付けの磨耗部分を除いて全面に施釉される。見込み及び畳付けには目跡がある。I-5類。

坏 (22)　底径6.4cm。全面施釉され、底部外面に目跡がある。Ⅲ類。

陶器

蓋 (23)　口径13.2cm。天井部と体部の境目に2条の沈線を巡らす。釉は全面にかかるものとみられるが発色が悪く、外面で明白茶色、内面で濁白茶色を呈している。表面もかなりざらついている。胎土は明茶黄色を呈し、やや軟質に焼成される。口縁端部に目跡がある。93SK190出土の破片と接合したが、ここで報告した。

壺 (25)　外面にヘラによる傷 (文様？) がある。水注の可能性もある。

93SK225出土土器 (Fig.215、CD-093649･650)

土師器

坏 a (1)　口径10.0cm、器高2.0cm、底径6.6cm。底部はヘラ切りされる。

椀 c (2･3)　高台径8.1･9.4cm。3の底部はヘラ切りされる。

器台 (4)　脚部をヘラケズリによって八角形にする。

緑釉陶器

椀 (5)　高台径9.4cm。畳付けの内側に段を作る。近江産か。

93SK250出土土器 (Fig.215、CD-093651～658)

土師器

小皿 a (6)　口径9.4cm、器高1.2cm、底径8.0cm。底部は糸切りされる。

坏ａ(7)　口径15.2cm、器高3.2cm、底径11.8cm。底部はヘラ切りされる。

椀ｃ(8)　高台径7.0cm。底部はヘラ切りされるが、他の調整は不明。形状は瓦器椀に似る。

瓦器

椀ｃ(9～11)　高台径6.6～7.4cm。体部にはミガキｃが観察される。

白磁

椀(12)　口径17.0cmで、見込みに小さな段を有する。Ⅳ-1-a類。

壺(13)　高台径8.7cm。体部外面には縦方向にヘラによって彫出された2条の凸線が推定で6箇所に施される。釉は高台外縁までかかり、内面にも施される。水注の可能性もある。Ⅲ類。

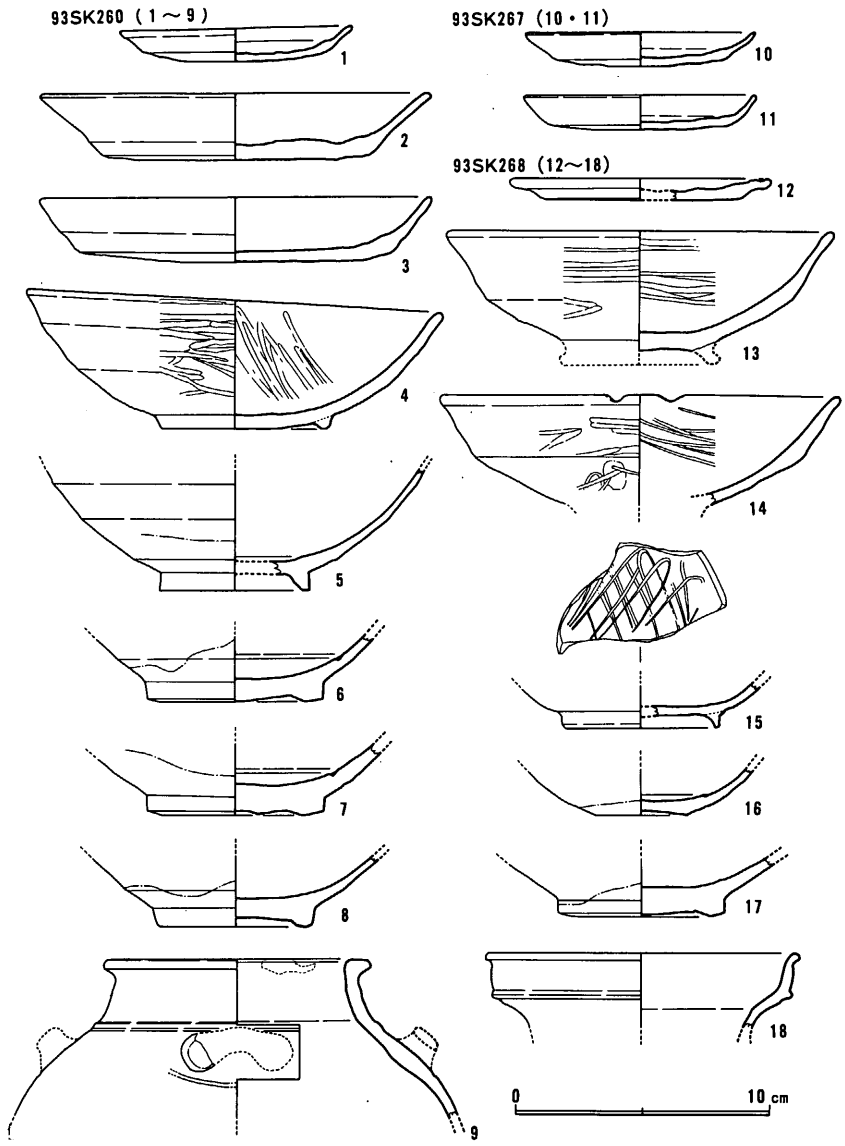


Fig.216　93SK260・267・268出土土器実測図(1/3)

陶器

壺(14)　底径8.0cm。底部近くの外面及び畳付け周辺に目跡が観察される。四耳壺Ｖ類か。

93SK255出土土器(Fig.215、CD-093659～665)

土師器

小皿ａ(15～17)　口径8.6～10.4cm、器高0.7～1.1cm、底径6.7～8.0cm。底部はヘラ切りされる。

白磁

椀（19）　口径15.4cm。見込みに段がある。外面体部中程以下には施釉されない。Ⅴ類。

合子蓋（18）　天井部にヘラ先で施したとみられる細線による文様がある。釉は外面のみにかかり、淡灰緑色に発色し光沢がある。胎土は白灰色でやや軟質に焼成される。

93SK260出土土器（Fig.216、CD-093666～673）

土師器

小皿ａ（1）　口径9.3cm、器高1.4cm、底径7.4cm。底部はヘラ切りされる。

坏ａ（2･3）　口径15.6cm、器高2.7･2.6cm、底径10.6･12.3cm。底部はヘラ切りされる。

瓦器

椀ｃ（4）　口径16.6cm、器高5.2cm、底径6.8cm。底部はヘラ切りされる。内外面ともにミガキｃがみられる。

白磁

椀（5～8）　5は高台径6.0cmで、Ⅱ類。6・7はともに高台径7.0cmで、見込みに小さな段がある。Ⅳ-1-a類。8は高台径6.1cm。釉は淡乳白色に発色し、体部外面下半以下には施されない。底部（高台の内側）に径3.9cm程度の焼き台の痕跡がある。Ⅺ類。

陶器

四耳壺（9）

口径10.6cm。肩部に耳が取り付くが、それに先行して大きくうねる波状沈線が巡っている。口縁部頂部から内側にかけて目跡が観察される。釉は残存部のほぼ全面に認められ、暗茶緑色に発色し、胎土は暗灰色で黒灰色斑が多く含まれる。Ⅴ類。

93SK267出土土器（Fig.216、CD-093674･675）

土師器

小皿a（10･11）　口径9.2･9.3cm、器高1.4cm、底径6.7･6.9cmを測る。底部はヘラ切りされる。

93SK268出土土器（Fig.216、CD-093676･677）

土師器

小皿a2（12）　口径10.4cm、器高0.9cm、底径8.0cmを測る。底部の切り離しは不明である。

黒色土器

椀ｃ（13）　Ｂ類。口径15.4cm。内外面ともにミガキｃが施される。

瓦器

椀ｃ（14･15）　14は口径15.9cm。内外面ともにミガキｃが施され、口縁部には輪花が切り込まれる。15は高台径6.2cmで、見込みに暗文風のミガキがある。

白磁

椀（17）　高台径6.6cmで、Ⅳ類。

皿（16）　底径3.6cmで、体部下位以下には施釉されない。Ⅴ類。

朝鮮系無釉陶器

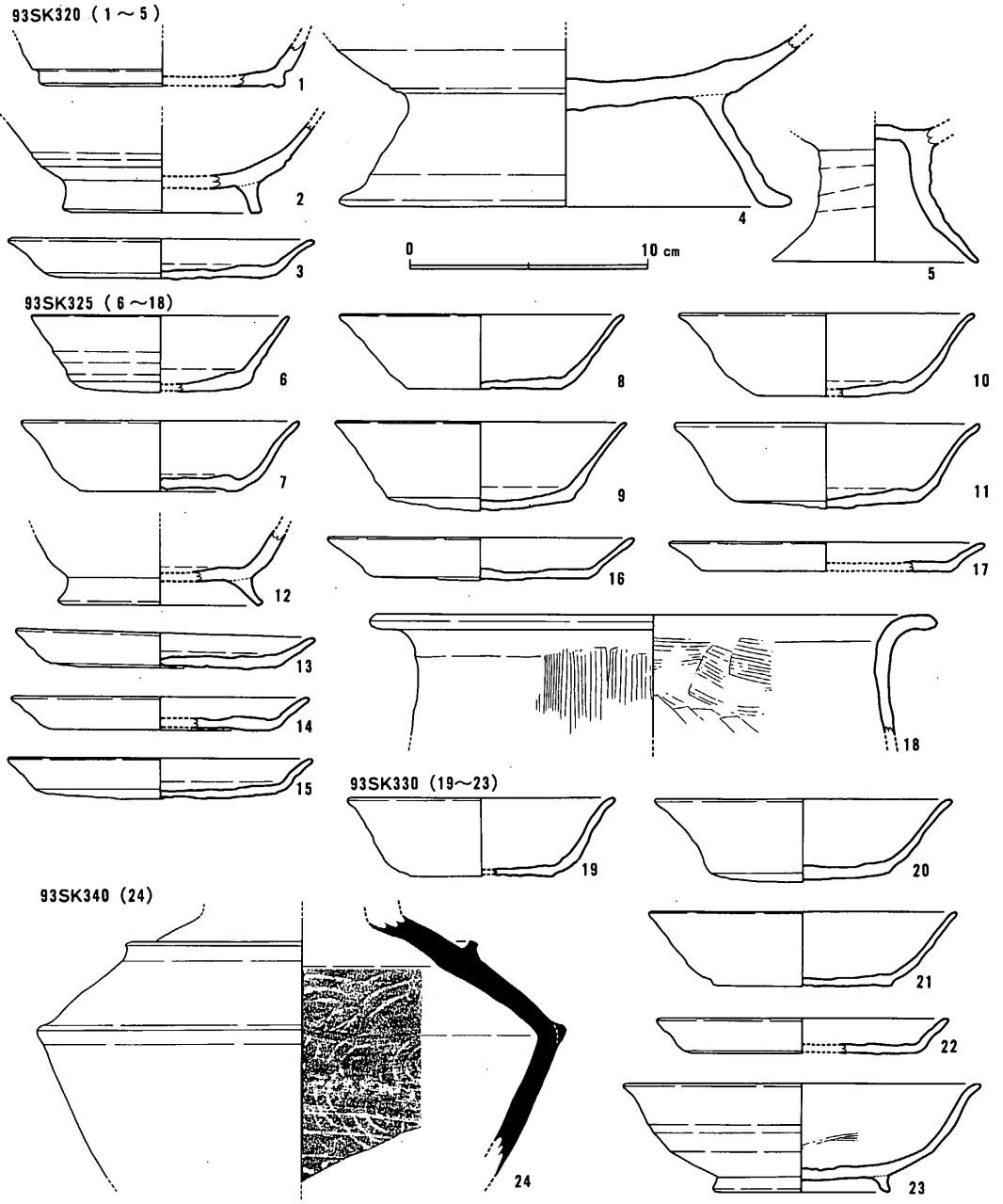


Fig.217　93SK320・325・330・340出土土器実測図（1/3）

壺（18）　口径12.5cm。表面の調整は強いヨコナデで、暗灰褐色を呈している。胎土は暗灰色及び暗茶褐色を呈し、きわめて硬質に焼成されている。

93SK320出土土器（Fig.217、CD-093678～682）

土師器

坏ｃ（1）　高台径10.6cmを測る。風化によって調整は不明であるが、高台は削り出しによっ

て成形される。明赤茶色を呈する。筑後地方産。

椀ｃ(2)　高台径8.4cm。

皿ａ(3)　口径13.0cm、器高1.7cm、底径9.8cmで、底部はヘラ切りされる。

大椀ｃ(4)　高台径19.2cm。体部内面はナデ、他はヨコナデである。

高坏(5)　脚部径8.7cm。ヨコナデによって調整される。

93SK325出土土器(Fig.217、CD-093683～692)

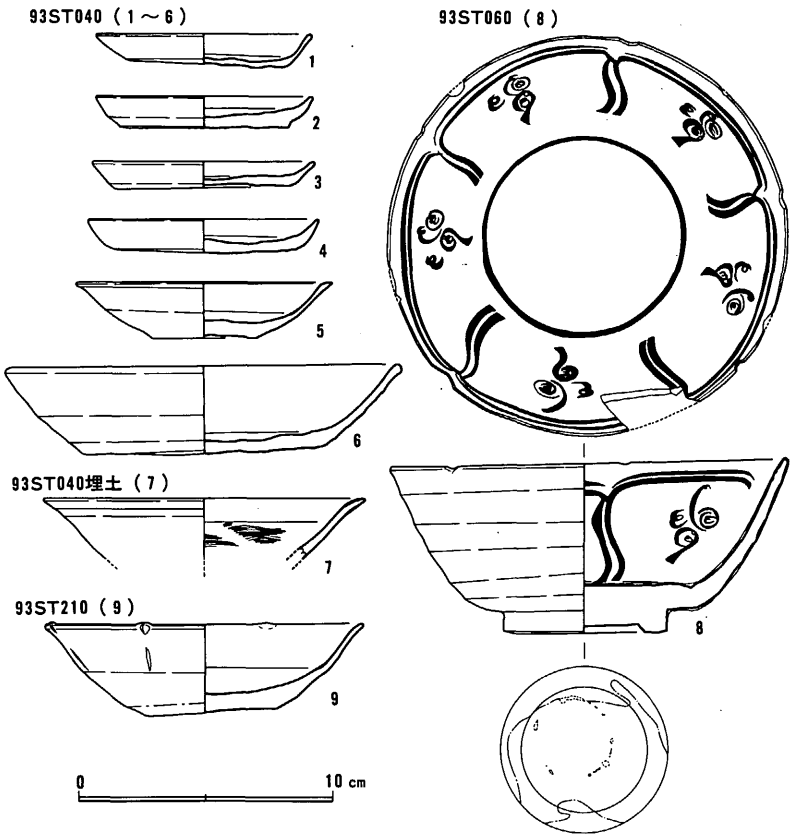


Fig.218　93ST040・060・210出土土器実測図（1/3）

土師器

坏ａ(6～11)　口径11.0～13.0cm、器高3.0～3.8cm、底径6.9～7.9cmで、底部はヘラ切りされる。

椀ｃ(12)　底径8.7cm。表面は風化により調整不明。

皿ａ(13～17)　口径12.6～13.4cm、器高1.2～1.8cm、底径9.1～10.6cmで、底部はヘラ切りされる。

甕(18)　口径24.0cmで、外面は縦方向のハケ目、内面は上位で横方向のハケ目が観察されるが、下位ではヘラケズリである。

93SK330出土土器(Fig.217、CD-093693～697)

土師器

坏ａ(19～21)　口径11.4～13.0cm、器高3.2～3.5cm、底径6.0～7.6cmで、底部はヘラ切りされる。

皿ａ(22)　口径12.4cm、器高1.5cm、底径10.0cmで、底部はヘラ切りされる。

黒色土器

椀ｃ(23)　Ａ類。口径15.1cm、器高4.6cm、高台径7.5cm。風化が進むが内面にミガキｃが

観察される。

93SK340出土土器（Fig.217、CD-093698･699）

須恵器

壺（24）　胴部最大径22.3cm。肩部と最大径位置に各1条の突帯が巡る。突帯の周辺はすべてヨコナデで、外面下位は叩きが施されていたようであるが擦り消されている。内面は肩部裏側以下に同心円の当て具痕を残しているがこちらもヨコナデによって消えかかっている。

93ST040出土土器（Fig.218、CD-093700～705）

すべて供献土器として捉えられる。

土師器

小皿a（1～4）　口径8.6～9.2cm、器高1.1～1.3cm、底径6.1～7.2cmを測る。底部はすべて糸切りである。

坏a（6）　口径15.7cm、器高3.5cm、底径9.7cmを測る。底部は糸切りされる。

白磁

皿（5）　口径10.2cm、器高2.2cm、底径4.1cmを測る。釉は底部外面をきれいに拭き取る他は全面に施され、淡緑灰色に発色し貫入がみられる。V-2類。

龍泉窯系青磁

椀　残念ながら調査中に盗難に遭い現存しない。検出段階の観察ではI-5-a類と認識している。

93ST040埋土出土土器（Fig.218）

埋土中に混入していた遺物で、上記の供献土器群には含めない。

白磁

椀（7）　口径12.8cm。内面に櫛による文様が施される。釉は淡緑白色に発色する。

93ST060出土土器（Fig.218、CD-093706～708）

龍泉窯系青磁

椀（8）　口径16.1cm、器高6.3cm、高台径6.5cmを測る。口縁端部に切り込みによる輪花があり、内面の文様と対応していることから当初は5箇所に存在したことが知られる。釉は暗緑色に発色し、畳付け及び外面底部にはかからない。畳付けは使用による磨耗が著しく、研磨されたような状態になっている。また外面底部には径3.5cmの円形に焼き台の跡が観察される。I-4-b類。供献土器として捉えている。

93ST210出土土器（Fig.218、CD-093709）

白磁

皿（9）　口径12.7cm、器高3.6cm、底径5.1cmを測る。口縁部には外面からヘラで押圧した輪花があり、それに対応して体部外面に縦方向のヘラによる沈線が入る。輪花及び沈線は6箇所に配されたものとみられる。釉は光沢のある淡濁灰白色に発色し、体部外面の底部付近以下を拭き取るほかは全面に施釉されている。露胎部は暗白灰色で、底部の稜はかなり磨耗している。

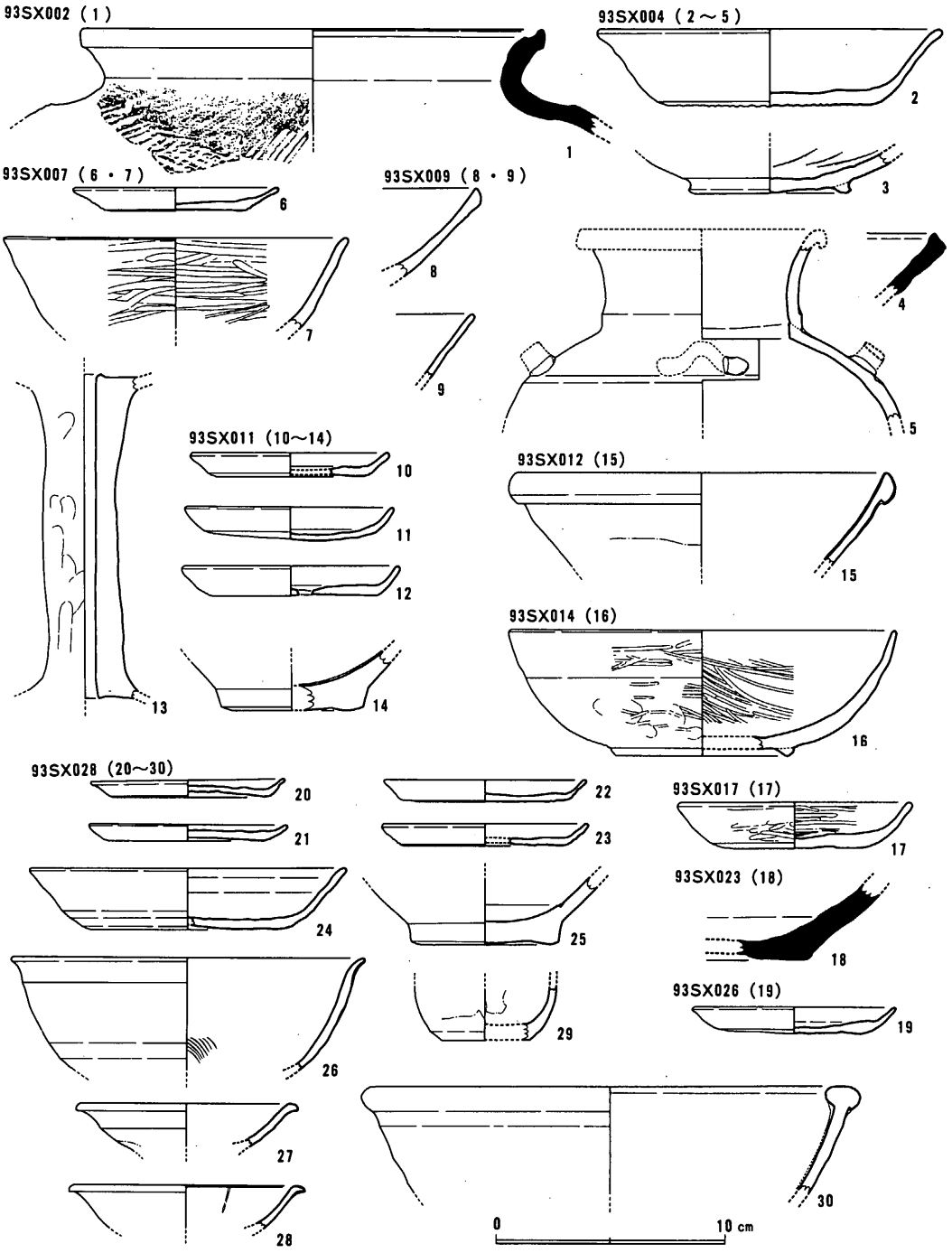


Fig.219　第93次調査その他の遺構出土土器実測図１（1/3）

胎土はわずかに灰色味を帯びた白色を呈している。XI'類。完存資料ではないが供献土器と考えている。

93SX002出土土器（Fig.219、CD-093710･711）

須恵器

甕（1）　口径20.5cm。口縁部内面をわずかに窪ませ、肩部外面以下には平行叩き目が残る。内面は粗めのナデである。

93SX004出土土器（Fig.219、CD-093712～714）

土師器

坏ａ（2）　口径15.2cm、器高3.5cm、底径9.9cm。底部は糸切りされる。

瓦器

椀ｃ（3）　高台径7.2cm。内面にはミガキｂがみられる。

須恵器

鉢（4）　東播系。

白磁

四耳壺（5）　頸部径8.8cm。肩部に1条の沈線が巡り、そのやや上位に耳が取り付く。釉は残存部の全面に認められる。

93SX007出土土器（Fig.219）

土師器

小皿ａ（6）　口径9.1cm、器高1.1cm、底径6.3cm。

瓦器

椀（7）　口径15.2cm。内外面ともにミガキｃを施す。

93SX009出土土器（Fig.219、CD-093715･716）

白磁

椀（8）　Ⅳ類。

青磁

椀（9）　直線的に立ち上がる体部の破片で、釉は淡緑灰色に発色する。高麗青磁椀Ⅲ類と思われる。

93SX011出土土器（Fig.219、CD-093717･718）

土師器

小皿ａ（10～12）　口径8.8～9.6cm、器高1.1～1.45cm、底径7.2～7.5cm。11はヘラ切り、他は糸切りである。12の底部中央近くに径0.6～0.7cmで焼成前に穿たれたとみられる穿孔がある。

器台（13）　径3.2cm内外の脚部で、表面は指圧により成形されるだけでケズリ等の調整は行われていない。

白磁

椀（14）　高台径6.2cm。Ⅳ類。

93SX012出土土器（Fig.219、CD-093719･720）

白磁

椀（15）　口径17.0cm。Ⅳ類。

93SX014出土土器（Fig.219、CD-093721･722）

瓦器

椀ｃ（16）　口径17.1cm、器高5.6cm、高台径8.1cmを測る。内外面ともにミガキｃを施す。

93SX017出土土器（Fig.219、CD-093723･724）

黒色土器

小皿ａ（17）　Ｂ類。口径10.4cm、器高2.1cm、底径7.4cmを測る。内外面ともにミガキｃが施される。底部はヘラ切りである。

93SX023出土土器（Fig.219）

須恵器

鉢（18）　底部は糸切りされたのち粘土が多数付着している。東播系。

93SX026出土土器（Fig.219、CD-093725）

土師器

小皿ａ（19）　口径9.0cm、器高1.2cm、底径6.9cmを測る。底部は糸切りされる。

93SX028出土土器（Fig.219、CD-093726～730）

土師器

小皿ａ（20～23）　口径8.6～9.2cm、器高0.7～1.0cm、底径6.9～7.5cmを測る。底部は糸切りされる。

坏ａ（24）　口径14.0cm、器高2.7cm、底径8.4cmを測る。底部は糸切りされる。

白磁

椀（25･26）　25は高台径6.6cmで、見込みに小さな段がある。Ⅳ-1-a類。26は口径15.6cm。体部内面下位に櫛目文がある。V-2類か。

皿（27･28）　27は口径9.8cm。見込みの釉を環状に欠き取るもので、その周囲に別個体の一部とみられる付着物が貼り付く。Ⅲ-1類。28は口径10.4cm。折り曲げた口縁部の上部中央付近から体部内面上位にかけて隆線を垂下する。隆線部分は白色、他は明灰緑色を呈している。Ⅳ-2類。

壺（29）　底径3.8cmに復原できるが小片である。釉は淡緑白灰色に発色するものが薄くかかり、体部外面下半にはかからない。Ⅱ類系。

陶器

盤（30）　口径22.0cmに復原できるが小片である。釉は体部内面で大半が剝落して残らないほか、口縁部上面にはほとんどかからない。また口縁部には目跡とみられる変色部分があり、胎土は茶色味を帯びた暗灰色を呈している。Ⅲ類。

93SX041出土土器（Fig.220）

土師器

小皿ａ（1）　口径9.5cm、器高1.0cm、底径6.1cmを測る。底部は糸切りとみられる。

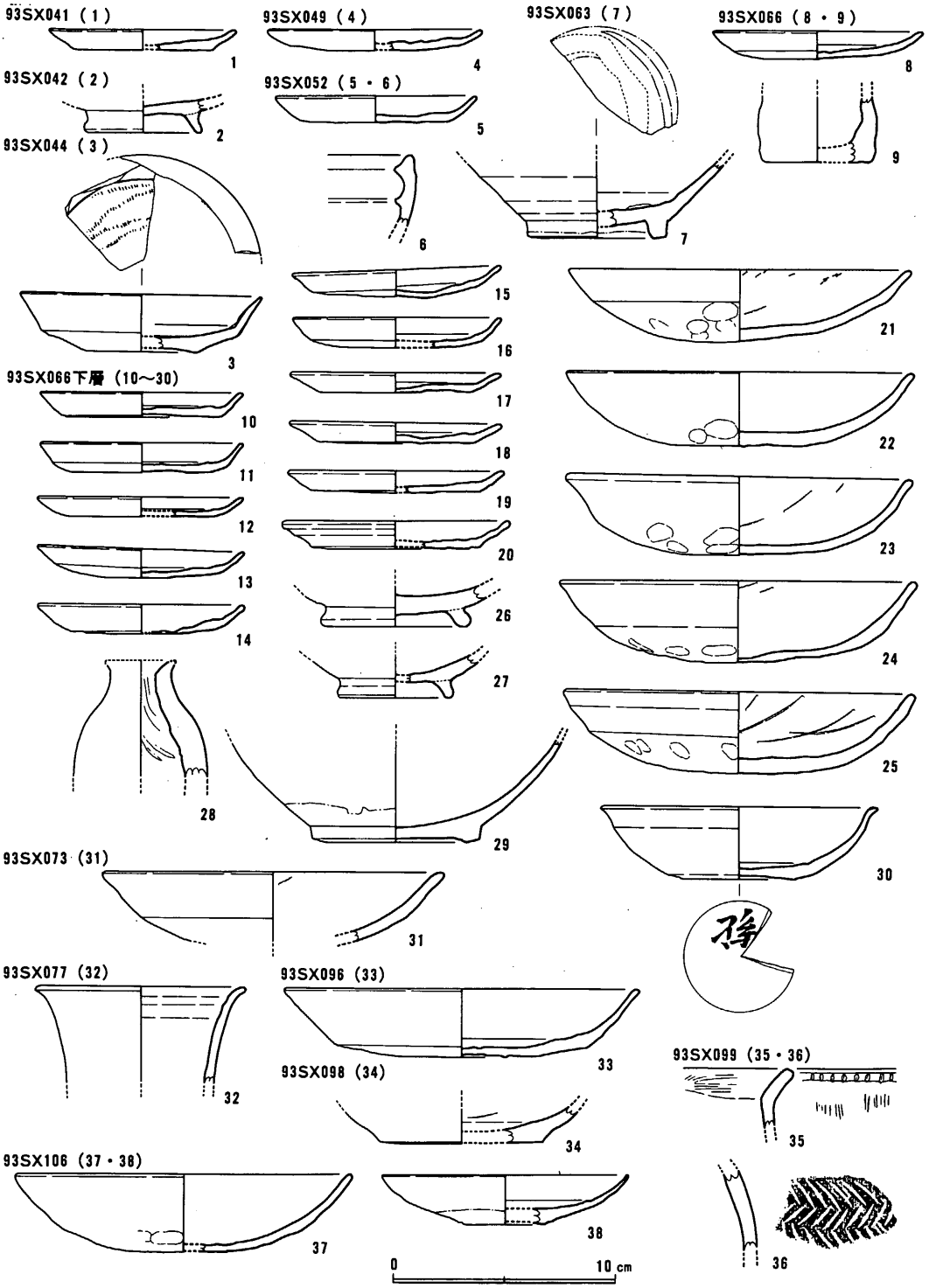


Fig.220　第93次調査その他の遺構出土土器実測図２ (1/3)

93SX042出土土器 (Fig.220)

黒色土器

椀ｃ（2）　Ｂ類で、高台径5.4cm。底部内面は強めのナデである。

93SX044出土土器（Fig.220、CD-093731･732）

同安窯系青磁

皿（3）　口径11.0cm、器高2.7cm、底径5.0cmを測る。内面には櫛目による文様があり、底部の釉は拭き取られる。I-2類。

93SX049出土土器（Fig.220）

土師器

小皿ａ（4）　口径9.8cm、器高1.0cm、底径7.7cmを測る。底部はヘラ切りとみられる。

93SX052出土土器（Fig.220、CD-093733･734）

土師器

小皿ａ（5）　口径9.2cm、器高1.2cm、底径6.7cmを測る。底部は糸切りとみられる。

陶器

鉢（6）　口縁部内側に2条の突帯をつけたような形状を呈している。I-1-a類。

93SX063出土土器（Fig.220、CD-093735･736）

白磁

椀（7）　高台径6.3cm。見込みに段を有し、その内側を環状に欠き取る。欠き取り部分には帯状に白土の付着がみられる。高台の両側縁にも白土の付着がある。

93SX066出土土器（Fig.220）

土師器

小皿ａ（8）　口径9.6cm、器高1.3cm、底径7.2cmを測る。底部はヘラ切りされる。

小壺（9）　底径5.0cm。胎土中に砂粒が若干混入する。

93SX066下層出土土器（Fig.220、CD-093737～755）

土師器

小皿ａ（10～20）　口径9.2～10.4cm、器高0.9～1.4cm、底径6.6～7.9cmを測る。底部はすべてヘラ切りされる。

丸底坏ａ（21～25）　口径15.6～18.0cm、器高3.2～3.8cmを測る。底部はヘラ切りされ、内面にはミガキｂが観察される。

椀ｃ（26）　高台径6.8cm。椀形態の土器にしては珍しく、胎土中に多量の砂粒が含まれており、表面には凹凸が目立つ。

小壺（28）　器肉は厚く、体部中程から口縁部に向かって捻り上げられたような形跡がある。口縁部はナデ？により平坦化されるが全体に一方に傾斜している。

黒色土器

椀ｃ（27）　Ｂ類。高台径5.2cm。

白磁

椀（29）　高台径7.6cm。見込みには段がなく、体部下半には施釉されない。Ⅳ-1類。

皿（30）　口径12.6cm、器高3.4cm、底径5.1cmを測る。釉は透明感のある明緑白色に発足し、貫入がみられる。外面底部の釉は拭き取られ、露胎となったところに墨書がある。文字は「孫」と判読できる。

93SX073出土土器（Fig.220）

土師器

丸底坏a（31）　口径15.6cm。底部はヘラ切りされる。

93SX077出土土器（Fig.220、CD-093756・757）

青磁

水注（32）　口径9.6cm。釉は淡緑灰白色に発色し光沢があるが、内面では斑がある。胎土は明灰褐色で小黒褐色斑が含まれている。越州窯系青磁Ⅲ類と考えている。

93SX096出土土器（Fig.220、CD-093758）

土師器

坏a（33）　口径16.2cm、器高3.2cm、底径11.4cmを測る。底部は糸切りされる。

93SX098出土土器（Fig.220、CD-093759・760）

土師器

坏a（34）　底径7.4cmで、糸切りである。豊前産。

93SX099出土土器（Fig.220、CD-093761・762）

弥生土器

甕（35）　口縁部の先端に刻み目を入れるもので、体部外面は縦方向のハケ目、口縁部内面は横方向のハケ目である。

壺（36）　胴部の破片で、外面に2列以上の綾杉文を配する。

93SX106出土土器（Fig.220、CD-093763・764）

土師器

丸底坏a（37）　口径15.3cm、器高3.6cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕が残る。

白磁

皿（38）　口径11.2cm、器高2.3cm、底径3.7cmを測る。体部下半は露胎である。Ⅵ-1-a類。

93SX111出土土器（Fig.221、CD-093765・766）

土師器

坏a（1）　口径11.2cm、器高2.0cm、底径7.2cmを測る。底部はヘラ切りされる。

椀c（2）　口径15.2cm、器高6.0cm、底径8.9cmを測る。底部に径4.8cm内外の穿孔がある。焼成後に外面から穿たれたものとみられる。

93SX115出土土器（Fig.221、CD-093767）

土師器

甕（3）　口径14.2cm、器高13.8cm、底径5.8cmでわずかに平底を呈している。体部外面は縦方向のハケ目、内面は下から上に上がるヘラケズリで、底部近くには指圧痕がみられる。底部外面のみ黒化（焼成時の黒斑）している。

93SX117出土土器（Fig.221）

土師器

丸底坏ａ（4･5）口径13.2･14.2cm、器高2.4･3.7cm。底部はヘラ切りで、内面はミガキｂが施される。

白磁

椀（6）　高台径6.2cm。見込みに小さな段を有する。Ⅴ類。

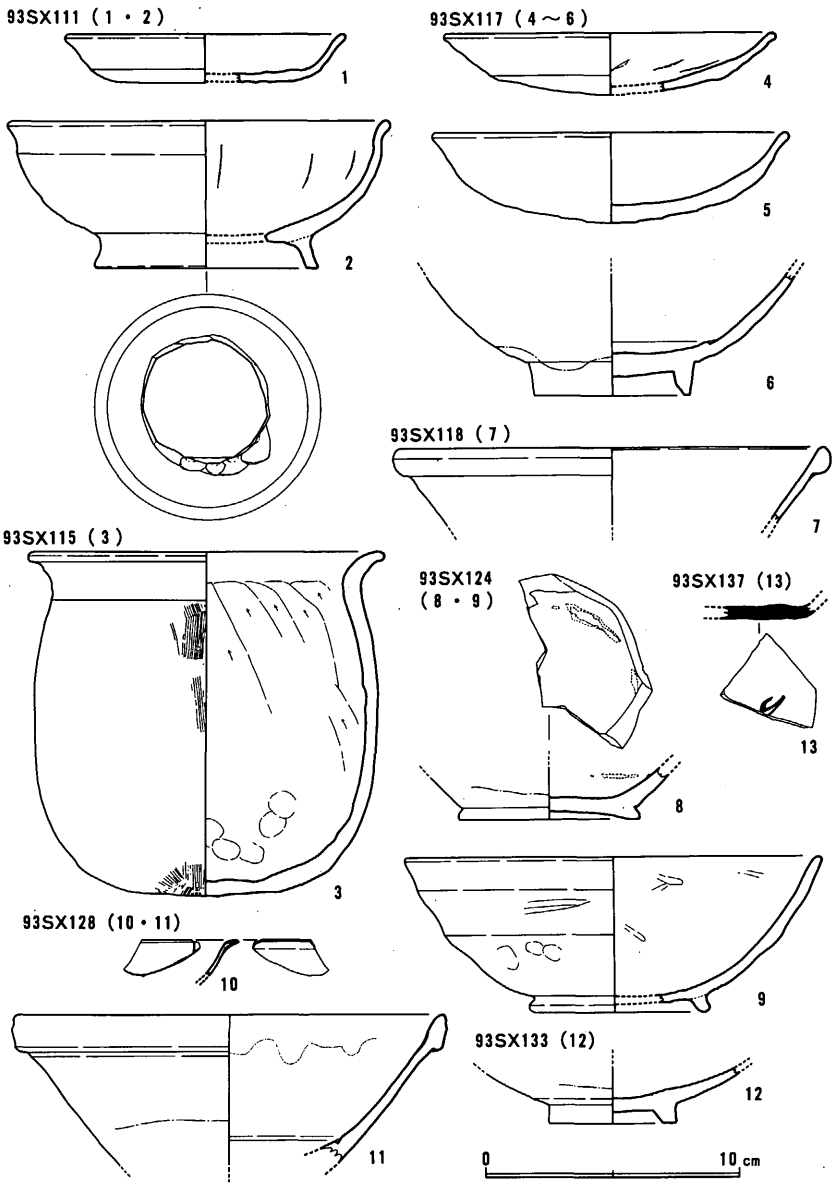


Fig.221　第93次調査その他の遺構出土土器実測図３（1/3）

93SX118出土土器（Fig.221）

白磁

椀（7）　口径17.4cmで、Ⅳ類。

93SX124出土土器（Fig.221、CD-093768～770）

瓦器

椀ｃ（9）　口径16.6cm、器高6.2cm、底径7.2cm。表面はかなり風化しているが、部分的にミガキｃが観察される。

越州窯系青磁

椀（8）　高台径7.2cmで、釉は白灰色を呈し光沢もなくざらついている。体部外面下位以下には施釉されない。見込みには目跡が観察される。II-2類。

93SX128出土土器（Fig.221）

白磁

椀（11）　口径17.3cmで、見込みに沈線状の段がある。Ⅳ-1-a類。

青白磁

皿（10）　外側へ強く折り曲げた口縁上部には釉が厚く溜まり、その部分のみ薄い青緑色を帯びている。他は明白色に発色する。内面の口縁部と体部の境目から派生する縦方向の隆線がある。

93SX133出土土器（Fig.221）

白磁

椀（12）　高台径5.1cmで、II類。

93SX137出土土器（Fig.221、CD-093771）

土師器

坏a(13)　底部の資料で、ヘラ切りされる。外面に墨書があるが判読できない。なお図面の展開上、図の下が文字の上にあたるものとみられる。

93SX155出土土器（Fig.222、CD-093772～783）

土師器

坏a（1～6）　口径12.4～13.6cm、器高3.5～4.0cm、底径7.8～8.7cm。底部はヘラ切りされる。

皿a（7･8）　口径13.0～14.0cm、器高1.7～2.3cm、底径9.9～11.2cm。底部はヘラ切りされる。

椀c（10）　高台径8.7cm。体部の調整はヨコナデである。

甕（11）　口径28.0cm。外面は口縁部以下すべて縦方向のハケ目、内面は口縁部付近が横方向のハケ目、体部は右下から競り上がるヘラケズリである。

93SX166出土土器（Fig.222）

土師器

把手（12）　現存長7.8cmで、親指のような形状を呈する。表面は指圧とナデによる。

93SX170出土土器（Fig.222）

須恵器

鉢（13）　東播系か。

93SX172出土土器（Fig.222）

須恵器

鉢（14）　篠窯系。

93SX175出土土器（Fig.222、CD-093784･785）

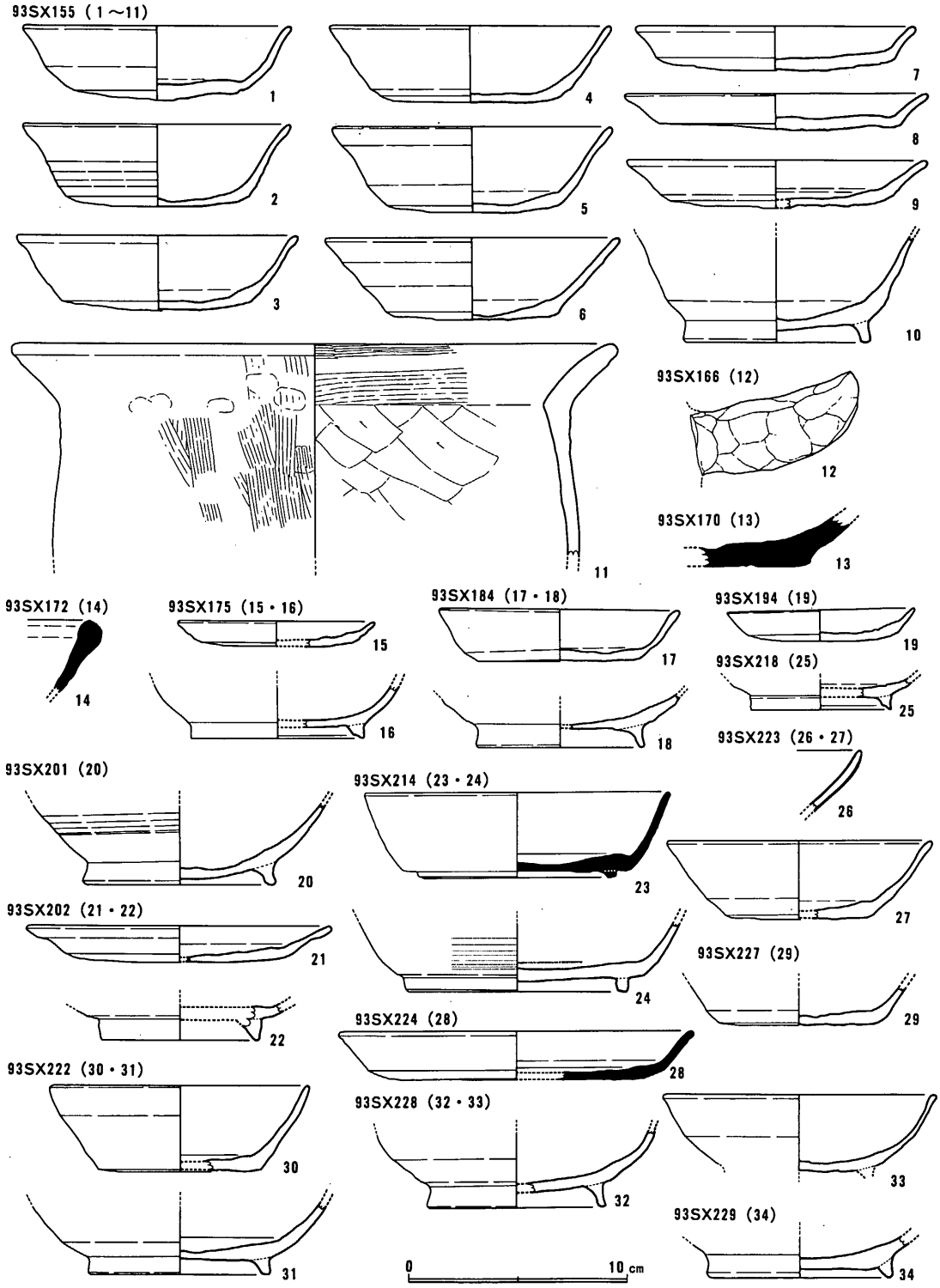


Fig.222　第93次調査その他の遺構出土土器実測図 4　(1/3)

土師器

小皿ａ（15）　口径9.2cm、器高1.2cm、底径7.0cmを測る。底部はヘラ切りとみられる。

緑釉陶器

椀（16）　高台径8.0cm。畳付けに段を有し、そこから糸切りの底部にかけては施釉されない。釉は暗緑白色に発色し、胎土は淡灰色を呈し、やや硬質に焼成される。近江産か。

93SX184出土土器（Fig.222、CD-093786）

土師器

坏ａ（17）　口径11.2cm、器高2.4cm、底径7.5cmを測る。底部はヘラ切りされる。

椀ｃ（18）　高台径7.8cm。底部はヘラ切りとみられる。

93SX194出土土器（Fig.222、CD-093787）

土師器

小皿ａ（19）　口径8.7cm、器高1.5cm、底径7.0cmを測る。底部はヘラ切りされる。

93SX201出土土器（Fig.222）

土師器

椀ｃ（20）　高台径9.0cm。底部はヘラ切りとみられる。

93SX202出土土器（Fig.222）

土師器

皿ａ（21）　口径14.2cm、器高1.7cm、底径10.4cmを測る。底部はヘラ切りされる。

灰釉陶器

椀（22）　高台径7.5cmを測るが、きわめて小さな破片である。見込みに淡緑灰色の釉が飛散している。

93SX214出土土器（Fig.222、CD-093788・789）

土師器

坏ｃ（24）　高台径10.3cm。風化が進むが内外面ともにミガキａが観察され、底部は回転ヘラケズリされる。

須恵器

坏ｃ（23）　口径14.1cm、器高4.0cm、底径9.1cm。高台内側に墨痕が付着し、その範囲は研磨されていることから、伏せた状態で硯に転用されていたものとみられる。

93SX218出土土器（Fig.222、CD-093790・791）

緑釉陶器

椀（25）　高台径6.5cm。高台畳付け内側に段があり、そこから底部にかけては施釉されない。見込みには沈線が巡り、付着物がある。釉は淡緑色に発色し、胎土は明灰色、明茶白色を呈し、やや硬質に焼成される。近江産か。

93SX222出土土器（Fig.222）

土師器

坏ａ（30）　口径12.0cm、器高4.0cm、底径7.5cm。底部はヘラ切りされ、全体の色調は概ね暗茶色を呈している。

椀ｃ（31）　高台径8.4cm。

93SX223出土土器（Fig.222、CD-093792･793）

土師器

坏ａ（27）　口径12.3cm、器高3.7cm、底径6.9cm。底部はヘラ切りされ板状圧痕が残る。

白磁

椀（26）　残存部の全面に施釉され、釉は濁白色で光沢がある。I-B類か。

93SX224出土土器（Fig.222）

須恵器

皿ａ（28）　口径16.4cm、器高2.3cm、底径11.7cm。底部はヘラ切りされる。

93SX227出土土器（Fig.222）

土師器

坏ａ（29）　底径7.3cmで、底部はヘラ切りされ板状圧痕が残る。

93SX228出土土器（Fig.222）

土師器

椀ｃ（32･33）　32は高台径8.3cm。33は口径12.7cmで底部はヘラ切りされ、高台の外れた跡がある。

93SX229出土土器（Fig.222、CD-093794･795）

灰釉陶器

椀（34）　高台径8.6cm。底部は糸切りされ、見込みにはほのかに赤味が残り、研磨された形跡がみられることから、赤色顔料を擦ったものと考えている。

93SX236出土土器（Fig.223、CD-093796･797）

黒色土器

椀ｃ（1）　Ａ類で、高台径7.3cm。体部外面下半は回転ヘラケズリされ、内面にミガキｃを施す。

緑釉陶器

坏（2）　釉はほとんど残存しないが、内面に飛散するごくわずかなものだけが残る。焼成はあまく、土師質である。

93SX243出土土器（Fig.223）

土師器

小皿ａ（3～5）　3は糸切りで、口径9.6cm、器高1.4cm、底径6.8cm。4･5はヘラ切りで、口径9.0･10.2cm、器高1.1･0.8cm、底径6.8･7.5cm。

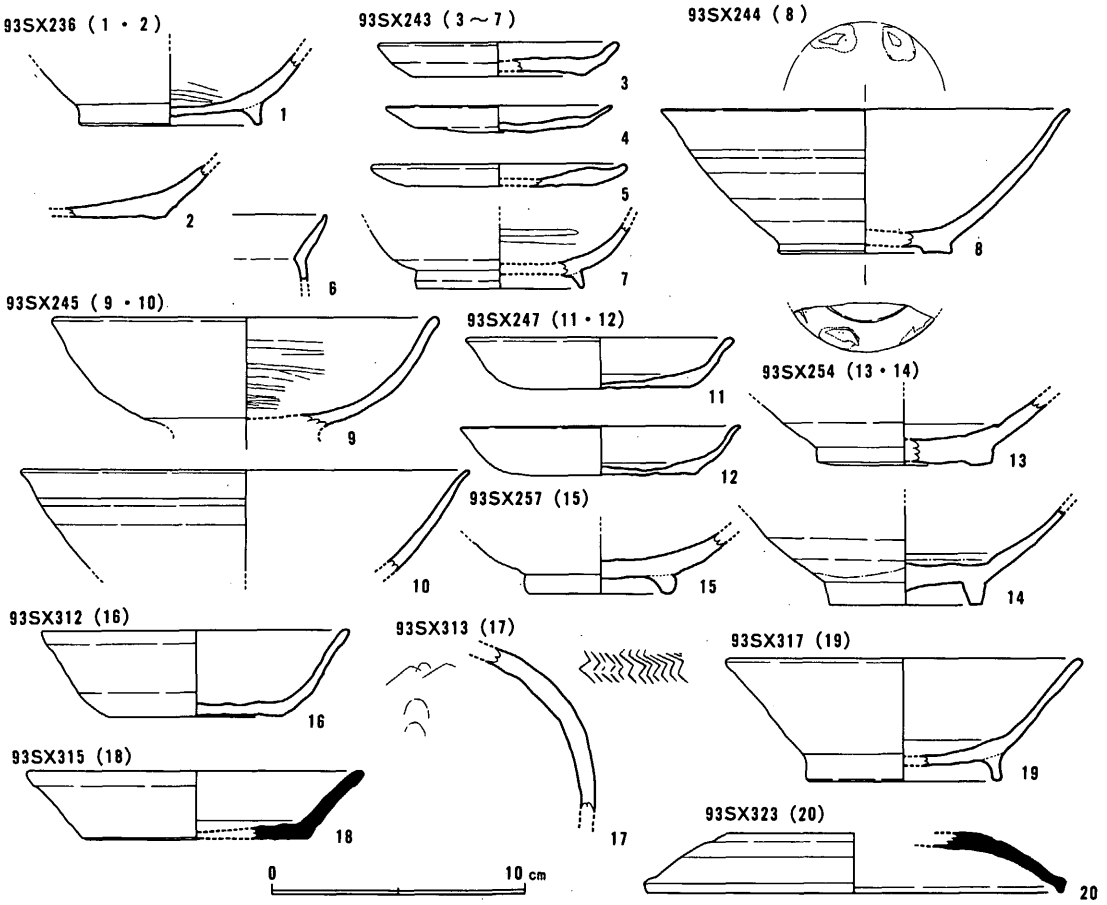


Fig.223　第93次調査その他の遺構出土土器実測図５（1/3）

甕（6）　口縁部内面はハケ目である。全体に黒色を呈している。

黒色土器

椀ｃ（7）　Ｂ類で、高台径6.2cm。

93SX244出土土器（Fig.223、CD-093798･799）

越州窯系青磁

椀（8）　口径16.2cm、器高5.8cm、高台径7.0cm。畳付け及び見込みに目跡があり、畳付けの外周を除いて全面施釉される。釉は明緑灰色で光沢がある。I-1-a 類。

93SX245出土土器（Fig.223、CD-093800･801）

黒色土器

椀ｃ（9）　Ｂ類で、口径15.4cm。内外面ともにミガキｃがある。高台は外れている。

越州窯系青磁

椀（10）　淡緑灰色に発色する釉は残存部の全面にかかる。Ｉ類。

93SX247出土土器（Fig.223、CD-093802･803）

土師器

坏a（11･12）　11は上に被せられ蓋として用いられ、12は身として用いられていた。口径10.7･11.2cm、器高2.0cm、底径6.8･7.2cmで、底部はヘラ切りされる。

93SX254出土土器（Fig.223、CD-093804･805）

白磁

椀（13･14）　13は高台径7.0cmで、Ⅳ-1-a類。14は高台径6.1cmで、体部外面下半には施釉されず、見込みの釉も環状に欠き取っている。またその周囲及び高台畳付けの側縁に目跡状の付着物が巡る。Ⅷ類。

93SX257出土土器（Fig.223）

土師器

丸底坏c（15）　高台径6.0cm。内面はミガキbが施される。他に糸切り底の瓦器椀が出土している。

93SX312出土土器（Fig.223）

土師器

坏a（16）　口径12.2cm、器高3.5cm、底径6.9cm。底部はヘラ切りされる。

93SX313出土土器（Fig.223、CD-093807･808）

弥生土器

壺（17）　胴部外面上位に2段以上の綾杉文を巡らす。

93SX315出土土器（Fig.223）

須恵器

坏a（18）　口径13.4cm、器高2.8cm、底径8.9cm。底部はナデ調整される。

93SX317出土土器（Fig.223、CD-093809）

土師器

坏c（19）　口径14.2cm、器高4.9cm、高台径7.8cm。体部は直線的に立ち上が

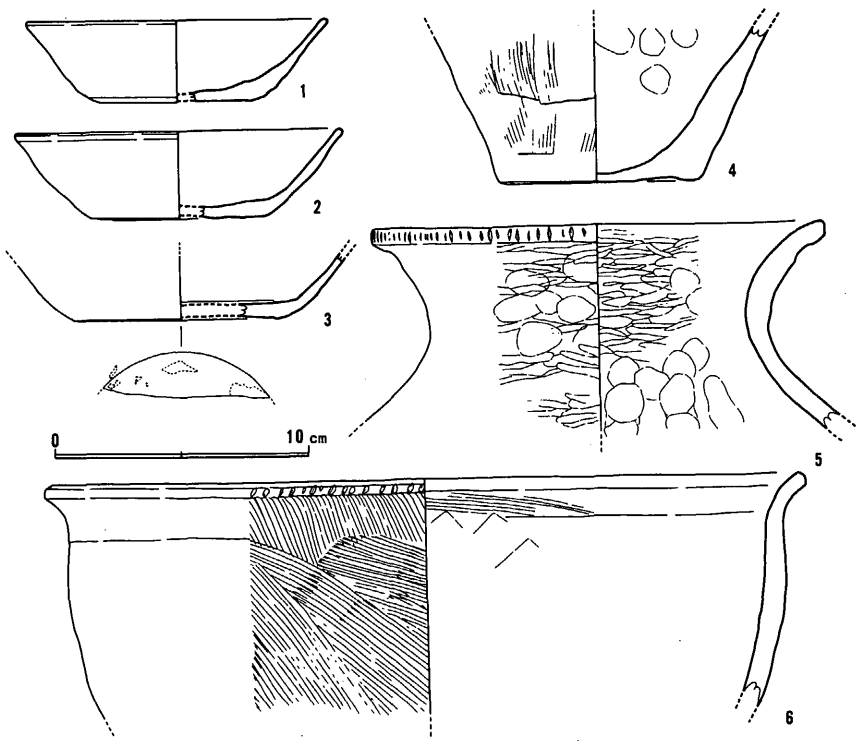


Fig.224　淡茶色土層出土土器実測図（1/3）

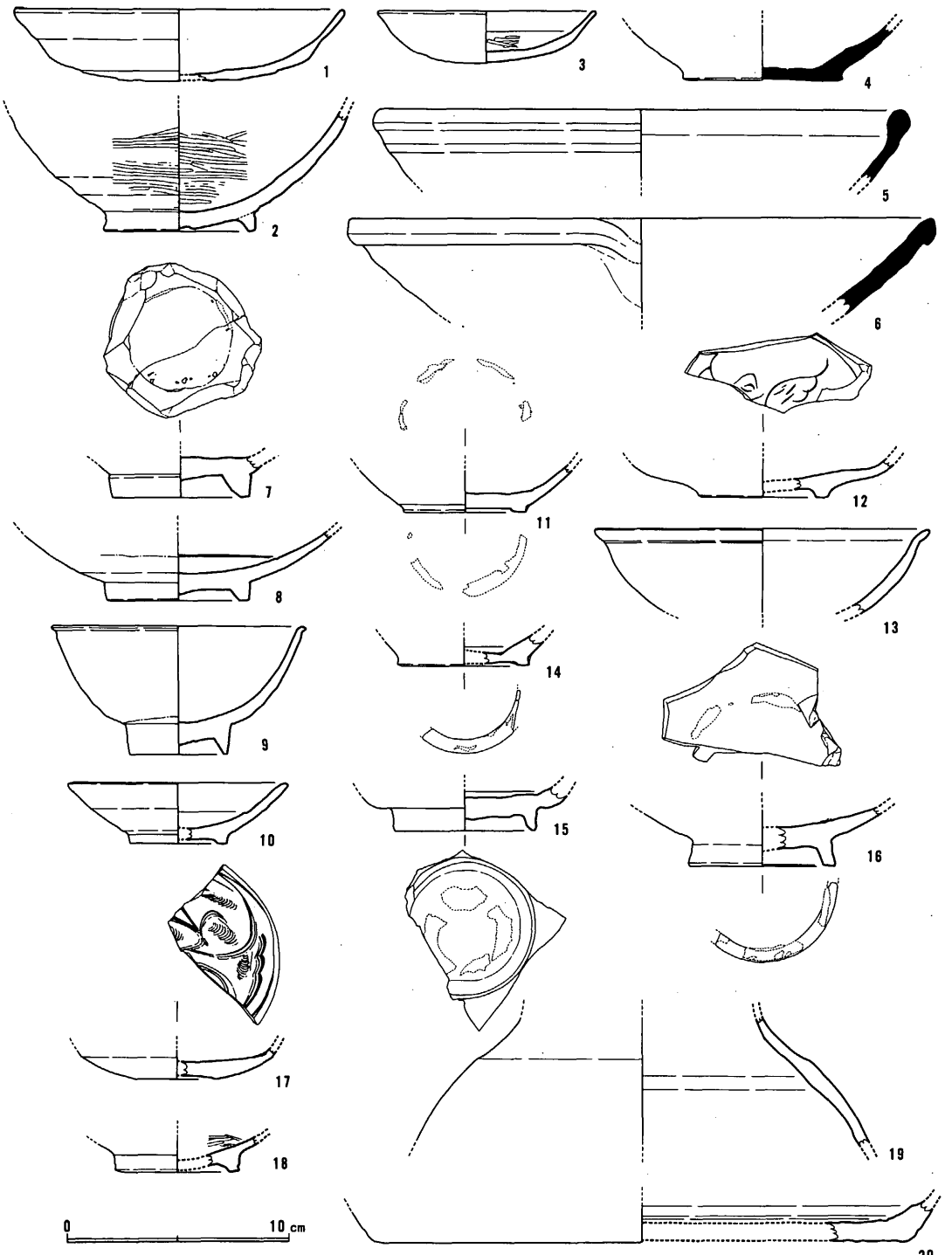


Fig.225　茶灰色土層出土土器実測図１（1/3）

る。

93SX323出土土器（Fig.223）

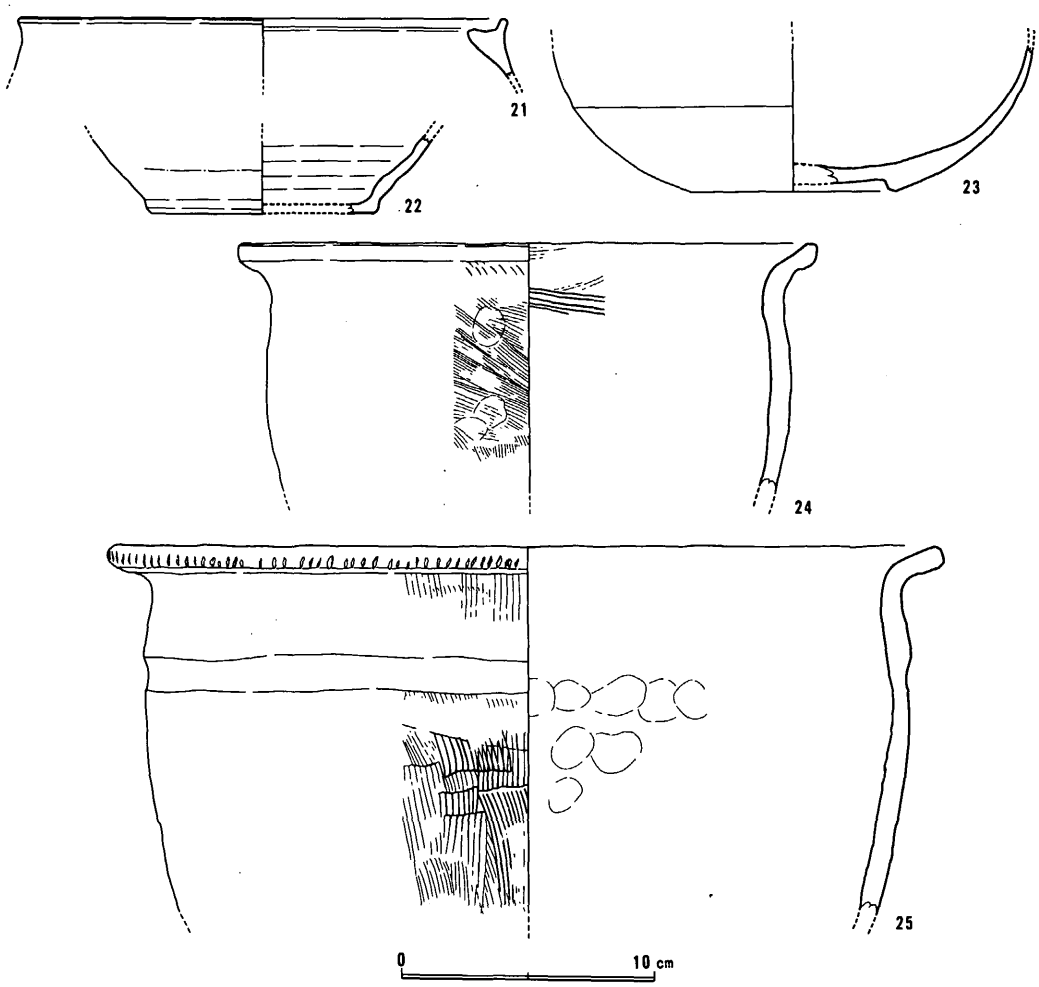


Fig.226　茶灰色土層出土土器実測図２（1/3）

須恵器

蓋3（20）　口径16.5cm。天井部はヨコナデされる。

淡茶色土層出土土器（Fig.224、CD-093810～818）

土師器

坏ａ（1･2）　口径12.0･13.0cm、器高3.2･3.5cm、底径7.1･7.0cm。底部はヘラ切りされる。

越州窯系青磁

坏（3）　底径8.5cm。釉は淡緑白色で全面にかかり、底部周囲に目跡が残る。Ⅰ類。

弥生土器

壺（5）　口径18.0cmで、口縁部外側に刻み目を巡らす。頸部から口縁部は内外面ともに指圧痕がみられ、最終調整としてヘラミガキが観察される。体部は内面ではナデ上げたような痕跡で終わるが、外面はヘラミガキである。

甕（4･6）　4は底径7.9cm。表面の風化が進み調整は明らかでない。６は口径30.2cmで、口縁

部外面に刻み目を巡らす。口縁部付近は外面で縦方向のハケ目、内面で横方向のハケ目である。体部は外面が横乃至は斜め方向のハケ目、内面は平滑にナデられる。

茶灰色土層出土土器（Fig.225･226、CD-093819～838）

土師器

丸底坏ａ（1）　口径15.0cm、器高3.3cm。底部はヘラ切りされる。

黒色土器

椀ｃ(2)　Ｂ類で、高台径6.9cm。体部下半は回転ヘラケズリされ、内外面ともにミガキｃが顕著である。

瓦器

小皿（3）　口径10.0cm、器高2.4cmで、底部はヘラ切りされる。内面の体部中程以下はミガキｂののちミガキｃが施されるものとみられる。他の部位にミガキはみられない。

須恵器

鉢（4～6）　4は底径7.3cmで、糸切りされる。５は口径24.4cmに復原されるが小片である。口縁部を肥厚させるもので、篠窯系。6は口径26.7cmに復原されるが小片である。片口の一部が残存している。東播系。

白磁

椀（7･8）　7は高台径6.2cm。見込みの釉を環状に拭き取り、その周囲に目跡状のものが観察される。高台畳付け周辺も同様な痕跡がある。Ⅷ類。なお体部の割れは人為的な打ち欠きによるものと考えられる。8は高台径6.5cm。見込みに沈線状の小さな段が巡る。釉は淡茶灰白色に発色するが、剝離が著しい。釉は外面の体部下半にはかからない。II-2-a 類。

小椀（9）　口径11.6cm、器高5.9cm、高台径4.4cm。口縁端部を丸くつまみ出す。釉はわずかに草色を帯びた乳濁色で、高台部周辺にはかからない。釉には小さな気泡が目立つ。高台内側はヘラケズリされるがきわめて粗いものである。XⅣ類。

皿（10）　口径10.0cm、器高2.8cm、底径4.4cmで、高台を含めた底部は露胎である。見込みに小さな段がある。II-1-a 類。

越州窯系青磁

椀（11･13）　11は高台径5.6cm。全面施釉され、見込み及び畳付けに目跡が観察される。I-2 類。13は口径15.2cm。釉は淡緑灰色に発色し、外面は釉垂れによる斑がある。胎土は暗灰白色で黒褐色斑が多数混在する。II-2-f 類。

皿（12）　高台径5.9cmで、畳付け以外は施釉される。見込みにヘラ先による細線で描かれた文様がある。

高麗青磁

椀（14～16）　14は高台径6.0cmで、畳付けには施釉されず、見込みを円形に窪ませる。畳付けには目跡が残存するが使用による磨耗でかなり擦れている。15は高台径6.5cmで、全面施釉さ

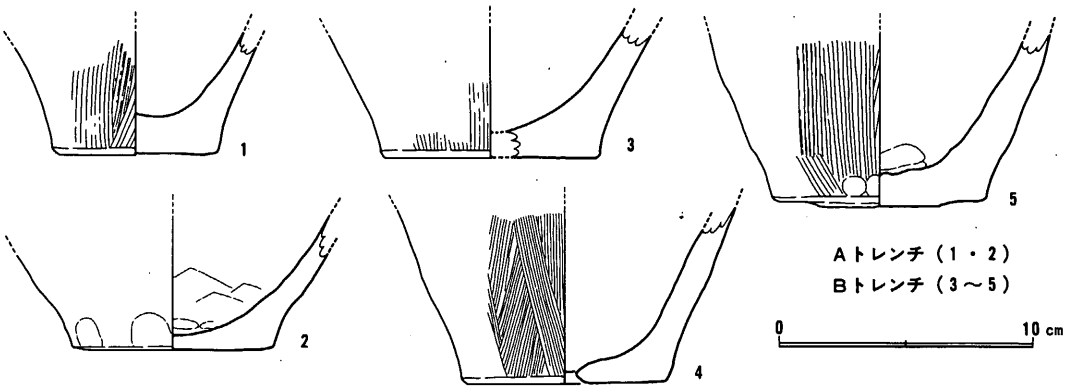


Fig.227　トレンチ出土土器実測図（1/3）

れる。高台内側に大きな目跡がある。釉は淡緑灰色で鈍い光沢がある。胎土は茶灰色を呈し、暗褐色斑が含まれている。Ⅲ類。16は高台径6.7cmで、見込み及び畳付けに目跡が残る。胎土中に白色粒を含んでいる。II-2類。

龍泉窯系青磁

皿（17）　底径3.6cmで、底部の釉を削り取っている。見込みには櫛とヘラの片切彫りによる文様が配される。I-1-c類。

緑釉陶器

椀（18）　高台径5.7cmで、高台外側に浅い沈線が巡っている。内面にはヘラミガキが施され、釉は底部以外にかけられ、明黄緑色ないしは明緑白色に発色し、光沢がある。胎土は茶白色、明灰色を呈し、やや軟質に焼成される。京都産か。

朝鮮系無釉陶器

壺（19）　胎土は赤褐色で、きわめて硬質に焼成される。

鉢（20）　底径24.2cm。底部は特に調整された形跡はなく、他の部位はヨコナデである。胎土は明赤褐色で、きわめて硬質に焼成される。

陶器

壺（22）　底径9.2cm。体部上半には暗茶黒色の釉がかかる。

鉢（23）　底径8.0cmで、体部外面下半は回転ヘラケズリ、内面は回転の速いヨコナデである。釉は内面にみられ、明淡緑灰色に発色する。Ⅵ類。

21は器種不明の製品

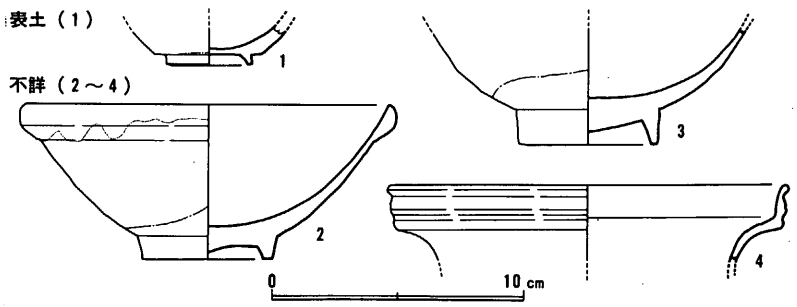


Fig.228　表土ほか出土土器実測図（1/3）

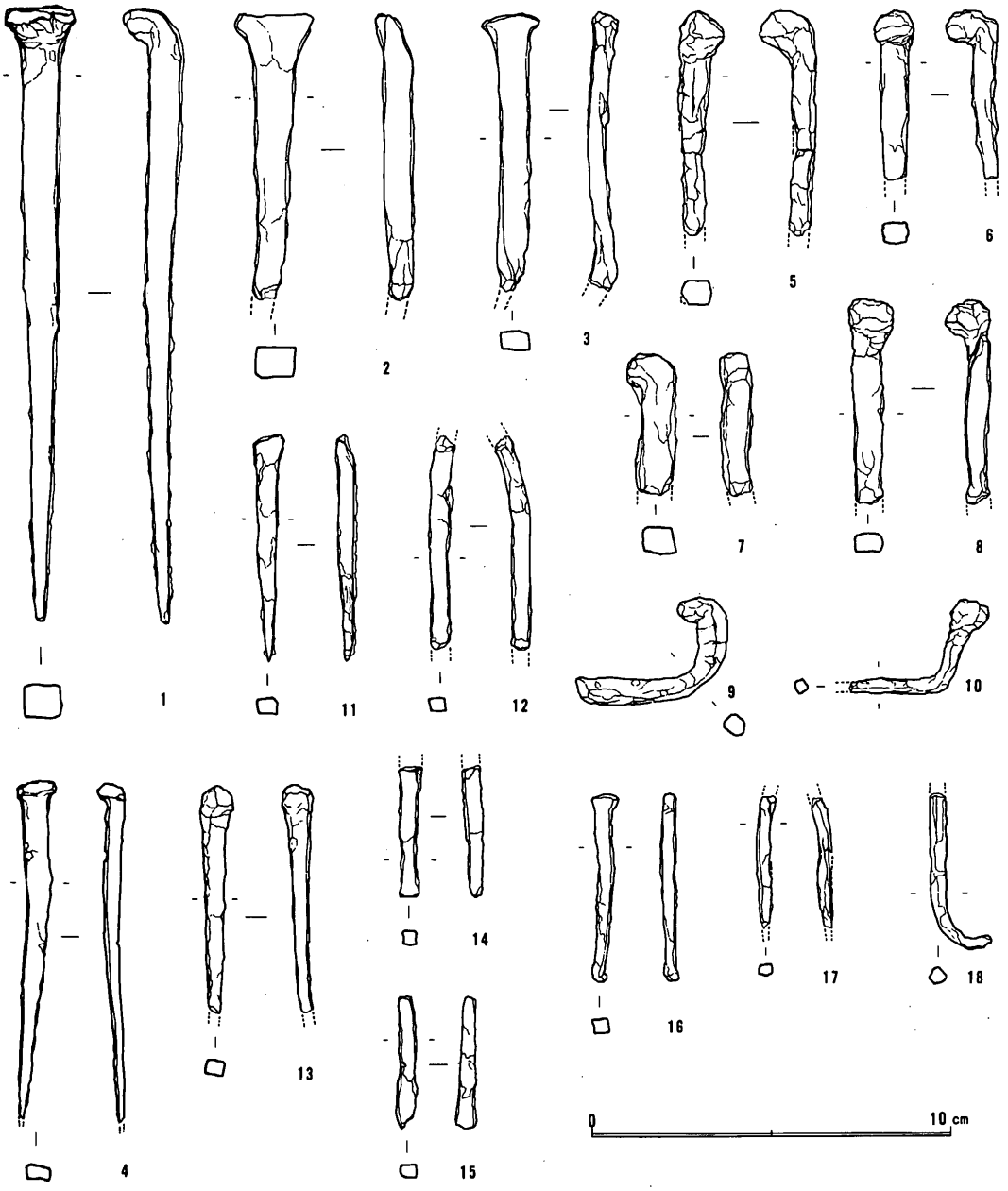


Fig.229　第93次調査出土鉄製品実測図１（1/2）

で、口径19.4cm。無釉で、暗褐色ないしは明褐色を呈し、胎土中に砂粒を少量混在する。

弥生土器

甕（24･25）　口径23.0･33.3cm。24の口縁部付近は風化が進み詳細は分からないが、25では口縁端部に刻み目を巡らせている。

Ａトレンチ出土土器（Fig.227、CD-093839･840）

弥生土器

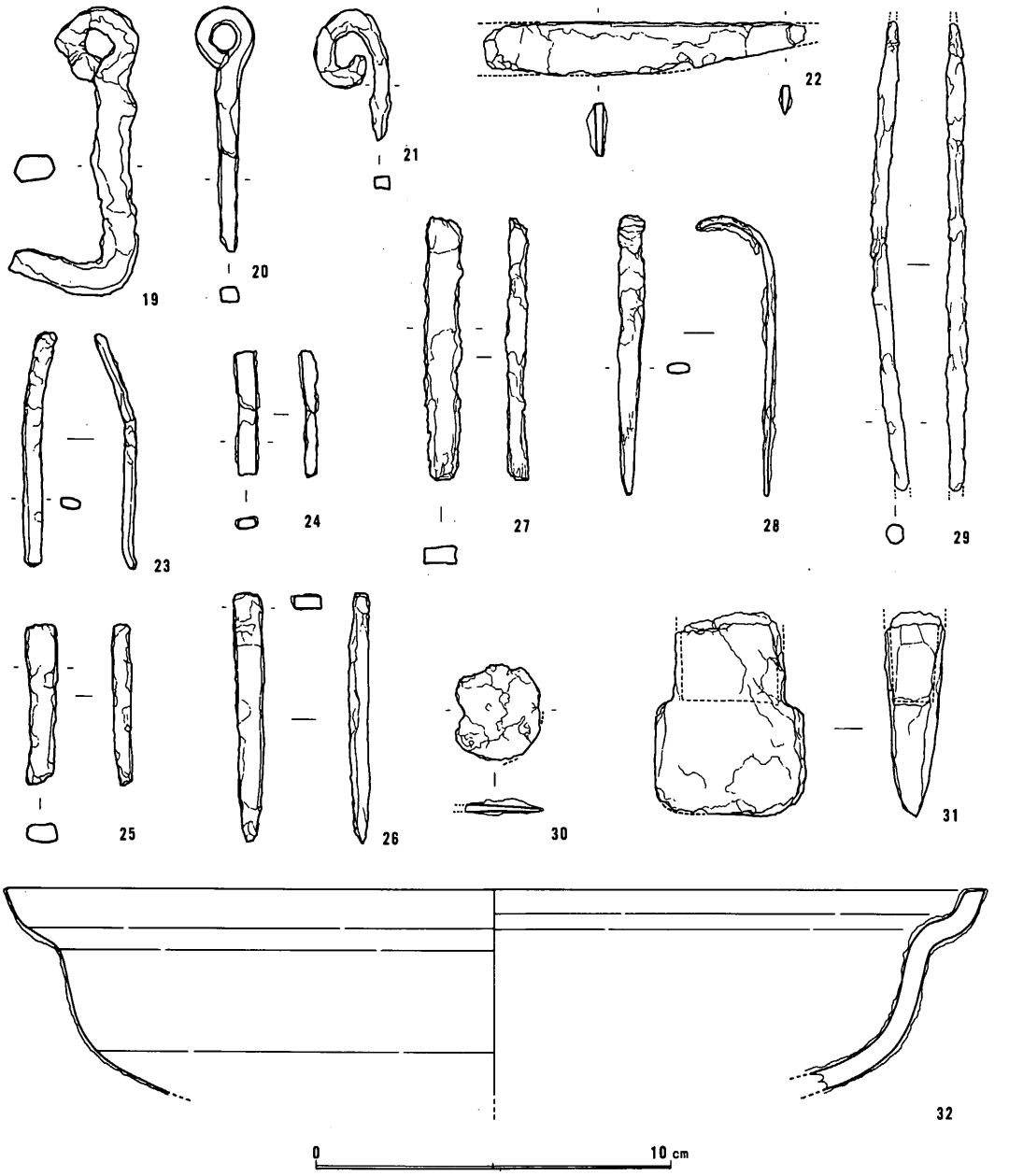


Fig.230　第93次調査出土鉄製品実測図２（1/2）

甕（1･2）　底径6.6･8.1cm。１の外面はハケ目である。

Ｂトレンチ出土土器（Fig.227、CD-093841～844）

弥生土器

甕（3～5）　底径8.0～8.5cm。外面は縦方向のハケ目、内面は指圧によって成形される。体部内面はナデである。

表土出土土器（Fig.228、CD-093845･846）

白磁

小椀（1）　高台径3.4cm。釉はわずかに青色味を帯びた淡白灰色で、底部以外に施される。近世のもの。

出土地点不詳の土器

(Fig.228)

白磁

椀（2･3）　2は口径14.9cm、器高6.2cm、高台径5.2cm。Ⅳ-2類。3は高台径5.5cmで、Ⅴ類。

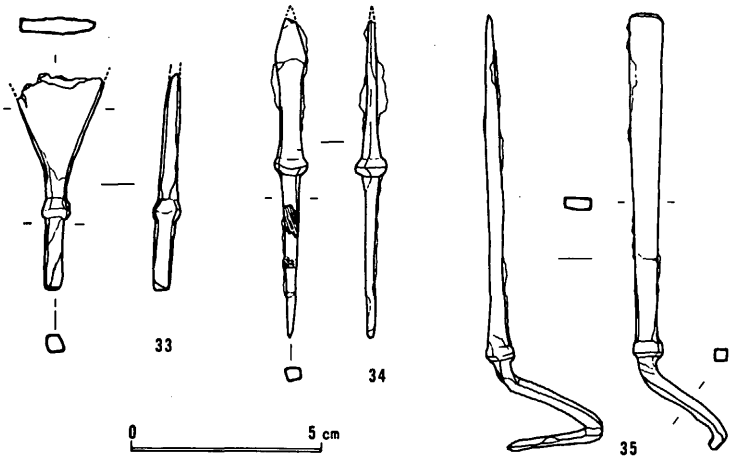


Fig.231　第93次調査出土鉄製品実測図3（1/2）

朝鮮系無釉陶器

壺（4）　口径15.9cmで、表面の調整は回転の速いヨコナデである。胎土は暗褐色で硬質に焼成される。

(2) 金属製品

鉄製品（Fig.229～231、CD-093847～868）

釘（1～18）　先端の残るものはすべて平頭状に作られる。1～3は大型のもので、1は長さ17.3cmを測る。5～8は頭部が肥厚した形状を呈しているが、多くは錆により変化したものとみられる。9･10は中程で折り曲げられたもの、18は先端が曲がっている。14･15はここで報告したが先端が刃状をなす楔形を呈するものである。何らかの工具の可能性がある。1は93SK220、2は93SX188、3は93SE200上面、4は93SE035、5は93SX174、6は93SK018、7は93SX243、8は93SK250、9･10は93SK100、11は93SE070枠内、12は93SX066下層、13は93SX007、14は93SK075、15は93SE200黒色土層、16は93SK110、17･18は93ST004からそれぞれ出土した。

掛金具（19～21）　頭部を環状に作るもので、19は錆に覆われるがほぼ完存するものである。20は先端を失うが19と類似する形状を想定できる。21は釘状の金具を折り曲げた二次製品と考えられる。19はS-178ピット、20は93SE150、21は93SE200黒色土層出土。

刀子（22）　図の右側が先端部分になると考えられる。93SX133出土。

板状製品（23～28）　釘とするには扁平すぎるものを集めて報告したが、何らかの工具である可能性を考えている。28が先端を鋭利にし上端は折れ曲が

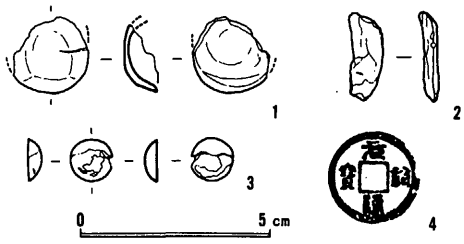


Fig.232　第93次調査出土鉄製品実測図（1/2）

る。23は93SK135黒色土層、24は93SE200上面、25は93SE035、26は93SE125、27は93SK090、28は93SK020からそれぞれ出土した。

釘状製品（29）　長さ13.5cm以上で断面形状は略円形を呈し径0.6cm内外を測る。図の上方が鋭利になっている。93SE150黒色土出土。

円盤状製品（30）　薄い円盤状を呈するもので、93SX042出土。

斧（31）　小形の袋状鉄斧とみられるもので、長さ5.5cm、幅4.2cm、最大厚1.6cmを測る。刃部はX線撮影の結果から空洞になっていないようで、鋳造品とみられる。淡茶色土層出土。

鍋（32）　口径27.9cmを測るが、複数の小片から復原された数値である。口縁部は一旦外方へ折り曲げられたのち再度立ち上がる形状を呈し、端部は平坦である。93SK075出土。

鏃（33～35）　33は先端が開くタイプとみられ、茶灰色土層出土。34は端部近くで僅かに膨らみ、先端を鋭利にするもので93SK100出土。35は平頭状の端部を有するもので、根部は折れ曲がっている。93SE200黒色土層出土。

銅製品（Fig.232、CD-093869～872）

鈴（1）　片側の破片で、吊手の部分を欠く。93SE200黒色土出土。

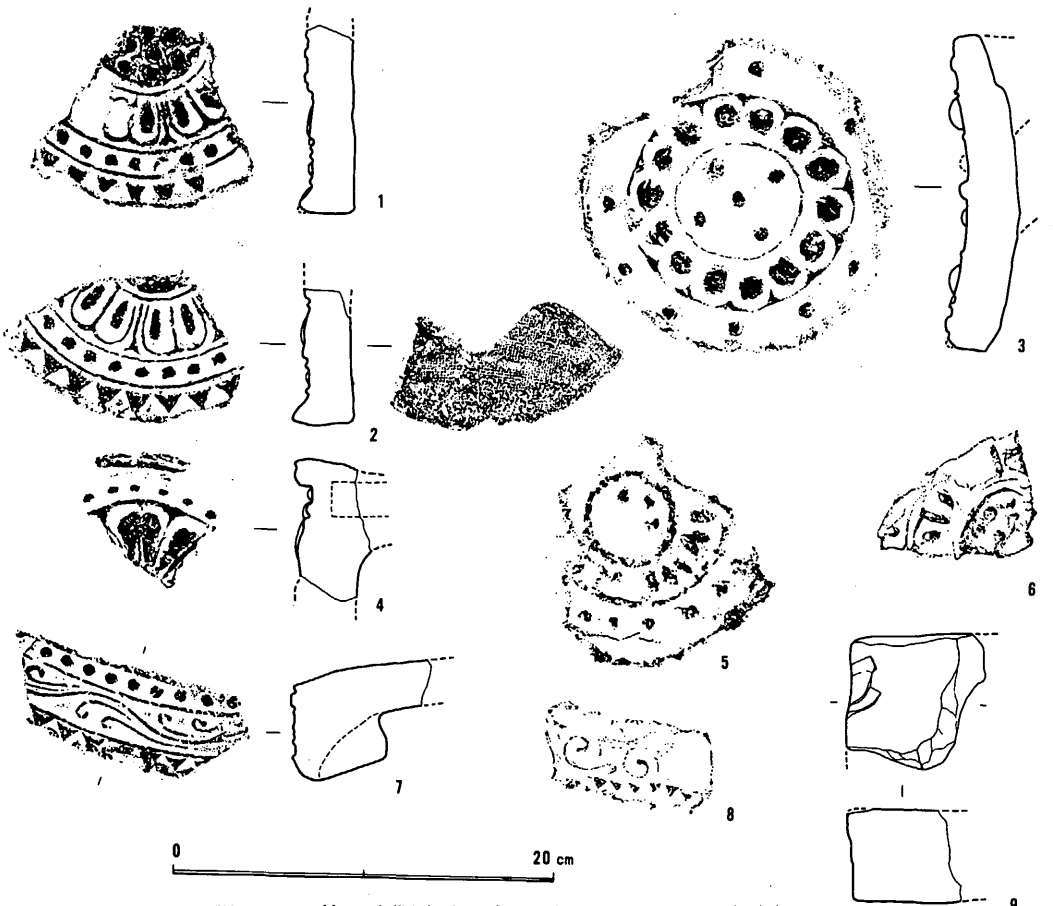


Fig.233　第93次調査出土軒瓦・塼実測図・拓影（1/4）

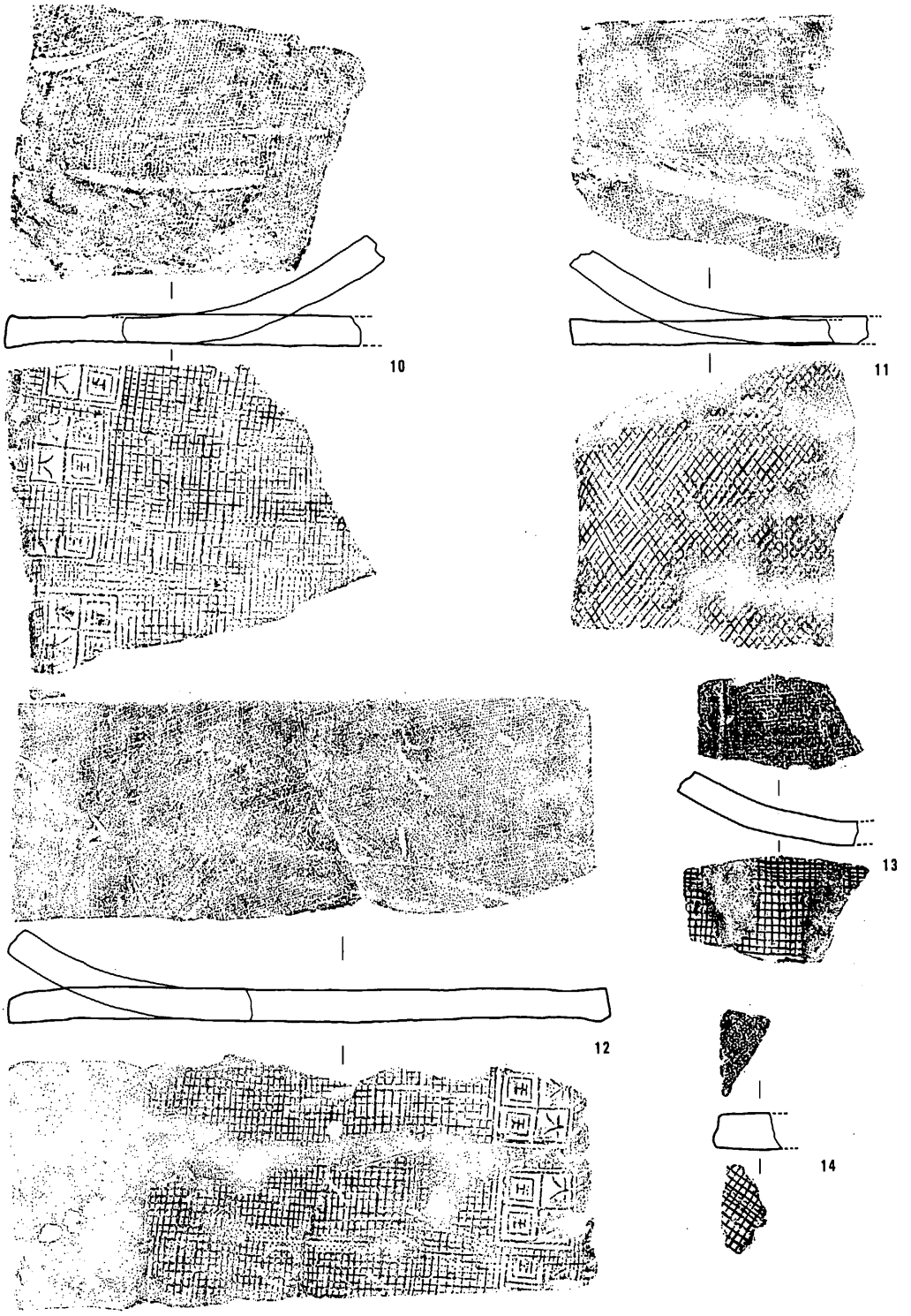


Fig.234　93SX227出土瓦実測図・拓影（1/4）

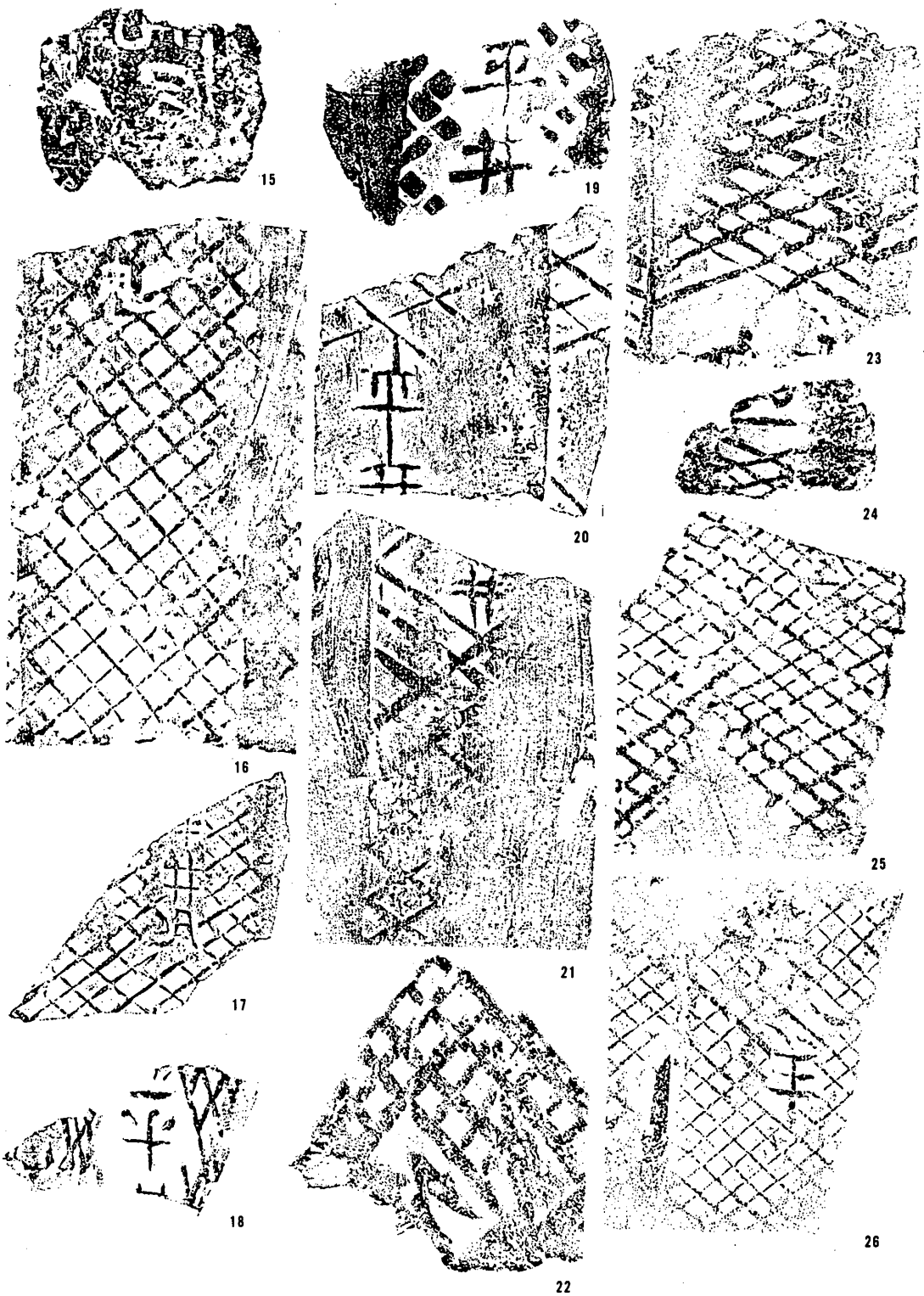


Fig.235　第93次調査出土文字瓦拓影（1/2）

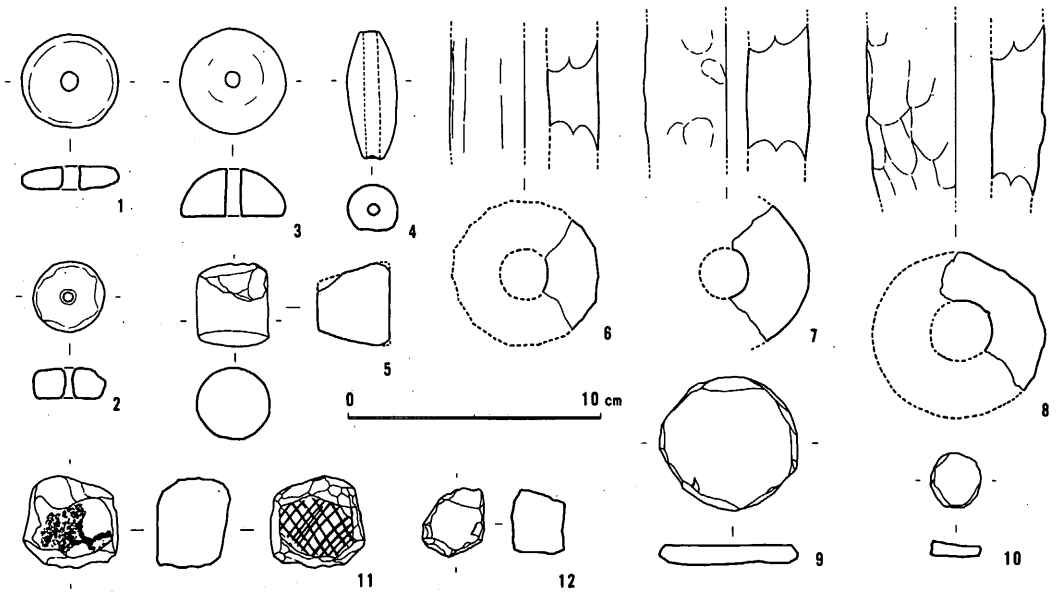


Fig.236　第93次調査出土土製品・瓦製品実測図（1/3）

板状製品（2）　本来の形状は知り得ない。93SE035出土。

鋲（3）　径1.1cm、高さ0.4cmの半球形で、針部分は失われている。表面には塗金が残る。93SX222出土。

銭（4）　「元祐通寶」で、93SE031裏込土出土。

(3) 瓦（Fig.233～235、CD-093873～901）

軒丸瓦（1～6）　1・2は老司Ⅰ式とされるもので、2の裏側には布目痕がみられる。1も同様であったらしいが風化している。1は93SE200曲物内出土。2は93SE150枠内埋土中出土。3は複弁が退化して単弁状を呈するもので、93SE150黒灰色土層出土。4は単弁で外区に珠文を巡らす。93SX216出土。5は93SE150黒灰色土層出土。6は淡茶色土層出土。

軒平瓦（7･8）　7は老司Ⅱ式で、93SE150裏込土出土。8は鴻臚館式で、茶灰色土層出土。

平瓦（10～14）　すべて93SX227の遺構底に敷かれていたもので、11を除いて同じ叩き目で、「大国」の文字がみられる。いずれも桶巻き作りで、側縁は分割した後特に調整されていない。

文字瓦（15～26）　15は「平井瓦屋」と陰刻されるもので、Ⅰ-1類。93SK030出土。16は「平井瓦」で文字は陰刻される。Ⅰ-2類。93SX174下層出土。17は「平井瓦」でⅠ-3類。93SE070枠内出土。18は左字の「平井瓦」でⅠ-4類。93SK033出土。19は「平

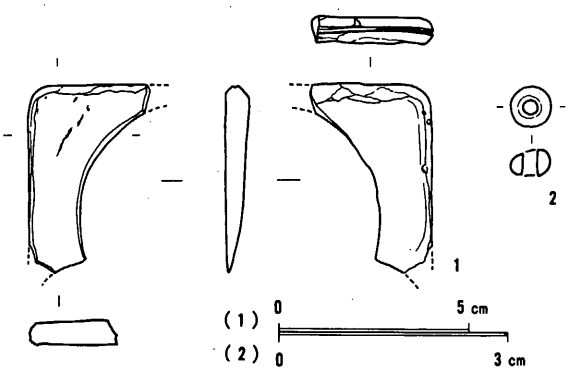


Fig.237　第93次調査出土骨製品・ガラス製品実測図（1/2･1/1）

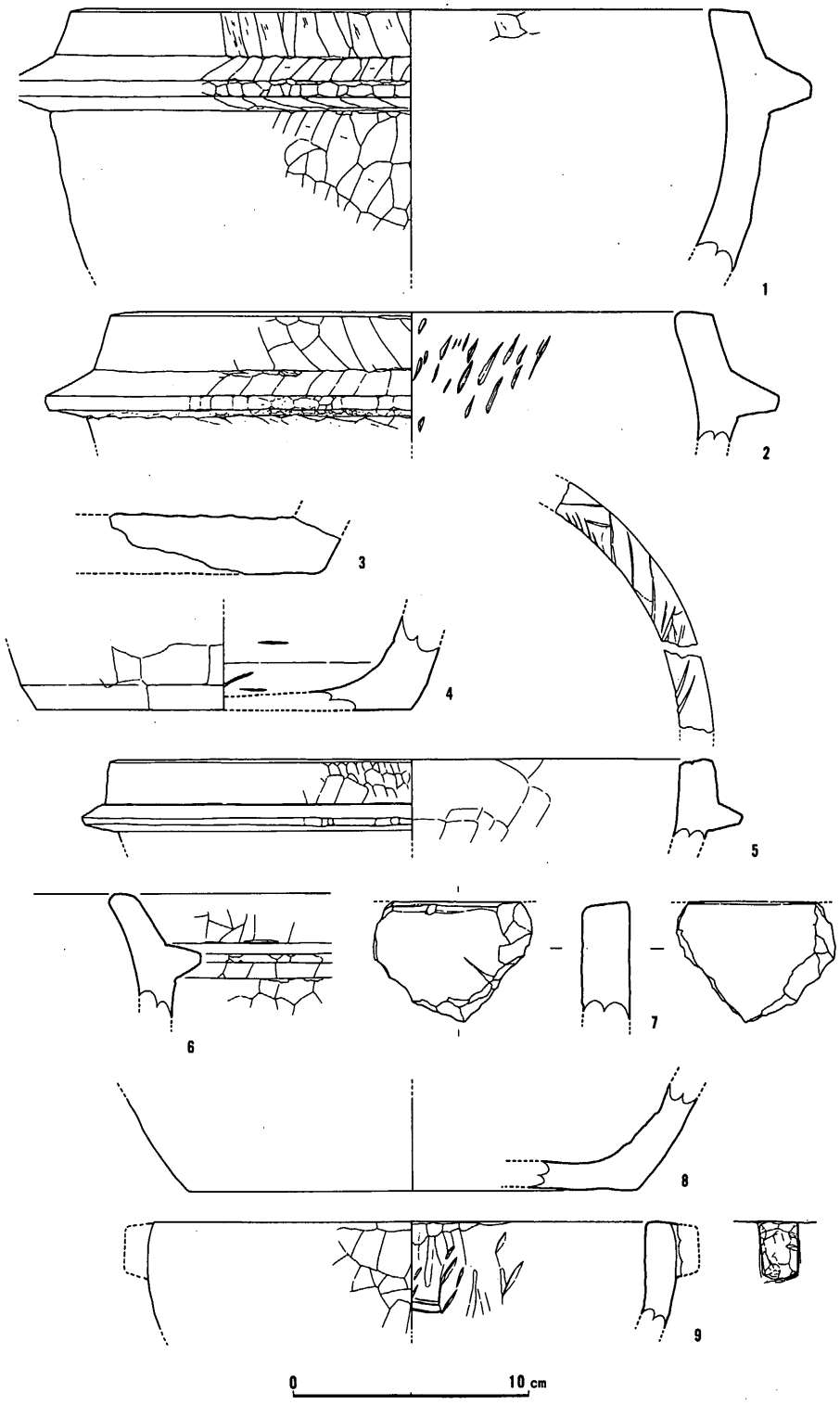


Fig.238　第93次調査出土石鍋実測図（1/3）

井」でI-5類。93SE240淡黄色土層出土。20は「平井」でI-8-b類。93SX188出土。21は「平井」でI-9類。93SK220出土。22は左字の「佐」でII-2類。93SD050出土。23は「佐瓦」でII-8類。93SE070枠内出土。24は「筑」でVI-3類。茶灰色土層出土。25は「四王」でXVIII類。茶灰

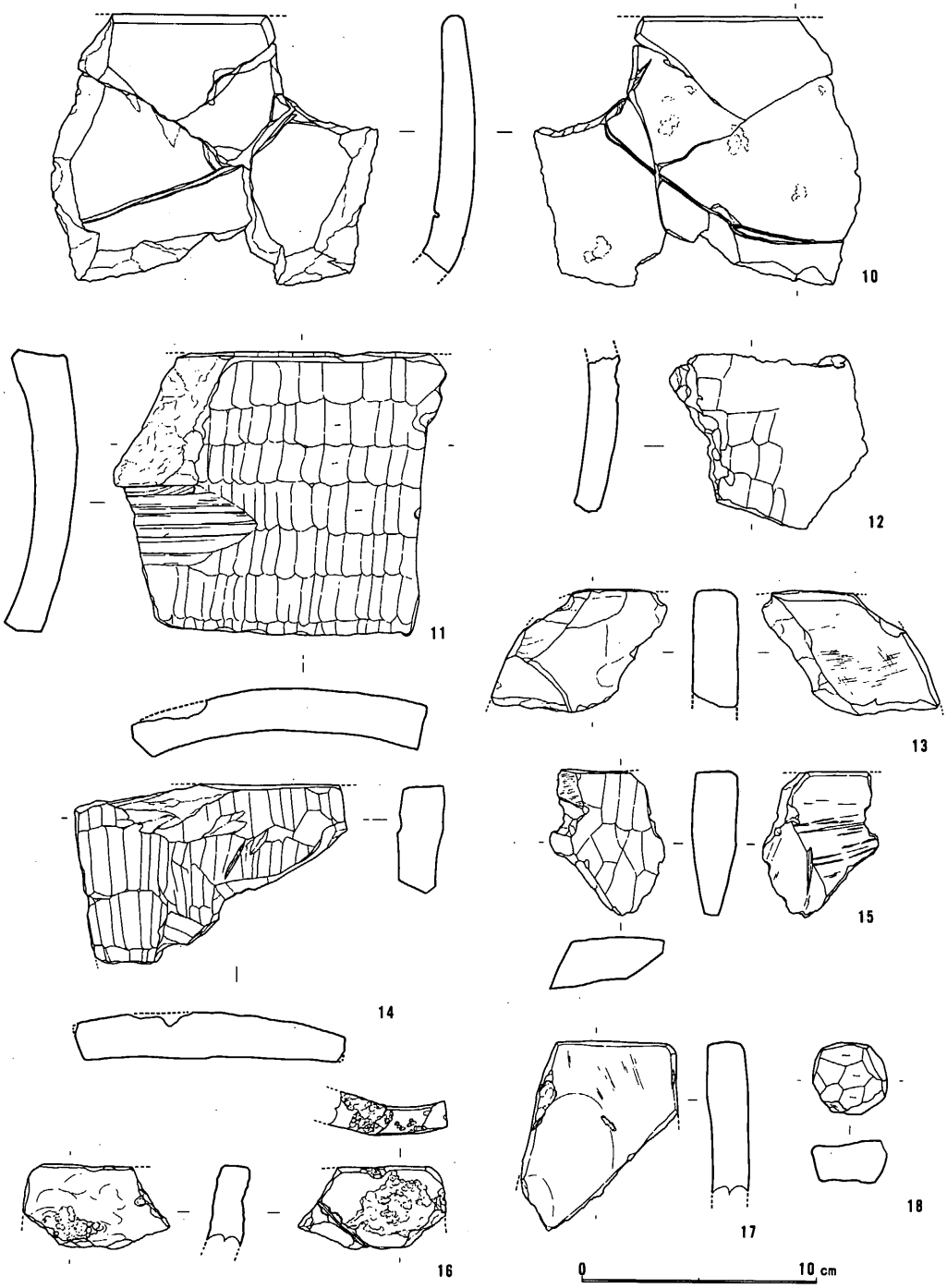


Fig.239　第93次調査出土滑石製品実測図1　(1/3)

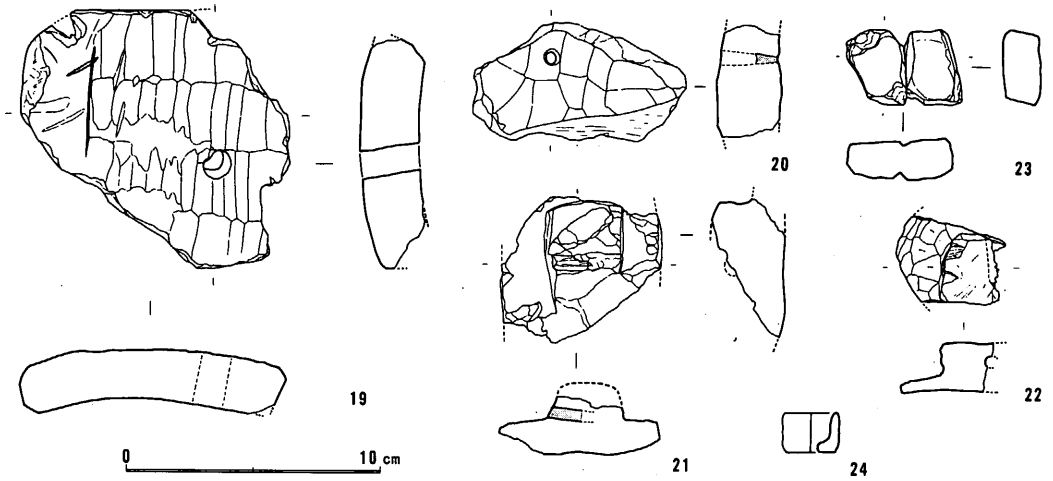


Fig.240　第93次調査出土滑石製品実測図２（1/3）

色土層出土。26は左字で「八年」と記しⅩⅦ類。93SK205出土。

塼（9）　無文塼で、93SK260出土。

(4)　土製品・瓦製品（Fig.236、CD-093902～910）

紡錘車（1～3）　1・2は直径3.9・2.8cm、厚さ0.9・1.2cmで円盤状を呈している。3は直径4.2cm、厚さ1.9cmで半球状を呈する。いずれも中央に穿孔がある。1・3は淡茶色土層、2は茶灰色土層から出土した。

土錘（4）　長さ5.1cmで、中央部に直径0.5cm内外の穿孔がある。茶灰色土層出土。

円筒状製品（5）　直径2.8cm、高さ3.3cm。瓦質である。93SE200黒色土層出土。

鞴羽口（6～8）　6は93SD270、7は93SX253、8は93SD275からそれぞれ出土した。

めんこ（9・10）　9は黒色土器Ａ類の底部を利用したもので、93SE200曲物内出土。10は白磁片を利用したもので93SX202出土。

瓦玉（11・12）　両者とも格子叩きと布目が観察される。11は93SK255、12は93SE035出土。他の地点でも複数出土している。

焼土塊(a～f)　調査区の西南部分を中心に多数出土したもので、胎土は大粒の砂粒を含むだけでなくスサや土器片をも含むきわめて粗いものである。焼成も軟質で破断面の風化するものが多い。表面の特徴では当初の面とみられる部分のほとんどが平坦面を形成することと、随所に径1.5～3.0cm程度の円筒状の痕跡があることである。生産関連の土製品ともみられるが、恒次的に高温に晒されたような部分がないことからその可能性は低いものと思っている。こうした資料を壁材とした報告例があり、ここでもこれに従っておくこととしたい。出土地点はaが93SK045、b・fが調査区西南隅の茶灰色土層、cが93

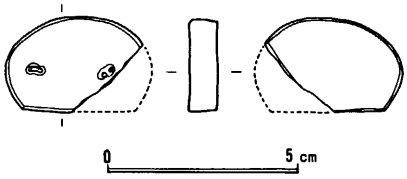


Fig.241　第93次調査出土石帯実測図（1/2）

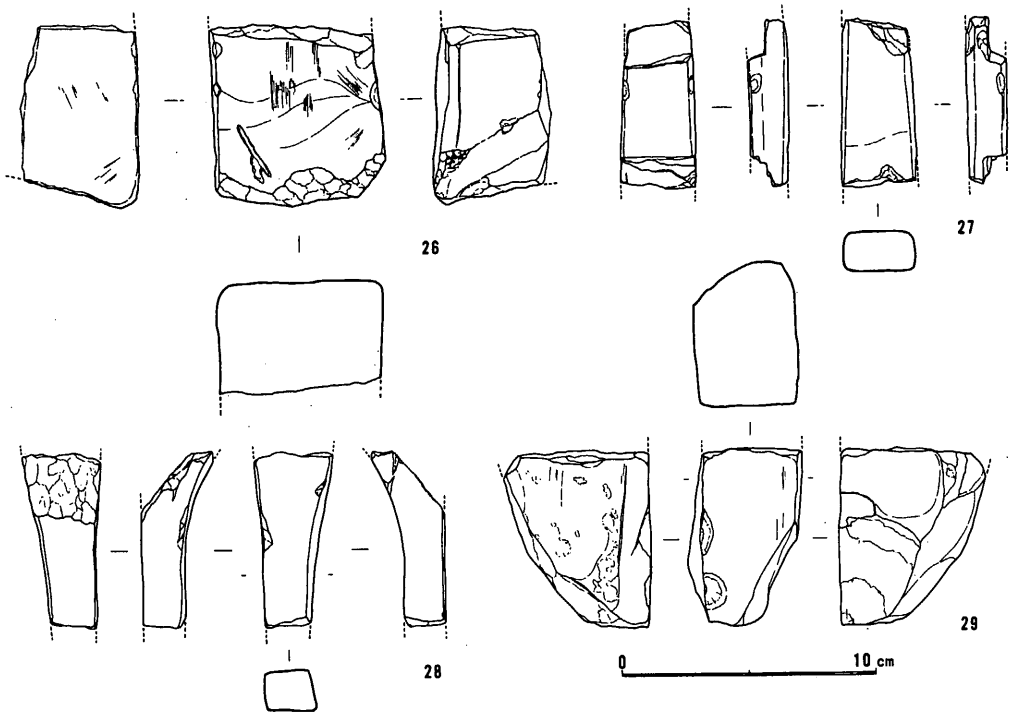


Fig.242　第93次調査出土砥石実測図（1/3）

SX028、dが93SK021、eが93SK010上層である。

(5)　骨製品（Fig.237、CD-093911～913）

1はL字形（あるいはコ字形）を呈する製品とみられ、内側を弧状に抉っている。側縁は打ち欠きにより成形し、表面の片面は研磨され光沢がある。いま一方の面はおそらく自然面らしい。図の下方は薄く鋭利になっている。用途不明。茶灰色土層出土。

(6)　ガラス製品（Fig.237、CD-093914）

玉（2）　直径0.55cm、厚さ0.3cm。中央に直径0.2cmの穿孔がある。深緑青色を呈している。93SK135黒色土下層出土。

(7)　石器・石製品（Fig.238～244、CD-093915～940）

石鍋（1～9）　1・2・5・6は鍔の付くもので、口径29.2・25.8cmを測る。5の口縁端部に粗い刻み目が多数残る。二次加工の際の痕跡か。9は口径22.0cmに復原されるもので、縦方向の耳が

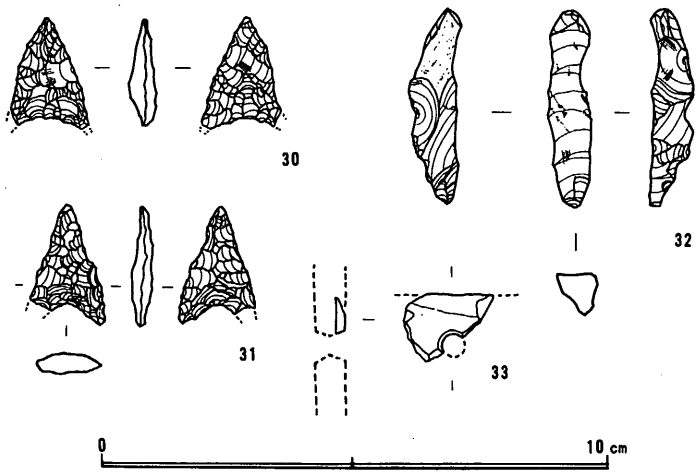


Fig.243　第93次調査出土石器実測図1（2/3）

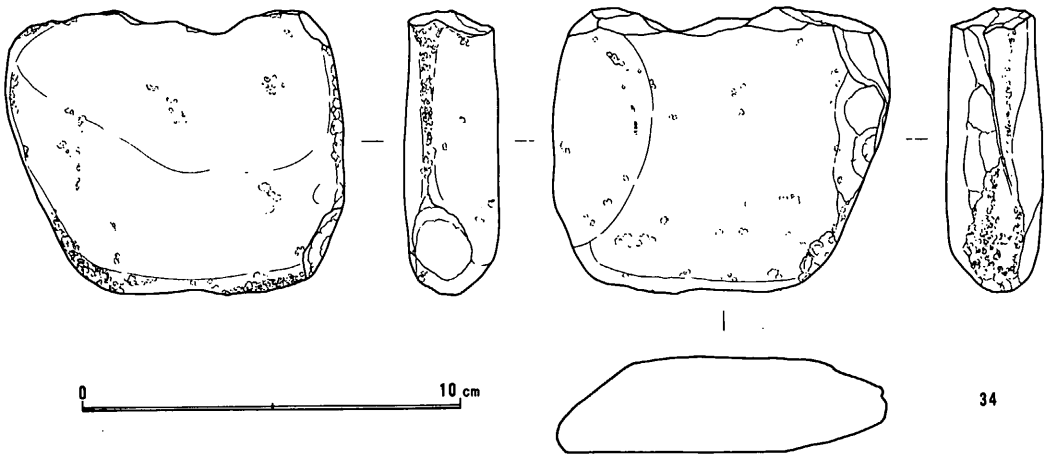


Fig.244　第93次調査出土石器実測図２（1/2）

付く。耳部以外は黒色に変色している。３・４・８は底部片で、煤の付着するものもある。７はここで扱ったが各面は一様に平坦であり、加工品の可能性が高い。1は93SK065出土。2は93SX028出土。３は93SK001出土。４は93SK260出土。５は93SE035出土。６は93SK010上層出土。７は93SK135黒色土上層出土。８は93SX011出土。９は表土出土。

石鍋加工品（10～16･19～22）　いずれも石鍋であったことを物語る部分を残しているが、二次加工がなされている。16は破断面以外に敲打痕が多数認められる。21･22は耳部を利用しながらスタンプ状に加工したものである。10は93SK110出土。11は93SK036出土。12は茶灰色土層出土。13は93SE180黒色土層出土。14は93SK165出土。15は93SK010上層出土。16は93SK165出土。19は93SE035出土。20は93SE120出土。21は茶灰色土層出土。22は93SE200黒色土層出土。

容器（24）　口径2.1cm。底部には穿孔がある。93SE031裏込土出土。

めんこ（18）　直径3.2cm、厚さ1.9cm程度のもので、周囲を面取りする。93SE160上層出土。

滑石加工品（17･23）　17は3方を面調整し、平坦な1面の中央をわずかに窪ませる。93SK003出土。23は4側面ともに何らかの加工があり、中央部に切り込みを入れるものである。錘として利用したものか。93SK015出土

石帯（25）　丸鞆で、暗濁白色を呈している。裏面以外は丁寧に研かれ、光沢がある。裏面の2箇所に紐通しの穿孔がある。93SX179出土。

砥石（26～29）　26は砂岩製で、93SX004出土。27は玄武岩製で93SK190出土。28は泥岩製で、93SD270出土。29は砂岩製で、2面に敲打痕がある。93SK090出土。

石鏃（30･31）　いずれも黒曜石製で、30は93SX152出土。31は93SE200黒色土層出土。

剥片（32）　黒曜石。93SX152出土。

石包丁（33）　直径0.4cmの穿孔部が残る。93SX117出土。

台石（34）　玄武岩製で、側縁に集中して敲打痕が観察される。93SE200黒色土層出土。

5．小　結

縄文時代

93SE150裏込土から出土した阿高式土器の小片を報告したが、同様の胎土を有する破片は93SE031枠内からも出土しており、かつてこの付近に当該期の遺構が存在していたことを窺わせるものである。

弥生時代

奈良時代及び平安時代初頭の遺構面を形成する黄灰色粘土層中に混入して、主として前期の土器を検出した。層位の項でも記したとおり弥生時代の遺構面は残存しておらず、堆積土層として捉えられる程度である。しかしながら、その量は決して微量ではなく、遺構中に混在する土器や石器も含めればかなりの量に達する。かつてこの付近に当該期の遺構が存在していたことは確実であろう。

奈良時代から平安時代初頭

下層遺構の大半がこの時期に該当する。上面に被る整地層（淡茶色土層）から出土する土器はⅦ期頃のものであり、この時期を下限とできる。出土遺物と切り合い関係でみると、掘立柱建物93SB310が８世紀後半とみられ最も古い。これを切る93SX332はⅥ・Ⅶ期頃の資料を出土し、９世紀前半から中頃に考えることができる。ただ掘り方の一部を切るだけで柱自体はそのままであった可能性も考えられ、隣接する土坑93SK320・330等とともに建物に隣接して穿たれたとも理解できる状況を示している。これを肯定するならば掘立柱建物93SB310は８世紀後半から９世紀前半の間に考えることができる。

ところでこの建物の位置は、これまで条坊域内（御笠川以南）で検出された建物遺構のなかで最も政庁域に近い。しかも朱雀大路に面した場所であり、御笠川の氾濫で朱雀大路と政庁域との取り付きの状況は具体的には知られないものの、左郭一坊の最北端の区画に位置づけられる可能性が高い。このように立地の点では、きわめて高位の官人が居住したことを想定しておきたい。なお出土遺物には白玉帯とは呼べないまでも、暗濁白色を呈する丸鞆の出土がありそれを物語るものかも知れない。

さて、遺構面上で下層に属する遺構では他に93SD314・324がある。両者とも長円形の土坑状を呈しているが、平行して存在し何らかの関連が窺える。整地である淡茶色土層の上から切り込む93SD270・275とはほぼ同じ軸線上にあり（両者は南北方向で約0.5ｍのずれがある）、消極的ながらこれを道路と認定すると整地が行われた跡も踏襲されたものと考えられる。ちなみに下層で検出された93SD314・324の中心は政庁南門から南へ430.95ｍを測り、1450小尺の位置にあることがわかる。なお、1997年度に調査した第191次調査では８～11世紀の道路側溝とみられる遺構が確認されている（東西路の南側溝と認定／未報告）。この溝の中心と南側にある93SD324の中心との差は約55ｍとなり、従来知られている大宰府条坊の一区画の幅（約100ｍ）の半分強になる。93SD314・324等の性格が問題であるが、条間路的な存在、あるいは大路からの通路的なものなど主たる道路機能としてではなく、副次的な機能を考えておきたい。詳細な検討は将来に

委ねたい。

平安時代後半

大宰府土器編年XII・XIII期の土器を出土する遺構が調査区全体から、しかもかなり密な状態で検出されている。遺構の性格も多義にわたり、ここが集落の一部としてかなり活発な活動のあったことは確実である。今回報告する他の地点でもこの時期は同様に遺構が密に検出されており、しかも政庁第III期に平行する条坊区画が存在する時代であり、大宰府の最盛期のひとつに数えられよう。

今次の調査区内における分布状況を見てみると、井戸では東端部と西側やや中央寄りのところ、南端部に集中していることがわかる。土坑では調査区西端にいくつか見受けられ、93SK075・080・090が類似する規模、形状を有して南北に並列しており、南端部にも複数の土坑が存在する。井戸や土坑が建物の内部に設けられることは原則として考えられないとすれば、この調査区内の中央部付近に建物を想定することができるであろう。また調査区の西側に接して朱雀大路、南側に接して「どんかん道」(1)が想定されるところから、道に面した部分に井戸や土坑を配置したことが窺われる。道と宅地との遮蔽施設は明らかでないが、道から一定程度の距離をおいて家屋が建てられていたものと考えておきたい。

鎌倉時代

土器編年XIV・XV期の資料を出す遺構が該当し、主要遺構の分布傾向は先述の平安後期の状況に類似するもので、基本的には過去の状況を踏襲していると言える。しかし、調査区の中央から北東部にかけては、この時期の遺構は見当たらず、大規模な建物も想定しにくい状況である。さらにこの時期で確実に井戸として考えられるものは93SE070ぐらいで、他は土坑あるいは井戸掘削の途中で放棄したと思われる土坑（93SK100・135・93SE120）などがある程度であり、前時代と比較するとかなり衰退の兆しを見せていると言えそうである。

この点で注意したいのは井戸掘削の途中放棄と考えられる遺構の存在である。この放棄という行為の推定が正しいとして、XV期以降の遺構が93ST040以外に皆無であるという点が注目されるところであり、この段階をもってこの付近から生活の痕跡が消えてしまうことと深い関わりがあるのかも知れない。

さらに墳墓の存在も注目される。第64次調査の項でも指摘したが、墳墓の存在をもって遺構が終焉を迎えている。屋敷墓的形態を示しながら、被葬者が閑散とした荒れ地？に埋葬されなければならない理由はどこにあったのであろうか。

（註）

(1) 通称「どんかん道」は太宰府天満宮の神幸祭において、菅公の御霊が榎社と天満宮を往復する道路を指す。神幸祭は康和三（1101）年頃に大宰権帥大江匡房によって始められたとされ、この道に沿って平安時代の道路側溝と考えられる溝がいくつか見つかっている。「どんかん道」は政庁第III期の条坊痕跡を残している数少ない例である。狭川真一「大宰府条坊の復原」『条里制研究』6号　1990。

Tab. 8 - 1　第93次調査遺構一覧表１

S-番号	遺構番号	種　別			地区
1	93SK001	土坑		Ⅻ～	B13
2	93SX002	土坑か	安全重視で途中で掘削を中止	平安	B13
3	93SK003	土坑	5→16→3	Ⅻ～	B12
4	93SX004	ピット群	36･10→4	平安	C12
5	93SE005	井戸	65→5	Ⅻ	C12
6		土坑	20･21→6	中世	D13
7	93SX007	ピット群		中世	D13
8		土坑		C期	C13
9	93SX009	ピット	9→10	Ⅻ～	C13
10	93SK010	土坑	10→21	Ⅻ･ⅩⅣ	C12
11	93SX011	ピット		Ⅻ･ⅩⅣ	C13
12	93SX012	ピット群		平安後	C13
13		ピット群		平安後	B12
14	93SX014	ピット群		平安後	B12
15	93SK015	土坑	20→15	Ⅻ	E13
16	ピット群			平安	BC12
17	93SX017	ピット群		平安	E13
18	93SK018	小土坑	18→19	平安後	E13
19		小土坑		平安	E13
20	93SK020	土坑	50→20→15	Ⅻ	E13他
21	93SK021	小土坑	焼土多い　10→21	平安後	B13
22		ピット群		平安	D9
23	93SX023	ピット	配石あり	平安	D10
24		ピット群		平安	D10
25	93SK025	土坑		ⅩⅣ～	D9
26	93SX026	ピット		平安後	D10
27		溜まり		平安	C11
28	93SX028	溜まり	70→65→45→28	ⅩⅣ	C11
29		ピット群	27･28→29	平安	C11
30	93SK030	土坑	30→31	Ⅻ	D10･11
31	93SE031	井戸		ⅩⅣ～	E10
32		土坑	焼土入る	平安	D11
33	93SK033	土坑	36→33→40	ⅩⅣ･ⅩⅤ	C12
34		ピット群		平安	D11
35	93SE035	井戸	31→35→26･133	D期	E10
36	93SK036	土坑	36→10･33	Ⅻ～ⅩⅣ	C12
37		ピット		平安	E12
38		ピット群		中世前	D12
39	93SK039	土坑	39→27･30	Ⅻ～	C10
40	93ST040	土壙墓	龍泉窯系青磁椀Ⅰ-5-a　1点 調査中に盗難	ⅩⅥ	D12
41	93SX041	ピット群	41→19	平安	E12
42	93SX042	ピット	石組あり	平安	E12
43		ピット群	42→43	平安	F12
44		ピット群	黒色土埋土　44→27	平安	C1

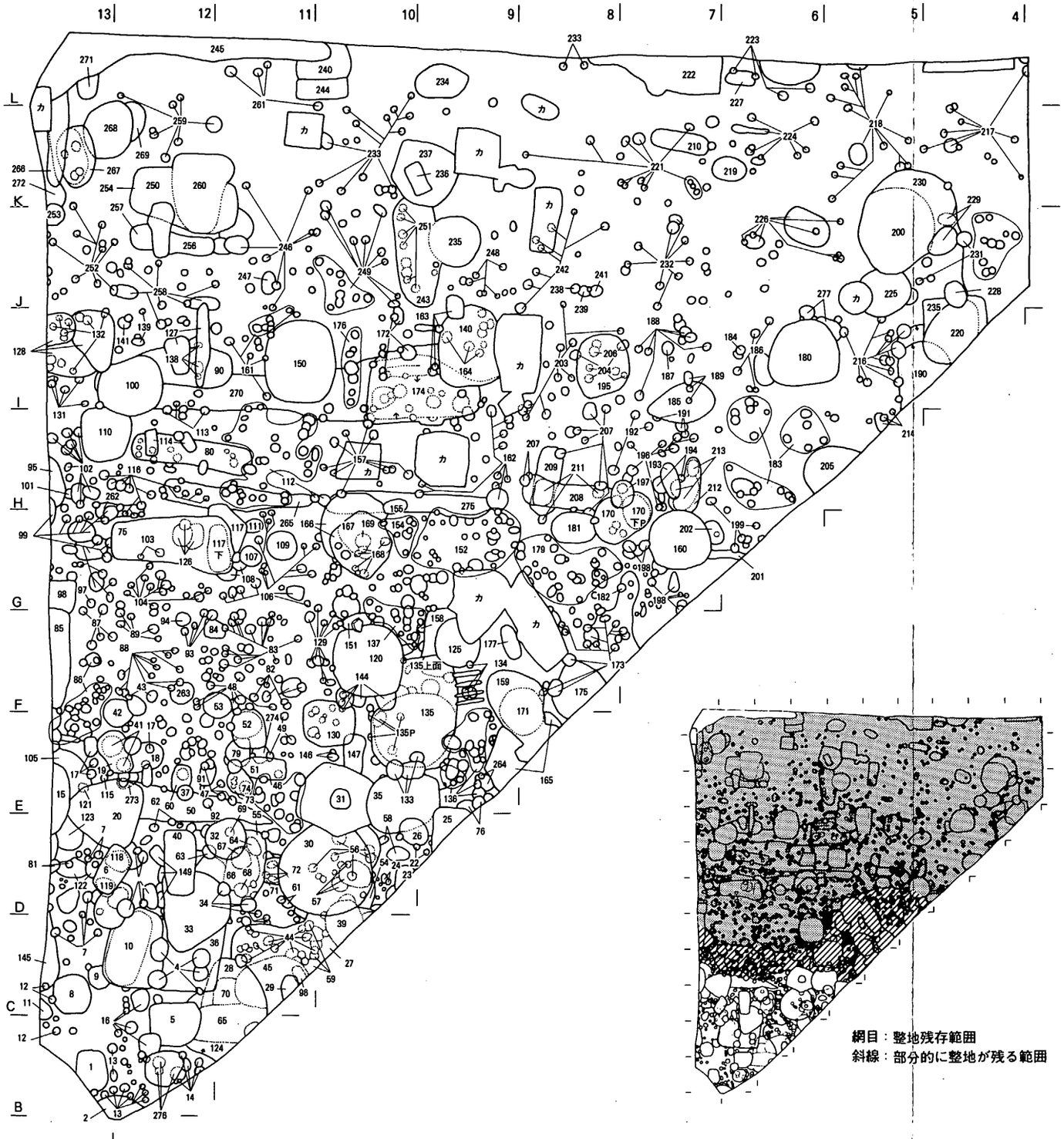


Fig.245　第93次調査上層遺構配置略測図

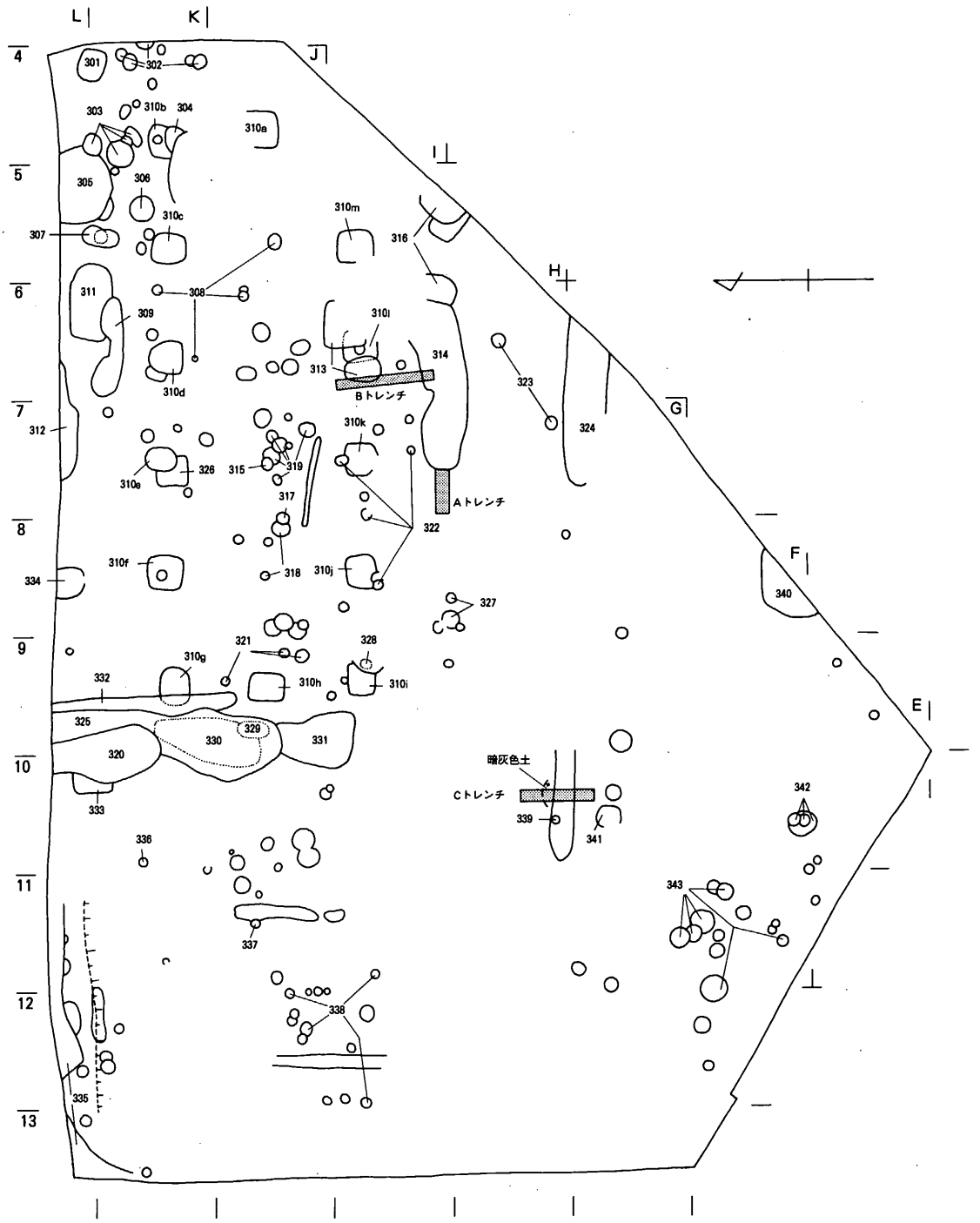


Fig.246　第93次調査下層遺構配置略測図

Tab. 8－2　第93次調査遺構一覧表 2

S-番号	遺構番号	種　別			地区
45	93SK045	土坑	70→65→45→27·28·29	Ⅷ？	C11
46		ピット群		平安	E11
47		ピット群		平安	E11
48		ピット群		平安	F11
49	93SX049	ピット群		平安	E11
50	93SD050	溝？	50→20·37·92、この付近の切り合いでは最古	10～11c	E11·12
51		ピット		平安	E11
52	93SX052	ピット	根石状の配石あり	平安後	E11
53		ピット		平安	E11
54		ピット群	30→54	平安	D10
55	93SK055	土坑	焼土·炭混入　55→32·33	Ⅷ～	D11
56		ピット群	黒色土埋土　56→30	平安	D10
57		ピット群	淡茶色土埋土	平安	D10
58		ピット群		平安	D10
59		ピット群	淡茶色土埋土	平安	C11
60	93ST060	土壙墓？	60→37	D期	E12
61		ピット群		平安	D11
62		ピット群		平安	D12
63	93SX063	ピット	142→63→32	平安後	D12
64		ピット	焼土含む　67→66→64→55	平安	D11
65	93SK065	土坑	70→65→45·5	Ⅷ	B11
66	93SX066	ピット	S-55下層ピット、焼土含む(64·67より少量)	平安後	D11
67		ピット	焼土含む	平安	D11
68		ピット	根石状のものあり	平安	D11
69		ピット	69→32	平安	D11
70	93SE070	井戸	70→65→45	Ⅻ～Ⅷ	C11
71		ピット		平安	D11
72		ピット群		平安	D11
73	93SX073	ピット		平安	E11
74		ピット		平安	E11
75	93SK075	土坑		Ⅻ～Ⅷ	G12
76		ピット群		平安	E9
77	93SX077	ピット		平安	E12
78		ピット群		平安	E12
79		ピット		平安	E11
80	93SK080	土坑		Ⅻ	H11·12
81		ピット群		平安	D13
82		ピット群		平安	F11
83		ピット群		平安～中世	F11
84		ピット	淡茶色土埋土	奈良？	F11
85		土坑		Ⅻ～	F13
86		ピット群		平安	F13
87		ピット群		平安	F13
88		ピット群		平安～中世	F12

Tab. 8－3　第93次調査遺構一覧表３

S-番号	遺構番号	種　別			地区
89		ピット群		平安	F12
90	93SK090	土坑	90→100	Ⅻ～	I12
91		ピット		近世	E12
92		ピット		平安	E12
93		ピット群		平安	F12
94		ピット		平安	F12
95		土坑（井戸の可能性あり）		Ⅻ～	H13
96	93SX096	ピット	S-45の下層ピット	平安	C11
97		ピット		平安	G13
98	93SX098	ピット	98→85	平安	G13
99	93SX099	ピット群		平安	G13
100	93SK100	土坑	井戸を掘りかけて中止したものか　90→100	Ⅳ前後	I12
101		ピット		平安	H13
102		ピット群		平安	H13
103		ピット群	103→75	平安	G12
104		ピット群		平安	G12
105	93SK105	土坑	105→20→15	Ⅻ	E13
106	93SX106	ピット群		平安	G11
107		ピット		中世	G11
108		ピット群		平安	G11
109		ピット		平安	G11
110	93SK110	土坑	110→100	Ⅻ	H13
111	93SX111	ピット	111→117	Ⅻ～	G11
112		ピット群		平安	H11
113		ピット群		平安	H12
114		ピット群	汚染される　80→114	平安	H12
115	93SX115	ピット		8～9c	E13
116		ピット群		平安	H12
117	93SX117	ピット		Ⅻ～	G11
118	93SX118	ピット	S-6の下層	平安	D13
119		ピット	S-6の下層	平安	D13
120	93SE120	井戸		Ⅳ・Ⅴ	F10
121		ピット群		平安	E12･13
122		ピット群		平安	D13
123		ピット		平安	D13
124	93SX124	ピット	124→65	平安	B12
125	93SE125	井戸	検出面から枠痕跡確認できる	Ⅻ～Ⅻ	F9
126		ピット群	S-75下層下のピット群	平安前？	G12
127		ピット群	汚染される	Ⅻ～	I12
128	93SX128	窪み		平安	I13
129		ピット群		平安	F10
130	93SK130	土坑	130→144→120	D期	E10
131		ピット群		平安	I13
132		ピット群		平安	I13

Tab. 8－4　第93次調査遺構一覧表 4

S-番号	遺構番号	種　別			地区
133	93SX133	ピット群	35→133	D期～	E10
134		ピット群		平安	F9
135	93SK135	土坑	井戸掘削作業を中断したものか	XIV・XV	E9・10
136		ピット群		平安	E9
137	93SX137	ピット群		平安	F10
138		ピット群		平安	I12
139		ピット群		平安	I12
140	93SK140	土坑	270→140	XIII	I9
141		ピット			I12
142	93SK142	土坑／残欠	32・33・40等に切られて原形不明	平安	D12
143	93SX066下層	土坑	焼土多く含む	XII	D11
144		ピット群	144→120	平安	F10
145	93SK145	土坑	下層に対応する遺構か？	9c前～	C13
146		ピット群		平安	E10
147		ピット		平安	E10
148	欠番				
149		ピット群	149→33→40	平安	D12
150	93SE150	井戸	270→150	XII	I11
151	93SX151	礎石	根石に瓦を使用	平安	F10
152	93SX152	ピット群		平安	G9
153		ピット群		平安	G9
154		ピット群		平安	G9
155	93SX155	小土坑	遺物の大半は下層の混入と判断される	平安	H10
156		ピット群		中世	G9
157	93SX157	ピット群		平安	H10
158		ピット群		平安	F9
159		窪み		中世	F9
160	93SE160	井戸		C期	G7
161	93SX161	ピット群		平安	I11
162		ピット群		9c後～	H9
163		ピット群		平安	I9
164		ピット群	S-140下層ピット	平安	I9
165	93SK165	土坑	S-159に分断されるが一つのものと判断	C期	E8
166	93SX166	窪み		平安	G10
167		窪み		平安	G10
168		ピット群		平安	G10
169	93SX169	ピット	礎石	平安	G10
170	93SX170	土坑		C期～	G7他
171		窪み	S-159の下層	平安	E9他
172	93SX172	ピット群		平安	I10
173		ピット群		平安	F8
174	93SX174	窪み		平安	I9・10
175	93SX175	土坑状		XIII～	F8
176		ピット群		平安	I1

Tab. 8－5　第93次調査遺構一覧表 5

S-番号	遺構番号	種　別			地区
177		小土坑		平安	F9
178		ピット		平安	F8
179	93SX179	ピット群		平安	G8
180	93SE180	井戸		Ⅻ	H5
181		小土坑		平安	G8
182		ピット群		平安	G8
183		ピット群		平安	H6
184	93SX184	ピット		10c	I6
185		小土坑		平安	I7
186		ピット群		平安	I6
187		ピット		平安	I7
188	93SX188	ピット群		平安	I7
189		ピット群	185→189	平安	I7
190	93SK190	土坑	井戸の可能性あり　190→220	C期	I5
191		ピット群	191→185	平安	H7
192		ピット群		平安	H7
193		ピット		平安	H7
194	93SX194	ピット群		平安	H7
195		土坑	混入遺物あり	平安？	I8
196		ピット群		平安前？	H7
197		ピット		平安	H7
198		ピット群		平安	G7
199		ピット群		平安	H6
200	93SE200	井戸		Ⅻ	J5
201	93SX201	小溝	201→160	10c代？	G6
202	93SX202	小土坑	202→160	平安中？	G7
203		ピット群		平安	I8
204		ピット群	204→195	平安	I8
205	93SK205	土坑		平安	H5
206		ピット		平安	I8
207		ピット群		平安	H8
208		土坑	浅い窪み状	平安	H8
209	93SK209	土坑	浅い窪み状　209→208	平安	H8
210	93ST210	土壙墓	可能性の範囲	B期	K7
211		ピット群	211→208	平安	H8
212		窪み		平安	H7
213		ピット群	213→212	平安	H7
214	93SX214	ピット群	淡茶色土の遺物を混入	平安	H5
215	93SK215	土坑		C期	L6
216	93SX216	ピット群		平安	I5
217		ピット群		平安	K4
218	93SX218	ピット群		平安	K5
219		小土坑		平安前～	K6
220	93SK220	土坑	235→220	C期	I4

Tab. 8－6　第93次調査遺構一覧表 6

S-番号	遺構番号	種　別			地区
221		ピット群		平安	K7
222	93SX222	溜まり	淡茶色土の一部の可能性あり	平安前	L7
223	93SX223	ピット群	遺物は下層のものの混入か	平安	L6
224	93SX224	ピット群	遺物は下層のものの混入か	平安	K6
225	93SK225	土坑		10c代	J5
226		ピット群		平安	J6
227	93SX227	ピット	礎石の根石か	平安前？	L6
228	93SX228	ピット	220→228	平安	J4
229	93SX229	ピット群	下層の遺物を多く含む	平安	J4
230	93SE200	井戸	S-200の裏込めと判断	平安後	K4
231		ピット群		平安	J4
232		ピット群		平安	J7
233		ピット群		平安	K10
234		ピット		平安	L9
235	93SE235	井戸	220←235→190	平安	I4
236	93SX236	ピット		平安前～	K9
237		ピット		平安	K9
238		ピット		平安？	J8
239		ピット		？	J8
240	93SE240	井戸	240→244･245	Ⅶ	L10･11
241		ピット		平安	J8
242		ピット群		平安	J8
243	93SX243	窪み	255との切り合い不明	平安	J9
244	93SX244	ピット		新？	L10
245	93SX245	段落ち		平安後	L11
246		ピット群		平安	J11
247	93SX247	ピット	地鎮？土師器坏を合わせる	Ⅰ期頃	J11
248		ピット群		平安前	J9
249		ピット群		平安	J10
250	93SK250	土坑	250→260	Ⅶ～	K12
251		ピット群		平安	J10
252		ピット群		平安	J13
253	93SX253	ピット		平安	J13
254	93SX254	窪み	250･260のプラン検出のために機械的に設定	C期	K12
255	93SK255	土坑		Ⅶ～	J9
256		ピット		平安	J12
257	93SX257	土坑	S-256と同一か	平安後	J12
258		ピット群		平安	J12
259		ピット群		平安	K12
260	93SK260	土坑		Ⅶ～	K12
261		ピット群		平安	L11
262		ピット	小さい土坑状	平安	H12
263		ピット		平安	F12
264		ピット群		平安	E9

Tab. 8－7　第93次調査遺構一覧表 7

S-番号	遺構番号	種　別			地区
265	93SD265	溝	S-275に連続していたとみられる	9c 中～	H11他
266		窪み		平安	K13
267	93SK267	小土坑		Ⅶ～	K13
268	93SK268	土坑	井戸の可能性もあり	Ⅶ～	K13
269		窪み	269→268		K12
270	93SD270	溝		9c 中～	I11他
271		ピット		平安	K13
272		落ち？	S-245と同一と判断	平安	L13
273		ピット	柱穴	平安	E12
274		ピット		平安	E11
275	93SD275	溝		9c 中～	H9·10
276		ピット群	S-3下ピット	平安	B12
277		ピット群	277→180	平安	I5·6
278		ピット	S-41の掘り残し分	平安	E13
279～300は欠番、301以降は淡茶色土層下の遺構					
301		ピット		8c 後	K4
302		ピット群		奈良	K4
303		ピット群		奈良	K4
304		ピット		奈良	K4
305		土坑		奈良	L5
306		ピット	柱痕跡明瞭	奈良	K5
307		ピット群		奈良	K5
308		ピット群		奈良	K6
309		ピット	当初は３つのピット	奈良	K6
310	93SB310	掘立柱建物	a～m　２×５間	8c 後	K4他
311		土坑		奈良	K6
312	93SX312	窪み		9c	L6
313	93SX313	ピット群	310→313		I6
314	93SD314	溝		奈良	I6·7
315	93SX315	ピット	S-310と近似した埋土	奈良	J7
316		ピット群		奈良	I5
317	93SX317	ピット		9c	J7
318		ピット群		9c	J8
319		ピット群		奈良～	J7
320	93SK320	土坑		9c 前	K9·10
321		ピット群		9c	J9
322		ピット群		9c～	I7·8
323	93SX323	ピット群		奈良	H6·7
324	93SD324	溝	土坑の可能性強い	8 ～ 9c	G6·7
325	93SK325	土坑	325→320	9c 前	JK9
326		ピット	326→310	奈良	K7
327		ピット群		9c～	H8

Tab. 8－8　第93次調査遺構一覧表 8

S-番号	遺構番号	種　別			地区
328		ピット	310→328		H9
329		ピット	330→329→325	奈良～	J9
330	93SK330	土坑	S-325下層、埋土に炭化物混入、黒褐色土埋土	9c 前	JK9
331	93SK331	土坑		8 ～ 9c	J9
332	93SX332	溝？	310g →332→325	9c	K9
333		ピット		奈良～	L10
334		ピット		9c～	L8
335	(93SX245)	段落ち		9c～	L11·13
336		ピット			K10
337		ピット	黒色土埋土（上層遺構か）		J11
338		ピット群		9c～	I12他
339		ピット	黒色土埋土（上層遺構か）		H10
340	93SK340	土坑	井戸の可能性あり	9c	F8
341		ピット		奈良～	G10
342		ピット群		9c～	F10
343		ピット群		奈良～	F11
344		ピット群	遺物ラベルは仮に A·B·C としている	奈良～	J8

(9) 第94次調査

1．はじめに

調査地は、太宰府市大字太宰府2565番地に所在する。調査は学校の校舎増設に伴う事前調査として実施し、今回の開発で撹乱を受ける範囲に絞ってトレンチを設定した。現地での調査は平成2（1990）年4月25日～同月28日まで行い、調査面積は56m²で、山本信夫、狭川真一が担当した。

2．層位など

調査地はすでに学校の敷地内にあたり、校庭の一部として利用されていた。表土はそれに伴う現代の盛り土で構成され、それを除去するとすぐに黄茶色粘質土の地山が顔を出す状況であった。この間に遺物包含層や整地は確認されず、遺構は地山に直接穿たれる形で検出された。

なおすでに利用されていた土地のため、調査範囲内の各所に撹乱が認められた。

3．検出遺構

(1) 土坑

94SK001　南北8.35m、東西1.35m、深さ0.3～0.4mを測る長大な土坑で、埋土は黒褐色土の単一層である。埋土を除去すると数個のピットが確認されたが、この遺構に伴うものかどうかは判断できない。

94SK002　1.22×0.9m以上、深さ0.3mを測る土坑で、茶灰色土の単一層で構成される。南側は調査区外にあり、詳細は不明である。

94SK004　溝状を呈する土坑で、トレンチの関係から南北両端の形状と規模は分からない。検出長1.5m、幅1.0m、深さ0.2～0.3mを測る。埋土は大きく2層に分けられ、下層には淡茶白色土が薄く堆積し、その上に炭混じりの黒灰色粘質土が堆積している。

94SK005　溝と報告してもよいほど南北に長い遺構である。遺構の南端は撹乱で、北端は調査区外でいずれも形状は知り得ない。検出長3.6m、幅1.1m、深さ0.3～0.4mを測る。94SK004と連続するように

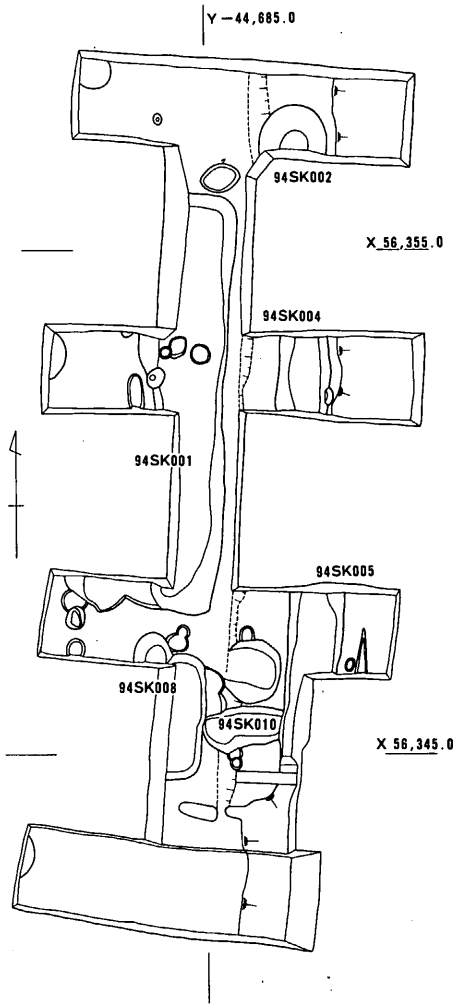


Fig.247　第94次調査遺構配置図（1/150）

見えるが、埋土が全く異なる点で各々独立した遺構と判断した。

94SK008　94SK010を切る土坑で、西側は調査区の外にあって形状は明らかではない。南北2.5m、東西0.8m以上、深さ0.1～0.17mを測る。

94SK010　東を94SK005に、西を94SK008に切られており、本来の形状は不明である。検出長1.5m、最大幅0.98m、深さ0.1～0.23mを測る。埋土は暗茶色粘質土で構成される。

4．出土遺物

(1)　**土器・陶磁器**

94SK001出土土器（Fig.248、CD-094002・003）

土師器

丸底坏ａ（1）　口径17.4cm。表面は風化が著しく調整は明らかではない。

椀ｃ（2）　高めの高台の径は8.2cm。底部は穿孔されていたものと思われる。

甕（3）　体部の調整はヨコナデである。

94SK002出土土器（Fig.248、CD-094004～007）

土師器

坏ａ（4～6）　口径10.0～11.0cm、器高1.6～2.3cm、底径5.2～6.9cmを測る。底部はヘラ切りされる。

椀ｃ（7）　口径12.2cm、器高4.0cm、高台径7.4cmを測る。底部はヘラ切りで板状圧痕が残る。

94SK004出土土器（Fig.248、CD-094008～024）

土師器

小皿ｃ（8）　口径13.3cm、器高2.2cm、高台径6.9cmを測る。体部の調整はヨコナデである。

坏ａ（9～15）　口径10.4～11.8cm、器高1.8～2.2cm、底径6.4～8.2cmを測る。底部はヘラ切りされ、板状圧痕の残るものがある。

椀ｃ（16～22）　16の内面はミガキｂで調整されるが、そのあとにヘラ状工具による細かな傷が多数ある。20は体部上位で一旦内湾し、口縁部で再び外反する。

甕（23・24）　24は外面に叩き痕が残り、内面はヘラケズリである。外面全体に煤が付着している。

黒色土器

椀（25・26）　Ａ類で、内面にはミガキｃが観察される。

緑釉陶器

椀（27）　高台径8.0cm。須恵質に焼成され、胎土は灰白色を呈している。緑灰色に発色する釉は全面に施される。調整は高台畳付け付近がヘラケズリ、他はヨコナデである。見込みに目跡とみられる痕跡がある。京都産。

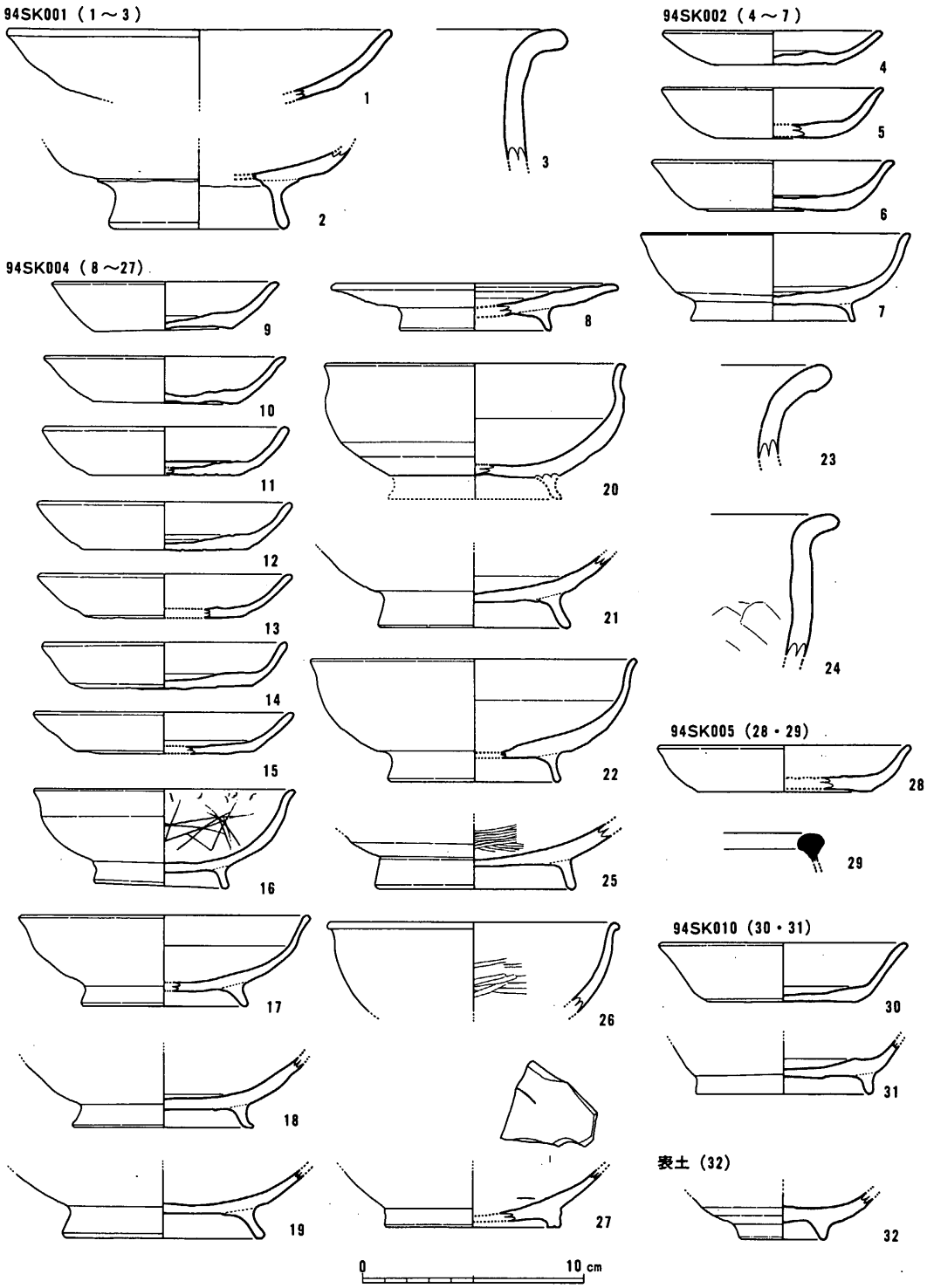


Fig.248　94SK001・002・004・005・表土出土土器実測図 (1/3)

94SK005出土土器（Fig.248、CD-094025・026）

土師器

坏ａ（28）　口径11.5cm、器高2.1cm、底径7.9cmを測る。底部はヘラ切りされる。

須恵器

鉢（29）　篠窯系の口縁部資料である。

94SK010出土土器（Fig.248、CD-094027・028）

土師器

坏ａ（30）　口径11.2cm、器高2.7cm、底径6.8cmで、底部はヘラ切りされ板状圧痕が残る。

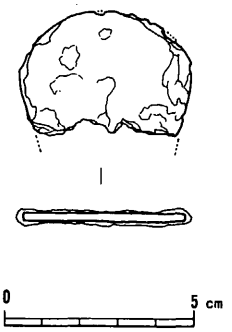


Fig.249　第94次調査出土鉄製品実測図（1/2）

椀ｃ（31）　高台系8.1cm。底部はヘラ切りされ板状圧痕が残る。

表土出土土器（Fig.248、CD-094029・030）

陶器

椀（32）　高台系4.0cmで刷毛手の肥前系陶器である。明褐色を呈する胎土に透明な釉を全面に施すが、見込み及び畳付は釉を拭き取っている。18～19世紀。

(2)　金属製品

鉄器（Fig.249、CD-094031・032）　下半部を失うが幅4.5cm、厚さ0.2cmを測る。本来の形状は明らかではないが、頂部を円形に作り、下位は両側面が直線的に延びる形状を呈していたものと思われる。94SK005出土。

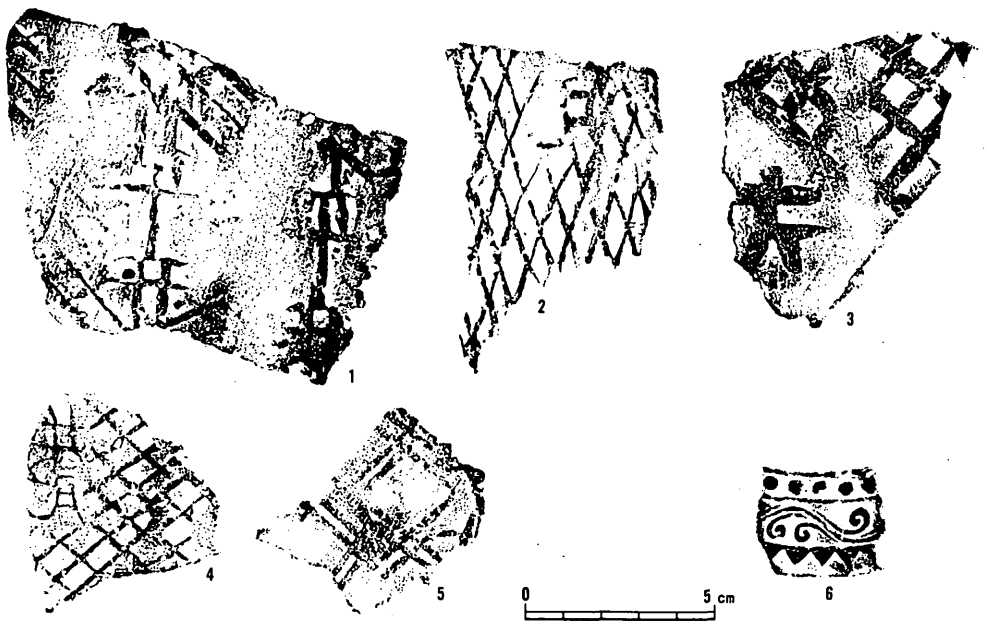


Fig.250　第94次調査出土軒平瓦・文字瓦拓影（1/2・6のみ1/4）

(3) 瓦類(Fig.250、CD-094033)

軒平瓦 (6)　老司Ⅰ式。94SK001出土。

文字瓦 (1～5)　1は「平井」でⅠ-8-a類。2は「平井瓦」でⅠ-4類。3は「佐」でⅡ-3類。4は「平井瓦」でⅠ-3類。5は二重格子叩きで文字状のものが観察できるが、分類不詳。1・3・4は94SK001、2・5は94SK005出土。

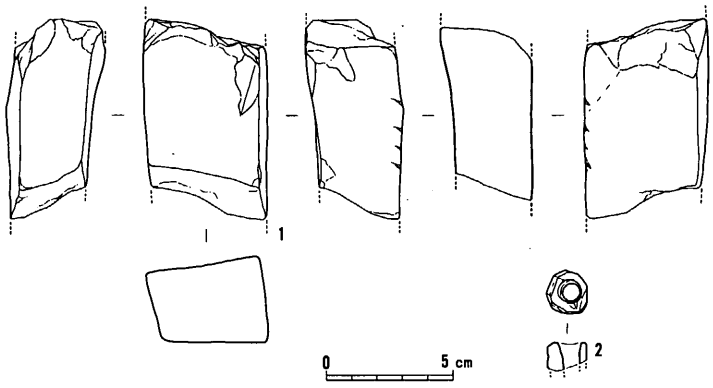


Fig.251　第94次調査出土石製品実測図 (1/3)

(4) 石製品 (Fig.251、CD-094034～037)

砥石 (1)　上下端部を失う。現存長8.0cm、幅4.9cm、厚さ2.8～3.4cm。表土出土。

穿孔製品 (2)　滑石製で、平面は多面形ながら中央に円形の穿孔がある。外面の調整はケズリで、穿孔部は径0.6～0.9cm。

5．小　結

報告した遺構の時期をみると、94SK010が9世紀後半頃、94SK002・004が10世紀中頃から後半、94SK001が11世紀後半頃にそれぞれ位置づけられる。

このうち94SK004と005は遺構の形状から区画溝（連続する長い土坑列）の可能性も考えられるところである。両者の時期は10世紀の範囲内であり、『大宰府条坊跡Ⅸ』で報告した同時期の未知の区画となる可能性も残されており、一応大宰府政庁中軸線からの距離を計算しておくと、中軸線の振れを考慮した計測値は、94SK004の任意中点（X＝56,352.50 Y＝-44,683.08）で東へ141.207m、94SK005の任意中点（X＝56,347.31 Y＝-44,682.87）で東へ141.469mという数値になる。

いずれも大尺で400尺近い数値となるが、これと対応させて考える資料に恵まれないため、ここでは数値を報告するに止める。今後の関連資料の増加を待って再検討したい。

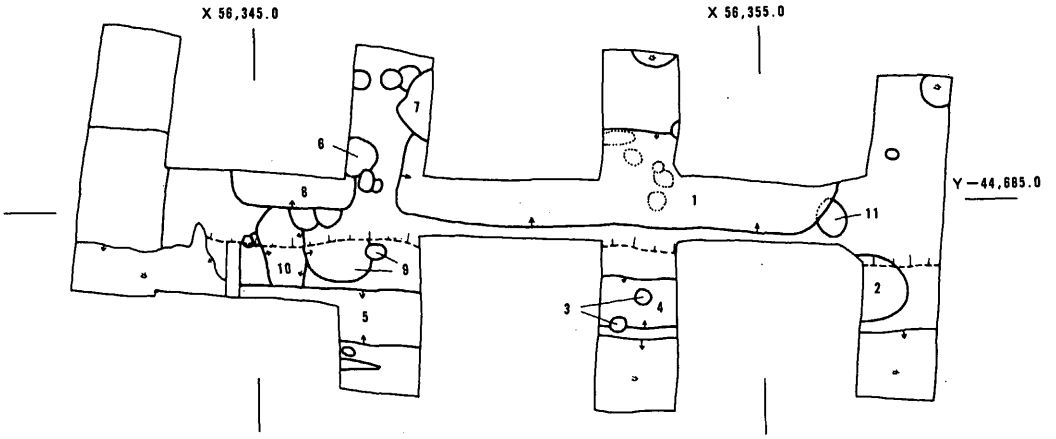


Fig.252　第94次調査遺構配置略測図

Tab. 9　第94次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別			地区
1	94SK001	土坑		11c 後	
2	94SK002	土坑	茶灰色土の単一層	9c 後	
3		ピット群	4→3	平安	
4	94SK004	土坑	灰混じりの埋土	10c 中～	
5	94SK005	土坑	溝状を呈する。S-2・4・5の埋土はすべて異なる	10c	
6		ピット	8→6	平安	
7		土坑	1→7	平安	
8	94SK008	土坑	10→8	平安	
9		撹乱		平安？	
10	94SK010	土坑	暗茶色粘質土埋土　10→8	9c 後	
11		ピット	11→1		

⑽　第117次調査

1．はじめに

個人住宅の建て替えに際して発掘調査を実施した。調査地は太宰府市大字南字芝原358-5で、平成３（1991）年10月１日に実施した。調査面積は28㎡である。調査は緒方俊輔が担当したが、測量及び実測等は狭川真一、山村信榮が協力した。整理作業は狭川が担当した。

2．層位など

住宅の建て替えに伴う調査のため、表土の大半は現代の盛り土であった。それを除去すると奈良時代から平安時代後期の土器を含む茶灰色土があり、それを除去すると遺構面に達する。遺構は地山（茶白色砂質土）から直接切り込む形で検出された。

3．検出遺構

(1)　溝

117SD001（CD-117003～005）　調査区南端で検出した東西方向の溝で、検出長6.9ｍ、検出幅0.9ｍ（南側肩は未確認）、深さ0.21～0.44ｍを測る。溝底の標高は東側が高い。埋土上面から117SX002･SK003が切り込んでいる。遺物は平安時代後期のものが最も新しいが、奈良時代に遡る資料もみられ、奈良時代の遺構が近くにあるか、切り合っていたことも考えられる。

117SD005（CD-117006･007）　調査区の北側で検出した東西方向の溝で、南側が撹乱で上面を失っている。S-６とした遺構は埋土も近似しており、この溝の底部が残存したものと考えておきたい。したがってこれを含めた検出長は6.9ｍ、北側肩を未検出ながら検出幅は1.42ｍ、深さは0.15～0.20ｍ内外で117SD001同様に底の標高は東側が高い。遺物は埋土中から若干出土したが、すべて小片で図示できないものの、11世紀後半を前後する時期のものと考えられる。

(2)　土坑

117SK003　117SD001を切るもので、長さ2.05ｍ、幅1.0ｍ分を確認したが半分以上は調査区の外にある。深さは0.3ｍ程度である。

117SK007　117SD005に切られるもので、1.5×1.3ｍ分

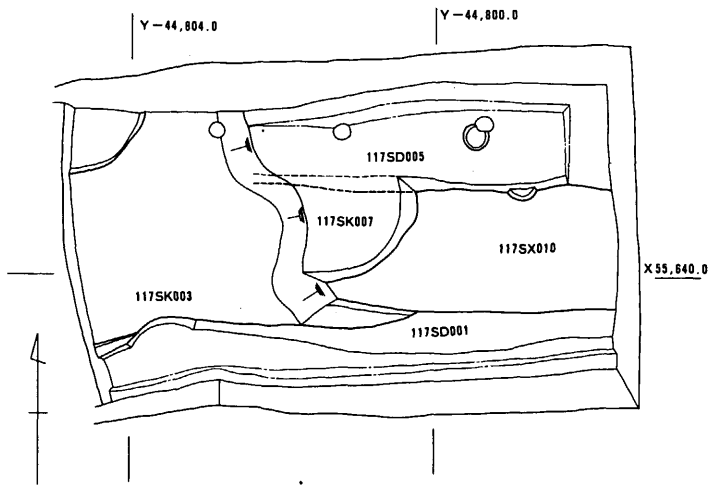


Fig.253　第117次調査遺構配置図（1/100）

を検出した。深さは0.1m程度である。出土遺物は土師器及び黒色土器A類の小片を検出したのみで、これを切る溝の上限の時期を押さえるまでには至っていない。

(3) その他の遺構

117SX002（CD-117004） 117SD001に切り込むピット群である。

117SX010 117SD001と005は時期的に近接したものであり、同時に存在していた可能性が高いことからこの両者に挟まれた空間が、平安期の条坊に関係する道路遺構として認識される可能性が出てきた。現状では特定できないがここでは仮に番号を与え、道路という立場で報告しておく。さて117SD001の北側肩と117SD005南側肩間の距離はほぼ1.5mを測る。西側が撹乱を受けているが検出長は4.1mである。路面と想定される部分には溝よりも古い117SK007があるだけで、他の遺構は確認されていない。

4．出土遺物

(1) 土器・陶磁器

117SD001出土土器（Fig.254、CD-117008・009）

土師器

丸底坏a（1・2） 口径14.8・15.7cm、器高3.4・2.3cmで、底部はヘラ切りされ、板状圧痕が観察される。

117SK003出土遺物（Fig.254、CD-117010～013）

土師器

羽釜 (3) 残存部の調整はヨコナデで、外面の突帯下面には二次加熱の痕跡がある。

石製品

石鍋加工品 (4) 石鍋を加工し、その内面に径2.0cm程度、深さ1.0cm程度で略円形の穴を穿つ。残存資料の周囲はすべて欠損しており、加工後の形状は不明である。

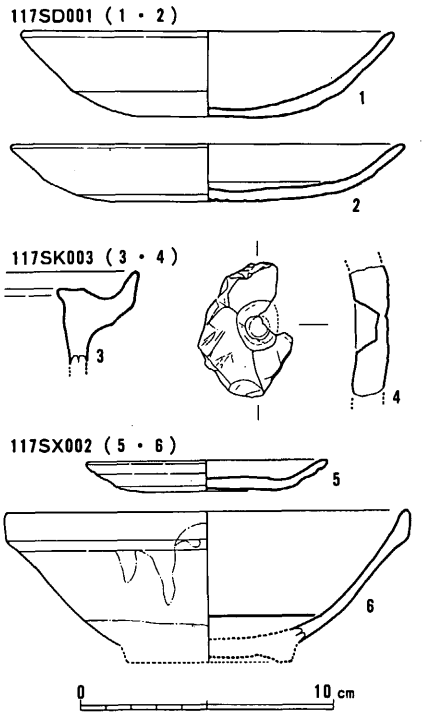


Fig.254 第117次調査出土遺物実測図（1/3）

117SX002出土土器（Fig.254、CD-117014・015）

土師器

小皿a (5) 口径9.6cm、器高1.2cm、底径5.1cm。底部はヘラ切りされ、板状圧痕がのこる。

白磁

椀 (6) 口径16.1cm。内面及び外面の体部中程以上に灰緑色に発色する釉が施される。

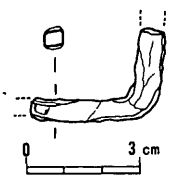


Fig.255 第117次調査出土鉄釘実測図（1/2）

(2) 金属製品（Fig.255、CD-117016・017）

鉄釘　L字状に折れ曲がり頭部を失うが、釘の一部分と考えられる。117SK003出土。

5．小　結

小さい調査ながら平安時代後期の溝2条を検出できたことは、大宰府条坊の区画を考える上で貴重な資料を提供することとなった。以下に簡単にまとめることとする。

Tab.10に示すように117SX010道路推定遺構中点の座標値は、大宰府政庁南門中点から南へ1068.079ｍの位置にある。推定右郭一坊（政庁中軸線から西へ約100ｍの間）の範囲内では、東西方向の道路乃至はそれに伴う溝遺構が未検出であるため、今次の調査地点から西へ約80ｍの所（推定右郭二坊の範囲内）で行った、大宰府条坊跡第16次調査(1)で検出された東西道路の推定中心（政庁南門中点から938.87ｍ／推定値）と比較すると、南へ129.21ｍの地点にあたる。

政庁第Ⅲ期の条坊区画は整然としたものではなく、各区画同士はわずかにずれながら並んでいる可能性が考えられることから、大宰府条坊跡第16次調査の南北道路が隣の区画へは直線で繋がらない可能性も考えられるところである。このことを踏まえるとこの129.21ｍという数値は、これまで知られている大宰府政庁第Ⅲ期に伴う条坊一区画の南北距離が、道路の心心で約117ｍ程度という数値に近似すると言えよう。

調査面積が狭小であり確実性に乏しい部分もあるが、ここでは条坊の道路痕跡として捉えておくこととしたい。

（註）

(1)　調査報告は、山本信夫『大宰府条坊跡Ⅱ』（太宰府市の文化財第７集）1983年　太宰府市教育委員会、周辺の条坊遺構との関係については、狭川真一「条坊関連遺構の検討」『大宰府条坊跡Ⅷ』（太宰府市の文化財第28集）1995年　太宰府市教育委員会

Tab.10　第117次調査検出遺構関連座標値

遺構番号	計測位置	X座標	Y座標	x距離	y距離
117SD001	任意中心	55638.80	-44800.00	-1069.62	31.43
117SX010	溝肩同士の中点	55640.34	-44800.00	-1068.08	31.42

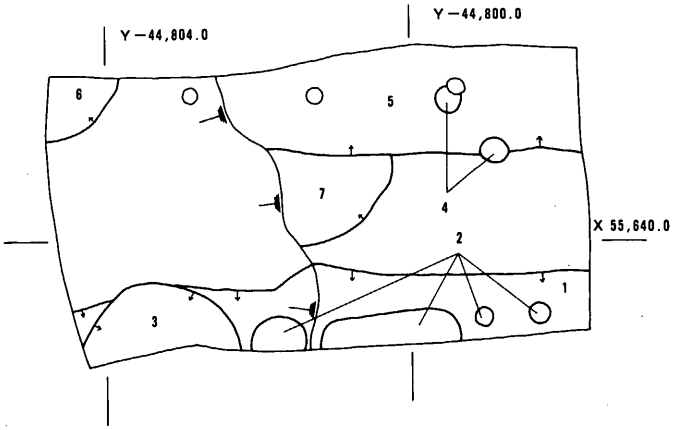


Fig.256　第117次調査遺構配置略測図

Tab.11　第117次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別			地区
1	117SD001	溝		Ⅻ～	
2	117SX002	ピット群	1→2	Ⅻ～	
3	117SK003	土坑	1→3		
4		ピット群	5→4		
5	117SD005	溝		Ⅻ～	
6		溝の一部？			
7	117SK007	土坑	7→5		
欠番					
欠番					
	117SX010	道路？　S-1と5に挟まれた空間			

(11) 第121次調査

1．はじめに

調査地は、太宰府市大字太宰府字御垣野2591-6にあたり、朱雀大路の路面に当たると推定される場所である。この地で住宅建設の話が持ち上がり、協議の結果事前に発掘調査を実施することとなった。現地での調査は平成4（1992）年3月7日から同年3月12日までの間で実施し、調査面積は24㎡で、狭川真一が担当した。

2．層位など

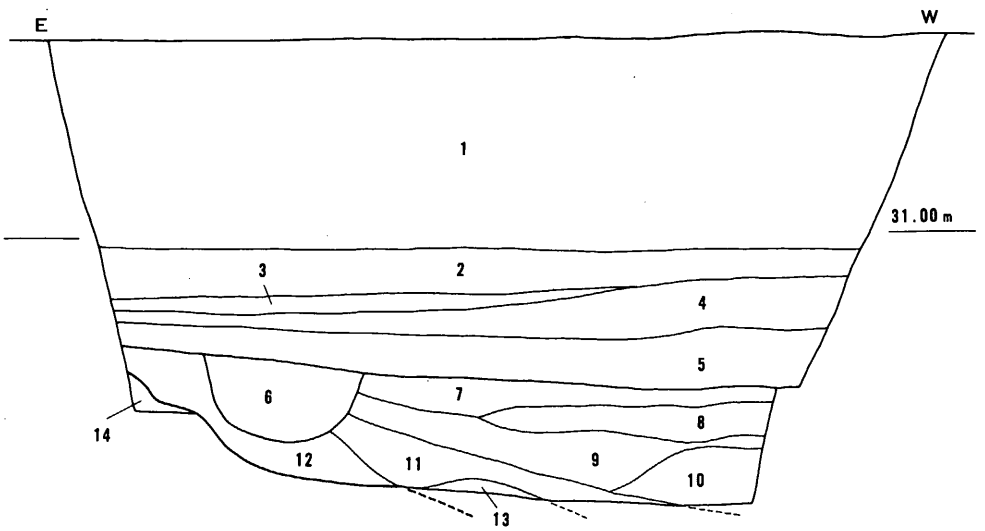
約1mある表土を除去すると明灰色土層、茶色土層があらわれ、その直下に暗茶色土層、茶褐色土層が堆積する。これらを除去すると淡茶色土（淡茶白色砂質土）層があらわれ、これが希薄ながらも遺構面を形成している。この淡茶色土層以下も一応遺構として捉え、後述する。

3．検出遺構

(1) 土坑

121SK002　淡茶色土から切り込む遺構で、長さ1.75m、幅0.75～1.05m、深さ0.15～0.20mを測る。埋土は黒茶色土の単一層である。

(2) 氾濫？



土層一覧
1．表土
2．明灰色土
3．茶色土
4．暗茶色土
5．茶褐色土（遺物は暗茶色土で取り上げ）
6．黒茶色土（121SK002）
7．淡茶白色砂質土（遺物は121SX001淡茶色土で取り上げ）
8．茶白色砂土（遺物は121SX001淡茶色土下層で取り上げ）
9．茶白色砂質土（遺物は121SX001淡茶色土下層で取り上げ）
10．明灰色粘質土
11．暗灰色土
12．黄茶色土（茶褐色土ブロック混在・地山の流れ込みか？）
13．灰色粗砂（遺物無し）

Fig.257　第121次調査南壁堆積土層観察図（1/40）

121SX001 (Fig.257、CD-121001)　調査区内全体に堆積する層の集合体をもって遺構番号を付し、ここで報告する。底部は完掘するには至ってないが、土層観察図に示すとおり、複数の層が東から西に流れ込んだような堆積状況を示している。この堆積は一応大きな溝状遺構の一部として捉えることも可能であるが、地山（灰色粗砂）が急激に落ち込んでおり、底部付近には大きな流れによる堆積を思わせる粗い砂層（黄茶色砂）があることから、人為的な溝とは捉えず、何らかの要因による氾濫の一部ではないかと考えている。

なお南北方向の流れの方向は確認できていない。

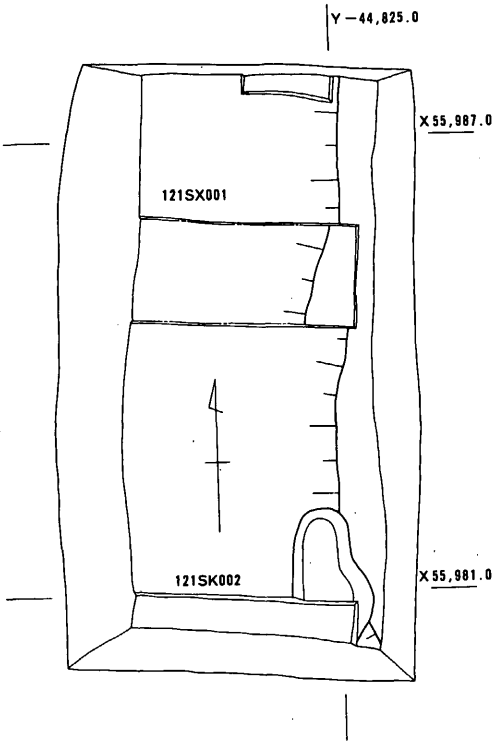


Fig.258　第121次調査遺構配置図（1/100）

4．出土遺物

(1)　**土器・陶磁器**

121SK002出土土器（Fig.259、CD-121010・011）

白磁

椀（1・2）　1は口径16.0cmに復原されるもので、Ⅳ類である。2はⅤ類の高台部分の資料で、径6.6cm。

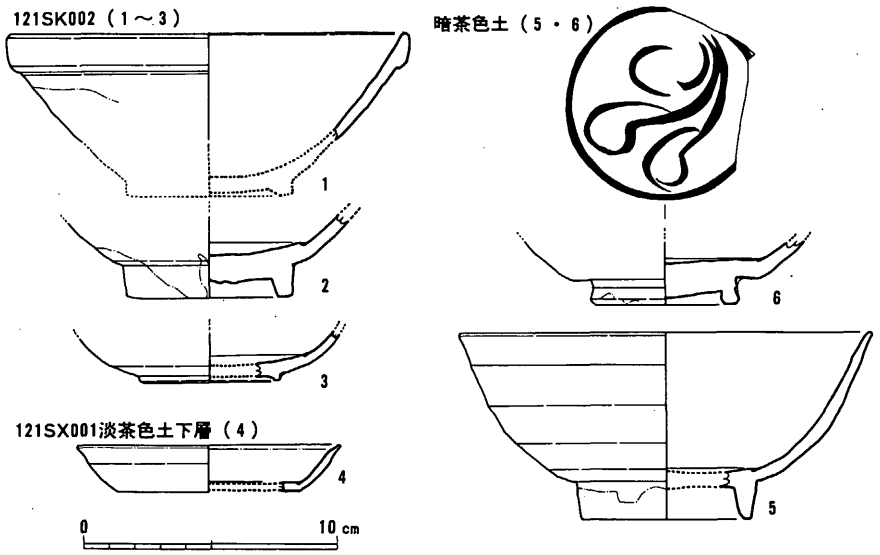


Fig.259　第121次調査出土遺物実測図（1/3）

皿（3）　低い高台の径は5.6cm。内外面ともに光沢のある淡白色の釉が施されるが、畳付及び外底部にはない。XI類もしくはVII類とみられる。

121SX001淡茶色土下層出土土器（Fig.259、CD-121012・013）

白磁

皿（4）　口径10.5cm、器高1.9cm 、底径7.2cmを測る。口縁端部を除いて全面に施釉される。IX-1-a 類。

暗茶色土層出土土器（Fig.259、CD-121014・015）

白磁

椀（5）　口径16.4cm、器高7.5cm、底径6.9cmを測る。高台部付近を除いて全面に施される釉は、乳白色に発色し光沢がある。V-1-a 類。

龍泉窯系青磁

椀（6）　I 類の底部資料で、見込みにヘラによる文様が施される。畳付及び外面底部は施釉されない。高台径5.9cm。

5．小　結

この地点は朱雀大路の路面上に位置すると考えて調査を行ったが、ここに報告したように大きな氾濫状の遺構があり、奈良時代乃至は平安時代に存在したと考えられる朱雀大路の痕跡は確認できなかった。しかし、周辺の調査成果では大路の存在は確実であり、今回の成果はその終焉の時期を知る手がかりになるものと思われる。

121SX001の堆積層の中から出土した遺物は、平安後期の資料を多数含むものの、上位の淡茶色土層や中位の暗灰色土層から龍泉窯系青磁や白磁皿IX類が出土している。このことから各層の埋没時期にはあまり開きはなく、形成時期を具体的に知るには至らないが13世紀後半頃には撹乱され埋没したものと考えたい。この遺構の上位で検出された土坑の出土遺物はやや古い傾向を示すが、埋土中に下層の遺物が含まれたものとみられ、具体的な時期を確認するには不確実な資料と言える。

121SX001をどのように評価するかはさらに広域に調査を行う必要があるが、何らかの要因で水路が氾濫し、路面を大きく削り取りながら流れた可能性が強い。したがってこの段階では確実に朱雀大路は存在していないと言えよう。

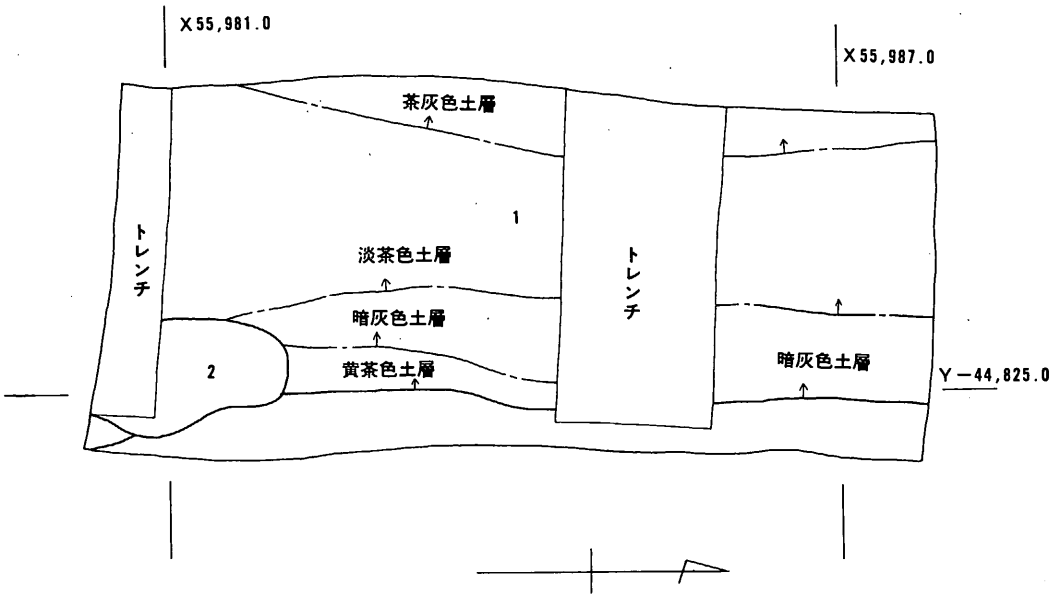


Fig.260　第121次調査遺構配置略測図

Tab.12　第121次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別	地区
1	121SX001	大溝？　氾濫状のもの	
2	121SK002	土坑　黒茶色土埋土	

(12) 第142次調査

1．はじめに

調査地は、太宰府市大字南276-1に所在し、共同住宅建設に先立って発掘調査を実施した。調査は平成5（1993）年10月13日～10月19日まで実施し、調査面積は71㎡である。調査は狭川真一、中島恒次郎が担当した。

なお地権者及び開発者のご協力により、基礎構造を改変することにより遺構面は保護されることとなった。この行為に対して感謝申し上げる次第である。

2．層位など

地表から0.8mほどは現代の盛り土（真砂土）で、その直下にはそれ以前まで耕作されていた水田面が残っている。この水田面は2面確認された。これらを除去すると明茶灰色土、暗茶色砂質土、茶黒色砂質土などが堆積する。この茶黒色砂質土（遺物の取り上げと報告は黒茶色土層）を除去すると灰色砂の地山が検出され、すべての遺構はこの面から穿たれていた。

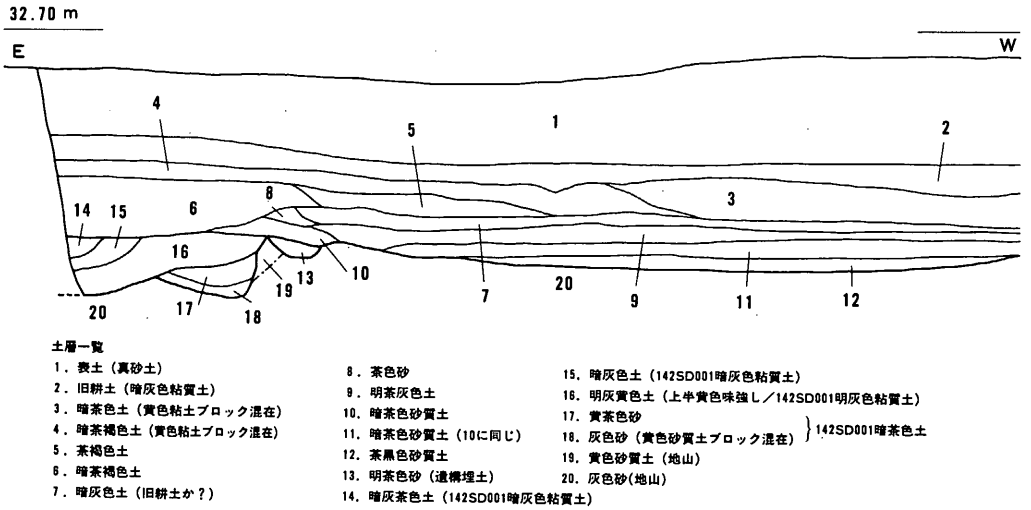


Fig.261　第142次調査南壁土層観察図（1/60）

3．検出遺構

(1) 溝

142SD001（CD-142006・007）　調査区の東端に拡張したトレンチの東隅で検出した、南北方向の溝である。検出長1.35m、検出幅1.45m（溝の東肩が未検出）、深さ0.45m程度を測る。遺構の埋没状況から大きく2時期に分けられ、初期のものは後出のものに切られており、その境目に若干の段差が生じている。出土遺物の傾向は、上位の暗灰色粘質土層に9世紀に属する資料を検出しているが、続く明灰色粘質土ではすべて8世紀代の資料でまとまっている（いずれ

も後出する溝の埋土)。最下層の暗茶色土(初期の溝の埋土)は遺物が微量で年代の決定には至らない。なお遺物の報告にある上面とは検出面から暗灰色粘質土が明瞭に認識されるまでの人工的な層位であり、層位的には暗灰色粘質土で捉えても差し支えない資料群である。

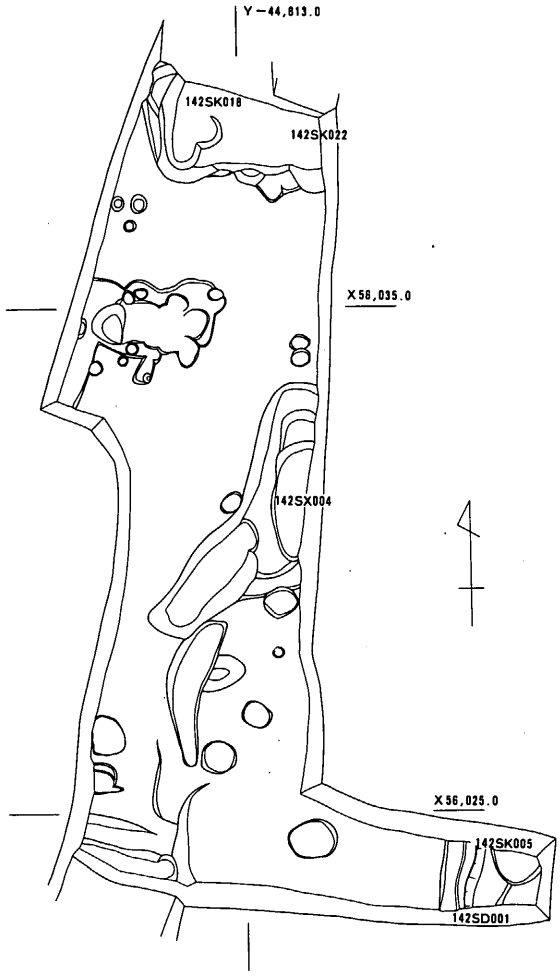


Fig.262　第142次調査遺構配置図（1/150）

(2)　土坑

142SK005(CD-142006)　142SD001を切る遺構で、検出長0.65m、検出幅1.0m、深さ0.5m以上(狭小なトレンチの壁際であったため完掘していない）を測る。埋土は黒灰色土の単一層である。

142SK018 (CD-142009)　調査区北端で検出した遺構で、東西2.9m、南北2.0m以上、深さは0.7～0.9mを測る。埋土は上位で灰茶色土、下位の窪み状を呈する部分で灰茶色砂質土である。142SK022と接しているが途中にある別の遺構で撹乱され、両者の関係は明らかに出来なかった。

なお遺物の報告で出土土層の記載のない一群は灰茶色土層に含まれるが、その中でも上位から出土したものである。ここでは調査段階の記録を生かしてそのまま報告した。

142SK022　142SK018に隣接する遺構で、検出長0.8m、検出幅1.6m、深さ0.4～0.45mを測る。埋土は黒茶色土である。

(3)　その他の遺構

142SX004 (CD-142008)　調査区中程で検出した不定形な窪み状遺構である。底部には大きな窪みがあり凹凸が著しい。遺構の深さは0.2～0.55mで、埋土は上位で茶灰色土、下位の窪み状を呈する部分は黄茶色のブロックを含んだ暗茶色土であった。

4．出土遺物

(1)　土器・陶磁器

142SD001上面出土土器（Fig.263、CD-142017～021）

土師器

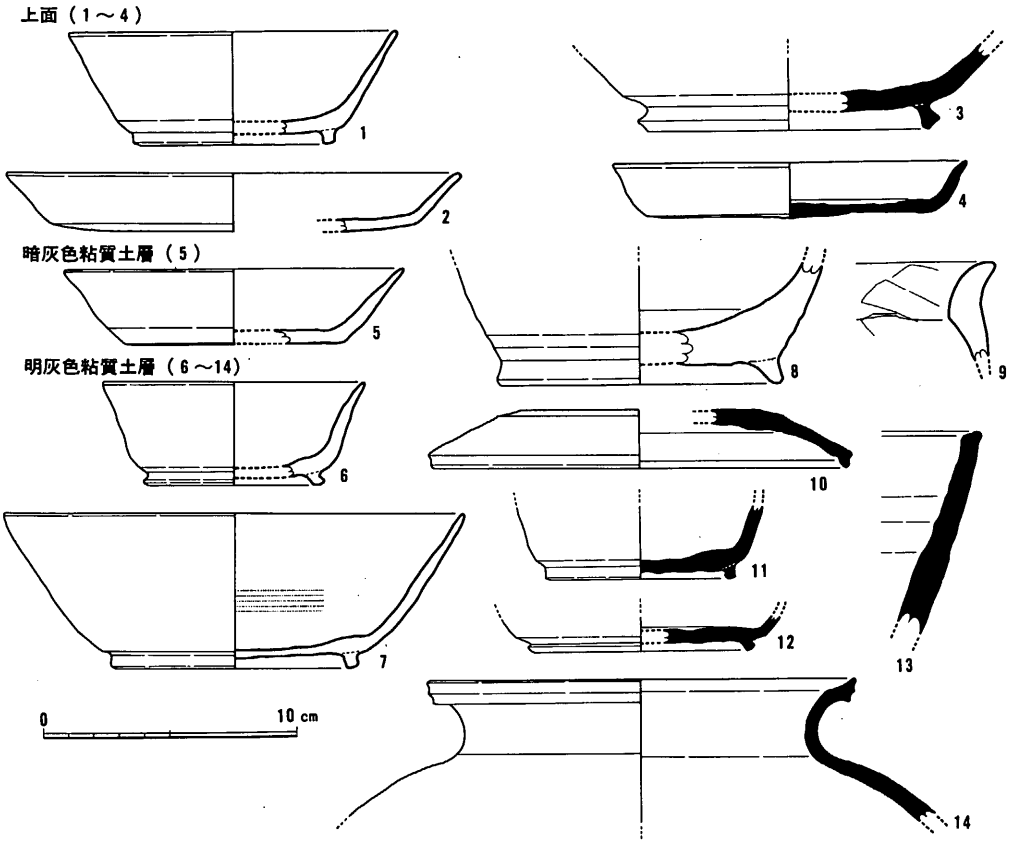


Fig.263　142SD001出土土器実測図（1/3）

坏ｃ（1）　口径13.0cm、器高4.5cm、高台径8.0cmを測る。調整は風化のため明らかではないが、色調は明茶褐色を呈している。

皿ａ（2）　口径18.0cm、器高2.4cm以上、底径14.5cmを測る。底部は回転ヘラケズリされる。

須恵器

椀ｃ（3）　高台径12.0cm。内面はナデ、外面底部は回転ヘラケズリされる。

皿ａ（4）　口径14.0cm、器高2.2cm、底径11.3cm。底部はヘラ切りである。

142SD001暗灰色粘質土層出土土器（Fig.263、CD-142022）

土師器

坏ａ（5）　口径13.4cm、器高3.0cm、底径8.6cmを測る。底部はヘラ切りされる。この遺構の最終埋没時期を示す資料と考えている。

142SD001明灰色粘質土層出土土器（Fig.263、CD-142023～028）

土師器

坏ｃ（6）　口径10.4cm、器高4.1cm、高台径7.2cm。底部と体部の境目は丸く仕上げられる。

椀ｃ（7）　口径18.2cm、器高6.2cm、底径9.8cm。表面は風化が進んでいるが、外面の体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリが施され、内面にはミガキａが観察される。

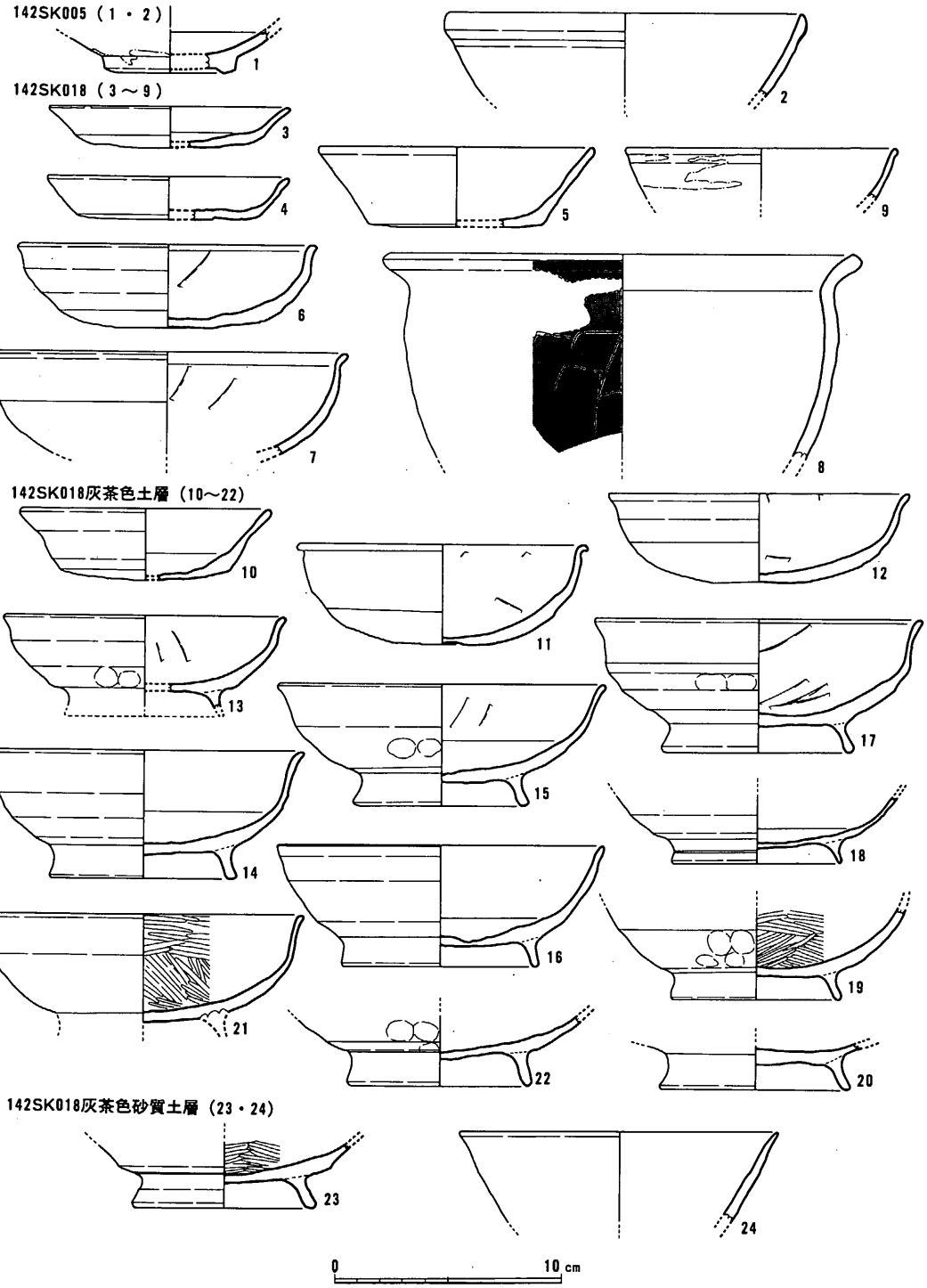


Fig.264　142SK005・018出土土器実測図（1/3）

壺（8）　高台径11.4cm。風化が進むが、わずかに内面にミガキaが観察される。

甕（9）　体部内面はヘラケズリである。

須恵器

蓋３（10）　口径16.6cm。端部は明瞭な三角形を呈し、天井部は回転ヘラケズリされる。

坏ｃ（11･12）　高台径7.6･9.0cm。底部と体部の境目は丸く仕上げられる。

鉢ｂ（13）　口縁部の小片で、外面下半部は回転ヘラケズリである。

甕（14）　口径17.0cm。外面の肩部にはかき目が施されているほかは、ヨコナデである。

142SK005出土土器（Fig.264、CD-142029･030）

白磁

椀（1･2）　１は高台径5.9cmで、見込みに小さな段がある。Ⅳ-1-a類。２は口径15.8cmで、Ⅳ類である。

142SK018出土土器（Fig.264、CD-142031～038）

土師器

坏ａ（3～5）　５は古いタイプの混入とみられ、口径12.3cm、器高3.6cmを測る。３・４は口径10.8cm、器高1.9cm、底径8.4･8.2cm。底部はヘラ切りされる。

椀ａ（6）　無高台の椀で、口径13.4cm、器高4.0cmを測る。底部はヘラ切りされ、内面にはミガキｂが観察される。

椀（7）　口縁端部を外反させる資料で、口径16.2cm。

甕（8）　口径21.4cm。口縁部から内面全体は丁寧なヨコナデが施される。外面の調整は粗いナデ状のものが観察される程度である。

灰釉陶器

椀（9）　口径12.2cm。釉は残存部全面に施され明灰色に発色し、外面はやや厚めに施されるが剥離が目立つ。

142SK018灰茶色土層出土土器（Fig.264、CD-142039～047）

土師器

坏ａ（10）　口径11.2cm。Ⅶ期のタイプ。

椀ａ（11･12）　口径13.0･13.4cm、器高4.5･4.0cm。内面はミガキｂが施され、底部はヘラ切りされる。11には板状圧痕が残る。

椀ｃ（13～20）　口径12.6～14.6cm、器高5.4～6.0cm、高台径7.6～8.8cmを測る。13･15･17の内面はミガキｂ、19ではミガキｃが施される。底部はすべてヘラ切りで、板状圧痕が残るものもある。

黒色土器

椀ｃ（21･22）　いずれもＡ類で、内面はミガキｃが施される。

142SK018灰茶色砂質土層出土土器（Fig.264、CD-142048･049）

黒色土器

椀ｃ（23）　高台径8.2cm。内面はミガキｃである。

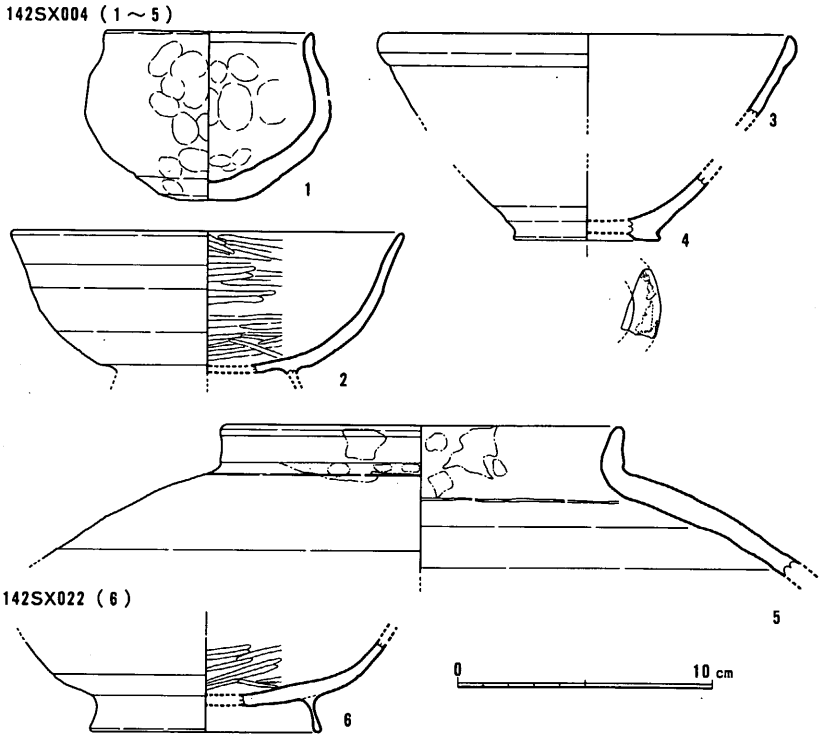


Fig.265　142SX004・022出土土器実測図（1/3）

越州窯系青磁

椀（24）　口径14.2cm程度に復原される。釉は暗緑灰色に発色し、光沢がある。Ⅰ類。

142SX004出土土器（Fig.265、CD-142050～055）

土師器

小壺（1）　口径8.4cm、器高6.7cmを測る。全体を手捏ねで仕上げるため、全面に指圧痕跡が明瞭に観察される。外面体部上位以下に煤が付着している。

黒色土器

椀（2）　口径15.6cmで、体部は丸味を帯びる。内面はミガキｃが観察され、外面には金属器模倣を意識した横方向の擦痕が観察される。大宰府近辺で生産されたものとは異なるもので、中南部九州のものではないかと思われる。

白磁

椀（3）　口径16.0cm。Ⅳ類。

越州窯系青磁

椀（4）　高台径5.8cm。全面に施される釉は暗緑灰色を呈し、胎土は灰茶色で褐色の小粒が若干含まれる。高台は幅の狭い蛇目高台で、目跡が認められる。Ⅰ-1-a類。

灰釉陶器

壺（5）　口径16.0cmの短頸壺で、外面に明緑白色の釉が薄くかけられる。胎土は砂粒を若干含むが精良である。

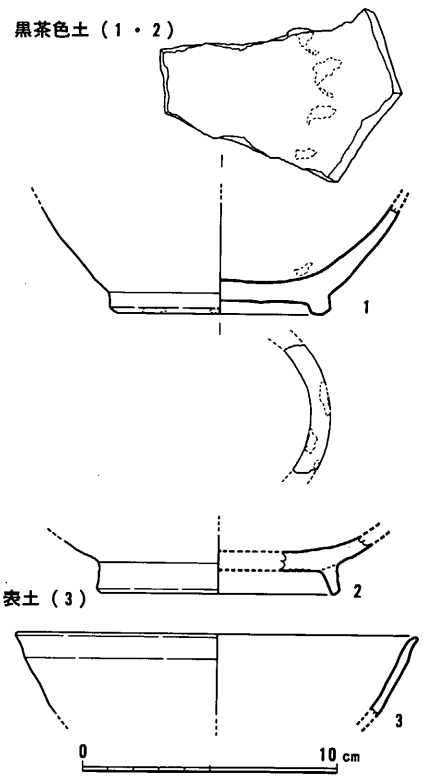


Fig.266　黒茶色土層・表土出土土器実測図（1/3）

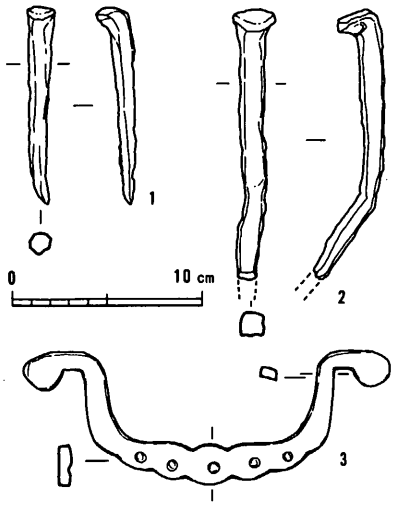
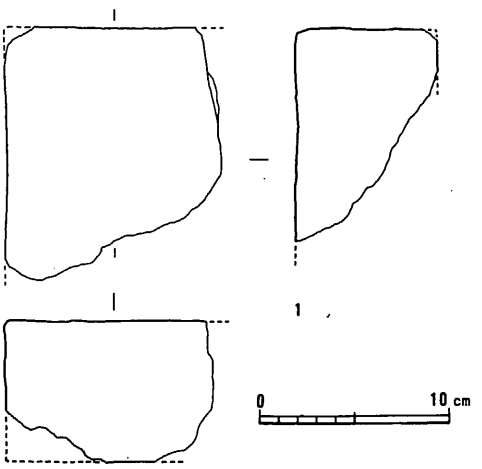


Fig.267　第142次調査出土
金属製品実測図（1/3）



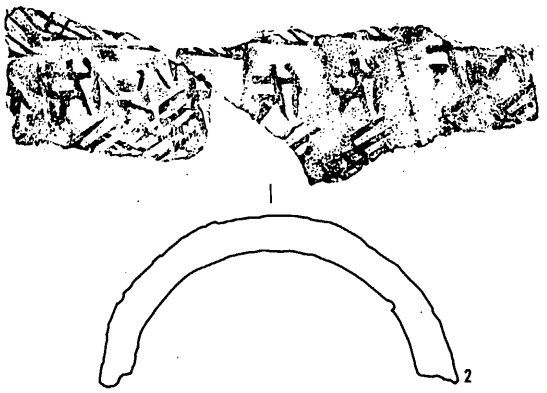


Fig.268　第142次調査出土塼実測図
文字瓦拓影（1/4）

142SX022出土土器

（Fig.265、CD-142056・057）

黒色土器

椀（6）　高台径9.2cm。内面はミガキｃが施される。

黒茶色土層出土土器

（Fig.266、CD-142058・059）

越州窯系青磁

椀（1）　高台径8.8cm。淡茶灰色に発色する釉は全面に施される。見込み及び畳付に目跡が多数確認される。

灰釉陶器

椀（2）　高台径9.6cmで、底部は糸切りされる。釉は見込み部分を掻き取っている。

表土出土土器（Fig.266、CD-142060・061）

白磁

椀（3）　口径16.0cm。釉はやや緑色味を帯びた乳白色で、光沢がある。V-1類。

(2)　金属製品（Fig.267、CD-142062・063）

鉄釘（1・2）　頭部は平たく叩き、折り曲げて成形する。1は長さ5.2cm、2は現存長7.2cm。両者とも142SK018出土。

引手金具（3）　黒茶色土層から出土したもので、握り部分の片面に円形の窪みを5箇所設ける。銅製。

(3)　瓦（Fig.268、CD-142064）

塼（1）　無文塼で、厚さ7.5cm。142SD001暗灰色粘質土層出土。

文字瓦（2）　丸瓦凸面に押されたもので、8単位が確認できる。文字は「佐」の左字で、II-4-b類。142SK018灰茶色土層出土。

(4) 石製品

砥石（Fig.269、CD-142065・066）

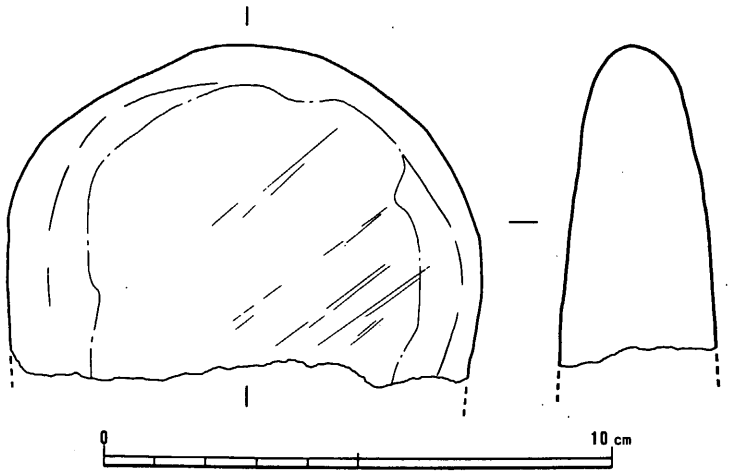


Fig.269　第142次調査出土砥石実測図（2/3）

自然の川原石の片面を利用したもので、研磨痕のみられる幅は6.5cm程度である。142SK018灰茶色土層出土。

5．小　結

今回検出した142SD001南北溝は、出土遺物の示す年代から8世紀中頃から埋没が始まり、9世紀第II四半期頃には完全に埋没したと考えられる。溝幅は残念ながら東肩を検出しておらず正確な規模は明らかではないが、データーを抽出できる西肩と溝中程と推定した部分の2点の成果をみると、西肩では政庁中軸線から東へ18.988m、中程の点では同じく20.281mという数値が得られる。これは先に報告した第64次調査の奈良時代の溝64SD140で得られた数値（中軸線から東へ19.872m）にきわめて近似し、両者が一連の遺構であることが考えられる。

これらを大宰府の朱雀大路東側溝と仮定した場合、今次の調査区の大半が当時の路面に該当することがわかる。この範囲に限っては奈良時代に属する遺構は確認されず、このことを物語っていると言える。しかし、142SK018では大宰府土器編年X期（10世紀後半～11世紀前半）の資料がまとまって出土しており、この段階で路面の管理が疎かになっていることが窺える。

また142SX004も同様に路面推定部分に構築された遺構で、これは大宰府土器編年XII期（11世紀後半）に該当する。これとほぼ同時期に考え得る遺構として142SK005があり、これは142SD001を切っている。

これらのことから今次の調査の範囲で述べると、朱雀大路の側溝は9世紀前半にはほぼ埋没しており、路面の管理は10世紀後半頃には疎かになりつつあったことが窺える。ただし他の地点では11世紀後半頃に埋没した南北溝も検出されており、路面の管理が疎かになったとは言え、完全に廃絶したとは言い切れない。

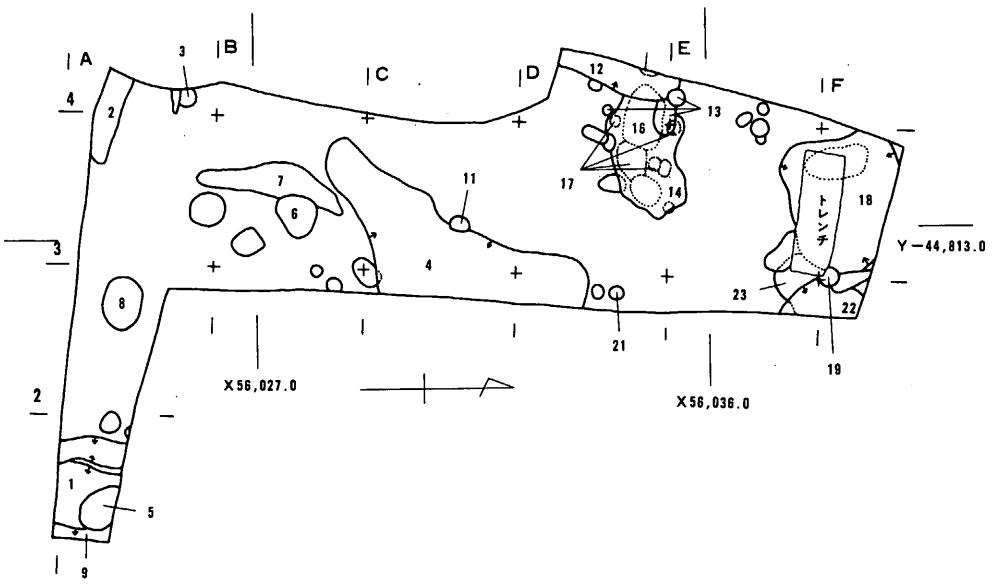


Fig.270　第142次調査遺構配置略側図

Tab.13　第142次調査遺構一覧表

S-番号	遺構番号	種　別			地区
1	142SD001	溝	明灰色粘質土埋土	8 c後	A1
2		ピット	暗茶色土埋土		A4
3		ピット	青灰色土埋土	新	A4
4	142SX004	窪み状	上位は茶灰色土、下位は暗茶色土の堆積	11c後～	C3
5	142SK005	土坑	黒灰色土埋土　1→5	11c後～	A1
6		ピット	茶灰色土埋土	平安	B3
7		ピット	茶灰色土埋土	11c後～	B3
8		土坑	茶灰色土埋土	11c後～	A2
9		段落ち	青灰色土埋土　5→9	新	A1
	欠番				
11		ピット	黄茶色土埋土　4→11	平安	C3
12		窪み状	黒灰色土埋土	平安？	D4
13		ピット		平安	D4
14		溜まり状	灰白色土（汚泥ブロック混）	平安	D3
	欠番				
16		ピット	黒灰色土埋土	平安	D3
17		ピット群		平安	D3
18	142SK018	土坑	黒茶色土、灰茶色土埋土　23→18	10c	F3
19		ピット	黒色土埋土	平安	F3
	欠番				
21		ピット		奈良？？	D2
22	142SX022	窪み状	黒茶色土埋土　23→22	平安	F2
23		土坑	黄茶色土埋土	10c～	F2

(13) 礎石の発見

昭和57（1982）年12月、太宰府都市計画事業観世音寺土地区画整理事業に伴って行われた、御笠川の河川改修工事に際して巨大な礎石1基が偶然発見された。礎石は河川の砂の堆積中に立つように見いだされ、出土した場所は政庁跡のちょうど正面にあたる位置であった。



Fig.271　礎石発見時の状況

連絡を受けた教育委員会では、九州歴史資料館の応援を得て急遽その位置の測量を行った。現在、礎石は引き上げられて大宰府政庁前の広場に安住の地を得ている。

礎石は上部に円形の柱座を有するもので、柱座上部径66cm、柱座の高さ3～4cmで、石自体は長さ2.42m、幅1.82m、高さ（厚さ）0.8m以上（下部は埋没により実測できないが数cm程度しか埋まっていない）を測るものである。石材は花崗岩とみられる。

出土した場所が政庁南門から南へ約248mの位置にあることや、政庁内にある他の礎石に比べて著しく大きいこと、御笠川と政庁南門の間には朱雀大路が存在せず広場的な空間が広がることなどから、官衙全体の正門としての朱雀門的な要素を持った建物の礎石ではないかと考えている。ちなみに礎石の厚さから推定すると、基壇高は0.8m程度にもなり、正面の門に相応しい迫力がある。



Fig.272　礎石が発見された位置

Tab.14　礎石の位置

	計測位置	任意中点 X座標	任意中点 Y座標	政庁南門中点からの 南北距離	政庁中軸線からの 東西距離
朱雀門礎出土地点		56,460.80	−44,827.81	S 247.938	W 4.601

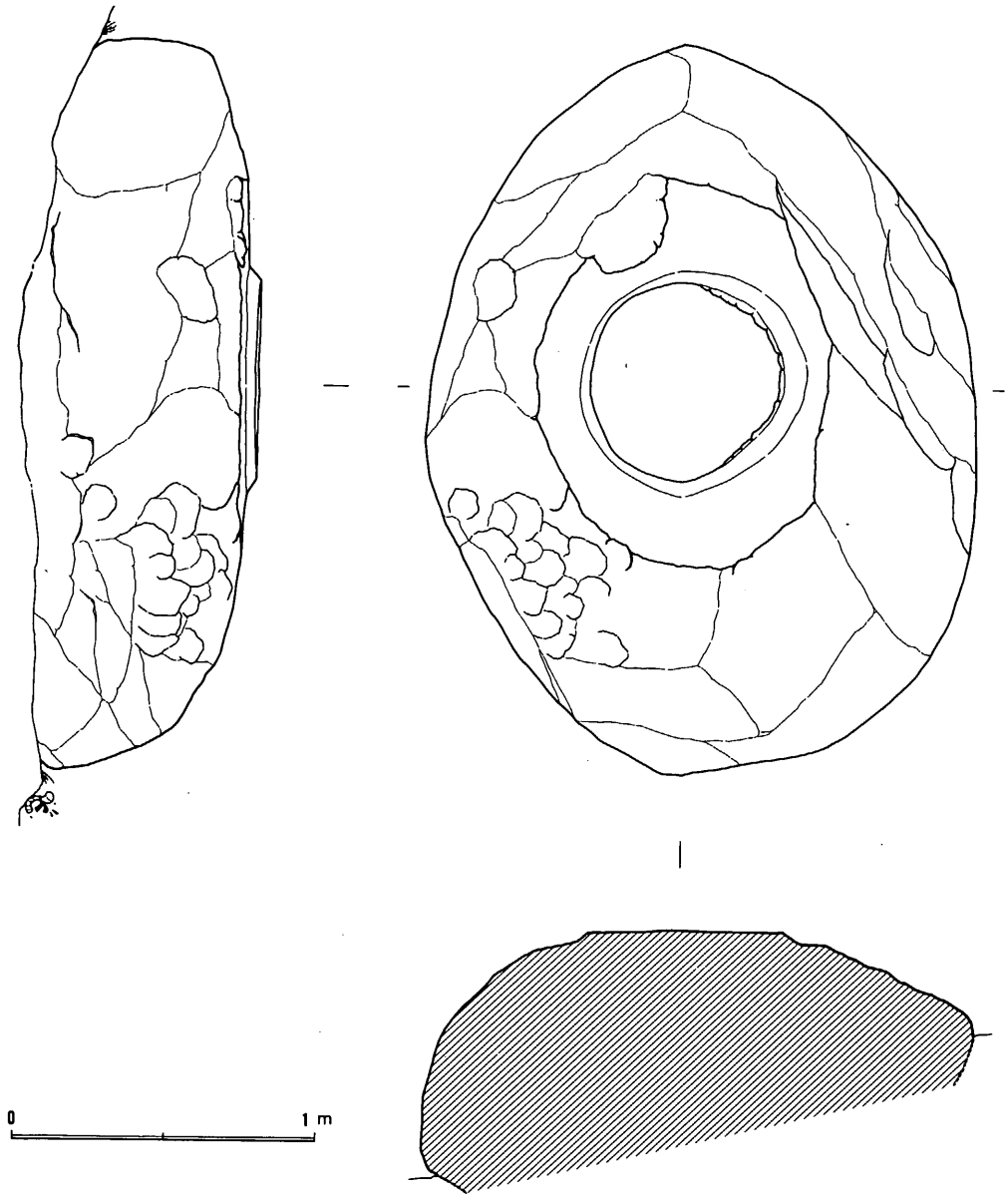


Fig.273　礎石実測図（1/20）

V. 自然科学分析

大宰府条坊跡第64次調査出土の動物遺存体

沖田　絵麻（岡山理科大学大学院理学研究科）
松井　　章（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター）

大宰府条坊跡第64次調査で出土した動物遺存体のうち、種名が同定できたものは、魚類ではマダイ、哺乳類では、イヌ、シカ、ウシ、ウマの4種類であった。今回、同定にいたらなかった小破片も多数存在する。出土した動物遺存体の大部分は、平安時代、10世紀末から11世紀前半の井戸（64SE001）の枠内の埋土に投棄されており、水漬けの状態であったために骨が残ったと考えられる。資料の大部分は、骨の成分であるリン酸が地下水に含まれる鉄などと化合して黄褐色に変質している。骨の表面はそうした作用により荒れているため、解体痕、調理痕などは観察できなかった。しかし、それぞれの種類ごとに出土した部位が限られることから、解体処理された後の残滓を、井戸としての機能を終わった段階で井戸枠内に捨てたと考えたい。

以下に出土した動物遺存体の概要について記す。

Tab.15　出土した動物遺存体

硬骨魚類綱	Class Osteichthyes
マダイ	Pagrus major
哺乳綱	Class Mammalia
イヌ	Canis familiaris
ウマ	Equus caballus
ウシ	Bos taurus domesticus

魚類

マダイ　歯骨片が1点出土している。マダイの歯骨は魚類の中でも最も堅固で遺跡に残りやすいものである。大きさは体長40センチから50センチ未満の、遺跡出土のものとしては中形である。

同定に至らなかった小破片の中に魚骨が含まれていることは充分考えられるが、この他に魚類のものと判別する資料はなかった。

哺乳類

イヌ

同定できたイヌの骨は68点で、全体の約1/2を占める。層位と部位ごとの出土量を基に最小個体数を求めると、上層2個体・下層4個体の計6個体分となる。ただ、保存状態に恵まれないため観察と計測を行えたのは一部に留まる。

なお計測方法は斉藤（1963）(1)及び茂原（1986）(2)に従う。

64SE001井戸枠内、上層出土資料

頭蓋骨

4点の破片のうち、観察および計測の可能なものは1点である。これは犬歯部歯槽付近から頬骨・前頭骨の一部までの顔面前方に当たる。骨の表面が腐食、剥離し、他の骨、鉱物などの凝着が激しく、細部の観察は不可能であるが、縄文時代以来の日本犬と比較して吻がはるかに太

く、和歌山大学所蔵のニホンオオカミと吻部の幅は大差ない。しかし、ニホンオオカミと比較すると、吻長はかなり短く、犬歯槽も小さく、家犬の特徴をよくあらわしている。しかしこの個体は、縄文時代以来の日本犬の範疇をはるかに逸脱する太さと頑丈さを兼ね備えることから、中国または朝鮮半島から搬入された大陸系の大型犬の可能性がある(3)。ストップ(額段)はなだらかである。吻幅と硬口蓋最大幅はそれぞれ、36.2＋－、64.2＋－mmをはかり、縄文大の平均値34.1、57.3mm、亀井遺跡の弥生犬の34.0、58.6mmに比べてもはるかに大きい。おなじ平安時代に属する西ノ辻遺跡の例、33.5、58.6mmと比較しても当資料が上回っている。中・近世の犬、材木座のオス、36.5、60.2mm、西新橋出土の江戸時代犬の33.5、60mmよりもさらに大きくなる。現在まで管見に接することのできた報告例に限るとオホーツク時代（鎌倉時代並行）の香深井遺跡のオスの例、42.0、68.4mmに続くものである。上顎歯牙は総て腐朽し、エナメル質も含めて残っていなかった。歯槽の閉鎖したものは見られなかったので、生時の欠歯はなかったようである。

下顎骨

1個体、または2個体の下顎骨が出土している。破片である上に表面の剥離が激しいため、観察、計測は不可能であった。歯牙は腐朽し欠損しているが、歯槽の閉鎖したものは見られないことから生前は完全で会ったと考えられる。その他に四肢骨や脊椎骨が出土しているが、やはり、腐食が著しく観察および計測はできなかった。

93SE001井戸枠下層出土資料

頭蓋骨

小片が出土しているにすぎない。

下顎骨

左4点、右3点の出土があった。この内もっとも残りの良いものは、下顎全長128.9(id-goc)を測る。これは長谷部による分類（長谷部1963)(4)では中型に当てはまる。骨体は厚みがあり、頑丈な印象を受ける。咬筋窩は深く、また下顎枝の筋肉の付着する部分は凹凸が発達する。歯牙は第1大臼歯（M1）のみ残存する。第3大臼歯（M3）は歯槽が完全に閉鎖しており、先天的な欠歯の可能性がある。また第2、第4小臼歯（P2, P4）は生時に欠損したものらしく、歯槽の閉鎖が進行している。M1の磨耗はあまり進んでいない。本資料は全長では縄文後・晩期や弥生時代のイヌのものと同規模であるが、下顎体高・体厚ははるかに大きく、頑丈である。他の資料についても体厚の値が大きめでがっしりした形質である。

四肢骨

肩甲骨、後肢骨の出土が多く、上腕骨、橈骨、尺骨は少ない。完存するものが少なく形質的特徴の把握は難しいが、おおむね長谷部による分類のうち小型～中小型に当てはまる。縄文、弥生犬に比べると長さではさほどの違いがないが、全体的に頑丈な骨体を持つ。上肢骨の節付着部分は比較的発達している。頭蓋骨、下顎骨で見た中型犬と同一個体であるという確証はな

い。

64SE001井戸枠内出土資料

ウマ

113点中、37点を占める。そのうち、橈骨、脛骨などが同一部位が2個体あることから、少なくとも2個体のウマが存在したことを示す。表面があれているので、加工痕跡は明瞭でないが、四肢骨の割れ方には、斧様の鈍器でたたき割った可能性のあるものも含まれる。頭蓋骨および上顎骨は見られない。上顎骨および臼歯だけが腐朽したとは考えられず、このウマは頭蓋骨が元来、存在しなかったことが考えられよう。

ウシ

同一個体と思われる右側の下顎骨が2点存在する。計4点と少ない。古代都城におけるウマ・ウシの比率は、ウマが多い傾向が平城京、長岡京、平安京などからうかがえる。本例もそうした傾向と一致する。

シカ

中足骨が1点出土している。シカの中手骨、中足骨は厚みがあり、まっすぐな素材がとれるので、骨角器によく利用される。中世には武具や刀装具の簪の材料になるが、古代における利用は不明である。

まとめ

64SE001枠内からは肢骨を中心に、少なくとも6個体分に相当するイヌの骨が出土した。古代のイヌは出土例が少なく貴重な資料である。これらのイヌの形質は、頭蓋骨や下顎骨が長谷部の分類による中型犬に属し、中・近世犬の大きな個体に匹敵するのに対し、四肢骨は長谷部の小型～中小型に相当する、縄文時代犬の雄や弥生時代犬の雌に相当するという特徴が見られる。したがって、頭蓋骨、下顎骨と四肢骨は別系統、別個体で、少なくとも2種の大きさのイヌが存在した可能性がある。頭蓋骨、下顎骨から見ると、縄文犬から柴犬につながる在来小型日本犬の系統とは異なる形質で、大型で頑丈な骨格のイヌである。大型の個体は、吻部基部での幅では、ニホンオオカミに匹敵するが、吻部の長さが短いという特徴を持つ。四肢骨については資料がごく少ないため同時代での比較はできないが、比較的資料の多い弥生時代[5]、中世の資料と比較した場合、両者の範囲内におさまる。

また当資料は頭骨に比べて肢骨や椎骨等の数が少ないことから、全身骨格が投棄されたのではなく、解体後に部分的に投棄された可能性が高い。当資料には人為的な切断痕やカットマーク等は認められなかったが、骨の表面がビビアナイト（藍鉄鉱：地下水の鉄分と骨のリン分が結びついて析出した深青色の結晶）で覆われ、細かな刃物傷が観察できなかったことも考えられる。

平安時代から鎌倉時代にかけて、井戸を埋める際にウシの頭蓋骨を収める儀礼が、周防国府跡[6]、岡山市鹿田遺跡などで見つかっている。この井戸の胴部生津遺存体も、井戸の底ではな

く、この井戸が機能を失った段階で投棄されている。しかしながら、複数のイヌの頭蓋骨、四肢骨、ウシ、ウマの四肢骨が断片的に出土している本例は、上記のような井戸の埋納儀礼に関連する例とは見なしがたく、イヌ、ウシ、ウマの皮を剥ぎ肉を取って解体し、利用できる骨を取った後の残滓を投棄した可能性が高いと考えたい。

建物の柱跡からウシ、またはウマの四肢骨に相当する骨の細片が出土している。偶然混入したとも考えられるが、もともとは比較的大きな部位であったようで、人為的に入れられた可能性も考えられる。6世紀の例ではあるが、大阪市長原遺跡で建物を撤去した後、柱抜き跡にウシの四肢骨を方形に組んで埋める儀礼の跡が存在することが判明したが(7)、本例もそうした儀礼に連なる可能性がある。長原遺跡では、骨の残りが良かったため種名、部位や配置の仕方まで判明したが、本例も元来は、そうした儀礼の痕跡であった可能性もある。今後、保存状態のよい検出例を待ちたい。

(註)

(1) 斉藤弘吉 (1963)『大科動物骨格計測法』私家版。

(2) 茂原信生(1986)『東京大学総合研究資料館所蔵長谷部言人博士収集犬科動物資料カタログ一東京大学総合研究資料館標本資料報告』第13号、東京大学総合研究資料館。

(3) 『日本書紀』巻29、朱鳥元年4月に「新羅進調、従筑紫貢上。細馬一匹・騾一頭・犬二狗」「蜀の大狗」の記事が見える。本例もこうした渡来犬、もしくはその系統であったろう。

(4) 長谷部言人 (1952)「犬骨」『吉胡貝塚』文化財保護委員会、pp-145-150。

(5) 茂原信生・松井章 (印刷中)「原ノ辻遺跡出土の動物遺存体」『原の辻遺跡 (仮称)』長崎県教委。この出土資料を弥生時代の例として比較した。

(6) 松井章 (1993)「鹿田遺跡第5次調査 (医学部付属病院棟新営に伴う発掘調査) 出土のウシ」『鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、pp.115-118。

吉瀬勝康(編) (1993)『周防国府跡』周防国府跡調査会・防府市教育委員会。井戸、SE3700からウシの頭蓋骨が出土している。

(7) 久保和士 (1997)「牛骨を埋めた柱穴」『萃火』68号 (財) 大阪市文化財協会 pp.6-7。

	遺　構	大分類	種　名	部　位	左右	部分1	観　察
1	64SE001枠内	魚　類	マダイ	歯骨	右		
2	64SE001枠内	哺乳類	シカ	中足骨	不明		
3	64SE001枠内	哺乳類	ウマ？	第一頸椎			
4	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	頸椎			
5	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	頸椎			
6	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	頸椎			
7	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	胸椎		椎体2点	
8	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	肩甲骨	右	関節角	
9	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	上腕骨	左	近位端	
10	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	上腕骨	右	遠位端	
11	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	上腕骨	右	近位端	
12	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	上腕骨	左	遠位1/2強	
13	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	橈骨	右	遠位端	
14	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	橈骨・尺骨	左	遠位1/3強	
15	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	橈骨	左	遠位端	
16	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	橈骨・尺骨	右	近位端	
17	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	中手骨	左	近位2/3強	
18	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	末節骨	右		
19	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	寛骨	右	腸骨体	
20	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	大腿骨	左	近位骨頭	
21	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	大腿骨	左	近位骨体後外側	
22	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	脛骨	右	遠位3/4	
23	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	脛骨	左	遠位端	
24	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	脛骨	左	近位骨体後側	
25	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	脛骨	左	近位端	
26	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	中足骨		遠位3/4	
27	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	中足骨	左	近位端	
28	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	中足骨？		骨体	
29	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	中手骨／中足骨		遠位端	
30	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	中手骨／中足骨		遠位端	
31	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	中手骨／中足骨		遠位端	
32	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	距骨	左		
33	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	距骨	右		
34	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	基節骨		近位端	
35	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	基節骨		遠位端	
36	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	中節骨			
37	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	中節骨			
38	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	中節骨			
39	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	末節骨			
40	64SE001枠内	哺乳類	ウマ	末節骨			
41	64SE001枠内	哺乳類	ウシ	下顎骨	右	関節突起	
42	64SE001枠内	哺乳類	ウシ	下顎骨	右	下顎枝前縁・M3	
43	64SE001枠内	哺乳類	ウシ	肩甲骨	右	肩甲棘	
44	64SE001枠内	哺乳類	ウシ	寛骨	右	腸骨・寛骨臼窩	
45	64SE001枠内	哺乳類	ウシ/ウマ	肩甲骨		肩甲棘	
46	64SE001枠内	哺乳類	ウシ/ウマ	基節骨			
47	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	下顎骨	左	ほぼ完全	
48	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	下顎骨	右	下顎枝欠損	
49	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	下顎骨	左	歯槽骨破片	
50	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	下顎骨	右	下顎枝破片	
51	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	下顎骨	左	遠位部破片	
52	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	頭蓋骨		後頭骨破片	19と同一体
53	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	肩甲骨	右	関節含む破片	
54	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	肩甲骨	左	関節含む破片	
55	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	寛骨	右	腸骨一部欠損	
56	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	上腕骨	左	骨幹破片	
57	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	橈骨	右	遠位部破片	

	遺　構	大分類	種　名	部　位	左右	部 分 1	観　察
58	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	尺骨	右	遠位端部欠損	
59	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	大腿骨	左	近位端	遠位端の一部欠損
60	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	大腿骨	右	骨頭	遠位端部欠損
61	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	脛骨	右	ほぼ完全	
62	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	脛骨	右	近位端破片	
63	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	頸椎			
64	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	腰椎			
65	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	頭蓋骨		右側頭骨片	6と同一体
66	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	頭蓋骨・上顎骨		左頬骨・上顎骨	
67	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	上顎骨	右	破片	
68	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	上顎骨	左	角突起	咬筋窩破片
69	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	肩甲骨	左	後縁部	
70	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	肩甲骨	左	後縁部	
71	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	上顎骨	左	破片	
72	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	肩甲骨	左	破片	
73	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	肩甲骨	左	関節部破片	
74	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	大腿骨	左	関節部破片	
75	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	大腿骨	左	遠位端破片	
76	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	脛骨		左右不明	
77	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	脛骨	左	近位端欠損	
78	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	脛骨	右	遠位部破片	
79	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	軸椎			
80	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	頸椎			
81	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	頸椎		第7頸椎か？	
82	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	頸椎			
83	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	頸椎		第4—6のいずれか	
84	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	頸椎		第4—6のいずれか	
85	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	頸椎		棘突起片	
86	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	頸椎		棘突起片	
87	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	頸椎		棘突起片	
88	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	踵骨	左		
89	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	中手・中足骨		完全	
90	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	中手・中足骨		欠損あり	
91	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	中手・中足骨		欠損あり	
92	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	中手・中足骨		欠損あり	
93	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	指骨			
94	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	指骨			
95	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	指骨			
96	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	指骨			
97	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	指骨			
98	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	指骨			
99	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	指骨			
100	64SE001枠内上層	哺乳類	イヌ	指骨			
101	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	頭蓋骨		3点接合せず	同一個体
102	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	下顎骨	左	下顎枝・筋窩破片	104と同一体か
103	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	下顎骨	右	骨体片	
104	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	下顎骨	左	骨体片	102と同一体か
105	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	胸椎			
106	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	大腿骨	左	近位端	
107	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	大腿骨	右	遠位端	
108	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	脛骨	左	遠位端	
109	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	上顎骨	右		
110	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	上腕骨	右	近位端	
111	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	胸椎			
112	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	大腿骨	左	近位端	
113	64SE001枠内下層	哺乳類	イヌ	上腕骨	右	近位端	

大宰府イヌ計測

大宰府条坊跡第64次調査出土犬骨　計測値

	太宰府	縄文平均		亀井（Y後期）		香深井(オホーツク)		西の荘	西ノ辻	鎌倉材木座		西新橋♂
計測項目（計測点）	上層1	♂	♀	♂平均	♀平均	♂平均	♀平均	(古墳)	平安後期	♂平均	♀平均	(江戸)
頭蓋骨												
1．頭蓋最大長（pr-i）		168.7	156.9	174.3	162.3	191.6	176.7	155.9	161.2	175.3	158.3	175.1
2．基底全長（pr-）		158.5	148.5	165.6	152.8	179	166.2	147	151.8	165.6	151.1	162.9
3．頬骨弓幅（zy-zy）		95.4	87.5	103.3	92.5	104.8	97.1	81	97.1	96.1	90.2	101.1
4．脳髄蓋長（na-i）		90	84.8	97.1	87	100.4	92.9	84.8	91.2	95.9	86.1	96.9
5．nasion-basion(na-ba)		86.5	80.8	93.9	84.2	94.2	88.7	81.2	87.7	91.6		91
6．頭蓋幅（eu-eu）		52.5	51.6	51	51.8	57.4	56.1	46.8	54.2	54.1	50.7	52.7
7．頭蓋高（br-ho）		49.5	45.8	52.8	46.7	54.6	50.6	57	49.1	48.8	42	50
8．basion-bregma高（ba-br）		65.2	59.9	68.2	62.4	73.7	66.3	56.9	63.6	66.9	58	64.7
9．最小前頭幅（ft-ft）		31.7	31.4	33	31.6	34.5	32.7	32.4	30.8	33.3	29.7	34.6
10．前頭骨頬骨突起端幅（ect-ect）		44.6	41.2	47.8	44.3	52.3	46.4	38.2	41.1	44.2	40.5	49.2
11．後頭三角幅（ot-ot）		61.6	58.8	61.5	59.4	70.1	64.6	57.1	58.3	63.7	57.4	61.6
12．両耳幅（au-au）		59.8	57.4	60.8	57.5	69.9	63.4	55.6	57	61.5	58	60
13．最小眼窩間幅（ent-ent）		31.1	28.2	31.6	28.6	36.9	32	27.2	30.2	31.6	27.7	32.4
14．顔長（pr-na）		82.9	76.4	81.7	80.4	97	88.8	75	76.8	84.2	73.4	83.8
15．吻長（pr-o.a）		72.2	67.5	72.1	70.2	82.1	74.8	66.7	69.5	74.8	66.7	74
16．吻幅（犬歯部）	36.2±	34.1	31.5	34	32.5	42	37.2	32.5	33.5	36.5	32.5	33.5
17．吻高（na-）		39.7	36.8	40.2	39.5	46	43.4	36	37.6	41	35.5	38
18．鼻骨凹陥深		4.5	3.9	5.6	4.4	6.3	4.8	5.3	4.6	4	3.7	5.2
19．硬口蓋長（pr-sta）		81.5	77.2	82.5	79.6	93	87.2	79.9	79	86.2		82.8
20．硬口蓋最大幅	64.2±	57.3	55.2	58.6	54.6	68.4	62	51.7	58.6	60.2	56.6	60

	太宰府	太宰府	太宰府	太宰府	縄文平均	亀井No.1	亀井No.2	香深井		草戸千軒		三の丸	西新橋
	下層1 (L)	下層2 (R)	下層3 (L)	下層4 (R)	♂	♂	♀	♂平均	♀平均	♂平均	平均	♂ (江戸)	♂ (江戸)
下顎骨													
1．下顎骨全長（id-goc）	128.9				123.5	128.4	123.2	136.5	128.5	124.4	126.6	133.5	128.8
2．下顎骨全長（id-c.mid）	128.3				123.1	128.1	121.8	135.3	126.5	123.6	126.2	132.5	127.6
3．下顎枝高（gov-kr）					48.8	51.6	49.8	59.3	55.4	51.5	51.3	53.6	52
4．下顎枝幅（最小値）	34			32.9±	31.3	35.4	32.1	36.9	32.2	31.6	31.9	33.3	33.3
5．下顎体高（M1中央）	27	21			23.6	23.3	22.5	27.2	24	24	24.3	24.9	23.6
6．下顎体厚（M1）	14	12.2	13.1-		11	12.4	11	12.7	11.3	11.1	10.9	11.3	10.7
7．咬筋窩深	10.3			10.0±	7.9			9.4	7	8.4	7.2	8.5	7.2

VI. 総　　括

今回の報告は大宰府政庁から南へ直線的に延びる南北道路と、それに沿う地点の発掘調査成果を集成した。南北道路の成果はもとより、やや広めに調査できた地点では井戸や土坑などが、ある一定の場所に穿たれることでその宅地内における土地利用の実態を垣間みせている。また遺物では筑後、豊前など近隣諸国からの搬入品をはじめ、近畿、東海産の資料も見受けられる。特に緑釉陶器では防長・京都・近江・東海など現在知られているほとんどの産地の資料が存在する。輸入陶磁器が目立つ大宰府であるが、こうした国産陶器の搬入も見逃せない状況である。さらに条坊内における墳墓の存在形態も今後注目してゆかねばならない。こうしたことを踏まえて本来なら、宅地内の状況や個々の遺構・遺物の検討など多義にわたって総括しなければならないが、限られた時間と筆者の乏しい力量の関係からここでは南北大路についての考察を行うことで、この報告書の総括としたい。なお、前稿[1]と比較して所見に変更のない部分もあり、一部前項を再録したような部分もあることをお断りしておく。また前稿と数値の上で異同のあるものは計測地点の差によって生じた結果であるが、新資料の発見までは本稿の数値が優先される。

(1)　大宰府朱雀大路の名称

朱雀は四神のうち南に相当することから、都ではその中央を南北に貫通する道路を朱雀大路と称していたようである。その用語は『日本書紀』和銅三（710）年正月壬子朔条に「天皇御大極殿受朝。（中略）於皇城門外朱雀路東西、分頭陳列騎兵。（以下略）」にみられるように早くから史書に登場し、新益京以来少なくとも都では呼称されていたと考えられている。都の朱雀大路については平安京のものが『延喜式』左右京職によって最も詳しく知られている。それによると「朱雀路廣廿八／自垣半至溝邊各一丈八尺垣基三尺。犬行一丈五尺。／溝廣各五尺／両溝間廿三丈四尺」（／は改行）とありその規模が窺え、「守朱雀樹四人」「凡道路邊樹。當司當家栽之」から道路の縁に樹木が植えられており、朱雀大路の場合には四人の守朱雀樹が配置されていたことが分かる。また「凡宮城邊朱雀路溝。皆令雇夫掃除」から常に管理されていたことも窺える。

さて、近年の官衙遺跡の調査では都以外でもこの朱雀大路に相当する道路の存在が指摘されつつある。それは多賀城[2]、下野国府[3]、周防国府[4]などである。しかし大宰府を含めてこれを都と同様に朱雀路ないしは朱雀大路と呼称していた確証は得られていない。ただ周防国府では現在の史跡指定地を南北に貫通する道路付近に朱雀（地元では「しらか」と読む）の字名が残存しており、周防国府の正面道路を朱雀路と呼称していた可能性が窺われる。また奈良東大寺の前身寺院である金鍾寺から南へ延びる道路を普通名詞的に朱雀路と呼称していたようであり[5]、古代の主要施設から南へのびる道路を朱雀路と呼称していた可能性は強い。

大宰府の場合、文献や字名にまったくその痕跡を留めるものではない（現在朱雀と呼称する行政区が存在するが平成７年11月20日に施行された町名変更によるものであり、歴史的な検討を加えた上で名付けられたわけではない）が、その性格上都城と国府の中間的な位置に置かれることが多く、これまでいくつかの論文で無批判に使用されていたところがある。これについて言及することはしないが、ここでは以下に示す点でこの大宰府の南北道路を朱雀大路と呼称させていただくこととした。

それは、１）大宰府の街区に都と同等の法的規制が及んでいた可能性が考えられる点、２）大宰府は国府とは異なり、中央政府の一部分としての機能を有していた存在であったという２点である。

１）については、先に奈良時代から平安時代にかけての大宰府周辺での墳墓資料の在り方を検討する際に得られた成果[6]で、特に奈良時代については平城京周辺での在り方に近似し、それは「喪葬令」の規定の範囲内に収まるものと考えられるに至った点である。大宰府の場合も都市内に墳墓は侵入せず、その周囲にある丘陵部に墳墓が展開しており、いわば公葬地的な在り方を示していると言える。多賀城や他の国府における奈良時代の墳墓の在り方は未だ明確ではないが、現状では中央以外でこのような在り方を示すのは大宰府だけであり、その特異性が窺えるとともに大宰府都市はきわめて京的な様相を呈していたことが窺える。

２）については近年公にされた春名宏昭の論[7]が参考になる。詳細は省くが、氏によると八省は国家機構の中心で諸国は八省に対して上申文書である解を提出した。その上で西海道諸国から解を提出された大宰府は九番目の省であると説く。そして「大宰府が外交・軍事権を握る一方、西海道諸国の上に小中央政府として君臨する体制」が採られたことを鎮西府の設置を通じて論じている。これほどの権限を有する地方官衙は他になく、大宰府はまさしく政府直営の機関であったことを物語っていよう。

こうした視点で大宰府の施設をみると、脇殿が四堂で構成される朝堂院式の配置に対して平城宮中央区との関係を指摘する意見[8]があり、中央とのつながりを彷彿とさせるものであるが、近年の平城宮内の調査成果をみると、８世紀後半まで下る例ながら四堂構成の脇殿は兵部省や式部省の配置にも採用されており[9]、詳細な検討を必要とするものの省における建物配置の一つのスタイルであった可能性もある。このように考えると先の春名の論と合わせて、大宰府が「省」を意識した構造を呈していると言えるのではないだろうか。

さらに大宰府の街区が、計画的な地割りに基づいて建設されている点などを加えて、都をイメージさせる環境は整いつつあると言える。

また後述するように大宰府の朱雀大路は大尺で10丈（小尺で12丈）を測ることから、延喜式にある平安京内の大路（東極大路10丈、南極大路12丈をはじめ８～17丈）に匹敵しており、この点からも大路の用語を付加して使用したい。

これらの点で大宰府は他の地方官衙に比べるときわめて都的な様相が強く、天皇の居所及び

政務する部分はないものの、ここでは敢えて朱雀大路の名称を使用することとした。

(2) 大宰府朱雀大路の年代

a) 東側溝

64SD140、142SD001がそれにあたるが、出土した遺物は少ない。64SD140では概ね8世紀後半頃には埋没していたようである。ただし上面が大きく削平されていることが予想され、溝下層に堆積した資料だけで判断することになるためやや消極的と言わざるを得ない。ただ64SD140の東側溝に隣接して64SD150があり、これが東側溝の掘り直しであると理解すると、遅くとも9世紀前半から中頃までには埋没していたことがわかる。また142SD001では8世紀中頃から埋没が始まり、9世紀第II四半期頃には完全に埋没していたと考えられる。両者を併せ考えても9世紀前半から中頃には創建期の溝は埋没してしまったようである。

遺構構築時期についてはこれより古い遺構との切り合いはなく、142SD001で出土した遺物の一部が8世紀中頃まで遡り得るというだけで、これをもって構築時期とするのは危険であろう。

b) 西側溝

133SD010が市内では唯一の検出例となる(10)。埋土上位からの新遺構の切り込みが多く若干の新期遺物の混入を認めざるを得ないが、概ね8世紀後半には埋没していたようである。ここでもこれに切られる遺構はなく上限を推定するのは難しい。

隣接する筑紫野市で行われた第107次調査（以下条107次とし、他の地点も同様に略す）では南北溝に先行して方位の異なる溝遺構が数条検出され、一部に切り合いがある(11)。この遺構の年代が押さえられれば、上限の一端をつかむことが可能になる。

以上、直接的な遺構からは上限のデータは得られないものの、下限で8世紀後半から9世紀中頃という所見が得られた。ただ朱雀大路がこの平野の中で単独で成立するものではないため、もう少し広い範囲の遺構の成立年代と絡めることにより、構築時期は絞られてくるであろう。

それは大宰府成立時期の問題である。大宰府と一口に言ってもいろいろな捉え方があるが、現在の地に大宰府が置かれたのは遡っても大野城、水城が史書に登場する7世紀中頃（天智朝）である。しかし遺跡の状況を見る限りこの段階では未だ政庁地区は建設されておらず、建設の準備段階と思える整地造成事業は689年前後に完成した可能性が強い。この整地造成事業は政庁近辺だけではなく、大宰府条坊跡として現在我々が調査している範囲にまで及んでおり、先の第107次調査における西側溝に先行する溝もこの一連の造成工事で埋め立てられた可能性が考えられる(12)。したがってこれ以後に街区の形成が行われたものとみられる。

大宰府は官衙部分を含めて推定条坊域内も同時に街区が計画されたものと思われるが、その設計の時期は決定しがたい。遺構から見る限り、例えば政庁前面官衙の区画溝であるSD2340では、出土遺物から8世紀第I四半期頃（その初め頃には遡らないとする）に開削されたことが考えられている。その他若干の報告例はあるが、これ以上に詳細な開削時期を窺える資料はな

い。

また政庁地区の成立時期、特に礎石建ちで朝堂院的な配置に変更されたいわゆる第II期政庁の成立時期が参考となる。詳細は省くがこれまでに発表されたいくつかの所見[13]では概ね8世紀第I四半期の範囲内に納まるものと考えられ、和銅から養老前半までぐらいが妥当な線ではないかと考えられている。したがって政庁建設とおそらくは並行して建設されたとすれば、朱雀大路も概ねこの時期頃に成立していたものと考えられるのではなかろうか。

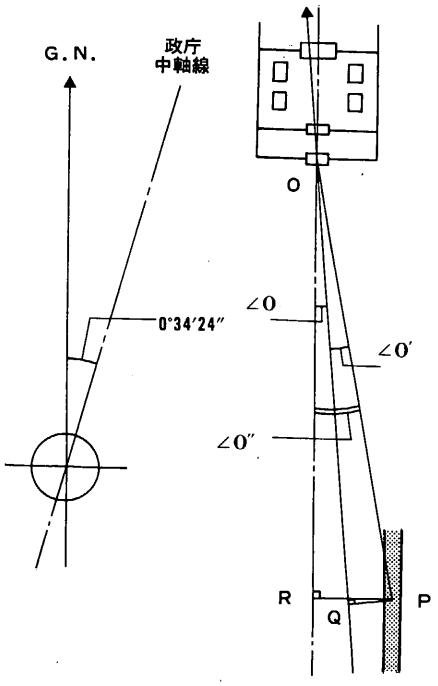
直接的な資料は乏しいが、上記のような様相から大宰府朱雀大路の建設は8世紀第I四半期の範囲内に求めておきたい。また掘り直しと見られる溝の存在から、創建段階の大路側溝は9世紀前半から中頃には埋没していたとみられるが、これによって道としての機能自体が失われたことにはならない。

(3) 大宰府朱雀大路の規模

大路の規模を検討する前に、本書に掲載のない朱雀大路側溝の検出例を抽出しその概要を記しておきたい。なお政庁中軸線からの距離はFig.274に記載した方法で行ったが、実際はこの数式をパーソナルコンピュータを用いて計算した[14]。

a）大宰府条坊跡第107次調査[15]……西側溝

平成2年度に筑紫野市教育委員会が調査を実施したもので、調査区東寄りに南北溝1条が検出されている。溝の幅は0.8～1.1mで、溝の任意中点と政庁中軸線との距離は15.972～16.217m



中軸線から溝任意点までの距離計算（単位はm）

点O＝政庁南門中心点（X56708.68　Y－44820.73）
点P＝溝任意点
点Q＝点Oを通過するG.N.ラインに点Pを平行移動させた点
点R＝中軸線に点Pを平行移動させた点
∠O＝中軸線の振れ（0°34′24″）
※中軸線と溝任意点との距離は、PRを求めることによって理解できる。

計算式
1）点O－点P＝OQ、PQ
2）$\frac{QP}{OQ}\tan^{-1}=\angle O'$
3）$\sqrt{QP^2+OQ^2}=OP$
4）$\angle O+\angle O'=\angle O''$
5）$OP\times\cos\angle O''=OR$
6）$OP\times\sin\angle O''=PR$

※実際の計算にあたってはこれに方向角を考慮した上で行う。

Fig.274　政庁中軸線からの距離計算方法

(平均値16.095m) を測る。詳細は未報告であるが、概ね奈良時代に埋没したものと考えられる。現在は店舗の敷地内に保存されている。

b) 大宰府条坊跡第129次調査[16]……西側溝及び路面中央部分

平成4年度に筑紫野市教育委員会が調査を実施したもので、ちょうど政庁中軸線が敷地内を通過する。調査区内には南北方向の溝ないしは長楕円形土坑が並行して存在し、最も西端で検出されたもの(SD-01)は溝中心で中軸線から西へ14.486mの位置にある。8世紀後半頃の東西小溝 (M-1-D) を切っており、平安期にさしかかるころの遺構と考えられる。また東端で検出されたもの (SD-09) は幅約5.5mを測る大きなもので、中世まで下るものである。この両溝の間には南北方向の長楕円形土坑が複数検出され、いずれも平安時代後期のものと考えられる。これらの在り方は政庁第III期に属する大宰府条坊痕跡に近似した在り方を呈しており、関連性が指摘できる。

なおSD-09の存在は、朱雀大路の廃絶とその後の土地利用を考える上で重要な遺構と考えている。

c) 大宰府条坊跡第133次調査[17]……西側溝

平成4年度に本市が行ったものですでに報告書は公刊されている。南北方向の溝2条が確認され、133SD010は現存幅約1.2mを測り、遅くとも9世紀前半～中頃に埋没したとみられるもので、政庁中軸線からの距離は西へ17.637～17.846m (平均値17.742m) を測る。またそれに並行する133SD015は現存幅0.6～0.8mを測り11世紀後半～12世紀前半に埋没したもので、政庁中軸線からの距離は西へ13.14～13.28m (平均値13.21m) を測る。

d) 大宰府条坊跡第150次調査[18]……西側溝

平成6年度に筑紫野市教育委員会が調査を実施したもので、先の第107次調査の南隣接地である。所見はきわめて類似するが、奈良時代の溝 (幅0.8～1.0m) の東側に複数の後出する溝が確認され、第129次のような状況を窺わせるものである。この奈良時代の溝は検出範囲でわずかに西に振っており、政庁中軸線からの距離は15.479～16.070m (平均値15.775m) である。

なお奈良時代の溝に切られる遺構が複数存在しており、溝の上限を示す資料となる可能性があり報告が待たれるところである。

e) 大宰府条坊跡第168・179・181次調査[19]……東側溝

第168次調査は平成7年度に本市が行ったもので、本書に報告した第64次調査の南約30mの地点にあたる。検出された南北溝168SD001は溝底近くの幅約1mを測り、遅くとも9世紀前半頃には埋没したものと考えられている。政庁中軸線からの距離は東へ18.992mである。

第179・181次調査は平成8年度に本市が行ったもので両者は隣り合っている。現状で検出されている東側溝の内最も政庁寄りで検出されている例である。179SD010は現存幅約0.7mで平安時代後期に埋没したと考えられている。政庁中軸線からの距離は東にわずか1.8mしかない。この東側で検出された181SD310・315は2条が並行して検出されたが181SD315は北端が閉じてい

Tab.16　奈良時代側溝の計測値一覧表

調査地点名称	計測位置	任意中点 X座標	任意中点 Y座標	政庁南門中点からの 南北距離	政庁中軸線からの 東西距離
第64次調査 (64SD140)	検出北端西肩	55,935.60	-44,809.15	S 772.925	E 19.315
	検出北端中心	55,935.60	-44,808.58	S 772.920	E 19.885
	検出北端東肩	55,935.60	-44,808.03	S 772.914	E 20.435
	検出南端西肩	55,913.80	-44,809.80	S 794.731	E 18.883
	検出南端中心	55,913.80	-44,809.05	S 794.723	E 19.633
	検出南端東肩	55,913.80	-44,808.30	S 794.716	E 20.383
第107次調査 (南北溝)	検出北端西肩	55,248.00	-44,851.85	S 1460.918	W 16.502
	検出北端中心	55,248.00	-44,851.32	S 1460.913	W 15.972
	検出北端東肩	55,248.00	-44,850.79	S 1460.908	W 15.442
	検出南端西肩	55,224.50	-44,852.21	S 1484.421	W 16.627
	検出南端中心	55,224.50	-44,851.80	S 1484.416	W 16.217
	検出南端東肩	55,224.50	-44,851.39	S 1484.412	W 15.807
第133次調査 (133SD010)	検出北端西肩	55,788.00	-44,848.40	S 920.911	W 18.456
	検出北端中心	55,788.00	-44,847.79	S 920.905	W 17.846
	検出北端東肩	55,788.00	-44,847.21	S 920.899	W 17.266
	検出南端西肩	55,784.10	-44,848.22	S 924.809	W 18.237
	検出南端中心	55,784.10	-44,847.62	S 924.803	W 17.637
	検出南端東肩	55,784.10	-44,847.08	S 924.797	W 17.097
第142次調査 (142SD001)	検出中央西肩	56,023.29	-44,808.60	S 685.234	E 18.988
	検出中央中心	(56,022.93)	(-44,807.31)	(S 685.581)	(E 20.281)
	検出中央東肩	—	—	—	—
条150次 (南北溝 SD10)	検出北端西肩	55,210.77	-44,852.38	S 1498.152	W 16.660
	検出北端中心	55,210.77	-44,851.79	S 1498.146	W 16.070
	検出北端東肩	55,210.77	-44,851.25	S 1498.140	W 15.530
	検出南端西肩	55,199.72	-44,851.72	S 1509.194	W 15.889
	検出南端中心	55,199.72	-44,851.31	S 1509.190	W 15.479
	検出南端東肩	55,199.72	-44,850.90	S 1509.186	W 15.069
第168次調査 (168SD001)	検出中央西肩	55,880.00	-44,810.61	S 828.537	E 18.411
	検出中央中心	55,880.00	-44,810.03	S 828.531	E 18.992
	検出中央東肩	55,880.00	-44,809.50	S 828.526	E 19.522
第181次調査 (181SD310)	検出北端西肩	56,111.05	-44,809.02	S 597.483	E 17.690
	検出北端中心	56,111.05	-44,807.98	S 597.472	E 18.729
	検出北端東肩	56,111.05	-44,806.95	S 597.462	E 19.759
	検出南端西肩	56,106.90	-44,809.12	S 601.634	E 17.631
	検出南端中心	56,106.90	-44,808.21	S 601.624	E 18.541
	検出南端東肩	56,106.90	-44,807.30	S 601.615	E 19.451
第181次調査 (181SD315)	検出南端西肩	56,106.90	-44,807.19	S 601.614	E 19.561
	検出南端中心	56,106.90	-44,806.42	S 601.607	E 20.331
	検出南端東肩	56,106.90	-44,805.65	S 601.599	E 21.101
政庁南門中点		56,708.68	-44,820.73	0	0
朱雀門礎出土地点		56,460.80	-44,827.81	S 247.938	W 4.601

( ) は中点ではない／単位はすべてm
座標値は国土調査法第II座標系
中軸線の振れは N-0°34′24″-E

る。貫通する181SD310の現存幅は約2.1mであるが、検出地盤が砂層で崩壊しやすいことから当初の溝幅はこれよりも狭かったものと推察される。なおこの溝は政庁中軸線から東へ18.541～18.729m（平均値18.635m）を測る。隣接する181SD315は検出段階での所見では181SD310を切っていたようであり、創建期の東側溝は181SD310であったと見なしておきたい。

以上、本書の報告と合わせると東側溝で6箇所、西側溝で4箇所の調査が行われたことになる。これらの遺構のデータのうち創建期に関わる溝の計測点を表にしたのがTab.16である。

これらを見てまず気付くことは、政庁中軸線が必ずしも朱雀大路中軸線とはなっていないということである。それは東側溝のデータでは北に上るほどその距離が詰まり、西側溝のデータでは南に至るほどその距離が詰まることから窺えるわけである。単純に見ても朱雀大路中軸線は、政庁中軸線よりわずかに西に傾いていることを示唆しているものと思われる。

そこで検出した資料から現状で推定できる振れを算出してみると、西側溝ではその最長距離である133SD010北端中央と150SD010南端中央のデータからN-0°20′34″-Eとなり、東側溝では181SD310北端中央と168SD001南端中央のデータからN-0°30′30″-Eという数値が導き出される。いずれも政庁中軸線の振れよりも小さいが、両者の差は約10′もあり、いずれも確定的な振れとは言い難い。また西側溝と東側溝の最も離れた地点どうしのデータ（181次と150次）から両者の距離が平均されるように計算すると、その振れはN-0°29′05″-Eとなり、それぞれ東へ17.806m、西へ17.810mという数値が得られる。ただしこの計算の起点は政庁南門中点にあることから、本来の数値はわずかに大きくなる可能性が強い。

またTab.16に示した政庁中軸線からの距離を平均してみると17.994mとなり、先の計算結果に近づくがこれも政庁南門中点が起点であり、類例が増加すると先の計算結果に近似する方向に進むだけであり、真の朱雀大路の規模を語るものとは言えないであろう。

現状では側溝自体の振れを考慮して、そこから導き出される数値が最も当時の朱雀大路の規模に近しいものと判断すべきであろう。そこでその立場に立って計算し直すと、より長い距離を検出している西側溝の振れを仮の基準とすると、先述のとおりその振れはN-0°20′34″-Eであり、133SD010北端中央を基準点として各東側溝の中点を計算すると、37.875m（181SD310北）、38.326m（64SD140北）、37.209m（168SD001）となる。いずれも133SD010より北に位置するがデータに若干の出入りがあり、少なくとも東側溝は真の直線でないことを示している。ただし最大でも1m程度であり、視覚的には直線であったと見なされる。単純にこの3者を平均すると37.803mとなる。また同様な方法で東側溝の振れ(N-0°30′30″-E)を基準とし、64SD140北端中央の点を基準点とした場合のデータは、37.899m（133SD010北）36.909m（107次南）36.201m（150次SD10）のようになる。同様にこれを平均すると37.003mとなる。東側溝を基準にすると真の振れに対して数値が大きすぎるためか南進するごとに徐々にデータが小さくなっていることがわかる。したがって本報告書では西側溝からみた数値の平均値を朱雀大路の側溝心心間距離として以下検討を進めたい。

さて、溝心心距離を37.803mと仮定し、路面幅を推定してみたい。各側溝の検出状況はいずれも削平を受けているものとみなされるが、133SD010では溝壁上位では直立に近く途中に段差がないとすると、これよりもやや広めの側溝幅が想定できよう。また検出資料中で最大の数値を示す181SD310は、地盤が軟弱で当初のものより広がっている可能性が考えられる。この両者の状況を踏まえて、本稿では側溝の幅を約2mと見なしておきたい。このことから路面幅は側溝幅の半分の数値の2倍を溝心心間距離から差し引き、約35.8m前後であったものと見なしておきたい。この数値は大尺（1尺≒0.3564m）の100尺（10丈）、小尺（1尺≒0.297m）の120尺（12丈）ということになる。若干の誤差が含まれていることを認識しつつも、この完数は見逃せない数値であり、ここでは大宰府朱雀大路の路面幅は大尺100尺（小尺120尺）で計画されたものと認めておきたい。

(4) 大宰府朱雀大路の意義

最初に都城などで検出されている朱雀大路との比較を行なうことにより、大宰府朱雀大路の位置を確認する作業から始めたい。これまでの調査や史料から具体的な規模が知られている朱雀大路（南北大路）は、新益京（藤原京）、平城京、長岡京、平安京の各都城と多賀城、下野国府、周防国府といった地方官衙である（Fig.275）。

まず新益京（藤原京）では、路面幅17.7m（50大尺…0.354m／尺）の朱雀大路が検出されており、側溝の幅は約7mで、側溝心々間は24.78m（70大尺）となる。なお、中軸線上にのる宮内の先行条坊の規模は、路面幅約14.16m（40大尺）、溝心々間が15.93m（45大尺）に復原されている[20]。

平城京は、側溝の心々間が71.06m（200大尺…0.35532m／尺）となり、道の両側に設けられた築垣の心々距離が88.8m（250大尺）になると考えられている[21]。

長岡京では、側溝心々距離が令小尺で180尺（約53.3m）、築垣心々距離が同じく240尺（約71m）を測るものに復原されている（小尺＝0.296m）。また西側溝の所見では溝幅は1.7～1.9m、深さ約0.8mである[22]。

平安京は、『延喜式』によると路面幅23丈4尺（234尺、令小尺で約70m）、側溝の幅5尺、犬行幅15尺、築垣の幅6尺となっている。このことから築垣心々距離は、280尺であったことが窺える。近年の発掘調査による測量成果でもこの数値をほぼ裏付ける結果となっている（小尺＝0.29845m）[23]。

以上の都に対して地方官衙遺跡では、多賀城跡前面で検出された南北大路が知られている。発掘調査の成果では、時期によって若干の違いはあるが側溝心々間が19.1～23.1mであることが知られ、最古段階の路面は約17mであったようである。この数値は多賀城内（南門以北）の南北路の数値に近似しているという。建設の時期は、城内の道路が多賀城創建段階（8世紀前半～中頃）まで遡ると考えられていることから、ほぼそれと同時に建設された可能性が推定さ

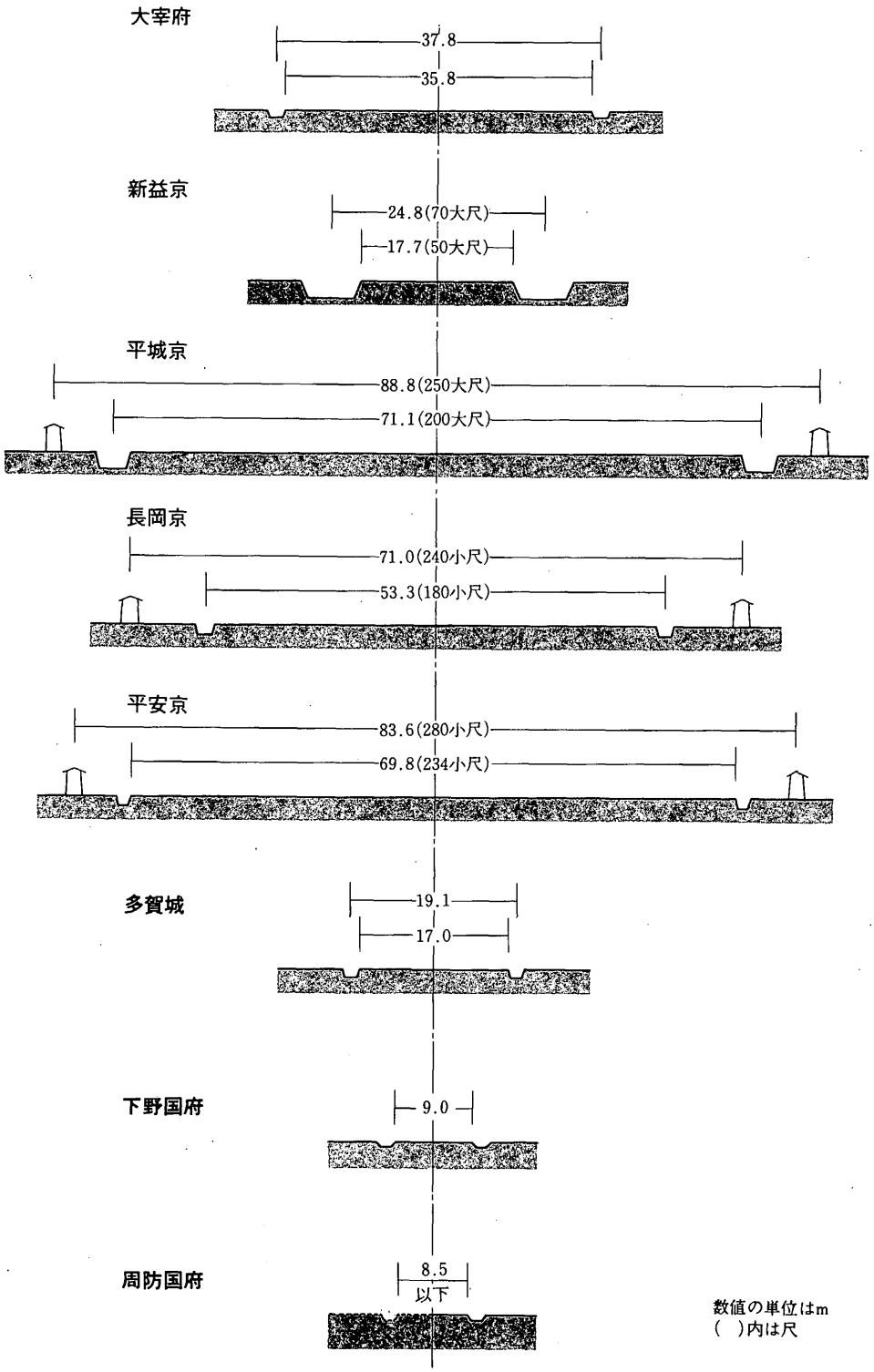


Fig.275　各地の朱雀大路

れている[24]。

下野国府では政庁II期（8世紀後半～9世紀前半）並行期の可能性がある南大路（SF-004）が検出されている。側溝の幅は1.8～2.0mで、路面と考えられる部分の幅は約9mを測る。なお下野国府跡ではこの南大路に交差する東西溝が2条検出され、それぞれ1町の間隔で計画的に配置されていることが知られている[25]。ただし条坊制的方格地割りが存在したことには否定的な見解がある[26]。

周防国府では推定される道路痕跡の東側に接して朱雀の字名が残存しているが、これに加えて発掘調査でも関連遺構が検出されている。調査結果によれば東側溝の埋没は8世紀末から9世紀前半とみられ、西側溝は東側溝よりも規模の大きな中世の溝が存在し、当初の形状は明らかではないようである。ただ連綿と掘り直しが行われたことを想定すると、中世の溝が過去の西側溝を踏襲しているものと考えることができよう。このことから現状では道路幅は8.5m以下と推定されている[27]。

これらデータを見ると、大宰府の朱雀大路は新益京よりもかなり大規模なものであることが分かるとともに、地方官衙の中では多賀城や他の国府に比べるとずば抜けて広かったことが窺われる。

ではこの広さはいったい何を物語るのであろうか。それを示唆するものに平城京の朱雀大路や羅城門の使われ方がある。今泉隆雄によれば、都城の威容を誇示するための設定との指摘があるが、それは特に外国施設（唐使、新羅使など）を意識したものであるとする[28]。新益京から次の平城京で約3倍の規模に膨れ上がっていることや、平城宮の朝堂院を朱雀大路正面から外し、かわって中央区とよばれる迎接の施設を設定している[29]ことがそれを如実に物語っているのであろう。

大宰府の役割は、他の国府などとは異なったものとして「職員令」に記載される「蕃客」「帰化」「饗讌」といった内容が注目されるところである。つまり諸外国との緊張関係が緩和された後は、対外交渉の窓口としての役割がクローズアップされたことが窺われるのである。大宰府政庁の建物配置が、平安京の豊楽院や平城宮中央区（第一次朝堂院）のそれに近似することからその役割を意識した配置であるという指摘[30]や、『続日本紀』にも使節団が大宰府に訪れていることの記載がある[31]こと、さらに大宰府の立地そのものも平野部の北に位置すると共に政庁が地形的に高位置に配置される[32]という視覚にうったえるような景観整備であったことなどを含めて考えると、大宰府の朱雀大路の広さはまさに平城京で今泉が指摘したことと同じ意味をもっていたものと考えられる[33]。これらのことは同時期に東国の中枢として建設された多賀城との比較で、なお明らかであると言える。

ただ都の大路と大きく異なる部分も指摘しておかねばならない。それは大路に沿う坊城垣の有無である。これまでの調査で側溝を検出できたすべての地点で、側溝に並行する築地あるいは柵列といった施設がまったく確認できておらず、検出された側溝の埋土も隣接して築地が存

在したことを窺わせるものではない。遺構配置をみると側溝からある程度の距離をおいて建物が見出され、側溝と建物との間に一定程度の空間は想定できるが、そこに遮蔽を行える施設の存在は確認できない。

しかし一定程度の空閑地の存在は、そこに垣を作る予定であったとも考えられる。条64次では東側溝東肩と掘立柱建物64SB010との間には約24ｍの空間があり、その間には奈良時代の主要遺構は認められない。さらに小規模遺構を含めて検討しても、東側溝東肩から約７ｍの範囲は空閑地として捉えられる。条93次では東側溝は氾濫で失われているものの、推定される東側溝と掘立柱建物93SB310との間には約13ｍの空間があり、それを切る土坑群の西端からでも約10ｍの空間がある。西側溝では条107次で検出された西側溝と掘立柱建物（やや時期が下る）の間に約13ｍの空間が存在する。どれを見ても築地建設には十分すぎる広さがある。

大宰府自体に平城京や平安京のような特別区の必要性はなかったであろうが、都城風の景観保持のためには築地の存在は欠かせないものであろう。坊城垣風のものが存在したかどうかは今後の課題として残るものであり、削平を受けている部分も多い大宰府都市の場合、現状でその存在を否定するのは早急すぎるのではなかろうか。ここでは即断を避け、今後の事例増加を待って結論を導き出したい。

(5) 大宰府朱雀大路の衰退

遺構の上から検討するためには、路面と推定される部分における遺構の出現状況と後出する南北溝の開削及び埋没の時期を検討することによって大宰府朱雀大路の終焉を知ることができるものと考える。そこでまず、後出する溝の在り方を見てみることとする。

まず条64次の成果でみると、９～10世紀の溝が創建期の東側溝の西側に接して穿たれているという成果を得ている。これらの語るところは時期が下るとともに道幅を狭めていった可能性があるということである。隣接する条91次にはさらに下った11世紀後半頃に埋没した溝があり、これを当時の東側溝と仮定するとその縮小度には著しいものがある。西側溝では条129次で検出された南北溝があるが、その位置関係から当初のものではないようでありやはり規模を縮小していることが窺える。

しかしすべての地点で同様な成果を得ているわけではなく、後述する11世紀後半段階の溝との間に穿たれたものは全体を計画的に再開削したものではなく、部分的に必要に応じて穿たれたものと言える。ここでも道路及びその側溝の管理が疎かになっていたことが窺え、その時期は９世紀の早い段階にまで遡ることが指摘できよう。

縮小され続けた最終段階と思われる側溝の存在は、11世紀後半から12世紀前半に埋没したものが該当する。この溝は条133次ではしっかりとした直線状を成しているが、条129次では複数の土坑列状を呈している。条91次では調査区が狭いため判断は難しいが、蛇行するものを含めて条129次と同様の在り方ということができよう。

こうした区画方法は平安時代後期（第Ⅲ期政庁並行期）における大宰府条坊の区画の在り方と一致しており、朱雀大路を含めて大宰府におけるこの時期の区画の在り方とすることができる。その中で朱雀大路の規模は建設当初に比べると著しく小さくなっていることが指摘できる。

その道路幅は最新の情報では幅15.01ｍ程度であり(34)、当初の35.8ｍに比べると半分以下になっている。これは先に指摘した朱雀大路としての本来の機能が失われたのに加えて、平安時代後期の条坊が面積を主体として区画され直したことが指摘できよう。当初の区画では大宰府の左右郭一坊目は他の坊に比べると道路心心では近似した数値が得られるものの、朱雀大路の幅が広い分だけ面積は狭くなっている。したがって各区画で面積を等しくしようとした場合、道路の縮小は避けられないところであり、本義的な機能を失った朱雀大路が縮小されてゆく大きな要因と考えられる。

さて、縮小された朱雀大路も側溝を観察する限り11世紀後半から12世紀前半には埋没してしまう。もちろん側溝が埋没したからと言って道自体の機能が消滅したとは断言できない。そこで次に路面推定部分における遺構の存在状況を見てみることとする。

条64次では８・９世紀の側溝を切って11世紀後半の建物や井戸、13世紀の墳墓が存在するが、いずれもその当時の路面には該当せず、すでに宅地内もしくは道路以外の空閑地に存在していると判断される。ただ南北に並行する溝群の検出面は西に低くなり、その上に被る包含層（茶褐色土層・淡茶色土層）が西で厚くなる傾向があり注意される。同様な傾向は条91次と条168次でも観察されている。この包含層から出土する土器は下って11世紀後半から12世紀前半であり、下位の遺構の影響を強く受けている可能性もあって時期的な部分では参考程度に留めておくのが妥当であろう。

条133次では創建期西側溝から路面側で数基の井戸を検出し、うち２期が９世紀中頃から後半に埋没したようである。それらは側溝から約５ｍ東側に位置することから、部分的に路面へ生活関連遺構が進出していることが窺われ、この段階で明らかに当初の路面の管理は行われていないことが理解できる。また最終段階と考えている11世紀後半の側溝埋没と同時期に埋没した井戸が推定路面上のきわめて中軸線に近い位置から検出されている。なお12世紀前半の土坑にこの側溝も切られている。

このようにここだけの成果を捉えると、11世紀後半から12世紀前半までには道としての機能を失っていた可能性が濃厚である。しかしながら井戸のみが検出されただけで、道路の機能すべてが失われてしまったかどうかは即断できず、宅地内の井戸ではなく共同の井戸であった場合は道路内に存在していても構わないのではなかろうか。ただ同じ路面上での遺構の展開は条142次でも観察されており、やはり10･11世紀の遺構の進出は著しいものがある。

さて、ここで注目する必要があるのは条121次の成果である。ここでは路面部分が氾濫状の遺構で破壊されていることが明らかとなり、その時期は概ね13世紀後半から14世紀前半と考えられる。側溝の埋没からこの時期までには最大２世紀の開きがあるが、この間に道としての機能

が失われた可能性が強い。また条59・76・93次の成果でも中世の御笠川の氾濫が大きく南側に抉り込み、現在の「どんかん道」(Fig.276のA-B-C-D)に接するあたりまで朱雀大路は消滅している。川中から礎石が発見されたことも同様に氾濫による破壊の結果とみられる。

ただ現在も朱雀大路の痕跡を留めている部分が随所にあることは、こうした破壊が部分的であったことを思わせる。しかしこの部分的な破壊は道路にとっては壊滅的な状況であったらしく、現在の土地利用の状況を観察してみると、ちょうど条121次地点付近を境に痕跡の留め方が異なっていることに気付く。条121次以北では現在もわずかに蛇行する道路として残存(Fig.276のB-C)しているものの、条121次以南(西日本鉄道の線路以南)では推定される路面の上にちょうど宅地が並び、中央には水路があるとともに側溝推定位置付近が道路となっている(Fig.276のイ-ロ-ハ-ニ、CD-064059)。おそらく中世以降(条91次等の包含層を廃絶の時期に当てるとさらに遡る)に条121次付近で分断された大路が北側では「どんかん道」として生き残っていたものの、南側では一定の幅を保った単なる空閑地となってしまい、後世に水田と化し現代に至り宅地が侵入したことによる痕跡と理解できる。そして榎社まで南下した道路はそれ以南が使えなくなったことから、その段階で利用可能であった右郭一坊路(Fig.276のE-F)へ路線変更となり、鷺田川を越えても元の朱雀大路に再び合流することはなかったようである。以来右郭一坊路は榎社以南から現在の二日市近くまで生き残ることとなったのではなかろうか。

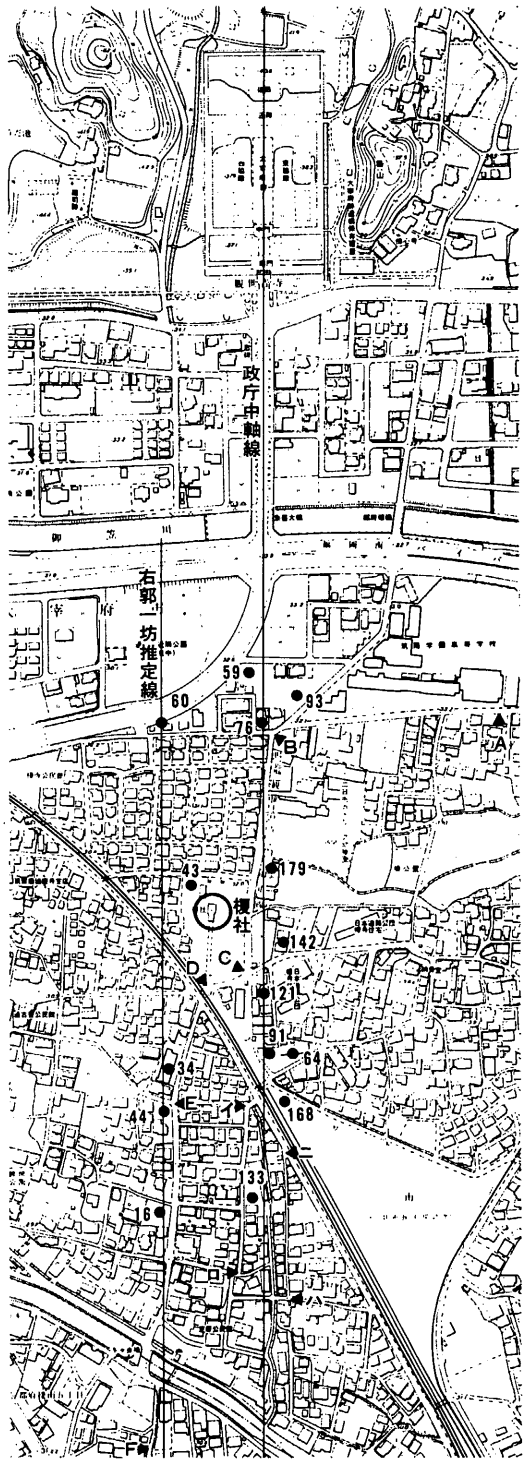


Fig.276　大路の現状と調査地点

このように朱雀大路の廃絶は、朱雀大路としての機能的消滅は当初の側溝が埋没した9世紀前半～中頃に考えられるものの、道路としての機能は中世に分断されるまで続いていたと理解でき、部分的には現在もその命脈を保っていると言えよう。

（註）

(1) 狭川真一「大宰府の朱雀大路」『文化財学論集』1994年　文化財学論集刊行会

(2) 千葉孝弥「城外の道路と方格地割り」『第20回古代城柵官衙遺跡検討会資料』1994年　古代城柵官衙遺跡検討会

(3) 木村等ほか『下野国府跡Ⅴ』（栃木県埋蔵文化財調査報告第54集）1983年　栃木県教育委員会

(4) 大林達夫「周防国府の建物群とその景観」『国立歴史民俗博物館研究報告』第63集　1995年　国立歴史民俗博物館

(5) 『続日本紀』天平十六年十二月丙申条「度一百人。此夜於金鍾寺及朱雀路燃燈一万坏。」
細見啓三ほか『平城宮朱雀門の復原的研究』（奈良国立文化財研究所学報第53冊）1994年　奈良国立文化財研究所

(6) 狭川真一「古代大宰府都市の検討－墳墓からのアプローチ－」『古文化談叢』23号　1991年　九州古文化研究会

(7) 春名宏昭「鎮西府について」『律令国家官制の研究』1997年　吉川弘文館

(8) A　鏡山猛『大宰府都城の研究』1968年　風間書房
B　阿部義平『官衙』（考古学ライブラリー50）1989年　ニュー・サイエンス社
C　山村信榮「大宰府の外交儀礼」『都府楼』17号 1994年　古都大宰府を守る会

(9) 『1990年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』1991年　奈良国立文化財研究所

(10) 井上信正『大宰府条坊跡Ⅷ』（太宰府市の文化財第29集）1995年　太宰府市教育委員会

(11) 筑紫野市教育委員会奥村俊久氏のご教示と資料提供による。

(12) 狭川真一「大宰府成立期の遺構と遺物」『古文化談叢』30号　1993年　九州古文化研究会

(13) A　横田賢次郎「大宰府政庁の変遷について」『大宰府古文化論叢』上巻　1983年　吉川弘文館
B　鎌田元一「平城遷都と慶雲三年格」『日本の前近代と北陸社会』1989年　思文閣出版
C　狭川真一「大宰府の造営」『古文化談叢』31号　1993年　九州古文化研究会
D　山村信榮「大宰府成立論」『牟田裕二君追悼論集』1994年　牟田裕二君追悼論集刊行会　など

(14) データを各ポイント毎にカードとして残したいと考えたことから、カード型データーベースソフト（Claris社のファイルメーカー Pro2.1v1）を利用した。またそれらを表として活用する際には MicroSoft 社のエクセルV5.0を利用した。なおいずれも Macintosh 対応版。

(15) 筑紫野市教育委員会奥村俊久氏のご教示と資料提供による。

(16) 筑紫野市教育委員会渡邊和子氏のご教示と資料提供による。

(17) 註(10)文献

(18) 筑紫野市教育委員会渡邊和子氏のご教示と資料提供による。

(19) 井上信正「大宰府条坊の区割りについて」『条里制研究』第13号　1998年　条里制研究会及び同氏のご教示による。

(20) 井上和人「古代都城制地割再考」『研究論集Ⅶ』（奈良国立文化財研究所学報第41冊）1985年　奈良国立文化財研究所

(21) 註(20)文献及び黒埼直ほか『平城京朱雀大路発掘調査』1974年　奈良市

(22) 山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第38巻第4号　1992年　考古学研究会　及び向日市埋蔵文化財セン

ター山中章氏のご教示による。

(23) 京都市埋蔵文化財研究所辻純一氏の御教示による。

(24) 註(2)文献および多賀城市埋蔵文化財センター千葉孝弥氏の御教示による。

(25) 註(3)文献

(26) 山中敏史「国府の実態」『古代地方官衙遺跡の研究』1994年　塙書房

(27) 註(4)文献及び註(26)文献、及び防府市教育委員会大林達夫氏のご教示による。

(28) 今泉隆雄「平城京の朱雀大路」『古代宮都の研究』1993年　吉川弘文館

(29) 今泉隆雄「平城宮大極殿朝堂再論」『古代宮都の研究』1993年　吉川弘文館

(30) 註(8)文献

(31) 田島公「日本、中国・朝鮮対外交流史年表」『貿易陶磁』1993年　奈良県立橿原考古学研究所附属博物館を参考にした。

(32) 現在の地形から読み込むかぎり平野部分は鷺田川以南で必ずしも北上がりではないが、政庁部分は高位置をしめている。

(33) P.366で指摘したような四堂構成が「省」としての機能を意味するとすれば、大宰府は政庁域を省的機能、それを取り巻く景観整備を迎接的要素を持つ京的機能とみることもでき、両機能の折衷によって構成、設計されたとも考えられる。現状では推測の域を出ないが、今後の検討課題としたい。

(34) 註(19)文献

大宰府条坊跡X

太宰府市の文化財第37集

平成10（1998）年３月

発行　太宰府市教育委員会
〒818-0101　太宰府市観世音寺一丁目１番１号

印刷　株式会社　昭和堂印刷
〒812-0004 福岡市博多区榎田2-2-52 徳重ビル

付表１．68SE020出土丸瓦観察表

図番号	遺構番号	地点	R-番号	叩き種類		a	b	c	d	e	f	g	b/a	b/c	e/d	e/f	叩き単位	叩き幅	叩き長さ	側面調整(右)	側面調整(左)	玉縁取付	水切	分割方向	布AB	布巻き方	布継ぎ目	布端部	抜き縄	広端調整	狭端調整	凹面広端調整	凹面狭端調整	備考
	68SE020	ウラゴメ	R-006	格子	03	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.2±	—	a0	a0	—		K2					有	未調整				側面：(切り離し失敗の痕跡より)幅1mmの切り込み痕残る。
51	68SE020	26-5	R-014	格子	03	—	4.8	—	14.6	11.2	12.2	—	—	—	76.71	91.80	6	4.4	20.0+	a0	a0	C1	無	K2			有		有		未調整			
	68SE020	28-7	R-015	格子	03	—	4.7	—	14.8	11.3	12.6	—	—	—	76.35	89.68	5	5.0±	22.0+	a0	a0	C1	無	K2					有(狭端より11～12cm)		未調整			凹：糸切り痕。ナデ少し。
	68SE020	27-10	R-016	格子	03	—	5.5	—	14.7	—	—	—	—	—	—	—	6	3.0～4.7	24.0	a0	a0	C1	無	K2			有		有(狭端より11～12cm)		未調整			凹：ナデ。
	68SE020	ウラゴメ	R-005	格子	04(A)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.5±	—	a0	a0	—			布B	2d			有					(R-018、暗茶土 R-014と同じ布)。
66	68SE020	29-6	R-007	格子	04(B)	—	4.8	—	15.7	—	13.4	—	—	—	—	—	7	3.5	25.2+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2d			有(狭端より12～14cm)		未調整(少し斜め)			
	68SE020	22-12	R-010	格子	04(A)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.2±	—	a0	a0	—							有？					
	68SE020	15-8•9	R-011	格子	04(A)	37.0	5.6	31.4	—	—	—	—	15.14	17.83	—	—	4+	4.5	18.0+	a0	a0	C1	無	K2			有？	有		未調整	未調整(斜め)			
	68SE020	暗茶土	R-014	格子	04(A)	37.6	6.6	31.0	15.4	11.6	13.0	—	17.55	21.29	75.32	89.23	9	3.1	18.0+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2d	有			未調整	未調整(斜め)			凹：布粗め。(R-018、ウラゴメ R-005と同じ布)。
	68SE020	暗茶土	R-015	格子	04(A)	35.2	4.6	30.6	—	—	—	—	13.07	15.03	—	—	5+	2.8	23.5+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2b			有	未調整	未調整(斜め)			
	68SE020	暗茶土	R-017	格子	04(A)	—	6.2	—	17.3	—	14.5	—	—	—	—	—	6	3.7	25.0+	a0	a0	C1	無	K2			有				未調整			
	68SE020	23-8	R-017	格子	04(B)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.8±	—	—	a0	—		K2	布A？			有		ケズリ				凹：縄紐痕。糸が垂れる。
	68SE020	23-2	R-018	格子	04(A)	—	5.1	—	15.7	11.4	13.0	—	—	—	72.61	87.69	6	4.4	16.0+	a0	a0	C1	無	K2					有(狭端より14～15cm)		未調整(斜め)			(暗茶土 R-014、ウラゴメ R-005と同じ布)。
	68SE020	暗茶土	R-027	格子	04(A)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5±	20.5+	—	—	—		K2	布B	2b		有(縮い)						
	68SE020	15-3	R-057	格子	04(A)	39.2	5.2	33.8	17.5	—	14.7	—	13.27	15.38	—	—	6	4.7	25.5+	a0	a0	C1	無	K2			有	有(縮い)		ケズリ	未調整(斜め)		ケズリ	
	68SE020	23-17	R-058	格子	04(A)	—	—	—	—	—	—	16.6	—	—	—	—	—	5.0±	—	a0	a0	—		K2			有			未調整				凹：粘土板合わせ目S痕跡。ナデ少し。布目細かい。凸：ナデ。
	68SE020	27-11	R-117	格子	04(A)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.5	—	—	c0	C1	無				有(狭端より8.7cm)				未調整			
61	68SE020	淡灰砂(15-6)	R-003	格子	05(B)	37.0	4.8	32.2	—	—	—	—	12.97	14.91	—	—	6	3.8	24.5+	a0	a0	C1	無	K2	布B？					ケズリ	ケズリ			
	68SE020	20-9	R-012	格子	05(A)	35.1	4.3	30.8	6.7	12.6	14.1	—	12.24	13.96	188.06	89.36	7	3.2	20.5	a0	a0	C1	無	K2	布B	2d？	有			ケズリ	ケズリ			
	68SE020	ウラゴメ	R-011	格子	05(A)	—	4.5	—	16.7	12.7	14.0	—	—	—	76.05	90.71	7	3.5	18.3+	a0	a0	C1	無	K2			有(狭端より13～14cm)				磨耗(少し斜め)			凹：ナデ。
	68SE020		R-013	格子	05(A)	—	5.0	—	16.5	—	13.5	—	—	—	0.00	0.00	6	3.7	22.8+	a0	a0	C1	無	K2	不明				有		未調整(斜め)			凹：縄紐痕、糸が垂れる。縫い方：Zタイプ(ぐし縫)。
	68SE020	ウラゴメ	R-013	格子	05(A)	36.2	4.6	31.6	—	—	—	—	12.71	14.56			7	3.7	21.5	a0	a0	C1	無	K2	布B	2b or 2d				未調整	未調整			
	68SE020	ウラゴメ	R-014	格子	05(A)	37.8	4.6	33.2	12.0	7.1	13.8	—	12.17	13.86	59.17	51.45	7	4.5	21.8+	—	—	C1	無		布B	2d	有(狭端より16cm)	有(縮い)		未調整	未調整			凹：ナデ少し。
	68SE020	暗茶土	R-023	格子	05(A)	35.3	4.8	30.5	—	—	—	—	13.60	15.74	—	—	4+	4.2	24.0+	a0	a0	C1	無	K2			有？	有		未調整	(斜め)			凹：ナデ少し。
	68SE020	28-5	R-039	格子	05(A)	—	5.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6+	3.7	—	a0	a0	C1	無		布B	2b or 2d					ケズリ			
	68SE020	28-16	R-040	格子	05(A)	—	3.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	C1	無		布B	2b or 2d	有？(布重なり痕)				未調整(少し斜め)			両端部を打ち欠いている。
60	68SE020	15-5	R-042	格子	05(A)	36.7	4.9	31.8	18.5	—	14.0	—	13.35	15.41	—	—	7	4.3	25.2	a0	a0	C1	無	K2			有？	有(縮い)？		未調整	未調整			凹：模骨痕有り。
	68SE020	20-2	R-044	格子	05(A)	—	4.5	—	16.7	—	14.2	—	—	—	—	—	8	3.2	21.5+	a0	a0	C1	無	K2			有				ケズリ(斜め)			凹：ナデ少し。
	68SE020	20-8	R-045	格子	05(A)	36.3	4.6	31.7	—	—	—	—	12.67	14.51	—	—	8	3.7	21.0+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2d			有(狭端より9cm)	未調整	未調整	ケズリ		凹：粘土板合わせ目Z痕跡。紐痕有り。玉縁部と広端部にナデ。
	68SE020	26-10	R-046	格子	05(A)	—	4.5	—	17.1	—	14.3	—	—	—	—	—	6	4.0～5.5	24.0+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2d	有		有		未調整			凹：粘土板合わせ目Z痕跡。
33	68SE020	ウラゴメ	R-016	格子	06	36.0	5.3	30.7	16.1	12.7	13.9	—	14.72	17.26	78.88	91.37	6	4.9±	28.0+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2d	有			ケズリ	ケズリ			凹：ナデ少し。
	68SE020	ウラゴメ	R-017	格子	06	—	5.0	—	16.5	12.6	14.0	—	—	—	76.36	90.00	6	4.2	26.5+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2b	有(狭端より15～19cm)				未調整(斜め)			
	68SE020	暗茶土	R-031	格子	06	—	4.5	—	16.7	—	14.5	—	—	—	—	—	5+	5.0	22.0	a0	a0	C1			布B	2b or 2d	有(狭端より17cm)				ケズリ(少し斜め)			
	68SE020	20-6	R-061	格子	06	36.8	5.0	31.8	17.0	—	14.5	—	13.59	15.72	—	—	—	—	—	a0	a0	C1	無	K2	布B					未調整	未調整			
	68SE020	15-1	R-065	格子	06	36.7	4.3	32.4	15.9	—	13.5	—	11.72	13.27	—	—	6	5.4±	21.5+	a0	a0	C1	無	K2					有(狭端より19cm)	未調整	ケズリ		ケズリ	凹：糸切り痕。広端部ナデ少し。
	68SE020	19-5	R-066	格子	06	35.2	4.4	30.8	14.8	11.4	12.7	—	12.50	14.29	77.03	89.76	6	4.2	26.7+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2d			有	ケズリ	ケズリ(斜め)	ケズリ		凹：ナデ。布粗め。粘土板の合わせ目Z痕跡。(R-069と同じ布か？)
	68SE020	23-4	R-067	格子	06	—	—	31.4	—	—	—	15.2	—	—	—	—	6	4.2	26.0±	a0	a0	C1			布B	2b		有(縮い)？		未調整				凸：ナデ。凹：ナデ。布目細かい。(R-071と同じ布)。
	68SE020	19-12	R-068	格子	06	36.4	4.7	31.7	16.4	12.9	14.1	—	12.91	14.83	78.66	91.49	7	3.9	26.0+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2d	有？狭端より17cm			ケズリ	未調整(斜め)	ケズリ		凹：ナデ少し。布目細かい。凸：ナデ。
	68SE020	19-8•9	R-069	格子	06	—	—	—	—	—	—	16.5	—	—	—	—	7	4.0±	22.5+	a0	a0	—		K2？	布B	2d				ケズリ			ケズリ		凹：糸切り痕有り。(R-066と同じ布か？)。
	68SE020	16-4•5	R-070	格子	06	36.2	4.5	31.7	—	—	—	—	12.43	14.20	—	—	5+	5.0±	19.5+	a0	a0	C1	無	K2？	布B	2b？			有(狭端より16～19cm)	ケズリ	ケズリ	ケズリ			凹：ナデ。布粗め。模骨痕有り。
	68SE020	27-1	R-071	格子	06	36.4	4.7	31.7	17.1	—	14.1	—	12.91	14.83	—	—	7	4.2～5.0	27.7+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2b？	有？				未調整(部分的に)			凹：玉縁部に壁縫い有り。粘土板の合わせ目Z痕跡。(R-067と同じ布)。
	68SE020	16-7	R-072	格子	06	34.9	4.4	30.5	—	—	—	—	12.61	14.43	—	—	5	4.5±	24.0+	a0	a0	C1	無	K1？	布B	2b			有(狭端より8.5cm)	未調整	ケズリ	ケズリ			
	68SE020	19-1	R-073	格子	06	—	—	31.5	—	—	—	—	—	—	—	—	7	4.0～5.5	22.0+	a0	a0	C1		K2				有(ママ)？		未調整				凹：布が重なっているのか？ナデ少し。
63	68SE020	ウラゴメ	R-015	格子	07	—	5.0	—	14.8	—	11.7	—	—	—	—	—	6	4.3	10.0+	a0	a0	C1	無	K2							ケズリ(斜め)			凹：玉縁部ナデ少し。
	68SE020	暗茶土	R-021	格子	07	—	5.0	—	15.5	11.9	13.1	—	—	—	76.77	90.84	7	3.5	15.0+	a0	a0	C1	無	K2	布A？						未調整(少し斜め)			縫い方：MSI？
57	68SE020	27-2	R-027	格子	07	—	3.4	—	16.0	11.5	13.2	—	—	—	71.88	87.12	7(8)	4.3±	23+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2d？	有				未調整			凹：ナデ少し。
	68SE020	20-9	R-028	格子	07	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5	5.2±	—	a0	a0	—			布B	2d		不明	有(縄痕跡)	未調整				凹：ナデ。布目細かい。粘土板の合わせ目Z痕跡。
	68SE020	28-11	R-029	格子	07	—	5.5	—	16.7	—	13.7	—	—	—	—	—	5	5.2	19.5+	a0？	a0	C1	無								未調整(少し斜め)			凹：ナデ。
	68SE020	26-8	R-030	格子	07	—	4.5	—	16.3	12.0	13.7	—	—	—	73.62	87.59	6	5.5±	18.0+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2b or 2d			有？(幅がある)		未調整(斜め)			
74	68SE020		R-037	格子	08	36.0	4.6	31.4	—	—	—	—	12.78	14.65	—	—	5	3.0～4.5	23.0+	a0	a0	C1		K2			有	有(縮い)		未調整				凹：糸が垂れる。結び目痕有り。
49	68SE020	21-2	R-001	格子	09	—	—	32.1	—	—	—	16.8	—	—	—	—	7	4.4±	22.5	a0	a0	C1		K2				有(ママ)	有？	未調整				
	68SE020	17-2	R-002	格子	09	30.4	5.2	25.2	15.0		11.8	—	17.11	20.63	0.00	0.00	7	5.6	21.0+	a0	a0	C1	無	K2						ケズリ		ケズリ		凹：横紐線有り。
	68SE020	21-6	R-003	格子	09	—	4.9	—	16.1	12.0	12.7	—	—	—	74.53	94.49	—	—	17.5+	b0	a0	C1	無	K2						未調整				凹：ナデ少し。布粗め。
	68SE020	暗茶土	R-008	格子	09	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3±	—	a0	a0	C1												凹：紐(糸)が垂れる。
	68SE020		R-090	格子	09	—	—	3.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	C1			布B	2b					ケズリ			凸：斜めの叩き。
37	68SE020	21-10	R-036	格子	10	—	5.0	—	15.6	11.2	12.0	—	—	—	71.79	93.33	7	3.7±	—	a0	a0	C1	無	K2	不明		有？				未調整			凹：ナデ少し。
	68SE020	20-10	R-055	格子(斜線)	11	—	—	30.5	14.3	—	11.5	—	—	—	—	—	—	—	—	a0	a0	C1		K2			有			未調整		ケズリ？			凹：粘土板の合わせ目Z痕跡。
34	68SE020	28-12	R-056	格子(斜線)	11	35.2	5.2	30.0	14.9	10.8	11.0	15.0	14.77	17.33	72.48	98.18	5	4.0？	18.5+	a0	a0	C1	無	K2				有？		ケズリ(斜め)				凹：粘土板の合わせ目Z痕跡。縫い方：Zタイプ。
38	68SE020		R-038	格子	12	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	9	3.0	24.0	a0	a0	—		K2	布B	2d					未調整				凹：広端部にナデ少し。
	68SE020	暗茶土	R-019	格子	13	—	—	—	—	—	—	17.0	—	—	—	—	8？	3.2±	—	a0	a0	—		K2				有(縮い)		未調整				
44	68SE020	19-3	R-116	格子	13	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.8±	—	—	a0	—		K2						未調整		ケズリ		凹：布目細かい。
39	68SE020	暗茶土	R-022	格子	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	a0	C1	無		不明						未調整(斜め)			凹：ナデ少し。糸の縫い目痕有り。
	68SE020	22-7	R-031	格子	14	—	4.8	—	14.9	11.0	11.7	—	—	—	73.83	94.02	9+-	2.3	15.0+	a0	a0	C1	無	K2			有(狭端より12～13cm)				ケズリ(斜め)			
	68SE020	15-2	R-032	格子	15	34.8	5.0	29.8	15.4	—	11.9	—	14.37	16.78	—	—	—	—	15.0+	a0	a0	C1	無	K2			有			未調整	ケズリ(斜め)			凹：玉縁部になで上げ痕有り。布ほつれ糸痕？
43	68SE020	22-6	R-033	格子	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	a0	a0	—		K2	布B？				有？					凸：ナデ有り。凹：ナデ少し。
	68SE020	23-7	R-034	格子	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	a0	a0	—		K2？					有？		ケズリ			凹：糸切り痕。
45	68SE020	ウラゴメ	R-004	格子	16	33.5	4.8	28.7	15.4	12.2	13.0	17.0	14.33	16.72	79.22	93.85	10	2.3	20.0+	a0	a0	C1	有(溝)	K2			有			未調整	未調整	ケズリ	ケズリ	凹：布のしわ？(重ね目？)痕有り。ナデ少し。
	68SE020	枠内落ち込み	R-005	格子	16	—	5.2	—	15.5	11.8	12.8	—	—	—	76.13	92.19	—	3.2±	16.5+	a0	a0	C1	有(溝)	K2					有？		ケズリ2回(斜め)		ケズリ	
	68SE020	暗茶土	R-013	格子	16	34.0	4.7	29.3	15.0	—	13.5	—	13.82	16.04	—	—	4+	5.3	22.0	a0	a0	C1	無	K2	布A			有(縮い)		未調整	未調整	ケズリ	ケズリ	凹：ヘラきず、又は糸痕跡か？縫い方：Mr。
	68SE020	暗茶土	R-032	格子	18	35.5	5.1	30.4	14.5	11.4	12.4	—	14.37	16.78	78.62	91.94	—	—	—	a0	a0	C1	無					有(狭端から12.5cm)	ケズリ	未調整(斜め)				凸：磨耗、ナデ。布粗め。凹：粘土板の合わせ目Z痕跡。
35	68SE020	28-8	R-118	格子	18	30.9	5.0	25.9	17.0	13.7	15.0	17.8	16.18	19.31	80.59	91.33	7	3.7	25.5	a0	a0	C1	無	K2					有		未調整	ケズリ	ケズリ	右半分に切断痕残る(1mm)。凹：ナデ少し。
	68SE020		R-119	格子	18	33.0	3.9/	29.1	—	—	—	—	11.82	13.40	—	—	4+	4.5	26.3±	a0	a0	C1	無	K2	布A？						未調整	ケズリ			
53	68SE020	22-4	R-008	格子	19	—	6.8	—	16.1	12.4	13.4	—	—	—	77.02	92.54	6	4.4	23.0+	a0	a0	C1	無	K2			有				未調整(斜め)			凹：ナデ少し。
58	68SE020	26-15	R-050	格子	20	—	4.2	—	15.6	—	13.5	—	—	—	—	—	6	4.5	27.0+	a0	a0	C1	無	K2			有(狭端より11cm)				未調整			
	68SE020	21-7	R-051	格子	20	—	4.5	—	16.8	12.5	14.0	—	—	—	74.40	89.29	5+-	4.0～6.5	21.0+	a0	a0	C1	無	K2	布B		有？				未調整			凹：玉縁部に壁縫い有り。
	68SE020	25-7	R-078	格子	20	—	5.0	—	16.5	—	14.0	—	—	—	—	—	5+	4.0±	19.0+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2d	有				ケズリ(斜め)			凹：ナデ少し。
	68SE020	ウラゴメ	R-008	格子	21	34.7	5.7	29.0	16.2	—	13.0	—	16.43	19.66	—	—	6	3.3～4.0	21.7	a0	a0	C1	有(溝2)	K2			有	有(縮い)		ケズリ	未調整(斜め)			凹：玉縁布の絞りSタイプか？
69	68SE020	25-11	R-022	格子	21	33.4	5.6	27.8	14.2	—	11.7	16.5	16.77	20.14	—	—	8	3.3±	11.5+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2b	有？	有(ママ)	有？	未調整	未調整			凹：ナデ少し。布粗め。
	68SE020	23-1	R-023	格子	21	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.7±	—	a0	a0	—					有	有(ママ)		ケズリ		ケズリ		凹：糸切り痕。広端部にナデ。粘土板の合わせ目Z痕跡。
	68SE020	29-1	R-019	格子	22(A)	—	5.4		15.9	11.4	12.8		?	?	71.70	89.06	6	3.5±	26+	a0	a0	C1	無	K2	布A						未調整(少し斜め)			凹：縫い方：Zタイプ？
56	68SE020	22-5	R-020	格子	22(A)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.7±	—	a0	a0	—		K2	布B	2d				未調整				
50	68SE020	暗茶土	R-018	格子	23	—	—	32.7	16.6	—	14.0	—	—	—	—	—	6	3.4+	21.5	a0	a0	C1		K2	布B	2b or 2d	有			ケズリ				凹：糸切り痕。
46	68SE020	25-2	R-041	格子	24	—	3.5	—	15.0	—	12.9	—	—	—	—	—	5+	4.3	19.5+	a0	a0	C1	無	K2	不明		有				未調整			凹：縄紐痕か？
64	68SE020		R-120	格子	25	—	5.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.7±	25.0+	a0	a0	C1	無	K2					有(狭端より17.5cm)		ケズリ(斜め)				
59	68SE020	17-7	R-052	格子	29	32.5	5.0	27.5	15.5	—	12.0	—	15.38	18.18	—	—	8	3.5+	15.5+	a0	a0	C1	無	K2			有			ケズリ	ケズリ		ケズリ	凹：糸切り痕。ナデ少し。布目細かい。
40	68SE020	19-4	R-004	格子	30	—	4.3	—	15.8	12.2	13.0	—	—	—	77.22	93.85	7	3.4±	23.0+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2b or 2d					未調整(斜め)			
	68SE020	暗茶土	R-007	格子	30	—	3.7	—	16.0	—	13.4	—	—	—	—	—	7	4±	21+	a0	a0	C1	無	K2							未調整(斜め)			凹：ナデ、削り少し。布が引っ張られた痕跡か？
	68SE020	暗茶土	R-009	格子	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—					有							
	68SE020	暗茶土	R-011	格子	30	—	—	—	—	—	—	16.2	—	—	—	—	5	3.5±	—	a0	a0	—			布B	2d				ケズリ		ケズリ？		凹：糸切り痕。ナデ。
41	68SE020	暗茶土	R-042	格子	30	—	4.9	—	14.7	10.4	11.9	—	—	—	70.75	87.39	—	—	25.5+	a0	a0	C1	無				有				未調整			凹：ナデ。
	68SE020	21-5	R-047	格子	31	—	4.3	—	17.5	—	14.0	—	—	—	—	—	5	5.3	24.0+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2b	有				未調整(斜め)			凹：ナデ少し。
55	68SE020	20-3	R-035	格子	32	32.6	5.5	27.1	16.0	—	13.5	17.0	16.87	20.30	—	—	5	6.0～6.8	25.0+	a0	a0	C1	無	K2			有			ケズリ	未調整			
36	68SE020	20-11	R-009	格子	33	35.3	5.7	29.6	15.1	10.3	12.0	—	16.15	19.26	68.21	85.83	5	4.8	22.5+	a0	a0	C1	無	K2			有(狭端より12.5cm)	有(縮い)		未調整	未調整(斜め)			凹：ナデ。
	68SE020	暗茶土	R-010	格子	33	35.6	4.6	31.0	15.8	—	13.6	—	12.92	14.84	—	—	7	3.9	25.0	a0	a0	C1	無	K2			有	有(？)		未調整	未調整(斜め)			凹：玉縁部に壁縫い？有り。ナデ。
	68SE020	25-3	R-024	格子	33	34.5	4.0	30.5	15.6	11.8	12.8	—	11.59	13.11	75.64	92.19	7	4.5	22.8+	a0	a0	C1	無	K2			有	有(？)		未調整	未調整(斜め)			凹：雑なナデ少し。布粗め。粘土の合わせ目Z痕跡。
	68SE020	暗茶土	R-020	格子	34	33.8	4.5	29.3	15.3	—	—	—	13.31	15.36	—	—	—	—	—	a0	a0	C1	無	K2	不明		有			ケズリ	未調整	ケズリ(薄く)			縫い方：Zタイプ。
52	68SE020	16-3	R-025	格子	34	33.6	5.4	28.2	15.2	11.8	12.8	—	16.07	19.15	77.63	92.19	7	3.9	26.0	a0	a0	C1	無	K2				有		ケズリ		ケズリ(薄く)		凹：糸が数本垂れる。縫い方：Zタイプ。
	68SE020	22-2	R-026	格子	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	8	3.2±	—	a0	a0	—		K2			有			ケズリ				凹：ナデ。
	68SE020	暗茶土	R-026	格子	34	—	—	30.3	—	—	—	—	—	—	—	—	3+	4.7	24.0+	a0	a0	C1		K2			有	有		未調整				凹：磨耗気味。布粗め。
	68SE020	27-8	R-043	格子	34	34.3	5.3	29.0	15.7	12.6	13.6	—	15.45	18.28	80.25	92.65	7	4.2	23.5+	a0	a0	C1	無	K2					有	ケズリ	ケズリ	ケズリ(薄く)		縫い方：Zタイプ。
	68SE020	23-18	R-048	格子	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	4.5±	19.5+	—	—	C1		K2			有							
	68SE020	16-11	R-049	格子	34	34.3	5.0	29.3	—	—	—	—	14.58	17.06	—	—	5+	3.5	25.0+	a0	a0	C1	無	K2	布B	2b or 2d	有？			磨耗ぎみ					凹：紐(縄)痕跡か？全体的にかなり磨耗している。
	68SE020	27-13	R-053	格子	34	—	3.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3.5+	—	a0	a0	C1	無								ケズリ			凹：布のしわ痕有り。
	68SE020	27-3•4	R-059	格子	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.0±	—	a0	—	C1	無								ケズリ		ケズリ	
	68SE020	16-8	R-064	格子	34	34.0	4.7	29.3	16.4	13.0	14.3	—	13.82	16.04	79.27	90.91	5	4.7+	15.0+	a0	a0	C1	無	K2						磨耗	磨耗(少し斜め)			凹：ナデ(磨耗)有り。
	68SE020	27-9	R-079	格子	34	—	4.5	—	15.9	11.9	14.5	—	?	?	74.84	82.07	6	4.5±	21.5+	a0	a0	C1	無	K2							未調整(少し斜め)			凹：ナデ少し。糸が数本垂れる。
42	68SE

付表２．68SE020出土平瓦観察表

図番号	遺構番号	地点	R-番号	a	b	c	d	dr	dl	r1	r2	側面の形状	粘土板重ね	凸面叩き種	格子種	格子幅	縄種類	縄の粗密	糸切り方向	削り(狭端面)	削り(広端面)	削り(左側面)	削り(右側面)	布継目方向	分割突帯	風食痕	cm	横骨痕	横骨幅	凹型台	凹面調整	凸面調整	備考
16	68SE020	1-11	R-139	-	-	-	-	-	-	15.5	-	A 1a	無	格子	01(A)	7.0			不明		L→R	U→D		横(布端)	有	無		無		無	ナデ	ナデ	広端部やや斜めに調整。
	68SE020	9-6	R-140	-	-	-	-	-	-	16.0	-	A 1a	S	格子	01(A)	5.5±			縦RU→LD		不明		U→D	横(布端)	有	無		無		無	削り、ナデ	削り、ナデ	
26	68SE020	5-9	R-151	-	-	34.3	2.6	2.3	2.7	18.5	17.5	A 1a	無	格子	01(B)	6.0±			縦RU→LD	L→R	L→R	D→U	不明		有	無		無		無	削り(狭端部)、ナデ、指痕	削り、ナデ	広端、狭端が逆か？
	68SE020	11-7	R-154	-	28.4	35.0	2.2	2.4	2.3	17.5	17.5	A 1a	無	格子	04	5.0±			縦RD→LU	L→R	L→R	U→D?	U→D?	横(布端)	有	無		無		無	削り、ナデ	削り、ナデ	凹：広端部、狭端部にケズリ。
18	68SE020	ウラゴメ	R-031	-	27.0	32.0	1.7	2.2	1.9	17.0±	15.5	A 1a	Z or S	格子	08	6.5±			不明	R→L	未調整？	不明	不明		有？	無		無		無	ナデ	ナデ	
	68SE020	ウラゴメ	R-032	-	-	-	-	-	-	18.0	-	A 1a	無	格子	08	不明			不明		R→L?	D→U		縦	無	無		無		無	ナデ、指痕	削り、ナデ	
	68SE020	暗茶土	R-045	-	-	34.5	-	-	-	21.5	13.0	A 1a	無	格子	08	4.5±			縦DL—RU	R→L		不明		横(布端)	有	有	16.0(狭)	無		無	ナデ	ナデ	磨耗ぎみ。狭端、広端が逆か？
	68SE020	1-13	R-135	-	-	-	-	-	-	-	18.5	A 1a	S	格子	08	6.0±			縦D—U	L→R?		D→U?			有	無		無		無	削り、ナデ(指痕)	削り	
	68SE020	6-4	R-149	-	-	32.5	-	-	-	18.0	14.0	A 1a	無	格子	08	4.0?			縦LU→RD	L→R		U→D	不明	縦	有	無		無		無	削り、ナデ	ナデ	
	68SE020	13-9	R-152	-	-	-	2.1	2.3	2.1	-	18.0	A 1a	無	格子	08	5.3±			不明	不明		L→D	不明					無		無	削り	圧痕、ナデ	凹：布目とても粗い。
	68SE020	1-3	R-224	-	-	-	-	-	-	-	14.5±	不明	無	格子	08	4.6±			縦DL—RU	不明					不明	有	15.8(狭)	無		無	ナデ	ナデ(磨耗)	
	68SE020	—	R-146	-	-	-	-	-	-	15.5		A 1a	無	格子	12	5.0±			不明		不明	不明		縦・横(布端)	有	無		無？		無？	無	圧痕	凹：内叩きか？
	68SE020	1-4	R-218	-	-	-	-	-	-	-	20.0±	A 1a	S	格子	12	4.0±			不明	不明			U→D		有	有	18.5(狭)	無		無	無	ナデ(磨耗)	
	68SE020	5-6	R-219	-	-	-	-	-	-	-	18.5	A 1a	無	格子	12	不明			不明		L→R	不明			有	無		無		無	削り	削り、指痕	凹：内叩きか？
27	68SE020	1-6	R-141	-	-	31.5	1.5	1.5	1.5	18.0	14.0	A 1a	無	格子	17	6.0±			縦RU→LD	不明	R→L	不明	D→U		無	無		無		無	削り、ナデ	ナデ	
	68SE020	1-11	R-142	-	27.3	-	1.9	1.8	1.9	18.0	-	A 1a	無	格子	17	6.0±			不明		L→R	不明	D→U		有	無		無		無	ナデ、指痕	ナデ	
	68SE020	2-10	R-143	-	-	-	-	-	-	-	13.0	A 1a	無	格子	17	不明			縦RU→LD	L→R		D→U		横(布端)	不明	無		無		無	削り	ナデ	狭端、広端が逆か？
	68SE020	7-12	R-144	-	-	-	-	-	-	-	18.0	A 1a	無	格子	17	6.0±			縦RD→LU	不明			不明		無	無		無		無	ナデ	ナデ	凹：狭端部削り。
	68SE020	2-11	R-220	-	-	-	-	-	-	20.0	-	A 1a	無	格子	22	5.0~7.0			縦LD→RU		L→R		U→D		無	無		無		無	削り、指痕	削り、ナデ	凹：糸痕。
	68SE020	18-8	R-221	-	-	-	-	-	-	-	-	A 1a	無	格子	22	不明			縦LU→RD	不明			D→U	横(布端)	有	無		無		無	ナデ	ナデ	狭端、広端が逆か？凸：ナデで格子がスリ消。
15	68SE020	11-1	R-147	-	-	-	2.3	2.3	2.3	-	18.5	A 1a	不明	格子	22(B)	5.3			縦RD→LU	R→L		不明	不明	縦？	有	無		無		無	ナデ	ナデ	狭端部にケズリ。
	68SE020	14-5	R-148	-	-	-	-	-	-	-	20.0	A 1a	無	格子	22(B)	5.0±			縦RD→LU	不明		不明			無	無		無		無	ナデ	ナデ	磨耗ぎみ。
22	68SE020	11-8	R-153	-	-	-	-	-	-	20.5	-	A 1a	無	格子	28	5.0			不明	不明			不明		無	無		無		無	削り	圧痕、削り	広端面に布目痕有り。凸：広端部にケズリ。
	68SE020	ウラゴメ	R-035	-	-	-	1.3	1.5	1.2	-	13.0	A 1a	無	格子	31	6.0±			縦RU→LD	L→R		不明	不明	横(布端)	有×2	無		無		無	ナデ	ナデ	
25	68SE020	1-12	R-145	-	28.2	35.7	2.3	2.3	1.8	19.0	15.5	A 1a	無	格子	31	6.7±			縦RD→LU	L→R	R→L	不明	U→D	横(布端)	有×2	無		無		無	ナデ	ナデ	
	68SE020	14-3	R-150	26.5	-	-	1.9	1.9	1.7	-	16.5	A 1a	Z	格子	31	4.7			不明	L→R		不明	不明		有×2	無		無		無	削り、ナデ	圧痕、ナデ	
	68SE020	2-8	R-222	-	-	-	-	-	-	17.0	-	A 1a	無	格子	31	6.5±			不明		R→L		U→D		無	無		無		無	削り、ナデ	ナデ	
	68SE020	1-10	R-223	.23.0	-	-	2.2	1.9	2.0	-	14.0	A 1a	S or Z	格子	31	不明			不明	L→R		D→U	不明	横(布端)	有	無		無		無	削り、ナデ	削り、ナデ	狭端、広端が逆か？
17	68SE020	6-12	R-137	27.2	-	-	2.5	2.6	2.4	16.5	-	A 1a	無	格子	37	5.0±			不明		L→R	不明	不明		有×2	無		無		無	ナデ(磨耗)	ナデ(磨耗)	磨耗ぎみ。
5	68SE020	6-2	R-125	-	28.2	-	-	-	-	-	-	B 2b	無	格子※	57	4.7±			縦U→D			不明	不明		無	有？		無		無	削り、ナデ	削り、ナデ	磨耗(風食？)により布目痕留めず。朱痕残る。
8	68SE020	5-10	R-127	-	24.8	-	-2.8	-2.3	-2.4	-	-	A 1a	無	格子※	57	5.5~6.5			縦LD—RU			不明	D→U		無	無		無		無	ナデ	ナデ	凹：抜き取り縄か？
24	68SE020	9-12	R-128	-	-	-	-	-	-	-	-	A 1a	無	格子 I-2	80	5.5±			不明				D→U	縦(布縦じ)？	不明	無		無		無	ナデ？	ナデ？(圧痕？)	格子 I-2=「平井瓦」。
	68SE020	13-13	R-155	25.5	27.5	33.0	1.7	2.0	1.7	18.5	17.0	A 1a	Z	格子 I-2	80	3~5±			不明	R→L	L→R	DvU	U→D	横(布端)	有	？		無		無	無	不明	全体的に磨耗ぎみ。凹：縦、布縦じか？格子 I-2=「平井瓦」。
	68SE020	灰砂	R-002	-	-	-	-	-	-	17.0	-	A 1a	無	格子 XV	02	6.3±			縦RU—LD		R→L	DvU			無	無		無		無	削り(ナデ)？	削り	広端部やや斜めに調整。格子 XV＝「大」(正)。
	68SE020	暗茶土	R-047	-	-	34.3	2.3	2.4	2.1	15.0	-	A 1a	無	格子 XV	02	7.0			縦LD→RU	不明	L→R	不明	U→D		有	無		無		無	"削り、指痕"	削り、ナデ	凹：不明痕有り。広端部に削り。格子幅は、2単位で1つ。格子 XV＝「大」(正)。
23	68SE020	2-6?7	R-136	-	-	33.7	-	-	-	19.5	-	A 1a	無	格子 XV	02	6.5~7.6			不明	L→R	L→R	D→U?			有	無		無		無	削り、ナデ、指痕	削り(ナデ)、叩2/3消	広端面にワラ痕有り。凹：広端部にケズリ。凸：広端部にケズリ。格子 XV＝「大」(正)。
	68SE020	ウラゴメ	R-034	-	-	-	-	-	-	19.5?	19.5?	不明	無	縄			不明	7	縦LD—RU			不明			無	無		無		無	無	圧痕	狭端、広端が逆。狭端部又は広端部に斜めの調整　凸：離れ砂
7	68SE020	28-17	R-122	-	28.0	-	-2.7	-3.0	-2.8	-	-	B 2b	無	縄※					1段？	6~7	不明		D→U	D→U	無	有		有		有	削り	圧痕	全体的に粒子が粗く磨耗ぎみ。朱痕残る(鴻臚館)。
10	68SE020	5-11	R-130	25.0	27.2	34.5	2.7	2.3	2.3	18.5	15.0	B 2a	無	縄					4段~5段	9~10	縦D→U	L→R	R→L	U→D	D→U		無	無		無	削り(狭端部)	圧痕	狭端部やや斜めに調整。広端部斜めに調整。
9	68SE020	5-8	R-131	-	-	36.4	2.1	2.0	2.0	15.0	14.5	B 2b	無	縄					3段~4段	7	不明	L→R	R→L	DvU	U→D		無	無		無	無	圧痕	狭端部斜めに調整。広端部斜めに調整。凹：布が上へ引っ張られている。広端側に段がある。
14	68SE020	3-1	R-132	-	-	-	-	-	-	-	14.0	A 3c	無	縄					円弧	5~6	不明	L→R		D→U			無	無		有		無	削り	圧痕	狭端部やや斜めに調整。凹：狭端部、左側部にケズリ。
11	68SE020	5-1	R-133	26.0	-	-	1.9	1.9	1.8	-	14.0	A 2b'	無	縄					円弧？	8~9	不明	L→R		U→D	D→U	縦？	無	無		有	5.5	無	ナデ	圧痕	両狭端角、面取り。凹：ナデで布目2/3消。凸：叩き逆方向。狭端部やや斜めに調整。布縦じ＝ぐし縫い・まつり縫い。
	68SE020	ウラゴメ	R-133	-	-	-	-	-	-	-	-	B 3a	S	縄					2段＋	9	不明	不明	R→L		U→D	不明	不明	有	21.0(狭)	無		無	削り	削り	風食痕右寄り＝端部の瓦か？ケズリにより粘土板が半分の厚み。
13	68SE020	9-2	R-134	-	-	-	2.0	2.0	2.1	-	18.0	B 3a	Z?	縄					円弧	5~6	不明	L→R			U→D		有	有	18.9(狭)	有？		有	削り、ナデ	圧痕	凹：ナデ消し。打ち欠き。凸：薄く細い縄目痕。両狭端角、面取り。
	68SE020	暗茶土	R-146	-	-	-	-	-	-	-	20.5	B 2a	無	縄					2段＋	7~8	縦LD→RU	不明			不明		無	有？		無		無	無	指痕	
	68SE020	10-3	R-156	-	-	-	-	-	-	-	19.5	B 2a	無	縄					3段＋	7	縦RD→LU	L→R			U→D		無	無		無		無	無	ナデ	凹：糸切り痕か？
	68SE020	3-7	R-157	-	-	-	-	-	-	-	21.0	B 3a	無	縄					2段＋	7	縦LD→RU	L→R		D→U			無	無		無		無	ナデ	圧痕	凹：布中央部が狭端方向へ引っ張らている。
	68SE020	—	R-158	-	-	-	-	-	-	17.0	22.0	B 2b	無	縄					2段＋	7~8	縦RU→LD	L→R		D→U			無	無		無		無	不明	圧痕	
	68SE020	14-15	R-159	-	27.5	34.7	2.2	2.0	2.1	19.0	17.0	B 2a	無	縄					2段＋	9	不明	L→R	L→R	U→D	U→D		無	不明		無		無	無	圧痕	
	68SE020	3-10	R-160	-	28.2	-	-	-	-	20.0	-	不明	無	縄					3段＋	11	縦LD—RU		R→L	不明	不明		無	無		無		無	ナデ？	圧痕	左右側面に打ち欠き。凹：不明痕有り。
	68SE020	2-5	R-161	-	-	-	-	-	-	-	15.5	B 3a	有？	縄					円弧	11	不明	不明		D→U		縦？	無	無		有？	3.9	無	削り、ナデ	圧痕	両狭端角、面取り。凹：布縦じ目＝途中から三角状に開く。凸：叩き方向が逆＝左ききか？
	68SE020	6-9	R-162	-	-	-	-	-	-	-	-	B 3c	無	縄					2段＋	11	縦RU→LD	L→R			U→D		無	無		無		無	右端削り	ナデ	狭端部やや斜めに調整。
	68SE020	1-8	R-163	-	-	34.7	-	-	-	21.0	15.0	B 2a	無	縄					3段	8	縦LD—RU	不明	不明		不明		無	有	20.2(狭)	不明		無	削り？(ナデ)	無	広端部、凸面方向に粘土押圧。乾燥時のものか？凹：風食の為、かなりのはげ落ち。
	68SE020	6-3	R-164	24.2	-	-	1.9	2.3	1.9	-	16.0?	B 2b	無	縄					3段＋	10	縦RD→LU	L→R		D→U	U→D	縦(布端)	無	無		無		有	指痕	圧痕	凹：左、布端痕有り。右、布端痕か？広端部斜めに調整。凸：糸切り(縦 D→U)
	68SE020	5-4	R-165	-	-	35.0	-	-	-	-	18.5	B 3b	無	縄					3段？	6	縦LD→RU	不明	不明	D→U			無	無		無		無	後の削りか？	圧痕、削り？	狭端部、広端部に斜めの調整。凸：離れ砂。
	68SE020	5-5	R-166	-	-	-	-	-	-	22.0?	-	B 2b	無	縄					2段＋	9	縦LD—RU	不明			D→U	横(布端)	無			無		無	無	無	一段目叩きと、二段目叩きの方向が違う。狭端部斜めに調整。凸：離れ砂。凹：かなり凸凹している
	68SE020	28-10	R-167	-	28.0	-	1.6	1.8	1.6	17.5	-	B 2b	無	縄					2段＋	8	縦RU→LD		R→L	U→D	D→U		無	有	16.8(広)	無		無	無	圧痕	広端部やや斜めに調整。凹：風食によるはげ落ち。
	68SE020	10-1	R-168	-	-	34.8	-	-	-	18.5	16.0	不明	無	縄					3段	8	縦LD—RU	不明	L→R	不明	不明	横(布縦じ)	無	無		無		有	無	圧痕	全体的に凸凹。凹：横布が縦に大きく引っ張られる。横布縦じ目：左側が開く。左右側に打ち欠き。
	68SE020	13-34	R-169	-	-	-	-	-	-	17.5	-	B 2a	無	縄					2段＋	10	縦LD—RU		R→L	U→D	不明		無	有	21.2(広)	無		無	無	圧痕	全体的に作りが凸凹している。
	68SE020	10-5	R-170	24.5	-	-	-	-	-	-	16.5	B 2b	無	縄					不明	不明	縦LD—RU	L→R		不明	U→D		無	有	18.2(狭)	無		無	無	圧痕	凹：中央が狭端側に引っ張られている。風食によるかなりのはげ落ち。
	68SE020	11-13	R-171	-	-	-	2.2	2.0	1.4	16.5	-	A 2a	無	縄					2段＋	8	縦RU→LD		不明	不明	UvD		不明	無		無		無	ナデ？	圧痕	広端部斜めに調整。
12	68SE020	3-9	R-172	-	-	-	-	-	-	21.0	-	A 2a	無	縄					2段＋	10	縦LD—RU		L→R	不明			無	無		無		無	無	圧痕	凹：内叩き、又は凸型台の痕跡。
	68SE020	9-5	R-173	-	-	-	-	-	-	15.0	-	不明	無	縄					不明	不明	不明		R→L				無	有	18.4(広)	無		無	削り	圧痕、削り	
	68SE020	5-12	R-174	-	26.5	-	1.9	2.0	1.7	18.5	-	B 2b	無	縄					2段＋	9	縦LD→RU		R→L	D→U	U→D		無	無		無		無	削り	圧痕	凹：内叩き。
	68SE020	11-9•10	R-175	-	-	-	3.4	3.4	3.1	-	-	B 3a	無	縄					円弧？	5~7	縦RD→LU	L→R		D→U	U→D		無	無		無		無	無	不明	瓦の厚みが厚い(軒平か？)。全体的に磨耗ぎみ。凸：叩きが不定方向。
	68SE020	18-6	R-176	-	-	-	-	-	-	-	17.0	B 3b	無	縄					2段＋	9	縦U—D	L→R		D→U	U→D	縦(布縦じ)	無	無		無		無	削り(ナデ)	無	狭端部斜めの調整。
	68SE020	1-5	R-177	-	-	-	-	-	-	-	16.5	不明	無	縄					4~5段	11	不明	R→U			不明		無	無		有	3~6	無	スリ消しナデ	無	軒平瓦か？左右側、打ち欠き。凹：内叩きか？
	68SE020	7-5	R-178	-	-	-	-	-	-	-	19.5	B 2b	無	縄					不明	6~7	不明	不明		D→U			無	無		無		無	削り	圧痕	
	68SE020	14-2	R-179	-	-	-	-	-	-	-	17.0	A 2a	無	縄					不明	9	縦LD—RU	L→R			不明		無	無		無		無	無	無(一部ナデ)	布がボロボロ。狭端部斜めに調整。
	68SE020	9-10	R-180	-	-	39.5	-	-	-	-	-	不明	無	縄					不明	6	縦D—U	不明	不明	D→U			無	無		無		無	削り(布目消)	圧痕、削り	大粒砂粒量多＝離れ砂。狭端、広端部斜めに調整。凹：左側に打ち欠き。
	68SE020	10-2	R-181	-	-	-	-	-	-	18.0±	-	B 2b	無	縄					2段＋	9	縦LD→RU		不明	不明			無	無		無		無	無	圧痕	外面から、分割切り込みが約1/5程入る。広端部斜めに調整。
	68SE020	8-1	R-182	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	不明	縄					不明	9	縦LD—RU				不明		無	無		無		無	ナデ少し	圧痕	凹：打ち欠き。
	68SE020	4-2•3	R-183	-	-	-	-	-	-	12.5	-	A 2a	無	縄					1段＋	7	縦LD→RU			不明	D→U		無	無		無		無	無	圧痕	凹：左側に削り。広端部斜めに調整。
	68SE020	13-11	R-184	-	27.5	-	2.7	2.7	2.7	19.0	-	B 2b	無	縄					不明	9	縦RD→LU		R→L	D→U	U→D		無	無		無		有	端部削り	圧痕	凹：左右広端部にケズリ。凸：凹型台痕か？叩き板痕か？広端部斜めに調整。
	68SE020	10-4	R-185	-	-	-	-	-	-	-	-	B 2b	無	縄					不明	10	縦LD—RU	L→R		D→U			無	無		無		無	指痕	圧痕	凹：打ち欠き。
	68SE020	1-7	R-186	-	-	-	-	-	-	21.0	-	B 2b	無	縄					1段＋	10	縦RU→LD		R→L	D→U			無	無		無		有	無	圧痕	広端部やや斜めに調整。
	68SE020	11-2	R-187	-	-	-	1.5	1.5	1.4	19.0±	-	B 3a	不明	縄					不明	9	縦U—D		R→L	不明	U→D	横(布端)	無	無		無		無	削り？	圧痕	広端部斜めに調整。
	68SE020	11-5	R-188	-	-	-	-	-	-	19.0	-	B 2a	無	縄					3段	7	縦LD—RU		R→L	不明	U→D		無	無		無		無	無	圧痕	広端有斜めに調整。
	68SE020	1-2	R-189	-	-	-	-	-	-	-	16.0	不明	無	縄					2段	10	縦LD—RU	不明		不明	U→D		無	無		無		無	無	圧痕、ナデ	全体的に凸凹している＝一部焼け歪み。凸：離れ砂。凹：左右側打ち欠き。狭端部斜めに調整。
	68SE020	11-4	R-190	23.5	-	-	2.4	2.5	2.3	-	15.5±	B 2b	無	縄					2段＋	8	縦LD—RU	L→R		U→D	U→D		無	有？		無		無	端部削り	圧痕	凹：風食による欠け。左右側部にケズリ。狭部打ち欠き。狭端部斜めに調整。
	68SE020	7-6	R-191	-	-	-	-	-	-	-	19.5	B 2b	無	縄					2段	6	縦U→D	L→R			U→D		無	無		無		無	側端部の削り	圧痕	狭端部斜めに調整。
	68SE020	9-11	R-192	-	-	-	-	-	-	-	-	不明	無	縄					2段	8	縦RU—LD	不明		不明	不明		無	無		無		無	削り	圧痕	全体的に磨耗ぎみ。凹：打ち欠き。
	68SE020	8-2	R-193	-	-	37.2	-	-	-	16.5	12.5±	A 2a	無	縄							縦U—D	R→L	不明	D→U	U→D		無	無		無		無	無	圧痕	広端部、狭端部斜めに調整。凹：中央部布が狭端方向に引っ張られている。
	68SE020	8-4	R-194	-	-	-	-	-	-	17.5	-	B 2a	無	縄					2段?	9	不明		L→R	不明			無	無		無		有	ナデ少し	圧痕	
	68SE020	18-11	R-195	24.0	-	-	2.0	1.9	2.4	-	16.0	B 2b	無	縄					不明	9	縦U→D	R→L		U→D	不明		無	無		無		有	無	圧痕	広端部斜めに調整。右側面は左側面の1.5倍の厚み。
	68SE020	7-3	R-196	-	-	-	2.4	2.7	2.2	-	15.5	B 2a	無	縄					2段?	6~8	縦LU—RD	L→R		D→U	不明		無	有	16.8(狭)	無		無	ナデ	圧痕	磨耗、欠けぎみ。狭端部斜めに調整。凸：離れ砂。
	68SE020	1-9	R-197	-	-	-	-	-	-	-	15.5	A 2a	無	縄					2段＋	11	縦U→D	L→R	R→L		不明		無	無		無		無	無	圧痕、ナデ？	凹：狭端部にケズリ。
	68SE020	10-6	R-198	-	-	-	-	-	-	-	14.5	B 3b	無	縄					2段	7	縦D→U	L→R			U→D		無	無		無		無	側端削り、指痕	圧痕	狭端部斜めに調整。
	68SE020	2-12	R-199	-	-	-	-	-	-	-	20.5	B 2a	無	縄					不明	7	縦D→U	不明			不明	横(布継ぎ？)	無	無		無		無	指痕	圧痕？	狭端部やや斜めに調整。
	68SE020	18-14	R-200	-	-	-	-	-	-	-	16.0	B 2a	無	縄					不明	11	縦LD→RU	不明			U→D		無	無		無		無	無	圧痕	
	68SE020	12-1	R-201	-	-	-	-	-	-	19.5±	-	不明	無	縄					不明	8	縦D→U		不明			横(布縦じ？)	無	無		無		無	ナデ	指痕	
	68SE020	9-3	R-202	-	25.0	-	1.6	1.6	1.6	16.0±	-	B 2a	無	縄					不明	11	横LD—RU		R→L	D→U	U→D		無	有	18.0(広)	無		無	ナデ	無	全体的に磨耗ぎみ。広端部やや斜めに調整。
	68SE020	6-7	R-203	-	-	-	-	-	-	-	15.5±	B 2b	無	縄					不明	不明	縦D—U	L→R		D→U			無	有	18.8(狭)	無		無	無	不明	砂粒多め、磨耗ぎみ。狭端部やや斜めに調整。
	68SE020	9-4	R-204	-	-	-	-	-	-	19.0	-	B 2b	無	縄					2段＋	9	縦LD—RU		不明	D→U			無	無		無		有	ナデ	圧痕	広端部やや斜めに調整。
	68SE020	6-8	R-205	-	-	-	-	-	-	-	13.0	B 3b	無	縄					1段？	8	縦LU→RD	R→L			D→U		無	無		無		無	側端部削り、指痕	圧痕	狭端部斜めに調整。凸：離れ砂。凹：右側端部にケズリ。
	68SE020	14-1	R-206	-	27.0	-	2.5	21.0	2.2	22.0	-	B 2b	無	縄					3段＋	不明	横LD→RU	不明		D→U	不明		無	無		無		無	側端部削り	無	広端部斜めに調整。凸：離れ砂か？
	68SE020	2-1	R-207	-	-	-	-	-	-	-	20.5	B 2b	無	縄					不明	8	縦LD—RU	不明	L→R		D→U		無	?		無		有？	削り	圧痕	凹：内叩き。
	68SE020	3-3	R-208	-	-	-	-	-	-	15.5	-	B 2a	無	縄					2段＋	8	LD→RU		不明	D→U			無	無		無		有？	ナデ	圧痕	凹：内叩き。
	68SE020	9-13	R-209	-	-	-	-	-	-	-	15.0±	B 2a	無	縄					2段＋	9	不明	不明			不明		無	不明		無		無	ナデ	圧痕	凹：狭端部にケズリ。風食による剥げ落ちか？
	68SE020	10-7	R-210	-	-	-	-	-	-	16.5	-	B 2a	無	縄					3段	9	縦LD—RU		L→R		U→D	横(布縦じ)	無	有	18.9(広)	無		無	無	圧痕？	広端部斜めに調整。
	68SE020	2-4	R-211	-	-	-	-	-	-	-	22.0	不明	無	縄					2段？+	8	縦LU→RD	L→R?		不明			無	無?	15.5(狭)	無		無	無	圧痕	凹：左側打ち欠き。
	68SE020	17-3	R-212	23.3	-	-	2.6	2.3	2.6	-	20.0	B 3a'	無	縄					不明	11	縦U→LD	R→L		U→D	D→U		無	無		無			削り	圧痕	狭端部斜めに調整。左右側端部2回ケズリ。両狭端角、面取り。
	68SE020	13-1	R-213	-	-	-	-	-	-	17.0±	-	B 3a	無	縄					不明	8	縦LD—RU		R→L	不明		横(布端)	無	無		無		無	ナデ	削り